

---

# **I S —Vicious Dog—**

KNCT

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

I S I V i c i o u s D o g

### 【Nコード】

N 6 6 9 6 U

### 【作者名】

K N C T

### 【あらすじ】

六年前に突如失踪した織斑一夏の幼馴染、沙月茜雫。彼は外の世界で『狗』と呼ばれていた。秘密ばかり隠し、行方不明となった茜雫が姿を表した意味とは？狗は何の為に牙を得、何を護ろうとしたのか？

## プロローグ(前書き)

もうしわけございません

勘違いで小説を消してしまいましたすみません

記憶とメモを頼りにもう一度投稿し直します

どうか見捨てないでもう一度読み直す感じで宜しくお願いします

## プロローグ

――四月中旬の金曜日――

信号待ちをしている四人乗りの闇を切り取ったような漆黒のス  
ポーツカーに二人の美女が乗っている。

その助手席に乗る、黒髪に切れ長の眼を持つ女性――織斑千冬  
は内心怒っていた。

運転席には親友であり同僚でもある、栗色で腰まであるストレ  
ートの長髪とイタズラっぽい眼を持った女性――沙月湊が千冬とは  
正反対に、鬱屈していた仕事から逃げ出せたと、笑みを隠そうとも  
せず上機嫌なオーラをバンバン放っていた。

動き出した車はハンドル裁きも本人に併せて軽快でスイスイと街  
中を走る。

日光のようにサンサンと輝くオーラの直射日光が眩しい為千冬  
は嘆息しながら顔を窓の外に向ける。

千冬と湊はIS学園の教師である。

――4月――

それは、一年生を受け持つ教師にとってかなり忙しい時期。

しかも、IS学園は立場上、世界中から入学者が来る。

しかも、今年はイレギュラーが一人いる為いつもの倍忙しかった。

読みたくもない大量の書類仕事が溜まりに溜まっているというのに千冬は今、街中を走っている車の車中にいた。

なぜ忙しく、今直ぐにでも仕事終わらせたい千冬が街中で車に乗っているかというと、

――昨日――

あるバカから手紙が届いた。

タイトルは

【必読！！一世一代のマル秘の手紙！！】

必読と書いてあるのにマル秘となっている。

二人は手紙を代わりに受け取っていた先生が変な顔して渡してきた理由を理解した。

便箋に三枚の紙が同封されており、一枚は日時と場所。

二枚目には

【今度は気をつけてね？】

の、謎の文。

三枚目には・・・・・・・・・・

【親愛なるちーちゃん、みーちゃんへ

みんなのアイドル、天才東さんは元気です。

先週は街を歩くと沢山の人が振り返って私を見てきました。

黒いスーツにサングラスの危ない人にストーカーされたか  
ら思わず、びっくり改造スタンガンの罫で仕留めた後、全裸にして  
坂から転がしちゃったよ？

意外と『アレ』は小っちゃかったよ!!

ダメだよね〜最近のおバカな人達は(笑)

あと、捕まえたあの子をIS学園に入学させるからヨロシク〜

篝ちゃんによろしくね〜

デュ〜〇(^(^(〇

ア

み

んな大好き東さんより】

ツッコミどころ満載。

三流お笑い芸人が見たらしつこくツッコムことだろう。

そりゃあ、ひとりアリスを体現したうさ耳付けた残念美人が白



昼堂々と街中を歩いていたら注目される。

黒服の人はおそらく政府の人間だろう。

「……………何だ……………この……………  
……………ツツコミの嵐は……………」

とにかくツツコムところがたくさんある。

ツツコミだけでオンパレードが開けそうだ。

まず、『あの』東が手紙を出してきた事。千冬一人に送ってきたなら「下らない」と「あり得ない」の二言で切って捨てたのだが、  
？死でもあった為、読むことに。

その次に、『あの』東が丁寧な文面を使った事。しかし、これは途中で面倒になったのか素に戻っていたが……………

最後に、

「捕まえたあの子とは誰だ？」

拉致でもしたのだろうか。

束なら本当に実行しそうなところがなんとも笑えない。

とりあえず隣で一緒に手紙を読んでいた？に声を掛けた。

「……………たばち……………成長したんだねっ！！」

感動していた。

しかも、ビツと音でもなっついていそうな親指付きで。

スパアツン

もう一人のバカをとりあえず引っ叩く。

「黒服の人、かわいそうだったね。」

うんうんと、今度は何故か至極真面目な顔で頷き出すバカ。その後頭部にはたんこぶが突き出しており、全く締めりがなかった。

「そんな事どうでもいい、問題は『あの子』とやらだ。」

「どうでもいいんだ……………」

本当はいろいろと黒服は災難だったと思うが話が進まない為の際、無視を決め込むことにした。

「まあ、取り敢えず約束の場所に行こうよ。」

「おい、お前も私も仕事が終わって無いぞ。」

二人の仕事の量は半端ではなく、とても明日までで終わる量ではなかった。むしろ、休日返上でもしないと終わらないだろう。

「だいじょくぶ、大丈夫!!なんとかなるって!!」

そんな気は全くしなかったが、千冬自身も無意識にデータ、文字、紙に囲まれる運命を避けたかったのか、いく事にした。それに『あの子』とやらが、誰も来なかったら困ってしまうだろう。

そんな事を思いながら仕事に戻る、

「ふゆち了。」

「何だ……………」

「小っちゃかったんだね、黒服の人」

取り敢えず、

スパアアアン

仕事中の職員室に出席簿と短い悲鳴が木霊した。

約束の空港に着くと、二人は約束の時間が迫ってきた為、すぐに車から降りる。

美女二人が並んで歩く姿に

女性は羨ましそうに

男性は熱い溜息を漏らしながら

夫と彼氏は目移りし

妻と彼女はそんな男共をキッと睨んだ。

弾むように嬉々した表情で千冬の前を歩く湊の綺麗な長髪が歩行に併せて左右に揺れた。

そのまま入国者用のロビーに進んだ。

待ち合わせ場所はここだった。

人相は書いていなかったが、一目で分かるとの事。

そんなに目立つ奴なのか……………

時間的に到着便の欄をみると、タイのデリーからに便。

治安が良いとはとても言い難いタイからだったため、いよいよ千冬の束拉致疑惑が本格的になりだした。

心配する千冬とは無縁に、？は子供のようにキョロキョロと周りを見渡し、手をぶらつかせていた。

千冬が、落ち着けと、注意しようとすると、こちらに少し逸れるように向かって来るある一人の人間に目が留まる。

背が高く、帽子を目深かぶり、大きなバッグを肩に掛けている。

目深にかぶった帽子からは濡羽色の髪がはみ出しており、首筋からネックレスなのか細い鎖のチェーンが覗かせていた。

千冬が隣を確認するとさっきまで往来する人々を適当に流し見していた？がジッとその青年をこれでもかとはかりにガン見していた。

青年が二人のすぐ側を素早く通り過ぎようとする。

その瞬間がまるで時間を切り取ってスローモーションで流すかのように感じた。

「……………きみ。」

千冬がそそくさに立ち去ろうとした青年を呼び止めた。

「……………なんでしょうか？」

深みのある低くもない、少し高めのよく響く声だった。

青年はもう一度帽子を深くかぶり直すと、身体を向こうにほとんど向けたまま首を傾けるようにして振り返る。

深くかぶった帽子のせいでよく表情がわからなかった。

「どこかで会ったことがあるか？」

「いいえ、勘違いじゃありませんか？」

「……………そうか、呼び止めて済まなかったな。」

「いえいえ、たいした事ありませんから。」

また、青年がそのまま歩き出す。

また、湊の方を目だけ動かして見る。

？は固まったようにガン見していた。

それを確認した千冬は、

「そういえば……………束は元気だったか？」

「ええ、元気過ぎて手を焼きましたよ。何年か経ったから少しは落ち着いたと思ったのに…御二人とほぐきちゃんがちゃんと構ってあげないからこうな……………あつ。」

途端に青年が逃亡を計る

が、重いバッグを持っていた事と？が既にスタンバイしてたこともあり2m進まずに捕まった。

？が目深にかぶられていた帽子を外し、千冬が服の中に隠れていたチェーンの先を引っ張りだす。

帽子の下から出てきたのは、

長めの濡羽色の髪に紫に金を一滴だけ垂らしたかのような不思議な色合いの綺麗な眼、



引つ張り出された細い鎖のチェーンの先には鈍色に輝き両面に文字が刻まれたドッグタグが姿を現した。

やっと 見つけた。

「6年ぶりだな、『センナ』……………捜したぞ。」

ドスの聞いた悪魔の声で再開の言葉を、その隣でこめかみにビシッと青筋を浮かべた天使が微笑む。

悪魔の拳は硬く握られ、天使は身体をプルプルと震わせていた。

まるで二人の背後に映る阿修羅と般若を身体全体で抑えるかのよう……

6年前に突如行方不明となった青年――沙月茜雫はこれはヤバイな〜と、他人事のように軽い現実逃避をしながら数分後の己の姿を想像した……………

しかし、数分待たず次の瞬間2つの衝撃と共に茜雫はたっぷり三秒間の浮遊感を体験した。

また会ってしまった……………

と、自分に失望しながら

ら……………

それ以上に……………

また会えた……………

と、大切な人達  
との再会を喜びながら  
.....  
ゆっくりと意識を手放した。

## プロローグ（後書き）

とりあえず急いで元に戻します

急ぐので誤字脱字またはこんな場面があったのに忘れてんじゃないの？というところなど修正点があったら宜しく

一話 再会（前書き）

すいません

焦って間違えた

## 一話 再会

照明の落ちた、真っ暗闇。

四方は本来白い壁があるのだが、今は黒く映る。

だが、それがここの本当の姿。

獯猛な狗を飼い馴らす為の真っ黒い檻獄。

入口からこの部屋までは死体 死体 死体 死体 死体 死体  
死体 死体 死体 死体 死体

一ヶ月もすれば太平洋戦争で南の島にあつたという白骨街道が  
忠実に再現されるだろう。

赤い血のレッドカーペットは狗達の檻獄に続いている。

レッドカーペットを歩いたのはスターでなく一人の少年。

檻獄には9、10歳の男女の子供の死体が転がっていた。

その中心に立つ少年は手にした銃で小さな生命の灯火をまた吹

き消した。

頭に一発、祈りの十字架を切るように心臓に二発。

そのうちの二発で既に死んでいるとわかっていても確実に急所を撃ち抜く。

傲慢も、驕りも無いプロの技。

最後に残った小さな少女は何人かの子供と同じように震えながらも微笑んでいた。

それは今自分を殺そうとしている存在が救いの手に見えるかのようにだった。

薄暗い中でその病的に白い肌と輝く銀髪は際立つ。

その少女の顔が誰かと重なった。

自分を救い微笑みながら冷たくなっていった名前も知らないあの少女と。

少年はそれから逃げるかのように引き金を引く。

どうか、この少女が自分を憎んでくれますように

と、願いな

がら・・・



「あつ、起きた〜？」

茜雫が目覚めると栗色の長髪をした女性の顔を隠すように突き出された胸が見えた。

「あつ、エロい眼でみてる〜。」

「……………くだらないこと言うなら膝枕なんてしないで下さい。」

「ぶう〜、ほんとの本当に久しぶりなのに〜。」

起きるのも億劫なので人聞きの悪い戯れ言を言う？にズキズキ痛む身体に顔をしかめながらも反撃。

湊は子供のようにすねだした。

「確かに久しぶりですね。だいたい6年ぶりぐらいですか？」

ぶつ飛ばされる前に聞いたおぼろげな記憶を辿って聞くと、

「ちがうよ、5年と319日だよっ！〜！」

「変に細かい奴だな、お前は。」

隣で缶コーヒーを飲んでいる千冬が飽きたように言う。

「お久しぶりです、千冬さん。」

「ああ、そうだな。」

「細かくもなるよっ！！最愛の夫がいきなり行方不明になっ  
――」

ド  
ロ  
ッ

「いい加減なコトを言うなッ！！」

「ぐぬぬぬ、醜い嫉妬だね、ふゆち。」

「もう一発、逝くか？」

「すみませんでした。」

千冬の殺気がオーラとなって立ち込め、拳が握られたのを見て  
？は身体を瞬時に90度折り曲げる。

必然的に膝枕されていた茜雫の顔面に豊満な胸が押し付けられ、茜雫はすぐさま飛び退いた。

「その無駄に育った核兵器を押し付けないでください。」

「ちっ、籠絡できると思ったのに。」

アホなことを言うバカ姉に

「千冬さん。」

「よし、了解した。」

「えっ………ちよっ………待つて………穴  
談冗談じょうだー………」

ドガシャッ

空港のロビーに鈍い殴打音と悲鳴が響いた。

「そういえば……………」

「どうしたんですか？千冬さん。」

IS学園への帰り道、助手席に乗る千冬が荷物と一緒に後部座席に座る茜雫を振り返りながら、

「気絶した時、夢でも見てたか？」

「夢……………ですか？」

気絶と聞いて、途端に思い出すかのように顎、こめかみ、後頭部に鈍痛が走る。

しかし、質問の意味が解らない。

「何故そんなこと聞くんです？」

「……………泣いてたぞ、おまえ。」

「……………」

心が水面を叩くように波立った。

運転席で運転に集中していた？もそれに興味があったらしく視線を前に固定したまま聞いている。

「……………さあ、何ででしょう。思い出せません。」

本当は忘れたいのだが忘れてはいけない何かを、見ていたと思うのだが夢だったからなのか、思い出すのを脳が拒否したのか、詳細を思い出せない。

「そうか……………」

茜雫の声が僅かに震えているのに二人は気づいたが特に追求はしなかった。

「もしかしたらあまりにも二人の一撃が痛くて泣いてたのかもしれませんね。」

「「「「？」」」」

茜雫の痛恨の一撃。

二人にとってかなり痛い。

実際、茜雫は15分も目覚めず、近くで見えていた通行人によって通報されかけた。

なんとか誤魔化せたが、あと5分目覚めなければ救急車を呼んだかもしれない。

「お、お前が悪い。」

「そ、そうだよっ!! せんちゅがなくなって大変だったんだからね!!」

主に部屋の状態が。

千冬と同じで日常生活が適当な?の部屋は当初、茜雫がいなくなったショックでかなり荒れていた。

その事を知った千冬はよく弟の一夏を出勤させたが、一ヶ月に二度、それから派遣する事となった。

今は元に戻っているが、それでも汚い。

そう言えば最近帰っていないな、と湊は自分の家の様子を想像するが、やめた。

何か怖い。

それに茜雫が帰ってきたのだから大丈夫な筈だ。

「部屋の掃除ぐらい自分でして下さい。」

「ぐはっ!!--」

バレている。

?の部屋の惨状などお見通しのようだ。

ガクツと首を落として前を見なくてもしつかり運転ができているところが彼女のふざけた雰囲気隠された実力の高さ。

そんな二人を見て隣で声を殺して笑っていた千冬だったが、

「千冬さんも笑ってないで一夏にやらせず、自分でしたらどうです? 貴女達あと少しで20代後半に突入するでしょう?」

「.....」

こちらにもバレている上にかなり痛い事実も含まれており、ぐうの音も出さず、押し黙る。

「ぐへっ。」

?は、せめてぐうの音だけでも出した。

相変わらずの二人の様子を確認したところで茜雫は窓の外を見る。

景色が次々と走り去って行く。

ガラス越しに映る、過剰な女尊男卑に染まった天に腕を伸ばすかのようにビルが立ち並ぶ街の風景。

嫌な景色だな

と思いながら。

4月半ばの月曜日



IS学園 一年一組では一部の女子が朝から何やらざわついていた。

「なあ、何をみんな騒いでいるんだ？」

世界で唯一のIS男子操縦者である織斑一夏はSHRが始まりそうだというのに隣の席で騒いでいる女子生徒の集団に声を掛けた。

「なんかねえ、転校生らしいよ。」

「転校生？まだ入学してから三週間しか経っていないぞ？」

そう聞き返したのは一夏の幼馴染で切れ長の眼にリボンで特徴的なポニーテールをした日本刀のような鋭い雰囲気をした女子生徒――篠ノ之箒だった。

「あれっ？二人ともまだみてないのかな？」

「「はあ？」」

転校生なのだから見ているはずが無いと、困惑の反応を返す。

「なんか、よくわかんないけどこの週末、沙月先生の部屋で寝泊まりしてたらしいよ。」

「ええ！？それ本当！？」

その情報は一緒に騒いでいた女子も知らなかったようだ。

その転校生は度々遠くから目撃されてるらしい。

「ビッグフットみたいな奴だな。」

篝が呆れたようにいう。

？は生徒から受けが良い上に強くてカッコいい為、千冬の次に憧れの的だった。

本人が聞けば「二番目か」などとぼやきそつだ。

「だれなんだろうな」

国外から早く来てしまったんだろうか。

「男だったような気がする。」

女子がそう呟くと、

「本当かつ!？」

「う、うん 私にはそう見えたよ。」

一夏の必死の形相に女子は苦笑いしながら答える。

学園唯一の男子生徒である一夏にとって男子の存在は死活問題であった。

「今年に入ってきていきなりイレギュラーが二人も現れるなんて普通はあり得ないことですけど……」

そう驚くのは、流れるような豊かな金髪をフリルのカチューシヤで留めたイギリスの代表候補生――セシリア・オルコットだ。

イレギュラー　――本来、今の女尊男卑の象徴である世界最強の機動兵器・ISは女性しか動かすことはできない。

世界で唯一男のIS操縦者ある織斑一夏は受験会場で試験的に置かれていた訓練機を機動させてしまったため、強制的にIS学園に入学。

その結果、女子高ではないのだが、事実上女子しかないIS学園で肩身の狭い想いをしていた。

興味津々の一夏達に対し、筈はどうでもいいとさっさと自分の席に着く。

「なんか最近いろいろあるな。」

突如IS学園への入学、幼馴染の片側との再開、一週間前はイギリスの代表候補生であるセシリアとのタイマン勝負。

なかなか濃い三週間だったな、と少々ジジ臭く過去を振り返る。

「SHRを始めますよお　席に着いて下さあい。」

と、生徒にお願いするが転校生の話題の前に完全に反応してもらえない――見た目は子供！胸だけ大人？がキャッチフレーズの一

年一組・副担任・山田真耶は若干涙目。

非常に豊かな胸がブラウスの下で窮屈そうに張っている。

私って先生と思われてないのかな　や、入学して二週間で  
学級崩壊　などと、ブツブツ呟いていると、

「席に着けっ！！バカ共！！」

恐怖の鬼教師もとい一年一組　担任　織斑千冬の鶴の一声によ  
って騒いでいたバカ共も蜘蛛の子を散らすように席に着く。

「しえんぱい。」

と、泣きつく山田先生。

「済まなかったな。君に難しい仕事を押し付けて。」

「いえいえ、そんなことないですよ……………」  
……ッて、あれ！？SHRも出来ない私ってダメ教師！？」

山田　真耶、衝撃の事実に関付き、大ダメージ。

千冬はショックで落ち込んでいる真耶が面倒となり放置、SH  
Rを始める。

「突然だが、急遽転校してきた奴を紹介する。入れ。」

その言葉にクラスのボルテージが一気に上がる。

「言っておくが、騒ぐなよ。」

千冬が無意味と分かっているながらも警告する。

そして、全員が教室の入口に注目する。

視線に力学が働けば穴が開いてしまうだろう。

一夏は男子有力説に期待を膨らませながら、そんな小学生のよ  
うな一夏を筈は呆れたように見つっ、自分も二人目の男子を見るべ  
く入口に視線を向ける。

そして、

緊張した様子のない呑気なテンポで転校生が入ってきた。

噂道理の男子。

長めの濡羽色の髪に紫に金を一滴だけ垂らしたかのような不思議

議な色合いの綺麗な眼をした、背の高い青年。

その綺麗な容姿にクラスのテンションは更に急上昇。

二人を除いて。

一夏は先ほどの期待などぶっ飛んで眼を見開き、口を開けて惚けている。

冨は余りの驚きに席を勢いよく立つ。

そんな二人をみて、千冬は額に手を当て溜息をつく。

そして、二人を見て、青年はイタズラっぽい笑みを浮かべて名乗った。

「今日から転入してきた、沙月茜雫です。よろしく。」

二人の目の前に現れたのは6年前、どんなに捜しても見つからなかった幼馴染は、いきなりぼつと現れた。





一話 再会（後書き）

よろしくお願いします

## 二話 転入生（前書き）

死ぬ気で頑張って三話目

この後はメモの数が少ない為ハイスピード更新は無理

## 二話 転入生

「今日から転入してきた、沙月茜凜です。よろしく。」

そうシンプルに名乗った転校生――沙月茜凜はイタズラっぽい笑みを浮かべる。

その瞬間、

「キヤアアアアアアアアアア？」

大多数の女子による大歓声。

窓の外で鳥が数羽一斉に羽ばたく。

「男子？二人目の男子？」

「しかもクール系のイケメン？」

「一組でよかったあ。」

女子って怖いなあ、と空気を震わすサウンドビックウエーブを  
もろに受けた茜雫は苦笑いした。

「ええい、いいから静まれ小娘共？」

教室の震わす千冬の一喝ですぐさま黙る。

「わあ、凄い影響力ですね。」

元凶であるこいつは相変わらず飄々としている。

なんとなくこいつの姉ー？が頭に浮かび、なんだか？に感化  
されてきたな、と表情の少なかった拾った当時と比べ複雑な気分。

「篠ノ之もいつまでも立ってないで座れ。」

「は、はい？」

驚きで立ったまま動けずにいた箒は慌てて座り直した。

「あれ．．．．．もしかして篠ノ之さん．．．．．一目惚れしちゃった？」

「ち、違う？そういうわけでもない？」

と隣の席の女子生徒が尋ねると、箒は顔を真っ赤にして否定する。

「本当かなあ。」

女子生徒は更に追求しようとする。

「あつ、ちなみに織斑一夏君と篠ノ之箒ちゃんとは幼馴染．．．．．というより昔馴染みかな。」

とフォローが入る。

箒は追求から逃れられたとホッとすると同時に、やはり見間違いではないと再確認した。

ここで千冬から声がかかる。

「沙月。」

「なんですか、ちふ．．．．．おっと、今は織斑先生の方が

いいですかね？」

「分かっているのならそう呼べ、お前の席は窓側の一番後ろだ。」

「はいはい。」

ラッキー、などと考えていると

「居眠りできると思っなよ。」

「.....」

バレバレのようである。

茜雫が席に着くと、隣の席のツーサイドアップの髪に半開きの眠たげな眼をした女子生徒が話しかけてくる。

「私の名前はねえ、布仏本音っていうのぉ、よろしくねえ。」

通常の1/2の時間軸で生きているかのような自己紹介に、癒されるなあ、などと思いつながら

「こちらこそよろしく、好きなように呼んでいいよ。」

「うん、分かったよぉ、せつち。」

「せつち？」

「うん、今決めたのぉ。」

「……………決めるの早いね。」

どうやら常に1/2の時間軸で生きているようではないようだ。

「せつちくも好きなように呼んでいいよあ。」

「……………じゃあ、のほほんさんで。」

まるで幼子の相手をしているようだ。

性と名前に最初の二文字を取っただけだが、イメージにピッタリだ。

「せつちくてえ、沙月先生の御親戚？」

「ん、まあ、義理の弟だね。」

「そうなんだあ、いいなあ。」

「あの人の弟は苦労するけどね。」

一緒にいるだけで掃除のスキルがどんどん上がって行く。

ここでも人気者の？に凄いなあ、と思っていると

「そこの男女、私語をするな。」

千冬に怒られた。

途端に女子が騒ぎ出す。

「あつ？本音ズルい？ もう沙月君と仲良くなっている？」

「ずるくないよお、隣の席のとおっけえんだもんねえ。」

それでもズルいズルいと口々に言う女子に茜雫は女子しかいないと大変だなあ、と他人事のように思っている。

Bannon?

千冬は教卓を叩くだけで黙らせた。それだけでこの女子達を黙らせるなど千冬ぐらいだろうか。

これには茜雫も苦笑いする。

と、なんとなく視線を感じて周囲を探ると、箸がこちらをずっと睨んでいる。

まだ黙って行っちゃったの怒ってるかなあ、と思いつながら空港とその後の寮での千冬と？による説教と制裁を思い出した。

正直言つて苦笑いも出てこない。

そのぐらいアレはヤバイ。

何度死を覚悟したか。



まあ、自分は『アレ』を終えるまで死ぬ気はないが……………

S H R が終わるとそのまま授業。

「で、あるからしてISの基本的な運用には現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合、刑法によって罰せられ……………」

教卓の前ではさっきまで小動物のようにオロオロしていた真耶が先生らしくISについて説明するのを見て本当に先生だったんだなあ、と今更納得。

正直言つて真耶はある一部分を除いて中学生でも通るだろう。

人を見かけで判断出来ないとはこのことであつた。

しかし暇だ。

ISについては『昔』から知っているのだから、茜雫にとつてISの応用ならともかく基礎は退屈で仕方がない。

眼を閉じてしまえば、一瞬で眠れる自信はあるが、そんなことすれば恐らく千冬の一撃によって一瞬で昇天し、二度と眼が開くことはないだろう。

『家出』から帰ってきたばかりなので尚更である。

死なない自信は0だ。

「沙月君、何か分からない事が……あるかな？」

真耶が躊躇いがちに質問してくる。

そんな真耶を愛玩動物みたいな人だな、と思った。

本人が聞いたら顔を真っ赤にしてトリップするだろう。

「その質問を一夏にパスします。」

「なんでだよ？」

「だって一夏、昔から救いようのないバカじゃん。」

「酷いな、お前？」

しかし事実である。

昔こいつのイノシシぶりにどんだけ苦労したか

「織斑、理解しているよな？」

教室の隅にいた織斑先生のデビルクエスチョン

「？」

「半分……いやっ、少ししか理解出来ません

バシイイイイイイイイ

今日は出席簿の音が良く響くようだ。

その後の授業も高校に入って二週間少ししか経っていないため、  
小学校中退後、独学だった茜雫でも楽勝。

最前列の席の一夏はしきりに首をひねっていたが……  
……

何をやってたんだか……あいつは……

授業が終わり、茜雫はクラスの生徒と親交でも深めようと思っ  
ていると、二人の男女に呼び止めらる。

「セン、ちょっと来い。」

やっぱりそう来るよなあ

諦めるしかないな

## 二話 転入生（後書き）

指摘を含めた感想ください？

あと、最初から執筆し直す事になったのもっとことうして欲しかったなどがあったらどうぞ気軽に

三話 追求(前書き)

一日中部活つてしぬ . . . . .

### 三話 追求

「セン、ちょっと来い。」

一人は織斑一夏、もう一人は篠ノ之箒。

お願いではなく、命令。

いかなければなにされるか。

「はいはい。」

これはかなりきてるな、と諦めながら返事した。

どこに向かうか知らないが、並んで歩く二人の後ろを黙って着いて行く。

途中、野次馬の女子が興味深そうにこちらを見てくるが茜雫はそれどころではない。

なんて理由をつけようか頭がいつぱいである。



どんな理由があっても許してくれなさそうだが……

終始、お互い無言。

マジで怖い、と冷や汗かきながら着いた場所は、鮮やかな芝居の張られた屋上。

誰もいないーまるで自分みたいだ。

茜雫の内心とは裏腹に開放的などこまでも続きそうな空は晴れ渡っている。

真っ青というところは一致しているが。

人気のないことを確認すると、まず筭がこちらを向き直る。

いや、睨みつけてきた。

「……………何を言いたいか分かっているのだろう？」

静かな問いかけだったが、その中身は恐らく怒っているだろう。

「……………とても身に覚えがあります。」

どお言い逃れしようか考えていたが、やめた。

6通りほど考えついたが、どれも納得してくれそうない。

「いままで何をしていたのだ？何故誰にも何も言わずに出て行

ったのだ？　一夏や千冬さん、私や？さんがどんな想いをしたのか分かってているのか？」

激しく震えるような怒りの形相。

その眼には薄っすらと涙が浮かんでいる。

自分より背の小さい彼女から堰を切ったようかのように激情が流れ出す。

それは6年間溜まり続けた疑問と怒りと哀しみ。

煮えたぎったマグマに熱く、激しい。

「何か言ったらどうなのだ！！」

何も言わない茜雫に筭が吠えた。

茜雫はそんな筭に耐え切れず、目を逸らし、

「……………」

絞り出すように呟く。

何のひねりもない短い謝罪。

茜雫はそんな自分がイヤになる。

中身がからっぽ。

「．．．．．いつもそうなのだな．．．．．お前は．．．  
」

何を考えているんのか分からない．．．．．何をするのか  
分からない．．．．．何もおしえてくれない．．．．．

一夏と箒は茜雫と幼馴染だったが茜雫について何も知らなかつた。

昔、茜雫に初めて会った時、箒は茜雫のことが怖かった。

？と千冬に連れられていきなり現れた少年――茜雫

人としての感情が欠落したかのような、考えを全く読むことのできない茜雫のことが怖かった。

しかし、接しているうちに理解できた。

茜雫の中には殆ど何にもなかった。

あるのは哀しさと寂しさそして恐れ。

その中に微かにみえた優しさ。

人間は様々な感情あると言うが、茜雫の中にはそのうちのほんの一握りしかない。

だから、箒と一夏は手を引く事にした。

白紙のキャンパスをもっと色とりどりの絵にする為。

何もなければいい、少ないのなら増やせばいい。

茜雫は手を引けば必ず着いてきた。

その労が功したのか、それとも人懐っこく自然に人を引き寄せ、湊と暮らしていた為か少しずつ表情を見せるようになった。

よちよち歩きの赤ん坊ぐらいの速度だったがそれでも十分だった。

箒は自分が頼られていると思った。

自分が必要な存在だと思った。

しかし、ある雨の日。

茜雫は早めのプレゼントだといい箒に包みを渡すと、降りしきる雨の中最初からいなかったかのように忽然と姿を消した。

最後に会っていた箒は自分を責めた。

一夏とも何度も捜した。

見つからなかった。

そのまま行方不明となった……………

「理由ぐらい教えてくれるよな?」

いままで何も喋らなかった一夏もずっと抱えていた疑問をぶつ  
けた。

消えた理由は聞いていない。

誰にも知らされてなかった。

茜雫は少し言いにくそうに、

「……………まあ、ちょっと家族について情報が上がって  
ね……………」

これは半分 嘘。

兄弟であつて家族ではない。

嘘をついたのは怖いから

沙月茜雫の本当を知られてしまうのが。

そんな自分に、拾われてから弱くなってしまったな、と内心で  
自嘲気味に笑う。

「そうだったのか……………それで……………会えたの

か………家族に………」

「いいや、会えなかったよ。」

また嘘をつく

正確には、会えたが拒絶した。

「………そうか、………ん？なんですぐに帰ってこなかったんだよ？」

一夏が当然の疑問をぶつける

「ん？ああ、なんか知り合いっぱいおっさんに世話になってた。」

「「はあっ？」」

これは本当だ。

明らかに自分について知っている。

そして、自分も知らない情報をアイツは知っていた。

6年の内最後の2年間は『仕事』をしながら追い続けたが、途中で東さんに捕まってしまった。

なんだか複雑な表情をした茜雫に二人は、色々あったんだな、と察した。

なんだか暗い雰囲気なので茜雫は強引に話題を変えた。

「まあ辛気臭い話はこのままでにして、それにしても大きくなっ  
たね ほぐきちゃん。」

そう言つて、胸を凝視。

「? . . . . . ー ー ー ー ツ! ! !」

はじめはいきなり話題の転換に疑問を頭に浮かべたが、茜雫に言われた意味を理解して顔を真っ赤にしてその良く育った自身の胸を抑える。

ヒュッ

パシッ

いきなり振られた木刀に茜雫の真剣白刃取りが成功した

「危ない!!手加減無しでしょ!!死んじゃうって!!」



「死ねっ……………いつからそんな風になったんだ？お前は？」

少なくとも出会った当初は絶対にこんなのではない。

絶対に湊の影響が出て性格が似てきている。

まさに刷り込みだ。

「……………てか、箒……………どっから出した？」

いままで何も持っていなかっただろ……………

一夏の素朴な疑問など耳に入れる気はないのか箒は力の限り木刀で押し切ろうとする。

「私が何を言いたかったのか分からなかったのか、お前は？」

「いや、分かってるさ。」

ぐぐぐと押し返しながら茜雫も答える。

「なら……………」

「一夏の後頭部にある寝癖がきになるんだろ……………俺も気になる……………」

「何っ！？マジで！？」

なんて事だ、知らなかった。

「違っわー！！馬鹿者！！」

茜雫がズレた回答をし、一夏は朝からいつも以上に妙に視線を向けられる元凶に気付き、箒が怒り更に体重まで掛けた。

茜雫は両掌に挟まれた木刀が動き出したのを見て焦り出す。

(ヤバイッ！！このままでは押し切られる！？……………後が怖いからやりたくないけどこの際仕方ない！！)

どちらにしても悲惨な運命を辿るのだが、この時は後回しにする選択肢を取った。

「……………ほぐきちゃんがあんまり美人になつてたから間違えただけだつて。」

「……………な、何を言っているんだ！？お前というヤツは！？」

フェイズ1成功

一瞬緩んだ木刀を引き寄せるようにして流す。

「えっ！？」

全体重を掛けていたため前につんのめって動けない箒の耳にフツ

と息を吹きかける。すると、

「ひゃっ!?!」

普段彼女から絶対に聞くことの出来ない可愛らしい悲鳴がでる。

その隙に脱出。

フェイズ2成功

ミッションコンプリート

直ちに戦略的撤退を開始する

階段へ通じる入口に素早く辿り着くと一度振り返り、

「ほーきちゃんの可愛らしい声ありがとう、じゃあねっ!?!」

ビシッと敬礼のように片手を挙げるとそのままエスケープ。

三十六計逃げるにしかず。

篝ははじめは恥ずかしさで顔を真っ赤にしていたが、その赤は怒りの赤に変わった。

「なるほど……お前は人の純情をそうやって踏みにじるのか……」

それを見た一夏は数分で茜雫も同じように赤く染まるだろう、と決断を下す。

血だるま、という意味で

は  
．．．．．  
凄まじい速さで筈が走って行ったため屋上に一人残された一夏

「．．．．．あつ、  
これか．．．．．」

クラスの女子に手鏡を二枚借りて寝癖を発見したのと、どこかで悲鳴が聞こえたのは同じ時刻だった。

その後、

左手に気絶し血だらけの茜雫、右手同じく血だらけの木刀を引きずってチャイムギリギリに教室に到着した筈に真耶は短い悲鳴をあげて涙目となり、千冬は筈に出席簿アタック、茜雫は鉄拳制裁で目覚めさせることとなる。

皆々々 無言で合掌

三話 追求（後書き）

感想よろしく

ああ、鬱だ

四話 帰路にて（前書き）

急ぎ修復中

ほぼ復元できている

記憶力に感謝

#### 四話 帰路にて

「うっっ．．．．．まだ痛え．．．．．  
やり過ぎじゃね？」

放課後の学生寮への帰り道、一夏、箒、茜雫が並んで歩いている。

茜雫はまだズキズキ痛む頭に眉間にシワを寄せていた。

建物を照らす夕陽はほんのりと紅くとても綺麗で海の水に反射した輝きはこちらに向けて光の道を創り出していた。

「いや、あれはセンが悪いと思うぞ？」

ただえさえ気だっていたというのに 再会早々あんなことしたんだからな。

茜雫の右隣にいる一夏が呻く茜雫に呆れて言うが、当の茜雫はそれどころではない。

箒の木刀での一撃を頭に受けて気絶していたところ千冬の直下型ボムが炸裂したのだから仕方ないといえば仕方ないのかもしれない。



頭が割れて中身がでないか心配だ。

今は頭に包帯を巻いている。

転入早々不憫である。

茜雫が夕陽をもう一度見ようと首を90度傾けるとあるものが視界の隅にはいる。

「なんかさあ。女子って、すごいね。」

と茜雫が後ろを振り向くとクラスの知った顔やら知らない顔まで列をなしてこっちを見てくる。

他学年もいるだろう。

正直いつてかなり怖い。

皆が一斉に襲いかかって来たら何もどんなに茜雫が強くても数分持たずに敗北する。

「まあ、ここじゃ男はウーパールーパーみたいなもんだからな。」

「うーん、例えが微妙だ。」

確かに女子がほとんどーというか二人しかいないIS学園では異性は稀少なのだろう。

ちなみに、IS学園には『学園内の良心』こと素敵な隠れ理事

長兼用務員のおじちゃんー轡木十蔵がいるのだがここでは異性に  
カウントされない。

「女子といえば、ほくきちゃんの一撃、凄かったね……………」  
「……………」

まさか血を流して気絶してしまうとは思わなかった。

「箒は剣道で全国優勝したからな。」

なるほど……………

「だから凶悪凶暴なのか……………」

「もう一発逝くか？」

「すみませんでした。」

納得していると左隣りにいる箒に死刑宣告されてしまった。

それは流石にヤバイヤバイ、と即座に30度身体を綺麗に曲げ  
て謝る。

一夏は、何故それが凶悪凶暴なのか疑問に思ったがどこからか  
木刀を取り出す箒と素晴らしい土下座をする茜雫の間になんとも入  
り辛い空気が流れているため、やめた。

とりあえず、

「どっから出したんだ、箒？」

二度目の筈なのにやっぱりいつどこから出したのか分からん  
それに普通ならハリセンだろ。

気が付けば木刀が箒の手に握られている。なんとも恐ろしい。

鬼に金棒

台所にゴキブリ

ジェイソンにチエーンソー

千冬に出席簿

そのぐらい恐ろしい……………いや、どれとは言わ  
ないが一つは別次元に恐ろしいが

日常茶飯事になっている辺り……………

必死に謝る茜雫は中東で出会った凄まじい剣技を魅せるとある  
おっさんに毎日襲われ、刀を使う剣技は軽いトラウマになっていた。

お陰で、かなり接近戦はかなり得意になったが……………

「あつ、そういえば……………お前、このまま？さんの部屋  
に住むのか？」

「そうなのかつ!? セン!?」

喰いつく筈。

「なんでそんな必死そうなんだよ……ほくきちやん、……いや、俺は余りの二人部屋に一人で住む予定だよ。」

あの人と住んでると家政婦になってしまう。

「マジで!? ……てかつ、二人部屋なら俺もそっちに移るのかな?」

「一夏も今、一人部屋なの?」

「いや、筈とだ。」

「何っ!? それって本当!?」

「ああ、残念がらな。」

さらりと酷い事をいう筈。

「残念でなんだよ!? 見ず知らずの人より幼馴染の方がいいだろ!?」

「初日に何があったか忘れたのか?」

何となく千冬に似た声のトーンに一夏は何も言えなくなる。が、

一夏は何故か、しまった、という顔になる。

それに筭は、何だ？、と思ったが、もう一人の顔を見て同じ表情になる。

「ほほう………ナニかあったのか………」

「「ないっ！！何もなかったからっ！！」」

「という事はこれからもナニか起こるな………」

「「何も起こらないからっ！？」」

「「いいや、起こらせる。」」

「「やめろっ！！」」

なんだか茜雫の新しいオモチャを見つけたと言わんばかりの笑みに背筋が寒くなる。

こいつは昔からイタズラをやるなら徹底的にやっていた。

？にそういう術を教えられる間に？に似てきてしまった。

なんとも迷惑な話である。

しかも、初めは無表情で徹底的にやるので更に質が悪かった。

全く予想が出来ないのである。

「お、お前は何故急にIS学園に来る事になったのだ？」

「おっ、ここで強引に話題を変えたね。」

「いいから答える。」

篝の話題転換にまだからかいだりなかったが、まあいいか、と質問に答えることにした。

楽しみはとっておくものである。

「世界中廻って社会科見学したら、東さんに捕まってココにぶち込まれた。」

「社会科見学って……なにやってんだよ……」

そんなことしてんなら手紙くらい書けよ……

「姉さんにか……」

篝はなんだか複雑な表情になる。

「まだほぐきちゃん、東さんのこと避けてるの？東さんほぐきちゃんのこと好きなのに。」

茜雫は東に捕まってから二日三日の間に散々篝の自慢話を聞かされた。

今なら独唱だってできる。

「アレがおきてしまったからな……………」

アレーー！ 箒と束を引き裂く決定的な事件

勝気の箒にしてはかなり弱気である。

何の事が全くわからず、詳細を知らない茜雫にとってして見れば束は、ばつちこゝいマイシスター！！、って感じだったと思うがそんな簡単に行くものではないらしい。

姉の？もむこうで世話になったおっさんもそついう雰囲気と無縁だったため対処法が分からん。

複雑なもんだから理解出来なくてもいいか、と茜雫は結論付ける。

「しかし、姉さんが見つけた……………いや、に見つかったか…  
…なんだか済まないな……………  
…だが……………姉さんありがとう。」

「なんで!?!」

おかげで茜雫の頭は常時大出血サービス真っ盛りだ。

「いや、お前束さんが無理やり連れてきてくれなかったらなかなか帰ってこなかっただろ。」

「そんなことは……ないよ?」

「何故言い切らないのだ、セン?」

そんなやりとりをしている内に一夏と箒の部屋の前に辿り着く。

「あれ?二人の部屋って、ここなの?」

「ん?そうだけど。」

「センの部屋はどこなのだ?」

茜雫は斜め前のドアを指し、

「そこのご近所。」

「そうなのか、それならすぐに会えるな。」

箒が嬉しそういうと、

「ああ、ナニかあったらすぐに鑑賞できる。」

ニヤリ、とガキ大将のようなイタズラな笑みを見せる茜雫に

「まだ諦めないのかよ」

と一夏が呆れる。箒は

「しっしっしっ……!」



「ぐおっ!?!」

木刀の打撃音が廊下に鳴り響く。

地には茜雫がひれ伏している。

「じゃあなっ、セン!!お前のことは一生忘れないぜ!!」

「待って!?!見捨てないでよ!?!」

頭を押さえて倒れる茜雫にまだ殴り足りないのか木刀を振り上げる筈に一夏は自分も危ないかもしれないと友の叫びを背に部屋のドアを開け、中に入るとすぐ閉めた。

床に伏せている茜雫は一夏に救いの手を伸ばすが遮るように筈が間に入る。

茜雫がうつ伏せのまま筈を見上げる。

そして、

「あつ、スカートの中まる見えだよ。」

ズガアアアアアアアア

部屋に戻った一夏がベランダに出ると、夜空に流れ星と共に茜  
雫の笑顔がキラリと見えた気がした。

とりあえず、流れ星に三度は無理だけどーー

授業内容が解るようになりますように、

と願った。

五話 中華娘（前書き）

急ぎ足でやっています

## 五話 中華娘

茜雫が教室に入るとなんだか教室が騒がしい。

茜雫の姿を確認するなり一夏が声をかけてくる。

「おお、やっと包帯が取れたのか、セン。」

「ああ、やっとだよ。」

茜雫が転入してきて3日たった今日、一夏が教室に入ってきた茜雫を見ると頭の包帯が取れていた。

転入初日に茜雫のイタズラに頭の尊い慈悲の線が見事にキレてしまった筈によって木刀で殴られ、千冬の出席簿を超える鉄拳で文字どおり叩き起こされ、更に寮でまた筈に剣豪も目を見張る一撃を全て頭に受けたのだからこの程度で済んだのだからまだマシであるが幸先が悪すぎる。

というか千冬の目覚めの鉄拳で永久に目を閉じることになりかけたのだから、あの人には加減を知ってもらいたい。

「なんでこんなに騒がしいの？」

いつもの倍、騒がしい。

このままでは千冬の出席簿が頭に直下してくると分かっているのだろうか。

「何か転校生が来るらしいよ？」

「転校生？こんな時期に？」

いきなり転入してきた茜雫が言えたことではないが、こんな中途半端な時期にくる奴など早々いない。

特にこのIS学園は特殊な立場上国の推薦がなければ転校など認めてもらえない筈だ。

「うん、中国の代表候補生らしいよ。」

と、いかにもスポーツが得意そうで活動的な女子――相川さんが答える。

普通こんな情報、簡単に入るものではない筈だ。

転校してきて初めて知るものではないのか。

しかも、他国に代表候補生となれば機密度もそれなりに高い筈だ。

「何か詳しいね、相川さん。」

気になって聞くと、

「わあ、名前覚えてもらった!!」

何故か的外れに喜ばれた。

名前を覚えてもらえるだけでこんなに喜ぶとは……………

「まあ、出席番号1番だからね。」

などと思った事をそのまま口に滑らせると、

「あ……………うん、そうだね。そんな理由  
だよね……………」

ズーンと落ち込まれてしまった。

なぜだろうか。

普段元気で活発だから余計に際立つ。

罪悪感が出てくる。

「私の存在を危ぶんでの転入かしら?」

セシリアが何時の間にか腰に手をおいたポーズで立っていた。

普通の人がやれば格好つけかもしれないが、セシリアがやると  
妙に似合う。

セシリアもイギリスの代表候補生として気にはなるらしい。

「別にこのクラスに転入してくる訳でもないのだから、騒ぐことでもあるまい。」

篝も女の子、どうでもいい、といった感じだが噂は気になる。

「まあ、そうだな。」

一夏も、自分には関係ないといった感じだったが、

「一夏は気にした方がいいと思うよ。」

「えっ、なんで？」

何言っただこいつ、とばかりに茜雫が忠告すると、一夏は全く分からない様子で訊いてくる。

「いや、君、クラス代表でしょ。」

「あ、そうか。」

茜雫も昨日一夏がクラス代表だと聞いて、大丈夫なのか、と思ったが茜雫が来るすぐ前にあったセシリアとの決闘の結果セシリアが勝ったが、結局一夏になってしまったらしい。

確実にいつか戦うことになるだろう。

「……………強いかな？」

一夏が不安そうに訊いて来るが、



「一夏ならへこむぐらい叩き潰されるんじゃない？」

「うう、お前の辛辣な言葉に既にへこみそうだ……………」  
「そして、否定出来ない……………」

少し可哀想だが楽観的に考え過ぎる癖のある一夏には言い過ぎぐらいが丁度いいだろう。

「まあ、一夏はまずクラス対抗戦に向けてISに馴れるのが先だから？」

「確かに……………そういえば、センも専用機とか持っているのか？」

一夏が思いついたかの様に訊く。

「一応……………束さんが弄ったISを持ってるよ。」

この言葉にクラス全体が驚いた。

もともと数が467個しかないISを持つているだけでも凄いの  
にISの生みの親で天才と呼ばれる篠ノ之束が弄ったISとは恐  
らく世界中が喉から手が出る程欲しがるものだろう。

「まあ、俺はちょっと特殊だからね。」

確かに、とみんなが納得したが特殊とは二つ意味があった。

一つは男でISを使えるから

もう一つはこのISにはISのコアとは別にあるコアが使われている。

これは茜雫が持っていた試作のプロトタイプに束と茜雫が3日で手を加えたものだ。

「一夏が油断しなければ勝てないこともないと思うよ？」

鞭と飴的な感じで一夏を励ました。

「茜雫さんの言うとおりですね。一夏さんには勝っていただきませんと。」

「男子たるものそんな弱腰でどうする。もっと気概を見せてみる。」

「織斑くん、頑張ってね！」

「フリーパスのためにもね！」

セシリアや箒、クラスのみんなからも励ましの声が挙がる。

「おう、一部不純な声が聞こえたが頑張るぜ？」

一夏もそれに応える。

「それに、今のところ専用機を持っているクラス代表は一夏と四組の人だけだ。油断していなければやれると思うよ。」

一夏がやる気を出したその時

「その情報、もう古いよ。」

廊下の方から挑戦的な声が聞こえた。

クラスのみんなが声のした方を向くとそこにはツイントールに猫のようにつり上がった女子生徒が腕を組みドアに寄りかかって立っていた。

「残念だけど、二組の代表も専用機持ちがなったの。そう簡単には優勝させたくないよ。」

「お前、鈴か？」

「そ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日はあんだ達、一組に宣戦布

告しに来たって訳。」

「ぷっ。」

何か格好つけているツインテールに思わず茜雫が小さく吹き出してしまった。

「そのアンタッ!!何笑ってんのよ!!」

極力抑えたつもりだったが、ツインテールには聞こえてしまったらしい。

ずいぶんと地獄耳だ、と思いつつ知り合いらしい一夏に振る。

「だってなあ、一夏。」

「確かに、何格好付けてるんだ?すっげえ似合わないぞ、鈴?」

おっ言っつねえ一夏、などと思っていると、

「んなっ……………なんてこと言うのよアンタ達は!?!」

案の定、ツインテール―中国の代表候補生、鳳鈴音が噴火した火山のように怒りだした。

さっきの演技も台無しである。

こっちが素なんだなあ、と茜雫が笑いながら観客のようになっていると、

「いつまで笑っているのよ、アンタッ？」

矛先がこっちに向いてしまった。

「後ろ。」

茜雫が急に鈴の後ろを指差す。

「何よっ！！！」

鈴が後ろを向く。

が、何も見えない。

「何にもありませんでした〜」

「ーーーーッ！？あんたねえ！！！」

更に笑い出す茜雫に鈴が怒り出す。

なんだか背後に赤い炎が見える気がする。

一夏も、またこいつは、と苦笑いをした。

「あっ、後ろ。」

また、茜雫が鈴の後ろを指差す。

「二度も引っかかるわけないでしょ！！！」

鈴も流石に遊ばれていると振り向かないが、

バシィーーン

鈴の頭に黒く薄い何かはヒットしていた。

「痛ツたあ！？何よ！！・・・・・・・・・・あ。」

突然頭に響いた鈍痛に鈴が誰かと振り向くが、背後に立っていた人物の冷たい眼差しを見て噴火していた火山も鎮火する。

「ち、千冬さん・・・・・・・・・・。」

微かに怯えの混じった声を出す鈴の目の前には愛刀ー出席簿を持った千冬が立っていた。

どうやら鈴は千冬のことを苦手のようにだ。

「織斑先生だ。もうSHRの時間だ。早く自分のクラスに戻れ。」

「今度は本当でした。」

「——ッ!? あんたねえ!! 覚えておきなさいよッ!!」

「その怒りを一夏へどうぞ。」

「なんでだよ!?!」

「しゃあしゃあとほざく茜雫に本気で殺気を覚える鈴に茜雫は一夏に流そうとする。」

「一夏だから。」

「意味わかんねえよ!?!」

即答する茜雫に更に驚く。

そんな理由で怒られたらどうしようもない。

「またあとで来るからね!! 逃げないでよ、一夏!! そのアンタもよ!!」

マジですか.....何だか面倒くさそう、茜雫は少しからかい過ぎたとほんの少しだけ反省。

しかし、それを上回るオモチャをゲットしたのだからプラマイでどっちかと言うとプラスだろう。

「さっさと戻れ。」

「は、はいっ！ー！」

千冬の最終宣告の前に気の強い鈴も物怖じし、二組へ向かって猛ダツシュしていった。

千冬に従わなければならないはみんなの共通理解らしい。

「大変だねえ。一夏君や。」

「いや、お前もだと思っぞ。」

しみじみに言う茜雫に一夏がツツコム。

「というかどちらかと言うと、センの方が大変になりそうだと思っぞ。」

一夏が忠告するが

「いや、俺が言いたいのは、そういう意味じゃない。」

「はあ？？」

鈴が一夏に好意を持っているのは茜雫の見たてでは確実だろうと思っっている。

実は茜雫は娯楽として見て楽しい修羅場を作るため『一夏八レム計画』を秘密裏に遂行している。



茜雫に好意を持っている筈も巻き込もうと思っっているあたりそのうち自分に返ってきてそうだが……………

「い、一夏さん？あの子とはどういう関係で……………」

「茜雫……………初対面の割りに随分したしそうだったな……………」

「あれ！？そこ、俺にきちやうの、ほくきちちゃん!？」

茜雫としては、ここで筈とセシリアが一夏に詰め寄ってくれば成功だと思っていたのだが、予想外にも自分に怒りの矛先がむいてしまうとは……………何故だ。

「お前ら落ち着け!!さつき織斑先生がSHRの時間だつてー!」

一夏がなんとか静めようとするが、

バシッバシッバシッバシッバシッバシッバシッバシッバシッ

「席につけ馬鹿ども。」

茜雫は頭をさすりながら、

「連射機能付きとは……………恐ろしい!」

ドゴシヤ

ボクサーもショックで退職しそうな鉄拳が落下してきた。

当分頭の災難は尽きななさそうだ……………

「痛てえ。」

「ちゃんと生きてる証拠だろ。」

心の内を見透かされた気がし動揺したが、

「はいはい。」

なんとか取り繕えた。

上出来だ

そんな自分を自賛してみた。



五話 中華娘（後書き）

前に評価してくれた人も新しく気に入ってくださいました人も評価ポツンをポチッと押してくださいと嬉しいです

六話 セカンド幼馴染(前書き)

つかれたー！ー！ー！

## 六話 セカンド幼馴染

――昼休み――

篤とセシリアは頭やこめかみの辺り痛そうにさすっていた。

その訳は一時限目の授業で千冬の講義中に二人は出席簿アタックを喰らっていたからだ。

篤は初対面の篤なのに、茜雫の幼馴染のような親しさに危機感と一夏の幼馴染は自分と茜雫の篤でないのか、と不信感を頭に巡らせていたところ千冬に指されたが答えられずに三回。

セシリアは一夏の親しげな、しかも代表候補という、自分と同じカードを持った鈴の出現に危機感を頭にし、何やらブツブツ呟いているところ千冬の呼びかけを無視するという蛮行を犯し、3回。

クラス全員が普段真面目に授業を聞いている筈とセシリアが冬の出席簿アタックを喰らったことに驚いていたが、本人に言わせれば、

「お前らのせいだ!!」

「一夏さんにせいですわ!!」

と言いつことらしい。

「……………そのお前らって俺も入っているのかな?」

「特にお前だ!!」

「何でなのさ!?!」

理不尽ここに極まり。

茜雫が予想外も単語に筈に訊き返すとまたまた予想外な答えが返ってきた。

「で、セシリアは何で俺限定なんだ?」

「一夏さんだからですわ!!」

「俺にどうしろと!!」

「こちらもこちらでなんと理不尽なことだ。」



なんだか茜雫にも同じことを言われた気がする。

現在、篝とセシリアは絶賛キレ気味である。

「待ってたわよ、一夏!」

鳳鈴音が食堂でラーメンを盆に載せて待っていた。

予告通りに待ち構えていたようだ。

茜雫は、一夏だけなんだラッキー、などと思っただら

「そのアンタもよ!」

.....どうやら逃がしてくれないらしい。

「とりあえず食券を買えないからどいてくれ。」

「ラーメン伸びちゃうよ。」

「う、うっさい! わかってるわよ!」

二人の正論に流石の鈴も引き下がる。

食券を買い、配膳を待つ列に並ぶ。

周りを見渡せばなかなか賑わっている。

後ろには篤とセシリア、そして最近よく一緒にいるのほほんさん一行が続く。

ちなみに今日も茜雫は日本食である。

茜雫曰く、国外に出ると最初は外国の料理の方が美味いと感じるが長くいると日本食を覚えい劑並みに食べたくなるらしい。

そんな訳でここ最近、と言うより毎食日本食しか食べていなかった。

それでもまだ飽きない。

「それにしてもし久しぶりだな。ちょうど丸一年になるのか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。あんだこそ、偶には怪我病気しなさいよ。」

「病気になれってどういう要望だよ、そりゃ……で、どうしてこっちに帰ってたのに、教えてくれなかったんだよ？」

「それじゃ、感動の再会にならないじゃない？」

「俺は涙が出る程のご対面だったよ。」

茜雫が横から会話に加わる。

「お前のは笑いすぎだ。というか、鈴、あれでなってたのか？」

「うっさいわよ！ あれは、アンタのリアクションが薄いからいけないんでしょ！？」

「いや、あんまりにも突然だったから驚いてたんだぞ？」

「俺もあんまりにもリアクションのいい奴が現われて驚いたんだよ？」

「アンタは黙ってなさい！」

やっぱりこいつ反応がいい。

生粋のツッコミ役だ。

頓珍漢なボケをかます一夏で苦労したのだろう。

「一夏、そろそろ説明してほしいのだが。」

「そうですね！一夏さん、こちらの女性とつ、付き合っただけじゃないの！？」

幕が普通に、セシリアが浮気を発見したかのように問い詰める。

茜雫はそんな二人を見て、

(あれっ!?!ほくきちゃんの反応が冷めてる!?!とうとう一夏に愛想を尽かしちゃったのか!?!ヤバイ、このままでは『一夏ハレム計画』が!?!)

などかなり勘違いな上にズレたことを考え、焦っていた。

「べ、べべ、別に付き合ってるわけじゃ……………」

これだけ焦ればバレバレだ。

「そうだぞ。ただの幼馴染だ……………なんだよ。」

「……………別に何でもないわよ」

途端に機嫌が悪くなる。

「?????」

一夏は全く分からないといった顔をしている。

それを見て、鈍感だなあ、とと思っている茜雫も箒の想いに気がつかないどころか箒が一夏のことを想っていると『一夏ハレム計画』に加えようと企んでいる辺りこちらのほうが質が悪い。

「幼馴染とはどう言うことだ。お前の幼馴染は私とセンではないのか。」

「あっ、それ俺も訊きたい。」

今後の計画も兼ねて

「そうか、箒とセンは初めて会ったのか、センが行方不明になって箒が転校した後、入れ替わりに転入して来たのが鈴なんだ。いふなればそう、こっちの箒とセンはファースト幼馴染で、鈴はセカンド幼馴染ってところか？」

何だよファーストって．．．．．初めて聞いたぞ幼馴染にファースト、セカンドつける奴．．．．．と思いつつちらつと箒を見るが特に反応がなく、むしろ疑問が解決してすっきりしている。

これには茜雫も

(ヤバイ、本格的にほくきちちゃんが反応しなくなった!? どうしよう!!)

などと更に焦る。

「どうしたんだ? セン、何か焦った顔して。」

茜雫の左手に握られている日本茶の入った湯のみが右に左にと微かに揺れている。

焦っている時に、いつもと違う仕草をした時は昔から何かがあると気だった。

「お前のせいだよ!」

「いやっ、だから何だよ!??」

なんだか最近、意味も分からず怒られている気がする。

「そんなことより、アンタって何者？男のくせにここにいるし、テレビでも見たことないし、一夏ともなんかしたしそつだし、ふざけた性格してるし。」

質問長いね、などと茜雫が思っていると、

「さつきも言っただろ、俺の幼馴染の沙月茜雫だよ。」

「名前はまだ訊いてないわよ……………って、沙月ってまさか——」

「そ、ここで教師をやってる沙月？先生の弟の沙月茜雫だよ。よろしく。」

「ああ、なんか納得。」

納得されてしまった……………

「……………何でかな？」

一応、訊いてみる。

「その性格とかふざけたイタズラとか……………」

「……………」

心外だ。

そこまでふざけたつもりはない筈だ。

あきらかにあの人の度はすぎてる。

台所に出たゴキブリを退治するために殺虫スプレーに火薬を巻きつけ爆破するような人と一緒にして欲しくない。

その後、かなり片付けが大変だった。

茜雫が遠い目で思い出していると、

「ちょっと、私をお忘れになられては困りますわ！私はセリシア・オルコット。イギリス代表候補生にして、先日一夏さんとクラス代表を賭けて戦いましたの。」

そこにセシリアが遅れるものと割って入る。

「あ、ゴメン、他国とか興味ないや。」

「な、何ですって!?!」

なかなかバツサリいうタイプらしい。

「ねえ、良かったらISの事教えてあげよつか？ これでも代表候補生なんだから、きつといい勉強になるわよ？ - - - - -  
- - - - -つてなにアンタは人の残してたチャーシュー食べてんのよ!?!」

ばれたか . . . . .

「食べたかったから、美味しそうだから。」

「露骨に答えるなあ!!！」

ではどうしろと……………

一夏と話してる鈴のラーメンのスープに浮いていたチャーシューを茜雫が素手で食べると鈴が吠えた。

手についたスープをぺろつと舐めた姿は猫みたいだった。

普段どちらかというといヌっばいイメージのある茜雫の別な一面が見れて一夏と篤は何故か得した気分になった。

「そんな必要はありませんわ!一夏さんには、代表候補である”私が”二人きり”で教えてさし上げると決まっています!敵の施しはうけませんわ!」

「何で決まってるんだよ……………」

身に覚えのない決め事に一夏がツツコム。

「なんですつてえ!」

これに鈴も臨戦体制でセシリアに挑む。

「……………ほくきちゃんは参加しないでいいの?」

茜雫が僅かに修羅場の期待を込めて訊くと、



「なにを言っている。一夏を鍛えるのは私とお前に決まってる。」

「いやっ、だからなんでもう決定してるんだよ!？」

「何で俺もなのかな、ほっきちゃん？」

「センは私たち三人の中で一番強かっただろうが。」

「俺は無視なのか？ 尊よ。」

一夏の特訓なのに、一夏の承諾のないまま話が進み更に無視までされる。

一夏、哀れなり

「うっさいわよ! この縦ロールドリル。」

「あなたも黙りなさい! まな板猫娘!」

「「なんですって?」「」

まだこの二人は喧嘩していた。

一夏の平和は空の彼方にあるらしい。

また賑わった食堂がさらに騒がしくなる。

食堂のおばちゃんが出動するまであと何秒だろうか。

茜雫はそんな光景を見て笑っている。

やっぱりここは楽しい

紛い物の自分の存在を忘れることができる

有限だと知っていても居場所がある

何もしなくてもいい

何も考えなくていい

いるだけで笑える

一番怖いことと隣り合わせだがここは気分がいい

ハイリスクハイリターンってやつだ

適用外何てあり得ない

ただ自分が少しばかり普通がハイリターンだからリスクの危険がデカイだけの話だ

それに失うのは慣れた

六話 セカンド幼馴染（後書き）

なんか修復めんどくせー！  
自分のせいだけど．．．  
てか、なんか読者数がすくない  
凹むぜ

## 七話 突きつけた挑戦

――放課後――

アリーナにて一夏のIS操縦特訓が始まった。

周りを見ても自分たち以外おらず、気にしなくていいから楽だ。

「どういうことですか？篠ノ之さん……」

セシリアが箒に怪訝そうに尋ねる。

箒は今、ISを身に纏っていた。

日本の鎧のような装甲に日本刀を下げている純日本製の打鉄は  
武人のような気質の箒には様になっていた。

「おお！なんか似合ってるよ、ほぐきちゃん。」

「う、うむ。ありがとう。」

茜雫に褒められて照れる筈。

「訓練機の使用許可が降りたんだ。今日からこれで一夏を鍛える。」

「くっ、まさかこんなにもあっさり和使用許可が降りるなんて  
.....」

セシリアは悔しそうである。

確かにまだ今年が始まったばかりで訓練機の使用申請が多い時期で1年生のしかも、別にISの熟練者でもないのにこれ程早く使用許可が降りることはないだろう。

本人に言ったら怒るだろうが、あの篠ノ之束の妹というのも大きく関係しているだろう。

「おい、セン、お前も専用機持ちなら早く展開しろ。」

ああ、そうかまだ言っていなかった.....

「俺のISはちょっと面倒なつくりをしているからまだ微調整が間に合わなくて済んでないんだよ。」

「なにっ!?.....いやっ、確かに仕方ないかもしれないな.....」

茜雫のISは束が弄ったと言っていた、なら束と3、4日しか

一緒にいなかったなら最終調整が終わっていないのも無理はないかもしれない。

「筈はそう思ったが、本当のところは東のせいで調整が必要となつたのだ。」

「でも、お前、整備室に行かなくていいのか？」

「ISの細かい設定や微調整は直接ISのアーマーを開いて弄ったりしなくてはいけない為、専用の機材が必要のはずだ。」

「俺のは少し特別製だから機体本体を細かく弄んでも微調整は出来るんだよ。」

「なんか．．．便利だな．．．それ。」

しかし本当にできるのかそれ．．．、と一夏は思ったが東が弄ったISならそれぐらいできるのかもしれない、と納得した。

「じゃあ、俺は客観的に訓練を見て一夏のバカでアホで間抜けなところを指摘することにするよ。」

「言いすぎだろ!？」

「ああ、では頼むぞ、セン。」

「．．．．．俺はまた無視なのか．．．．．」

「なんだか臉が熱くなった一夏。」

「では、一夏、始めるとしよう。」

「お、おう。」

近接ブレードを展開させて構える箒に一夏も立ち直って素早く白式を展開、箒と同じように構える。

二人はもともと同じ剣術道場で剣道をした為、構えがどこか似ている。

「お待ちなさい！」

しかし、セシリアのストップがかかってしまった。

「一夏さんのお相手をするのはわたくしでしてよ！」

どうやら箒が一夏の訓練をするのはお気に召さないらしい。

セシリアも自分の西洋の鎧のようなアーマーに2mを超す巨大なレーザー狙撃ライフルを携えた深海のような青いIS—ブルー—ティアーズを展開する。

おっ来るか、と少し離れたところで見えていた茜雫が期待を込めて成り行きを見守る。

「さあ、一夏。訓練を開始しよう。」

箒はISを展開したセシリアなど視界に入っていないかのよう  
に訓練を開始しようとする。



「お相手しますわ、一夏さん！」

すかさずセシリアも割って入る。

「いや、どつちだよ。」

これには一夏も困ってしまう。

流石に二人の相手は出来ない。

「貴様は引っ込んでろ！猫かぶりだ！」

「鬼を被っている貴方に言われたくありませんわ！」

収集がつかなくなってしまった。

二人のボルテージは更に上昇。

「おい！？お前は何でそんなに目を輝かせてるんだ。」

一夏が茜雫に助けを求めようとハイパーセンサーで茜雫の顔を  
確認すると、喧嘩している二人がヒートアップするに連れ茜雫の期  
待に満ちた顔をしている。

「いや、やっとで俺の『計画』が実を結びはじめたと思って。」

「何だよ！？計画って!?!」

いつの間になに企んでやがる

しかも、茜雫が企むことなんて怖すぎる。

そんな一夏をよそに喧嘩していた二人は舌戦から模擬戦となっていた。

「一夏!」

「一夏さん!」

模擬戦していた二人に同時に怒鳴られる。

「は、はい!？」

二人の凄い剣幕にまるで授業中に居眠りしていたところいきなり先生に指された生徒みたいに一夏は返事した。

「お前はどっちの味方なんだ？」

「貴方はどっちの味方ですか？」

またまた同じタイミングの質問に一夏はたじろぐ。

「いや、どっちかの味方したらお前から怒るだろ？」

「当たり前だ!」

「当たり前ですわ!」

打ち合わせでもしてるんだらうか、と茜雫は思った。

余りにも息が合い過ぎてる。

「俺にどうしろと!？」

一夏もヤケクソ気味だ。

最終的にキレた二人がタッグを組み、一夏と二対一になってしまいい、一夏はボコボコにされた。

もう日が暮れ始めて空が薄っすらとオレンジに染まりかけている。

「いい練習になったでしょ。」

疲れ果ててアリーナの地面に転がっている一夏に空を見ながら茜雫が微笑んでも笑っているとも取れる表情で言った。

昔から夕陽に染まった空と暗闇に浮かぶ月を眺めるのが好きな茜雫は調子が良さそうだ。

「……………お前……………こうなると予想して箒とセシリアを呼んだな……………?」

「うん。」

詫びる様子のない即答。

息切れ切れの一夏はさらに疲れが溜まったような気がした。

長い間会っていなかったがこういう聡いところは健在のようだ。

「……………完全に面白がりやがって……………」

「だって面白いし。」

……………このやろつまたしても即答か

「じゃあ、俺はもう戻るね。」

箒とセシリアはさっさとシャワーを浴びる為に更衣室に戻って行った。

茜雫は転がっている一夏を置いて踵を返しそのまま歩いて行った。

一夏は一番星の出始めた空を見て、そういえばあいつって何で昔からあんなに格闘に慣れてたんだ、と思い茜雫の歩いて行った方をもう一度見ると、

茜雫はもうそこにはもういなかった。

なんとなく一夏は不安になった。

一夏が着替える為に更衣室に入るとなんと鈴がいた。

鈴も一夏に気付き掛けよって来た。

「お疲れ、一夏。」

そう言っで一夏にタオルを突き出す。

「飲み物はスポーツドリンクでいいわよね。」

「なんだお前、ずっと待っててくれたのか？」

そう訊きながら手渡されたペットボトルを受け取る。

だとしたら、何か申し訳ない気分になる。

「まあね、・・・・・・・・・・・・・・・・一夏さ、やっぱり私がないと淋しかった？」

躊躇いがちにそんなことを訊いてきた。

ズケズケいう鈴にしては珍しい。

「まあ、遊び相手が急にいなくなって淋しかったな。」

その前に、茜雫が消えた後箒も引越したから、鈴もいなかったのもなかなか堪えた。

「そうじゃなくてさ。」

しかし、何やら鈴は不満そうだ。

「久しぶりに会った幼馴染なんだからいろいろと言つことあるでしょ？」

「そうだ、大事なこと忘れてた。」

一夏が思い出したように言う。

鈴も驚きながらも少し期待する。

「中学の時の友達に連絡したか？お前が帰って来たって聞いたら喜ぶぞ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

やっぱり一夏だ。

なんとも外的外れで期待はずれなズレた答えである。

中学の時から鈍感鈍感と常に思っていたが一年たっても何も変わっていない。

これには鈴もガツクリくる。

「体が冷えて来たから部屋に戻るわ。篝もシャワーを使い終わった頃だし。」

「シャワー？」

一夏の不可解な単語に鈴が反応する。

「篝ってさっきのあの子よね？どつ言うつ関係なの！？」

鈴が必死に問い詰める。

「なにつて、幼馴染だよ。ファースト幼馴染。で、お前がセカンド幼馴染。」

やはり間違っていないがズレた答えを出す。

「幼馴染とシャワーになんの関係があるのよ！」

やっと一夏にも伝わったらしい。

「今俺、箒と同じ部屋なんだよ。」

「はあ!?!」

もう鈴にはわけが分からない。

今こいつは男女同じ部屋で住んでいるといったのか?

「部屋が用意出来なかったんだと。」

慌てる鈴と对象的に普通に答える一夏。

「でも、箒で助かったよ。これが見ず知らずの相手だったら緊張して寝不足になっちまうからな。……………ん?どうした?」

急に下を向いて黙り込む鈴を心配して一夏が訊く。

「……………幼馴染だったらいい訳ね……………一夏!幼馴染がもう一人いることを覚えてなさいよ!」

そう宣言して走り去る鈴を一夏は呆然と見送るしかなかった。



「・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんでこうなった？」

一夏はシャワーを浴びたあとなんか騒いであると思ひ、シャワー室から出ると二人の女子が言い争っている。

なんでもいきなりポストンバグ一つ持った鈴が部屋に押しかけ箒と交代しろと言ってきたらしい。

それに対し箒は中途半端な時に見ず知らずの人間と同室になるのも困る。

それに茜雫の近所だというのに恐らく離れてしまうのは嫌という理由から絶対に引かなかった。

更に激化する舌戦に箒はとうとう竹刀を降り下ろした。

素早く鈴は部分展開したISの腕部装甲で防ぐ。

そのまま鏝迫り合いと睨み合いが続くと・・・・・・・・・・

「お祭りの会場はここかぁー！ー！ー！ー！」

ひゃっほ〜〜！とでもいうような勢いでドアを蹴り開けて侵入してきた茜凜に

「一番厄介なのが来ちゃった！ー！ー！ー！」

と一夏は両手で顔を覆い悲観する。

「おおー！」

とテンションあげあげで騒いでる茜凜に

「「ふんっ！」」

ドグシヤッ

鏝迫り合いのまま振られた木刀とISの腕部に茜凜はベットの脇の電気スタンドを巻き込みながらアクション映画のように叩きつけられ、そのまま動かなくなる。

一夏は、ヤバイんじゃないの、と思いつつもあることに気付く、

「ああ！？俺の電気スタンドじゃねえか！？」

弁償かなそれとも書類の束書けばいいのかな、などとこれから待ち受ける未来にもう一度悲観した。

千冬に怒られるかもしれない。

一番怖え。

「一夏・・・・・・・・・・約束覚えてるわよね・・・・・・・・・・  
」

鈴のドスの効いた問いかけに一夏は気後れしながらも思い出す。

「ああ、確か鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を――――」

「そう、それぞれ」

鈴が期待に満ちた表情をする。

「おごってくれるんじゃないかっただけ・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

これには篝も鈴のことが可哀想に思えた。

料理の腕が上がったら毎日酢豚をおごってくれるって意味が分からん。

パチン

鈴が一夏に張り手をした音だ。

「最っ低！！女の子との約束も覚えてないなんて犬に噛まれて死ねっ！！」

「な、何だよ……………鈴。」

これに一夏もたじろぐ。

「約束の意味が違う！！」

「うっさい、貧乳！！」

一夏は反射的に鈴のコンプレックスを攻撃。

ドカッ

壁に響く鈍い音。

見れば展開されている腕が壁を叩き半径30cm程のクレーターができている。

「言ったわねえ!!」

「わ、悪い!今は俺が悪かった!」

「全部あんたが悪いのよ!クラス対抗戦、覚えてなさいよ!」  
そう吐き捨てて鈴は部屋から弾丸のように猛然と出て行った。

「……………いつてしまった。」

二つの意味で

「近接格闘型のパワータイプ、多分防御力も高いね。鳳さんの性格からかなり攻撃的なIS何じゃない?なかなか手強い相手だよ。」  
一夏。

何時の間にか復活した茜雫が冷静に壁のクレーターを指でなぞりながら言った。

「……………どうしよう。」

「まあ、がんばれ。」

不安になる一夏にありきたりなエールを送った。

「一度死ね、一夏。」

「酷いぞ!? 篤!?!」

――後日――

電子掲示板前には人だかりができている。

流石に女子の人だかりに混ざれない一夏と茜雫は遠くからそれを眺めていた。

「なんか運命だと思わない?」

「いじめてるようにしか思わない。」

楽しそうな茜雫と対照的にウンザリした様子の一夏が電子掲示板を見ている。

二人の目線の先にあるクラス対抗戦の対戦表には、

一回戦

鳳鈴音対織斑一夏

と書かれていた。

七話 突きつけた挑戦（後書き）

ヤバイ

テストが迫ってる

更新が出来なくなるから早くせねば



八話 親友の教練（前書き）

んゝなんか読者数が戻らない

八話 親友の教練

一夏はクラス対抗戦前に頭を抱えていた。

「ああ、どうしよう。」

一夏は完全にご立腹中の鳳鈴音と戦うことが分かってからずっと唸っていた。

正直、見ててかなりヘタレみたいだ。

「どうするも何も戦うしかないよ。」

「……………勝てるかな……………」

一夏は茜雫に不安そうに呟くように訊く。

「殺されるんじゃない?」

「勝つ負けるとかじゃなくて!?!」

……………まだ死にたくない

「ほっきちゃんはどう思う?」

同じく、ヘタレ化している一夏を眉間にシワを寄せて不甲斐なさそうに見ている筈に訪ねる。

「中華料理にされて捨てられるんじゃないのか。」

「ああ、確かに酢豚の腕が上がったっぽいこと言ってたね。どうするの？このままじゃ酢豚だよ、一夏。」

「料理されちゃうのか……………俺。」

なんか他人事のように現実をあきらめている。

茜雫は、一夏が中国特有の幅の広い巨大な中国刀でサササツとコマギレにされて怒りの炎でパラパラと炒められて一夏チャーハンの出来上がり、みたいな想像をしてしまう。

「……………そっちもありませんか。」

「何がだよ!？」

急に黙り込んで考え事を始めたと思ったら茜雫がいきなりそんなことを呟く。

一夏はそれが何なのかとても気になる。

こいつが何考えているかがかなり怖い。

「まあ、今日からクラス対抗戦まで特訓だ。」

「何を言っている、セン？一夏ならいつも私とお前が鍛えてい  
るではないか？」

篤が不思議そうに訊いた。

「センはいつも見ているばかりだけだな。」

というより一度もまともに参加していない。

いつも一篤とセシリアが一夏をランチしているのを遠くから眺  
めて笑っている。

完全に娯楽としてしか見ていない。

あつ……………なんか思い出しててだんだん腹が立って  
きた……………

「今日から俺も本格的に参加して一夏を鍛える。」

「あれ？お前の専用機もう調整が終わったのか？」

「まだ。」



「ええ!？」

一夏はあれ以上にさらには打ち込みをしろと言う茜雫に批判を込めた視線を送る。

「しかしなんで生身の訓練なんだ?あの女と闘うのは生身ではなくISなのだぞ?」

篤が一夏に助け舟を出す。

確かに鈴とは格闘戦をするかもしれないが生身ではなくISですることになる。

まだ機体操縦に慣れていない一夏が弱いならば、長く操縦して少しでもなれる方がいいに決まっている。

しかし、茜雫はその一般論を切って捨てた。

「それは一夏がまだ白式に頼った戦い方をしてるからだよ。」

確かに一夏は白式の高機動性を活かして相手の振り回し隙をみて一気に接敵し接近戦に持ち込む戦い方をする。

しかし、その際白式の高い機動性に振り回されたりしていた。

「一夏はまだ白式を道具として使っているからね。武器と同じで体の延長線として使わないと弱いままだよ。」

ある言葉に一夏が反応する。

弱いー今まで千冬に守られてきた一夏にとっても返上したい言葉だ。

一夏にとつて千冬や？、茜雫の強さは憧れだった。

特に茜雫は同い年だったので昔も今も目標だ。

「しかしそれなら尚更ISの訓練をしなければならぬのではないのか？」

また篤がご尤もな質問をする。

これにも茜雫は即座に答える。

「ISの機動はそんなすぐに体が覚えることじゃないからね。ならせめて基礎身体能力と代表候補生の鳳鈴音を超える近接格闘能力を身につけないと。幸い一夏はもうほくきちゃんに刀の基礎は教えて貰っているから今度は俺が応用を叩き込むから。」

なんだか叩き込むってなにされるか怖い。

「それにほくきちゃんも最近剣道部に顔を出してないからついでに。」

確かに最近篤は一夏の訓練をしていた為、部活に参加していなかった。

「確かにそうだが………」

「というわけで剣道場に………Let」

.....なんでそんな発音が完璧何だよ

「おい、茜雫。早く準備しろよ。」

今一夏達は剣道場の一角を貸して貰っている。

周りには剣道部のギャラリーがズラリと並んでいた。

まだ一度も闘うところを見せたことのない二人目のIS男子操縦者の実力を一目みようということだ。

一夏と茜雫は袴姿着替えたが、茜雫は木刀を掴むとさっさと何時の間にかに貸切状態となった剣道場の中心に立った。



「お前なんで木刀何だよ、竹刀だろ。それに防具もちゃんと着けないと危ないぞ。」

一夏は防具も着けずに竹刀ではなく、木刀を掴んでいる茜雫に注意する。

しかし

「いや、防具は着けなくて特訓ね。あと、竹刀じゃなくて木刀でするから。」

茜雫の爆弾発言に剣道部含めた全員が驚く。

確かに竹刀は軽い竹でできており威力はあまりないが、それでも使い手次第では十分な威力となりかなり痛い。

それを茜雫は防具無しの竹刀より重く遥かに威力の大きい木刀で打ち合いをするという暴挙に出た。

「ちょ、ちょっと待って？沙月君？」

流石にのんびりとした雰囲気、剣道部部長もストップをかける。

「何ですか？剣道部部长さん？」

少し慌てた様子の部長さんと対象的に茜雫は普通に返事する。

「本気？」

「はい？何がですか？」

茜雫は本当に不思議そうに訊き返す。

「いやね？木刀で打ち合いをするのはね？危ないと思うんだけど？それに防具無しっていうのもダメなんじゃないかな？」

「いいんじゃないですかね？一夏なら？一度死んだぐらいが？」

なんとも疑問形が多い会話だ。

しかし、内容はかなり怖い。

「うおい！？死んでもいいって何だ！！」

聞き捨てならない会話に一夏が反応する。

「冗談だよ、冗談。」

その言葉に皆がホッとする。

「でも、防具無し、木刀で打ち合うのは本当だからね。」

「本当なの！？」

一番ホッとした一夏にはダメージが大きい言葉だ。

「何でだよ、危ないだろ！！」

堪らず一夏が茜雫に訊く。

「ISで闘う時は防具なんてほとんどないでしょ。体の重要部位なんてISスーツしかないし。」

「シールドバリアや絶対防御があるではないか？」

篝も訊いてくる。

「あのね、そんな便利なものがあるって前提で闘うと絶対回避が甘くなるんだよ、特に一夏みたいにバリアさえあれば多少当たっても大丈夫だと思って突っ込む奴は。」

「ぐっ!!」

これには一夏も痛い。

前のセシリア戦も模擬戦も一夏はある程度、被弾覚悟で銃火の中を強行突破することが多い。

「シールドバリアは勿論、その名の通りあらゆる攻撃を防御する絶対防御も必ず防御出来るわけじゃない。エネルギーが少なければ簡単に突破できるんだよ。これは特に白式に言えることだからね。」

茜雫は一夏の方を向いて諭すように言う。

確かに白式によく言えることだ。

核爆発も防げるという定評の絶対防御はエネルギーの大量消費をすることで機能する。エネルギーの少なければ当然防御力も十分

に發揮することは出来ない。

白式の零落白夜のようなあらゆるエネルギーを消滅させるイレギユラーだって存在するかもしれない。

そんな時、バリアに頼って回避が出来ないようじゃダメだということだ。

更に白式の零落白夜は絶対防御と同じく、エネルギーの大量消費をすることで機能するので被弾すればバリアの為に無駄なエネルギーを消費し、白式の最大の特徴で切り札でもある零落白夜を使うことが出来ないのだ。

「分かった？」

茜雫が確認するように訊く。

「ああ。」

「こう言われれば納得するしかない。」

実際茜雫のいつている事は全体的を射ている。

白式を十二分に使いこなすには今言われたことは大事な事だ。

「夏も覚悟を決めて返事し、茜雫と同じように木刀を持って防具無しで剣道場の中心に行く。」

「勝ち負けは………?」

一夏がさっきの慌てた状態と違い、落ち着いた感じで尋ねる。

その様子を茜雫は満足そうに見る。

「本当の実戦で勝ち負けが決まるまで……その判断をほつきちゃんよろしく。」

まるでお使いを頼むかの様に茜雫は箒に頼む。

「はぁ……分かった……怪我だけはするなよ……」

箒も諦めたように渋々承諾。

「……いいのかな？篠ノ之さん？」

部長さんが若干心配そうに尋ねる。

「どうせ止めても聞きませんから……あの二人は。」

箒は部長さんの問いにかぶりを振って答える。

茜雫も頑固だが一夏も覚悟を決めると頑固になる。

というより二人共自分の考えを貫き通すのだ。

特に茜雫は相当な理由がない限り絶対に譲らない奴だった。

「じゃあ、行きますか。」

「おう!」

茜雫の始まりの合図に一夏が自分を鼓舞するかのように返事する。

距離は3m弱

一夏は篠ノ之道場で習った型道理の中段の正眼の構え。

対する茜雫は構えも何もなく正面を向き、腕をダランと下ろしている。

剣道場は何もないかのように静かだ。

石像のように身じろぎ一つしない茜雫に一夏が攻め方に迷ってしまう。

と、いきなり茜雫がステップを踏むように軽くその場でジャンプした。

何も動かなかった静かな状態での不可解な行動が一夏の思考に隙間を与えた。

茜雫が着地し、衝撃を殺すように膝を曲げた瞬間、

一夏の目の前に左手で木刀を上段から振り下ろそうとする茜  
雫がいた。

「……………ッ!!」

咄嗟に木刀を横にして防ぐと手に高圧電流が走ったかのように  
痺れた。

反射的に目をつむってしまふ。

防がなければ間違いなく頭蓋骨を叩き割られて死んでいた。

あの速度で振り下ろされればいくら斬れなくても結果は真剣と  
変わらないだろう。

上段から振られたのに対し中段の正眼の構えで構えていたから  
良かったものの、もし下から振られたらどんなに反応できても足、  
最悪金的を確実にやられていた。

それをやらなかった茜雫に手加減されていると気づき一夏は齒  
噛みする。

と、同時に茜雫の右掌底打が一夏の顎を強襲した。

ギリギリで顔をズラし完全に決まるのは避けられたが、完璧に  
よけることは出来なかった。

何とか踏ん張って耐えたが、不完全で目が霞むくらい威力にまとも喰らった時を思うとヤバイと冷や汗をかく。

「一夏、目を瞑ったらダメ。しっかり目を開けて見ないといけないよ。」

反射的に目を閉じるのは人間の本能だが、目を閉じるのは情報の7、8割を視覚で頼っている人間にとって詳細な情報を捨てているのと同義だ。

特に勝負では一瞬の判断ミスが勝負を分ける。

一夏は体制を立て直す為に大きく後ろに跳ぶ。

茜雫はそのまま突進するかのように左手で木刀を大振りで横薙ぎに振るう。

一夏は左下段に木刀を構え、一閃二断で迎え撃つ。

一夏の渾身の力で振り上げられて迎え撃った木刀が茜雫の木刀をに触れた瞬間、茜雫は手首の力だけ抜いた。

「……………いつ!？」

木刀同士がぶつかった瞬間、押す力の無い茜雫の木刀は弾かれ、手首を軸に時計の様に回りそのまますれ違いざまに一夏の胸を叩く。

茜雫は胸に当たる瞬間に力を込め、そのまま一夏を弾き飛ばす。



一夏が床を1mほど滑る。

滑った跡はフローリングされたみたい綺麗になっていた

茜雫が木刀で肩叩きしながら倒れている一夏に近寄る。

「大丈夫、一夏？」

うづくまる一夏はその返事として木刀を無造作に振った。

「危なっ！！」

が、あっさり避けられる。

「……………まだだ……………まだイケる……………」

茜雫はチラッと筭を見たが特に反応なし。

続行OKらしい。

なら少し強めにいっても大丈夫かな、と茜雫は一夏をどう叩こうか思案した。

茜雫は今度は左半身をこちらに向け、左手に握られた木刀を床に垂らすように下げて待つ。

一夏は意味の解らない構えにまた攻め方にまた迷ってしまう。

茜雫の闘い方が不規則予測不可能過ぎて対処法が頭の中でヒツトする気配がない。

が、待っていたらどうせやられてしまう。

あの剣速を捌き切る技量と経験は一夏にはまだない。

なら自分から仕掛ける。

攻撃は最大の防御ってやつだ。

今度は先手必勝とばかりに一気に踏み出し茜雫の背中側から中段の横薙ぎに木刀を振るう。

身体を傾けた状態の背中側に攻撃。

一番対処の難しい攻撃のはずだ。

茜雫は避けることも防ぐこともしない。

ただ、観察するように鎮まった水面のような目でその太刀筋を見ている。

その時考えられないことが起こった。

茜雫は左手の木刀を手放した。

そして、振るわれた一夏の木刀の腹の部分をを左手で下から叩き、強引に進路変更をした。

「……………ツ!?」

見ていた全員が驚愕する。

確かに刀は進路上の力には強いが横方向には弱い。

横方向に力を加えれば向きを変えることは不可能でも無い。

が、問題はタイミングだ。

タイミングが少しでも狂えば間違いなく大怪我では済まない。

タイミングが早ければ指の骨は確実に文字どおり粉碎されるか最悪千切れ飛ぶ。

逆に遅ければ木刀で背中側の肋骨の根元が折れ、内臓の刺さるかもしれない。

あり得ない直感とそれを絶対に目を逸らさない強靱な精神力、そしてそれを一瞬で判断して実行する決断力が必要である。

茜雫はまだ床に倒れきっていない木刀を右足で蹴ると手品の様に左手に吸い込まれた。

アップercutして空振りした野球選手のような体制の一夏の

鳩尾に茜雫の木刀の柄がめり込んだ。

一夏は体に力が入らなくなり倒れた。

目が霞んでいる一夏は見下ろす茜雫の表情を見て驚きながら気を失った。

茜雫の表情は氷土のような絶対零度の暗い目をしていた。

九話 死刑宣告（前書き）

いろいろやべえ

テストが近いし修復が終わらない

## 九話 死刑宣告

一夏は周りの騒がしさに目を覚ました。

「おっ、一夏。目が覚めた？」

目を開けると剣道場のやたら赴きのある天井を背景に相変わらず飄々とした表情の茜雫とホツとした表情をした箒含む剣道部の面々が一夏の周りを囲んで覗き込んでいるのが見えた。

一夏は少しの間ぼーっとしてようやく覚醒すると、まず茜雫の顔を見た。

いつもど通りの掴みどころのない飄々とした表情。

大丈夫さっきのはただの見間違いだ、そう自分に言い聞かせて安心する。

「どうしたの、一夏？俺の顔をそんなに見つめて……  
あつ、もしかしてアツチに目覚めちゃったとか……  
……だとしたらこれからの付き合い方考えないといけないね……」

茜雫がふざけた戯れ言をほざく。

すると、一部の女子が騒ぎ始めた。

「ええ〜織斑君そうなんだ〜」

「これは中学校の友達関係を全て洗わないとね！！」

などの声がちらほらと聞こえる。

……このやろっ、お前のせいで不名誉なレッテル貼られたじゃねえか……

一夏はいつか必ずやり返すと心に誓った。

かなり確率は低いが……

一夏は剣道部員に止められたが気にせず身体を起こして自分の状態を確認する。

身体がかなり重くだるい。

鉛でもいれてるかのようだ。

特に腹の痛みと嘔吐感が酷い。

気を抜くと今にも吐きそう。

よく気絶したとき吐かなかったものだ。

吐いてたら今頃一夏は凄惨な顔をしていただろう。

「保健室に行く？」

「そんなやわじゃねえよ。」

茜雫の提案を即座に断り、立ち上がった。

このぐらいでへこたれているようじゃあの織斑千冬の弟なんて名乗れない。

最大の目標である千冬になんて一生追いつけるはずがない。

とりあえず、このままやってもただ身体を傷めるだけなので回復するまで休憩する事にして、壁際に移動した。

気絶した時に何処か打ったのか歩くと節々が痛んだ。



剣道部員も見世物は終わったとばかりに個々に部活の練習を始める。

気合の入った声が普通校よりも設備が良く広い剣道場に木霊す。

本来なら箒も混ざらなければいけないのだが、聞きたい事があるのか、入部して殆ど幽霊部員だった為入りづらいのか後ろをついてくる。

一夏は人付き合いの苦手な箒を少し心配したが、茜雫は箒の意見も聞きたかったので特に何も言わなかった。

「お前、強すぎ。どうしたらそんなに強くなれるんだ？」

剣道場の隅に座るなり一夏が手っ取り早く茜雫に訊いてくる。

一夏も未熟なままの自分に焦っているのだろう。

それにずっと剣を握ることから離れていたため昔は実力が五分だった箒にも負けっぱなしだ。

男子としてこれは少し恥かしい。

茜雫は昔から同世代の中では年上にも負け無しだった。

小学2年の茜雫が急に沙月？の弟として現れた頃、箒を男女と虐めていた奴等を一夏が殴り倒した事があった。

虐めていた奴等は自分たちの兄を連れて報復にきたのだが、茜

雫は高学年の奴等2人相手にしても数秒で返り討ちにする程強かった。

その後、千冬に死ぬ程怒られたが……………

まあ、それが3人が親しくなったきっかけとなったわけだが。

それからというもの一夏にとって茜雫は親友であり身近な目標となった。

「どうしたらって言われても……………」

珍しく茜雫が口籠る。

本当に分からないのかもしれない。

「強さっているいろいろあるしね……………まあ、

闘う為の強さなら経験、センス、あとは覚悟の差で決まるね」

「経験、センスは仕方ないとして身体能力とかじゃなくて覚悟ってどういうことなんだ？」

一夏は特に考えずに思ったまま質問する。

篝もあれだけの強さを持った茜雫の話に興味深そうに黙って聞いている。

「例えば、刀同士で斬り合いをするとする。そのときいろいろな覚悟が必要なんだよ。相手の刀を防ぐなら絶対に防ぎきる覚悟。かわすなら絶対にかわす覚悟。相手の斬るならお前を斬る覚悟が主

に必要になってくるね。」

それを聞いて一夏と箒はなるほど、と納得する。

確かに相手の刀を防御するなら受け止めるか避けるかしなければならぬ。

そんなとき中途半端な事をすれば斬られてしまう。

逆に相手を斬るなら相手に近づき刀を振るわなければ避けられてしまうだろう。

「覚悟を決めるって、言うのは簡単だけど実は一番難しいからね。人は咄嗟に考えて反射的に躊躇ったりするからこれは場を踏んで馴れるしかないと思うよ。たまに肝っ玉が凶太くて簡単に出来る人がいるけどね。」

まさにお前だな．．．．．一夏と箒はいろんな事を器用にこなす茜雫をみて同時にそう思った。

いろんな場面で凶太いし．．．．．

「しかし、お前も少しペースを考えた方がいいのではないのか？このままでは一夏が粗大ごみになってしまっぞ？捨てにくいのは同室の私になってしまっではないか。」

「おおっ、幼馴染の痛烈な言葉が心に滲みるぜ。」

なんだか臉が熱くなって目から汗が出てきた。

シューーーーーー

「うおっあああああいてええええええええええ!?!」

いきなり茜霽にゴールドスプレーを目にかけられた一夏は奇怪な叫び声とともに、ゴロゴロ転がったのたちまわった。

ホームアローンで出てくる子供に撃退される泥棒みたいな凶だった。

「何すんだよ!?!イテエじゃねえか!?!」

「いや、なんか目頭が熱そうだったから、冷やそうかと思って  
.....つい。うっかり。ちゃっかり。」

絶対ついじゃない確信犯だ。

てか、ちゃっかりって言ったぞこいつ。

「目頭って瞼だから！？今の眼球だっただろ！！凍りついて失  
明したらどうすんだよ！！」

騒ぐ一夏に剣道場全員の視線が集まる。

視線に物理的な力があつたら身体中に穴が空いているだろう。

箒はその場をいったん離れ、他人の振りをした。

(俺を見捨てたな、ほろきちちゃんよ。)

明らかに茜雫一人が悪いのに、視線という銃弾から一人退避し  
た箒を少し恨む。

なんとも世知辛いなことだ。

「まあまあ、一夏もちつけよ。日本離れてたから目頭がわか  
なかつただけだって.....それにそろそろ周  
りの視線が痛いから。」

「餅なんかついてどうすんだよ！？てか、お前が原因だから！  
？」

「一夏、とりあえず静かにしろ。あとセンもふざけてないでさっきの質問に答えろ。」

一夏は俺がいけないのか．．．、と軽く落ち込むが急ぎすぎともとれる茜雫のなかなかのハイペースな練習法に実際それを実行される側として茜雫の考えを聞きたい。

訓練するのは他人ではなく自分なのだ。

「まあ、．．．強くなるなら早いほうがいいでしょ．．．それに一夏が未熟なままだといういろいろ困るし、．．．いざつてときのために保険としてね。」

なんだか茜雫らしくないまごまごとした言い方だった。

しかし、いつだって千冬や？などの闘いの熟練者が守ってくれるとは限らない。

いくら自分達が肉親だからといって千冬と？はIS学園の教師だ。

時には、自分達以上に優先しなければならない事もあるだろう。

当然そんなときは自分で自分を守らなければならない。

時としては、自分以外も

特に世界で二人しかいない男子IS操縦者の一夏は尚更だ。

それに今現在外部に二人目の茜雫の存在を知っているものはほぼといても良いだろう。

一夏と箒はそう結論づけた。

何かあるときは、専用機持ちの自分が皆を守らなければいけない、一夏は自分自身に活を入れる。

「うしっ！！セン、始めるぞ！！」

「……………いいよ。」

急に一夏のやる気が全開になったのを茜雫は少し驚いたように見ると、微笑んで返事した。

その後、茜雫の二人の予想を遥かに超える容赦ないハードな数日間で一夏はグロッキーになった。

## アリーナ控え室

「よし、一夏よ。今日こそお前の眠れる力を解き放つのだ？」

クラス対抗戦当日の今日、一夏達3人はアリーナ控え室で待機していた。



3人しかいない控え室で茜雫が高らかと宣言をする。

実際戦わない茜雫は輝かんばかりにテンションあげあげだ。

なんか輝くオーラのようなものが迸っている。

正直、すごく眩しい。

「……………いや……………無理……………  
……………数日で……………全て……………出し切  
……………っちまった……………」

今だグロッキー状態から抜け出せない一夏。

なんだか顔が病人みたいにやつれてしまっている。

今の一夏はサンサンと輝く茜雫の直射日光が辛い。

「一夏、なんだその腑抜けた顔は！！茜雫と私がせっかく鍛えてやったのだ、気合をだせ！！」

おお箒よ　なんと漢らしい姿だ

男より漢らしいというのは、本人が確実に気にしてることなので口には出さない。

あとついでに最近、近接格闘の訓練ばかりで、参加不可能だったセシリアもISの機動について鍛えてくれた。

これには確かに感謝しなければならないが、キツイものはキツイ。

それに対戦相手の鈴の事も気になる。

「あつ、ほきちゃん、ほきちゃん。こんなときに織斑君は女の子の事、考えてるよ。」

「なに？……一夏……この期に及んでそんな不埒な事で頭がいっぱいなのか……？」

ここで茜雫がこちらの考えを余計な言い方で暴露する。

幕の静かな問いがかなり怖い。

「た、対戦相手の鈴のことだよ。どうしようかなくて。」

両手をメトロノームのように左右に振って一夏が必死に弁解するが、

「あつ、ほきちゃん、ほきちゃん。こんなときに織斑君は鳳さんに勝つたら手籠めにする事考えてるよ。」

「なに？……一夏……お前はそこまです堕ちたか……下衆が。」

「ちよつと待てえ！？人聞きの悪い冗談はやめろ！！てか、幕もいちいち真に受けるなよ！！お前の中じゃセンの言葉はどれだけ力を持つてんだよ！！」

「お前の数千倍。」

「即答？しかもそんなに差が？」

無理じゃん勝てないじゃん。

「そんなことじゃなくてあの約束のことだよ。」

茜雫がいきなり入り口を向いて手でメガホンを作ると

「鳳さん、一夏が呼びだよ。」

「「はあ？」」

いきなりなにを言い出すんだ、と思っていると、

「……………あんだ、いつから気づいてたのよ？」

控え室の入口からバツ悪そうな表情をした鈴が入ってきた。

「入口に立ってそわそわし始めた頃。」

「してないわよ！！」

茜雫は久々に鈴を弄って更にテンションが上昇して、血色最高である。

なんだか控え室の白い壁が黄色くなり、ロッカーの隅に影が伸びてるように見えた。

LEDみたいだ。

「で、何しにきたんだ、鈴？」

一夏が好い加減、進路修正をする。

このままじゃ話が進まない。

「……………で、一夏。反省した？」

「へ？何が？」

本気で不思議そうだ。

「本気でいつてるのか？一夏……………？」

流石の茜雫も頓珍漢一夏にツッコム。

反省と言えばおそらく約束を忘れていたことだろう。

だが、一夏は何のことかわかっていないようだ。

「頭が大丈夫なのか、こいつは？」

冪も呆れる

いい放題 言われ放題

一夏リンチ状態

「だ、か、らっ！！あたしを怒らせて申し訳なかったなーとか、仲直りしたいなーとか、あるでしょうか！！」

鈴も激怒。まあ、仕方ない。

「いや、そう言われても．．．．．鈴が避けてたんじゃねえか」

アホー夏気づかず

「あんたねえ．．．．．じゃあなに、女の子が放っておいて  
って言ったら放っておくわけ！？」

「おう。」

唐変木自爆発言．．．．．これはもう自爆テロだ

ここは素直に謝っておくべきだと思っ。

「何か変か？」

本当に人間か．．．．．コイツ．．．．．

「変かって．．．．．ああ、もうっ！！いいから謝りなさいよ！！」

「だから、何でだよ！！約束覚えてただろうが！！」

鈴の理不尽な物言いに一夏も自然と熱くなる。

「あつきれた。まだそんな寝言いつてんの!? 約束の意味が違うのよ、意味が!!--どうあっても謝らないっていう訳!?!」

更に激怒する鈴。

「だから、説明してくれりゃ謝るっつーの!!--」

「せ、説明したくないからこうして来てるんでしょうが!!--」

しかし、一夏の反撃に怯む。

あんな告白同然のこと説明出来るわけがない。

「いいわよ!!--そこで勝った方が負けた方に何でも一つ言うことを聞かせられるってことでいいわね!?!」

「おう、いいぜ!!--勝ったら説明してもらっつからな!!--」

「せ、説明は、その.....」

急に凰の顔が赤くなる。

「何だ? やめるならやめてやってもいいぞ?」

「誰がやめるのよ!!--あんなこそ、あたしに謝る練習しておきなさいよ!!--」

「なんでだよ、バカ!!--」

「バカとは何よバカとは！！この朴念仁！！間抜け！！アホ！！バカはアンタよ！！」

ガキかコイツら……………今時の小学生ならもっと高度な言い争いをする。

いっただけ言い争うと鈴は憤然と去って行った。

「勝たないと死ぬんじゃない？一夏酢豚が一夏チャーハンに調理されて。」

「というか、お前は一度死ぬ。一夏。」

「酷いぞ、お前ら！？」

どんなエールだそれは！？

少なくともこれから闘いにいく幼馴染にかける言葉じゃない。

とりあえず試合が始まるためピットに向かう。

負けたら死刑になるかも。

足取りは重い。

よ。  
「葬式の手続きは俺とほぐきちちゃんが責任もってしっかりやる  
なつ、しっかり逝ってこい、一夏!!」

「ああ、大船に乗ったつもりで任せろ!!」

.....やめてくれ





九話 死刑宣告（後書き）

数学のコツってなんですかね  
だれかヘルプ

十話 戦闘での注意事項（前書き）

つつかれたー！

## 十話 戦闘での注意事項

「なあ、俺って勝てるかな？」

「まだそんなこと言ってるのかよ。少しくらい自身持ったらどうなんだ？ヘタレか、おまえは？」

白式を展開しながらまだ不安そうに一夏に茜雫は呆れてしまふ。

「男ならしっかり気合を入れたらどうなのだ!!」

菓が喝を入れる。

一夏たち三人は今、試合前のピットにいる。

「いや、だつてなあ……………最近の厳しい特訓で少しは強くなったって自身はあるけど……………なんか試合前からかなり疲れちまつてるし、一番心配なのが鈴のことなんだよなあ……………」

今、クラス対抗戦の対戦相手である鈴は一夏に対してかなり気が立っている。

原因である一夏が頓珍漢の鈍感男のため事態の沈静化は不可能だった。

あそこで何でもいいから謝罪の言葉を並べていればまだマシだったのに……………

フルボッコで済めばいい方だろう。

その可能性はかなりすくないと思われるが……………

今、一夏は本気で生命の危機にたたさされている。

もし負けでもしたら古くから中国に伝わる秘伝法で一夏は調理されて酢豚になってしまう。

しかし、茜雫としては一夏チャーハンを所望している。

だが、鈴は酢豚の腕を磨いていたのでこの望みがかなう可能性は

低い。

まことに……………残念！！

そのとき、試合開始前のアナウンスがアリーナに鳴響く。

茜雫が発進準備に入る一夏に声をかける。

「まあ、とりあえず死なずに帰ってこいよ。」

おお、初めてまともなエールをもらった、と一夏が内心少し喜んだ。

でも、なんか今から戦争に行くみたいだ。

そうだったら、確実に死亡フラグだ。

いや、今そんなこと言われたらシャレにもならん。

「さすがに大事な弟が酢豚になって帰ってきたら千冬さんでも泣くぞ。」

「いや、現実的に流石に料理にはされないだろ。」

なったら色々とおかしい。

「言い切れるのか？」

．．．．．あれっ．．．．．なんか言い切ることができない．．．．．

そう言えば中国では童麵というヤバイ料理が存在していたはずだ。

しかも、最近まで犬肉猫肉の食用が普通にOKだったらしい。

怖くなってきた．．．．．

「私とセンが鍛えてやったのだ、負けなど認めんぞ。」

「おう！！」

その怖い想像を破壊するかのように一夏はいつも以上に気合の入った声で自分を鼓舞する。

うん、さっきの想像は見て見ぬ振りだ。

現実逃避に限る。

幼馴染二人の激励を背に一夏はカタパルトに立ち、試合開始の合図を待った。

まず目を閉じ深呼吸をして気持ちを高鳴ってる心臓を落ち着かせる。

そして落ち着いたところで目を開け前を見た。

それだけでさっきまで見せていた疲れた表情がなくなったのを見て、篤は少し驚き、茜雫はじっと一夏のようすを見ている。

「あつ、そうだ忘れてた。一夏、一夏。」

いきなり茜雫がテンポを崩すように一夏に話しかける。

「……………なんだよ、セン。」

せつかく人が集中していたのに……………

「そんな顔しないでよ。ちょっと、闘うときの注意事項。」

「何で今なんだよ……………そういつことは早く言ってくれ。今いつでも遅いんじゃないのか？」

そういうことは基本だと思うから早めに言って欲しいものだ。

「忘れてたって言ったじゃないか。」

「で、なんだよ。注意事項って」

一夏が急かすように訊く。

実際時間はあまり無い。

「それじゃ、言つよ……………」

茜雫は口を開いた。





一夏は開始のアナウンスと共にカタパルトから飛び出した。

カタパルトを抜けると大きな円形状のアリーナが視界いっぱい広がる。

一夏の胸に狭いところから広いところに出た開放感が広がる。

ハイパーセンサーで周りを確認する。

周りには360度に広がる観客席は満員になっている。

ひとつ高いところにはなんだかえらそうな人たちがアリーナ全体を見下ろす形で豪華な椅子に腰を下ろしている。

何時どんな時代になっても偉そうな人間は他を常に見下ろしているということだろう。

世界で沢山高いところでふんぞり返っている奴等のうちほんとに偉い奴などほんの一握りだ。

自分の人生経験はかなり浅いがそう断言できる。

一夏が出たとの同時に対戦相手の鈴もカタパルトから飛び出してきた。

深い赤色と黒を基調とし、大きな棘のついたアンロック・ユニットが両肩の左右に浮かんでおり、全体的に攻撃的なイメージを持つ

IS - - - - - 甲龍

シエンロン。

以下にも中国が好きそうな色合いをしている。

あれを振り回して殴るのだろうか．．．．．それはかなり痛そうだ。

一夏は今度はミンチになる可能性が出てきたため少し怯むが気合を入れ直す。

肉屋に並べられる気はサラサラない。

鈴がPICで空中を滑るようにして一夏の前にくる。

そして、一夏と向かい合う。

「一夏、今謝るなら少しくらい手加減してあげるわよ?」

鈴が一夏に最後の慈悲を与える。

「雀の涙ぐらいだろ?全力で来い!!」

一夏ももう引かない。

「一応言っておくけど、ISの絶対防御を完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられるわよ。」

鈴は暗に『殺さない程度にいたぶることは可能』だといっているのだ。

鈴はこちらをいたぶる気満々のようだ。

「知ってるぞ。」

これは前に特訓のときに茜雲に教えてもらった。

それをさせないためにこの数日間必死に訓練した。

一夏はもう、負ける気がしない。

それでは、試合開始！！

試合開始のアナウンスと同時に二人は一気に距離をつめた。

二機はスラスターを全開に吹かす。

紅く灼熱のジェット炎が排出口から噴き出し、一気に機体を前に押し出す。

一夏の雪片と鈴の青龍刀はそのままの勢いでぶつけ、鏝迫り合いを始める。

金属同士がぶつかる独特の金属音と火花が放射線状に広がり即席の花火を作り出し、周りの人間の網膜と鼓膜を刺激する。

近接格闘型同士の戦いでは、機体性能などある程度離れていても縮めることは可能である。

後は機体操縦者の技量と試合を動かすだけの勢いでだいたい勝負は決まるのだ。

しかし、機体重量とパワーは甲龍のほうが高い。

徐々に一夏が後ろに押される。

ぶつかった衝撃で微かに痺れた腕がこちらに押されてくる。

このままでは押し切られる。

一夏は前方にスラストスターを向け、一旦大きく距離を開ける。

鈴もそれを追いかけるため甲龍を加速させる。

が、後ろ向きに飛んでいた一夏がとって返すように一気にスラストスターを後ろに全開に噴かした。

そして、勢いをつけた状態で上段袈裟斬り。

追うことに意識を傾けた瞬間に虚を突かれた形で反撃をされた鈴は慌てて青龍刀で防ぐ。

が、加速の遅い甲龍は十分に加速する前に加速力と瞬間速度が高い白式に突っ込む勢いも追加された一撃に押されてしまう。

一度押し切ると体制を崩し後退する鈴に瞬間加速で一気に近づき展開した切り札――零落白夜を一閃。

鈴が返り討ちにしようとするが体制が立て直しきれず、間に合わなかった。

シールドエネルギーに零落白夜の刃が触れた瞬間、ひときわ大きい紫電が走る。

最高レベルの威力を叩き出す零落白夜を喰らった鈴は大きくエネルギーを削られてしまう。

一夏は一太刀入れること成功した。

一夏は茜雫に言われたことを今実行している。

## 茜雫の注意事項その一

まず相手の情報を集め特徴をつかむこと

一夏は鈴の性格と甲龍の全体的に線の太い外見からまず突っ込んできて単純な力押しをすると予測。

鈴は予想道理イノシシよろしくこちらに真っ直ぐ無策で突っ込んできた。

## その二

常に相手の想定外を作り出し実行すること

そして一夏は最初に間合いを考えずに突っ込み、鈴と無理やり鏝迫り合いをした。

幸か不幸か押し切られた一夏は体制を整える振りをして距離を開こうとする。

案の定、鈴はそれを追うことを意識し白式の高い加速力についてこれず、一撃を喰らってしまった。

ひとまず出だしは一夏の作戦勝ちとなった。

「くつ、意外とやるじゃない、一夏。そこまでやるとは予想外だったわよ。」

鈴は大きく削られたエネルギーを見て歯噛みする。

結構、いや かなり痛い一撃だ。

「あたりまえだ、おれだって特訓を重ねてきたんだからな。」

この一週間、ひたすら厳しい特訓をしてきた。

昼は学校、放課後は茜雫と篝との特訓、夜は茜雫の座学だった。

おかげで強くなった気がするがグロッキーになってしまった。

座学では茜雫は一夏にひたすら白式の特徴の分析と中国の第3世代の予想と解析をやらせた。



各国の最新鋭である第3世代の情報は少なく機体の名前とコンプセントしかわからなかった。

そこで相手の機体の特徴を予想することにした。

作戦はとりあえず相手は安定性と燃費が強みなので最初に一撃必殺になりえる零落白夜を必ず当てること。

結果は成功。

序盤で大きくエネルギーを削ることができた。

一夏は親友のすごさを再確認した。

鈴は今度は手数を上げるため青龍刀を二本連結させた。

握り具合を確かめるためか自分を鼓舞するためか巧みに高速回転させながら振り回す鈴に雪片式型を片手で振りかぶり斬りかかる。

猛然と迫る向こうで甲龍のアンロック・ユニットがパカッと開いたことに気づいた。

瞬間、一夏は見えない何かに弾き飛ばされた。

「……………ッ!？」

一夏は何が起こったかわからなかった。

突然見えない拳に殴られたようだ。

「何が起こった!？」

箒はおもわず叫んでしまった。

荒げても凜とした声がよく管制室に響く。

管制室には、千冬、湊、真耶、茜雫、箒、セシリアの六人がいた。

「中国の第3世代兵器なんじゃないかな。」

「俺もあれは知らないけど形状や発射音からして空間圧縮兵器かな。」

茜雫と湊が考えをそのまま口にする。

「あれはわたくしのブルーティーズと同じ中国の第3世代兵器『龍砲』ですわ。空気を圧縮して砲弾にして発射するものです。おそらく見えない上に砲身も無いのでかわすのはかなり難しいでしょう。」

「わあ、オルコツトさん。物知りですねえ。」

セシリアの詳しい説明に真耶も感嘆の声を上げる。

ずっと黙って試合を見ていた千冬が唐突に口を開いてずっと試合ではなく一夏を見ている茜雫に声をかけた。

「ずいぶんと楽しそう表情だな、茜雫。」

「楽しみです。」

なぜか未来形で答える茜雫。

その目の動きは一夏を観察しているようだった。

「お前、知っててこの情報を一夏に与えなかっただろ。」

おどろいた……まさかばれているとは……

篝は茜雫がそんな重要なことをだまつたことに驚いた。

「まあ、一夏にも自分で打開策を考えてもらわないといけませんし。」

茜雫は詫びる様子はない

「まだあいつはISに乗ったばかりだ。そんなに急ぐことはないだろう?」

千冬が試すように訊く。

「一夏には早く強くなってもらわないといざってときにだめじゃないですか。時間だってそれほどあるわけじゃないし。」

茜雫の言葉に千冬、湊、箒の三人はわずかに引っかかりを感じた。

別にどうとでもない言葉なのにどこか引っかかる。

不純物の入った水をかき回しているようだ。

「……………そうだな。」

今の千冬にはそれしか言えなかった。

「さあ、一夏はどうするかな。」

千冬達と対照的に茜雫は楽しそうに笑っている。

まるで一夏の成長を待ち望んでるかのようだった  
・  
・  
・



十話 戦闘での注意事項（後書き）

高校の数学って難しいー

ヘルプミーー

てか、まじコツ教えて欲しいー

## 十一話 逆転劇

200mの円形のアリーナでは闘戦士と一騎士ウォーリア《ナイトが火花を散らし決闘している。

今、獰猛な闘戦士はその爪を用って高貴な騎士ナイトを地に叩き落とした。

「くそっ、何なんだよ、アレは!?!」

鈴の連結された青龍刀による、斬撃を避けながら一夏は毒づく。バトンのようにクルクル回り手数のある攻撃に一夏は雪片式型一本では防げず避けるしかない。

鈴の高い近接格闘能力に舌を巻いてしまう。

やはり代表候補生を名乗るだけのことはある。



先程、甲龍の左右に浮いている棘付きのアンロック・ユニットが動いたのは解った。

しかし、次の瞬間、殴られたかのように吹き飛ばされた。

何も見えなかった。

解らなかった。

怒りの鈴はその一夏のわけが解らないといった表情が小気味がいいのか、優越感に浸った表情をしている。

打開策を見つけないければ勝機はない。

一夏は自分でも足りないと自覚している頭脳を懸命に絞る。

が、鈴はそれはさせないとばかりに突っ込む。

思考にふけて一瞬鈴から注意を外した隙を突かれ、一夏は焦った。

まだなにも策がない。

鈴は一夏に一気に接近すると重量級の刃の広い青龍刀を横殴りに思いっきり振り抜く。

一瞬の隙を突かれた一夏は回避は不可能と判断。

雪片式型を盾にして鈴の渾身の青龍刀を防ぐ。

甲龍の高いパワー、重量、速度のよく乗った岩もやすやすと碎く破碎の一撃。

もともと斬ることに特化された太刀では頑丈さと叩き斬ることを前提とされた青龍刀を防ぐことなどできない。

流すこともいなすこともせず馬鹿正直に雪片式型一本で受け止めた一夏は、勢いでそのまま地面を転がるように吹き飛ばす。

転がった衝撃で土煙が立った。

鈴は更に追撃を加えるべく、龍砲のエネルギーをチャージする。

それを見た一夏は慌てて強引にスラスターを全開にして噴射。

横に飛ばす。

高い推進力を得た白式は急激な加速をし、土煙を巻き上げながら地面を滑るように滑走する。

鈴の龍砲がまた見えない砲弾を吐き出した。

見えない砲弾は白式の急激な加速についていけず外れる。

派手な爆発音が聞こえた。

そちらを見ると大きな土煙とともに地面を抉るようにクレータ―が空いている。

背筋の冷たいものが流れた。

今のはかなりやばい。

鈴は今の追撃のチャンス逃した一夏が体制を立て直してしまつたことに歯噛みする。

今のが当たればこっちに一気に状勢が傾いたというのに。

しかし、龍砲の特性にまだ気づいた様子のない一夏の劣勢は覆ることなどあり得ない。

情報の7、8割を視覚で頼っている人間では見えない砲弾は避けることはできなくはないが、かなり難しい。

事前に知らない限り、かなりのハンデを負うこととなっている。

闘いでハンデを負えばそれだけで敗北に繋がる事だつてある。

今の状況なら勝つことなど簡単な事だ。

鈴は一夏をどう攻めて料理してやるうかと考えていると止まつてこちらを膝を突きじつと見ていた一夏が動き出した。

雪片式型を地面に突き刺し、スラスターを地面に向けて、噴射。

スラスターの推進力が雪片式型が地面の刺さった状態の雪片式型を無視して強引に機体を滑らせる。

地面に突き立てられた雪片式型に土が抉られ、スラスターの噴射エネルギーによって粉塵が舞う。

更に一夏は地面をスケートのように滑走。

粉塵を広げていく。

あとには雪片式型で削った地面が見えた。

地上絵でも描いてるかのようだ。

これを見た鈴は最初はポカーンと何が起こるのかとを見ていた。

しかし、特に何も起こらず一夏の奇行が粉塵を拡げる事だと解って呆れるしかない。

「何してんのよ、あんた？まさかそんなので煙幕でもつくってどうにかしようっていうの？バツカじゃない？」

中学のときも今もバカだと思っていたが、ここまでとは思わなかった。

こんなお粗末な作戦、子供でも思いつかないし、実行しない。

とうとう狂ってしまったのだろうか。

観客席からも一夏の奇行に驚きと失望の視線が注がれる。

呆れている間にも一夏は構わず粉塵を辺り一帯に広げた。

「あんたが何したいか全く理解出来ないけど、ハイパーセンサーを舐めない事ね。」

鈴はハイパーセンサーで薄っすらと靄のかかったような汚れた視界をクリアにした。

しなくても普通に見えるがうっとおしい。

一夏は鈴の言葉を無視して黙々と作業を続行する。

鈴は無視されたことにカチンときたがバカらしくなってきていたぶる計画をやめる。

さっさと終わらせて一夏にこの奇行をやめさせなければならぬい。

なんかそんな妙な使命感に突き動かされ、一夏の脅威である龍砲を放つ。

しかし、一夏はそれを小さな動きで完璧に避けきった。

外れた砲弾は地面に当たり爆ぜる。

噴煙のように土煙が舞う。

「……………ッ!？」

鈴は本気で目を疑った。

ただ避けるならさつきも一夏は白式の高機動性にものを言わせ  
た大きな動きで避けたので驚かない。

だが、今のは全く違った。

身体を1m程だけ動かし小さな動きでどこを狙われているかも  
解らない、見えない砲弾を完璧に避けきって見せた。

鈴がわけが解らないといった表情で驚きを吹き飛ばすように龍  
砲を連射する。

しかし、一夏はさつきまでとは全く違う動きで完璧に避け、今  
度は逆に接近して鈴に攻撃してくる。

観客席は一夏の突然の変化に失望から好奇へと、さつきの驚き  
は違う意味の驚きと変わった。

一夏のヒットアンドアウェイが高機動性をフルに活かしてかな

りの脅威となつて襲いかかってくる。

まだ大きなダメージは負っていないが、先程からの一撃必殺の太刀が鈴を掠め、エネルギーを徐々に確実に削り取っていく。

その度に冷や汗と焦りが出る。

完全に形成逆転だ。

今も襲いかかってくる雪片式型の刃が機体を掠めるように通り過ぎ接触したシールドエネルギーの膜が見えた。

今度は鈴が狩られる番となつた。

驕つた闘戦士ウォーリアを駆逐するべく奇策をもつて騎士ナイトは執拗に斬りつける。

鈴は今の状況を一転させるため、ばら撒くように龍砲を乱射。

砲弾の弾雨に地面が爆撃を受けたかのようにクレーターを次々と開ける。

一夏は全く慌てず必要な分だけすると避けてまた鈴に接近してくる。

それを青龍刀を眼前に構えて迎え撃つ鈴に燃費を考え零落白夜を解除し、斬り合う。

金属同士の火花の光が網膜を刺激した。

鈴は手数と重量で押し切ろうとするが一夏はそれを無視し、セシリアに習った三次元躍動クロス・グリッド・ターン旋回で起用に背後を取ると雪片式型を右手で振るう。

雪片式型がシールドバリアに触れて、接触面が一瞬発光。

眩しい光に少し目を細める。

慌てて鈴が距離を開け、苦し紛れに龍砲を発射。

一夏は綺麗にそれを避け、後退する鈴を追わずにこっちの動きを見ている。

もうわけが解らない。

「どういうこと？なんで龍砲をそんなに楽に避けれるのよ？教えなさいよ？」

たまらず、鈴が当たらない龍砲の代わりに疑問の弾丸を一夏にぶつける。

一夏が奇行に奔ってから確実に動きが変わった。

恐らくあの動きがなんかのキーだ。

「別に……見えないものを見るようにしただけさ。」

「はあ!？」

当たり前のように言われたが、そんなこと簡単にできたら苦労



しない。

### 茜雫の注意事項その三

常に思考することを放棄するな  
拮抗する闘いはそれを放棄した時点で勝負の放棄と同義である

「その龍砲っていつの、空気を圧縮して撃ち出す空気銃みたいなもんだろ。」

「……………よく解ったわね。」

鈴は内心呻く。

奇行に奔る前の一夏には二回しか見せていないというのに、その二回でこいつは龍砲の特性に気づいた。

普段はあり得ない鈍感なのに、こいついつ時敏感でどいつことなのよ……………

#### その四

不可解なことが起こったときは、起こる前の変化を注意深く  
見ること

一夏は鈴が自分を弾き飛ばしたあと龍砲を放った。

一夏は相手の変化を見る為にハイパーセンサーの感度を上げて  
いた。

そして、気づいた。

そのとき確かに龍砲の弾道が見えた。

「俺がなんも考えないであんなお粗末な煙幕つくるとおもった  
か？」

「一夏なら思っわよ！ー！」

「思つのかよー!!」

なんてことだ．．．．．どんだけバカだと思われてるんだ．  
．．．．．

「それより、あの薄っぺらい煙幕とあの動きとなんの関係があるのよ!？」

鈴も我慢できず、騒ぎだす。

火山みたいだ。

「ハイパーセンサー。」

「．．．．．はっ?．．．．．ツ!?まさかあんな．．．．．」

「俺はお前の龍砲の砲弾なんて見てない。空気の塊なんて見えないしな。俺がハイパーセンサーの感度を上げて見てたのは粉塵と弾道だ。」

一夏はハイパーセンサーを高機動モードに切り替えた。

普段はあまりにも鮮明に見えすぎてしまったため使われない機能。

しかし、音速を超えるときは、辺りを視認する為に使用する。

つまり、音速の弾丸も見ることが出来るのだ。

まあ、見えても普通身体が反応できないのだが。

一夏は粉塵を使って弾速が遅いが不可視の龍砲の砲弾の弾道を見切った。

粉塵入りの空気を圧縮した砲弾は濃く弾道は粉塵が消えて見え  
た。

なら、その一直線上にいななければいいだけの話だ。

「……………バカでアホで唐変木で頓珍漢なあんたがこんな  
頭脳プレーが出来るなんて……………誰の入れ知恵よ!？」

「いいすぎだろ!？」

俺はそんなデフォルトイメージだったのか……………なん  
か泣きそうだ……………

泣いてもいいよね……………

一夏は雪片式型を正眼に構え、一気に勝負を決めるために鈴に  
全開で瞬間加速で突っ込む。

「わあ、いつち〜あんなに強くなっただね〜。いつの間につて感じだよね〜」

管制室で湊は僅かに驚きの含んだ声を上げた。

暗い部屋のモニターの色とりどりの人工の光が湊の透き通るような白い肌を照らし、画面が動くたびにその色合いを変化させる。

もともと大抵のことでは驚かない千冬とだいたい予想通りだった茜雫以外はみんな驚いていた。

真耶は自分の教え子が何時の間にか強くなっているのに驚き、セシリアは自分では全く考えなかった奇抜な策で現状打破した一夏に追いつかれてしまうかもしれないと嬉しさと寂しさが入り混じった表情をし、篝は茜雫のたったあれだけの言葉で変わった一夏に自分の鍛え方は間違っていたのかと考えていた。

例外的千冬と茜雫はじっとモニターを見ている。

「茜雫、……………一夏に一体なにを教えた。」

腕を組んで黙って見ていた千冬は茜雫に興味深そうに訊く。

「闘いのコツと心構えと覚悟です。」

茜雫は楽しそうな表情を隠さずに答えた。

千冬は更に訊く。

「ここまで予想通りそうだな。」

ヒーローアニメを見る子供のような目でじっとモニターを見る茜雫は答えた。

「意外と予想の斜め下をぶっ飛んでくれましたよ。嬉しいです  
ね。一夏が自分で考えて強くなってくれるなんて。」

上ではなく下

ということは茜雫はまだ一夏の成長を望んでいるのだろう。

まるでひと通り常識を教えたらず放す放任主義の親みたいな鍛え方に引っかかりを覚える。

まるで自分がいなくても勝手に強くなってくれとでもいうかのようだ。

言い表せない不安が胸をよぎった。

気分が悪い。

気分を紛らわす為に千冬はコーヒーを入れようとする。

「あつ！ふゆちゅ、ふゆちゅ私の分も入れて、入れて。」

湊が子供のようにねだる。

「ハイハイ。」

「砂糖とミルクをいっぱい入れてね。」

趣向まで子供みたいだ。

千冬が力が抜けて片言で返事をし更に湊が追加注文したのと、モニターの中で一夏と鈴が最後の勝負に出たのが同時だった。

ドゥウウウウウウウウウウウウウウウー！！

ぶつかり合おうとした騎士<sup>ナイト</sup>と闘戦士<sup>ウォーリア</sup>の間を割って入るように何かがアリーナの遮断シールドを突破した。

アリーナ全体が確かに震えた。

燃え盛るクレーターの中心で隕石のようなカプセルの外壁が弾け飛び、三体の巨大な黒い巨兵がのっそりとカプセルの破片を踏み碎きながら姿を現す。



十一話 逆転劇（後書き）

自分の凡才に鬱です

十二話 巨神兵（前書き）

現実が辛い  
めげそう

## 十二話 巨神兵

アリーナ上部を守る遮断シールドを何か黒い巨大なものが突破した。

破壊された遮断シールドはパラパラと光の粒子となりその場の空気とは合わない光に照らされた雪のように降り、溶けるように消えていく。

「システム破損！！何かがアリーナの遮断シールドを貫通してきたみたいですよ！！」

真耶の緊迫した言葉を聞きながら皆がモニターを見ると、ステージ中央からは黙々と煙が上がっている。

どうやら今さっきの衝撃はその何かがアリーナの遮断シールドを貫通して入ってきたことによるものらしい。

アリーナの遮断シールドを何かが貫通してきた。

言葉だけだとそんな大したことではないように聞こえるが、これ

は結構まずい。

アリーナの遮断シールドはISと同じもので出来ている。

しかも、外部に影響がないように特別強固に展開されている。

流れ弾などが周辺に飛ばないようにだ。

通常の兵器なら傷をつけることすらできないそれを貫通するだけの威力を持った何かが入ってきた。

その事実是不安を募らせるのには充分すぎるものだった。

クレーターの中心の隕石のような塊の外壁が弾け飛び、そいつらは焼け焦げた地面とカプセルの破片を踏み碎きながら出てきた。

深い灰色で手が異常に長く太い、つま先よりも下まで伸びている。

しかも肩と頭が一体化しているような形をしている。

その巨体も2メートルを優に超え、全身に見えるのは穴はスラストアスターだろうか、頭部にはむき出しの複数のセンサーレンズ、腕には先ほどのビーム砲台が左右合計四つある。

まるで神話に出てくる怪物のようだ。

一体だけでも十分圧倒されるといふのにそれが三体もいる。

いるだけですでに気圧されてしまふ。

足がすくむ。

「何なのだ、アレは!?!」

幕が驚きと不安をあらわにした様子で叫ぶ。

正直言つてあのIS、趣味が悪い。

「アレはISですよ!?!」

セシリアも驚きを隠せない。

代表候補生で各国のISをみてきたがあんな特徴的なISはみたことなかった。

「おい、茜雫。アレを知っているか?」

千冬が怒気を含んだ声で同じく黙つてモニターを見ている茜雫に訊いた。

「俺が知ってるはずないじゃないですか。てか、なんで今日はそんな俺にばっか質問が多いんですか……………」

「世界中を廻りながら各国のデータベースにハッキングして調べごとしていたのだから。」

「で、せんちゅついでに気に入らない政治家達のスキャンダル流しまくってたんでしょ。」

「何で知ってるの、この人達!?!」

俺にプライベートはなかったのか!?

読心術だけでも脅威なのにここまでやられると既にエスパーだ。

マジで怖い、うかつに隠し事ができん。

「あなたそんなことしてましたの!?!」

る。  
イギリス代表候補生のセシリアが素っ頓狂に声を荒げて驚愕す

ら。  
そうだろう、自分の国のデータも見られた可能性があるのだから。

よ。  
「ふふふ、誰がせんちく育てたと思ってるんだよ。せんちく君」

何故か腕を組み格好つけながらクールっぽく訊く湊。

真面目な湊なんて似合っていない

「千冬さん。」

「ガーーーーーん!!! そんな!?!」

茜雫の即答に本気でショックを受ける湊。

「言い過ぎだぞ、茜雫。それに私が育てたらお前の性格はもっとまともになっている。」

さらりと酷い千冬。

「あのですね、その俺がまともじゃないみたいなの言い方やめてくれませんかね。」

「いや、今まともじゃないって言うていたではないか、セン。」  
篝が思わずツツコム。

お前まで俺を非常識というか？、そういうほぐきちゃんも胸の発育具合が非常識じゃん

そう思うが、そんなこと怖くて言えない。

言えば、いつぞやの包帯姿にカムバックだ。

今度は全身になるかもしれない。

ミイラ男は御免こうむる。

というか、街中歩いたら間違いなく不審者として通報される。

「俺は常識を千冬さんに、非常識を姉さんに習ったんです。」

「」「」なるほど」「」

篤、真耶、セシリアに納得されてしまった。

確かにそうかもしれない。

茜雫は基本的に常識人だ。

パタン

皆が納得して静かになった管制室に何かが倒れる音が小さく聴こえる。

「わあああ！？沙月先輩、しっかりしてください！？」

倒れたのは湊だった。

負のオーラが薄暗く決して広いとは言えない管制室に立ち込めた。

慌てて真耶が駆け寄る。

抱きとめると湊は香水のいい香りがした。



「うつぐ．．．．えつぐ．．ひつぐ．．．．．み  
んなひどいよあゝ」

あまりの納得具合に子供のように泣き出す20代後半手前の湊。

まだ20代後半ではないまだ前半だ、こことても重要

湊の作るテストに出ます

赤線、蛍光ペンでしつかりマークしましょう

恐らく湊が化粧をする人間だったらアウトなぐらいの泣きっぷりだ。

相変わらず精神年齢が子供みたいな湊に千冬はどっかに大人っぽさを落としてきたんじゃないのか？、と思っていると真耶が湊をあやしていた。

長身の湊をあやす小柄も真耶は不釣り合いだった。

「大丈夫ですよ沙月先輩！！誰も沙月先輩が非常識なんて思っ  
てませんよ！！」

「少なくとも俺は東さんと同じくらい非常識と思いますよ。」

「なんでいま言っちゃうの、沙月君！？」

ズーーーーーん

さらに落ち込む。

床に沈みそうだ。

よく見ると床が負のオーラで黒く染まり出す。

のほほんさんと呼ばうかな、と茜雫は考える。

あの癒しオーラでプラマイゼローいや、プラスまでいくだ  
ろっ。

「ああ！？だ、大丈夫ですよ！！わ、私は沙月先輩の味方です  
から！！！」

「やめた方がいいのでは？」

「ざっきからびどいよ、ぜんち〜！？ひんっ、まやぢ〜は私の  
味方だもんね！！！」

鼻が詰まって濁点だらけだ。

聞き取りズライ。

「は、はいっ!!」

ウルウルとした仔犬のような目でじっと見つめられた真耶は残念ながら沙月湊常識党に懐柔されてしまった。

沙月湊非常識党の面々は離れて気の毒そうに見ている。

千冬と茜雫は次に何をするか予想がついた。

「ぐっふっふっ、……………じゃあ、さっそく。……………その巨乳パワーを充電させてもらおうかっ!!」

涙が一瞬で収まり、両手をいやらしくワキワキさせながら真耶にルパンダイブ。

なんだかこういうところが束とよく似ている。

「へっ?え……………ちよつと、まっ……………  
きゃあああ!?!」

アホ党首に襲われ、驚愕でまともな抵抗が出来ない新人黨員。

「あっ……………ちよつとやめ……………  
きゃっ!?!」

なかなか際どいことになっている。

過激な少年誌レベルだ。

周りに白百合が咲いているように見える。

というか、視界に白百合のフレームが何故かついていてる。

茜雫は離れたところでコーヒーを飲みながら明後日の方向を見ている。

ここは見えて見ぬ振りだ。

本当なら止めに行くべきなのだが、直視してはいけないと鍛え抜かれた本能が叫ぶ。

直後、茜雫の後頭部にサクツと鋭い視線が刺さった。

恐らく日本刀を携えていてもなんの違和感もない生粋の武人である二名からだろう。

もし見ていたら本当にサクツとやられていたかもしれない。

危なかった……………

男しては間違ってるかもしれないが、命は大事だ。

そう、命は大切にしなければ

一つしかないのだから

失えば取り返しのつかないものだから

ガンッ

「キャン!?!」

直後、後ろで短い悲鳴と拳が何か硬いものを殴る音が聞こえた。  
自業自得だ。

一夏と鈴は目の前にいきなり現れたISに頭の理解が追いついていなかった。

今はいくらか収まった炎の中に鎮座している深い灰色の巨人が三体。

全く同じく装備をしている。

そのうちの一機がいきなり腕をこちらに向ける。

腕には大きく穴がぼつかりと口を覗かせていた。

両腕から巨大な熱線を放つ一夏と鈴にそれぞれ放った。

一夏は素早く回避行動に移るが鈴は目の前の状況のついていけず動かない。

「鈴？」

一夏は白式を甲龍の体当たりするようにかっさらった。

「.....!？」

鈴は身体を揺さぶる衝撃と放たれた熱線をハイパーセンサーが感知した警告音で我に返った。

「な、何なのよ、アイツ!？」

「わかんねよ、俺だつて!？」

怒鳴られたつてあんなもん知るはずがない。

「一夏、あんたは引きなさい!！」

「引けつて、お前はどうすんだよ!！」

いきなり逃げるといふ鈴に一夏が食い下がる。

「ここで時間を稼ぐのよ!！」

「お前を一人にできるかよ!？」

なんで普段そんなドキツてくる気の利いた言葉をかけられないのよ………

鈴は心の中でがつくりきた。

そのとき、遮断シエルが落ちて  
観客席をアリーナから遮る。

非常用の遮断シエルはちょっとやさつとでは簡単に突破出来るものではないが、遮断シールドを打ち破つたアイツらに油断は出来ない。

「おい、何なんだよ、お前達は?！」

一夏が全身装甲フルスキムのIS達に呼びかける。

「黙ってないで答えろ!!」

怒りの問いかけに対する答えは三体からの熱線だった。

雨のようにこちらに向かってくる熱線を危ういながらもよける。

織斑君!!

凰さん!!

今すぐアリーナか

ら脱出してください!!  
すぐに先生たちがISで制圧に  
行きます!!

真耶からの通信が入る。

なんだか息が荒い。

途切れ途切れだ。

何かあったのだろうか、それとも慌てているだけなのか。

しかしダメだ、このままじゃ周りに被害が出てしまう。

「……いや、先生達に来るまで俺たちで食い止めます。い  
いな、鈴!!」

「だ、誰に言ってるのよ。そ、それより離しなさいってば!! 動  
けないじゃない!!」

あつ、そういえば鈴を抱いてそのままだった。



「ああ、悪い。」

織斑くん！？　だ、ダメですよ！！　生徒さんにもしものことがあつたら――――

そのまま通信を切る。

目を閉じ、一回深呼吸。

そして目を開ける。

大丈夫、いける

一夏は三機の巨人兵に雪片式型を構えて突っ込んだ。

真耶の言葉をさえぎるように、通信が切られる。

モニターを見ると一夏と鈴が全身装甲フルスキンに向けて飛び出していった。

「もしもし!? 織斑くん聞いてます!? 鳳さんも!? 聞いてます!」

「本人たちがやると言っているのだから、やらせてみてもいいだろう。」

千冬があっさり許可を出す。

茜雫は少し驚いた。

まさか許可を出すとは……過保護なこの人なら無理やりでも連れ返しそうなのに……

「お、お、織斑先生!! 何をのんきなことを言ってるんですか!？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ。」

つい、とコーヒーを差し出す。

「……あの、先生。それ塩ですけど……」

「……………」

ぴたりとコーヒーに運んでいたスプーンを止め、織斑先生は白い粒子を容器に戻す。

「なぜ塩があるんだ？」

「さ、さあ……？あつー！！やっぱり弟さんのことが心配なんですね！？だからそんなミスを……」

「……………」

「……………」

イヤな沈黙。

ただえさえ暗い管制室が真つ暗になったような気がした。

真耶は話を逸らそうと試みる。

なんだか無駄な抵抗な気もするが。

「あ、あのですね……………」

「山田先生、コーヒーをどうぞ。」

「へ？あ、あの、それ塩が入ってるやつじゃ……………」

「どうぞ。」

「い、いただきます……………」

「熱いので一気に飲むといい。」

管制室に黒い悪魔がいた。

「ダメだよ、まやち。ふゆち。怒らせたら。」

現在これでもかと頭のたんこぶが痛々しいあなたの方が沢山怒らせてますけどね！！

「織斑先生！！わたくしにIS使用許可を！！すぐに出撃できませんわ！！」

セシリアが一夏達の加勢を求める。

「そうしたいところだが、遮断シールドがレベル4に設定。扉がすべてロックされている。」

「そ、それって……あのISの仕業ですよ！？」

「そのようだ。しかし、三年の精鋭がシステムクラックに実行中だ。遮断シールドを解除できれば、すぐに部隊を突入させる。」

淡々と述べる織斑先生。

なんとかオルコットも食い下がろうとする。

「で、でしたら、その部隊にわたくしも……」

「お前は突入隊に入れないからな。」

「な、なんですって！？」

「邪魔だ。」

バツサリだった。

セシリアの頬がひくひくと引きつっている。

それを見て千冬がセシリアに畳み掛ける。

「では連携訓練はしたか？その時のお前の役割は？ブルー・ティアーズをどういう風に使う？味方の構成は？敵はどのレベルを想定している？連続稼働時間」

「わ、わかりました！！もう結構です！！」

「ふん。わかればいい。」

たたみかけるような織斑先生の言葉にさすがのオルコットも降参する。

止めなければ一時間 いや、それ以上続きそうだ。

「湊、お前はアレをどう見る？」

「ほえ？」

千冬の急な名指しに湊は間抜けな声を上げる。

「あの真っ黒いの？」

「そうだ。」

湊はモニターの中で一夏と鈴の即席タッグと全身装甲フルスキンの戦いを見る。

一夏達は、なかなかの連携で三機相手に善戦している。

さすが幼馴染と言ったところか。

5秒ほどじっと真剣にモニターに映る不明機3機を見た湊が口を開いた。

「連携のタイミングが完璧すぎる。それに三機それぞれにクセのようなものが全くないね。三機が全く同じ姿勢制御、機体の運び方、撃つタイミング、人間じゃないね。多数のパターンがあるみただけどプログラムされた動きだね。いつ々の攻撃に関して動きが三機揃って同じ、無人機じゃないかな。」

湊がたった5秒短時間でわかった事を指摘、結論を弾き出す。

いつもおちゃらけているようにみえる湊はこういうところが凄  
い。

「「「え!?!?!」」」

湊の衝撃的な言葉に筈、真耶、セシリアが驚きの声を上げる。

「そ、そんなあり得ませんわ!? ISは人が操縦しなければ動きませんわ!?!」

セシリアが喰い付く。

そう、ISは人が乗って始めて機能する。

特に量子展開などはイメージによって機能するから、機械では無理だ。

しかし、茜雫はその一般論を切って捨てた。

「前例がないからって絶対に起こらないとは限らない。世界は常に予想を裏切るからね。ISだって最初は馬鹿言ってるって世界から拒絶されたけど白騎士事件で兵器として価値があるってわかった途端、手のひらを返すように世界が認め、飛びついた。それと一緒にだよ。」

「確かにそうですけど……」

僅かに皮肉も含んだ正論にセシリアは何も言えなくなる。

「茜雫、お前はどっと思うっ？」

千冬がいきなり訊いてくる。

「何がです？」

今日は千冬の質問が本当に多いな

「一夏達の事だ。」

「死ぬんじゃないですかね？」

「……」

「何？」

茜雫の何の躊躇いのない即答に皆が驚く。

それぐらい内容は衝撃的な返答だ。

「……………随分と言い切るな。」

「いや、だってバカでしょ。ヒーローでも気取るつもりですか、アイツは？」

茜雫が冷たく言い捨てる。

「な、何を言ってるのだ、セン！？」

箒も慌てて茜雫に問い詰める。

「正体も解らない、目的も解らない、敵なのかも解らない、情報もない、どれくらいに脅威なのかも予測出来ない。そんな状況で突っ込むなんて自殺願望者だ。」

「しかしだな……………」

モニターの中では一夏が三度目の零落白夜の斬撃を外してエネルギーが底を尽きかけている。

「救援は？」

茜雫が千冬に普段会話するのと同じく声で尋ねる。



「まだ時間が掛かるな。確率はどう思っている？」

「生存確率は一体だったなら二割、二体だったなら二分程、でも三体なのでもう無理ですね。あと持ったとしても5分ぐらいかな？」

「ちよつと茜雫さん!？」

余りにも平坦で淡々としている茜雫にセシリアが声を上げる。

「何故そんなに落ち着いておられるのですか!？」

茜雫と一夏は幼馴染のはず。

なのにその幼馴染が死ぬかもしれないというのに何も感じていないかのよう冷静だ。

セシリアには理解が出来ない。

「取り乱してあげようか？」

「ふざけないでください!？」

「一夏も考えがあるんだろ。ないならそこまでの話だよ。自業自得で終わるだけさ。」

「.....!？」

セシリアが驚いたのはその言葉ではなく一瞬こちらに見せた流

し目の視線にだった。

奈落のような深く暗い眼。

背筋が冷たくなる。

「おい。」

千冬が遮るように声をかける。

「何です。千冬さん。」

「いつてこい。」

「……………は？」

何を言い出すんだ、この人は。

それとも逝ってこいと言ったのか？

それはいくら千冬の命令でも無理

「専用機の微調整、まだ終わってないとは言わせないぞ。」

「おお、危ない。昨日完徹で終わらせといて良かった。」

茜雫は鬼気している千冬言葉に冷や汗をかいた。

セシリアはさっき一瞬茜雫が見せた眼と今の姿のギャップに混乱している。

「だから、今日は一夏や鈴からそんなにエネルギーを充電していたのか。」

篝が呆れる。

完徹して元気がないからって人から奪うなんて全くもって迷惑な話だ。

「束が弄ったISなら今の現状ぐらい覆せるだろ。それで、お前の専用機の待機形態はどれだ。」

茜雫がポケットをひっくり返して中を探っている。

しかし、ISらしきものが出てくる気配はない。

「え〜とですね……………あれっ？なくしちゃったかな

？」

「……………」

千冬は黙って怒気を上げた。

それを敏感に感じ取った茜雫は身体を震わせている。

周りで見ている湊達も膨れ上がる怒気に生きた心地がしない。

茜雫は至近距離でビシバシ当たりまくって痛そうだ。

「え、え〜とですね、あっ！？こんなところになりました。」

ちゃらけた口調と共に何も握っていなかった左手から手品のよ  
うに古い皮ベルトの腕時計が出てきた。

茜雫が必死におふざけを笑顔で取り繕うが、

ズガアアアアアアン

「おお、痛そうな一撃だね、せんちゅ」

さっきの仕返しなのか他人事みたいだ。

「実際に超痛い。」

「ふざけてないで早くしろ。」

茜雫がやる気のない口を開く。

「はいはい。じゃあ、ほくきちゃん手伝ってね。」

「な、何をすれば良いのだ。」

茜雫に頼られて嬉しいのか少し勇んで篤が訊く。

茜雫が作戦を話すと篤は驚きながらも、走って行く。

茜雫の指示はピットから一夏を激励しろ、だった。

茜雫曰く、そうすれば一機撃墜できるからとのこと。

全員意味が解らなかったが、篤は茜雫が言い切るなら問題ないと疑わなかった。

1分後、茜雫はアリーナの外に居た。

「俺、結構IS動かすと疲れるのに。人使いが荒いよな。全く。」

無人機と同じくISの装備では破壊が難しい遮断シールドを突破するためだ。

茜雫は左手に付けたボロい腕時計をふと見て自嘲気味に少し嗤う。

この待機形態の腕時計は茜雫のISを量子化する際に作ったものではない。

束は最初待機形態を腕輪にしようとしたが、茜雫が無理を言って昔拝借した古い腕時計にISを量子化してもらった。

拝借した時から既に針の動いていない役に立たない時計。

まるで自分みたいだ

あの時から全く進歩していない

自分もいつまで過去に執着してんだか……………

茜雫が量子の光に包まれる。

ISを展開した。



## 十二話 巨神兵（後書き）

なんだか最近スポーツドリンクがやけに美味しく感じる  
今日も2?のアクエリアスを二本買った



## 十三話 意義

「……………鈴、あとエネルギーはどのくらい残ってるか？」

「180ってところね。」

フルスキン  
全身装甲三機と戦闘している一夏と鈴。

一夏が何度も零落白夜で斬りかかるが全身の各所にあるスラストターを巧みに使い躲されてしまい、鈴音の衝撃砲は重装甲の巨大な両腕で防がれてしまう。

このままではジリ貧だ。

もう後がない。

汗が目に入ってしみる。

「ちょっと厳しいわね……………現在の火力でアイツのシールドを突破して機能停止させるのは確率的に一桁台ってところじゃない？」

「0%じゃなきゃいいぞ。」

0%じゃなければ諦めない理由にならない。

ここで止めなければ何をしでかすか分からない。

もし避難が済んでいなかったら最悪誰かが死ぬかもしれない。

諦めるわけにはいけない。

「あつきれた。確率はデカイほどいいに決まってるじゃない。あんなって良くわかんないところで健康第一っていうかジジくさいけど、根本的には宝くじ買うタイプよね。」

「うつせーな……………」

鈴音の発言に軽く落ち込む一夏。

でも、茜雫も昔、初めて買ったという宝くじで湊と何度も買ったのに関わらず300円が2回しか当たらなかった事からそのときから茜雫も貧乏くじを引くタイプなのかもしれない。

「……………で、どうすんの？」

「逃げたけりゃ逃げてもいいぜ。」

「なっ！？馬鹿にしないでくれる！？あたしはこれでも代表候補生よ。それが尻尾を巻いて退散なんて、笑い話にもなら……………」

喋っている鈴音の横を圧倒的な熱線が掠めた。

一夏と鈴はおしゃべりを中断、集中力を高める。

「……………なあ、鈴。あいつの動きって何かに似てないか？」

唐突に一夏が口を開く。

「何かって何よ？」

「いや、なんつーか……………機械じみてないか？」

「ISは機械よ。」

何言ってるの？みたいな表情をする鈴。

そんなバカにした顔しなくても良いんじゃないのか？

否定出来ないが……………

「……………そう言うんじゃないかな。えーと……………あれって本当に人が乗ってるのか？」

「は？ISの勉強をしつかりやったの？人が乗らなきゃISは動かない……………」

とそこまで言いかけた鈴の言葉が何かに思い当たって止まる。

「……………そういえばあれ、さつきからあたしたちが会話してるときってあんまり攻撃してこないわね……………まるで興味があるみたいに聞いているような……………」

「仮に、仮にだ。無人機だったらどうだ？」

「なに？無人機なら勝てるってどういうの？」

「ああ。人が乗ってないなら容赦なく全力で攻撃しても大丈夫だしな。」

白式の単一仕様能力ワンオフ・アビリティ零落白夜の威力は、非常に高い。

全ISの中で確実にトップクラスの威力を誇る。

そのため訓練や学内対戦で全力を使うわけにはいかないが無人機なら最悪の事態を想定しなくても済むのだ。

「全力も何もその攻撃自体が当たらないじゃない。」

「次は当てる。」

「言い切ったわね。じゃあ、そんなこと絶対にあり得ないけど、あれが無人機だと仮定して攻めましようか。」

一夏に一策があると知ってか、鈴はにやりと不敵に笑った。

半球状の強固な遮断シールドで囲われ周りを2、3周するだけで軽いマラソンができそうな巨大なアリーナの上空で何かが漂っていた。

一部を黒い装甲で覆われた身体はどちらかと言えば華奢な部類に入るであろう。

しかし、その四肢は筋肉がほどよくついており引き締まっている。

柔らかな髪を流れる風に赴くままになびかせながら思索する青年……沙月茜雫はじつと微かに光を放つ遮断シールドを見下ろしている。

その淡い光は蛍のようだがその防御力は亀の甲羅だろう。

その防御をどうやって突破しようか迷っていた。

「まあ、とりあえず適当に撃つかな。」

そう安い物でもするかのような気楽さで決めると、とりあえずお手軽な武装を向ける。

「しゅーど。」

気合のこもっていない声と鈍重そうな銃口から吐き出された圧

縮エネルギーのスコールは遮断シールドへと降り注ぐ。

茜雫の眼下で暴力的な爆炎の華が紫陽花のように咲いた。

凄まじい轟音と台風のような突風にこれは苦情がくるんじゃないかなあ、などと場違いなことが頭にちらつく。

撃つのをやめ、爆煙が晴れるのを待つ。

煙の隙間からあるかないか分からないほど薄く緑色の遮断シールドが顔を覗かす。

遮断シールドはまだまだ頑張れるようだ。

若いものにはまだまだ負けん、という事だろうか。

このISは遮断シールドより遅くに開発された筈なのであなたが間違っていない。

「ひびぐらい入っててくれよ……………」

遮断シールドは物質として存在しているわけじゃないので、ガラスみたいにひびなど入るはずないのだが、この頑固頑文さは時に困りものだ。

しかし、これから時代を創るのは新しいものだ。

特に人間に関しては。

茜雫はそれを示すため特大の力をぶつけることにする。

一夏達の奮闘は長く続かなかった。

「くっ………!!!」

無人機と確定してから四度目の特攻。

しかし一夏の渾身の斬撃はするりとかわされてしまう。

「一夏っ、馬鹿!!ちゃんと狙いなさいよ!!」

「狙ってるっっの!!」

敵ISの全身につけたスラスターの出力が尋常ではなく、鈴がどれほど注意を引いても一夏の突撃には必ず反応して一瞬で回避する。

巨体に似合わず動きは機敏で素早い。

一体に絞って攻撃しているが、他の二機にも注意を常に傾けなければならぬ。

シールドエネルギー残量が80を切っていた。

零落白夜を出せるのはよくてあと一回。

敵は攻撃を受けた後、でたらめに長い腕を振り回して接近、反撃をしてくる。

あれを喰らったら、体制を立て直す間に他の二機に攻撃されてしまう。

しかも、その高速回転状態から熱線砲撃までやるのだから手に負えない。

「ああもうつ!!めんどくさいわねコイツ!!」

鈴が衝撃砲を展開、砲撃を行う。

-----がしかし、無人機の巨腕がその見えない砲弾をたたき落とす。

これでもう七度目だ。

攻撃に気を取られた鈴に他の一機が巨腕を振りかぶって攻撃、それが僅かに掠め嫌な汗をかく。

「くそつ、なんてやつだよ。後ろにも目があるんじゃないか!？」

「無人機なんだからそれぐらいできて当然でしょ!！」

「それはそうだが、異常すぎるだろ!!どうやって攻めろっていうんだよ!？」



あんな反応どうやって攻撃を当てればいいのか全然予測が立たない。

「まさか三機で一つなのか……………」

「三機で一つ…?という事よ?」

「いや、だってどんなに一機の間をついても他の二機には俺らつて丸見えだろ?」

前側のセンサーが集中しているのでどうしても後ろ側は数の少ないセンサーでは精度も正確ではないだろう。

確かに三機が全て情報を共有しているならば死角を完全にカバーできる。

しかし、これがわかったところで状況が好転する訳でも打開策が見つかった訳でもない。

単純に数が違うのだ。

「さつきみたいになんか奇策を考えなさいよ!」

「そんな簡単に思いつくか!」

そんなに頭の回転が速かったら授業中に頭を抱えている事などしていない。

その後、よく物理的な意味で頭を抱えるが……………

ああ、なんか思い出したら情けなくなってしまった……………

「何いきなり落ち込んでんのよ、真面目にしなさいよ!?!」

一人でどんどんモチベーションが下がっている一夏に鈴がとうとうキレてしまう。

「ちよつとぐらいいいだろ!?!」

なんかもうヤケクソだ。

その時、

「あ。」

思いついた。

「……………何よ?」

鈴が落ち込んでた一夏がいきなり場に合わない間抜けな声を発したため怪訝そうに訊く。

「俺が合図したらアイツに向かって衝撃砲を撃つてくれ。最大威力で」

「?……………いいけど、当たらないわよ?」

さつきから何度も龍砲の砲弾は見えないにもかかわらず叩き落されている。

「いいんだよ、当たらなくても。」

意味が解らない。

「で、あたしはとりあえずどうすればいいのよ？」

「まず牽制をしておいてくれ。」

さつき自分を追い詰めた一夏の作戦を信じ、さつきと同じように牽制を開始する。

ただし、さつきよりも攻撃に集中する。

一瞬の間が命取りになるこの均衡、全ては一夏の作戦のためこの均衡をなんとしても崩せない。

「一夏あつー!!」

そんな均衡の中、無人機三機の真後ろのいきなりアリーナのピットから大声が響く。

その声は筭のものだった。

「男なら……男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてどうするー!!」

女性特有の高めの声がアリーナに良く響いた。

「……………」

無人機は動きを一斉に止めセンサーを鈴からそらし、じっと筈の方を見ている。

「何やってんのよ、アイツは!?!」

鈴が怒るのも仕方がない。

こんなところに生身で来て相手の注意を引くような行動自殺行為だ。

無人機は数秒間筈を見つめた後、そのうちの一体がその長い腕を筈のほうに向け、チャージを始めた。

それを見た筈が一瞬怯えたように身をすくめるのがハイパーセンサーで見えた。

「何も考えてなかったわけ!?!」

鈴はもう呆れるしかなかった。

しかし、無人機全機の注意が確実に筈に集中した。

「鈴、やれ!?!」

一夏は鈴の衝撃砲、その射線上に躍り出る。

「ちよっ、ちよつと馬鹿!?!何してんのよ、どきなさいよ!?!」

「いいから撃て!?!」

「ああもつっ・・・・・・・・！！どうなったって知らないわよ！！」

背中が吹き飛ばんじやないかと錯覚するほどの衝撃がくる。

高エネルギー反応を背中に受け、一夏は瞬時加速を作動させる。

瞬時加速は後部スラスタ翼からエネルギーを放出。

それを内部に一度取り込み、圧縮して放出する。

その際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速する。

それはつまり、外部からのエネルギーでもいいということ。

一夏は歯を食い縛って一気に加速。

その間にもエネルギーを零落白夜にも廻し、最大出力で無人機に斬りかかる。

無人機は筭に向けていたエネルギー充電済みの右腕を一夏に向けるが間に合わず、零落白夜の袈裟斬りによって右腕を肩から斬り落とされた。

が、無人機は怯む事なくそのまま左腕で一夏を思いっきりぶん殴った。

突っ込んだ勢いがそのまま拳に追加され、一夏は激痛で動けなくなってしまう。

無人機が左腕での砲塔を一夏に向けた。

「一夏!!」

鈴が叫ぶが間に合わない。

ズドドドドドドドドドドオオオオオオン

地震でも起きたかのようにアリーナ全体が揺れた。

一夏に砲塔を向けていた無人機がビデオの一時停止のように固まる。

「なんだ、地震か!？」

一夏は自分の状況も忘れて叫ぶ。

無人機全機が上を向いた。

一夏もつられてその先に目を向けると遮断シールドの外で爆発が耐えず起きている。

「誰かが打ち破ろうとしている！？でもあの火力じゃまだ足りないわよ！？」

とうとう教師達が強行手段をとったのか。

これは火力というより、この砲撃が遮断シールドの破壊には突貫力が足りていないからだろう。

突如、やかましい爆撃音が止まり、地響きが止む。

一度音が止んだと思われたその時、

赤黒いレーザーが遮断シールドを音も無く紙のように貫通した。

暴力的な光の濁流は一夏がその腕を斬り落とし片腕となった無人機を一息に呑み込み、着弾によって起きた爆風で一夏が吹っ飛んだ。

閃光が消えると無人機は跡形も無く消え去っていた。

後には巨大なクレーターができている。

「……………誰よ……………このバカみたいな火力。」

鈴の声が震えている。

こんな光景見たことない。

完全に大穴の空いた遮断シールドから入って来たのは一機のI  
Sだった。

起動しているのは、

「おお、一夏と鳳さん。元気にしてる？」

ちーす、とでも言いそうな気楽な感じで入ってきた茜雫だった。

こんな非常事態にいつも通りだ。

「……………あんだねえ。危うくこっちも死ぬところ  
だったじゃない!？」

「……………セン、それがお前の専用機か？」

鈴が怒り、一夏が某然と質問する。

茜雫のISは一言でいうとアンバランスだった。

全体的に黒く鋭角な流線形で細すぎるといってもいいくらい線  
が細い。

背には固定式の角ばったメインスラスタ―。



腰には補助スラスタと何か6つの突起のようなものが下にスカート状に伸びている。

本当の足より少し太いぐらいしかし装甲がなく、ふくらはぎ辺りにも補助スラスタ、足の裏はハイヒールのように細い。

左右に浮かんでいるアンロック・ユニットの盾は逆に巨大で厚く、無骨なつくりをしている。

その盾の下部からは大口径の二連装の銃口がそれぞれ見えている。

両手に持つ銃も細い手に不釣り合いなほど無骨でデカイ。

全く初めて見るタイプだ。

「一夏と鳳さんはほくきちちゃんを連れて下がって。」

「あんたが一人でどうすんのよ!？」

「いや、エネルギーの少ない君達が残っても邪魔だから。」

「くぐつ!?!」「」

これはもう任せるしかない。

一夏は箒を護るよつに前に立ち茜雲の戦いを見ることにした。

茜雫は残った二機と対峙しながら準備運動のように軽く肩を回す。

それだけで肩からゴキゴキと鈍い音になる。

「うわ、この歳でじじくせえ。」

非常にごめんごうむりたい。

茜雫は瞬きを一度して身体のスイッチを切り替える。

たったそれだけで茜雫の纏う空気が完全に変わる。

存在するだけであたりを掌握するような静かで全てを呑み込む圧倒的な威圧感。

茜雫が静かに『敵』に対して口を開く。

「お前らが誰なのかは知らないし、聞きもしない。どうせ応えないし、興味もない。でも、俺の存在意義を脅かすのなら……」

「……」

静かで冷たい独唱。

「消え失せろ。」

瞬間、茜雫の姿がカメラのフラッシュのような光の背部から出したかと思うと、

その姿が掻き消えた。

「なんですのあのISは!？」

管制室のセシリアは数分前と同じ事を口にした。

「あれが束が造った茜雫の専用機か。」

「違うんじゃないかな？」

千冬のつぶやきを湊が否定した。

「何故そう思う。」

「だってたばこが弄ったていつてたけど造った訳じゃないんでしょ。白式と同じであらかた完成したのに少し手を加えただけじゃない。流石に2、3日じゃあんま弄れないし。」

「!!!.....確かにな。ではあいつはどこであるものを手に入れたんだ?」

茜雫は世界を廻っていたのだからどこかの国で手に入れたのは間違いない。

各国でどんなにISを開発しても必ずその国の特徴が出てくる。

打鉄などいい例だ。

しかし、あんなもの特徴なもの見たことない。

「山田先生、あのISをスキャンしろ。」

「.....沙月君のですか?」

真耶が少し躊躇いがちに訊き返す。

「そつだ。」

「わ、わかりました。」

スキャンをかけると少し経って完了の電子音が静かな管制室に響いた。

「出ました。．．．でも、かなり情報が少ないです。」

「まあ、束が弄ったのだから出ただけマシだろ。開いてくれ。」

「は、はい。．．．．．機体名はエネミー。」

「．．．．．エネミー<sup>敵</sup>だと。．．．．．どういう意味だ。」

「全距離対応強襲殲滅型で．．．．．特殊装備？は『ストレイド』となっています。．．．．．それだけです。」

「全距離対応強襲殲滅型って無茶苦茶ですわ。」

真耶の報告にセシリアが反応した。

全距離対応という事は遠距離から近距離までバランスよく豊富な武装が揃っているのだろう。

各国のISはそれぞれ偏っている。

イギリスは遠距離を主体とした狙撃、日本は刀による極接近戦線と接近戦、シエアの高いフランスのリヴァイヴも豊富な銃を使用した汎用性のある銃撃戦をする。

全距離対応なんてそうそういない。

強襲という事は直線的な巡行速度と高い瞬間火力が要求され、殲滅型は広範囲の攻撃が可能性という意味だ。

正直、非常識だ。

「特殊武装じゃなくて特殊装備ってどういふことかな？」

「知るか、しかし、ストレイド迷子とは気になるな。」

ズドドドドドドドドドドオオオオオオン

そんな会話をしているとまた大きな爆発音が聴こえた。

「「「「「!?!?」「」「」」」」

余所見していた四人がモニターを見ると、全てが終わっていた。

残った二機の内一機は四肢が左腕を覗いて無く、うつ伏せで残った左腕を前に伸ばすように突き出して、背中から太く長い大身槍

で、串刺しに縫い付けられて固定されていた。

もう一機の姿は見当たらなかった。

その代わりに地面に先程と同じような大穴が一つ増えている。

「この短時間であの二機を全滅……………？ありえませんか……………」

「だが、全滅のようだな。」

セシリアのつぶやきの否定を千冬が現実を突きつける。

「山田先生？この映像ログ、残っていらっしやいますかしら？」

「の、残ってますけど……………」

「どうするつもりだ？」

「あとでもう一度閲覧させていただきませうわ！！到底信じられませんわ。」

ダメじゃないかな……………と湊が思っていると、

「まあ、いいだろう。」

なんと許可が降りた。

「いいの？」

思わず湊が効くが

「どうせここまで見てしまっっているんだ。今頃秘密もない。その代わりに一切の口外は禁止する。いいな。」

「わかりましたわ。」

千冬の警告にセシリアがはっきり返事する。

千冬が真耶からインカムをひったくり

「織斑。」

は、はい。

「全員無事か。」

俺は背中がかなりの痛い。

「自業自得だ。」

そんな……

弟の訴えを冷たく流す。

「ん？沙月はどうした？」

茜雫の姿が見えない。

終わったらあとは任せたっていつて逃げました。親指付きで。



「……………そうか、ではお前一人でグランドの整備をし  
る。」

えええ！？

一夏が声を上げる。

その際に少し傷が痛んだ。

こっちは死ぬほど背中が痛いのに。

「冗談だ。……………ところで織斑。沙月はどうだった？」

一夏がホツとしたが悔しさの混じった真剣な表情をする。

全てが圧倒的でした。今の俺じゃ三分持たない。

射撃センス、近接格闘、機体制御、機体の運び方、戦況の予測。

全てにおいて遠く及ばない。

茜雫が白式を操ったとしてもあの三機に圧勝しただろう。

「まあ、せいぜい強くなれ。」

一見、冷たい言葉だが千冬なりのエールだった。

「はい。」

一夏は強い眼で返事した。

茜雫は通路の防犯カメラの死角で壁に背を預け、座り込んでいた。

息が荒く、脂汗が少し流れる。

前髪が張り付いて気持ちが悪い。

誰かがみれば確実に保健室に強制送還だ。

今は避難で誰もいなくて助かった。

その時、軽い足跡が聴こえた。

足音から距離を計算して歩幅を予測。

そこからさらに体格を推測してみる。

160cmほどの女だろう。

そこで、ここには女ばかりなのだから当たり前か、と思う。

通路の影から現れたのは

「・・・・・・・・・・・・・・・・更識楯無」

「あん、そんな怖い顔で睨まないでよね。」

手には『発見』と達筆で書かれた扇子が握られている。

薄い水色の髪は本人の開放的な性格を表すかのように外に跳ねている。

かなりのスタイルが良く、蠱惑的な笑みがよく似合う残念な人たらしだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・なんかすごく嬉しい褒め言葉のあ

とに不愉快な電波を受信したんですけど……………」

こいつも読心術か？

自分の周りには厄介な女性が多い。

「誤信です。気にしないでください。そして、視界から出て行ってください。貴方に構っている元気は現在持ち合わせていませんので。」

「……………なんか冷たくない？」

「警戒してるんですよ。日本古来から暗部で暗躍してる楯無現当主に。」

「……………随分と詳しいわね。日本を出てたはずなのに。」

「……………Googleで検索したらヒットしたんです。」

するはずがない。

更識の情報をそんなものに流したら存在が消される可能性がある。

「……………まあ、いいけど。一つ質問。」

「……………なんですか？」

息が荒いまま怪訝そう見る。

「貴方は何者かしら？」

「……………同じ質問を鳳鈴音にもされました。一夏の幼馴染です。」

誤魔化そうとするが、出来た気はしない。

「なんで、そんなに精神負荷をかけないとISを操縦できないのかしら。そのIS限定かしら。」

茜雫のIS適正はSはずだ。

普通なら問題などないのに、短時間エネルギーを動かしたらもう息が荒い。

「……………コレに関してはちょっとあるものが拒絶反応を起こしまして。」

ISと茜雫の相性は最高、茜雫と『アイツ』の相性も最高、『アイツ』とエネミーのストレイドの相性も最高、しかし、『アイツ』とISの相性は劣悪だった。

茜雫とストレイドと『アイツ』の最高が三つ揃った状態で『アイツ』と劣悪のISは爆弾だ。

最高に混じった劣悪によって多量の精神負荷がかかっている。

その結果、これだ。

「よくわかんないけど、長く乗ったら、寿命が縮むわよ。」

「……………覚悟の上です。」

これがないと連中には勝てない。

何も守れない。

「うーん、お姉さん君のこと個人的に気に入ってただけだな。」

……………つてここで寝たらダメだって!？」

少し揺さぶるが気絶している。

ここに放置はしたくない。

「しよ〜がないな〜。お姉さんが運びましょう。……………」

重っ!？」

よく見ると茜雫は線が女子みたいに細いのにかなりの筋肉質だ。

かなり引き締まっている。

「……………」この埋め合わせはいつかデートでもして貰うからね。

楯無は恨めしそうにいうが茜雫はそのまま寝ている。

楯無はその寝顔が普段と違い年相応の可愛い寝顔に見えた。

ちなみに楯無が茜雫を運んだあとの寝顔を写真に収め、一番よく取れたのを自分の手元に、残りを新聞部の悪友黛薫子と裏ルートで売りさばいたのは余談である。

十三話 意義（後書き）

んーやつとでここまできた  
あと少し



十四話 隣人からの警告（前書き）

ヤバイ寝てしまった

## 十四話 隣人からの警告

照明の弱い薄暗い管制室に四人の女性がいる。

全員顔が整っておりその場に集合しているだけで街ゆく男性は後ろを振り向くだろう。

しかし、今その顔は一人を除いて険しい表情だ。

顔が整っているだけあって凄みがある。

「では、山田先生。映像を流してくれ。」

「分かりました。」

千冬が腕組みをしながらコンソールの前に座って準備していた真耶を促した。

真耶はコンソールを操作して先程の戦闘の映像ログをモニターに写す。

千冬、湊、真耶、セシリアの四人がモニターに視線を集中している。

本来なら千冬、湊、真耶の三人は無人机襲撃の事後処理をしなければならぬのだが、セシリアの先程の戦闘を見るというが申し出を許可し、自分達も何が起きたか確認のためにまだ管制室に残っていた。

モニターが電子命令をコンソールから受け取り、色とりどりの光を生み出し情報を見るものに与える。

記録は一夏と鈴の戦闘から始まった。

しかし、本人達には失礼だがここは特に見る必要はない。

問題はこの後だ。

真耶がキーボードを操作して早送りする。

モニターの中では一夏と鈴が高速で動き回っている。

鈴の龍砲により一夏の劣勢に、今度は一夏の奇策により逆に鈴の方が劣勢に、そして無人機が襲撃。

一夏と鈴の善戦虚しく追い込まれ、幕が無人機に隙を作った瞬間、一夏の奇策の瞬間加速で一機の右腕を斬り落とすが殴り飛ばされる。

ここで真耶は映像の早送りを止め、通常の早さに戻す。

問題はここからだ。

一夏に向けて無人機の熱線が放たれようとした時、アリーナ全

体を揺るがすほどの爆撃音が聴こえる。

全員の注意がそちらに向き、音がなりやんだと思った瞬間、柱のような太く赤黒い閃光がアリーナの遮断シールドをやすやすと突き破る。

外部からの侵入を阻止するための強固な遮断シールドが紙切れのようにみえる。

一夏に砲塔を向けていた隻腕の無人機を呑み込んだ。

と、同時に体全体を揺るがす爆音。

衝撃で一夏が吹き飛ばされて、2、3度転がったあとPICで体制を立て直す。

遮断シールドに盛大に空いた大穴から出てくる特徴的な黒いISを身に纏う茜雫。

やはりそのISは誰も見覚えがない。

フレームも何処の国とも似通ったところが見受けられない。

ここまで特徴的なのにどのISとも似通った部分が見受けられないなんてあり得ない。

「何度見てもデタラメで見たこともないISですわね。」

セシリアが遮断シールドを突き破った極太の血のように禍々しく凄まじいエネルギーの奔流に頬を引きつらせながら呻くように呟

く。

今まで見てきたISで一番線が細いというのにあの桁外れな火力を出したとは思えない。

基本フレームだけなら高機動を追求した手数で攻める低火力の機体に見える。

なのに左右に浮かぶアンロック・ユニットの盾と両手に持つ銃はデカイ。

両手の銃は持った腕よりも一回り太く長い。

モニターの中では一夏達がピットの方に避難している。

千冬達が見逃したのはここからモニターにエネミーのデータを聞き見ていた2分32秒の短い間だ。

先に動いたのは無人機二機だった。

両巨腕の高密度圧縮熱線の砲塔を全て向け一斉に発射した。

いく筋もの遮断シールドをも穿つ高熱の槍が茜雫目掛けて先を争つかのように殺到した。

対する茜雫は全く動かない。

ただ、左右に浮かぶ従者宜しくそばに浮かんでいた一つで自分の2/3を覆うような巨大なアンロック・ユニットの盾を通行止めでもするかのように向けた。

あの程度の厚さの物理シールド、普通ならこの灼熱の驟雨の前に障子のように簡単に貫通するはずだが、当たったと思われた瞬間強引に曲がった。

グニヤリと曲げられた熱線は遮断シールドに突き刺さり貫通していく。

「……ッ？あれは偏向射撃？」

「なんだそれは？」

セシリアの驚きの声に千冬が反応した。

セシリアは自分の機体の機密を明かすことを躊躇ったがこちらも最重要機密レベルのものを覚えてしまっている。

それぐらい衝撃的だ。

「……あれはわたくしのブルーティーズに搭載されているB-T兵器の精神感應制御、最大稼働時にB-T兵器のレーザーを故意的に曲げる偏向射撃と酷似しています。」

「では、茜雫が故意的に曲げているということか？」

「恐らく違いますわ。偏向射撃はあくまでも自分の放ったレーザーしか曲げられませんわ。それに曲げるには精神感應制御が最大稼働時のみ。イギリスの代表候補生で一番B-T適性の高いわたくしも含めてまだ誰も出来ていない机上の空論ですわ。レーザー出力をはじめ全く情報のないレーザーを手当り次第曲げるなんて出来るは

「ありませんわ。」

セシリアははっきり否定するが、

「でも、たばちくが弄ったっていつてたからね。どうなんだ  
る。」

「……………確かに篠ノ之博士なら分かりませんがど  
……………」

言い切ったセシリアを納得させかけるくらい篠ノ之束の名前は  
力を持っていた。

「山田先生、映像を再生してくれ。」

「は、はい。」

真耶はセシリアの説明を聞くため止めていた映像を流しはじめ  
た。

モニターの中でまた時が動き出す。

今度は茜雫の方が動いた。

銃を量子収納し、無人機を貫いていた長い大身槍を量子展開す  
る。

茜雫の背中に固定式のメインスラスター辺りがフラッシュを炊  
いたかの様に強烈な光が瞬いたと思うと、無人機一機の右腕が吹き  
飛んでいた。

綺麗に切断されている。

切断面からは筋組織のような黒いコードと鈍色のシリンダーが、血液の代わりに茶色のオイルが噴き出すのがわかった。

「わあ、オーバード・ギア・アクセル限界突破加速を接近に使っちゃうのか。危ないね。」

「限界突破加速……ですか？」

真耶の耳が湊の呟きに聞き覚えのない単語を拾い、尋ねた。

千冬が説明をする。

「限界突破加速は瞬間加速の発展版だ。イケニッション・ブースト通常、瞬間加速は一度放出した推進エネルギーを背部スラスタから取り込み、圧縮、爆発させて1秒程かけて放出、一気に加速する。限界突破加速は圧縮、爆発させたエネルギーを一瞬で放出、それをまた取り込み、更にエネルギーを上乗せさせて圧縮、爆発させ、一点放出させる過程を0.数秒でやることによつて本来なら出来るはずのない加速と瞬間速度を叩き出す変態機動だ。」

「変態はよけいだよ〜〜。」

千冬の一言に湊が嘆く。

しかし、実際変態だ。

「因みにこれをマスターできれば大抵の相手か、異常な感と動体視力を持たない限り、ワンサイドゲームだ。」



千冬でさえ湊が初めて披露した時は、数分とはいえ全く捕捉できずに滅多撃ちにされた。

その後もこの機動に馴れるまでかなりの時間を用いた。

湊もこれで射撃部門でヴァルキリーに輝いている。

対戦相手はマシンガンで飽和攻撃を受けつつ、視認捕捉して射撃しようとしたらいきなり視界から消え、死角からグレネードを数発叩き込まれ、捕捉したらまた視界から消え、グレネードを。

初戦の相手など一発も発砲することなく惨敗、なんとも惨めな思いをしていた。

「一瞬であの距離を詰めれるなんて接近戦に最適ですわね。」

「接近戦にはあんまり向かないかな。」

「え？何故です？」

これはあくまでも自分の最適のポジション取りのための移動技法。

接近戦に持ち込むため使用し、その勢いそのまま攻撃するなどの使い方、限界突破加速を多用する湊ですら滅多にしない。

「これを接近戦で使うには自分の姿勢、位置、相手との距離やどの体制で待ち受けているかなどを瞬きよりも早く一瞬で弾き出す空間認識能力、そしてこんな高速で接敵して正気を保つ精神力が必

要だね。」

もしそのままぶつかってしまうとどちらも無事ではすまない。

最悪18禁の事件現場が形成されるだろう。

こんな事出来る湊はやっぱり変態なのだろう。

モニターの中では茜雫が器用に長く重い大身槍を飛燕のように振り回し、防戦一方だった無人機の両脚を叩き斬った。

叩き斬られた両脚はエンジンオイルを辺りに撒き散らしながらくるくると回り、そのまま地面に落下。

これでもう、ただのスクラップだ。

無人機をそのまま踵落として地面に叩き落とすと、茜雫はつまらなそうにそっぽを向くとゴミでも捨てるかのように大身槍をポイツと真上に放り投げた。

無人機が必死に手を伸ばすかのように残った左腕の銃口を向けエネルギーをチャージする。

茜雫がこっちを向く様子は見られない。

エネルギーの充電が完了しすぐさま発射されようとする。

が、落下してきた大身槍が中枢機間を貫通、機能停止に陥る。

無人機の最後の抵抗は叶うことなく力を失った左腕はチャージ

済みのエネルギーを発射することなく地に倒れる。

茜雫は今度は両手に量子展開した大型の銃を下方から見上げる形で熱線を放っている最後一機の無人機に稼動盾の下部から突き出された二連装の砲身、計6つの銃口を向け発砲。

圧縮エネルギーの砲弾が次々と吐き出され、無人機を呑み込む。

発砲をやめ爆煙が晴れると無人機の半身は巨大な手で握り潰し引き抜いたかのようになかった。

装甲も全体的に破損し動くのもやっただろう。

茜雫は両手に持つエネルギーライフルの上部を稼動盾のエネルギーグレネードの二つの砲身の間挟み込む様にドッキング。

無人機は半身がもがれながらもこちらに銃口を向ける。

這いずる回るようにギシシャクともがく無人機に躊躇いなくトリガーを引く。

すると最初に遮断シールドを紙のように撃ち破った赤黒い閃光が無人機目掛けて奔る。

直撃した無人機は泥人形にホースで水を撒くように文字通り溶解。

あとにできた黒いクレーターからは煙が線香のように煙を静かに上げている。

それはまるで無人機の墓とでも主張するかのようだった。

管制室はあまりの戦闘力にお通夜のように静かだ。

しかし、千冬と湊は茜雫に注目していた。

茜雫の戦闘中の表情は二人しか知らないあの表情だった。

茜雫は寮部屋のベッドの上にあった。

そして、目覚めた。

目だけ動かして周りを確認。

誰もいないようだ。

が、

「よう。」

「寝るか。」

即座に頭まで布団をかぶる。

見なかった事にしよう。

自分に言い聞かせる。

「……………おい、ちょっと待て。久々なのに随分な挨拶じゃねえか。」

なんで『コイツ』がいるんだよ。

ただえさえ眠くてだるいのに、しかもその元凶の『コイツ』が目が覚めたらいるなんてあり得ない。

普通天使だろここは……………

中東でも毎朝可愛らしい天使みたいな少女が起こしてくれたぞ。

地獄の鬼と形容できるようなおっさんと冷氷でできた刃のようなサムライガールとセットで……………

あれはプラマイゼロどころかマイナスだった。

何か鬱になってきた。

もう過ぎたけど5月病か？

現実逃避に限る。

「……………このまま居座るぞ。」

即座に起きる。

そんな事されてたまるか。

目障りだ。

さっさと要件を終わらせてもらってご退場願う。

「……………要件を7字で答えなさい。」

「起きちゃったから」

畜生。

ラッキー7と掛けてワザと微妙な数にしたのに……………

「……………起きちゃったとか『オマエ』が喋ると気持ち悪い。」

それでも反撃。

我ながらなんと子供っぽい。

「ガキみたいな反撃だな。」

畜生畜生。

「……………なんで『オマエ』が視界にいるんだよ。てか、俺の容姿を使っただけじゃねえ。そんなもんもう一人のあいつで十分だ。」

「別に本当に存在しているわけじゃないだろ？お前以外に姿も声もわかんないしな。」

確かに『コイツ』は茜雫の脳の神経系に干渉して視覚や聴覚を誤認させているだけ。

本当に存在しているわけじゃない、いや、存在できない。

他人に見えないし聞こえないが茜雫自身は見てて気分が悪い。

何より感覚の主導権をこいつに握られているみたいだ。

「お前の容姿は趣味だ。この方がお前と繋がっていると分かりやすいだろ？」

……………クソが……………趣味が悪い

「……………随分怖いツラだな。いつもと全然違う。『仲間』ごっこしている奴らには絶対に晒さないだろ。バレちまうからな。お前自身が。」

そっだ、こんな表情は千冬と湊に片手で数えられる程しか見せた事がない。

6年前に表に出た時は二人が良く気づいてくれて直してくれた。  
頭に置かれた手とよく頬をほぐすように触れた暖かい手はよく  
憶えている。

だから、隠す。

嘘をつく。

逃げ道を作って自分を笑顔で覆い尽くす。

本当の奥底は誰にも見せる気はない。

「まあ、せいぜい頑張れよ。」

言われなくとも、細心の注意は払っているつもりだ。

「そのうちオレがお前を取りに行くからな。ちゃんととっけ  
よその身体。」

そう言っただけで歪んだ笑い方をする。

俺もそんなもんなのかな……………

「……………返り討ちにしてやるから」

「はっ。そうじゃなきゃな。」



「……そういえば、なんで『オマエ』滅多に起きないのに、一夏達のこと知ってたんだよ？」

『コイツ』は普段ずっと寝て、こっちに干渉してこない。

年に数回起きれば世界の何処かで奇跡が起きていたに違いない。

一夏達とは1、2回しか見た事ないはずだ。

それもちらっと見た程度だろう。

「そりゃあ、あれだ。数少ない記憶だからこそよく憶えているんだよ。」

……畜生

「……聞かなけりゃ良かった？」

「なんでだよ？いい言葉だろ？」

「『オマエ』に諭されたみたいだからヤダ？一生寝てる？」

「……はあ、いつまで経ってもガキだなあ。飼い狗」

「失せる。」

今度は加減なしの殺気を向ける。

『アイツ』が消えた。

今のは何もかも忘れた空っぽの俺への当てつけか？

だとしたら、何も言い返せないな。

いきなり入り口のドアの開く音がする。

出て来たのは、

「せつちくおきたあ〜〜?」

布仏本音ー通称のほほんさんだった。

ばああ、と黄金の癒しオーラが辺り構わず振りまいて万物に活力を与えてくれそうだ。

今の茜雫には同じ重さのダイヤより価値がある。

しかし、疑問が残る。

「ん?なぜ?なんでここにいるの?」

「せつちく、ここはねえ〜てんごおくなんだよ〜〜」

「そっかー死んじゃったのかあ俺。確かに目の前に天使がいるねえ。癒されるからなんかどうでも良くなってきたよ」

特別なオーラをほんわりと滲み出すのほほんさんに茜雫はなんだか癒されてそれもいいかと思ってしまう。

「いやったあ〜、ほめられたあ〜。いええ〜い!はいたああ  
つち」

言葉の勢いとは裏腹にポコン、と音がなるハイタッチに柔かい手だなあ、と思いながらやっぱり癒される。

ほんわかなのほんさん天使を見ているとなんとも冥福だ。

「私も混ぜてもらおうかしら。」

ババン、と楯無登場。

今は何やら上等そうな綺麗な薄桃色の桜の扇子で口元を隠し、目を細めてにんまりと微笑する姿は非常に絵になる。

「ここは地獄だったのかあ。」

頭を抱える。

すると本音は墮天使のサタンだったのか。

癒しオーラ恐るべし。

全く気がつかなかった。

最強の隠密スキルだ。

伝説のスネークの愛用隠密道具――ダンボールをはるかに凌ぐ。

小道具なしで手ぶらでいけて、非常にエコだ。

「酷くないかしらっ？」

「そんなに天使になりたいなら向こうでなっってください。」

「……………暗に生きているうちは無理だと。」

「少なくともその人たらしを改善しない限り。」

「むむむ。」

「まあ、それが楯無さんの美点ですけどね。」

流石に可哀想なので褒める。

「嬉しいことってくれるわね。」

「なら黙って。」

「やっぱり酷い?」

「せつち〜、ここに運んでくれたのお嬢様なんだよ〜」

「そうよ〜重かったんだからね。」

「お嬢様?」

「あ、そつちに反応するんだ。」

いや、だってねえ

「代々更識家にねえ〜お仕えしてるんだよあ〜。」

「不憫な。」

目頭が熱くなってきた。

どれだけ苦痛な時代を過ごしてきたのか。

「やっぱ意地悪だ。」

楯無が拗ねてしまった。

何かイタズラ心がムクムクと湧いてくる。

これは本能だ。

抑えられない。

茜雫は楯無の鼻をついと軽く摘まむ。

「ーーーーッ？」

不意を突かれた楯無が驚いて飛び上がる。

「おお、珍しい光景ですね。お願いだから拗ねないでください。」

「……………そおゆうの卑怯なんじゃないかなあ。」  
本当にいきなりだし。」

顔を真っ赤にすると楯無はまた拗ねたようにつぶやく。

なにが？

「はあい、せつち〜おちゃだよ。」

そこでなんとのはほんさんが部屋の隅に設置された電気ポッドのお湯でお茶を淹れて来てくれた。

「ここからでもお茶特有のいい香りって……………」

「なんでこの距離で既に臭うの？」

ローテンポで歩いてくるのはほんさんとはまだ距離があるのにもう匂いがする。

「気にしなあい、気にしなあい。はあい、どつぞお」

湯飲みを受け取る。

「……………」

なんかもうお茶というよりお茶の葉だ。

緑茶一色だ。

ゆするとちやぶちやぶではなく半液体状になっておりかなりヤバそう。

「まあいいや。」

せつかく淹れてくれたのに申し訳ない。

あの長い袖では苦勞しただろう。

それにまだ目覚めてない頭には丁度いいかもしれない。

「苦ッ」

やっぱり無理、もうお茶じゃない。



十五話 事件後（前書き）

最近暑いっすね〜

## 十五話 事件後

箒は太陽が地平線に沈みゆく夕暮れの中、歩いている。

右をキヨロキヨロ左をキヨロキヨロ。

また十数歩進み、右をキヨロキヨロ左をキヨロキヨロ。

首や身体の向きを変える度に腰まで黒く長い綺麗なポニーテールが本人の心情を表すかの様に左右に揺れている。

どこにいるのだ、アイツは？

箒が不安になりながらも人探しをしていた。

探し人は幼馴染の沙月茜雫。

戦闘が終わった途端足早にさっさと行方不明に。

いつも気がついたらいなくなる茜雫に急にいなくなる度に6年前を思い出してしまう不安になる。

この時茜雫は、自分で淹れ直したお茶でのほほんさん達と和んでいたのを筈が知ったらどうなるだろうか。

恐らく血だるまだろうか。

そんなことを露とも思わない筈はずっと探し回っている。

最後にアリーナで見た時はとても疲れた顔をしていた。

それが気になって仕方が無い。

「……………また、役に立てなかったな……………  
私は。」

先ほど、ほとんど何もできなかった自分に自己嫌悪に陥る。

いつも助けられたばかりだったのであの時頼られた時は手助けができるのが喜んだが結局は特に役立つことは無かった。

幼馴染でありながら助けになれず茜雫一人に面倒事を背負わせてしまう自分や一夏に歯がゆくなる。

茜雫一人で無人機三機を片付けたのと変わらない。

どうしたらいいのかもんもんと悩んでいると保健室の前に辿り着いた。

何かを忘れてしまっている……………

ドアの目の前で立ち止り、顎に手を当て頭を捻って思い出す。

そういえば、一夏は背中中の傷が思ったより酷かったので保健室で安静にしているのだった。

なんて事だ。

茜雫を探すのに時間を掛けすぎて事件後から一夏のお見舞いに行くのを忘れてしまった。

自分の幼馴染は茜雫だけではないというのに。

申し訳ない気持ちで保健室の入り口のドアをゆっくりと開けると、騒がしい声が廊下まで響く。

何やらセシリアと鈴が揉めていた。

一夏はベットの上で身を起こして苦笑いをしながら、この成り行きを見守っている。

「一夏、お前自身が原因なのになに他人事のように見ている。さっさと止める。あんまり騒がしいと怒られるぞ。」

ドアをくぐりながら筭が呆れたようにこの騒ぎの元凶である鈍感に注意。

「俺にどうしろっていうんだよ。てか、なんで俺が問題を起こしたことになるんだよ?」

少しは敏感になれと切実な願いを込めて注意したのだが、から

ぶりに終わった。

気づかないのか？こいつは？

どうして自分の幼馴染はこつも鈍感なのか本当に謎だ。

類は友を呼ぶというのか？

いやいや自分はこの鈍感じゃないはずだ。

しかし、心労の尽きない幼馴染二人に頭を抱えてしまう。

「あら、篠ノ之さん。随分と遅かったですわね。」

セシリアが挑発的な口調で箸を出迎える。

「少し探し物をしててな。それよりも一夏、何だその様は。男ならもつとしっかりしたらどうだ。」

いちいち相手にしてはキリがないので流しておく。

セシリアは不満そうだったが、何も言ってこなかった。

ありがたい。

「いや、めちゃくちゃ痛かったんだぞ。あれ。」

エネルギーをほとんど吸収したとはいえ甲龍の龍砲を最大出力で背中に喰らったのだ、かなり痛いはずだ。

実際に一夏の背中では全体的に打撲している。

「お前の鍛え方が足りんからだ。」

「わかってるよ。」

箒のなかなか辛辣な言葉に一夏は少し納得がいかないようだが自覚はあるらしい。

一夏自身、幼馴染の茜雫にあんな戦いを見せつけられて自分がまだまだだとよく実感した。

「あんたねえ、こんな時間になってやっとお見舞いに来たのに随分偉そうね。だいたいあんたが無策であんなとこに来たから一夏が怪我したんじゃない。」

先ほどから一夏に言いたい放題の箒に鈴が怒りを露わにする。

しかし、箒にも言い分がある。

「仕方が無いであろう。センがあれからまた姿を見せないのだから。捜していたのだ。」

「また消えたのかよ？センの奴。」

まるでちよろちよるとどっかに行ってしまう子供のような茜雫に一夏が少し呆れてしまう。

「それに私があんな真似をしたのはセンの作戦だ。」

「作戦？どこが？」

鈴がバカいっつなといった感じで訊き返す。

「センがピットから一夏に激励すれば一夏が無人機を一機倒すから、といったのだ。」

「それだけで倒すからって……まさかあいつ、一夏がああ策に出ることも予測済みだったってこと？」

鈴が箒に驚きながら詰め寄る。

箒も訊かれても答えようがない。

あいつの先を読む力と観察眼はすば抜けている。

並の人間の足元にも及ばない。

「わ、私に訊くな？私だって知らないのだから？」

「センの予測範囲内かよ……すげーよな、やっぱ。」

「一夏はもうお手上げといった感じだ。」

あれまで読めれていたなんて茜雫の隣に立つには相当な努力が必要なようだ。

「何だ、もう諦めるのか？」

篝が挑戦的に一夏に訊く。

まさか、と一夏はかぶりをふる。

「諦めるわけねえだろ。ぜってえ追いついて超えて見せる。あいつの隣に立てるようになってやる。」

迷い नाही 強い目だ。

篝も同じ気持ちだ。

「それでこそ、私とセンの幼馴染だ。」

「ちょっと、わたくしの存在を忘れないでくださる？」

「一夏の幼馴染はあたしもなんだけど？」

なんだかいい雰囲気の二人にセシリアと鈴が存在を主張するかの様に言いよる。

「お前はセカンドだろ。私とセンはファーストだ。私たちの方が早い。」

「何ですってえ？」

「過去に過ごした時間が全てではありませんわ？」

妙に競い合い、さらに騒ぐ三人に一夏は止める勇気が出ない。

下手に止めにはいれば、なんだか自分に火の粉が飛んで来そう



だ。

今、これ以上怪我を増やしたくはない。

いくら鈍感な一夏でも本能で悟ることができた。

一夏にできる事は先生が早く駆けつけて来て穩便に処理してくれる事だけだ。

その後、願いごとが叶ったのか騒ぎを聞きつけた保健室の先生に三人が大目玉を喰らうのは言うまでもない。

ぐらん ぐらん ぐらん

フェンスの上で風に揺られて不安定に揺れる影があった。

「あゝ涼し〜。」

茜雫はその日の夜、屋上にいた。

落下防止のフェンスの上で身体全体が危なっかしく前後にぶらぶら揺れており、ハタから見ると今にも飛び降り自殺で直前に悩んでいるかの様だ。

交互にぶらぶらさせている足がフェンスの網に当たる度、ガシヤガシヤと軽快な音を立てる。

高いところは好きだ。

ごちゃごちゃした考えが吹っ飛んですっきりする。

物事な確認が楽だ。

無心にもなれる。

特に夜は人気が無く、静かで良く考えがまとまる。

晴れた日に風が少し出ている時は最高だ。

身体が揺れて、なんだか落ち着く。

母親の腕の中で揺られる赤子のように人間の本能なのかもしれない。

母の温もりを知らない茜雫にとっては未開拓の感覚。

掘り出し物はなかなかデカイ。

涼しくて月が薄っすらと辺りを照らしている風景は風情がある。

都会の風景では無く、人工物のない所なら本当に綺麗だ。

茜雫が静かに、吹く風に身を委ねていると足音がした。

これは、

「おい、何をしている？茜雫。」

千冬だった。

事後処理は終わったのだろうか。

「え〜と、夜景を少し。」

視界には暗闇に包まれた最近になってやっと建物の位置を覚えた学校が、少し視線を上によらせば月光の光を受けて散りばめた寶石のような海面が、遠くには人口の光源の集合体が暗い大地の中に騒がしく映っている。

未来はお先真っ暗、見た目だけが派手な場所に人が集まり、皆が見落とす所に淡く本当の輝きがある。

よく世界の状況が映し出された光景だ。

上でふんぞり返っているだけの無能どもが創り出した自己満足の世界。

「お前はなにを考えている？」

犯人を追い詰めた刑事みただ。

千冬ならなんか似合う。

銃ではなく出席簿が火を吹くだろう。

重心をずらし顔を傾けるように振り返る。

「………まるで人が疚しいことを企んでるみたいに言わないで下さいよ。」

茜雫が困ったように言う。

「………昔から湊と共に、いろいろ企んでいただろうが。」

わあ、何にも言えねえ。

「それとこれとは別です。」

「私はまだ何も言ってないぞ。」

ぬわあ、嵌めやがった。

千冬は茜雫が珍しく墓穴を掘ったことにご満悦の様子だ。

普段引き締めている頬もほどよく緩んでいる。

それだけでかなり厳しい印象も和らいで男もよって来て出会うもあるかもしれないのに……

「どうせあのISが何なのか聞きたいんでしょ？」

「それもだが、騒ぎの後どこにいた？」

「人たらしに拉致られて天使と殺人的に苦いお茶を飲んでました。」

「人たらしとは更識のことか。」

「あ、やっぱりわかります？」

やっぱりあの人にはピッタリのレットルのようだ。

共通理解というやつだろう。

「当たり前だ。あんな馴れ馴れしい最悪の問題児などそれで十分だ。」

なかなか辛辣である。

何かあったのだろうか。

「しかし、天使とは誰の事だ？」

千冬が何故か面白くないといった顔で訊いて来た。

どうかしたにだろうか。

「秘密と言うことで、そろそろ本題に移りましょう。あのISですが、まだ俺から言えることはありません。」

「では、私から訊こう。」

.....この教師、人の言質をとって来やがったよ。

茜雫は千冬のしたたかさに舌を巻いた。

この人には敵わない。

「あのISは何処の国の物だ？」

「何処の国でもありません。」

あんな高性能な物創り出したら国の政治家どもは他国に自分達の権威を見せびらかすだろう。

「まさか連中の物ではないだろうな。」

茜雫は驚く。

まさかこんなすぐにはれるとは。

誤魔化しは効かないようだ。

「うーん、5割正解ですかね。あと半分は三角。」

「どう言う事だ？」

「実際俺も自分でアレを手に入れたわけじゃないのでわかりません。」

あのISはおっさんが何処からか強奪して来て、茜雫がもらった物だ。

あとは、プロトタイプの『ストレイド』を使って自分の必要に応じて設計を直して、束が完成というより改良した『ストレイド』をつぎ込んで束と共に完成、それが『エネミー』だ。

「……………いい加減、連中と繋がりを切れ。」

千冬が嫌悪感を全開にして言い捨てる。

茜雫自身もそれができたらどんなに幸せか。

しかし、

「無理ですよ。連中も今は中東で足止めされていますが、恐らく俺がここにいると暴露したら何らかのアクションを起こします。」

今はおっさんがなかなか派手にやっているが、所詮時間稼ぎだ。

連中の片側がすぐに俺がいなくなっていると気づくだろう。

そうならば茜雫も動かなければならない。

時間は有限だ。

「では、また行方不明になるつもりか？6年前のあの日のように。」

絶対にさせないぞ

とでもいうような千冬の力強い眼差しがそう物語っている。

「……………俺も善処します。」

それがたとえ無理だとしても少しぐらい抗うぐらい許されるかもしれない。

茜雫はバック転するように一回転しながら3m程のフェンスの策から屋上のコンクリートに器用に降り立つ。

茜雫とコンクリートの間からドラムを叩くようにタタンと鼓膜をくすぐる音を発する。

茜雫が千冬の隣を通り過ぎようとすると、

「お前はその肩に重い荷を背負い過ぎだ。私もお前と家族同然



の仲だ。少しは分けて一緒に背負うことと甘えることを覚える。」

千冬が諭す様に口を静かに開く。

茜雫は昔から大抵のことは自分でやってしまった。

千冬と東と湊があまり何もしてやることができなかつたから気がついたら自分で何でもやるようになってしまった。

千冬と湊は少し後悔している。

もっと構ってやる時間を作ってやれたらと。

東も同じだろう。

だから、ここに連れ戻した。

「大丈夫ですよ。」

茜雫は笑った。

この人達には十分甘えて来た。

今だってそうだ。

まだ、あと少しなら耐えられる。

背負うことができる。

「俺は『へいき』ですよ」

微妙なイントネーションの感情のない平坦な声。

疑問とも肯定ともとれる言い方に千冬はその背中を見つめることしか出来ない。

齒痒くなった。

茜雫と初めて会った時みたいだ。

何か言おうとした。

結局何も言えなかった。

茜雫の足音が不自然に途切れた。

千冬が後ろを振り向く。

そこには初めから誰もいなかったかの様にそよ風の音しか残されていなかった。

茜雫は屋上で千冬と別れた後一夏と篝の部屋に行くことにした。

いろいろしているうちに、騒ぎからまだ一度も会っていないかった。

顔ぐらい見せないと後が怖い。

脳内に最近のトラウマビジョンが繰り返し上映されている。

ああ、億劫だ。

ノックもせずに部屋のドアを開ける。

このぐらいでは怒られないだろう。

「おお、セン？何処いったんだよ？」

「セン？ 捜したのだぞ？」

一夏が軽く手を上げて箒は詰め寄って来た。

「ご、ごめん。 久々にIS乗ったら気分が悪くなっちゃったんだよ。 それでなんかいろいろあつてごたついたら、こんな時間に」

「……………まあ、よからう。」

つかんでいた襟首をスルリと手から離す。

「なんかいい匂いがするね。」

部屋から香ばしい匂いがする。

なんだかお腹が自己主張を始めた。

「ああ、箒がチャーハンを作ってくれたんだよ。 で、今から食べるよ。」

「いいな。」

お腹が空いているのでとても羨ましい。

「お、お前の分もちゃんと用意してあるぞ。」

「え、マジで。 ほっきちゃん。 貰ってもいい？」

「勿論だ。」

箒はその豊富な胸を張る。

なかなか目の保養のなる。

冥福だ。

タツパの中にはホカホカの金色の米が待っている。

かなり美味しそうだ。

「じゃあ、いただきます。」

箒が真剣な眼差しでこちらをガン見してくる。

若干食べにくさを感じるが、味が気になるのだろう、そのまま  
気にせずスプーンで咀嚼する。

「「じ」、これは？」

まさかの一夏とのシンクロ。

「ど、どうだ。」

箒がゴクリと唾を飲む。

「「味がしない」」

「.....え？」

「味がしない」

「そ、そんなわけないであろう？貸してみる？」

茜雫からスプーンとタツパを分捕り自分も味見。

「あ、味がしない」

「なんかある意味凄いよね。」

「確かにな。」

どんな化学反応が起こったのだろうか。

「まあ、いいけど。」

「お、おい？待て、セン？」

茜雫は箸からタツパとスプーンを取り返し食べるのを再開する。

「ほぐきちゃんがわざわざ作ってくれた物を無下にするのはね、

一夏。」

「確かにな。不味いってわけじゃないしな。」

「まあ、次頑張っつてよ。楽しみにしてるから。」

「う、うむ。」

箒が楽しみにしてるからの言葉に次に向けて決意を固めておると、ある事実気づく。

(ん？今、センが食べていたスプーンを．．．．．わ、私  
が分捕って使ってしまった？しかも、その後、またセンがそのまま  
私のく、口付けしたスプーンを使った．．．．．こ、こ、こ、こ、  
これは間接キスなのか？)

いきなり顔を成熟した林檎のように真っ赤にした幼馴染の姿を  
一夏と茜雫はスプーンをくわえたまま不思議そうに見ていた。

茜雫が荷作りされたダンボールを発見。

「ん？もうお引越しするの？」

箒が使い物にならないので、一夏に質問。

「ああ、部屋の都合がついたらしいからな。」

「ああああああ。どうしてくれるんだよ。」

顔を両掌で覆い落ち込み出す茜雫。

「．．．．．何落ち込んでんだよ。」

「このままじゃ一夏とほくきちゃんの面白コントと熱い関係が見れなくーーーーーッ？」

「黙れ。」

ドゴオオオオオオオオオオ

グシヤ

最後まで言葉は続くことはなかった。

何やら茶色の棒の様な物が茜雫の頭を横殴りに吹っ飛ばした。

そのまま茜雫は横にポテツと倒れ沈黙。

痙攣を始めた。

「センツツツツツツツツツツ？顔にモザイクが掛かっちゃってるぞ？なんかもう言葉じゃ表現出来ないことになっちゃてるし？」



その日から一夏と茜雫の部屋となる壁には謎の赤い斑点が、茜雫の頭に結構な頻度で包帯が巻かれているのは、ファッションを先取りしようとしたのではないかと噂が流れたのだった。

十五話 事件後（後書き）

評価してもらえると嬉しいです

十六話 自室の下着(前書き)

高専生に小説を書くのは向かないらしい  
日常がハード過ぎる

## 十六話 自室の下着

「はあああああああしねあああああああ．．．．．」

「おい？溜息になんか物騒な言葉が混ざってるぞ？」

一夏は茜雫が箒と入れ替わり一夏の二人部屋へ引っ越すのを手伝っている。

といっても、茜雫の私物はかなり少ない。

というより、私物なんかよりも何かの書類の束の方が重いかもしれない。

しかし、この量．．．．何の書類なんだ。

読もうにも何か分からない外国語で書かれているため何の書類なのかさっぱり分からない。

「なんだそんなに落ち込んでるんだよ。」

何やら茜雫はさっきからずっと落ち込んでいた。

頭には包帯がぐるぐる巻きにされている。

傷を塞ぐというより、固定している。

包帯をしないとドロツと中身が出るかもしれない。

出ないと言い切れないのがすごく恐ろしい。

「さつきも言ったじゃん。一夏とほぐきちゃんの面白コソトと熱い関係が見れなくなちゃったからだよ。．．．．．最近のア  
ルティメット娯楽だったのに．．．．．」

「．．．．．なんだよ。アルティメット娯楽って．．．．．」

頭を殴られすぎてヤバくなってしまっている。

一夏は本格的に茜雫の入院を検討し始める。

とりあえず先ほどからの疑問をぶつけてみる。

「てか、この紙束なんだよ。かなり重いんだけど。」

「．．．．．俺の苦勞の重さだよ。」

哀愁漂うその横顔に一夏は何も言えなくなる。

てか、突っ込んじゃいけないような気がする。

触らぬ神に祟りなしだ。

こいつに何されるかわからん。

「何で今日引越したんだよ。疲れてんのに。」

「大人の事情って奴だろ。」

「滅びてしまえ。」

「無理いなよ。」

こいつはたまにむちゃくちゃを言っ。

「つつかれた――――――――――」

「？」

茜雫はベットにルパンダイブ。

そのままゴロゴロ転がっている。

いままで異性が使ってたのに少しは何か思わないのか、と一夏は内心ツツコム。

こいつにはいろんな事で少しは自重してもらいたい。

「静かにした方がいいんじゃないのか？千冬姉が来ちまうぞ。」

「ん〜、まだ来ないんじゃない？」

茜雫は転がるのをやめベットの淵から顔を逆さまに出して一夏を見上げる。

髪が逆さまに垂れてサイヤ人みたいな事になっている。

「何でだよ？」

これだけ騒げば飛んで来るだろ。

愛刀ー出席簿を持って、スパツとしに来る筈だ。

おお、怖え。

想像だけで震えてきた。

「だって、事後処理とか大変だろう？しかも、相手は無人機っばいし。」

確かに無人機なら大問題だ。

あれだけの技術力を持ってこのIS学園を襲撃なんて世界に喧嘩を売ってるのも同然だ。

いや、まてよ。

「無人機じゃ無かったら、セン、ヤバインじゃないのか？」

「あ……………かもしれない。」

ヤバイなんてもんじゃないだろ。

一夏も一機の腕を切り落としたが、茜雫は一機は左腕残して切断そして串刺しになっている。

残りの二機は完全に存在そのものを消しとばして残骸すら残っていない。

万が一有人だったら確実に死んでいる。

大問題だ。

「まあ、無人機だと思うけどな。それはそうと、セン。あのI S何なんだよ？」

「千冬さんと人たらしにもおんなじ質問された。」

「千冬姉はともかく、人たらしってなんだよ。」

「自称天使とかいう暗いとこの人。」

いや、意味不明何ですけど。

明るいのか暗いのかどっちなのか。



「まあ、そのうち会えるよ。」

茜雫はニヤリと意味深に笑う。

あの人には『一夏ハーレム計画』に参加してもらえるとありがたい。

それに一夏をそのうち鍛えてもらわなければ。

「よくわからないけど、結局あのISは何なんだよ?」

また何か企んでいるのか、と嘆息しながら話を本題にズラす。

相変わらず茜雫は自分の事を煙に巻こうとする。

しかし、幼馴染の一夏にそんなもの通用しない。

「その質問に戻っちゃうか?。ん〜とねえ企業秘密ってことで。」

「すげ〜便利この言葉」

考えた人にノーベル賞贈ってレッドカーペットを歩かせてあげたい。

「はあ、教えてくれるとは思ってなかったけどな。」

「じゃあ、訊かないでよ一夏。」

茜雫は何やら含み笑いをしながらパタパタとまたベットの  
上を両手両足を広げながら転がる。

なんか犬が遊んでのポーズをしているみたいだ。

「少しぐらいいいだろ。お前、俺達にいつも何にも教えないで  
何かやるし。」

なかなか心外だ。

そんな風に思われていたとは。

となると、千冬、湊、篝もそんな風に思っているのだろうか。

警戒されると動きにくくなるな。

茜雫がどうしたものかと視線をずらす。

一夏から床に。

ダンボールの荷解きをせねば。

このままじゃ何もできない。

つまずいて頭でも打ったら今度こそ頭が変形してしまう。

床から机に。

書類の束も片付けないとジエンガよろしく倒れそうだ。

書類でスカイツリーを建設する気はない。

床から壁へ。

そこで大事な事に気づく。

「あ。」

「ん？どうした、セン。」

いきなり声を上げる茜雫に書類の束が倒れないかと心配そうに見ていた一夏が視線を向ける。

「壁。」

「ん？………のわぁ？」

白赤白赤白赤白赤白赤白赤の様

なんか白い乳白色の壁が殺人現場みたいなことになってる。

撮影のセットに使えそうだ。

「掃除しないとヤバイよね。」

「いや、これだけ出血したのにそんなピンピンしてるお前の方がヤバイだろ。」

「ごもつともです。」

その時

コンコン

ドアがノックされる音がする。

「あれ、引越し早々に来客かな？」

箒目的ならどうしようもない。

茜雫が殴られてとりあえずモザイクがとれるぐらいに修復した後保健室にいつて治療していたため、箒の移動先はまだ二人とも知らなかった。

「はいはい」

一夏には掃除をじて貰って茜雫が軽い調子でドアを開ける。

何とそこには箒が立っていた。

茜雫は一步後ずさる。

「……………なぜ逃げる。」

「トラウマが少し。」

これは本当だ。

自分の頭が吹っ飛ぶ複数の可能性のビジョンが頭の中で走馬灯の様に流れる。

「あ、あれはお前が悪い。」

確かにからかいすぎたかもしれない。

「・・・・・・・・・・今度はもう少し優しくお願いします。」

せめて保険の防衛線ぐらい張ったっていいだろう。

「う・・・・・・・・・・た、確かに。すまなかった。」

ぺこりと可愛らしく頭を下げる筈。

今時珍しい素直さだ。

筈みたいな素直な大和撫子は絶滅危惧種に認定されている。

「何か忘れ物？」

ここにきたということは何か用事がある筈だ。

茜雫の中では忘れ物の可能性が最も高いと推測している。

「そ、そうではない。」

違っらしい。

珍しく歯切れの悪い言い方だ。

となると、

「一夏になんか用？呼ぼうか？」

「い、一夏でもない。というか、何をあいつはやっている？」

篤からは一夏が机のうえで高層ビルの窓の清掃業をやっているように見えた。

「証拠隠滅。」

「は？．．．．．ああ、別に私が悪いのだからそんな事しなくてよからう。」

因みに保健室には怪我の理由はこけて頭を打った、ということになっている。

かなり胡散がられたが、本人がいうなら対したことはないのだらう、ということ許された。

「後々面倒でしょ？それならこうしたほうがいい。」

「．．．．．相変わらずなのだな。」

「ごちらのためなら自己犠牲も厭わない。」

「そんな変わるもんじゃないからね。」

本質とか特に。

「で、本当の用件は？」

そろそろ本題に戻す。

途端に筈が言い出そうか迷い出す。

「今度の学年別トーナメントの事だ。」

「来月だっけ？」

この学園の行事はなかなかハイペースであるもんだ。

「もし、わ、わたしが学年別トーナメントで優勝したら……」

顔が真っ赤だ。

どうしたのだろうか、最近のなんだか多いような気がする。

「っ、っ、っ、付き合ってもらっ？」

付き合っ？

茜雫は持てる知識をフル活用、脳みそをフル回転して言葉を噛み砕き、意味の理解へと思考を総動員する。

（付き合つとはデートか？でもほくきちゃんは一夏のことが好き  
な筈。では、これはどういう意味だ？ 買い物か？男手が必要  
なのかもしれないし一夏とデートに行くための服を買うのだが一  
夏を誘うわけにはいかないのだろうか？ほくきちゃんの性格なら自  
分だけの理由で人一人を連れまわすのは罪悪感を感じるのかもしれ  
ない。だからご褒美的な感じなのか。．．．．．  
．．．．．買い物だっ？）

かつ？とひらめく。

なんだか激写タッチで背後で稲妻が奔っている。

複雑に考えた筈なのにわあ不思議、いつの間に単純な答えに。

頭の樹形図が一部逆になってるのかもしれない。

「いいよ。いつでもどうぞ？」

勿論即答。

変な勘違いで死出の道を邁進爆走中。

「そうか、そうか。わかった。」

篝はホツとして輝かんばかりに微笑う。

篝の目鼻立ちの整った綺麗な顔が笑ったので同世代と言わずに  
数多の男がドキッと来るかもしれないが、茜雫なら素面だ。



箒にとつてはもう告白同然だったのだが、茜雫のものはや茜雫の常識とも考えられてる勘違いによって空振りが決定する。

茜雫と箒はそれぞれ部屋に戻る。

「箒、なんだって?」

あらかた掃除し終えた一夏が茜雫に効いてくる。

「なんか買い物手伝って、だって。」

「買い物?」

「ほくきちゃんも女の子だって事だよ。」

茜雫の言葉に一夏も成る程と頷く。

確かに女の子として世間に疎いといっても仕方がないのだろう。

「付き合ってもらって言うってたもんな。」

「確かに買い物だな。」

やはり箒の考えた通り類は友を呼ぶらしい。

「ん?なんだこれ?」

茜雫が衣類を入れようとクローゼットを開けると隅で何か発見。

クローゼットの床部分の暖かみ溢れる木製のフローリングが一

部全く違う色だ。

「なんだ？どうした？」

掃除道具を片付けて近くにいた一夏も見にくる。

クローゼットの奥の暗くなっている場所に何か布の様なものが落ちている。

茜雫がつい、と手だけ伸ばして指で摘み上げる。

「「「「「「「「「これは？」

薄いピンク色の幾何学模様の三角形の小さな布「「「「「「「「「パンツだ。

二人は条件反射で鼻を抑える。

臭いとかではなく、鼻血が出てしまうかもしれないからだ。

これはもう条件反射かもしれない。

見ず知らずでもなく恐らく二人の幼馴染の私物の可能性は大。

特に茜雫はさつきまで本人と見てしゃべったのだから頭の中がパニックってまともに機能してくれない。

「な、なかなかきわどいセクシーな下着をご着用の様です。」

着目点が下にズレている。

しかし、恥じらいを持つ典型的な大和撫子の箒にしては布の面積が少ない。

「確かに……. . . . . じゃなかった？ ツッコムところどこじゃないだろ？」

そんなこと言い争ってる場合じゃない。

問題は……. . . . .

「どうするのさ？ 一夏？」

茜雫は自分の頭が機能停止しているため一夏にそのまま掴み寄る。

「だあああ？ ソレ握ったまま掴み寄るな？ いろいろとヤバイか

らっ？」

茜雫が一夏から離れ、二人揃って深呼吸。

握ったままでやるなよ……、混乱しているのは分かるが見ててなんか壊れる音がする。

「……………とりあえず、返しにいくか？」

「……………死語だよそれ。」

そんな物直接筭に返しにいったら確実に頭が吹っ飛ぶ。

茜雫は特に今、頭の包帯を巻いて不安定だ。

ノーヘルで至近距離のヘッドショットを喰らったように吹っ飛ぶだろう。

イヤダ、モットイキタイ

「じ、じゃあ、隠すか？」

部屋の隅で壁をむいて頭を寄せ合って作戦会議。

その中心に女性の下着があるのだから怪しいったらこの上ない。

はたから見ればただの変態が相談しているみたいだ。

通報されるかもしれない。

「もし、誰かにばれたら。3年間確実に軽蔑されまくって、陰湿なイジメを受けるぞ。」

茜雫の現実味のある可能性に一夏の背筋が凍る。

そんな事になったらこの学園じゃ生きていくのは難しい。

いや、無理。

「いつそ、こっそりと捨てるか。」

「いいのか？ 箒のもの勝手に捨てちまって。」

「ばれて死ぬよりマシだ？ それに誰かの形見とかそんな可能性は極めて低いっ？」

「おお？ 確かに？」

茜雫の熱烈な決意に一夏が思わずパチパチと控えめに拍手する。

というか、パンツを形見にする奴なんてまずいない。

「よしっ？ そうと決まれば生ゴミ用の黒いゴミ袋に————」

茜雫が宣言するように箒の下着をぐわしと掴み、一夏と共に身体を半回転しながら立ち上がろうとした。

「ほう、なにをしているんだ？ お前たちは？」

「—————ッ？」

二人に冷気のような風が吹き付ける。

何故か茜雫に集中しているのは気のせいだろうか。

あ、センの額の汗が凍ってる、一夏はこの極限状況で変な事に気がつく。」

千冬と湊が立っている。

二人の背後に幽鬼がいるのはきつと幻覚だ。

そう信じたい。

「茜雫。お前の手にあるその明らかに女物の下着は誰のものだ。お前のか?」

「ち、違います?断じてそんな趣向は持ち合わせていません?」

腕を精一杯ブンブンと振って必死に否定の姿勢を示す。

その時発生した風で茜雫の黒髪が僅かに浮く。

静かに質問する千冬の後ろで湊が黙って準備体操を始める。

二人とも無表情だ。

超怖い。

「なぜお二人がここに?」

一夏も話題の矛先を変えようと必死だ。

「仕事が予想外に早く終わったんでな、湊と弟達の様子を見に来れば何を隅でやっていると思えば……………変態行為か？」

冷淡、平坦、絶対零度の声音に身体が震え上がる。

茜雫と一夏は必死に人生危機マニュアルで今の状況を検索しまくっているがヒットする気配がない。

あまりの危機的状況に故障してしまったのか？

何とも役立たずだ。

「誤解ですよ？恐らくほくきちちゃんが忘れていってしまったのでどごししようか迷ってたんですよ？なあ？一夏？」

「あ、ああ？信じてくれよ？」

「……………」

嫌な沈黙。

ツライ。

「まあ、それは本当のようだな。」

千冬の言葉にホッとする。

しかし、湊は体操をやめない。

今は腰の回転具合を確かめている。

そちらが気になっていると千冬が湊を一度見て確認するとまた口を開く。

「なぜその下着を鷲掴みにしているんだ？」

「あ。」

茜雫が自分の左手にある少し質量の少なめの三角の布を確認。

決意の勢いで握り閉めてしまっている。

ふらあ、と湊が体操を終え近付いてくる。

その瞳にハイライトはなく、顔は影で暗くなっている。

「……………デ、デーモン。」

一夏が思わず呟く。

次の瞬間、湊が腰を低くして一夏の目の前にいる。

「オ、オーバーロード・ギア・アクセル限界突破加速？」



ドグシッ

体全体をバネにした教本にのっけてあげたくなるような綺麗な中段足蹴りが一夏の腹部に突き刺さる。

鈍い音と共に一夏の身体が90度に折れ曲がって撃ち抜かんばかりに高速で壁にぶち当たる。

「・・・・・・・・・・ア、アーメン。」

「せんちーのバアカアアアアアアアアアア？」

ドゴオオオオオオオオオオ

何か物体を殴打する．．．．．いや、ここでは粉碎する  
という形容が正しい音が木霊す。

湊の魂の叫びと共に、腰の回転がよく乗った中段三日月蹴りが  
茜雫の横っ腹の喰い込み、身体の許容範囲外の角度に折れ曲がる。

若干涙目の湊といつもより5割増し怖い顔の千冬を視界の隅に  
引っ掛けてそのまま意識を手放した。

因みに箒の下着はこっそり千冬が合鍵を使いベッドの上に。

箒は何故かベッドの上に見当たらないと思っていた下着がいきなり出てきたことに首をひねっていた。

十六話 自室の下着（後書き）

ストーリーや文章ががいい感じでできてるのか確認もしたので感想ください  
何か手探りだ

十七話 変わる月曜日

――日曜日――

バシッ ゴシッ ドカッ

「ははは、どうした？弱過ぎんじゃないのか？セン？」

「ここから一発逆転するんだよ？」

茜雫の拳や蹴りの連打は一夏によって全て叩き落される。

逆に一夏のお返しとでも言うような攻撃が、攻撃後無防備な茜雫に吸い込まれる様に当たる。

「喰らいやがれえええ？」

「当たんねえよ？」

ゴオオオオ

スッ

ドゴッ バキッ ゲシヤッ

茜雫の必殺技はアツサリと躲され、一夏の連続回し蹴りが茜雫を吹き飛ばす。

「クソオオオオオ。」

「ふん？無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄だあ？」

ブン

パシッ

ドガッ ドゴッ ズシヤッ ズ  
ドカアアン

トサッ

茜雫の苦し紛れの上段踵回し蹴りもアツサリと受け止められ見事なカウンター。

軽い二連続パンチからの飛び上がるような膝蹴りがキレイに茜雫の腹部に直撃。

その後、空中に打ち上がった茜雫に誰も真似出来ない大空中連続必殺技が次々と決まり、茜雫は断末魔を上げながら地面に叩きつけられる。

途端に画面いっぱいにWinnerの文字と共に、一夏のキャラクターが決めポーズをする。

「あ……………ああああ？また負けたあ？」

茜雫は手に持っていたコントローラーを後ろにひっくり返る際に手放す。

無線式コントローラーはクルクルと放射線を描きながら地面へと故障への道を辿ろうとする。

「うおお？あぶねえ？」

地面に叩きつけられる瞬間、赤毛長髪をバンダナで留めた一夏の中学校時代の友人——五反田弾が受け止める。

「おい？負けたからってコントローラーを投げるのはやめろ？」

弾は先程から負けっぱなしの茜雫にツツコムように抗議する。

今日は快晴。

鳥が元気に青空を羽ばたいている。

一夏は特に用事のない茜雫を連れて弾の家に遊びにきている。

弾は最初、茜雫を見て誰だこいつ、と思ったが今ではかなり打ち解けている。

「いやあ、なんか必死にキャッチする五反田君見てて面白いんだよね。」

「面白くねえよ？」

ほがらかに人の事面白がっている茜雫に弾は三流芸人のような捻りのないツツコミをする。

「ふふふ、センがゲームで俺に勝とうなど3ヶ月早えよ。」

「……………随分と具体的に言うんだな。一夏。」

茜雫に必死の抗議をしていた弾も一夏の弱気な発言に呆れる。

「いや、センって呑み込みが早いから毎日やってたら多分すぐに抜かれるぞ。」



「確かにな。」

今はクッションに顔を突っ込んでふて寝している茜雫は一夏に0勝4敗、弾に0勝18敗1引き分け中の勝ちなし負け犬状態だかなかなかセンスはあった。

初めは弾に全くダメージを与えられずに敗北していたが、最後は熟練者の弾に引き分けまで持ち込んだ。

その後の一夏との対戦では負け続けているが、これは腕とかではなく単純に相性が悪い。

一夏は長いリーチと速度が高いの使い勝手の良さが強みのキャラクターで、茜雫は極近接格闘戦が得意で威力はあるがタメが長く、攻撃後の隙も大きい技ばかりの癖の強いキャラクターだった。

同じ条件なら負けていた可能性がある。

ふと、弾が思い出したように

「そういえばよ。」

「「ん？」」

一夏は次はどのゲームをしようかと思ってディスクカバーから、茜雫はうずめていたクッションから引きずるように顔を弾に向ける。

「お前らつてIS学園に通ってんだろ？女子ばっかなんだろ？」

女子ばっかどころか、隠れ理事長兼用務員を除いて女しかないな

い。

「うん、そうだよ。」

「で、どうなんだよ。」

弾が興味津々と言った様子で訊いてくる。

「どうって言われてもなあ、セン。」

「確かに、別について感じだよね。あえていうなら転校したい。」

トイレが少ない、更衣室が遠い、大浴場が使えないなどかなりめんどくさい。

二人の物言いに弾は信じられないと言った様子で喰い付く。

「なんでだよ？花園だろ？羨まんだよこのヤロー？」

弾は叫ぶがどうしようもない。

「女子だからそんな話しかけづらいしね。」

「でも鈴が来てくれて助かったぜ。話し相手が少なくて困ってたんだよなあ。」

「ああ、鈴か。」

弾がしみじみと呟く。

どうやら鈴が一夏の事が好きだと知っているらしい。

その苦勞が空振りしている事も。

「あれ？」

「どうしたんだよ、セン？」

ピクツとドアの方を向いた茜雫に一夏が問い掛ける。

「誰が来る。」

二人は頭に疑問符を浮かべる。

その時、

「このバカ兄、昼ごはん出来てるって言ってるでしょ！早く下りてきなさいよ！」

乱暴に開かれたドアと共に、片足を上げた赤毛の少女の姿が映った。

どうやらドアを蹴り開けたらしい。

ラフで人前にはあまり出られないような格好だ。

「ほら早く……………って、い、一夏さんッ？」

「よ、久しぶり。邪魔してる」

少女は自分の格好と一夏を交互に見比べると慌てて陰に引っ込んだ。

「どちら様？」

一夏の知り合いらしいが、茜雫は全く知らない。

「弾の妹だよ。」

なんと？

「とうとう友人の妹まで手を出したのか？一夏？」

「意味わかんねえよ？」

「大変だねえ五反田君や。」

「ああ、全くだぜ。」

「そこっ？意気投合するな？」

何がなんだか一夏は意気投合し出す弾とセンにとりあえずツッコム。

「えーと、そちらはどちら様ですか？」

躊躇いがちな質問がドアの陰から聞こえてくる。

陰に引っ込んでいる弾の妹――五反田蘭は茜雫の事を知らなかった。

「ああ、俺の幼馴染の沙月茜雫だよ。因みにIS学園に通ってる俺と同じ男子IS操縦者だ。」

どう自己紹介しようか迷っていると一夏が間接的な紹介をしてくれた。

「そ、そうなんですか？」

蘭が驚くのも無理はない。

ISは女しか乗れないなんて今じゃ常識の範疇だ。

一夏が初の男子IS操縦者として知れ渡ったときはかなりの騒ぎになったくらいだ。

早々に二人目が出る事などない。

くううううううう

茜雫の腹が自己主張を始める。

「……………」

「……………え、えと。……………ご飯食べます?」

是非、喜んで。

来る時は特に気にしなかったが、五反田家は一階が食堂らしい。

「おお?—夏じゃねえか?」

食堂のいい匂いと共に、やたら元気のいい馬鹿でかい声が一夏達を出迎える。

ああ何かさらにお腹が減ってきた、茜雫はエネルギーの足りていない頭でぼんやりとご飯の事を考えていた。

「あ、どうも。お邪魔します。」

奥から出て来たのは五反田食堂の店主――五反田蔵だった。

「おうっ？．．．．．ん？隣にいる女みてーな面したひよろいガキは誰だ？」

Oh、人のコンプレックスをスナイパー如くぶち抜いたよ、この人。

「一夏の幼馴染だつてよ。なんでもちよつと外国に行つてて、最近帰国したんだと．．．．．って、なに落ち込んでんだよ。」

今度は弾が紹介してくれたが、茜雫は胸を抑えて悶えている。

心臓でも悪いのか？

「．．．．．心臓をコンプレックススナイプで撃ち抜かれたんだよ。」

最初は意味のわかっていなかった蔵だったが、意味が分かった途端に豪快に笑い出す。

「ガッハッハッハ？なんだ気にしてたのか？なら、飯食つてそのモヤシみたいな身体に筋肉をつける。」

立ち直つてちよつと反撃。

「いや、もう結構ついていると思うんだけど。」

「なににい？本当か？」

茜雫は腕を肩まで捲ると敵に突き出す。

細い割に筋肉で引き締まったしなやかなラインをしている腕だ。

その腕を見て敵は片眉を上げて感心したように驚く。

「ほほう、最近の弱っちいガキに比べたら相当なもんだなあ。

おい、弾？お前もチャラついた事ばつかやつてないでこいつみたい  
に筋肉付けやがれ？いつまで経ってもモテねえぞ？」

なんだか弾に飛び火してしまう。

そして、シヨックで全焼してまった。

「注文いいですか？」

一夏はそんな弾を無視してさっさと食べるものを決めていたよ  
うだ。

なかなか薄情な奴だ。

「は、はい？何がいいですか？」

蘭が緊張した様子で注文を取りに来る。

「あれ？着替えたのか？」

蘭は今ラフな部屋着からお出かけ着に着替えている。



「……分かった？デートだ？」

まるでクイズ番組の出演者みたいに回答するが、

「違います？」

ブツブウウウ

不正解らしい。

唐変木には難問だったか。

茜雫は何かいいのかわからなかったので、何かオススメを頼んだ。

出て来たのは野菜炒め定食。

醤油で味付けされた色とりどりの野菜が湯気を立て、空腹を刺激する匂いが鼻腔をくすぐる。

かなり美味しそうだ。

まずはホカホカのご飯を食べる。

ご飯の炊き具合が何とも絶妙。

これはかなり期待できる。

次にメインの野菜炒めに箸を伸ばす。

「おお？美味しいなこれ？」

茜雫は思わず声を上げてしまう。

IS学園の食堂のおばちゃん集団にも劣るとも勝らない腕前だ。

「ほう、どこが美味しいか？」

敵は試すように茜雫に質問する。

お世辞かどうかはこんな質問で分かるものだ。

即答で具体的ならお世辞の可能性はまずない。

茜雫は質問に答えるため、一息に咀嚼すると即答。

「この醤油味が野菜にしっかりと染み込んでるのに、べちゃつとしないで野菜のシャキシャキ感が残っているのと、野菜のそれぞれの火加減がよくてかなり美味しいですよ。」

敵は茜雫の大絶賛に気分が良くなり、

「おお？そうかそうか？今日は俺のおごりだ？どんどん食べてけ？」

この言葉に感動した茜雫はこれ以外に三つの定食を完食。

大変ご満悦の休日を通すと共に、今度から鼻肩してどんどん食べに来ようと心に誓った。

そして、その夜食べ過ぎでトイレから動けなくなったのは言うまでもない。

――翌日――

一夏と茜雫と迎えに来た鈴と一緒に食堂に來ると食堂全体が騒がしい。

取り敢えず食券で注文して、料理を手に席に着くと、ちらほらと声が僅かに拾えた。

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え、何の話？」

「だから、あの織斑君と三崎君の話よ」

「最上級にいい話」

「聞く！」

「まあまあ落ち着きなさい。いい？絶対これは女子にしか教えちゃダメよ？女の子だけの話なんだから。実はね、今月の学年別個人トーナメントで」

そこまでで周りのざわめきが大きくなったのとなんだかどうでも良さそうな話しっぽく興味が失せたのでやめた。

「あそこのテーブル。やけに騒がしいな。」

「トランプでもやってんじゃないの？それが占いとかさ。」

—夏達も気になるらしい。

「えええっ？そ、それ、マジで？」

「マジでっ？」

「うそー？きちゃー？どっしよっしよっ？」

その後、うるさいのが我慢出来なくなったのか、鈴の提案により、席を移動する。

「さあて、そう言えばあんたには聞きたい事があるんだから。」

「ん？俺？」

突然の名指しに特に心当たりのない茜雫はキョトンとしている。

「あんたの専用機の事よ。どこ製よあれ？」

むむっ、今頃この質問とは予想外だ。

「絶対に答えなさい。」

茜雫が逃げると予測しているようだ。

「鳳さんの祖国のお偉いさんと同んなじこと言うね。」

あの後、少数の戦闘を見ていたお偉いさんの中でかなりめんどくさく絡んできたのが中国とアメリカだった。

しかも、あの事件で俺の存在がばれたし。

今までは、楯無の情報操作で存在や経歴を誤魔化したが、流石に各国のお偉いさんをどうこうすることはヤバイので実は存在してましたと開き直すことにした。

「うちの何が何ていつてきたのよ？」

「アレの詳細な情報をよこせとか、アレはどこで作られたのとか、どこかの代表候補生でもない君があんな専用機を持つのはおかしいとか、アレは個人で独占せず世界で管理運用するべきだー」

「などなど非常に不愉快な顔を向けられたんだけど。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あの馬鹿どもが。」

鈴も自分の国のアホらしさにこめかみを抑えて呆れた。

エネミーほどの技術を世界中に広めたらどんな事になるやら。

IS程ではないが、エネミーの全てのデータを各国が持ったらまた変革が起きるだろう。

下手したら戦火の火種になって世界に広がる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・でも、あたしに少しぐらい教えたっていいでしょ・・・・・・・・・・・・・・・・っっていないし？」

気がついたら茜雫はもう食堂のドアをくぐり抜けていた。

「やっぱりハツキ社製のがいいなあ。」

「え？そう？ハツキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの？」

「私は性能的に見てミューレイのがいいかなあ。特にスムーズモデル。」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん。」

クラス中の女子がわいわいとISスーツのことで談笑していた。

一夏は茜雫と合流すると近くで談笑してた女子に話しかけられた。

「織斑君と沙月君のISスーツってどこ製？見た事ない型だけ。」

「あー。特注品だって、男のスーツがないから。えーと、元はイングリッド社のストレートアームモデルって聞いている。って何でお前は感動している。」

「いや、一夏がこんなに賢くなってたなんて……毎日座学を叩き込んだ甲斐があったよ。」

「怒ればいいのか誇ればいいのか判断に困るな。」

「沙月君のは？」

「知らん。」

「え？」

「なんか束さんが気がついたら用意してた。」

（束さんが作ったのだろうか、しかし、あの人がこんなまともなデザインを考えられるはずがない。となると、従者よろしくくっついていたあの銀髪三つ編み少女か？）

もしそうだったら、茜雫は銀髪の少女達に世話になってばかりだ。

一人目は命を救われたおかげで千冬さん達に出会えた、二人目は腕時計の少女に後押しされ、そして今度は束さんがお抱えしている謎の少女にISスーツを取り繕ってもらった。

自分はとことん自分より小さい存在に甘えてるようだ。

思考にふけていると、

「ISスーツは肌表面の微弱な電位差を感知することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、ISはそこで必要な動きを行います。また、このスーツは耐久性にも優れ、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることが出来ます。あ、衝撃は消えませんであしからず。」

「……………随分と長い独り言ですね、山田先生。」



「ち、違いますよ、沙月君？生徒にISスーツの性能について先生らしく教えただけです？」

小さいペットのように慌ててふためいて抗議する真耶は愛玩動物のようだった。

「へー。」

「……………なんか今日の沙月君、かなり冷たいですね。」

すねられてしまった。

どうやら昔の事を思い出してたら無意識にそんな態度をとってたらしい。

反省せねば。

「山ちゃん詳しい？」

「一応先生ですから……………って、や、山ちゃん？」

「山ぴー見直した？」

「今日が皆さんのスーツ申し込み開始日ですからね。ちゃんと予習してきてあるんです。えへん……………って、や、山ぴー？」

入学から大体二ヶ月で山田先生には八つくらいの愛称がついてい

た。

正真、覚え切れねえ。

「あの一、教師をあだ名で呼ぶのはちょっと……」

「えー、いいじゃんいいじゃん。」

「まーさんは真面目っ子だなあ。」

「ま、まーさんって……」

「あれ？ママママの方が良かった？ママママ。」

「そ、それもちょっと……」

「もー、じゃあ前のマママに戻す？」

「あ、あれはやめてください？」

珍しく語尾を強くして拒絶の意を示す。

なんかあつたのだろうか。

「と、とにかくですね。ちゃんと先生とつけてください。わかりましたか？わかりましたね？」

誰も返事しない。

「学級崩壊。」

「ああ？沙月君？それ言わないで？」

「あつ、沙月君。なんかつけて上げてよ。」

「ええ？」

クラスの女子の突然の提案に真耶が声を上げ驚く。

「……………え？俺が？」

考え事していた茜雫はどうしようかと思ったが、真耶が期待した目で見て来る。

仕方ない。

「もう、そのままフルネームひっくり返してヤマダマヤで十分じゃない？」

特に深く考えずに適当に言つた、

「……………それで十分って……………しか  
も、ほとんど呼び捨てだし……………何のひねりもないし……………」

期待してた分さらに悪化。

負のオーラが教室の制空権を支配する

これにはみんな苦笑い。

やっぱり今日はどうかしているらしい。

これまた反省。

「諸君、おはよう。」

「お、おはようございます?」

千冬がきた途端、騒いでいた全員が静まる。

「……………ん? な、なんだ? この空気は? って山田先生?」

敏感に負のオーラを感じ取った千冬がすぐさま発生源を探知する。

スパアッアアアアン

「はっ？」

流石は千冬の愛刀出席簿、安心して魂を迎えにきた悪魔を一発で除霊した。

教室の空気が晴れる。

「正気に戻ったか？」

「は、はい？」

「今日からは本格的な実践訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。では山田先生、HRを。」

「は、はいっ。ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します？しかも二名です？」

「「「えええええっ？」「」「」

いきなりの転校生紹介にクラス中がわざめく。

まあ、噂大好き十代女子の情報網をかいくぐっていきなり転校生が現れたんだから驚きもするだろう。

しかも二人。

「ねえねえ、せつち。どんな子だと思う？」

茜雫の隣の席ののほほんさんがローテンポで話しかけてくる。

単純な興味とIS学園の転校の難しさからの質問だろう。

「織斑先生のHRで私語なんて勇氣あるね。多分、それなりの実力者かかなり面倒くさい事情を抱えた奴じゃない？」

「めんどおな事情？それだとなんでこのクラスに？」

「織斑先生が担任だから。」

「なあるほどお。」

これだけで納得。

やはり千冬の名前は絶大のようだ。

転校生が入ってきた。

軽い足音と威厳に満ちたよく響く足音。

「失礼します」

「……………」

輝く金髪 of 髪と透き通るような銀髪 of 転校生。

茜雫は二人に少し目を見開いて僅かに驚く。

「一つは、片方が銀髪だから。」

今日は本当に銀髪の少女の事が頭の思考を埋める。

いろいろと思い出してしまふ。

二つ目は、

「たしかにい、めんどろなじじよおを抱えてるねえ。」

静まった教室にのほほんさんの声と茜雫のつぶやきがよく響いた。

「へえ、男子か。」

十七話 変わる月曜日（後書き）

間違ったのを編集したからみんな気づいてくれるかな？



十八話 稀少男子（前書き）

そろそろ普通の更新速度に移ります

感想くれ〜

## 十八話 稀少男子

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします。」

中性的な顔立ちをした転校生はそう名乗り一礼をする。

その輝くような金の髪を後ろで束ね、小柄な少年の柔和なその顔立ちは、いいところ育ちなのを否応なく感じさせる。

そしてなによりも、全体的なシルエットが男子にしては細く、まるで硝子細工のようだ。

自己紹介の拍手もなく教室は驚きでシーンと静かだ。

身じろぎする音だつてよく響くだろう。

「お、男……………？」

金髪の転校生――シャルル・デュノアの前に座っていた女子から驚きから絞り出すような呟きが教室に木霊した。

「ねえねえ、せつち。なんでそんなもの用意してるのぉ？」

のほほんさんが茜雫に囁くように間延びした小さな声で話しかける。

のほほんさんの隣で茜雫はどこから取り出したのか耳に耳栓をはめようとしていた。

「俺は少し耳が敏感だから騒音対策。」

それだけというと茜雫は耳栓をはめて、外界の音をシャットダウン。

その間にもシャルルは女子の呟きに答えていた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて、本国より転入を――」

「きゅ……」

ビッグサウンドウェーブの予兆が教室に流れる。

一夏もそれに気づき慌てて対策を施そうとするがもう遅い。

「はい？」

シャルルもこの空気に頭に疑問符が浮かんでいる。

「え〜〜〜〜い。とつたどお〜〜〜!」

「え? ちよつ? のほほんさん?」

のほほんさんの気の抜けた掛け声と共に、茜雫の耳にはめていた生命の耳栓が無情にも外されてしまう。

もう大災害の防波堤は無い。

「きゃあああああ　　っ!」

「ーーーーツ? ぐおおおう・・・・・・・・・・・・?」

何も守るものがなく驚きで手さえも抑えなかった耳は音の津波によつて甚大な被害を被った。

―夏も苦しそつに耳を抑えている。

「・・・・・・・・のほほんさん・・・・・・・・後で覚えておいてね・・・・・・・・」

「わあ! 何くれるのかあたのしみい!」

お礼じゃねえよ。

その間にも女子のボルテージは急上昇。

「男子? 三人目の男子?」

「しかもうちのクラス？」

「美形？守ってあげたくなる系の？」

「地球に生れて良かった〜？」

止まる事を知らない。

「あー、騒ぐな。静かにしろ。」

なんだかもう千冬もこの女子達の鬱陶しさに面倒くさそうにしている。

そのうち職務放棄するんじゃないのか、と茜雫はまだ耳鳴りする耳を抑えながら気の毒そうに千冬を見た。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから〜」  
「？」

真耶も騒ぐみんなに必死に呼びかけているが、ガン無視。

なんかもう涙目になっている。

やはり学級崩壊だろうか、茜雫がそんな事ズキズキ痛む包帯の巻かれた頭を頬杖で支えながらぼんやりと考えていると急に静かになる。

おおかた理由は決まっているので千冬の方に視線を戻すと千冬が掴んでいる出席簿の端が僅かにゆがんでいる。

このクラスの千冬怒り探知機の精度は日々上昇中のようだ。

もう一人の銀髪の転校生は静かに視線だけでクラス全体を注意深く見回していた。

「……挨拶をしろ、ラウラ。」

千冬が銀髪の転校生を静かに促す。

表情に疲労が滲み出ているようだ。

苗字ではなく名前で呼んだという事は知り合いらしい。

もう一人ソーシルバードブロンドの髪を腰ほどまで伸ばした、一見すれば人形のような容姿。

その病的に白い肌が彩る整った顔の表情も人形のように冷たい。

背は小さいはずなのに、圧倒的な存在感と威圧感がある。

どうかの軍人かな、と茜雫は予想した。

「はい、教官。」

「ここではそう呼ぶな。私のことは織斑先生と呼べ。」

「了解しました。」

茜雫は、ああ、と納得。

教官という事は千冬がドイツ軍で一ヶ月程教官していた時の教え子という事か。

となると、あの左目のあきらかに医療用じゃない眼帯も納得。

「ドイツから来た、ラウラ・ボーデヴィツヒだ。」

それは自己紹介というよりも何かの宣言のようだった。

それ以降、何も続かない。

クラスが何とも言えない沈黙に包まれる。

「あの……以上、ですか？」

「以上だ」

真耶が恐る恐る聞くと、ラウラはそう短く返した。

シャルル・デュノアの時との温度差がかなり激しいがラウラ・ボーデヴィツヒは特に気にした様子がないというより、興味がないと言った感じだ。

それを見た茜雫は自分と少し似た存在なのにこっちのほうはまだ可愛げがあるな、と思った。

あの頃の自分は自分でもかなりひどい状況だったと思う。

一夏はそれぞれ正反対な奴が転校してきたな、とそれぞれの顔を交互に見ているとラウラと視線が重なった。

重なった瞬間一夏はラウラの瞳に怒りと憎悪が激しく浮かんだのがわかった。

「貴様？」

「……ッ？」

なぜそんな目で見られるのか分からず、見返していると、ラウラがこちらに歩み寄ってくる。

軍靴のような高い威圧のある足音がメトロノームのように一定のテンポで静まった教室に響く。

パン？

乾いた音が響いた。

逆手に振り抜かれたラウラの右手が、一夏の左頬を打ち据えた音だ。

茜雫がちらっと千冬の方を見ると、頭が痛そうにこめかみを抑えている。



驚いていないところを見ると何故ラウラが一夏を叩いたのか知っているようだ。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか。」

冷たい声でラウラが一夏に警告のように言う。

一夏も何が起きたか理解できていなかったが、ラウラの声で我に返り、

「いきなり何しやる？」

「ふん……」

一夏を無視して開いている席に進む、今度は茜雫と目が合った。

俺もなんか知らないけど叩かれるかなあ、と思いながら思い出す様にこちらを見つめ思索しているラウラを見つめ返す。

目が合って数秒後、

「……………貴様、一年半程前に私と会ったことがあるか？」

途端にクラスにざわめきが奔る。

あきらかに接点のなさそうな二人がいつ知り合ったのかと憶測が奔る。

「……………？気のせいじゃないかな？少なくとも俺は初対面の筈だ。」

実際茜雫は心当たりが全くない。

ドイツに行ったのは2年前だ。

半年のズレがある。

ラウラはまだ少し疑い深そうに見ていたが、

「……………そうか、すまなかつたな。」

視線を感じて当てずっぽうで辿っていくと千冬が目を細めてこちらを見ている。

前言撤回、どちらもめんどろな事情を持ちのようだ。

今度こそラウラが席に着くとまたなんとも言えない気まずい空気が流れる。

千冬はその空気を断ち切るためにさっさと終わらせることにする。

「あー……ゴホンゴホン？ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散？」

千冬の一声でクラスにまた喧騒が戻る。

「おい織斑、沙月。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう。」

席を立とうとする一夏と茜雲に千冬がそう呼びかけた。

確かにそれが妥当なのかもしれない。

とりあえず、茜雲は一夏の様子を見に行くことにする。

「一夏、女の子の張り手の感想は？痛かった？精神的に？」

「普通そこは、どうして叩かれたのかとか、大丈夫か、だろうが。なんだよそれ……。」

一夏にしてはツッコミの勢いが無い。

それどころじゃないらしい。

「心当たりは？」

「あるわけねえだろ。ドイツに知り合いなんていねえぞ。」

一夏は怒りを鎮めるために怒気の籠った声で返答してくる。

周りを見ると、こちらをチラチラと見ながら通り過ぎる女子もいる。

転校生にいきなり叩かれるなんて興味の的だ。

「初めまして。僕は」

近づいてきたシャルルが丁寧にも、もう一度自己紹介をしようとするがあいにくそんな時間はない。

「ああ、いいからいいから。とにかく移

動が必要なんだよね。女子が着替え始めるから早く出ないと鬼教師に血祭りに上げられちゃうから。」

「お、鬼教師？ち、血祭り？」

茜雫が急かすとシャルルが驚きの声を上げる。

「今日は第二アリーナ更衣室が開いているはずだ。行くぞ」

一夏が手早く確認するように説明すると同時に行動開始。

茜雫が机を縫うようにして駆け出す。

一夏もシャルルの手を取るとそのまま教室を出る。

「とりあえず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてくれ」

「う、うん……」

まずは階段を飛ぶように下って一階へ。

さあ、ここからがサバイバルの開始地点だ。

「これからよろしくな。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ。」

先に一夏が自己紹介をすませる。

相変わらず見ず知らずの人間でも普通なら物怖じしてしまうのに簡単に話しかける奴だ。

「沙月茜雫だよ。どう呼んでもでいいからね。」

後続くように茜雫も自己紹介。

もう少し長くするべきなのだろうが、そんな事すればアレに見つかってしまう。

「うん。よろしく一夏、茜雫。僕のことシャルルでいいよ。」

「はいはい、シャルルね。」

「じゃあ、いくぞセン、シャルル？」

自己紹介しながらも速度を落とすわけにはいかない。

「急ぐのはわかったけどなんでそんな警戒しながら走っているの？」

シャルルは第二アリーナに行く最短距離にしては、少し迂回ルートをとっている事と、先頭の茜雫が道を曲がる際少し選んだ素振りを見せながら道を進んでいる事に気がついた。

「ああ、それはだなー」

一夏が説明しようとして口を開き掛けたその時、

「……………一夏、ごめん。しくじった。」

走るペースを落とした茜雫の悲しい声が遮る。

シャルルは何が？、と周りを確認しようとするど、

「ああ？ 転校生発見？」

「しかも織斑くんたちと一緒に？」

各学年の女子に見つかってしまった。

あれよあれよとあっという間に行く手と退路を防がれてしまう。

素晴らしいチームワークだ。

一夏と茜雫がやっちゃった、という顔をしている。

「……………え？ どういう事？ 日本の常識なの？」

そんなわけがない。

シャルルはいまいち理解できないでいる。

「これはね、サバイバルなんだよね。Survival、フランス語でSurvive」

「……………なんか茜雫って発音が完璧だね。」

「Un grand merci。」

「こんな時に何やってんだよ……………」

まだ意味の解らないシャルルはやたら饒舌な英語とフランス語を発音した茜雫をとりあえず褒めてしまう。

フランス人のシャルルから見ても完璧な発音だった。

茜雫は今の状況を少し現実逃避。

そう、これはサバイバル。

捕まってしまうえば、確実に鬼の手によって散々な目に遭う。

確実に回避せねばならない。

生きるために、明日の光を見るために。

しかし、今の状況はあまりよろしくない。

女子がどこで覚えていつそんなことをする打ち合わせをしたのか戦国時代よりも昔からある鶴翼の陣を前後に展開している。

IS学園ではそんな古臭い訓練もしているのか？、と茜雫は状況も忘れて学園の授業方針を疑い出す。

どうしようかと時間を気にしながら考えていると、

「……………セン、すまねえ。」

「え?」

一夏の申し訳ない声と共に背中がドンと強く押される。

こんな時、いつも床をピカピカに磨いてくれる掃除のおばちゃん  
が恨めしい。

突き飛ばされた茜雫は床を氷の上の様に滑る。

待ち構えている獰猛な女子の元へ。

「へ?ちよつと?一夏?俺を売っちゃうの?」

茜雫が慌てて一夏達を見ると、丁度シャルルが窓から飛び出  
ていた。

ここは一階なので、その行為自体はなんの問題もないが、ある  
意味大問題だ。

一夏は窓から顔を出すと、

「俺らの為に尊い犠牲になってくれ?あと、皆さんもセンで我  
慢してくれ。」

ビシッと敬礼するように片手を上げて引っ込む。



余りにも薄情だ。

見損なっただぞ？

「いや、待ってよ？」

「うん？私達は全然OKだよ？」

「転校生君もよかったけど沙月君でも大丈夫？」

「俺は全然大丈夫じゃない？むしろヤバイから？」

今度はシャルルが心配そうに顔を出す。

助けにきたのかと茜雫が身を急いで起こそうとすると、

「ごめん、茜雫。僕もちょっといろいろと怖いからパス。絶対にこの犠牲は忘れないから。」

「俺も怖いよ？なんか皆さん目が光ってるし？てか、今なら間に合うから助けてよ？……………ああ？いかないで？」

無情にも窓すらにじり寄ってくる女子によって見えなくなる。

それは安全な脱出ルートが消えたのと同義だ。

「くっ？ここはバイオハザードなのか？」

違うと分かってもそう見えてしまうのは仕方ない。

360度完全に囲まれている。

……こうなれば、最終兵器？

「あ、織斑先生。」

シーーーーー

「なんで誰も反応しないの？」

完全に予想外だ。

「ふふふ、たっちゃんからさつき織斑先生はさつさとアリーナに向かったから来る可能性は0だと連絡が入ったのよ。あ、ちなみにたっちゃんって2年の更織さんの事ね。」

ネタバラシをしてくれる新聞部の黛薫子、こちらにカメラを構えてどんとこいとレンズを覗き込んでいる。

「あのアマーーーーー?」

目を閉じなくても扇子を片手に嗤う楯無の姿が遠くに実物が見える。

扇子には『惨劇』の二文字。

お前のせいだろうが……………すげー殴りたい。

ドカッって感じで?

茜雫の心の叫びと女子達が床を蹴ったのは同時だった。

それは野獣に襲われる鹿の図のようだった。

ああ、マジで死ぬかも

クスクス

何故か懐かしいと感じるどこかで聞いた事ある少女の微笑い声  
が脳裏に響いた。

## 十九話 実習（前書き）

やっと終わったー？

修復完了？

自分の無駄な記憶力に感謝です。

## 十九話 実習

??トランプカード茜雫を発動した一夏とシャルルは断末魔を背にダッシュで第二アリーナの更衣室へと向かう。

??しかし、足取りは先ほどの俊敏さが欠け、若干重く見えるのは気のせいではない。

??一夏はエスケープゴートに茜雫を使用してしまったことに若干罪悪感と次に会ったら何されるかという恐怖と授業に間に合うか不安を感じていた。

??割合的には五分対四割五分対五割ぐらいであろう。

??茜雫も十分恐ろしいが実姉の出席簿の方が今は怖い。

??「……………え」と。やっぱり悪かったんじゃないかなあ……………あんな扱いして。」

??シャルルは一夏に手を引かれながら、時折茜雫のいると思われる方向を心配そうに見ている。

??」「……………後が怖いんじゃない?」

??やはり次に会ったら何されるかも心配なのか一夏に大丈夫だろ、  
という答えを期待しながら不安そうに尋ねる。

??」「……………  
……………」

??何も答えない。

??否、応えられない。

??心なしか一夏の走り方が若干不安定に見えるのは気のせいだろ  
うか。

??たまに足がもつれそうになっている。

??汗の量も増えている。

??」「あ……………やっぱりヤバイんだ。」

??シャルルの不安も急上昇。

??授業まであと4分と言ったところで、更衣室へと到着。

??シャルルはずっと全力で走っていた為息が荒いが一夏は息が上  
がっているがシャルルほどではない。

??しかし、額の汗はシャルルよりも多かった。

??室内は無風なので汗が直ぐに引くとは思えない。

??貸切状態の更衣室は広さの割には人口密度がなく、ガラーンとしているのが今の一夏には不安でしかたがない。

??今度は冷汗がでてくる。

「うわ？時間ヤバイな？すぐに着替えてしまおうぜ。」

??何気なく時計を見て見ると、もうあまり時間がない。

??このままでは茜雫の犠牲が無駄となり、千冬の恐怖の出席簿アタックの音がグラウンドに木霊す事となってしまう。

????一夏が勢いよく制服を脱ぎ出す。

「わあっ？」?? ?

??初めはそれをぼーっと見ていたシャルルが顔を真っ赤にして両手を顔の前に突き出す。

??一夏はシャルルの行動に疑問符を浮かべる。

「なんだ、シャルル？荷物でも忘れたか？って、何で着替えないんだ？」??

??もしか何か忘れ物したと言うなら諦めるべきだろう。

??頭と忘れ物では頭の方が遥かに大事だ。



??「き、着替えるよ?でも、その、あっち向いてて . . . . .  
 . . . . .ね?」

??なんか辿々しい喋り方だ。

??まあ、一夏には男の着替えをジロジロと見るような趣味は生憎  
持ち合わせていない。

「? . . . . .いやまあ、別に着替えをジロジロ見る気はないが .  
 . . . . .って、シャルルの方こそジロジロ見るなよ .  
」

??両手を顔の前に突き出していたが指の隙間からシャルルの綺麗なエメラルドグリーンの瞳がちらほら見える。

??残念ながら突き出している両手は意味を成していない。

「み、見てない?別に見てないよ?」

??今度は両手をブンブンと顔の前で降って必死に否定するとロボ  
ットのようになんかに機械的に後ろを向く。

??何なんだ?、と思いつつ時計を確認すると刻一刻と魔の出席簿  
アタックへの刻限へ針を進めている。

??慌てて一夏は着替え始める。

??何度着替えてもなかなか慣れないISスーツへ焦りながらも着  
替え終え後ろを向くとシャルルがもう後ろを向いて待っている。

?? 顔がまだ赤く呼吸も荒く見えるのはまだ走って息が整えられていないからだろうか。

しかし、もうISスーツに着替え終わっている。

?? 「うわ、着替えるの超早いな。」

?? 早くから慣れていたのだろうかそれなら是非コツなど教えて欲しいものだ。

?? 「一夏は随分と時間がかかったね。慣れてないの?」

?? 「それもあるかもしれないが、これ、着るときに裸っていうのがなんか着づらいんだよなあ。なんか引つかかって。」

?? 「ひ、引つかかって?」

?? 「おう。」

?? 更にシャルルの頬が真っ赤に染まっていく。

?? 具合でも悪いのだろうか、と思いシャルルのISスーツを改めて見る。

「そのスーツ、なんか着やすそうだな。どこのやつ?」

?? 一夏のISスーツ ?は実験的な要素が大きい為、利便性より機能性の方が追求されているらしく少々着辛かった。

??シャルル一夏にまた手を引かれ、更衣室を飛び出しながら答える。

「あ、うん。デュノア社製のオリジナルだよ。ベースはフランクスだけど、ほとんどフルオーダー品。」

??ベースのフランクスと言う単語に聞き覚えはなかったが、一夏はシャルルの答えに二つ気付いたことがあった。

??「デュノア?デュノアってフランスのIS企業だよな。フランスでも有数の大企業の。しかも、デュノアって確かシャルルのー  
ー。」

??一夏が額に指を押さえながら記憶を絞るように思い出す。

「うん。僕の家だよ。父がね、社長をしてるんだ。一応フランスで一番大きいIS関係の企業だと思う。」

「へえ?じゃあシャルルって社長の息子なのか。道理でなあ。」

「ん?道理でって?」

??シャルルは一夏の言葉に首を傾げる。

??「なんか気品みたいなを感じる。お姫様王子様って感じの。」

??「うん。あんまりピンとこないや。」

??そんな会話をしていると狭い廊下が一気に開放的な広い空間に開けた。



??「おい、何をいつまでも突っ立っている。早く並べ。」

??弁解の余地もなく急かされてしまい、心の中でもう一度ごめんと謝る。

??さて、次ぎ会ったら本当に何をされるか。

「ずいぶんゆっくりでしたわね。ISスーツを着るだけで、どうしてこんなに時間がかかるのかしら？」

??並んだ途端、セシリアから疑わしげな問いかけを受ける。

「道が混んでいたんだよ。」

??女子という名の野獣の壁に。

??それはそれはもうシールドバリアの方が脆いと錯覚するほどの厚く硬い攻撃性を持った壁に。

「ウソおっしやい。いつもは間に合うくせに。一夏さんはさぞかし女性との縁が多いようですから？そうでないと二月続けて女性からはたかれたりしませんよね。」

??ぐう、痛いところを突かれた。

??しかし、鈴の事はともかくラウラの事は全く身に覚えがない。

??視線を動かしてラウラを探すと一組の列の一夏とは反対の最後尾で静かに立っている。

???やはり、何で叩かれたのかわからない。

???男子E.S操縦者と言うのが気に入らないのか？

???「なに？アンタまたなんかやったの？」

???今度は鈴が加わってくる。

???またってそこまで問題を起こしたつもりはない……………  
等。

???否定し切れない自分が悲しい。

???「こちらの一夏さん、今日来た転校生の女子にはたかれましたの。」

「はあ？一夏、アンタなんでそうバカなの？」

「安心しろ。バカは私の目の前にも二名いる。」

???冷たい声が鼓膜を震わす。

???バシン　バシン

?? 広いアリーナに乾いた打撃音が響き渡る。

?? 速射機能によってほぼ同時に二人の頭に鈍い痛みが走る。

?? 初めて見たシャルルはセシリアと鈴が叩かれた瞬間ビクツとしていた。

?? シャルルの目から見ても恐ろしかったらしい。

?? 転校初日でトラウマを植え付けられるとは何と不憫な。

?? 一夏が顔を背けそつと涙を拭っているとその時、

?? 「ち い い す う . . . . .」

?? 魂の抜けたような力のない消し飛びそうな小さな声が聞こえた。

?? 耳に響く風の音でもう掻き消されそうだ。

??「おい、沙月？これほど遅れるとはいいどきよ．．．う．．．  
．．．．．とりあえずどうした？」

??茜雫を叱ろうとした千冬も怒りが鎮火して思わず訊いてしまう。

??「なに　か．．．．．？」

??風が吹けば今にもぶっ倒れそうな声。

??酷くやつれている。

??末期患者みたいだ。

??「いや、何というか、お前。人生を悟り切ってしまいましたと  
いうか、人間ってなんだろうという結論に行き着いてしまったとい  
うか．．．．．とにかくそんな表情だぞ？」

??「そう　す　か．．．．．」

??返事をするとまたトボトボと列の後方へ歩き出す。

??千冬も罰を与えるのを忘れてしまった。

??もう表情が説明出来ない。

??時折、足をもつれさせながら列に並ぶ。

??目に生気がない。





??茜雫が機械的に一気に喋りきる。

??ヤバイ、茜雫が壊れた。

??二人がガタガタと怯えていると、

??

??ザシユッ

??「げふっ。」

??「刺さった?」「

??いきなり前から飛んできた黒い長方形の物体が高速回転しながら茜雫の後頭部に突き刺さる。

??今ならラッキーの名を持つヒーローの必殺技を放てるだろう。

??大量出血と引き換えに。

?? 「何を私語している。男子共。」

?? 気がつけば、千冬からここまで道が一直線にできている。

?? みんな避けたのだろうか。

?? 「ふん？」

?? 「うぶっ。」

?? 「そのまま抜いた？」

?? 千冬はズカズカと歩み寄り出席簿を掴むと何の躊躇もなく強引に引き抜く。

?? あまりの容赦のなさにみんな顔が引きつっている。

?? ラウラですら頬を盛大に引きつらせている。

?? 出血がないのが何とも摩訶不思議である。

?? 茜雫の頭の災難はなかなか尽きない。

?? 哀れ。

?? 「とりあえず起きろ。」

?? バシン

?? 人形のように固まった茜雫にそのままビンタ。

?? 衝撃でぐらぐらと頭が不安定に揺れる。

?? 「ち、千冬ね．．．．．じゃなかった。織斑先生、やりすぎじゃないですか？」

?? 「大丈夫だ。」

?? 即断言されてしまった。

?? 「起きろ。」

?? まだ目が虚ろだ。

?? 「逝くか？」

?? 拳を握ると

?? 「起きますから。はい。」

?? 茜雫の脳の奥底に眠る生き物としての防衛本能が意識を叩き起  
きした。

?? 「ちっ。」

?? 「ちっ？」

?? 教師とは思えない言動に周りは耳を疑う。

?? 「今からオルコットと鳳が山田先生と模擬戦を行う。」

?? 何時の間にかにそんなに話が進んでいたらしい。

?? 「それで危ないから離れろと?」

?? 茜雫も完全に元に戻っている。

?? 相変わらず切り替えは早いやつだ、と千冬は思った。

?? 「沙月、お前もだ。行ってこい。」

?? 踵を返した茜雫に千冬がいきなりそんな事を言い出す。

?? 「はい?マジですか?冗談と言ってくださるとかなり嬉しいんですけど。」

?? 茜雫は振り返りながら訊く。

?? 正直、今現在コンディションはあまりよろしくない。

?? さつき頭に異物が刺さったし。

?? ただえさえISに乗るのは極力避けたいというのに、こんな状態でエネミーなんかに乗ったりしたら間違いない保健室にベッドインしなければならなくなる可能性が大だ。

??「まだ『アイツ』との交渉も済んでいないというのに。」

??「この時期にぶっ倒れて変な散索をされるのは好ましくない。」

??「あと、専用機ではなく、そこにある訓練機を使え。」

??「訓練機?」

??「お前の専用機だと怪我人が出る。」

??「確かにエネミーの武装をぶっ放したら周りに被害が出る可能性は多いにあるかもしれない。」

??「まあ、『ストレイド』搭載機であるエネミーを使うよりずっと負担の少ない通常機の使用は茜雫にとっては願ったり叶ったりだ。」

??「はいはい。分かりましたけど、どっちの味方をすればいいのですか?山田先生ですか?」

??「数と性能からいってここは同じ訓練機の真耶の味方をするのが妥当だろう。」

??「そのバカどもだ。」

??「茜雫は目線だけずらして何やらいがみ合いをしてる専用機コンピをチラッと見た。」

??「こんなのと連携を取れる自信はない。」

??「……………三対一は流石にヤバイので

は？」

??茜雫は真耶の実力は知らないがこっちは専用機持ちとはいえ精神的にも実力的にも未熟者のおバカ二人がいる。

??二世代訓練機と三世代専用機とでは性能差は言うまでもない。

??まして、専用機二機とも三世代の特徴である特殊武装が備わっている。

??このハンデはかなりキツイはずだ。

??「ふん、どうせ専用機を使っているのは素人同然のひよっこだ。その程度、山田先生なら覆せる。」

??千冬は茜雫の心配を辛辣な言葉で切って捨てる。

??一応、二人とも代表候補生だから、一年ではトップに食い込める実力者の筈、それを性能差と共に覆せるとはどんな腕前やら。

??「いいからぐだぐだ言っていないでさっさと逝ってこい。」

??「誤字発見？」

??茜雫はとりあえず適当に一番近くに置いてあるフランスの二世代のラファール・リヴァイヴを使う事にする。

??真耶がどんな闘い方をするのか知らないので、距離を選ばず幅広く戦えるリヴァイヴなら丁度いいだろう。

???PICを起動し浮遊。

???重いISが無重力の中にいるかのように何も無い空間に浮かんだ。

???こうして考えてみると、自在に宙を浮くことのできるISというものは空を自由に飛ぶ事を目指した人類の終着点ではないかと思ってしまう。

???これで人類の昔からの大きな夢と目標は終わったというわけだ。

???そんなことを考えて現実逃避をしているが身体が若干だるい。

???『お荷物』である『アイツ』が消えてなくならないかなあ、などと思いつながらやる気のない酔っ払い運転のようにふらふらとセシリアと鈴の隣に向かう。

???二人は既に臨戦体制に入っており、鎖で繋がれた猛獣のようだ。

???是非、その有り余った恋の嫉妬パワーをこちらに向けず真耶限定でぶつけて欲しいものだ。

???「あら、茜雫さんもあたくし達の加勢をしてくれるのかしら？  
必要ありませんわ。このわたくし一人で十分ですよ。」

? おお、味方に対して厳しいお言葉だ。

???茜雫自身できれば貴族のエスコートはやった事ないので是非とも遠慮したいのだが、出席簿がまた頭に刺さるのは更に遠慮する。



?? 「ふん、バカス力撃つ事しか出来ないあんたが乳化けを倒せるわけないでしょ？」

?? 「……………それは山田先生への当てつけなのかな？ 鳳さん。」

?? なかなか醜い嫉妬だと思うが、一夏がたまに真耶の豊かなメロソに釘付けになっているのだから仕方ないといえば仕方ないのかもしれない。

?? 因みにそれを聞いていた真耶は闘う前から生徒に罵倒されて泣きそうだ。

「では、はじめ？」

?? 地上で千冬が開始の合図と共に右手を振り降ろした。

?? 合図が響いた瞬間、おバカ二人は真耶を狩らんとばかりに同時に攻撃を仕掛ける。

?? 「い、いきます?」

?? 真耶は二人の気迫に緊張した声で自分を鼓舞すると、茜雫と同じ深緑のリヴァイブを駆る。

?? 突撃した鈴の岩をも砕く青龍刀の一撃をスラスターでスライドするようにして空振りさせ、セシリアの避けた隙を狙った狙撃の一射を身体全体を捻るよつゝの躲す。

?? 「おゝい、オルコットさゝん、鳳さゝん。作戦とかないの?」

?? 飢えた獣のように様子見もなく真耶に飛びかかるセシリアと鈴に茜雫は完全に出遅れてしまった。

?? 茜雫の呼びかけに二人は耳を貸すように見えない。

?? 二人は競うように真耶に攻撃をし続けている。

?? 「. . . . . まあいつか。なんか呼びかけるのが面倒になってきたし、動くと疲れるし、高みの見物でもしところかな。」

?? 茜雫は全く粘る気もなく、さつさとPICのみでふらふらと戦闘を続けている三人を尻目に上空に移動する。

?? おい、沙月。何をしている? さつさと戻って参加しろ。

?? 全く闘う気のなく試合放棄している茜雫に千冬が通信で呼びかける。

??「いやいや、だってあの二人見てくださいよ。俺にどうしろと  
?巻き込まれてフレンドリーファイヤーなんて嫌ですよ。」

??後ろから味方にズドン撃たれて墜落なんてシャレにもならん。

??「とりあえず様子を見て二人のうちどつちかが墜とされたら参  
加しますよ。それまで情報収集って事で。――

――おつ。」

??そんな会話をしていると戦況が変わっていたのに気がつく。

??いや、正確には戦況が一気に変わる事に気がついた。

??一見、防戦一方の真耶だが、防御の合間のライフルとマシンガ  
ンを上手く織り交ぜた射撃でセシリアと鈴がうまく誘導されている。

??「おゝ、山田先生凄いやん。てか、あのバカちん二人は何や  
つてんだ?専用機二機が訓練機一機にいいように踊らされて……  
……あ、ぶつかった。」

??茜雫の眼下では真耶のマシンガンによって誘導された二人が勢  
いよくぶつかって二人セットで完全に動きを止めている。

??そこへすかさず小型グレネードランチャーを撃ち込んで二人は  
仲良く錐揉みしながら地面に叩きつけられた。

??「えゝ、まだ3分しか経ってないじゃん。ウルトラマンかよ。  
てか、どっちも墜とされてるし、どうすんだよ。」

??あの二人は救いのヒーローには向かないらしい。

?? 茜雫のプランでは、残った一人に合わせて、リヴァイブの特徴である汎用性の高い武装で援護する予定だったのに、全ておじやんだ。

?? 茜雫はあの二人専用機を剥奪されちゃうんじゃないのか、と思いは始める。

?? とりあえず、さらに上昇して避難する事にした。

?? 戦略的撤退ってやつだ。

?? 「山田先生って凄いな。」

?? 一夏は訓練機でセシリアと鈴を圧倒した真耶に驚いていた。

?? 一夏のISによる入学試験も真耶が相手だったのだが、あれは何だったんだというほど動きが違う。

?? いつものオドオドしている姿とは違い、動きに迷いがなく機敏だ。

??人は見かけじゃ判断出来ないとはまさにこの事だろう。

??「あれ？茜雫ってどこ行ったのかな？」

??シャルルがついつい真耶達の戦闘に気をとられている隙に茜雫の姿が見えなくなっている事に気がついた。

??先程からやる気のなさそうに上空を漂っていたが、今は姿も見えない。

??逃げたのだろうか、みんなが騒ぎ始めたその時、茜雫を搜索していた真耶の真上で爆発が起こり大きく揺さぶられた。

??あの爆発は、

??「グレネード？どこから撃ったの？」

??シャルルは注意深く真耶の真上あたりを見ると、小さく米粒のような何かが見えた。

??「あそこから狙撃したのか？」

??千冬も太陽の光が眩しいのか少し目を細めながら呟く。

??「……………グレネードランチャーで狙撃なんかできるのか？」

??一夏は射撃の専門ではないので、隣で口を少し開けて驚いているシャルルに尋ねる。

???「普通ならまずやらないね。というか、グレネードランチャーは狙撃になんか向かないよ。」

???シャルルはハイパーセンサーで緑の米粒のような物体を拡大すると、先程真耶がセシリア達を叩き落としたのと同じ小型グレネードランチャーを構えている。

???小型グレネードランチャーは固定されている大型のグレネードランチャーと違い、やってる事は手榴弾を手ではなく火薬を使って投げているのほとんど変わらない。

???

???だから、弾道は放物線を描くし、射程距離も弾丸と比べ短く遅い。

???そこで、茜雫は確実にグレネードの一撃を加える為にとつたのは遠距離でハイパーセンサーのロックオン機能を使わない目視による真上からの射撃。

???真上からなら重力など全く関係なしに弾道は真っ直ぐになる。

???目視ならロックオン警報も鳴らないから気づかれぬ。

???しかも、今日は無風なのでかなり楽だ。

???真耶もそれに気づき、スラスター出力を最大にして真上に加速した。

???それを見ると、茜雫は持っていたグレネードランチャーをそのまま静かに落とす。

??地上ではみんながそれをわけもわからず重力によって加速しながらただ落ちるグレネードランチャーを見る。

??真耶も特に躲す必要もないと判断して、最小限に身体をずらしてよける事にする。

??あつという間にグレネードランチャーと真耶の距離が縮まり、すれ違おうとしたその時、

??突如グレネードランチャーの銃底に穴が空き、予備弾薬を含め全てに引火、大爆発を引き起こす。

??鉄片は花火のように辺りに飛び散り、すぐ近くにいた真耶は凄まじい爆発と鉄片を至近距離で受ける。

??「くっ?ー?ー?うっ?」

??衝撃に耐えていた真耶に今度は真上から鋭い衝撃が走る。

??茜雫は先程グレネードランチャーを狙撃したアンチマテリアルスナイパーライフルで真耶自身への目視での超遠距離狙撃を開始している。

??チカチカとシールドバリアに弾丸が接触する度に発光した。

??ロックオン警報がならない為回避が難しく真耶は物理シールドを展開して耐えていると茜雫はそのまま乱射しながら突っ込む。

??物理シールドの為視界が限られている真耶はそのまま最大速度のタックルをかましてきた茜雫に気づくのが遅れる。

?? まともにくらった真耶は地面ギリギリで体制立て直す。

?? 「今度はセシリア達と逆ですね。」

?? 茜雫は余裕そうに見ているが、地上の真耶は不敵に微笑んだ。

?? 「沙月君もそうやってると足元をすくわれますよ?」

?? 「え?」

?? 真耶の言葉がわからず、何か言おうとすると、目の前に球体が十数個投げられた状態で空中に浮かんでるのに気付いた。

?? それはピンの抜かれたグレネード。

?? 「.....いつの間にこんなに  
たくさん.....」

?? 茜雫の表情が引きつったその時、  
??

?ズドオオオオオオオオオオ



??茜雫の目の前で1ダースのグレネードが全て爆発。

??茜雫も勢いよく吹き飛ばされて地面に叩きつけられる。

??「痛っ。」

??しかも、重点的にシールドバリアのある顔や胸の近くで爆発だった為エネルギーを大きく削られる。

??高所から勢いよく地面に叩きつけられた衝撃で絶対防御が発動した。

??それだけでシールドエネルギーはもう戦闘続行不可能となった。

??茜雫は最後の最後で負けてしまった。

??生徒チームの完全な敗北である。

十九話 実習（後書き）

今日からいつも通り2日に一話または3日に一話になるけど怒らないでね

要望感想アドバイス待ってます

二十話 訓練（前書き）

今日は学校が休みになった！  
更新できた

## 二十話 訓練

??人間とはつくづく弱つちい生き物だ。

??自分の首を閉め続けているのに気が付きながらも、奇跡の塊である大地を汚しまくっている。

??破滅へ絶賛爆走中なのを分かっているながら改善どころか悪化しているのだから救い様もない。

??と言ってもこれは頭の弱さについてだ。

??人間は決定的に個で他種に劣る。

??肉を噛み切る牙も無い、研ぎ澄まされたナイフのような切り裂くための爪も無い、全てを破壊しつくすような強靱な腕力も身体も持っていない。

??鍛えればそれなりだが限界があるし狼、虎、ゴリラなんかに比べたらあまりにも貧弱。

??何も守れないじゃないか。

??それが不思議でたまらない。

??生物として進化の仕方を間違えたんじゃないのかと疑ってしま  
う。

??力がないと自分も、大事なものも、生き方すら守れない。

??失うだけだ。

??ナイフがちゃんとある事を確認する。

??

??そして、銃を構える。

??

??これが俺の爪牙だ。

??

?? 茜雫は地球に向かって銃の引き金を引いた。

?? 今地面に向かって身体全体を向けている。

?? 高高度でのその体制から見える視界に映る大地は巨大な壁が立ちほだかっているようで圧倒的だ。

?? チンケな人間では自力での破壊は不可能だ。

?? 引き金を引いた0.1秒以下ーもしかしたらコンマの世界に入っているかもしれない瞬間、前方で一際大きな爆発が眼前で起こる。

?? 反射的に目を細めるが閉じることはない。

?? 獲物は少しでも視界の中に入れておかなければならない。

その爆発を目で確認した時にはもうさらに引き金を引き、第二射の弾丸を撃ち出す。

?? 壁ごと目標を撃ち抜くために開発され数百m先の戦車すら破壊する事のできるフランス製アンテマリアルスナイパーライフル『カートII』の凄まじい反動が身体を揺さぶる。

?? PICである程度自動で反動を相殺するといえ姿勢制御にも

回している分、反動は結構凄い。

?? 撃つ度に腕が震え、振動が身体を貫通し内蔵を圧迫する。

?? アサルトライフルなどと比較にならない炸薬によって銃の中で最大サイズを誇る弾丸は圧縮ガスによって一瞬で音速を超え、右回り6回の螺旋を描いたライフレリングによってジャイロ回転しながら12、7mmの銃口から対象を破壊するべく吐き出される。

?? 爆発によって身動きの取れない真耶に着弾。

?? 真耶を引き裂かんばかりに襲いかかる弾丸はシールドエネルギーによって受け止められる。

?? その時、シールドバリアとの接触の光がチカツと発光、一瞬だけ光源を創り出す。

?? 茜雫はその光が少しだけ眩しいと考えながら続けて引き金を引く。

?? が、第五射目からは厚い物理シールドを展開され防がれてしまう。

?? 流石にIS戦を想定された物理シールドを突破するだけの貫通力はこの武装に無い。

?? 茜雫はスラスタ出力を一気に上げそのまま乱射しながら加速。

?? 普通の武器と違いISで扱う銃器は撃つたら空いた弾倉に量子展開できるためそのまま撃ち続ける事も可能だ。

??マシンガンとライフルの並行射撃に足を止められた真耶に全力タツクル。

??カタログスペックの最大速度オーバーでタツクルされた真耶は地面に叩きつけられかけるがスラスターを吹かして何とか地面スレスレで持ち堪える。

??茜雫が完全の見下ろす位置関係。

??生徒と教師の立ち位置として間違ってるかもしれないが模擬戦なので仕方ない。

??「今度はセシリア達と逆ですね。」

??ちょっと調子に乗ってみる。

??そのぐらいの余裕はあるだろう。

??「沙月君もそうやってると足元をすくわれますよ?」

??眼前で不敵に笑う真耶に疑問符が頭が頭に浮かぶ。

??この状況であり得る事は.....

??直ぐに下に向けた視線を正面に戻すと、

??十数個の球体。

??「.....いつの間にこんなに



たぐさん . . . . .」

??茜雫は突如目の前で起こった灼熱の爆発のあまりの光の強さに目を細めた。

??本来なら脆弱な人間の身体などと紙屑のように引き裂くはずの暴力的な爆風は見えないシールドバリアを突破し、さらに強固な絶対防御の障壁によって多量のエネルギーと引き換えに防ぎ切る。

??「痛っ。」

??それでも十分衝撃がくる。

??プロボクサーのパンチを喰らったぐらいの衝撃が身体全体を殴りつけた感じた。

??まあ、プロボクサーのパンチなんて喰らった事はないが。

??怪我した頭にはその衝撃はかなりキツイ。

??クラクラする頭で胃がひっくり返る様な嫌な浮遊感を感じた瞬間今度は背中から強い衝撃が身体全体を突き抜ける。

??ついでにシールドエネルギーが戦闘不可能領域に達したのを視界の隅のウィンドウで確認。

??完全にひっくり返せてしまった。

??茜雫は力尽きたと頭をダランと逆さまに垂らして逆さに世界を見る。

???いつも視界の隅に入ってくる長めの前髪が綺麗に取り払われ、いつもより視界が広く見える気がする。

???今度屋上で試してみようかなあ、とISを動かした後上手く働かない脳で提案してみる。

???即可決。

???今夜、やってみよう。

???と、逆さの視界に誰かが近づいてくる。

???確認するまでもない。

???「どうだ？最後の最後で甘かったな。」

???逆さに立って見える千冬がこちらを見下ろしている。

???「年の功ってやつですね。若造には勝てないですね。」

???「引き分けにした奴がよく言う。」

???「私はそんなに歳をとってません？まだ20を超えたばかりかです？」

???こちらにISを解除した真耶が心外とばかりに弁解しながら歩み寄って来る。

???真耶の後ろには膝をついた状態でススが少しついた深緑のリヴ

アイブが鎮座している。

?? 「引き分け？」

?? 「ギリギリ勝てたと思ったんですけどね。残念です。」

?? 真耶が少しうつむきながら残念そうに肩を落とす。

?? という事はあれは当たったのか。

?

?? 茜雫は自分の悪あがきが成功した事に気が付いた。

?? 茜雫は真耶の放ったグレネードが爆発する瞬間に反射的にブレードを量子展開、まともに狙いをつけずに適当にぶん投げた。

?? 真耶はグレネードが爆発するのを見て勝利を確信したが、爆風を切り裂くように回転しながら飛んできたブレードが直撃。

?? もうただえさえエネルギーが尽きそうだった真耶のリヴァイブはそのままエネルギーが尽き、結果的に引き分けとなった。

?? 「まったく……手抜きをするから三対一で負けるんだ。」

?? 「ええ？手加減してたんですか？」

?? 真耶は驚きしかない。

?? あれだけ追い詰められて相打ちがやっとだったというのに、手加減されていたなんて本気ならどれだけ強いんだ。

?? 「別に手抜きなんてしてませんよ。普通にやりましたよ。」

?? 「嘘をつくな。無人機のとくと闘い方も秀囲気もまったく別物だったぞ。」

?? うわ、そこまで言われたらどうしようもない。

?? てか、そんなところまでしっかり見ているあたり流石は千冬と言ったところか。

?? 「とりあえずあのおバカさん達に連携って言葉を辞書で引かせてください。チームワークって単語の『チ』すら発音できない状態ですよ?」

?? あれは早くどうにかして欲しい。

?? これから連携を取る事もあるかもしれないのにあの連携とも言えない闘い方したらばる負け決定だ。

?? 「ああ、言われなくてもな。みっちり叩き込むから心配するな。」

?? 非常に心配です。

?? 主に千冬の指導方法の方が。

?? 「いつまでも寝っ転がっていないで早く予備のエネルギーを使って元に戻せ、実習をするのはお前だけではないのだからな。」

?? おお、こちらは身体を酷使して頑張ったというのにその労いはキツイです。

?? とはいえそれは正論なのでさっさと予備のエネルギーを起動させて定位置に戻る事にする。

?? 少し長くISを起動させたからか、頭を怪我した状態で戦闘をしたからか頭がフラフラして歩みも千鳥足で少々危なっかしい。

?? みんなも少し心配そうにそれを見ている。

?? 元の位置に戻るとリヴァイブを装着解除する。

?? その際ちゃんと膝をつかせるのは忘れないようにする。

?? そして、列にゆっくりマイペースに戻って行く。

?? 「おい、セン。大丈夫だったか？何か歩き方が危なっかしいし少し顔色が悪いぞ。」

?? 「自分の胸に手を当てて原因を考えたら？」

?? 「「うう？」」

とてもとても心当たりがありまくる一夏とシャルルはビクツと肩を居心地悪そうにすくめる。

?? 素直で分かりやすい反応ありがとう。

??

?? 「そういえば……茜雲って専用気持ちなんだよね？」

?? 「ん？そうだけど。」

?? 「一夏にどんなお仕置きをしてやるうか考えているとシャルルが訊いてくる。」

?? 「なんかリヴァイブと実弾の扱い方がすごくうまかったんだけど、似たようなISなの？」

?? やはり、同じ男子の専用機には興味があるらしい。

?? 茜雫自身シャルルの専用機がどんなのか気になる。

?? と、言ってもフランスは今IS事情があまり宜しくなく、おそらく第2世代のカスタム機だと思いがどんなチェーンをされてるか気になる。

?? 「180度まったくの真逆。」

?? 「ええ？そうなの？」

?? エネミーは実体兵器よりもエネルギー兵器が主力だしリヴァイブのように多彩な武装を切り替えて闘うわけではなく高火力でのゴリ押しが得意の機体。

?? リヴァイブとはそりがあっていない。

?? まだ、先ほどの間近での戦闘の興奮が抜けないのかざわついている。

??それを千冬が手を二度叩いて黙らせる。

??「さて、これで諸君にもIS学園教員の実力は理解できたろう。以後は敬意をもって接するようにな。」

??「生贄ですか。俺らは。」

??「そういう事だ。別にいいだろうが。」

??なんつー教師だ。

??ここまできると清々しいな。

??しかし、千冬言葉に皆、さっきの戦闘で少し戸惑いながらも返事をする。

??あの山田先生があれほどの実力者だったことに皆驚いているようだ。??

??「専用機持ちは織斑、沙月、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰だな。では十人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。では散れ。」

??「打鉄が三機リヴァイブは三機ありますので早い者勝ちですよ。」

??

??「織斑くん、一緒に頑張ろう?」

「わかんないところ教えて。」

「デュノア君の操縦技術を見たいなあ。」

「ね、ね、私もいいよね？ 同じグループに入れて？」

「何故かこちらに集まってきた。」

「知ってる顔もちらほらと知らない顔もちらほらと見える。」

「早速ISに走り出す、と思いきやグループの方が大事らしい。」

「せつかく高い倍率勝ち抜いてIS学園に入学したのだから普通少しでも早くISに乗りたがるものではないのか。」

「女子の思考回路は謎だ。」

「この馬鹿者どもが………。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ？ 順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンド百週させるからな？」

「千冬の一喝でわらわらと集まっていた女子は蜘蛛の子散らすように逃げ出す。」

「IS背負ってグラウンド百週なんて死んでしまっ。」

「命は大事に、だ。」

「出席番号順に並べというアバウト指示にも関わらず、数分とかからずに整列完了。」

「………。最初からそうしろ。馬鹿者どもが。」



???これには千冬もため息をついて呆れる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・やっただあ？織斑君と同じ班つ。苗字のお  
かげねっ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・沙月くんだあ？さっきは引き分けだったけど  
格好良かったなあ・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・うー、セシリアかぁ・・・・・・・・・・。さ  
っきボロ負けしてたし。うーん・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・鳳さん、よろしくね。あとで織斑君のお話聞か  
せてよっ・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・デユノア君？わからないことがあったら何で  
も聞いてね？ちなみに私はフリーだよ？」

???喜ぶ女子もいれば残念そうにしている女子もいる。

???しかし、

???「・・」

???そこだけ無言の空間があった。

???ラウラの班だ。

???しゃべってはいけないような嫌な沈黙が流れてみんなも気まず

そうだ。

?? 他班も気の毒そうに見ている。

?? ラウラはそんな空気を気にした様子もなく前を見てじっとしている。

?? 対極の微妙な空気の中訓練は開始。

?? 「え〜と、まずは装着、歩行、装着解除をやるから。 . . . .

. . . . . まずは、誰からかな？」

?? 二組の人間も混ぜられているため誰が一番番号が若いのか分からなかった。

?? 「はいはい。私ですっ？」

?? 元気です快活な返事がした。

?? 「エニックスさんからか。」

?? 「やったあ。名前覚えてもらったあ？」

?? 腰まで長い光沢のある黒髪をうなじで束ねた可愛いというより美人が形容できるアメリカと日本のハーフらしいニーナ・エニックスが満悦の笑みで少しだけ飛び跳ねながら喜ぶ。

?? 飛び跳ねるたびにふくよかな双丘が上下に揺れて目のやり場に困る。

??」「……………なんでそんなに喜ぶの?」

??「相川さんの時もそうだったが何故か名前を覚えているだけで喜ばれる。」

??「気になる。」

??「だって沙月君って人の名前まったく憶えないし、それどころか憶えてるふりするし。」

??「ぐっ?」

??「痛いところを突かれた。」

??「茜雫は人の名前を憶えるのがとても苦手だ。」

??「自分でも不思議なぐらい。」

??「転入してから一ヶ月半経った今でも名前をちゃんと憶えている人は少ない。」

??「4日ぐらい前にあんまりにも人の名前を呼ばないから一度前の席の谷川さんに「私の名前を憶えてる?」と訊かれたときは冷や汗かきながらさんざん迷い。」

??「谷川さんの無言の圧力に頭が真っ白になってしまい「田中さん。」と答えたときには半泣きされてしまった。」

??「その後、それを見ていたのほんさんにも同じ質問をされこれまた迷った。」

??このときのほんさんの笑顔に隠されたどす黒い空気にパンクした頭は「のほんがヒントだ？」と記憶をたたき出したが二分後  
出た答えは、

??のーほるど・ほんどさん

??誰だそれは……………

??今思い返しただけでもバカだと思う。

??結局、のほんさんの笑顔での袖口ピンタを喰らってしまった。

??これが結構痛かった。

??主に精神的に。

??「あゝい、沙月くん?どうしたの?」

?? 惚けた顔で辛い過去を思い出していると目の前でぶんぶんと手を振っているエニックスさんがいた。

?? 「……………何してるんだっけ？」

?? 「大丈夫？ 頭怪我してるみたいだから保健室行こっか？」

?? 「…………………………」

?? いてえ、今の言葉はすげえいてえ。

?? 「冗談だよ冗談？ そんな落ち込まないでよね？」

?? 慌てた様子でエニックスさんが弁解する。

?? どうやら気がつかないうちに落ち込んでたらしい。

??

?? 「まあ、とりあえず始めようか。」

?? 「そ、そうだね？ 始めよっか？」

?? その後、装着、歩行、装着解除が無事に済む。

?? 「ほいっと。」

?? 気楽な掛け声とともにエニックスさんが打鉄から飛び降りてくる。

?? 「よし、完璧。じゃ、次の人は誰かな？」

???初心者にしては全部完璧だったエニックスさんに感心しつつ次を促す。

???「わ、私だ。」

???「ほくきちゃんか。」

???何やら緊張した様子の筈がおずおずと前に出てくる。

???しかし、打鉄に乗ろうとしない。

???「どうしたの？ほくきちゃん？やらないの？」

???「そうではないのだが………」

???打鉄を少し顔をかたむけて見上げながら、

???「どうやって乗るのだ？」

???「どうやってって言われて………」

あ。「

???そこで茜雫も気づいた。

???エニックスさんが立ったまま装着解除してしまったためコクピットが高い位置にあり乗れなくなっている。

???「どうしようかなあ。」

?

?? 怪我のせいでスキズキする頭を二つの意味で抱えていると、

?? 「どうかしましたか？」

?? 真耶が登場。

?? 「これはどうしようかと思ひまして……………」

?? 助かったとばかりにヘルプ

?? 「ああ、最初のうちはよくある事ですよ。沙月君運んであげてください。」

?? 運ぶ?どうやって?Carry?How?

?? 「俺も届きませんよ?」

?? 「ISを展開するんですよ。」

?? 「背負うのですか?」

?? もしその状態で背部スラスターを使ったら即座に炭だらけのステーキが完成する。

?? このステーキ、ステキ。

?? 何を考えているんだ自分は……………

?? ギャグセンスにビックリだ。

?? 「お姫様抱っこですよ。」

?? 「「「「ええ?」「」「」

?? 幕含む後ろの女子が驚く。

?? 「山田先生?私、もう一回やりたいです?今度はちゃんと座って解除しますから?」

?? エニックスさんがビシッと手を上げてやり直しを要求。

?? 「ニーナずるいつ?」

?? 「ダメダメ?認めません?」

?? 「はいはい?私が次やりたいです?」

?? ちゃっかり自分だけお姫様抱っこを体験しようと思論むエニックスさんにもちろんごねだす。

?? 「はいはい、分かりましたよ。」

?? 茜雫はさつさとアンロック・ユニットの稼働盾を展開せず、エネミーを展開。

?? 細すぎると言ってもいいスマートで流線型の黒い装甲に包まれ



る。

???「わぁ。沙月君の専用機だ。初めて見た？」

???「沙月君の専用機って細いねえ。」

???「いいなあ専用機。」

???「高起動型なのかな？」

???騒いでいたエニックスさん以下数人の女子がそれぞれの反応を見せて静かになる。

???「ちよつと失礼。」

???すくうように箒をお姫様抱っこしてあげる。

???「わっ、ちよ、少し待て?まだ心の準備が?」

???「だーいじょうぶ。大丈夫。ISなんて乗ってればなれるって。」

???「そっという事ではない?」

???「?」

???ではなんの心の準備なんだ?

???お姫様抱っこされる箒を見て、女子は羨ましそうにその光景を見ている。

?? 疑問を頭に浮かべつつ、ちゃんと打鉄のコクピットに運んであげる。

?? 打鉄を装着している筈は顔を真っ赤にしながら若干俯いている。

?? やつぱり大和撫子の筈には恥ずかしかったのだろうか。

?? 「そ、そのだな。セン。」

?? 「はいはい、なんですか麗しのお姫様。」

?? ちよつとからかってみる。

?? 「お、おひめさま……。」

?? 案の定、筈は何やら口をパクパクしながら呟いていたが、途中で正気に戻った。

?? ごほんと一度咳払いをすると、

?? 「一緒に昼食をとらないか。」

?? 昼食？それならいつも一緒に食べているのではないのか？

?? そんな茜雫の疑問が通じたのか

?? 「学食ではなく屋上でだ。」

?? 茜雫は上を向いた。

?? 一面に広がる青い空。

?? その青さから先に真っ黒い底無しの宇宙が拡がっているとは考えられないものだ。

?? まあ、これだけ天気もいいのだからそれもいいだろう。

?? 「わかった。全然OKだよ。」

?? 「う、うむ。そうかそうか。」

?? 篝も花が咲く様な満悦の笑みを浮かべた。

?? その会話を聞いていた女子はさらに羨ましそうだった。

?? 誰か特定は出来なかったが、ひときわ大きな痛い視線がチリチリと茜雫の肌を焼いた。

?? 火傷したかもしれない。

?? その後、全員無事に終わった。

?? 授業も終わりさあ帰ろうとしたその時、

?? 「おい、沙月。」

?? 入り口に向かって歩を進めた直後千冬に呼び止められる。

?? 一夏とシャルルには先に行ってもらい、茜雫は身体を180

度Uターンして千冬の元に歩く。

??「後で話があるから昼休みに職員室に来るように。」

??「……………昼メシの後でもいいですか。お腹が減ってしにそうです。」

??「今も茜雫の腹の中では盛んに大合唱が続いている。」

??「死ぬのなら学園の外でな。」

??「めちゃくちゃ酷い。」

??「冗談だ。」

??「怖い冗談だ。」

??「ちゃんと来るようにな。話はそれだけだ。」

??「はい。」

??「夏達を追うために茜雫はまた身体を180度Uターンして歩き出す。」

??「茜雫。」

??「また、千冬が呼ぶ。」

??「今度は名前で。」

?? 「なんですか？千冬さん。」

?? 「何か隠しているのだろうか？」

?? 「特に何も。」

?? 「……………そうか。」

?? 茜雫はまた背を向け遠ざかる。

?? 今度は少しテンポを早く歩幅は広く。

?? 徐々に距離を開けていった。

??

## 二十話 訓練（後書き）

ニーナ・エニックス・・・・・・・・・・これから出していいのかな  
．  
個人的にイメージがまとまっているんだが・・・・・・・・  
どうしようか迷う  
みんなはどうして欲しいですかね？

誰か評価と感想下さい  
なんか不安

少しニーナ・エニックスの設定を編集しました

二十一話 昼食（前書き）

やっと更新できた

が、お気に入りへの更新は止まっちゃってしまった  
しかし、俺はめげん？

## 二十一話 昼食

??

??

??茜雫は清潔的な色をした真つ白い包帯に巻かれた頭をしきりにひねっていた。

??何やら千冬に怪しまれている。

??怪しまれる理由は山ほどあるがそれを悟られたのは何故だろう。

??まだ態度として出していないがおそらく湊にも同じように何か感づかれているのだろう。

??ある意味、湊は千冬よりも厄介だ。

??観察眼と感の良さは学園一、おそらく世界でも指折り数えられるだろう。

??しかもふざけつつもしっかり見ているのだから質が悪い。



??これ以上は少し動きづらくなるから早めに手を打っておかなければ後々面倒だ。

??「さてと、これからどうしようかな。」

??茜雫は更衣室へと続く廊下を一人歩いている。

??寂しいもんだ、と周りを見渡しても人一人の気配すらしない。

??今はもうすっかり昼食時となった為、アリーナの廊下は物音ひとつしない。

??こんな時いつもなら隣に一夏がいるのだが、千冬に呼び止められた時にシャルルと共に先に行つてもらった。

??箒と一緒に屋上で昼食を食べることはもう伝えておいたので今頃もう着替え終わってシャルルと共に屋上で昼食を食べにいくと箒と向かっているところだろうか。

??一夏のことだからおそらく一夏ハーレム要員二人も金魚の糞よろしくくつついて来てまた面白いことになるだろう。

??早く用事を済ませねば。

??あんな面白いことを見逃しては後悔してしまう。

??少し歩くテンポを早くして更衣室へと小走りに近い速度で急ぐ。

??自分の足音が壁に反射して誰もおらず障害物のない長い廊下に軽やかな音が響く。

??しかし、3秒と経たない内に急にその足音が消えた。

??また、廊下は水面を打ったかのような静かさが戻る。

??茜雫の歩行速度も歩き方も変わった様子はない。

??考え事をしていた茜雫は途中で自分が物音を消して歩いていることに気づく。

??無意識にこういつた音を消してしまうのが茜雫の癖だった。

??昔からなんとなく足音が妙に気になってよく消して歩いたりしていた。

??だから、昔から鬼ごっこでも後ろから忍び寄ってすぐに捕まえられたしかくれんぼは得意分野だった。

??まあ、中東にいた頃はこの癖に何度助けられたかことか。

??もしかしたらこういうところで何か感づかれているのかもしれないとちよつと自己分析。

??直さなければいけないかもしれないが無意識の癖なのだからどうしようもない。

??なかなか答えを見つけ出せずにいると、ふと気がついたら更衣室を10mほど通りすぎている。

??深く考え事をしていたとはいえとうとうこんなところまで感が

鈍ってしまったのか、と少しショック。

??こんなところにも問題点が発覚してしまった。

??問題点が多すぎて頭が痛い。

??くるつと180度Uターンして更衣室の扉を開けるともちろん誰もいない。

??照明まで消してあるから暗さと静けさが合間って不気味さまでもが出てくる。

??まずは着替えからだ。

??ISスーツを一度抜いで制服を着直す。

??昔からこういったものを着慣れているから一夏みたいに着替えぐらいでいちいち手間取ることはない。

??上着を着替えるぐらいの感覚ですぐに着脱することなんて朝飯前だ。

??一通り着替え終わり荷物を纏めると本来なら箒や一夏達と昼食をとるべく屋上に急ぎでいかなければならないが茜雫は更衣室から出ると別の方向に歩を進める。

??1分ほどでアリーナ二階にあるテラスへと到着。

??ここから茜雫の頭の頭痛の種N01との『用事』がある。

??茜雫は少し耳を澄まして周りに本当に誰もいないことを確認する。

??頬を撫で付ける風の音しかない無人の空間だ。

??それを目でもしつかりと確認すると茜雫はテラスの景色を眺めるように胸元ほどの落下防止フェンスに体重を預ける。

??目を閉じて意識を集中させた。

??意識を海中の中へ潜らせるような不思議な感覚。

??数度しか試したことがないが、海底に沈むようなこの感覚がどうも好きになれない。

??引きずりこまれるような錯覚に陥る。

??

??美術館で展示されている彫像のように目を閉じ、身じろぎをせずつ動かなかった茜雫の形の整った唇が動いた。

??「おい、寄生虫。」

??出て来た言葉は、お世辞にも綺麗な言葉とは言い難い。

??すると、茜雫の背後に一人、青年が背を向けた形で立っていた。

??しかし、その姿は炎の灯火のように揺らめいていた。

??青年が雲が半分ほど占めるすいこまれそうなほどの青い空に流れる雲を眺めるように顔を上げた。

?? 「前にも同じことを言ったが、随分なご挨拶だな。泣けてくるぜ。」

?? 文字通り血も涙もないはずの『コイツ』はぼんやりと空を眺めながら涙を堪えるフリをする。

?? 茜雫はフェンスの上に腕を組む様においた両腕に顎を載せながら盛大に舌打ちをする。

?? 「泣く事もできねえヤツが巫山戯た戯れ言をほざくな。対処がめんどくさい。」

?? 「口が悪いことだ。」

?? やれやれと言った感じで呟く『コイツ』を顔を少し後ろ向きにズラし目線だけで見ると苛立ちが募る。

?? また、景色を見る為、視線を前に戻した。

?? 「だいたい寄生虫とは何だ？せめて霊長類ぐらいに進化させてくれよ。そんな下等生物と一緒にするな。」

?? そんな茜雫を無視して『コイツ』は悠長に抗議をした。

?? 「やってる事は寄生虫と変わらないだろ。そんなに進化したいなら俺みたいな檻から出て行ったらどうだ？新しい境地を開けるかもしれないぞ？」

?? 「いや、無理だろ。暗にオレに死ねと。やれる事とやれない事

を考えてくれよ。」

?? 「なら寄生虫で我慢するんだな。というか、どっちかというと死んでくれると俺は非常に助かる。」

?? 「ひでえ。」

?? 見なくても『コイツ』が肩を竦めているのがわかった。

?? 『コイツ』はそう言われればどうしようもないと降参。

?? 「しかし、お前からオレを呼び出すなんて珍しい……………  
．．．というか、初めてだな。オレが恋しくなったのか？」

?? 流れるいく筋もの雲をゆっくりと視線を徘徊させながら見上げていた『コイツ』が目を動かして流し目でこちらを見てきた。

?? うわっ、とうとう頭がイかれたのか。

?? 「死ぬ。9586368631684万が1にもそんな確率は絶対にあり得ない。てか、キモいぞ。」

?? 「……………とうとう一慶の値にまで突入したか。もはや天文学的数字だな。釣れないもんだ。」

?? 呆れ口調の『コイツ』に呆れた茜雫は強引に本題をぶつける事にする。

?? こんなヤツと世間話をする為にいちいち呼び起こしたのではない。

?? 「『オマエ』とりあえず深層まで引っ込め。」

?? 「へ？」

?? 突然の命令に『コイツ』は間抜けな声を上げた。

?? 「なんで？」

?? 間抜けた口調が抜けない状態で訊き返して来る。

?? 「これから『オマエ』の大嫌いなISに乗る機会が増えて来る。『オマエ』がいるととにかく邪魔だから引っ込めって言っ  
てんだよ。」

?? 「んだよ、まだあんなオモチャに乗ってんのかよ。あれは好か  
ねえ。嫌いだ。」

?? ガキか、『コイツ』は。

?? まるで子供がピーマンを拒絶するようにISを嫌いだと言  
した『コイツ』に殺意を覚える。

?? 「『オマエ』の好き嫌いでこっちはかなり動きが制約されて  
んだよ。これから動きづらくなるから引っ込め。」

?? 「ヤダ。」

?? 「のやるめ。」

?? ああ、スゲー殴りたい。

?? いつかチャンスがこないかな。

?? 茜雫が心の中にいるとはとても信じられない神様とやらの願い事をしていると、

?? 「だいたいなんでそんなもんに頼る？ あんなオモチヤに乗らなくても十分連中と渡り合えるじゃねえか。 てか、今までそうしてきてただろ？」

?? 確かにそうだがそれは一般的な兵士や戦闘力の少ない『アイツら』に対してだ。

?? これからはわけが違う。

?? 「生身で初期型とはいえ『ストレイド』と殺り合うのは自殺行為だ。アレについては『オマエ』もすっかりと理解しているだろ？」

?? 「まあな。確かにアレは好きだな。」

?? 『オマエ』の好き嫌いを訊いてんじゃねえよ。

?? 茜雫は内心毒づくが口と態度に出さず綺麗に持ち前のポーカーフェイスで表情を上塗りする。

?? 大人の対応ってやつだ。

?? 「でも、お前の深層ってマジでヒマなんだよ。やる事ないし。何も聴こえないし。」



??その眩きに茜雫は僅かに引っかかりを覚えるが深くは追求しない。

??無駄な体力を使ってあいつらの前でボ口を出したくはない。

??嘆息混じりで諭すように、

??「とにかくこれ以上はお前が浅いところで居座っていると本当に死ぬから。」

??「死ぬのが怖いのか？」

??そう言っただけにしたように歪んだ笑い方をする。

??見てて胸糞悪い光景だ。

??「……………これ以上はこの身体が死ぬって言うてんだよ。お前も困るだろうが。」

??少し違っただけがあながち間違っていない。

??死ぬのは多分怖くはない。

??死んだ後が怖いのだ。

??周りで何が起きてても何も出来ない。

??まだ死ねない。

?? 「まつ、たしかにオマエ以上に都合のいいヤツはいないからな。使い物にならなくなると困る。利害一致って事で了承してやるよ。感謝しろよ。」

?? 「doimo, arigatougozaimasita.

Shitsky? schneil verlorren.

?? 「誠意がこもってないどころか、何故か非常に感謝の気持ちが普通以上に感じないぞ? しかも、悪口混じってるし? てか、こつちを少しは向きやがれ?」

?? そりゃ、込めるつもりなんかないし、文面にしないとわかんないしな。

?? 何より『オマエ』のツラなんか見たくない。

?? が、

?? 「だいたい俺の身体とってどうすんだよ? 自由でも手に入れたのか? 偶然生まれてからずっと檻の中の『オマエ』が。」

?? めんどくさそうにここで初めて相對した。

?? 相変わらず茜雫自身と鏡を写したように瓜二つの姿。

?? 迷惑千万な事だ。

??すると、『コイツ』は休日の過ごし方でも決めるように、

??「まあ、そうだな。それもあるが、取り敢えず自由にでもなつたらオマエの姉代わり二人に手でも出そうかな。」

??瞬間、

??一瞬で目つきを凶器のように鋭く纏う空気を殺意に一変させた茜雫はベルトから薄く細い仕込みナイフを左手で目にも留まらぬ速さで抜き去る。

??そして、抜き去りながら『コイツ』の首元、本来なら頸動脈のある部分を躊躇なく薙いだ。

??「そんなんでオレが殺せるかよ。」

??が、

??ナイフはなんの手応えもなく首筋を通りすぎる。

??『コイツ』はそよ風でも吹いたかのように素面でその光景を眺めている。

??一般人なら即死決定だが、残念な事に実体のない『コイツ』にはなんの意味もない。

??

??茜雫はまだ殺意を仕舞わない。

?? 常人なら震えて動けなくなるかもしれない。

?? 戦闘熟練者での動くのに躊躇してしまうかもしれない。

?? まるで心臓を鷲掴みされるような巨大であって氷冷の殺気が迸っている。

??

?? 「.....」

.....

?? 茜雫はジツと睨みつけながら器用に利き腕でもない右手で制服の胸元のボタンを外すと少しはだけさせる。

?? 『コイツ』は怪訝そうにそれを見たが意図がわかった瞬間その顔を初めて歪ませた。

?? 左手の仕込みナイフは今、茜雫の心臓にピンと突き立てられている。

?? 正確には、心臓の左心室を少し左下にズレた位置に。

?? 心臓から僅かに外れているとはいえ右に数mmズレれば心臓が確実に傷つく。

?? ズレなかったとしてもそこには大血管が複雑に絡むように張り巡らされている部位だ。

?? 大血管が切れれば心臓に近い事もあって大量失血で死ぬ事は間違いない。

??「……………成功する確率は限りなく低いぞ？  
死ぬ気か？」

??『コイツ』の表情が僅かに強張る。

??二人にとってこの仕込みナイフの突き立てた意味は二つあった。

??この部位はいろんな意味で『心臓』だ。

??「確率なんてどうでもいい。死ぬか死なないかなんて所詮運だ。

」

??迷う事のない即答。

??もし、あと少しでも『コイツ』が本気で今の言葉を実行する気  
ならこの博打を実行するだろう。

??運に負ければあるのは死だ。

??本気となれば『コイツ』も引くしかない。

??「分かった分かった。からかって悪かった。謝るよ。」

??イタズラの後の様に軽い口調だが、珍しく多少誠意がこもって  
いた。

??しかし、茜雫は殺気も仕舞わないし、仕込みナイフも動かさな  
い。

??ジツと睨んでる。

??その光景に、はあっ、と溜息をつくど、

??「……………さっさとオレは深層まで潜るか。まっ、  
オレがいなくてもその身体傷つけんじゃねえぞ。」

??やれやれと言った感じで咳く。

??「オレがちゃんとリサイクルしてやるからな。」

??最後は元に戻ったようにニイツと歪んだ薄ら笑いを浮かべて溶けるように消えた。  
??



?? 転覆寸前のおんボロ木造船だ。

?? ジャック・スパロウでも、もう回避は不可能と言ってもいい。

?? あきらかに遅れた。

?? 確実に筭は怒り心頭だろう。

?? 取り敢えず、昼食を調達する為購買を目指して風のように走る。

?? メロスではないが間に合わなければ命が失われてしまう。

?? 全裸で走る気はないが命のあらん限り走らなければ。

?? 茜雫は走った。

?? 明日を掴む為に。

?? 取り敢えず購買へ。

?? そして、遭難した。

?? 死ぬなこれ . . . . .



???

??さらに数分後、茜雫は屋上への階段を駆け足で登っていく。

??手にはコーヒー牛乳の紙パックと購買のサランラップで包装された焼きそばパンが握り締められている。

??握り締められた焼きそばパンはサランラップの中で内臓が飛び出したかのように少々型崩れし、少しエグい事になっているが構っている暇はないし料理は見た目ではない。

??味だ。

??まあ、たまにどうしても無理なのがあるが……………

??主に千冬の料理もどきとか……………

??2段飛ばしとは言わず4段5段飛ばしで飛ぶように階段を駆け上がる。

??『アイツ』との交渉と道に迷ってしまい購買を探し出すのに手間取ってしまった。

??まさかこの歳、しかも転入して一ヶ月半経ったというのに迷子になってしまいましたなんて恥ずかしくて誰かに聞く事なんて茜雫の中では論外だ。

??意地を張って取り敢えず適当に走るといふチャレンジャー気分で文字通り冒険。

?? ?途中でモンスター数体の数隊に出会ったが、経験値を諦め全力のエスケープで退散。

??結果、何故か元の位置に戻ってしまった。

??これはサスペンスだ?、などと頭がデンジャラスな方向に走り出した為、流星に自粛。

??ふと横を見ると、そこで黄金に輝いて見えたキーマンである案内板という案内人に出会い無事到着。

??クエスト完了といきたいが、無謀にもそのままラスボスへの階段を駆け上がる。

??これが天国への階段なら駆け下りたいが後で地獄の使いが大鎌という名の日本刀で首を刈りに行くから上るしかない。

??そして、バンと屋上のドアを開け放つ。

?? 「ふっっ?」

?? いきなり飛んで来た未確認飛行物体が額に直撃、いや、刺さった。

?? 「遅い?」

?? 意外というべきか、案の定というべきかこちらに腕を振り下ろす形で座っている筈の怒りの怒声が屋上に響く。

?? 周りには一夏、シャルル、やっぱりというべきか鈴とセシリアが座っていた。

?? 額がピノキオになっている茜雫に皆頬を引きつらせている。

?? 額にピノキオに鼻代わりになっているには綺麗な紅色の箸のようだ。

?? てか、こんなもの投げたのか?

?? 実はサムライではなく忍者だったのか。

?? 日常でお世話になっているものがこんなところで牙を剥くとは驚きだ。

?? 茜雫はフラつきながらも箸と一夏の隣に腰を下ろした。

?? 「痛いよお、ほきちちゃん。」

?? 「何をしていたのだお前は？あと少しで昼休みが終わるところであつただろうが？」

?? 「てか、まずあんたは額にぶっ刺さっている箸を抜きなさい。気味が悪いわよ。」

?? 鈴が少し距離をおくように後ずさる。

?? おお、スゲー傷つく。

?? 傷心旅行に出ようかな。

?? 絶対に許可は下りないが。

?? 茜雫はそのままスポツと箸を抜いて何事もなかったかの様に一夏のミネラルウォーターで箸を洗ってタオルでふく。

?? 「おい？なんで俺の飲み物で洗ってるんだよ？」

?? 「ミネラルウォーターだから、キレイになるでしょ？」

?? 「俺が言いたいのはそのうちじゃねえ？」

?? 当たり前のように会話が続けるのに、やっぱり他の見慣れない皆様は引き気味だ。

??「ていうか、なんで出血しないの？そして、なんで当たり前のように会話できるの？」

??「ギャグコマだから。」

??「全然意味わからないよ？」

??最も目の浅いシャルルの必死の心の叫びも沙月茜雫の物理法則という強引な理由で返されてしまう。

??「はい、ほぐきちゃん。」

??「うむ。」

??つい、と気軽に返された凶器を箒も当たり前のように受け取る。

??「セン、お前の焼きそばパン。なんか悲惨な事になってるぞ。」

??細い干物みたいに変わり果てている。

??これはミイラ化している。

??「ん？ああ、こいつはただの焼きそばパンじゃない。俺の戦友なんだよ。」

??「いや、悪い。俺にも理解が出来ない。」

??しかし、戦友は戦友だ。

???ここに来るまであらゆる死闘を共に共有した友だ。

???そして、その友をこれからいただくことにする。

???「料理とは見た目より味と気持ちだ。これがあれば後はなにもしらない。」

???「おお〜。」

???茜雫のクールなセリフに一夏とシャルルはなんとなく拍手してしまった。

???茜雫は密度の低い拍手の中でパクツと戦友を一口。

???咀嚼。

???「ぐほっ?」ほっ?ゴツホ?

???「ど、どうかしましたの?」

???いきなり劇薬を飲んだかのように喉を抑えた茜雫に反対側に向かい合うように座っていたセシリアが驚く。

?? 「ぐ、ごほつ . . . . . ごほつ . . . . . ハア . . . . . せ、戦友に裏切られた . . . . .」

?? 握り締めて圧縮された焼きそばパンが口の中で謎の膨張。

?? 危うく窒息死するところだった。

?? ミイラ怖え。

?? 死者の呪いってやつか。

?? オカルトもバカに出来ん。

?? 前言撤回だ。

?? 「だ、だめだ . . . . . やつぱりある程度見た目も大事だ . . . . .」

?? 一夏とシャルルが苦笑いをしている。

?? 箒が何か言おうと口を開く前にセシリアが申し出る。

?? 「でしたら、一夏さんに差し上げようと作ったわたくしのサンドイツチを分けて差し上げましょうか？」

?? 「え？オルコットさん。いいの？一夏は？」

?? 一夏の為に作ったのもつたいない。

??一夏が食べてあげるのが妥当だろう。

??「い、いや。俺は自分の分とセシリアのサンドイッチ、鈴の酢豚も食べたからこれ以上は無理だ。」

??なんでか焦ったように両手を振って断る一夏に全部食べないとダメじゃん、と思いつつも戴くことにする。

??なんか箸が睨んでる様に見えるがなぜだろう。

??しかし、くれるというならもらおうとしよう。

??セシリアのサンドイッチは見た目がキレイで美味しそうだ。

??さっきのミイラパンと同じ感覚でパクツと食べる。

??が、

??「ふがつ?」「おっ?」

??口から制御しきれない奇怪な声、いや怪音が軋みでた。



?? (なんだコレは?)

もう料理じゃなくて新手の生物兵器だよ?

精巧に出来すぎて誰も気づかないよ?

こんなもん実践配備したら敵も味方も全滅して戦闘事態がなくなるぞ?

てか、何混ぜたらこうなる?)

??

??地雷よりも質が悪いかもしれない。

??貴族つて怖え。

??不思議な化学反応式をお持ちのようだ。

??庶民には理解に苦しむ。

??しかし、折角くれたのに吐くわけにはいけない。

??必死に全部飲み込んでコーヒー牛乳でキレイに洗浄する。

??一夏とシャルルが気の毒そうに見ている。

??知っていやがったな、こいつら。

??「もう一ついかが?」

??細い繊細な手で優しく差し出されたサンドイツチ。

??しかし、茜雫にはドクロが浮かんで見える。

?? コレはちょっと無理。

?? いや、絶対無理。

?? 消化器官が使用不可能になる。

?? あんなの千冬以来食べたことない。

?? 「こ、今度は別なのが食べたいなあ。」

?? 声が震える。

?? 喉までやられた。

?? 「あら、そうですね。残念ですわ。」

?? あっさり死神が引き下がってくれた。

?? キリスト教を信じるのもいいかもしれない。

?? 「で、でで、では。私のを食べる。」

?? 箒が顔を真っ赤にして可愛らしい弁当箱を取り出した。

?? 「あれ？作ってくれてたんなら初めから出してくれてもよかったですじゃない？ほくきちちゃん？」

?? 「タ、タイミングというのは大事だろうが。」

?? なんのだよ。

??弁当箱渡すタイミングなんて飯時しかないから。

??視線をずらすとシャルルが何故か微笑ましそつにこちらを見て  
いる。

??茜雫が何で笑ってるんだ?という視線に気づいたのかパツと視  
線をそらす。

??わけわかんね。

??茜雫は先ほど凶器だった箸を使って鳥がついばむように一口サ  
イズの唐揚げを食べる。

??箸がジツとこちらが咀嚼が終わって口を開くのを待つ。

??「おお?スゲー上手いよほきちゃん?.....  
ん~~~~これは生姜、醤油、ん~~~~後は何にかな?」

??どつかで食べたことはあるのだが、思い出すことが出来ない。

??「おろしニンニクだ。隠し味には大根おろしが適量だな。」

??「ふむ、おろしニンニクに大根おろしか。今度試してみるか。」

??茜雫は新しい知識を蓄え、何に入れようか献立を立てていると、

??「茜雫って料理もできるの?」

??シャルルが質問して来る。

?? 「まあ、人並みには少々つてとこかな。あんま自信ないけど。」  
?? 国外でも基本的に自分で自炊せねばならんかったし、途中から何故か余分な方々までの料理を作らなければならんかったし。

?? 「嘘つけ。センは謙遜し過ぎだ。そこらの人間より普通に上手いだろ。」

?? 一夏がそう言ってくれるがそうなのだろうか？

?? 自分の周りにはど下手くそと超上手の二極な人間が多かったから、まいちものさしがおかしいのかもしれない。

?? ちなみに湊は幼馴染である千冬と対象的にああ見えて料理はかなり上手い。

?? 和洋中なんでも作れるし味も絶品だ。

?? しかし、茜雫はあまり湊をキッチンに立たせなかった。

?? クエスチョン・何故？

? アンサー・ キッチンが凄い事になるから。

?? 湊が料理するとキッチンがとにかく汚い。

?? 普段のものぐさが発動するのか片付けをしないまま、ずっと料理をし続ける。

???だから、料理をさせる事は極力避ける事にした。

???でなきゃ紛失物が出るだろう。

???「さあて、次は何を食べよっかなあ。」

???茜雫は嬉々して次箸を伸ばす料理を迷っている。

???「早く食べねば昼休みも終わってしまうぞ。」

???「だくいじょうぶ大丈夫だよほくきちゃん。予鈴がなるまであと5分あるんだから楽勝だって。」

???その直後入り口のスピーカーから無機質な電子音のあと真耶の  
声が聞こえ出す、

???

??? 一年一組沙月茜雫君、一年一組沙月茜雫君。織斑先生がお  
呼びです。繰り返しますー

?? 茜雫のてから迷い箸をしていた箸がポロリと落ちてフリーズした。

?? 完全に忘れてた。

?? ゆっくりと食べたかったのに地獄の閻魔からコールがかかる  
とは.....

??  
??

## 二十一話 昼食（後書き）

テスト期間なので土日を取ったら更新は出来ないうちまたはかなり遅くなりますが、ご了承を

二十二話 悪戯（前書き）

閑話的な感じですが

出来はもう最悪

俗に言うスランプです



二十二話 悪戯

??カチコチカチコチカチコチ

??今では家庭ではあまり見かけなくなった銀色の円周をした真っ白の円に数字と3つの針のみが付いた何の飾り気のないアナログ時計の狂いのない機会的な音が鼓膜を断続的に震わす。

??今はその音は不安を煽るものでしかない。

??授業が始まり、皆が教室で鬱屈した授業を受けているであろう昼休み終了及び午後の授業開始のチャイムが学園中に鳴り響いた十分後、

?? 人気のない職員室では一組の男女が向かい合っていた。

?? 聞くだけなら男女が逢引しているように聞こえるかもしれないが、これはもう雰囲気からしてあきらかに逢引ではない。

?? 片方は怒りを露わにしたように腕を組んで椅子に座り、

?? もう片方は恐縮そつに肩をすくめて正座をしながら相手が喋り始めるのを待っている。

?? その額には冷や汗の玉がいくつか浮び、青年の心情をよく表していた。

?? うわあ、かなりご立腹だなあ。

?? 肩を竦めた青年――茜雫は今、この場の絶対権力者の前で震えていた。

?? 生殺与奪権を握られていると言ってもいいかもしれない。

?? 膝の上で硬く握られた両手も若干汗で濡れていた。

?? 「さて、何で呼ばれたのか分かっているだろうか?」

?? 氷のように凜と美しく冷え冷えとするような絶対遵守、絶対零度の問いに茜雫は冷たいもので背筋を撫でられたかのようにぶるつと体を震わせた。

?? 「さあ、何ででしょう。」

?? 何とかその怒りを回避しようとおどけて見せる。

??が、

??ズゴシヤッ

?? 本来なら頭から発する事などあり得ない怪音が二人しかいない職員室に鳴り響いた。

?? 「その頭、かち割るぞ。」

?? 千冬の鋼鉄の拳から煙が拳銃の発射煙のように細く長く出て見えるのは気のせいだろうか。

?? 文字通り鉄拳を喰らった茜雫は割れたと思われる頭を抑えながらビクツビクツと微かに痙攣しながら倒れている為全く聞いていない。

?? たとえ聞こえていたとしてもおそらく頭でちゃんと認識できていなかっただろう。

??もし『アイツ』この光景を見ていたらさぞかし笑っただろう。

??少しの間とはいえ気を失った茜雫はさつさと『アイツ』を深層に叩きこんどいて良かったとまだ朦朧とする頭で喜んだ。

??考えるだけで激痛が凄まじい。

??てか、何で皆さんそんなに頭ばかり狙って攻撃するのかがとても不思議だ。

??おかげで、転入してから一ヶ月半経ったがほとんど頭に包帯を巻きっぱなしだ。

??今日などのほほんさんに「せつちくって将来の夢、ミイラおとこおなのおく？」などと質問された。

??この言葉事態はかなり打撃を受けたが、思ったよりショックではなかった。

??のほほんさんの癒しオーラでプラマイゼロになったのか。

?? あ、後で包帯の補充をせねば残りが少なくなってきたんだつた。

??なんか眠たい。

??起きるのも面倒臭い。

??しかし、これ以上時間をかければ第二射がきてしまう。

??頭に壊れ物を扱うように優しく手を置き、少しぎこちない動きで身を起こし、正座で千冬に向き直る。

??壊れてないよね、俺の頭。

??すごく心配になってきた。

??断言出来ないのが怖い。

??しかし、特にぶよぶよとした絶対に頭ではならない感触はしなかったので一安心。

??「冗談ですよ冗談。俺の頭は今デリケートなんですからあんまり殴らないでくださいよ。」

??「出来ない相談だな。」

??即答断言されてしまった。

??「これからはヘルメット常備で過ごそうかな……………いや、変人扱いされそうだからやめておこう。」

??「……………授業が始まっているのにこんな事してていんですか?」

??一応教師と生徒として結構大事な質問。

??「ISについての基本講義だから別に構わん。そんなもの山田先生に押し付けておけば大丈夫だろう。」

??」……………」

??この人本当に教師？

??いや、教師だけど今の言動は問題があると思うのですが、

??しかし、思ったがそんな事言えない。

??これ以上余計な怪我は増やしたくはない。

??茜雫は迷わず安全策をとった。

??「まあ、気になる事もありますが本題に戻りましょう。……

. . . で、話つてなんです？」

??そろそろ話を元に戻す。

??このままでは次の授業にまで食い込んでしまう。

??「実はだな。困った事が起きてしまったな。お前に相談しよう  
と思っただんだ。」

??「はあ。」

??相談とは何だろうか。

??最も可能性として高いのが湊がまた何かやらかした。

??しかし、そのぐらいなら千冬自信がどうにかするだろう。

??しかも授業をサボらせるほど大事な案件。

??まったく予想がつかないので、視線だけで千冬を話を進めるように促した。

??すると、千冬は悩むように視線を右に左にと落ち着きなく彷徨わせ、決心したかのように口を静かに開く。

??「実は……………」

??「実は？」

??ゴクリと茜雫は緊張で口の中にたまった唾液を飲み込む。

??緊張感に満ちた職員室の外では恋人なのだろうか何とものんきそつに二羽の小鳥がさえずっている。





??千冬が自分の携帯端末のメール画面を茜雫へ向けた。

??そこにはちよつと公表出来ない誠実な告白の文面。

??(とうとうシスコンがこんなとこまで進化しちゃったの一夏？  
いくら千冬さんが魅力的でお姉ちゃん大好きだからって法律的にヤ  
バイよ？『一夏ハーレム計画』はどうするのさ？てか、メールで告  
白って初々しいすぎるよ？)

??

??頭の中では様々な事が激しく渦巻いていた。

??無意識のうちに茜雫の視線がウロウロと上下左右に所在なさげ  
に彷徨うのを見て千冬は満足げだ。

??これは前に食堂で一夏にも気づかれていた事だが、茜雫は考え  
が纏まらず本気で焦り出すと不自然にどこかが泳ぎだす癖があった。

??それは目だったり指先だったりペンだったりと多種多様。

??少ないチャンスでそれを見つけるのは結構面白いものだ。

??指摘するとおそろく改善されてし指摘をしないのは一夏、篤、  
束、湊達全員の暗黙の了解となっていた。

??因みに、先ほどの告白の文面は湊が「これは絶対読んだ方がい  
いっ？」と言って押し付けてきた恋愛小説の告白の手紙の引用だ。

??千冬は自分が無意識のうちにニヤついているのに気がつく。

??慌てて表情を戻すが数秒とせずにもたニヤついてしまう。

??止めることが出来ない。

??たまにはからかってやろうといろいろ考えたが何故かこの話題の方がいいと思ってしまった。

??選んだ理由はわからない。

??しかし、この話題でからかったらどんな反応を見てみたいと思っってしまったからかもしれない。

??さつきからずっと悶々頭を悩まして考え事をしている茜雫を見ていると気分がいい。

??日頃、滅多に見せない姿を独り占めで堪能しているからだろうか。

??少し違うような気がするがよくわからない。

??何なんだろうか。

??モヤモヤして何なのかはつきり分からない。

??最近整理のつかない感情が多い。

??茜雫が来て考えなければならぬ事が増えたからだろうか。

??なら、こっちは頭を悩まされているのだからイタズラぐらいたまには許されるだろう。

??

??」「……………ふゆさん、千冬さん。起きてますか？」

??」「……………ん？ああ。うわあ？な、なんだ？」

??「表情を隠すため少し俯き、深く考え事をしていたため呼びかけに遅れ、曖昧に返事をしながら顔を上げるとすぐ目の前に茜雫の顔があり驚きでのぞける。

??「なんかその反応少し傷つくんですけど……………びつくりしすぎです。てか、千冬さんが俯きながらニヤついていたからどうかしたのかきこうとしたんですよ。」

??「まさか、ばれていたとは。」

??「よく考えてみればいくら俯いていても正座している茜雫からは椅子に座っている千冬表情など丸わかりか。」

??「うつかりしていた自分とニヤついていたのを見られたのを恥じる。」

??「そんな事にも気付かなかった自分はやっぱり今日はどうかしている。」

??」「……………で、どっつするんですか？千冬さん？」

??」「ん？どっつする？」

??」「一夏の告白ですよ。動揺してるのは分かりますけどどっつかりしてください。」

??「さて、どっつしようか。」

??「千冬は迷った。」

??「このままネタばらししてもいいのだが、それじゃなんか面白味に欠ける。」

??「しかし、このままでは茜雫の中で一夏の人物像がヤバイ方向へ変わってしまうかもしれない。」

??「でもやっぱり茜雫がこのイタズラで困惑して考える姿をずっと見ていたい誘惑に駆られる。」

??「自分の欲求か弟のプライドか。」

??「二択で必ずどちらかに決めなければ。」

??「両方は取るの無理。」

??湊ならどつちも取れるだろうが、経験の少ない千冬ではボロが出る。

??どうしようか。

??千冬の脳内では戦争が起きていた。

??やはり少しブレコンに片足を突っ込んでいる千冬の脳内戦争では弟のプライドが数で有利になっているが、少数精鋭・・・というか一騎当千の欲求が持ち堪えている。

??一進一退。

??このまま拮抗すると思われたが、

??「う、受けようと思っている。」

??結局、欲求が辛勝した。

??この際一夏のプライドは犠牲になってもらおう。

??「えええええええええええええええええええええええ？」

?? 恥らう乙女のように言われた茜雫はさらに驚いた。

?? 千冬の声や表情が少しきこちないのに普段の茜雫なら即座にか  
らかわれている事にも気づいたかもしれないがそれどころではない。

?? それを見た千冬はもうニヤニヤが止まらなくなった。

?? もう我慢が出来ない。

?? (千冬さんもブラコン気味とはおもっていたがまさかここまで  
進んでいるとは．．．．．しかし、兄弟愛が進化するとこ  
こまで来ちゃうもんなの？ここは常識的に止めるのが妥当なのか？  
ここまで来た二人を止めるのはなんか忍びない。でも二人を止めな  
ければ殆どの者から爪弾き者と扱われそうだな。何よりここで二人  
を止めなければ『一夏ハーレム計画』そのものが瓦解してしまう。  
どうするべきか。)

??

?? 茜雫も少し迷った。

?? 自分の祈願か恩人の兄弟愛か。

?? どっちも叶えてやりたいが両方は無理。

?? しかし、茜雫は千冬と違い短時間で結論が出た。

?? 「流石に考え直したらどうですか？いろいろヤバイですし。」

?? やつぱりここは止めるべきだ。

?? 二人を社会不適合者にするのは何としても止めなければ。

?? そんなの人とのコミュニケーション能力が致命的な東一人で手がいつぱいだ。

?? それに何故か一夏と千冬がくつつくのは面白くない。

??

??

?? 「ぶ………はははっくっ、ふっ、ふふふ………

ははははは？」

?? 真剣に意見を出したはずなのに、なぜか急に千冬が堪えるように笑いだした。

?? 「な、なんですか？千冬さん？どうかしたんですか？」

?? ちゃんとまともな意見だったはず、どこもおかしな点などなかったはずだ。

?? なのに笑われるとはどういう事だろうか。

?? そんな茜雫に構わずまだ笑い続ける千冬に憤りを覚える。

?? 「い、いや。すまん。我慢出来なくなった。」

?? 笑いと腹部を必死に抑えながら千冬が絞り出すように答える。

?? 「ちょ、ちょっと待て。ぶっ……………ぶぶぶ。」

?? 千冬にしては珍しいぐらい笑っており、なんだか遊ばれているようにも出て来た。

??

?? 「で、もう気が済んだでしょうかね？」

?? ちょっと苛立ち気味に茜雫が質問した。

?? 結局、千冬が戻るために数分の時間を用した。

??

?? 「す、すまないな。」

?? 「いえいえ、珍しい謎の爆笑の理由さえ話して頂ければ結構ですのぞ。」

?? 少し怒気の含んだ茜雫の声音に千冬も少したじろぐ。

?? 茜雫のこめかみが時折ピクッピクッと動いているのは気のせい



ではないだろうか。

??「しかし、気がつかなかったのか？」

??「気がつかなかった？」

??茜雫が千冬に怪訝そうに訊き返す。

??気がつかなかったとはどういう意味だ。

??なんの心当たりもない。

??千冬に視線をぶつけても帰って来たのは謎の含み笑い。

??美女とだけあって非常に様になっていた。

??「……………全然分かりません。」

??千冬はまた満足げな笑みを浮かべるとポケットから自分の携帯端末をメール画面にして茜雫へ放り投げる。

??至近距離で放り投げられたそれを茜雫が左手でキャッチ。

??「見てみる。」

??まだ千冬の意図が読めない茜雫は訝しげにメール受信BOXを開く。

??相変わらず仕事や湊とのメールが多く男っ気のない受信履歴。

??あるとすれば一夏と茜雫のメールぐらいしかない。

??「ん?あれ?.....告白のメールがない。なんで?」  
??

??メール受信BOXの中にはあの何とも初々しい告白のメールが  
なかった。

??消された、それが一番最初に思いついたがそんな様子はないし、  
千冬の謎の笑いと繋がる要素がない。

??だとすれば、

??まさかと思いメールメニューに戻りメールの下書きを開く作業  
に移行した。

??千冬もそれに気づき、笑みを深くする。

??開いた下書きには一つだけ項目が。

??それを少し躊躇い開くとそこにはなんとというかやっぱりとい  
うか先ほどの初々しい告白のメール。

??もう読むのも恥ずかしい。

??

??「え、え」と、これは?」

??引きつりながら尋ねる。

??「遊ばれていたことにやっと気がついたか?」

??」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

??口をパクパクさせながら驚いている茜雫に千冬がまた笑った。

??「とうとう姉さんの病気が感染しましたか。ご愁傷様です。」

??茜雫の反撃に今度は千冬が黙るばんになった。

??

??千冬に携帯端末を返しながら、

??「千冬さんがこんなイタズラをする日がくるなんて思いもしませんでしたよ。もしあのメールを見てそのまま俺が出て行ったら一夏はシスコンキングの称号を得てましたよ?」

??「まあ、たまには息抜きをしたくもなるさ。」

??息抜きにあのイタズラは迷惑だ。

??危うく一夏の人物像がシスコンからもっとひどいもの変わる  
ところだった。

??「冗談はここまでにして本題に入るぞ。」

??「くだらない事する暇があるならさっさと本題に入ってください  
いよ。」

??千冬としてはからかうのが今日呼び出した大きな割合を示して  
いたのだが、ここは黙っておく。

?? 「部屋割りだがどうする?」

?? そんな理由で今授業をサボらされているのだろうか。

?? 「シャルル・デュノアとの相部屋は誰になるか、という事ですか?」

?? 「話が早くて助かるな。デュノアはまだ日本の習慣などがまだ分からないことが多いしな。男子ということもあるしどっちかがデュノアとの相部屋になってもらう。で、どうする?」

?? 言いたいことはよくわかるが、

?? 「なんで俺に聞くんですか。ここは一夏やシャルルも一緒に話し合ったほうがいいんじゃないですか?」

?? 「一夏とお前では結局はお前の選択が正しいことが多いだろう。ならばじめからお前に聞いたほうが早い。」

?? 本当に自分一人で決めていいのか迷ったが、

?? 「じゃあ、一夏とシャルルを相部屋に。」

?? これが最善だろうと思う。

?? あのお節介焼きの一夏ならシャルルをいろいろとフォローすることができるところ。

?? それに茜雫の予測が正しければ面白いことが起きるはずだ。

??「どうせ何か企んでいるのだろう?」

??「.....」

??「どうやらバレバレのようだ。」

??「些細な娯楽ですよ。特に違反が起きることではないですし、それに成功するか失敗するかは一夏とシャルル次第ですから。」

??「千冬はまだ納得いかない表情だったが、特に何も言わなかった。」

??「ところで.....」

??「はい?」

??「用が終わったので教室に帰ろうとすると千冬に呼び止められた。」

??「なんかデジャヴだ。」

??「ボーデビィツヒが言っていた1年半前とはどういう事だ。」

??「ああ、授業をサボってまで茜雫だけここに呼び出したのはそれが理由か。」

??「俺もわかりません。」

??

??「心当たりはないのか?」

??「少しも。俺がドイツに行ったのは2年前です。」

??千冬の見透かした問いにしらけてみせる。

??これは嘘だ。

??2年前に俺がドイツにいたから一年半前になんらかのアクションがあったのだろう。

??何があったかまでは知らないがあまり無闇に首を突っ込むところらが感づかれる。

??茜雫はこの件に関してはノータッチを決め込むことにしていた。  
??

??「……………まあ、いいだろう。早く授業に戻れ。」

??「織斑先生は？」

??「このまま山田先生に押し付けて自分の仕事を片付ける。」

??いいのかよ、教師。

??そんなことを思ったがこちらにも何か飛び火がきては困ると聞き流すことにした。

?? 教室に戻る際、茜雫は何気なく窓の外を見た。

?? 校舎の隙間を縫つようにして一瞬正門が見え、そこに誰かが立っていたのが分かった。

?? あれは . . . . .

?? 少女だったような気がする。

?? 同じぐらいの背格好をした。

?? 見覚えがある。

?? 思わず流し見をしてちゃんと確認出来なかった茜雫は急いで数歩戻る。

?? 今度は目を凝らしてもう一度確認するが、そこには誰もいなかった。

?? 茜雫は何事もなかったかのようにまた教室へ歩を進めた。

?? 予想が正しければヤバイ。

?? 早すぎる。

?? まだ目的が全く達成できていない。

?? 茜雫は教室に歩いて行く。

?? 時間がもう無い。

?? 急がなければ。

?? 街中をシンプルなワンピースとブラウスをうまくコーディネートした少女が一人歩いている。

?? 容姿、スタイル、花咲くような笑顔と三拍子揃ったその少女に道ゆく若者が何人も振り返る。

?? 振り返ることの出来なかった男はみんな彼女が隣にいたため出来なかった部類か女に興味のない部類だろう。

?? 少女は最近では灰色から黒いアスファルトへ色を変えた舗装路を少し弾むように歩く。

?? 気分も音楽のように弾む。

?? 満悦の笑みを止めることが出来ない。



??いつもの自分なら自制心が先に出てなかなかここまで感情表現は出来ないであろうが今回は特別。

??やっと会えた。

??自分でこつそり調べ始めることを決断して6ヶ月。

??ある女子高生のブログをちょっととした好奇心で偶然覗き、奇跡の幸運といふべきかあの場所にいると分かって2ヶ月半。

??適当に理由をつけて日本にくることに成功して2週間。

??誰にも知られずにあの場所に探しに来て34回目。

??やっとのやつとで一方的だったとはいえまた会えた。

??その姿を見えたのはほんの一瞬だったが今はそれで十分。

??まだ、心臓がバクバクいって胸が苦しい。

??神経質そうなあの人達に本当の理由と『あの人』に自分がここに来たとばれたらどうなるかあんまり考えたくないがお釣りどころか宝くじで当たったぐらいの価値がある。

??あの何考えているか分からない人達を言いくるめるのは骨が折

れた。

???結局はあの場所の視察という形で強引に納得させた。

???我ながら結構頭を使ったと思うが『あの人』ならもつと上手く出来たであろう。

???見えた姿は『本人』の記憶とは成長していて目の色と優しさが印象に残った。

???『本人』がずっと隣にいたがっていたのも納得できるような気がした。

???直接会いたいが、それは少し怖いので我慢。

???多分そのうち嫌でも直接会わなければいけないくなる。

???その途端、気持ちに雲がかかり表情が陰る。

???『あの人』が自分を見てどんな反応をするかは分からないがおそらくいいほうにはいかないだろう。

???近くの店先の壁にあつた大きな姿見。

???そこを覗いて見れば目鼻立ちの整った綺麗な顔に色素の少ない銀に金を少し垂らしたような銀髪。

???可愛らしさと凜々しさが同居したような雰囲気を持っている。

???じーっと複雑な表情で鏡の中の自分を見つめると頭が鳴りそう

なぐらいぶんぶんと頭を振って嫌な考えを捨てた。

??あの人達はまだ『あの人』があの場所にいると気がついていないからまだ何回か来れるかもしれない。

??それを思うとまた嬉しくなる。

??時間はまだあると思う。

??言い切れないけど.....

??急ぐ必要なんてない。

???

??また会いたいな。



二十二話 悪戯（後書き）

主人公と湊の公式設定作ろうかな。  
どろじょう

二十三話 引越(前書き)

全然進まん

高専はテストなので次話が8月7日まで更新できません  
すみません

## 二十三話 引越

?? 「お引越しです。」

?? 「はい?」

?? 一夏は何が言いたいのかとばかりに首を傾げる。

?? 先ほど、今から明日の授業の予習や今日の授業の復習をするためにカバンから教材を出した途端にドアがバンツとなかなかやかましい音を立てて勢いよく開かれた。

?? ドアを片手で突っぱねた形で近所迷惑な開閉音と共に今日の授業が終わったと思ったたら気がつくど姿が見えなかつた同室のルームメイトである幼馴染ー茜雫が軽い足音と共に部屋に入つて来ながらこんなことを言いながら入つてくる。

?? あまりに急だつたことと一夏との個人自主特訓を何の連絡なしにポイコットしたことを問い詰めようとした瞬間いきなりなお引越し宣言に疑問符が頭の真上に浮かぶ。





?? お前人間なのかみたいに茜雫は訊いてくる。

?? そんな訊きかたしなくても．．．．

?? 「何も聞かせれてねえよ。てか、その憐れむ目どうにかしろよ。本当に俺がおかしいみたいじゃねえか。」

?? 「自覚がないのか．．．．．」

?? 「．．．．．早く話せつて。」

?? 落ち込み気味に言われた一夏は俺って本当におかしいのかな、と若干落ち込む。

?? しっかりと否定出来ない自分が悲しい。

?? 「まあ、一夏だからしょうがないな。」

?? 「うるさい?」

?? 今度は開き直ったように言われ流石に怒る。

?? 「引越しとはーー行き先の場所を確保したうえで、元いた場所から家具や荷物を移動させ、完全に機能を新たな場所へ移すまでの一連の作業が引越しである。」

?? 引越しを特に重要かつ重大な作業としない文化もある。遊牧民に於いては、引越しは通常の作業である。そのような文化では、家屋そのものも、家具も移動が簡単なようになってる。

?? 引越しをするということは何らかの事情があることが多い。その理由を大きく二つに分けると、自らの意思で引越したいという自発的理由と、自らの意思でないものの引越さなければならぬという非自発的理由に分かれる。――らしいね。一夏分かった？」

?? 手元の文明の利器である携帯端末の検索結果を読み上げた茜雲は偉そうにもそんなことをいう。

?? 「お前もしらねえじゃんかよ？てか、俺が聞きたいのは引越しの概要じゃねえ？」

?? まあ、そんな細かいこと記憶している人なんていないと思うが。

?? 「シャルルの部屋に一夏が移動ね。」

?? 「……………」

?? 一番聞きたかったことをこれだけ時間をかけてしかもこちらから訊くことなく答えた茜雲にがっくりとうなだれてしまう。

?? とても疲れた。

?? 「……………シャルルの部屋に俺が引越すのか？な  
んで？」

?? 「シャルルは日本に慣れていないこととどうせ同じ男子EIS操縦者ならどちらかを同室にしてとりあえず日本の常識とかいろいろ教えてやれって、一夏の愛しの千冬さんが。」

?? 「……………最後の最後で答えにくい言い回しどうも

ありがとう。」

??「どういたしまして。これからもご贖身を。」

??「一夏の精一杯の皮肉の反撃ミサイルも茜雫の恭しく下げた高級レストランのベテランウェイターのような優雅な礼に撃ち落とされ、逆に長距離弾頭ミサイル群に完全に敗北する。」

??「やっぱり茜雫にはあらゆる面で負けてしまう。」

??「かなり悔しい。」

??「早くこいつと肩を並べたいが一朝一夕では絶対に追いつけない高みにこいつは鎮座しているためまだまだ時間はかかりそうだ。」

??「何で俺なんだよ。ていうか、もう俺決定なのか？」

??「決定です。絶対です。死刑です。」

??「怖い？そして、意味が分からん？」

??

??「最近引越しが多くて疲れる。」

??「少し前も茜雫の引越しを手伝ったばかりなのに。」

??「あの書類の束すごく重かったなあ。」

??「結局のところいくら読もうと頑張ってもあの優に腰ぐらいまでの高さはあるような書類の束を一つも読むことは出来なかった。」

?? 英語かと思ったら確実に見知らぬスペルが多すぎる中にはアラビア語みたいな滅多に生ではお目にかかれぬ暗号のような複雑な文字まであり何がなになのか全く分からず、何語かも分からなかった。

?? そんな文字まで読み書き出来る茜雫はなにを国外でやってたのか、と考えているとすでに茜雫が数個の大小様々なダンボールを出してスタンバイしていた。

?? どこからそんなに持って来たのか気になったが、

?? 「何でそんなに準備が早いんだよ。引越しを聞いて4分も経ってないぞ。」

?? かなり手際良く早速引き出しのものをダンボールに勝手に詰めている。

?? 「善は急げっていうでしょ?」

?? 「このやろつ。」

?? 「そんなに俺との同室は嫌なのかよ。」

?? 「んーそんなのじゃなくて、覚えの悪い生徒を指導するには俺には荷が重い。」

?? 「ゴメンなさい。」

?? なにも言えない全くの正論に泣けてくる。

?? 現に今日の復習予習も茜雫を頼る気だったとだけあってこの言葉は痛い。

?? てか、もっと遠回しに言っただけじゃない。

?? 心が痛い。

?? 茜雫がガサゴソと机に中の入っていた予備の文房具を比較的小さなダンボールに詰めていく。

?? 「それに俺が日本に居た時間より世界を回った時間の方が長いからね。日本の常識とか教えるのに一夏は適役なんだよ。．．．．  
あ、クローゼットの衣服、こっちの少し小さい方に詰めてね。」

?? 確かにそれなら一夏がシャルルの部屋に引っ越す方がいいに決まっている。

?? 何だかんだ言ってもやはり茜雫の言うことや選択は的を射けて正しいことが多い。

?? 一夏が言われたとおりクローゼットの衣服をキッチンとクリーニング店のように綺麗にたたみ40cm四方の茶封筒のような薄い茶色のダンボールに整理整頓しながら収納していく。

?? 最後の一着をいれたのと同時にダンボールもいっぱいになり、ここまで予想するのかよ、と内心お手上げだ。

?? いったいになったダンボールを簡単にテープで止め、邪魔にならないように入り口の脇においた時にふと気づく。

?? 「そういえば、シャルルにもう伝えたのか？」

?? 工作用カッターの刃を出して錆び具合と刃こぼれを見ていた茜雫があつと気づいたように一瞬思考に全てを回す。

?? その思考に全てが回った瞬間、手元からカッターが刃の出たまま、ぼろっと落ちて茜雫の足目掛けて落下した。

?? 茜雫は足元も見ず刃が皮膚に当たる瞬間、キュツと足を捻り強引の刃の方向を変え、そのままサッカーのリフティングのように捻った足を少し蹴り上げると手品のようにまた手元に戻った。

?? 「あ〜どうしょつか。一夏。」

?? 「澄ました顔してあつさり超人的な事するなよ。ヒヤついただける……………」

?? クルクルと器用に指先でカッターを弄びながら何事もなかったかのように尋ねる茜雫に一夏はビクビクした心臓を鎮める。

?? 「刃物の扱いには長けているつもりだから心配はいらない。それよりシャルルのことだよ。」

?? 「まだ言つてなかったのか？」

?? 「Yes。」

?? 「何故英語？」

?? 「Somehow . . . ? I feel such . . . (なんとなく

く・気分です。」

??「すまん。分からん。」

??ネイティブすぎる英語に短いとは言えとてもだがついていけない。

??とことん日本人に英語などの外国語はあまり向かない。

??「引越しの準備を済ましてから伝えに行つて手伝う?それとも、とりあえず伝えに行く?」

??取れる選択肢はそれぐらいだろう。

??後からいったらシャルルも一夏がルームメイトになると急に押しかけるのはシャルルに悪いから先に行つた方がいいだろう。

??「まずはシャルルのところに行つて引越しのことを伝えようぜ。いきなりいつてもシャルルも困るだろうし。」

??「よし、そうと決まれば急に部屋に入つてドッキリと驚かせるか。」

??「やめとけ。」

??「こいつのドッキリはなんか怖い。」

?? シャルルに割り当てられた部屋が分からないことに気づき、寮母室の千冬に訊くことに。

?? 知らなかったのかよ、とツッコミたかったが寮母室の扉を開けようとノックする茜雲にどんな反撃されるか分からなかったので黙る。

?? 寮母室＝千冬の部屋の前で騒ぐのは自殺行為だ。

?? 「ちょ、ちょっと待て。」

?? 中から慌てた声が聞こえる。

?? 千冬は在室していたらしくちょうどよかった。

?? しかし、何故慌てているのだろうか。

?? 扉が開かれるとジャージを着ている千冬が出て来た。

?? 「なんだ、お前たちか……………」

?? 「なんですかその反応は……………」



??まるで当てが外れたかのようだ。

??「どうせ掃除しないから部屋が汚くなっていて生徒に見られる  
と思っただんでしょ。」

??「ぐうっ？」

??茜雫の鋭い指摘が弓矢如く凶星を射抜いたらしい。

??「掃除しないと俺らがなくなった時困りますよ?。」

??「わ、分かっている。」

??若干拗ねたようにいう千冬はなんかいつもと違い可愛らしい。

??「そういえば2年寮母の姉さんの部屋も汚いんですか?。」

??「確認しに行くか?。」

??「全力で辞退します。」

??一夏と茜雫は即答した。

??絶対に嫌だ。

??あんな魍魎な危険地帯を非装備で調査なんかにいったら生きて  
帰ってくるのは難しい。

??「まあ、お前達が考えているよりかはずっとキレイだろう。」

?? 「なぜ？」

?? 湊のものぐさをよく知っている茜雫が怪訝そうに尋ねる。

?? 「あいつもこの6年で少しは掃除を覚えだしたからな。それに――」

?? 茜雫のそこまであの怠け者が成長したのかと感動したが、

?? 「今は私の部屋に寝具一式を持って来て住み着いている。」

?? 鼓膜が千冬の喉の声帯から発せられた空気の振動をキャッチ。

?? 鼓膜が受けた振動が耳小骨を通じうずまき官に伝え、うずまき官が電気信号に変換、聴覚神経がすぐさま脳に伝達。

?? 信号を言葉として認知し知識をフル動員して意味を解読。

?? 最大緊急事態と判断して脳内で瞬時にアドレナリンを大量分泌。

?? アドレナリンによって活発になった心臓によって大量に運ばれた血液中の成分を莫大なエネルギーに転換。

?? 生きとし生きるものが持つ防衛本能と瞬間的に高まったエネルギーが合間って脊髄からの電気信号に従って筋肉がしなやかに大きく躍動。

?? カツと目を見開いて覚醒した一夏と茜雫はすぐさまカーペットの床を勢いよく蹴って一回のバックステップで2・5mほど入り

口から左右に距離をおいた。

?? 息のあつた綺麗なバックステップだ。

?? 「……………おい。」

?? 堪らず千冬が声をかける。

?? いろんな意味で声をかけたくなった。

?? 「なんだその反応は？」

?? 「分かりません?」「」

?? 息がピッタリ。

?? 「てか、姉さんと千冬さんが同室つて大問題でしょ? 部屋が使い物にならなくなりますよ? 寮部屋のためにも早くひっこ……………」  
……………鼻がイタイツ? 「

?? ズゴシユッ

?? 強烈な破壊音と共に茜雫が真後ろに直立不動で吹っ飛ぶ。

?? 顔には広辞苑がめり込んでいる。

?? 「うおう．．．．．すげえ。」

?? 一夏が実姉の制裁に震える。

?? 一瞬で広辞苑を取り出しその細い右腕でダルビツシユも即倒する様な豪速球に茜雫がさらに3m離れている。

?? 「女性に向かって部屋が汚い汚いと言っもんじゃないぞ？茜雫」

?? かすかに怒りで震えながら千冬がつぶやくようにいう。

?? それぞれ一回ずつしか言ってません、そう言いたかったが茜雫は顔に手を当て鼻の搜索をしていて言えなかった。

?? しかし、掃除がダメダメの千冬と湊が同じ部屋になったら汚さ二倍、いや、臨界反応を起こして二乗三乗になっているはずだ。

?? 考えただけで怖い。

?? 「あ？シャルルの部屋って何号室なんですか？織斑先生？」

?? 拾い上げた広辞苑をさらに振り下ろそうとしている千冬に一夏が急いで声をかけ幼馴染の救出を図る。

??あれだけ殴ってまだ怒りが収まらないぐらい悔しかったのだからか。

??一夏は実姉の恐ろしさを再認識した。

??「ん？ああ、そのことを訊きに来たにか。そういえばなにも言っ  
てなかったな。」

??ゴスつと一度チョップのように右手だけで茜雫の頭部に広辞苑  
を落とすところで千冬が向き直る。

??茜雫の身体が電気ショックを受けたみたいにビクツと動く。

??その顔にはやりすぎたかなつと言う色がありありと浮かんでい  
たが遅すぎる。

??幼馴染救出作戦失敗。

??一夏の頭に『教師が生徒を広辞苑で撲殺。有名書籍が狂気の凶  
器に?』の見出しで目に黒線を引かれた茜雫が被害者欄に載った新  
聞がよぎる。

??ダジャレまで出てきた。

??その後、一夏は部屋の番号を聞くと、気絶した茜雫の足を引き  
ずる様に背負ってヨタヨタと歩いて行った。

??千冬はドアを閉める。

??「わっしょ。」

?? 確かに女性の部屋とは言えない。

?? ここで、絶対に茜雫を見返してやる、と決心する。

?? 最初の一步を踏み出す。

?? そして、見出しが『とある今時のカップルの恋愛談』と書かれた読みっぱなしの週刊誌と洗濯して畳まれていない下着のコンボに早速つまずいた。

?? 「たのもおーーー?」

?? 元気になった茜雫が一夏が訊き出したシャルルの部屋に突入する。

??

?? 意外なことにシャルルの割り当てられた部屋は一夏達の斜め前つまりもともと茜雫が一人で使っていた部屋だった。

??「なんだか茜雫と部屋を入れ替わったみたいで変な気分がしたがしかたがない。」

??「考案者及び実行者が茜雫の『突撃？斜め前の同級生？』の懐かしいネーミングで決行された別名『シャルルくんドッキリ大作戦』はハツラツとした声と共にバンつとドアが勢いよく開かれた。」

??「勢いよく開かれた衝撃でドアのちようつがいが少し軋む。」

??「うわあああああああ？ちよ、ちよつと待つてええ？」

??「うおっ？なに？」

??「お前までドッキリさせられてどうすんだよ。」

??「勢いよくドアを開いたのと同時に特殊部隊のように潜入した茜雫がシャルルの驚きの声と必死のストップにびっくりする。」

??「どうした？シャルル？侵入者か？」

??「いや、お前だからな。侵入者は。」

??「茜雫のボケに一夏が冷静にツッコム。」

??「い、一夏と茜雫？」

??「入り口からシャルルの姿が見えないので部屋の陰になっっているといるのだろう。」

??「そだよ。」

??「い、今着替えてるからちょっと待って。」

シャルルの慌てた声が聞こえてくる。

??「お着替え中でしたか。一夏。終わるまで一時撤回。」

??「ん？男同士なんだからここで待つとけばいいじゃんかよ。」

??確かにその言い分はご尤もだが、

??足音からしてシャルルが忙しくこちらから見えないように動き回っているのが茜雫に分かった。

??予測が確信に近づく。

??「男同士でも着替えを見られると落ち着かない人もいるんだよ。さあ、撤回撤回。少ししたらまた来るね。」

??「う、うん。分かった。」

??シャルルのホツとした雰囲気は声を通じて伝わった。

??一夏もその感覚が分からなかったがそう言う人もいるし、一夏自身男の着替えを無理に見ようとも考えないため素直に出て行った。

??1分と26秒後、カチャと控えめな音と共に開かれたドアからシャルルがそつと顔を出す。

??「もういいよ。」



?? 「ん？そうか。」

?? 今度は引つ込んだシャルルに続き一夏が先に部屋に入って行く。

?? 「紅茶いれようか？」

?? 簡易キッチンに体を向けながらシャルルが尋ねる。

?? 「ああ、すぐ帰るから気にしなくていいぞ。」

?? 「俺はちようだい。喉が乾いててさ。砂糖とミルクたっぷりね。」

?? シャルルはそのリクエストを聞いて意外と子供っぽいなあ、と思った。

?? 今日の午前中にあの自分じゃ考えられないような奇天烈な戦い方とIS戦で目視での遠距離狙撃を見せた姿とは似つかない。

?? 自由に姿を変え、自分を掴ませない空に漂う雲が頭に浮かんだ。

?? 「そういえば、二人とも揃ってどうしたの？」

?? 3分後、シャルルは自分と茜雫の紅茶を置いたお盆持って戻ってきた。

?? 女性が羨ましがるとような細く長い指で熱さになれる様にゆっくり受け取った茜雫はいれたての熱目のミルクティーを堪能した。

?? 砂糖とミルクの量と紅茶の入れかたがバツチリで非常に美味しい。

?? シャルルは猫舌ではないのか、とリクエストを聞いた時の予想が外れたのが少し残念。

?? 「ん」とねえ、メルアド交換しに来たの。」

?? 「おい、違うだろ。」

?? 「一夏が即座にツッコム。」

?? 「でもついだから交換しとこうよ。ダメかな？」

?? 乳白色に近い肌色のミルクティーを少しずつ味わいながら茜雫が前半を一夏に、後半をシャルルに言う。

?? 「まあ、確かに。」

?? 「うん、僕は全然構わないよ。」

?? 手早く赤外線通信でメルアドの交換を済ませる。

?? あまり知り合いと会わないで連絡先を交換しなかった茜雫は少し手間取った。

?? シャルルが携帯端末をポケットに直しながら、

?? 「他にも用事があるの?」

??茜雫が少し冷めたミルクティーをぐいっと飲み干すと音もなくカップをソーサーに置く。

??フランスでティーカップを使うことが多かったシャルルは全くの音がしなかったことに少し驚く。

??自分じゃ無理だ。

??「どっちも大事だけど、こっちが本題。んじゃ、一夏君どうぞ。」

??「ここで俺に振るか。まあ、なんていうか、俺がここに引越してきてルームメイトになることが決定した。」

??「別にいいけど、いつからなの？」

??「今日。」

??茜雫が横から答える。

??「ずいぶんと急だね。なんかあるのかな？」

??「さあ、なんでだろうな。」

??シャルルと一夏が揃って首をひねる。

??「シャルルも一夏に日本について早く教えてもらった方がいいでしょ？」

??「あ、うん。そうだね。よろしく一夏。」

??シャルルは『アレ』について内心どうしようか悩むがどうしようもないし、日本にも早く慣れたいので良しとした。

??「おう。よろしく頼むな、シャルル。」

??「一夏も新しいルームメイトにあいさつを返す。」

??「一夏って変な性癖があるから気をつけてね。」

??「おい?」

??「ど、どんなの?」

??全くの嘘だがシャルルが知るはずもない。

??同室として、『あの事』もあるので真剣に聞く。

??「一夏もシャルルの真剣さに止める事を躊躇ってしまった。」

??「例えば朝起きたら同じベットに、とか。」

??「ふええ?」

??「まてええ?なんだそれ?」

??シャルルが顔を真っ赤にして一夏を見る。

??「イタイ。」

??その疑いの視線が凄くイタイ。

??「う、嘘だからな。シャルル。」

??「俺も何度ベットから蹴り落としたか……そのあとゾンビみたいに何度も蘇るんだよね。朝まで一緒に寝てたら全裸にされるんじゃない?」

??「ええええええええええ?」

??シャルルがバツと身体を守るように腕を胸の前で抱く。

??顔が熟した林檎みたいに真っ赤だ。

??「センツツツツツツ?好い加減にしやがれえ?」

??「本当のことじゃあん。」

??一夏の次々に繰り出されるラッシュをひよひよいと身体を捻って避け出す。

??お笑いコントみたいなやりとりにシャルルは自分がここに来た目的を忘れて声押し殺して必死に笑いを堪えた。

???

??その後の引越しが深夜まで食い込み、次の日一夏と茜雫はヤツ  
れて授業を受け、シャルルはお腹が筋肉痛でそれぞれ苦しむ事とな  
る。

二十三話 引越(後書き)

感想評価くれ)

二十四話 不休（前書き）

本当はテストが終わるまで投稿しないつもりでしたが、投稿しちま  
った

明日のテストがヤバイ



二十四話 不休

――――土曜日――――

???

?? 世界三人目の男子IS操縦者であるシャルルが転校してから早くも数日がたった今日。

?? 一夏はベイスの基本戦術の教練書をベットのうえで寝っ転がりながら読んでいた身体を起き上がらせ、顔を親友と呼べる相手に向けた。

?? 「なあ、セン。」

?? 「ん〜何かな？織斑君や。」

?? 茜雫は視線を何語か分からない本から視線を外さないまま返事した。

?? 茜雫は俺の部屋のなかなか座り心地のいい椅子に深く座っている。

?? シャルルのいれてくれたミルクと砂糖の多めのミルクティーを堪能しながら読書中。

?? 今、乳白色に近い肌色のミルクティーのなみなみ注がれたティーカップをまた、口元で少し傾け、喉の渴き潤している。

?? その姿は、優雅で気品に溢れ、茜雫の彫刻の様な顔立ちと合間つて黙って座っていれば貴族でも通るかもしれない。

?? しかし、その中身はとんだ天邪鬼だが。

?? 「学年別トーナメント戦が近づいてきたよな？」

?? 「再来週だっけ？」

?? 同じく隣の机でお行儀良く日本についてお勉強中のシャルルが身体をこちらに向け確認するように会話に加わる。

?? 「再来週っばいね。」

?? 茜雫は相変わらず視線は本に落としたままだ。

?? 「.....興味なさそうだね。茜雫。」

??

?? 「ん〜だって戦うのめんどくさいし、ぶっちゃけやらなくてもいいんじゃない？こんなの。てか、高校生が銃や刃物を公然と振り回すのが認められるなんて世の中腐って来たよね。」

?? 本音をぶちまける茜雫にシャルルは苦笑い。

?? 「でも、急にどうしたの？一夏。」

?? 「俺ってさあISの訓練してたくないか。」

?? 茜雫は生身での個人訓練をしてくれるがよく考えたら一度もISを使った訓練をしていなかった。

?? いつISを使った訓練を始めるのか分からなかったが茜雫の考えがあるのだろうと思い特になにも言わなかったが、学年別トーナメント戦が近づいてきたためそろそろ始めて欲しいものだ。

?? 一応、専用機持ちで一組クラス代表の一夏としては一回戦で敗退など絶対に避けたい。

?? 「あ〜そういえばISを使った訓練、忘れてたな。」

?? 「忘れんなよ？」

?? まさかの考えが無かったどころか忘れてた茜雫に一夏が勢いよくツッコム。

???そこで初めて茜雫が本から視線をあげてシミ一つないキレイな天井を見上げる。

??「といつても、俺。ISの機動についてとか教えらんないし。」

??「なんで？」

??少し前の真耶との一戦を思い出したシャルルがあれだけの戦いぶりを見せながら教えられないという茜雫に疑問を抱く。

??「俺ってISの機動に関してはもう完全に無意識っていうか感でやってるから言葉に表すのが難しい。」

??「む、無意識？」

??ISはコントローラーなど操縦桿がないためスラスターの角度や出力はイメージなどがその役目を大きく果たしている。

??当然、姿勢制御はちょっとした違いで大きく動きが変わるため注意が必要である。

??無意識で操縦など早々できる事ではない。

??「そうだ。」

??一夏とシャルルは天井を見上げたままパンっとひらめいたように指を鳴らした茜雫を見た。

??「どうしたの？」

?? 「なんか思いついたのか？」

?? 椅子の背もたれの上で後頭部を転がすように茜雫がシャルルに顔の正面を向ける。

?? 「シャルルってフランスの代表候補生なんですよ？」

?? 「う、うん。そうだけど。」

?? シャルルはいきなりの茜雫の質問に意図が読めず少しぎこちなく答える。

?? 「手伝って。」

?? 「はい？」

?? 「よし、まず一夏とシャルルが模擬戦してね。じゃあ、シャ

ルルあとよろしく。」

??茜雫は急な思いつきを即座に実行。

??そのままシャルルには先に着替えてもらい第3アリーナで準備、一夏と茜雫はアリーナ使用許可を急遽貰いに行った。

??休日だったが運良く先生が職員室にいたためお願い。

??これまた運良く休日だったためアリーナの使用申請者が少なかつたため割り込みでも使用許可が降りた。

??更衣室で急いで着替え、アリーナに入るとシャルルはすでに自分のISのコンソールを呼び出してなにやらデータを見ていた。

??「あとよろしくってセンは何するんだよ？」

??踵を返して足早に離れる茜雫を呼び止める。

??「また、高みの見物でサボるつもりか。」

??「遠くから客観的に見て一夏の無様な負けっぷりでも見学してくよ。」

??「負けが確定してるのか……………俺。」

??「あまり自信がないだけあって一夏はがつくりきて少し凹む。」

??「まあ、取り敢えず始めよっか。一夏。」

?? 所謂言い残すとシャルルがオレンジ色のラファール・リヴァイヴを素早く展開、PICとスラスターを起動させて青い空に吸い込まれるように上昇した。

?? シャルルは一夏の白式が戦うところを見たいにかヤル気満々のようだ。

?? 「一夏もレッツゴー。」

?? 「分かった分かった。」

?? 「一夏も白式を展開、シャルルのあとを追うように上昇した。」

?? 「ふむ、やっぱりシャルルの専用機はラファール・リヴァイヴのカスタム機か。」

?? 今だ第3世代を開発できていないフランスなのですでに完成されたと言ってもいい第2世代機をカスタムするのが限界だろう。

?? と言っても、ラファール・リヴァイヴは第2世代機の中ではフランスの良いスペックに豊富で汎用性のある武装と傑作品と言ってもいいほどの出来だ。

?? 十分第3世代機と渡り合う事ができる。

?? 茜雫の見る限りは通常機よりもスタイリッシュバズロケットになっている事から機動性と拡張領域を開けてさらに銃火器の量を増やしたつとところだろうか。

?? 茜雫はうっんと指を組んで前に突き出し身体を伸ばす。

「？」「ちくちくとどどになるのかな？」

「？」「……………」

「……………」

「？」「……………やめる。そんな目で俺を直視しないでくれ。頼む。」

「？」結果は散々。

「？」第2世代機に束が弄った第3世代機が惨敗。

「？」惨め過ぎて憐れみすら感じてしまう。

「？」「……………これはないって。シャルルのシールドエネルギー、100も減ってないじゃん。」



??「・・・・・・・・・・・・・・・・面目ごぞいません。」

??「一夏が失敗を犯し上司に謝る平社員のように頭を下げた。」

??「見てて哀しい。」

??「面目どころか存在する価値もないんじゃない?」

??「さすがに酷いぞそれは?」

??「それぐらい酷いつてことだよ。一夏が操ってるのはあの篠ノ之束が弄った最新の第3世代機だよ?それに対してシャルルが操ってるのは初心者から玄人まで幅広く使えるから訓練機までなってる第2世代機だよ?なのに惨敗つて予想外だね。」

??「ぐっ?」

??「なにも言えない。」

??「否、なにも反論してはいけない。」

??「確かにこの結果は酷い。」

??「まあ、機体の相性も悪かったしシャルルの技量にも驚かされたけど・・・・・・・・・・シャルルはどう思う?」

??「コメントを一応控えて実際に戦った相手であるシャルルの意見を仰ぐ。」

??「うーん、僕も機体の相性が悪かったと思うよ。一夏の白式に

は射撃兵装がないみたいだし射撃戦が基本のリヴァイヴとはちょっとキツイかもね。それに僕のリヴァイヴは機動性を高めにチェーンしてあるから、確かに白式は速かったけど圧倒的ってほど差が開いてなかったのもあるかもね。」

??茜雫のシャルルのリヴァイヴがやはりスピード重視にチェーンされている予想が当たっていた。

??「あと、一夏が単純に射撃兵装の特性を理解できてないんじゃないかな？」

??「一応わかってるはずなんだけどな。」

??「うーん、知識として知ってるだけって感じかな。さっき僕と戦ったときもほとんど間合いを詰められなかったよね？」

??「十八番の瞬間加速イゲンニッション・ブーストもあっさりすぎるぐらい読まれて滅多撃ちにされたしな。」

??「ぐっ?」

??何も言えない。

??「一夏のISは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握してないと対戦じゃ勝てないよ。一夏の瞬間加速って直線的だから反応できなくても軌道予測で攻撃できちゃうからね。」

??「鉄砲玉みたいに突っ込んで玉砕するのが一夏の得意技だからね。」

?? 「ちげえよ？」

?? でも、その通りなのかもしれない。

?? 「あ、でも瞬時加速中はあんまり無理に軌道を変えたりしない方がいいよ。空気抵抗とか圧力とかの関係で機体に負荷がかかると、最悪の場合骨折したりするからね。」

?? 「そうなのか？」

?? 今まで直線でしか使った事がなかったが、無理に使おうとしなくてよかった。

?? 「一夏の白式って後付武装がないんだよね？」

「ああ。何回か調べてもらったんだけど、拡張領域が空いてないらしい。だから量子変換は無理だって言われた。ってなんでお前はそんな感動してんだよ？」

今まで勉強したおかげで、一夏はスラスラと答えるが、その隣で茜雫が涙をそっとぬぐっている。

?? 「まさかバカでアホで無知でどうし用しようもない一夏がここまで進化してたなんて……」

?? 「言い過ぎだ？」

?? お前は俺をチンパンジーとも思っていたのか……

?? 「たぶんだけど、それって単一仕様能力ワシオフ・アビリティの方に容量を使ってい

るからだよ。」

??「単一仕様能力つていうと……えーと、なんだっけ？」

一夏が首をかしげる。

??まあ、あんまり馴染みのない単語かもしれない。

「言葉通り、唯一仕様の特異才能だよ。各ISが操縦者と最高状態の相性になったときに自然発生する能力のこと。普通は第二形態から発現するんだよ。」

??「一夏の零落白夜がそれに当たるかな。」

??「白式は第一形態なのに単一仕様能力があるつていうだけでものすごい異常事態だよ。前例がまったくないからね。しかも、その能力つて織斑先生の 初代『ブリュンヒルデ』が使っていたISと同じだよな?」

??「そういえばそうだったね。」

??茜雫の脳裏に零落白夜を展開した千冬がバツバツとリアル無双しているビジョンが浮かぶ。

??本当にありそう。

??「姉弟だからつてそうそう同じなんて普通無いんだけどなあ。」

??「いや、シャルル。まず単一仕様能力が発現できている姉弟な

んて初めてだと思っよ?。」

??「あ、確かに。」

??「単一仕様能力なんて発現できている人間がかなり少ない。」

??「まあ、なんにせよ。まず一夏は射撃について教え込むから。」

??「そんなに俺って理解していないのか?。」

??「例えば何知ってる?できるだけ詳しく。」

??「茜雫はあまりの結果に少し頭が痛そうにこめかみを揉んでいる。」

??「引き金を引くと弾が出る。」

??「死んでこい。」

??「ええ?。」

??「まさかここまでとは……………」

??「小学生が答えそうな解答に頭痛がする。」

??「たったそれだけの認識を持っていなかった一夏によく今まで戦ってこれたなと賞賛の言葉を贈りたい。」

??「……………そうだな。どうせそのうち授業で銃器の扱い方とか習うから一から教えた方がいいな。」

?? 「一からってどこからの?」

?? 「歴史から。」

?? 「ええ?」

?? 「冗談だよ。取り敢えず構造からだね。」

?? そう言った茜雫は手には黒光りする拳銃が握られている。

?? 「.....どこから出したの?」

?? シャルルが当然の疑問をぶつける。

?? 先ほどまでなにも握られていなかったはずなのに気がつくとき拳銃が握られている。

?? 正直怖い。

?? 「俺のISの拡張領域が余ってたから入れておいた。IS用の武装と違って容量も取らないから使えそうな銃器が8丁と予備弾薬が結構入ってる。」

?? 茜雫は余った拡張領域を特に埋めようとは思わなかったため、護身も兼ねて近中遠それぞれいくつか装備しておいた。

?? 備えあつて憂いなしと言うのだからこのぐらい大丈夫だろう。

?? 「でも、そんな対人兵器、IS戦じゃ火力が足りなくて全然役に立たないんじゃないかな?」

??こんな小口径の銃器なんてIS操縦者から見れば豆鉄砲だ。

??当たったところで微々たるダメージしかない。

??「そりゃあこんなIS戦で使うはずないよ。」

??「ひ、人に使うつもりなのか?セン?」

??茜雫の予想通りお人好しの一夏が過敏に反応した。

??「だって人混みとか路地裏とかISが使えない状況下でどうやって危険から対処するつもり?」

??「ここは日本だぞ?外国じゃない。」

??「だから、襲われることなんてない、と。」

??「ああ。」

??一夏は断言した。

??日本じゃ銃器の取り締まりが厳しいし平和で治安の良いここで襲われる事なんてないし、何かしたわけではない。

??危険なんて起こらないだろう、という一夏の考えを茜雫は真っ向から切り捨てた。

??「あのね、一夏。認識が甘いよ。ある有名な人が言ってたでしょ、『絶対ないなんて絶対ない』って。それに一夏は世界で三人し

かない稀少な男子IS操縦者なんだから世界の各国がその実験データを欲しがるんだからデータの盗みでも本人の誘拐でもなんでもするよ？その時なにか起こるか分からないんだから備えていた方がいい。いざって時に何も守れなかった事は相当悔しいと思うから。」

?? 途端にシャルルの表情にかすかに影がさし、過去に誘拐を経験した一夏の表情も苦くなる。

?? 一夏とシャルルがほぼ同時にISを解除して茜雫と並ぶ。

?? 「はい、どうぞ。」

?? 軽い言葉とともに茜雫が拳銃の銃口部分を持って一夏に突き出す。

?? 少し躊躇いながらそれを掴んだ一夏は渡された時の軽い言葉とは反対に銃が思ったよりずっしりと重い事に少し驚いた。

?? 「思ったより重いでしょ。人の命を絶つ道具だからね。武器は普通それくらい重い方がいいんだけどね。」

?? 人の命を奪えるものは重さを感じないといけないと茜雫は考えていると言っことだろうか。

?? それなら今一夏の手に握られた拳銃が映画などで見るよりも少し大きいのも分かる気がする。

?? 「でも、なんだこの銃？見た目がなんか他のと少し違うぞ。」

?? 茜雫から渡された拳銃は手前半分が一般的な自動拳銃、銃身部



分が回転式拳銃のようなチグハグな姿をしている。

?? 「これってマグナム・オート？」

?? 「なんだそれ？シャルル？」

?? マグナム・オートなんて聞いた事ない。

?? 「大威力のマグナム弾を撃つ為に造られた文字通りマグナム銃とオートマチック銃を足して割ったような銃のことだよ。有名なデザートイーグルって拳銃も見た目は分かりづらけれど原型はマグナム・オートなんだよ。しかもこれ、ウィルディ・マグナムだよ。初めて見た。」

??

?? シャルルの分かりやすい説明におお確かにそうだと納得。

?? 当初・45ACP弾のスケールアップ版である・45ウィンチ  
エスター・マグナム弾モデルからラインナップされたため『ウィル  
ディ・45マグナム』とも呼ばれた。

??

?? 後に使用弾に加わった・475ウィルディ・マグナム弾は、登  
場当時は世界最強のマグナム・オート弾だった。

?? が、似た形状のマグナム・オートのATオートマグシリーズと  
同じような構造をしンプルで大威力のインパクトのあるデザート  
イーグルの中間に開発されてしまった為イマイチ売上げが伸びず  
世界最強の名を持った事もあるのに知名度かなり低いという可哀想  
なマグナム・オートである。

?? 今も洪とく生産されているが取り扱う店はかなり少ない。

?? 「なんかこれ見た時『買わなきゃいけない』ていう誘惑に駆られてアメリカに行った時にとある人物に安くて譲って貰った。」

?? 「なにやってんだよ……セン。」

?? 「一夏が呆れる。」

?? シャルルの中では実は茜雫はガンオタ疑惑が浮上していた。

?? 「取り敢えず学年別トーナメント戦に向けての特訓なんだから構造は別に後回しで良くないか？」

?? 構造なんか理解したところで何か意味などあるのだろうか。

?? シャルルも同じような疑問を持っているようだ。

?? 「構造を逆手に取った戦略もあるんだよ。俺だって山田先生との模擬戦でそうだったでしょ？」

?? 確かに山なりの弾道を描く小型グレネードで遠距離狙撃を見せ、小型グレネードの弾薬部をスナイパーライフルで撃ち抜いたのもちやんと武器の特性を理解していたからだと言えるかもしれない。

?? 「マガジンに弾を入れて本体に装填。スライドを後ろに引く事で初弾を薬室に入れて引き金を引くと連動したハンマーが雷管を叩く。弾身内部の炸薬に引火し、その発射ガスによって弾身が飛ぶ。発射されたエネルギーを利用して空薬莖の排出と次弾の装填を行う。これが自動拳銃のシステム、分かった？」

??「お、おう。」

??「詳しいね、茜雫。」

??「夏は銃を撃つだけでそんな事が起こっておる事に驚きと頭がついて行くのにいっぱいで、シャルルは銃の扱いは習ったがそんな事考えた事もなかった。」

??「セン、弾身ってなんだ？」

??何かと似た言葉があるが弾身なんて聞いた事ない。

??「鉄砲玉、弾丸の正式名称だよ。」

??知らなかった。

??銃器の扱いに慣れたシャルルも初めて知った事実だ。

??「撃つ人間の気持ちを理解する為に試し撃ちすれば？」

??シャルルの提案を元にターゲットを展開する。

??本当はIS用だが一般的な銃でも問題ないだろう。

??「構え方はどうすれば良いんだ？セン？」

??「いざ、ターゲットと向き合っても構え方の基本を知らない。」

??「特に俺も気にした事ないな。弾は例外を覗いて銃口を向けた方向に忠実に飛んでいくし。」

??この銃はちゃんと飛ぶはずだ。

??「いや、ダメだと思うんだけど、茜雫。ちゃんと構えないと反動に負けて当たらないし、これマグナム弾使ってるから下手すると肩が外れちゃうよ。」

??「マジか？」

??

??映画や漫画で見たカツコ良い撃ち方を真似て今まさに撃とうとした一夏は慌てて中断する。

??その後、シャルルに拳銃の構えを教わり何度か撃ったが肩から手の先にかけてがとにかく痛い。

??しかも、的の中心に当たらない。

??全部左にずれていた。

??「予想よりは上手だね、一夏。」

??離れて見ていた茜雫が近づいてくる。

??「なんで左にずれるんだ？」

??「引き金をまっすぐ引けてないからだよ。」

??「そうなのか？シャルル？」

??「一応まっすぐ引いているつもりなんだけど実際は左に少し力

が入ってる。」

???引き金をまっすぐ引くのは単純に見えて結構難しい。

???これは射撃戦を展開する人にとっては慣れるしか方法はない。

???「今度はISを装着した状態で撃ってみようか。」

???「これをか？」

???提案した茜雫に銃を掲げる。

???「じゃなくてIS用の武装をだよ。」

???エネミーの中に手軽な武装など無いのでシャルルが一夏にアサルトライフルを差し出す。

???「あれ？他のやつは装備って使えないんじゃないのか？」

???「普通はね。でも所有者が使用許諾すれば、登録してある人全員が使えるんだよ。今一夏と白式に使用許諾を発行したから、試しに使ってみて。」

???「お、おう。」

シャルルから『ヴェント』を受け取り、一夏は撃つ姿勢を作る。

???しかし、射撃武器を使ったことがない一夏の様子はどこかぎこちない。

??「か、構えはこうでいいのか？」

??「脇を締めて。それと左腕はこっち。わかる？」

初心者の一夏をシャルルがうまく誘導する。

??教えるのが上手いからすぐに構えが決まった。

??「火薬銃だから瞬間的に大きな反動が来るけど、ほとんどはISが自動で相殺するから心配しなくてもいいよ。センサー・リンクは出来てる？」

??「さつきから探してるんだけど見当たらない。」

??「うーん、格闘専用の機体でも普通は入っているんだけど。」

??「欠陥機らしいからな。これ。」

??「一夏、白式はかなりの高性能機だからね。」

??茜雫が見てきたISの中でもかなりの出来が良い機体だ。

??さすがはメイド・バイ・束。

??

??「百パーセント格闘オンリーなんだね。じゃあ、しょうがないから目測でやるしかないね。」

??一夏がシャルルに手を添えてもらって次々と現れるターゲットを撃ち抜く。

??アサルトライフルの高精度とISの射撃反動の相殺によって先程より中心からかなりの近い。

??「お、おう。なんか、アレだな。とりあえず『速い』っていう感想だ。」

??「そう。速いんだよ。一夏の瞬間加速も早いけど、弾丸はその面積が小さい分より速い。だから、軌道予測さえあつていれば簡単に命中させられるし、外れても牽制になる。一夏は特攻するときには集中しているけど、それでも心のどこかではブレーキがかかるんだよ。」

??「まあ、それが射撃武器の利点であり欠点でもあるけどね。」

??「どういう事?」

??

??シャルルが首をかしげて不思議そうに尋ねる。

??「射撃武器は圧力で物体の破碎を行うから面ではなく点である事によつて効果がある。だから1発1発の攻撃範囲は指の間を通るぐらい狭い。銃口を向けた方向にまっすぐ飛ぶから弾道の予測は容易だし一番の利点である速さは逆に言えば弾が早く通りすぎるからその一瞬をやり過ぎせばどうという事ない。タイミングと銃口の向きに気をつければ簡単に避けられるよ。」

??二人はまさかの発想の逆転になるほど、と頷きかけるが、

??「それが出来たら苦労しないだろ。」

??

??一夏が真つ当なツッコミを入れる。

?? 「うん、でも中東で10mの距離でショットガン避けた知り合い見た事があるんだよね。」

?? 「人間？その人？」

?? 散弾銃を10mで避けるなんて聞いた事がない。

?? 「ねえ、ちょっとアレ……………」

?? 「ウソっ、ドイツの第三世代型だ。」

??

?? 「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……………」

「……………」

?? 急に周りで訓練していた生徒が騒ぎ始める。

?? 何事かと近くにいた生徒の視線を辿ると、ピットの上に漆黒のISを纏った女子生徒が佇んでいる。

?? 「あれって……………」

?? 「ドイツ代表候補生、ランラ・ボルデイツヒか。」

?? 「何シャルルの言う事に割り込んだ上に格好つけて思いつきり間違えてんだよ。ラウラ・ボーデヴィツヒだからな。」

?? 真顔で人の名前を間違えた茜雫に一夏がツツコム。

?? 相変わらずこつこついうところがずさんな奴だ。



?? 普通より若干細めのフレームに肩に何か砲身のようなものが折りたたまれており、掌が他のISよりも少し大きい漆黒のIS——  
——シユヴァルツェア・レーゲンを身に纏っているラウラが挑戦的に、

?

? 「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話は早い。私と戦え。」

?? 「イヤだ。理由がねえよ。」

?? もちろん断る。

?? 理由もなしに戦うような戦闘狂ではない。  
バトルジャンキー

?? 「貴様にはなくても私にはある。」

?? 「また今度な。」

?

?? 拒絶するよう後ろをむいてこの場から離れようとする。

?? 「ふん。ならば——」

?? ガコンツ、という音と共に右肩の折りたたまれた砲身が前に展開する。

?? 「戦わざるを得ないようにしてやる?」

??

?? その言葉と普通とは少し違った爆発音と共に、レールカノンの大口径の銃口から砲弾が一夏目掛けて吐き出される。

??「ーーツ？」

??無防備に後ろを向いていた一夏も反応するが間に合わない。

??その時、

??「一夏？」

??間一髪の危ないところでシャルルが物理シールドを即座に展開。

??一夏を食い破らんと迫る砲弾の間に滑り込むようにして割って入り、着弾の瞬間上手く上の方向に受け流す。

??「おゝ今のは流石にビビったな。ちびっちゃんいそいだ。」

??一夏のすぐ隣にいた茜雫は不意打ちに全く動揺せず飄々と冷静に軽口を叩きながら砲弾の行方を太陽の光に少し目を細めながら追っている。

??受け流されて真上後方辺りに飛んで行った砲弾は今遮断シールドにぶつかり、チカツと瞬く間ような光を出した後砲弾は重力に従って落下していた。

??

??シャルルが防がなければ最悪死んでいたかもしれないのに呑気な茜雫に二人は少しため息を吐く。

??「いきなり撃ってくるなんてドイツの人は随分と沸点が低いんだね。」

??シャルルが一瞬で物理シールドを収納して両手に武装を構える。

??その速さに皆が驚き、ラウラと茜雫の目が僅かに見開かれる。

??「まあ、ビールもホットな国だからね。」

??茜雫のぼやきにラウラが不快そうに眉を寄せるがシャルルの方に嘲笑の視線を向ける。

??「ふん、時代遅れのフランスの第2世代アンティーク如きが。」

??「量産も出来ていない第3世代ルーキーよりかは動けると思っけどね。」

??売り言葉に買い言葉。

??見られただけで目を空したくなるラウラの冷たい眼差しをシャルルは真っ向から受け止める。

??このまま戦闘に勃発しそうな一触即発の空気になるが、

??その生徒?何をしている?学年組名前を答えなさい?

??アリーナの異様な空気に監督の先生が気づいたようでスピーカーから咎めるような声が聴こえる。

??「ふん、興が冷めた。」

??ラウラはスピーカーの方を不快そうに一瞥するとISを解除してピットの中に戻って行く。

??「くそっ、何なんだよアイツ?」

??一夏が毒ずくとなりで、茜霏は面倒ごとが押し付けられそうな予感にこっそりのため息を着く。

??最近になって面倒がよく起こるのは何故なんだろうか。

??見上げた空は憎らしいほど青い。

二十四話 不休（後書き）

誰か、評価ボタンをポチッと押してくれ

あと感想も

今度こそ次の投稿は7日です

二十五話 開扉（前書き）

一週間ぶりに帰ってきたぞおー？

一昨日はまでずっとテスト、昨日は寮の部屋変えの引越し  
忙しかった

やっとで夏休みだ

辛かったぜ

二十五話 開扉

?? “女難? そんな羨ましいもん持つてる奴は大概は貧弱かヘタレばかりだ。けどなあ、たまあに最強の覚醒者の素質の塊を持つてる奴が混じってる事がある。お前なんかそうじゃないのか?”

?? ? ? ? ? とある30代のクソヤローの証言より。

?? 茜雫はふと昔聞いたそんな言葉が頭をよぎった。

?? 別に思い出そうとしたとかではなく、たまたま空をみれば面白い形をした雲があった。

?? そんな感じ。

?? あんなヤツの言葉思い出さたくて思い出すなんてことないだろう。

?? しかも、最後に余計な事まで入っていやがる。

?? いつもなら脳が勝手に拒絶反応を起こして思考回路を強引に捻じ曲げてでも考えを変えたはず。

?? しかし、茜雫のすぐとなりはその言葉が実は当てはまるのではないのか、と思う奴がとある女子生徒の去った方向を難しい顔でまだ見つめている。

?? そんな恨めしそうに見てもまた現れる可能性などたかがそれているといるのに。

?? ただ、女難という点に関しては今、こいつほど悩んでいる奴は早々いないだろう。

?? 覚醒者にはとても見えないヘタレっぷりだが……

?? 「なんつーか、今日も災難だったね。一夏。今年は厄年なんじゃない? お祓いに行けば?」

?? 「なんか憑いてるのかな?」

?? 「やめてくれ。縁起が悪い。」



?? フラグ無計画一級建築士またはハーレム範士皆伝一織斑一夏がシャルルと茜雫のありがたい提案を苦虫を噛み潰したような表情でお断りする。

?? とある女子生徒一ードイツのエリートとも言える代表候補生であるラウラ・ボーデヴィツヒのいきなりの砲撃に晒された女難のフラグを計画性なしに乱立させている一夏。

?? 不安定でゆらゆら揺れるソレがいつ倒壊するのか非常に楽しみである。

?? その時にこちらに倒壊しない事を祈るばかりだが。

?? 何がともあれ、素手の切り裂くように鋭いビンタの次は72口径のレールガンによる大口径砲弾の鉄拳なんてシャレにもならん。

?? 前者は精神的にも肉体的にも痛い。

?? 後者など間違いなく死ぬ。

?? 下半身残してこの世から消え去るだろう。

?? 茜雫自身はそんなのごめんだ。

?? 「ま、そんな考えても好転するわけじゃないんだし、着替えに行るか。さっさと切り上げて本の続き読みたいし。」

?? 「.....お前、いくら他人事だからってレールガンを背中からぶつ放すぐらいヤバイ奴だぞ。どうすりゃ良いのか少しは一緒に考えてくれよ。仮にもお前も危なかったんだぞ。」

??と言われても何故一夏が敵視されているのかが分からないのだからどうしようもない。

??下手に突っかかって自分までレールガンをぶっ放されて肉片にトランスフォームするのは絶対に嫌だ。

??トランスフォームは乗り物だけで十分。

??そういえば、アメリカのマイケル・ベイとスティーブン・スピルバーグ監督の『トランスフォーマー』の第三弾が出るらしい。

??面白そうだから見に行きたいものだ。

??「茜撃つて前向きなのかいいい加減なのか分からなくなるよね。」

??「前者でお願いします。」

??「……………善処しとく。」

??そういうのは即答ではいって答えるのが処世術の高い人の選択ってやつだよシャルル君よ。

??上を向いて茜撃は一回大きなあくびを漏らす。

??空は先ほどとかわらず真っ青だ。

??一夏とシャルルは呑気過ぎる茜撃に少しだけ呆れる。

??「なんか眠たくなってきた。早く帰って眠たい。」

??「たつた今さつき本を読みたいつて言つてたじゃねえか。」

??呆れる一夏に茜雫はチツチツチツと顔の前で人差し指を左右に振る。

??さつきはさつき、今は今だ。

??「人とは常に変わり続けているのだよ。一夏君。」

??「誰だよそれ。てか、かつこいい事言ってるけど実際やる事は考えるのが面倒くさいから放棄してるだけだろ。」

??「いいよね。墮落つて。人類最高の夢だ。The best dream mankind? DA? RA? KU。」

??両手を頭の後ろで組んで空を眺めながらダメ人間発言を公言する。

??「こいつつて奴は……………」

??一夏はさらに呆れ、シャルルは苦笑いをしている。

??「何言つてんだよ……………お前は。墮落しちゃダメだろ。」?

??「何故?」

??茜雫は目線だけを一夏の注ぐように傾ける。

?? 「なんで墮落が人類最高の夢なの？」

?? 「夏がまさにぶつけようとした質問を言い出すまえにシャルルが口に出す。」

?? 「仕事しないで自由に気楽に生きるのは人類共通の夢じゃないの？仕事をしないで生きていけるなら9割が仕事を捨てるよ？」

?? 好きで仕事する人間なんてそうそういない。

?? しなくていいならしないのが普通だろう。

?? 確かにそうなるかもしれないが、

?? 「真面目な奴はちゃんとしつかり最後までやるだろう。箒なんていい例だ。」

?? 箒は真面目、日進月歩、日々鍛錬、のような言葉が体現されたような人間だ。 ?

?? 箒なら「腑抜けるなあ？」などと言って真面目に仕事に取り組むだろう。

?? あと千冬も。

?? 「ほくきちゃんだってお年頃なんだから修行だけじゃなくて息抜きするさ。それに真面目過ぎると人間は自然に腐る。」

?? 「何でだよ？」

??茜雫がやけに言い切る。

??「人間は自分の欲求を理性の鎖で許容範囲に繋いでいる。真面目か不真面目かはよはその鎖の長さだ。」

??真面目な奴は鎖が短いから遠くにいけず縛られる。

??不真面目な奴は鎖が長すぎて有らぬところまで行ってしまふ？

??茜雫は教鞭のようにすらすらと口を動かし言葉を紡ぐ。

??「人間は自分の欲求を抑えるには労力がある。欲求が鎖の長さより遠くにいかない様に繋ぐためにな。長ければ行動範囲が広いから特に引く力は滅多にいらぬ。でも短いから遠くに行こうと引張る力も頻度もデカイ。そのうち人の方が壊れる。」

??「じゃあ、どうすればいいんだよ？」

??問いかける一夏に茜雫は下から覗き込むように軽く腰を曲げ、ピツと指を突きつけるように一夏の顔を指す。

??「自分の好きな長さで生きるのが最良。」

??「好き勝手に生きろっていうの？」

??

??「シャルル正解。極端じゃ生活出来ないから墮落と最低限の真面目を使い分けて楽に生きる。それが一番。実際にそうしてる人が大多数だ。」

??「そんなもんなのかな？」

??一夏はいまいち納得出来ないというかなんとかなく茜雫の見解を否定する。

??なんか認めたくない自分がいる。

??「戦隊ヒーロー物なんかそう。実質たった約5人+ で日本を守ってるけど、絶対無理。そんな都合よく怪人が一人一人違う日になんてこないし、怪人に定休日なんてない上に完全にあちらの都合でやってくる。休み無し常時臨戦体制で極限の自己犠牲精神が絶対に必要。人であることを棄てないと無理。結局は自滅。」

??「たつた今、茜雫はさらっと世界のお子様とヒーロー役者を敵にまわす暴言を吐く。」

??「.....とりあえずお子ちゃま達に謝ってこい。夢を壊すな。」

??「うん、無理。事実だし。」

??ぬわぁ、こいつって奴は？

??一夏は頭を抱える。

??シャルルも流石に反論できる要素が見つからないで苦笑いが継続している。

??「逆はどうなの?」

??シャルルが言いたいののは墮落を追求したらどうなるかと言うこ

とだろっ。

???「逆も無理。墮落はまず殆どがお金という壁にぶつかる。好き放題に生きたら餓死するな。それに欲で生きると最後は自殺に繋がる。」

???「な、なんで？」

???茜雫の物騒な言葉に驚く。

???「自殺する奴は殆どがやりたいことが無くなるから。真面目はやる事が元々少なくて、取り組んでいる事を否定されたらもう何も残らない。墮落に走ると最後には何も残らないし、自然に意欲が湧かなくなってくるもんさ。したいように墮落するのが最高。」

???一夏とシャルルは同い年に諭されて何も言えない。

???否定したいけどなるほど、と思う自分がいるから出来ない。

???茜雫の言うことは一つ一つ筋がちゃんと通っていて正しい。

???一夏とシャルルが思考の渦に絡め取られているとききなりパンツと鳴った破裂音にビクツと身体を震わす。

???音源を探ると直ぐに見つかる。

???茜雫が手を合わせた状態で二人の前に立っている。

???「はいっ?面倒くさい話はここまで。早く更衣室に行こう。一夏達も早くシャワーを浴びたいでしょ?」

??「あ、ああ。」

??「う、うん。そうだね。思ったんだけど茜雫ってなんかすでに人生悟っちゃったって感じるよね。」

??「……………ジジくさいからその考えの即時撤回を要求します。俺はまだピッチピッチの15歳です。」

??「年増がいいそんなデフォルトのセリフだぞ。それ。」

??茜雫に急かされて二人はようやく動き出す。

??確かにラウラの一件で嫌な汗をかいてしまい少し気持ち悪い。

??吸収性抜群のISスーツを着ているが汗そのものが消えるわけではない。

??それは何だか不衛生な気がして早く着替えたい。

??更衣室に向けて歩き出したそのとき、シャルルが思い出したように立ち止まる。

??「ん?どうしたんだ、シャルル?」

??「いち早く気がついた一夏が振り返り、先に歩いていた茜雫が遅れて振り返る。」

??「僕、ちょっと専用機の調整をしてから着替えるから先行つて。」



?? 「何だそんな事か。待っててやるよ。」

?? さすがは心優しき織斑一夏。

?? 今時なかなか自然にそんな事言える奴は激減してきていると言っ  
のに。

?? 一夏の提案のシャルルが両手のひらを振ってやんわりと断わる。

?? 「いいよ、いいよ。そんな大したことじゃないから気にしないで先に行つてて。」

?? そこまで言われたら食い下がるわけにはいかない。

?? 「ん、そうか。じゃあ、先に着替えておくからなあ。」

?? 更衣室での道のり。

?? 「なあ、一夏。」

?? 一夏の横を並んで歩いていた茜雫が唐突に口を開く。 ?

??」「……どうした?セン?」

??「少し深刻そうな茜雫に一夏は返答に若干間が出来てしまった。

??「俺ってジジくさいのかな?」

??「しみじみとした問いかけの裏に少し自覚があるらしい。

??「意外と小さい悩みだ。

??「そんな事が悩んでんのかよ。大丈夫だ。お前は若い。俺が保証する。」

??「?一夏が茜雫を励ます。

??「茜雫が顔を上げて元気を取り戻す。

??「なんか役立てたみたいですほんの少し嬉しい。

??「うん、そうだよな。ジジくさいのは一夏一人で十分だよな。いやあ、良かったよ。一夏と同類じゃなくて。」

??「俺の純粋な励ましの言葉を返せえ?」

?? 即席コントをしながら歩いたためか思ったよりかかった体感時間  
間は短かった。

?? 更衣室に着く頃には、一夏は人生に疲れたような哀愁の漂う表情を  
対象的に茜雫は血色最高、気色万円の表情で光輝いている。

?? 今なら電灯のない夜道でも安全に歩ける。

?? まあ、真つ暗闇の中、全身発光した不審者になど誰もが近づく  
事はないと思うが。

?? ドアが開くと当然誰もいない。

?? 男子が使う時は貸し切りなのだが、広い空間に誰もいないと寂  
しい物だ。

?? 開けるたびに空虚感のような物が胸によぎる。

?? 一夏がいそいそと茜雫がハツラツとロッカーの扉を開けるとそ  
こには……………

?? 当然の如く自分の着替えがあるわけで特に異常はない。

?? 「ん？」

??? ロッカーから顔も出して茜雲が耳を澄ます。

??? こちらに小走りに近い速度で誰かが近づいてくるのが分かった。

??? シャルル?と思ったが、シャルルにしては少し音が重たげだ。

??? 気がつくはずのない一夏が着替えを取り出してまさにISSスーツの下半身の部分を脱いだまさにその瞬間、

??? 「織斑君、デュノア君、沙月君ここにいますか?開けてもいいですか?」

??? ノックとともに幼気な声が聞こえる。

??? 真耶だ。

??? シャルルと違い少し音が重たげだった理由がわかった。

??? 胸部の核兵器の有無か。

??? あれはヤバイ。

??? それ以上に下半身露出状態の一夏にとって真耶の言葉はヤバイ。

??? 「ああ?開けないで下さい?今した履いてないんです?」

??? 「ええ?すみません?」

??? 一夏の必死の呼びかけにドアの向こうで真耶が一步慌てて離れ

るのが分かった。

???ドアの外でそわそわと歩き回っているようだ。

???きつと怪しい光景だろう。

???茜雫はそんなやり取りの間に着替え終わり準備OK。

???ISスーツの着脱ぐらいで今更手間取ったりなんかしない。

???「セン、山田先生を入れていいか……………って早っ？俺より遅めに着替えてたじゃねえか。」

???「そんな事いいから山田先生を早く入れてやれよ。多分、なんか重要な案件だろ。」

???「ん、ああ。そうか。」

???「ここまでわざわざ来たという事は真耶が単純に優しいという事もあるかもしれないが、重要な案件であるのだろう。」

???「夏はドアの外でそわそわと歩き回っていると思われる真耶に手で作った即席メガホンを口に当てて呼びかける。」

???「山田せんせーい。入って来てもいいですよ。」

???「うひゃあ？あ、す、すみません？は、入りますね。」

???変な叫び声の後、真耶が恐る恐る更衣室に入ってくる。

??外に聞こえるように結構大きめで呼んだのだが、真耶をびつくりさせてしまったらしい。

??まさかあんなに驚かれるとは

??なんか悪いことをしてしまったような気がする。

??「それでそうかしたんですか？山田先生。」

??「あ、あれ？デユノア君はいないんですか？一緒にいると聞かされていたんですけど。」

??「機体の調整をしてからくるそうだから同じ部屋の一夏に伝えさせればいいですよ。」

??「そうだな。俺から伝えるので山田先生どうぞ。」

??「そうですか。ええとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになりました。結局時間帯別にするという色々と問題が起きそうだったので、男子は週に二回の使用日を設けることにしました。」

??まあ、そうなるのが妥当だろう。

??女子の使った後の大浴場なんて使いづらいし、その逆だって女子が使いづらいだろう。

??この配慮はかなり助かる。

??「本当ですか？ありがとうございます、山田先生？」

一夏は嬉しそうな顔で山田先生の手を握り、上下にぶんぶん音になりそうなくらい振る。

??男子に手を握られ真耶の顔は熟れたリンゴのように真っ赤だ。

「い、いえ、仕事ですから。」

「いやいや、山田先生のおかげですよ。本当にありがとうございました。」

??ちよつとオーバーな一夏の喜びように茜雫が少し引いていると、後ろでドアの開く音がする。

??「……………一夏、何やってんの?」

??いつもより少し低めの声で入って来たのは最後の男子生徒であるシャルルだった。

??シャルルの眉間には微かにシワがよっており、なんか面白くない物を見たといった表情をしている。

??「おお、シャルル喜べ。ついに大浴場の解禁だつてよ。」

??そんなシャルルの様子に気がつかない一夏は少し興奮気味に朗報を伝える。

??「へえ。そうなんだ。」

??反応が冷たい。

??これには一夏も少したじろいだ。

??「どうしたんだよ？シャルル。」

??「別に。」

??取り付く島もない。

??どうかしたのだろうか。

??「そういえば織斑君と沙月君にはもう一件用事があるんです。

ちよつと書いて欲しい書類があるんで、職員室まで来てもらえますか？白式の正式な登録に関する書類なので、ちよつと枚数が多いんですけど。沙月君はIS委員会からなにかあるそうです。」

??「え……………」

??今度は申し訳なさそうにいう真耶にたじろぐ。

??一夏は書類との戦いに、茜雫は面倒な方々との面会にため息を着いた。

??「先に行つとくぞ。というか、先に行つてくれ。シャルル。」

??「わあ？」

??一夏と茜雫の見事なユニゾンに真耶が感嘆の声をあげる。

??「うん、わかった。」



??

?? ドアを閉め、自分一人だけになったところでシャルルははき出すようにため息を漏らした。

?? それまで我慢していたせいでだろうか、無意識に出たそれは思ったよりも深く、シャルル本人が驚くくらいだった。

(何をイライラしているんだろう………)

?? さつきの更衣室での自分の態度が今になって恥ずかしい。きつと一夏と茜雫も面食らっていたに違いないと思うと、ますます落ち込みに拍車がかかる。

?? さらにもう一度吐いたため息は静かな更衣室に溶けるように消えた。

?? 「たくつ、何やってんだよお前は。」

?? 夕暮れの帰り道、一夏は書きすぎて少し筋肉痛気味の右手を摩りながら隣を歩く茜雫に呆れていた。

?? 書類を書き終わって応接室の外で茜雫を待っていたのだが、I

S委員会の使いと思われる人達が苦々しい表情で応接室のドアを開けて来た。

「何でも茜雫の専用機についての追求と情報開示、茜雫自身のIS委員会への出頭を求めて来たのだが、茜雫はのらりくらりとお得意の口で躲し続けたらしい。」

「しかも、」

「そのうちどっかが真つ平らに区画整理されるかもしれないですね。」

「??の笑顔の一言。」

「??暗にアラスカの本部を「焦土に変えるぞ」の脅し。」

「??無人機の戦闘で強固な遮断シールドを紙のように打ち破った武装群を持っているらしいから何としても引き出す為に慎重にいけ、と厳命された人達は厳命よりも本当に焦土になるかもしれないと怯えた。」

「??しかし、気丈にも「世界を敵にまわす気か?」と反撃すれば、」

「??「俺がしなくとも俺のISを勝手に弄ると勝手にアルマゲドンが起きますよ。なんせあの篠ノ之束も弄ったISですから。」」

「??今度はネットを通じて世界が潰すとまで言われた。」

「??極めつきは篠ノ之束が弄ったの一言。」

?? 希代の大天才なら本当にできるかもしれない。

?? 世界を繋ぐネット世界が仇となった。

?? もうISS委員会は何も言えず歯を噛み締めて15歳相手に引き下がる事となった。

?? それを聞いた一夏はもう呆れるしかない。

?? 「あ。」

?? 「ん?どうした、セン?」

?? いきなり茜雫がポケットを探りながら声を出す。

?? 「しまったなあ。携帯端末をロッカーの中に忘れて来た。」

?? 「何やってんだよ……………」

?? 相変わらず少しコイツはつつかりしている事がある。

?? 「取りに帰るの面倒だな。一夏いつて来てよ。」

?? 「嫌だ。断わる。」

?? 一夏は右手の平を茜雫に突き出して拒否。

?? 「冷たいなあ。もう。」

?? 「アホか。自分で行ってこい。また飯時のな。」

?? 「はいはい。」

?? 一夏と寮へ、茜雫はもと来た道を歩き出した。

?? 辟易しながら歩く茜雫の頬を程よく涼しい風が撫でつけて気持ち少し晴れた。

??

?? 学園内の小さな湖の岸辺で一人の女性が立っている。

?? 黒いスーツがよく似合っている女性――千冬はため息を少しついた。

?? 自分の昔の教え子であるラウラがまたドイツにもどって下さいと懇願して来た。

?? 随分と自分も懐かれたな、と思うが自分のあそこでの役目はもう終わった。

?? 今の役目はここで次世代の芽を育むことだ。

?? 戻る気は毛頭もない。

??

?? パキツ

?? なにか乾いた音が背後で鳴った。

?? 「誰だ？」

?? 思わず軍人口調で木の影に立っているとと思われる人物を呼びかける。

?? 「そんな怖い顔しないで下さいよ。出て来づらいじゃないですか。」

?? 両手を上げて降参、といった具合で夕暮れのオレンジ色の光を浴びて出で来たのは、茜雫だった。

?? 茜雫はまさか小枝を踏んでバレるといっべたなバレ方をした自分を恥じた。

?? 千冬は驚く。

?? 全然気がつかなかった。

?? 「いやあ、綺麗なもんですね。」

?? 「夕陽がか？」

?? 「どっちもですよ。いや、織斑先生が上かな？」

?? 「ーーツ？」

?? 千冬は自分の顔が真っ赤になっているのが頬の熱さで分かった。

?? 夕暮れで良かった。

?? 昏間なら間違いなくばれていた。

?? 「世辞がお上手な事だ。」

?? 「俺は不器用ですよ？純粹に言ったんです。」

?? 「そんな歯も浮くようなセリフ、プロポーズぐらいでしか言わないぞ。」

?? 「シャイなんでそんな時に言えないですよ。」

??それ以外なら言えるのか、と千冬は呆れる。

??「ごほん。ところで、沙月。いつからそこに居た？」

??「一つ咳払いをして息を整えて質問。」

??「銀髮さんが『教官?』って叫んだところからです。」

??「だからいつだ。」

??「何度も口に出していたから全然分かん。」

??「銀髮さんが『イツにもどって来て下さい』って言ったところからいました。」

??「中途半端だな。」

??普通に『ドイツにもどって来て下さい』といえはいいのに、

??「なんかどこいっても大人気ですね。」

??「茶化すな、ドイツで教官していた時に懐かれた。」

??「猫っばいですしね。」

??「生粋の軍人だから犬だろう。」

??「ここで茜雫はラウラの事をあまり危険視していないのだからと  
気づく。

??「じゃ、俺は忘れ物の帰り道なんで。」

??そういつて茜雫は後ろを向いて寮の方向へと歩き出す。

??「ラウラの右目についてどうせ知っているのだろう?」

??ピタッと茜雫が右足を踏み出した状態で停止する。

??「ええ、知ってますよ。もしかしたら連中に関係あるのかと思つて調べました。」

??千冬は苦虫を噛み潰したような顔をしたが、

??「ラウラについてお前はどつ思つ?」

??茜雫が顔だけをこちらに向けて微笑む。

??「綺麗な目をした女の子ですよね。」

??嘘偽りのない純粹な言葉。

??千冬はラウラに聞かせてやりたいと思つた。

??「綺麗な目をした女の子……か。確かにそうだな。もういつてもいいぞ。」



?? 「それじゃこれにて失礼します。」

?? 「せんちくく?」

?? そんな鼓膜を心地よくくすぐる声が降って来た。

?? 音源と共に。

?? 「ーッ? うおっ?」

?? 文字通り降ってきたそれを抱き止めるように掴む。

?? 身体の全ての筋肉をフル稼働し、力を受け止め、一回転コマのように回って力を流す。

??「ナイスキャッチ?グットだよせんちゅ?さすが私の自慢のお  
ー痛ッ?」

??バカとしか言えないバカ姉またはアホ姉またはアホ姉にズビシツと脳天に空  
手チョップを炸裂させる。

??バカ姉またはアホ姉ー沙月湊は頭を抑えて身をよじり痛み  
に悶えている。

?

??石頭だ。

??実際、チョップした茜雫の左手はヒリヒリしてて痛い。

??「なぐにやってんですか。アンタは。反射的に避けるとこだっ  
たじゃないですか。」

??「ダメだよ?こんな愛らしいお姉さんの受け止めないと。」

??綺麗な茶色の長い髪を揺らしながら憤慨する。

??怒りたいのはこっちだ。

??「受け止めたけどね、ちゃんと。」

??「うむ。それでよし。」

??わけわかんないし殴りてえ。

??「なんで降ってくるんですか。」

?? 「だつてえ〜最近全然構つてくれないし、それどころか姿勢ら見ない日があるし、さっきそこから見かけたから劇的な方法で会おうと思つて。」

?? どういつて校舎三階の窓を指差す。

?? 劇的どころか心臓が止まったかと思つた。

?? 「殴りますよ?。」

?? 「せんち〜可愛い?。」

?? そういつてぎゅうつと抱きしめられる。

?? ダメだ会話が通じない。

?? 空に映える夕陽を見た時、背中がグキリツと鈍い音が鳴つた。

?? 茜雫が背中を抑えて悶絶している頃。

??? 一夏は途中トイレに寄り、それから自室へと帰った。

??? 途中で鈴にあったのだが、何故か蹴られた。

??? 何故だろう。

??? 自室のドアを開けると、シャルルの姿がない。

??? シャワーの音が聞こえるからシャワールームにいるのだろう。

??? 「あれ？まだシャワー浴びてたのか？シャルル。」

??? 結構前に別れたはずだ。

??? 「あ。さっきまでね、本国と電話してて遅くなっちゃった。話が長くなっちゃって。」

??? ドア越しの少しくぐもったシャルルの声がシャワーの水音と共に聞こえてきた。

??? 「ん、そうか。」

??? 本当は早くシャワーを浴びて汗を流したかったのだが、これは仕方が無いここは我慢だ。

??? ここで昨日のシャワーでの出来事を思い出す。

??? 「そついやボディークリームが切れかかってたんだっただ。」

??? シャールもボディークリームがなくなったら困るだろうと思っ

予備を戸棚から取り出す。

??そして、

??「シャルル。ボディークリーム切れかかってただろ?持ってきたぞ。」

??ドアを開ける。

??本当はいきなり開けたら失礼だが男同士だ。

??問題はない。

??「え……………一夏?」

??「……………え?」

??一夏とシャルルは時間が止まったのを確かに感じた。  
??



二十五話 開扉（後書き）

感想や指摘をまっています。

どしどし夏もよるしく

二十六話 名前(前書き)

ごめんなさい

お久しぶりです



## 二十六話 名前

?? 米のご飯やはり万能な食材だ。

?? 茜雫は真つ白に輝き、ホクホクとうねるような湯気を上げている。ご飯を口の中で咀嚼しながら思う。

?? 5、6回ほど噛んだところで甘みを感じ、さらに2、3回噛んだところで飲み込む。

?? 味も特に突出して美味しいというわけではないが、バランスよく纏まっており、噛めば噛むほど甘みが出てくる。

?? 人間のエネルギー源である炭水化物を多く含む白米だけでもとりあえず生きて行く事はできる。

?? しかも、汎用性もかなり高い。

?? そのまま炊いて食べるのもよし、ふりかけをかければさらに味が幅が広がり、何かと混ぜて一緒に炊いておけば白米にも味がしっかり染み込む。

??一度にたくさん炊いてしまってもタッパーやサランラップなどにいれて冷蔵庫にいれておけば保存もきく。

??さらにはおにぎりにして携帯性も抜群でなかに食材を入れればおかずと一緒に食べる事もでき、タクアンがあれば最高だ。

??味が千差万別自由自在、保存がきく、携帯できる。

??何とも素晴らしい食材だ。

??また箸でひとかたまりつえばみ、口のなかで咀嚼。

??口のなかでちょうど良い弾力と甘味が広がる。

??うん、今日も食堂のおばちゃん達の炊き加減は絶妙だ。

??「美味しそうじゃなくて本当に美味しいんだよ」のセリフは未だ嘘をつかない。

??今度本気でご指導願えないかと茜雫は本格的に検討し始める。

??そういえば、五反田食堂も食堂のおばちゃん達に勝るとも劣らない実力だ。

??茜雫はここ最近、周一で通っているのだがこちらもちちらで茜雫の期待を裏切らない。

??しかも、敵はサービスまでしてくれるのだから、素晴らしい食堂だ。

?? あんないいところ滅多にお目にかかれない。

?? 茜雫は食堂のテーブルで朝食の鮭定食の主力戦力である鮭の塩焼きの身を箸で崩しながら『白米、食堂のおばちゃんズ、五反田食堂の万能説』を脳内で力説している。

?? 演説者沙月茜雫、見渡す限りの観客も全員沙月茜雫。

?? もちろん拍手喝采。

?? 大統領選挙ならジョージ・ワシントンの選挙戦での大偉業にもチャレンジできるだろう。

?? イメージして見ると我ながらなかなかシユールな光景だ。

?? 前後左右見渡す限りに自分がいたら演説する前に逃げ出す。

?? 怖い想像だ。

?? 切り崩した鮭を口に運び、噛みしめる。

?? 程よく油が滲み出て、塩加減も文句なし。

?? いい仕事している。

?? もはや職人技だ。

?? そこで、目の前に輝く料理の注がれていた視線を上にあげて前に少しお互いに距離を開けて座っているこの学園で残りの男子生徒

である二人の姿を視界に収める。

?? 朝あつた時に思ったんだが.....

?? 「なんかさあゝ、一夏とシャルルよそそしくくない? なんかあつたの? シャルルは昨日風邪ひいて夕食に来なかつたけど。」

?? 昨夜、茜雫がメールで夕食の約束をし、食堂で一夏とシャルルの到着を待っていたのだが来たのは一夏のみ。

?? しかも、両脇には箒とセシリアを連れ立っており、両手に花の状態。

?? 一夏の友人である五反田弾がこの姿をみれば散々の悪態をついて涙ながら走り去り、絶交するだろう。

?? 一夏に聞けばシャルルは風邪をひいたのこと。

?? 慣れない日本の生活の疲れが来たのだろうかと思ひ、見舞いに行こうと思つたが何故か一夏に全力で断られた。

?? 一夏がヤバイこととしてしまったのかと思つたが、セシリアの大丈夫だつたの太鼓判で納得。

?? 昨日は特に気にしなかつたのだが、今日の一夏とシャルルは少し距離を置いたり、会話がぎこちなかつたりと違和感がある。

?? 絶対何かある。

?? ちなみに、いつもなら茜雫の隣に箒が座っているのだが今朝は

一夏、シャルルと一緒に誘いに行く朝練に参加するとのことである  
んわりと断られた。

?? セシリアと鈴にも会ったが、何故か二人の間で喧嘩が勃発。

?? 茜雫は一夏絡みだとなわかっているので嬉喜して見ていたが、茜  
雫の『織斑千冬リーダー警報装置』がコンディションレッドで発令。

?? 火種の二人を残して三人は早急に食堂シェルターに退避して事  
なきをえた。

?? 話を戻すが、それ指摘されてあからさまにギクリと身体を強が  
らせた。

?? とてもわかりやすいご反応ありがとうございます。

?? 「「ないない？何にもなかったよ？」」

?? 双子もびつくりのきれいなユニゾンだ。

?? タツグで組めば結構良さそうだ。

?? 「僕も風邪は治ったから大丈夫。」

?? 「ふん。まあいいけど。」

?? 茜雫の抑揚のない平坦な言葉に二人が冷や汗をかいている。

?? そんな二人を尻目にまた茜雫は目の前の料理に舌鼓をうつ。

??そして、隣に置いておいた今朝の朝刊を開いて記事に目を通す。

??今日も気の滅入るような凶悪犯罪の記事が多い。

??特に驚きなのが退学処分を受けた高校生がネットで買った拳銃を持って学校に立て籠もり事件。

??教師を含む数人が重軽傷を負ったらしい。

??ネットで買った拳銃は分解された状態で届き、ごく丁寧なことに付いてきた説明書の従って組み立てるだけらしい。

??世の中本格的に腐ってきたようだ。

??新聞に真剣に目を通し、特に追求をして来ない茜雫の顔を見て一夏とシャルルは自分たちの心配が杞憂に終わったとばかりにホッと息を吐く。

??「ああ、そういえばまだ今日の実習の着替えを用意していなかったな。」

??茜雫がいきなり話し始めたことに一夏とシャルルはビクツとしたが、話題の転換についていけなかったが内容は特に気にすることではなかった。

??「そうなの？早く準備してた方が良くないかな。朝食食べ終わったら荷物取りに行く時間があんまりなさそうだよ。」

??「そうだね。早く準備しに行こうかな。」

?? 少し当てが外れた、とでもいうような顔をしている。

?? 早く準備しに行くと言いつつも箸が料理を掴まむ量も速さも変わった様子はない。

?? 「そういえば。昨日ね、シャワー浴びる時にお湯と水を間違えてひねっちゃったんだよね。夏が近いけど結構寒いもんだね。」

?? 茜雫が二人の表情を確認するように視界の隅に収めながらさらに話題の転換をする。

?? ある単語に二人がビクビクつと反応した。

?? しかし、それを悟られまいとできるだけ平然を装って相槌を打つ。

?? 「ははは、なにやってんだよ。セン。」

?? 「茜雫って、たまにうつかりしているよね。」

?? 「そうだよな。驚いて声上げちゃったから誰かにいきなり入られるかもしれなかったね。」

?? 気のせいかな茜雫の声にさっきまでとは違い、楽し気な色が含まれている様に聞こえた。

?? 本格的に一夏とシャルルが反応し出す。

?? 一夏はどうこの話題を切り返そうか判断に困り、シャルルは顔がかすかにほんのりと全体的に紅くなっている。

??これを見て茜雫は口の端を少し釣り上げてガキ大将のような笑みを浮かべる。

??「どうした?二人共。様子がおかしいよ?」

??白々しくそんなことを言う茜雫に一夏がとうとうヤケクソになる。

??「ああもつ?お前どうせ分かっててそんな話題を出してるだろ?」

??「ん?何のことかな?何が言いたいのかさっぱりだ。ちゃんと見えよ。誰にも言わないからさ。」

??一夏は口を開く前にシャルルの方を見て目で確認を取る。

??「いいよ、一夏言っても。茜雫だけ隠し事するのはなんか悪いと思うし、茜雫はもつとづくに僕が女だって気がついてたでしょ?」

??シャルルはそれで分かったのか頷く。

??しかし、周りには聞かれないように会話の音量は小さめだ。

??そう、一夏が昨夜バスルームを開けた時に起きた出来事。

??一夏がボディソープを届けにバスルームを開けるとあら不思議。



??バスルームの中にはシャルル君ではなく一糸纏わない裸の女の子が。

??某然とベットの上に腰掛けて待っているとバスルームからジャージ姿で出て来たのはシャルル。

??しかし、いつもと違う。

??どこが？

??胸に膨らみがある。

??何故？

??実は女の子でした。

??何故男装を？

??父親からの命令で愛人の子で母親を失ったシャルルは立場が狭くこの命令を聞かざる負えなかつたらしい。

??このまま本国に帰って牢獄行きになるかもしれないと言うシャルルを一夏はIS学園の治外法権に近い校則で守ることにし、卒業までに何か対策を取ることに。

??そして、良い雰囲気になった二人はとうとうベットの上で熱い関係に—————

?? 「なつてない? なつてないから?」

?? 「え〜〜〜なんで〜〜〜?」

?? 「残念そつな声を出すんじゃない?」

?? 最後に捏造の回想をいれた茜雫に二人は朝だというのに疲れが溜まってしまった。

?? 「まったく、ケチケチしないで素直に白状すれば良いのに。それともやっぱり二人だけの関係なの?」

?? 「ち、違うよ?」

?? シャルルは顔を真っ赤にして両手をブンブン振って否定する。

?? そこまで否定されるとなんだか悲しくなる。

「.....お前は良い加減にしろ。てか、本当に最初から全て分かってたのかよ.....」

?? と言うことはさっきの何気ない会話は全て嘘だった、ということか。

?? 一夏とシャルルは自分達の過剰反応した迂闊さを今更ながら後悔する。

?? とりあえず一夏はこのままじゃシャルルがいじり倒されてしまうのでここで釘を刺しておく。

?? 「それより『シャルル』って偽名なんでしょ？本当はなんて名前？」

?? 「シャルロット。シャルロット・デュノアだよ。」

?? 「シャルロットかあ。美味しそうな名前だね。」

?? 「お、美味しそう？」

?? シャルロットは フランスのお菓子の名前だが美味しそうだなって初めて言われた。

?? なんだかとって喰われそうなので若干茜雫から距離を開ける。

?? それに気づいた茜雫は額に手を当て、大きさに傷つくふりをした。

?? 話題を変えるため、シャルロットは前々から気づいていたのではないかと思っていた茜雫に訊いて見る。

?? 「い、いつから気づいていたの？」

?? 「自己紹介した瞬間。」

?? 「……………え？」

?? 二人揃って困惑の声を上げる。

?? 自己紹介ということは、初めて会った時からすでにシャルロッ

トが男装していると見抜いていたと言っ事だろうか。

??「な、なんで分かったの？」

??シャルロットは何か失敗したのだろうかと思った。

??シャルロットは日本に来るまでの一ヶ月近い間に徹底的に男装がばれないように男らしい仕草を仕込まれた。

??自分ではボロは出していないと思う。

??「ん。」

??湯のみに入った適度な温度まで冷えたお茶を飲みながら今は置  
んであるさつきまで読んでいた朝刊を開いて突き出す。

??そこにはシャルロットの実家であるデュノア社が今月も売り上  
げが低迷していることを伝える記事だ。

??この記事は数ヶ月前に低迷し出したという記事がで始めて毎月  
のように新聞の片隅に出ている。

??デュノア社は世界3位のシェアを誇っているが未だ第3世代の  
開発が遅れており、そのためフランスは欧州連合の『イグニツショ  
ン・プラン』――文字通り経済の発火計画から外されてしまっ  
ている。

??「この記事だけで？」

??シャルロットや一夏はたったこれだけであれだけ上手かった男

装がばれたとは思えなかった。

??「知つてのとおり今、デュノア社は売り上げが低迷しているし、『イグニツション・プラン』からも外されてしまつて危機だ。」

??シャルロットの表情が自然と苦くなる。

??父親やデュノアの名前に特に愛着などないが、気分がいいことではない。

??「世界で希少なIS男子操縦者が自分の会社……. . . . .と  
いうか社長の息子がIS男子操縦者なのはデュノアの名が世界にさ  
らに印象付けるし、恐らくデータのために世界からお偉いさん方が  
尻尾振つてすり寄つて来る。なのに今まで隠しておく理由がない。」

??「最近急に分かつたとは思わないのか？」

??シャルロットが社長の息子なら男とはいえISに触れる機会が  
ないわけではないだろう。

??「たまたま触れたら起動した、ていうのも十分考えられる。」

??「時期がおかしい。シャルロットの最初の挨拶は恐らくデュノ  
ア社が考えた台本。シャルロットは『僕と同じ境遇の方がいると聞  
いて、本国より転入』と自己紹介した。一夏がISを使えると世界  
に公表されたのは4月だ。2ヶ月近くも自社の売り上げの起死回生  
の切り札を隠す理由がない。俺なら最大活用して会社の立て直しを  
図る。」

??驚いた。

??あの自己紹介と新聞の小さな項目でこれだけの推理をして正解にたどり着くなんて。

??「それにこんな苦肉の策を押し付けるなんてシャルロットにはちよつと複雑な事情があるみたいだしね。」

??シャルロットの顔が少し悲痛を帯びた。

??シャルロットは社長の実子だが愛人との間にできた子だった。

?? 母親が死んでから分かったのだが、一度本邸に呼ばれた時には正妻に母を泥棒猫呼ばわりされた上に叩かれたこともあった。

??一夏もこの3年間で何か対策を考えると云ってくれたが、検討もつかない状態だ。

??自分は存在しないんじゃないか、と思ったこともあった。

??一夏も昨日聞いたがひどい話だと思う。

??「自分の存在が心配？」

??茜雫が備え付けのタクアンをぼりぼり食べながら、こちらを見透かした質問をして来る。

??「ちよつと心配になったことがあるよ。」

??昨日もだったが、ちゃんと聞いてくれるこの二人の前だと本音がポロつと出てくる。

?? 「『シャルロット』って誰がつけたの？」

?? 「……………たぶん、お母さんだと思う。確かそう言  
つてたし。」

?? 「じゃあ、それで十分じゃない？」

?? 俯いていたシャルロットが顔を上げて茜雫を見ると、茜雫は近  
くの大型TVのスポーツについてのニュースを見ながら味噌汁を啜  
っている。

?? 「『名前』ってさ、自分じゃつけられるものじゃないから自分  
を見ていてくれる大切な人がつけた『存在』を呼ぶための言葉じゃ  
ん？だからさ、自分を大切にしてくれた人からもらった『名前』を  
自分で知って他の人が呼んでくれればそれが『存在』確認する一番  
の証拠じゃない？」

?? 「……………二人ってスゴイよね。昨日も一  
夏がスゴくかつこいいこと言ってくれるし、どうするのか道を示そ  
うとするし、茜雫もなんて言うかなんか上手いよね。」

?? 「幼馴染だからな。」

?? 「一夏と茜雫を揃って笑い始める。」

?? 幼馴染のいないシャルロットは少し羨ましいと思った。

?? 「一夏が何言ったのか知らないけど俺の場合はどっちかと言う  
と経験だからね。」

?? 「経験？」

?? シャルロットが首を傾げる。

?? どういう事だろうか。

?? 「ほらこれ。」

?? 茜雫はいつも首下げている砂浜の砂粒のように細いチェーンで繋がれた鈍色に輝くドックタグを首元から引つ張り出す。

?? 「それって、茜雫がISの訓練でもつけているやつだよ。なんなの？」

?? 「俺は姉さんに拾われる少し前の記憶がないんだよね。生みの親を知らない。でも、このドックタグに名前が刻まれてた。だから俺——『センナ』って人間がちゃんと存在していた証拠ってわけ。」

?? いろいろ誤りがこの中に入っているが、この二人に特にいう必要はないだろう。

?? 言っても信じられないだろうし、あまり追求されたくはない。

?? 「そ、そうだったんだ。」

?? シャルロットは茜雫が親すら知らないとは初耳だったので、自分よりひどい状態なのに強い茜雫が少し羨ましいと思った。



?? 「ありがとう。二人のおかげでなんか元気が出たよ。」

?? 「おう、なんかあったらちゃんと相談しろよ、シャルル。俺は乗ってやるからさ。」

?? ちなみに、周りは『シャルル』しか知らないため、呼び方は今までどおりシャルルとなっている。

?? 「ま、その前に考えないといけないことがあるけどね。」

?? 「あ、ラウラのことか。」

?? 「一夏が真つ先に思い当たることはラウラ・ボーデヴィットの事だ。」

?? 先日のようにまた何かしてくるかもしれない。

?? しかし、茜雫はかぶりを振り、一夏とシャルロットは頭に??を浮かべる。

?? 茜雫が俯き目の前で指を組み、重々しく口を開く。

?? 「周りに誰もいないのは気のせいだろうか。」

??「」  
.....  
あ。「」

??まわりを見渡しても誰もいない。

??遠くで食堂のおばちゃんが忙しく作業をする音だけが響き渡る。

??「せ、茜雫。今何時なの？」

??シャルロットが茜雫の左腕に巻きついている古そうな皮ベルトの腕時計を細く長い指で指す。

??「怖くて確認できないし、この腕時計は壊れてる。」

??項垂れながら返答する茜雫にこれが茜雫専用機の待期形態とは知らないシャルロットは何でつけてるの?の言葉を飲み込んで一夏を見る。

??「安心しろ?」

??その言葉に茜雫とシャルロットに光が差し込める。

??「あと3分ある。」

??「ちよつくら死んでこい、一夏。ナニ余裕こいて絶望的なこと口走ってんだよ。」

??その言葉を皮切りに三人は素晴らしいスタートダッシュをする。

???

?? 「う、スマン。」

?? 三人は陸上選手も裸足で泣いて逃げ出すような速度で90度のコーナーを綺麗に曲がって行く。

?? 速度が一切落ちていないのだから拍手ものだ。

?? 一夏はこの二ヶ月で成長した自分にちょっと感激。

?? シャルロットは二人の想像以上のスピードに驚き、必死に食いついていく。

?? 茜雫は走りながら胸の前でTVで見た見よう見まねで十字架を切っている。

?? 教室に入る際に曲がり角の関係から一夏、シャルロット、茜雫の順の滑り込みセーフ。

?? 千冬もいないため出席簿を食らうことはないだろう。

?? 最後に教室に入り、入り口で千冬がない事に喜びに浸っているよ、

??

?? ロシヤッ

?? あきらかに出席簿の音じゃない。

?? 茜雫と一夏専用の制裁。

?? ゲームではなく本物の『鉄拳』。

?? 「邪魔だ、馬鹿者。」

?? デスよね。

???「――放課後――」

???「いやあ、今日も良いものが見れた。」

???「何がだよ。」

???放課後となった今、一夏、シャルロット、茜雫は並んで放課後の訓練を行うべくアリーナに足を向けている。

???「今日もでっかいね。」

???一夏の頭にはでっかいたんこぶ。

???今日も今日で千冬に指された一夏散々詰まった拳句、珍回答。

???お約束のありがたい鉄拳を頂いている。

???「嬉しかねえよ。」

???「茜雫の頭にも付いているけどね。」

???シャルロットの指摘に茜雫がうつ、となる。

???茜雫の頭にも一夏ほどではないが、朝の大きなたんこぶが頭にも乗っかっている。

???見てておもしろい光景だ。      ?      ??

???茜雫が優しくたんこぶを撫でると激痛が走り顔をしかめる。 ?

??アリーナに着くと何だか騒がしい。

??時折、大きな爆音まで聴こえ、女子特有の叫び声が耳に鋭く響く。

??「何だ？何かあるのか？」

??「模擬戦を誰かがやってるんじゃないかな？」

??「にしては、少し派手だな。かなり本格的にやってるな。ご苦労な事だ。弾薬費もバカにならないだろうな。」

??「ちょっと違うんじゃないかな。茜雫が反応するところは。」

??しかし、ISの維持費や弾薬費はかなり掛かるのも事実だ。

??まあ、そのおかげで工業が潤っている場所もあるのだが。

??その時、一際大きな叫び声とともに爆音が聴こえ、体全体を震わす。

??「勇者だな、今模擬戦やってる連中は。ここまでうるさいと織斑先生が飛んでくるぞ。」

??「だから、着眼点がおかしいよ。」

??そんなやり取りをしながら三人が観客席のゲートをくぐる。

??先にアリーナに行つて、もらった幕が険しげな表情でアリーナ中央部を見ている、いや、睨んでいる。

???一夏達三人も何があるのかとアリーナ中央部の同時に視線を向けた。?

???そこには、

???一夏とシャルロットが目を見開く。

???「eeeeeeなッ?」

???一方的に痛めつけられてるセシリアと鈴。

???とところどころ装甲が破損しており、ダメージレベルはこぐらい言っておるだろうか。

???どっちにしる戦闘できないのは明白だ。

???痛めつけているのは漆黒のISを身に纏う件のドイツ代表候補生のラウラ・ボーデヴィツヒだった。

???

???「うわ、凄っ。」

??茜雫の特に感情の込められていないつぶやきはまた、アリーナに響くISが殴打する金属音と悲鳴で掻き消された。

?

?



二十六話 名前（後書き）

何か言いたい事があったらどうぞ

二十七話 怒女(前書き)

お久しぶりです

すみません遅くなつて

夏休みなので更新頑張りたいのに執筆速度がノロい

二十七話 怒女

??

??「まったく、一夏さんときたら。そして、茜雫さんも。」

??朝方できた頭のコブが疼く。

??青い。

??この一言しか言いようのない雲一つとしてない真っ青な空の天井の下を少女が歩く。

??歩を進めるたびに風で先がカールになった長く綺麗で豊かな金髪がなびき、改造OKのIS学園の制服を中世の優雅なドレスを思わせるような大きめのドレス風のスカートがはためく。

??乱れた髪や服装をいちいち直すことに普段なら手間などと考えないというのには鬱陶しいとしか感じられない。

??が、貴族である自分がたとえ些細な乱れでも乱れた服装のまま  
でいるわけにはいかない。

??整える手間にまたフラストレーションが溜まる。

??まさに負の連鎖。

??金髪碧眼の少女ーイギリス代表候補生のセシリア・オルコ  
ットは世の中の理不尽さに怒りを露わにしていた。

??この怒りをその元凶である織斑一夏にぶつきたいのだが、残念  
なことにセシリアの隣には今いない。

??そう、残念なことにはないのだ。

??はじめは訓練相手として一緒についてくるポニーテールのサム  
ライの幼馴染が一緒とはいえ一緒にいる時間が多くあったというの  
に最近はどうだろうか。

??ただへさえ厄介な幼馴染がいるというのに、4月中旬になって  
いきなりもう一人一癖二癖ありそうな世界で希少なIS男子操縦者  
の幼馴染が転入してきた。

??しかも、これまで優位に立つことのできた訓練相手という立場  
まで取られてしまった。

??なぜその男の幼馴染の訓練内容を重宝するのかという疑問はク  
ラス対抗戦の無人機三機による襲撃時に吹き飛んだ。

??『デタラメ』

??これしか言いようがない。

??

??機体にも驚かされたが、本人の技量にも空いた口が塞がらない。

??あの性格のどこにあんなものが隠れていたのか疑いたくなる。

??あれでもう訓練相手に主導することは泡のように消えた。?

??幼馴染というレッテルは過去をともに過ごさなければならぬし、時間は戻せるものでも割り込めるものでもない。

??ならば、アプローチをかけて距離を縮めようと決意。

??「なのに……次から次へと。」

??怒りのゲージが上がるにつれてアスファルトの硬い大地を踏む音が微かに大きくなっているのは気のせいではないだろう。

??中国からさらに幼馴染が転校してくるし、同じ代表候補生のレットルどころかまたもや幼馴染のカードを持ってるし、自分よりも積極的にアプローチをかけている。

??まったくついていない。

??唯一の救いがサムライの幼馴染が好きなのが一夏ではないことぐらいだろうか。

??しかし、そんなもの慰めなんかになっていない。

??一週間ちよつと前に転校してきたドイツ代表候補生のラウラ・ボーデヴィツヒとは何やら知らないが因縁がありそう。

??また現れたIS男子操縦者であるフランスの代表候補生のシャルル・デュノアが転校してきて最近は男子三人仲良しこよしである強気の鳳鈴音も躊躇するくらい割って入る隙もない。

??なんとか割って入るいい妙案がないものかと考えを巡らすそんなもの簡単に思いつけば苦労なんかしない。

??最近ある対処法を実行しているのだが二人きりにはなれる方法ではない。

??まあ、ある見返りがついてきたのだがこのオマケは意外と結構大きかった。

??憂鬱な気分のまま紺色のISスーツに着替えアリーナへと出る。

??平日だというのに上級生を中心に数人が訓練用のISを使って個人訓練に励んでいる。

??射撃訓練をするために訓練用の無人ドローンを数機自動で回避するように設定して展開させる。

??ドローンが展開されるまでの間に自身の専用機<sup>ブルーテ</sup>イアーズを展開。

??普段なら美しいと感じる深海のように澄んだ青いなめらかな装甲も自分の気分を表しているようで機体名通り青い雲が眼から流れそつだ。

?? 鬱屈した気分ではんやりしながら周囲に意味もなく目線を巡らせる。

?? と、ドローンがすでに宙に浮いてセシリアの訓練開始の合図を待っているのに気がつく。

?? 「わたくしとしたことが . . . . .」のくらいで負けていられませんわ?」

?? 気の抜けている自分を叱咤しつつ訓練を開始する。

?? スコープを覗き込み、影と重なった瞬間に引き金を素早く引き絞る。

?? 「くっ?」

?? しかし、なかなか自動回避に設定されたドローンに当たらない。

?? 射撃がわずかにぶれる。

?? 長距離の狙撃にわずかなぶれでも大きく作用する。

?? 三発に一発の割合でしか命中しない。

?? 「これしきの事でわたくしは . . . . .」?

?? 時折聞こえる奇妙な爆発音が癪に障る。

?? まさに必中のタイミングで放たれた一射はわずかに右の何もな

い空間を射抜く。

??と、思った瞬間にドローンが爆散した。

??自分のが掠ったのかもしれないと思ったが掠ったぐらいで爆散なんかしない。

??わけも分からずに射撃方向を割り出してそちらを向く。

??「あ。」

??

??「なんなのよお？アイツらはあ？」

??目の前で宙に浮いているターゲットに大穴があく。

??長い艶のある髪を左右の高い位置で括り、猫科を思わせるような吊り目を一層吊り上げて少女は青過ぎる空の下で怒りのゲージをなんとか下げるべくとりあえず声で発散させる。？

??アイツら——もう片方は最近は構ってくれないあの昔を共に過ごした俗に言う幼馴染でこちらのある気持ちなど全く理解しない唐変木馬鹿野郎。



??もう片方はいきなり出てきた、というよりなんかいた、あのふざけた性格をしたいつか必ずぶん殴ってやりたいもう一人の馬鹿野郎。

??怒りのボルテージをボルケーノ如く噴火させ、赤と黒を基調とし、スパイクなど鋭角的なフォルムをした攻撃的なイメージのISを駆る少女――鳳鈴音は怒りを訓練で発散中。

??

??怒りの元凶はどつちかと言うと前者のせいで溜まったのだが拍車どころかニトログリセリンを遠慮なくぶち込んで加速させるのは後者だ。

??

??「このこのこのこのこのッ?」

??途中で発音がおかしくなりそうな気合の叫びに合わせて甲龍の最大の特徴とも言える左右に浮かぶアンロック・ユニットの龍砲が火は噴かないが奇妙な発砲音と共に撃ち打され、ターゲットに直撃。

??やはり奇妙な爆発音と共にターゲットが粉々に文字通り爆散した。

??最近あの唐変木馬鹿野郎に構ってもらえない鬱憤はなかなか晴れず、その事を思い出すとさらに積もる。

??その時、頭のコブが疼く。

??「そうよそうよ。アイツもよ?」

??ターゲットが性格破綻男の顔に見え躊躇なく容赦なく最大出力

で撃ち込む。

?? 笑顔を浮かべた性格破綻男が四方八方に弾け飛ぶ。

?? 少しスツキリ。

?? 汗をぬぐい清々しく空を見るとキラン?とまた同じ顔が見える。

?? 今度は「残念でした（爆笑）」とでも言いたいのか親指まで立てている。

?? 「.....」

?? イライライライライライライライライライライライライライライライ。  
イラ。

?? 遊ばれているようでイラつく。

?? さつきからチヨロチヨロと近くをうるつく射撃訓練用の無人ドローン  
の存在に苛立つ。

?? 完全な八つ当たりなのだが八つ当たりしてしまう自分にさらに苛立つ。

?? 鈴はまたランダムに出現するターゲットを撃ち抜く事に集中する。

?? 「唐変木が21匹.....唐変木が22匹、唐変木23匹大馬鹿野郎が24匹.....」

?? ブツブツと呟きながらハイライトのない目で『作業』をこなして行く。

?? 見てて怖い光景だ。

?? しかし、そのうちの力んだのか一射がわずかに左にぶれてターゲットを掠りながら飛んで行く。

?? 「ああもうっ？」

?? その瞬間、

?? ターゲットの中心を青く細い閃光が撃ち抜く。

?? 「はあ？」

?? キラキラと破片が反射してダイヤモンドダストのように舞う中で意味も分からず閃光が飛んできた方向を向く。

?? 「「あ。」

?? 相手と声が重なる。

?? 鈴は相手が誰かとわかると挑戦的に相手に言い放つ。

?? 「奇遇ね。あたしはこれから次の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど。」

?? 「ああ奇遇ですわね。わたくしも全く同じですわ」

??すると、相手――セシリアも同じように挑戦的な物言いです返して来る。

??途端に無言となった二人の間に近寄り難い空気が流れる。

??セシリアがふんと上から目線の視線をぶつけると鈴も負けじと正面から迎え撃つ。

??「.....」

??二人の間で視線だけの戦争が勃発。

??どちらが優勢劣勢ではなく全くの互角。

??次の瞬間、二人の主兵装のスターライトmkIIIと龍砲が同時に銃口から破壊的エネルギーを撃ち出す。

??発砲と同時に回避行動を両者同じタイミングで行い攻撃を避ける。

??お互い無言のままだ。

??周りではいきなり勃発した数少ない専用機同士の戦闘に皆、自らの訓練を中止して注目する。

??両機が青空をバツクに縦横無尽に駆け巡る。

??スターライトmkIIIの青い閃光と龍砲の不可視の砲弾が交差し続ける。

?? 撃ち合いに痺れを切らしたセシリアが龍砲で牽制して来る鈴にBTを展開し自身のすぐ近くで射撃させる。

?? 狙いは鈴本人ではなく中心から四方にわずかにずらした牽制。

?? 「当たらないわよ？」

?? 困むような4つの連射を狙いが甘いと判断した鈴はくぐるよう回避。

?? すぐさま大型の連結させた双天牙月を振りかぶりながらブースターの出力を上げて突撃。??

?? ブースター炎を背に鈴が果敢に突っ込んで来る。

?? 長い銃しか持っていない上にまともな近距離武装を所持していないブルーティーズにとって接近されるとかなり弱くなる。?

?? そうなれば一気にこちらに戦況が傾く。

?? そう読んでの特攻。

?? 「当たりますわ。」

?? 一直線に突っ込んで来る鈴にセシリアがスターライトmkII Iを最大出力で放つ。

?? スターライトmkII Iの弾速、この距離なら確実に当たる。

??

?? そう確信したが、

?? 「甘いのよ？」

?? 鈴は鈍重なイメージにある甲龍を突っ込んだままの勢いで腹部を軸にバツク転るかのように回転。

?? 顔面めがけて飛んできた太く青い閃光を曲芸師のように避ける。

?? 「なッ？」

?? 必殺の一撃を回避されてしまい思考に空白が生まれる。

?? それを見逃すほど鈴も優しくはない。

?? さらにブースター出力を上げて加速する。

?? 「私の勝ち？」

?? 勝利を確信して双天牙月を振り下ろす。

?? が、突如鈴の背後で鋭い爆発が起き、衝撃が身体を貫通する。

?? 「な、なによッ？」

?? 攻撃者がいるであろう背後を振り向くとそこには4機のBTがこちらに銃口を向けながら固まって宙を浮かんでいる。

?? となるとアレの一斉射撃を受けたのであろう。

?? 「先ほど鈴さんがスターライトmkIIIIを避けて注意が外れ

た時一直線上に配置したのですわ。それより「――」

「セシリアのネタバラしを聞きながらまさかあの時に回り込むようにBTを配置していた事に気がつかなかった事に鈴は齒噛みしている」と、

「わたくしからも注意が外れてますけどよろしくて？」

「――ッ？」

「反射的に距離を取ろうするが加速力ではブルーティーズに軍杯が上がる。」

「完全無防備の鈴にセシリアはすぐさま接近し、スターライトmkIIIIを零距离で放つ。」

「――痛う？」

「爆発の衝撃でむせ返りそうになるが、四方からのBTによる射撃に追い返される。」

「ひとまず距離をとった鈴はセシリアを見ると余裕そうにこちらを見ている。」

「なんでアンタそこまで強くなってるのよッ？なんかしたわけッ？」

「セシリアがこんな強いはずがない、というかなり失礼な定義を元に鈴が抗議をセシリアは優越感たっぷりに流す。」

?? 「ふふふ、わたくしも伊達に茜雫さんからご教授してもらって  
いませんわ。」

?? 「……なッ? アンタ何時の間にアイツに……………」

?? セシリアはなんとか一夏と一緒に過ごせないものかと模索。

?? そこで一夏達の個人訓練に混ぜてもらい、茜雫から戦闘技術を  
教えてもらうことに。

?? 一夏とシャルロットはもちろんの事、茜雫も特に何も言わずに  
と言つか逆に自分じゃ教えられない機動に関する事を一夏にシャル  
ロットと共に教えて上げて欲しいと快諾。

?? 自然な感じの口実で参加する事に成功どころかいろいろお釣りが  
出てきて大成功。

?? 昨日は本国からの新型のスラスタの調整で参加不能だったが、  
この数日でかなり上達した。

?? おかげで自分でもなかなか強くなったと自負できるぐらいだ。

?? 一夏と二人きりではないものと一緒に過ごせるし、強くもなれ  
るし結果は一石二鳥。

?? 茜雫が狙撃の心得を持っていた事にも驚いたが、実際に同じ代  
表候補生の鈴に自分の苦手距離である近距離に接近されながらも追  
い詰める事ができた程。



??ちなみに何故そんなに接近から狙撃まで高い戦闘技術を持つているのかと質問したら、「やりたい事の実行力」と言われたときは意味が分からなかったが気にする事ではない。

??「まあ、いいわ。そのぐらいじゃ負けないわよ?」

??それでも闘志の削げない鈴は双天牙月を眼前に構えて突っ込む。

??「来なさい?」

??セシリアもスターライトmkIIIとBTを向けながら迎え撃つ。

??まさにぶつかり合おうとした瞬間、いきなり横から二人の間に割り込むように大口径の砲弾が通過。

??危ないところで避けられたが、地面を大きく抉った威力に直撃していたらかなり危なかった。

??二人が真剣勝負を邪魔した相手をキツと睨む。

??二人の視線の先には件の一夏を引つ叩いた人形のようなドイツの代表候補生である少女ローラウラ・ボーデヴィツヒが漆黒のISを身に纏いながら冷たい見下した視線を投げかけてくる。

??「.....どういつつもりかしら?いきなりぶっ放すなんていい度胸してるじゃない。」

??鈴が双天牙月を肩に担ぐ様に持ち替えながら龍砲をラウラに照準を合わせる。

??この距離なら龍砲の不可視の砲弾を避けるのはかなり難しい。

「中国の甲龍にイギリスのブルー・ティアーズか。 . . . . .  
ふん、データで見た時の方がまだ強そうだったな。」

??いきなりの自分達の愛機を卑下する発言に先ほどの戦闘で発散  
しかけていた二人の鬱憤も再チャージされる。

??そんな視線に構わずラウラは高い位置から二人の期待を品定め  
するような視線を投げかける。

??「何?やるの?わざわざドイツからボコられに来るなんて気持ち  
悪いくらいのマゾっぶりね。ジャガイモ農場じゃそういうのが流  
行ってるのかしら?」

??「あらあら鈴さん、言葉も分からない知能の低い方に何を言っ  
ても無駄だと思えますわよ?」

??こめかみに青筋浮かべながら反撃。

??しかし、そんな事に軍人であるラウラが腹を立てる事なんて愚  
はない。

??「ふん、下らん種馬を取り合うような獣の雌どもの言葉など理  
解できる訳がないだろう?是非通訳が欲しいものだ。私には専用機  
で量産型の訓練機に負けながら今だ代表候補生においているお前た  
ちの国を理解できないな。まあ、古いのと数が多いしか取り柄のない  
国だから仕様がなにか。」

?? 嘲笑うラウラに想い人と自分の国を馬鹿にされて二人の理性は音を立って弾け飛ぶ。

?? 「やるならとつと来い。」

?? 「言われなくとも?」

?? 取り決めはなかったが開始の宣戦布告と共に鈴がまずラウラに突っ込む。

?? ラウラはこれを右肩に展開した72口径大型レールカノンで迎え撃つ。

?? 初発は鈴のすぐ隣を掠める。

?? ラウラのレールカノンな後方上部から空薬莖が排出され、地面に落下する。

?? あの大口徑レールガンは連射は効かないと判断し、初発を回避した今がチャンスと突っ込む。

?? 大口徑の弾丸はオートマチック式で連射すると銃そのものが破損して使い物にならなくなる。

?? しかし、ラウラのレールカノンはこちらから見えない位置で輪胴式弾倉が回転。

?? ISにおいてリボルバー式というのは空いた弾倉が残るので空いた弾倉にそのまま量子展開で撃った瞬間素早く弾を入れられるなど今までのリボルバー式の装填に手間のかかるという常識を覆すこ

とができる。

??しかし、空薬莢はそのまま残ってしまつので一発撃つ度に、空薬莢を量子収納 / 空いた弾倉に弾丸を量子展開 / 射撃可能の過程がなかなか手間なのでマガジンを入れ替えるだけで何発も一度に装填できるオートマチック式が変わらず主流だ。

??大口径の弾丸を高速で撃ち出すためにはリボルバー式の方が遙かに連射も耐久性も効くのに普及しないのはそのためだ。

??しかし、今までは確認出来なかったがシュヴァルツェア・レーゲンのレールカノンには何やら特殊な技術が使われているのかりボルバー式でありながら空薬莢をオートマチック式のように排出可能のようだ。

??これにより装填の量子展開がかなり手間が省けて楽になる。

??瞬時に砲弾の排出供給を済ませたレールカノンを連射。

??この思いもよらぬ連射にさすがに鈴も特攻を躊躇する。

??一発まともに直撃すればかなりの痛手。

??なら双天牙月を盾にすればいいのだが、万が一破損したら武装の少ない甲龍では戦闘が満足に出来なくなる。

??「ならッ？」

??虎の子の龍砲を展開して連射。

?? 不可視の砲弾がラウラを襲い、避けられないラウラが体制を崩し、一気に鈴が突っ込むーーーーはずだったのだが。  
?

?? 「そんなツ？」

?? ラウラが掌底を突き出すとまるで壁でもあるかのように龍砲の砲弾が霧散して行く。

?? 「アレはA I C? P I Cの発展型ですわね。」

アクティブ・イナバツマ郎・キヤシセサル・キヤンセラ

?? 鈴に援護射撃をしていた遠くからセシリアが粉塵が微かに宙に固定されたかの様に停止しておる事から見えない壁の様なものをP I Cと判断。

?? なら近接格闘型の鈴には勝ち目がない。

?? ラウラは鈴の手前の地面を砲撃。

?? 砲弾が地面を抉り、粉塵を多量に吹き上げ視界を覆う。

?? 「こんなのハイパーセンサーを使えば無意味よ？」

?? 「ふん、貴様にはもう用はない。切り替える隙と注意が逸れればそれでいい。」

?? ラウラは鈴の龍砲がA I Cで完全に無効化できると確認するや敵ではないと判断。

?? 鈴など眼中にないとばかりに鈴のすぐ隣をすり抜けセシリアの方へと一気に迫る。

?? 「くっ?」

?? 地上に移動したセシリアがスターライトmkIEIとBTを展開して連射するが雨の雫のように青い弾雨をラウラは地面を滑るように回避して行く。

?? 「狙撃銃と三次元での多角射撃マルチポイントショットが基本のBT兵器で地上に移動しての砲撃などお前は馬鹿なのか?」

?? 「『当たらないのなら接近して近距離射撃。遠くにいるのなら接近させて誘い込む。』」

?? 「なに?」

?? 嘲笑うラウラにセシリアは謎のつぶやきで返す。

?? 意味の分からないラウラはそのまま右拳を突っ込む勢いを載せて叩きつける。

?? セシリアは冷静にスターライトmkIEIの銃身で受け止めた瞬間に身体全体を回転させるようにズラしながら力を強引に流す。

?? 多少流し損ねて銃身に負担が大きくなったが流した勢いでそのまま回転し、銃口をラウラに叩きつける。

?? 「茜雫さんから学んだものはBTの使い方だけではありませんわ?」

?? 「ーーーーッ?」

?? 左手で銃身を支え、右手でグリップを反対から握り、親指でトリガーを引き絞る。

?? 「銃剣術か？」  
バヨネット

?? ラウラはなんとか半身を逸らして躲し、左マニピレーターからレーザー手刀を展開し叩きつける。

?? セシリアはまたスターライトmkIIIの銃身で受け止め、引くように流す。

?? ラウラは一步後ろにステップを踏むと大型レールカノンの砲口を至近距離でセシリアに向けた。

?? 「同じ事が何度も通用するか？」

?? 「私を忘れんじゃないわよッ？」

?? 完全に忘れ去られていた鈴がラウラの後ろから双天牙月を上段で振りかぶってラウラ目掛けて叩き潰すように振り下ろす。

?? いち早く気づいたラウラはレールカノンを撃つ事を諦めスラストを左にふかして強引に避けた。

?? 「えッ？鈴さん？」

?? 「ちょッ？なにアンタまで忘れてんのよ？」

?? なんだか扱いが酷くなってきたと変なところで自覚。

?? 悲しくなってきた。

?? 怒りを理不尽にぶつけるべく鈴は龍砲をラウラに連射するが、  
またもやAICによって圧縮空気の砲弾は霧散して行く。

?? 「くっ?ここまで相性が悪いなんて?」

?? 虎の子の龍砲は無効化、そして得意の双天牙月による近接格闘  
は同じくAICの餌食になる。

?? 一つの武装で鈴は完全に攻撃オプションを失ってしまふ。

?? すると、ラウラの肩から一対の刃のようなものが射出される。

?? 鈴はPICとスラストを駆使して避けるが、ワイヤーで繋が  
れたそれは多少は操作が効くのか複雑な機動を描きながら襲いかか  
ってくる。

?? なんとか避け続けたがさらに追加された一本のワイヤーアンカ  
ーが資格から迫り、ついに左足を絡め取られて動きが制限されてし  
まふ。

?? 「そう何度もさせませんわ?」

?? セシリアはスターライトmkIIIIで援護射撃をしながらBT  
を展開してラウラの死角へと向かわせる。

?? 「ふん、先ほどのバヨネットは不完全ながら狙撃銃にしては良  
くできた、と言いたいが肝心のBT兵器の扱いが雑だな。この程度



の仕上がりで第3世代兵器と聞いて呆れる。」  
??

?? 正面からのスターライトmkIIIによる狙撃と視覚外からのBTによる射撃、その両方を避けながらラウラは一気に接敵する。

?? 「終わりだ。」

?? 「あなたがですわ?」  
??

?? 突っ込んでくるラウラを囲むようにBTを配置するがAICによつてBTが何かに驚掴みされたかのように停止する。

?? 「動きが止まりましたわね?」

?? 「貴様もな。」

?? セシリアの際を狙った一射はラウラの大口径レールカノンによつて相殺される。

?? 一直線上とはいえ、レーザーを実弾で相殺するなどそれだけで驚くべき技術だ。

?? セシリアはさらに追撃をしようとスコープを覗くが、ラウラは視界が制限された瞬間を狙って先ほどの拘束した鈴を振り子の要領でセシリアに叩きつける。

?? 「きゃあああ?」  
?? 「」

?? 空中で勢いよくぶつかり体制を崩した二人にラウラは瞬間加速  
イクニッション・ブーイスト  
で一気に距離を詰める。

??「このっ?」

??鈴は双天牙月の連結を解いて二刀流でラウラの左右のレーザー手刀の連撃を捌くが、ラウラはさらにワイヤーアンカーを撃ち出す。

??しかも今度は左右の腰についている分も追加され、計6つのワイヤーアンカーとレーザー手刀が鈴に襲いかかってくる。

??いくら鈴が接近戦に自信があってもこれ全部は無理がある。

??龍砲を展開して状況打破を図るが、

?

??「甘いな。この状況でウェイトのある空間圧縮兵器を使うとは。

」

??ラウラの言葉通り龍砲が砲弾を撃ち出す前に大型レールカノンの砲弾が龍砲を破壊する。

??「終わりだ。」

??ラウラが鈴にレーザー手刀を振り上げたそのとき、

??「させませんわ?」

??セシリアが奥の手としてミサイルBTを射出。

??派手な爆発音と共に衝撃が本人にも走る。

??半ば自殺行為とも言えるようなミサイル攻撃に鈴が呆れる。

?? 「無茶苦茶ね、アンタ……………」

?? 「苦情はあとで受け付けますわ。でもさすがにこれでダメージが——」

?? セシリアが目を見開いて言葉を止める。

?? 爆煙が晴れたそこには殆どダメージなどないかのようにラウラが宙に佇んでいる。

?? 「終わりか？ならば、こちらの番だ。」

?? 瞬間加速した勢いでそのまま鈴を蹴り飛ばし、セシリアには至近距離で大型レールカノンを叩き込む。

?? 吹き飛んだ二人をワイヤーアンカーだ巻きつけ、締め上げ、手繰り寄せて拳を叩き込む。

?? もう一方的な暴虐へと変わっていた。

?? 二人のISはシールドエネルギーが一気に減少し機体維持警告域を優に超えて操縦者生命危険域に到達している。

?? もしこの状態でISが強制解除されれば、間違いなく死ぬ。

?? ラウラはそれでも愉悦を浮かべながら淡々と力を振るい、二人を一方的に痛めつける。

?? そのとき何かを切り裂くような音と共に、

??」「おおおおおおお」

??雄叫びと共に騎士が二人の危機に駆けつけるべく突っ込んできた。

??その姿を眩しそうに倒れながら見る二人には高貴な騎士の遥後ろで興味のなさそうに冷たい目で一連の流れを静観していた青年の姿は見えなかった。

二十七話 怒女（後書き）

ゴチャゴチャしててすみませんでした。

俺の頭ん中見たい。

何かあったら感想でございぞ。

二十八話 乱闘（前書き）

無駄が多いですよね

ごめんなさい

でも戦闘シーンが書きやすいんです

## 二十八話 乱闘

太陽が傾きかけた青空。

その清々しい青空の下。

部活や個人訓練に勤しむ放課後の第3アリーナの中央。

そこで断続的に重く鈍重な気品の欠片もない爆発音や金属の打撃音と女性特有の甲高い悲鳴が広く開放的な第3アリーナに響き渡る。

一夏たちの目の前では一方的な暴虐が行われていた。

攻撃的な黒と赤、深海のような蒼青の金属の鎧を纏った二人の少女が地面に倒れあるいは首を締められて無理やり立たされている。

その装甲はところどころ凹み、あるいは破損しており、少女た

ちの顔色も見るからに正常な状態ではない。

衝撃が身体を揺さぶるたびにその青白い顔が苦痛にゆがむ。

対して、少女たちを暴虐している夜に溶け込むような漆黒のI Sを身に纏い、輝く銀髪の少女はワイヤーアンカーで締め上げ、拳や蹴りを次々と食い込ませている。

その整った顔に愉悦の笑みを浮かべながら。

「これはやり過ぎだ……………」

観客席でこの模擬戦を終始見ていた篤が目の前の暴虐に呻く様につぶやく。

目の前の暴虐に悲鳴をあげ、目を背ける女子がたくさんいた。

しかし、あまりの光景に皆、先生を呼びに行くという選択肢が頭に浮かんでいないようだ。



「「「「「「「」」」」」」」」」

そのとき箒の後ろで聞き覚えのある声が聞こえた。

振り返るとそこには驚愕で目を見開いている一夏とシャルロットが、相変わらずなにを考えているのかわからない特に感想のないようなどうでもいいと言った表情を浮かべた茜雫がアリーナ観客席のゲートをくぐって、入り口で立ち尽くしている。

そのとき茜雫が短く何かをつぶやいたがまた聞こえた爆音と悲鳴でなんと言ったのか聞こえなかった。

「ん？あ、ほくきちちゃん。」

箒に気づいた茜雫がこちらに声をかけながら歩いてくる。

その呼び声に一夏とシャルロットも遅れて箒に気がつき箒の元に駆け寄って来た。

「箒？なにがあつたんだよ？」

「私も打鉄の使用時間をここで待っていたから詳しくは知らないが、いきなりセシリアと鈴が模擬戦を始めた。」

焦った様子で尋ねる一夏に箒が答える。

シャルロットも横目でアリーナの様子を確認しながら箒に尋ねる。

「ラウラは？セシリアと鈴が模擬戦してたんでしょ？」

「大方割り込んで来たローラにオルコットさんと鳳さんがキレて模擬戦になっただんでしょ？」

「その通りだ。そしてローラではなくラウラだ。」

「えッ？マジでッ？」

これがわざとではなく素で間違えるのだからコイツは本当に変なところでズレてる。

「そんな……………昨日……………というか、今日徹夜で山田先生に貰った名簿でクラスのフルネーム必死に覚えたのに……………」

「……………アホだろお前。くだらない事で徹夜するぐらいなら寝ろ。てか、今日執拗に俺たちからかったのはエネルギーチャージのためか。」

「Yes？」

わあ、殴りてえ。

親指立てて即答しやがった。

しかもキラめく笑顔でだ。

シャルロットが親切に、かつ重大な事を教える。

「多分、スペルを英語読みしたんじゃないかなあ。ドイツ読み

とかその人の国の読み方しないとおかしくなるよ？」

「そんな……………俺の徹夜は……………  
……………？他の人も憶えたのに……………無駄……………  
……………？」

うわっ、本気で落ち込みだした。

しかも、仔犬に似た、すがるような眼差しで箒に助けを求めるべく首をギシシヤク回頭させて直視。

箒はうつ、と少したじろぐが……………

「無駄だ。無意味だったな。」

「……………が————」

背後で爆発音。

箒の容赦ない『のみ』と『ハンマー』のコンビネーションにより、『徹夜の努力』という題名、作者沙月茜雫の彫像がひび割れ、崩れ落ちる音が確かに三人の耳に聞こえた。

しかし、その音は蚊の睫毛が落ちる音のようにか細く消え入りそう。

というか実際に掻き消えた。

不憫だ。

と、思ったらいきなり茜雫は一夏の足をゲシゲシと蹴り出す。

しかも、スネをつま先で蹴るからスゲー痛い。

「ーッ？いきなりなにすんだよッ？」

「お前のせいだッ？」

「何故にッ？」

「一夏のせいで勉強時間が削られるからだ？」

「す、すみません？謝るから蹴るの好い加減にやめろッ？」

「……ってそれとこれとは関係ないだろ？……」  
「たぶん。」

言ってみたものの一応一夏の予習復習のせいで茜雫の自由時間が大きく削られているのは確かだ。

と言ってもこいつは全く勉強などしないのだが……

なのに成績がかなりいい。

世の中不公平極まりだ。

ゴスッ ドゴッ

「ゲフッ」

「いつまで遊んでいるつもりだ。」

「た、確かに。すまん。」

「ご尤もです。S a r r .」

頭を抑えながら座り込んで悶える男幼馴染は箒の静かな問いかけがかなり恐ろしく感じる。

一夏が勢いよく立ち上がり、

「助けに行くぞッ？」

「うんッ？」

「.....え.....ムジで？」

不穏不調。

「「「は？」「」」

茜雫の驚きの声に逆に三人は驚く。

なにを言っているのかこいつは。

「どういう意味だよ。セン。」

「え。言葉の通り。」

少し焦ったように聞き返す一夏に茜雫がいつも通りに返す。

「助けにいかない方がいんじゃない？というより助けにいかなくてもいんじゃない？」

「え．．．．．ちよ．．．．．茜雫？」

シャルロットも困惑顔で恐る恐る聞き返す。

「なんでだよツ？助けにいかないといけないだろツ？」

つい感情的になってしている事の一夏は自覚したが止めることができな  
きない。

「いや、だって他人同士の模擬戦だよ？」

「模擬戦の範疇を超えているだろう？」

「ほぐきちちゃん。そういうけど流石にローラも人殺しはしないから。軍人の規律って厳しいし。あんまり他人の模擬戦に首を突っ込むのは良くないんじゃない？」

「確かにそうだが．．．．．」

確かにいくらあのラウラ・ボーデヴィツヒでも人殺しまではし  
ないだろう。

しかもラウラはドイツの代表候補生。

しかも、ドイツの軍人。

束縛される事の多い立場だ。

イギリスと中国の代表候補生であるセシリアと鈴を殺せば確実に国際問題になる。

「でも見過ごせるわけないだろうがッ？」

「これ以上騒ぎが大きいと先生くるし．．．．．というかたぶん先生すぐにくるし。それがもし織斑先生だったら．．．．．」

「『心配してるのってそっち？』」

一夏たちはあまりの事に奇跡のユニゾンを連発してしまった。

まあ、怖いのは同感だが、頭を常に怪我ばかりしている茜雫は人一倍敏感なのだろう。

これ以上は脳みそに異常をきたしそうだし．．．．．

「一夏。頼んだ。」

茜雫はガシツと一夏の肩を掴んでまるで戦友を死地に送り込むような空気を創り出す。

死なないけどね。

「お、おう。任せろ？．．．．．行くぞシャルル？セシリアたちを頼む？俺はラウラを？」

「うん？分かった。気をつけてね。」

一夏とシャルロットがそれぞれ自分の専用機を展開。

いきなり観客席でISを展開した二人に周りは驚きの視線を向ける。

一夏は構わず単一仕様能力『ワシオフ・アピリテイ零落白夜』を最大出力で展開。

ファンタジーのような光輝く剣はかなりの硬度を誇る遮断シールドを紙のように両断。

その間を滑り込むように侵入し、それにシャルロットも続く。

茜雫はそれをも届けると少し背伸びして固まった筋肉を伸ばした。

「軟弱者め。」

「…っ」



ボソツと言われた茜雫はビクツと身を縮める。

ボソツと言ったがかなり痛い大威力だ。

「仕方ないじゃん。ほら、織斑先生の鉄拳って凄まじいし。」

必死に言い訳する茜雫を白いジト目で見ていたがはあっと一回息を吐く。

「鉄拳は喰らった事ないが確かに痛そうだな。」

「痛いのです。本当に。」

それでも筈は咎めるようなジト目をやめない。

「お前のことだ。どうせなんか他に考えがあったんだろう?」

「え、なにそのお前の事はお見通しだ発言的なやつ。」

「幼馴染だからな。」

『繋がりには解けないように結ぶことは難しいことだ。気をつけるんだな』

茜雫の頭に遠い記憶がよぎった。

もう誰がどんな表情、どんな声色でいつ言ったのかも分からない。

というよりまだかなり小さく物心もついていなかったと思う。

でも、男の冷たく鋭い印象とは裏腹に優しく繊細な手で頭をグシャグシャと乱暴に撫でられながら言われたのは覚えている。

その男とは一日過ごし、千冬と湊に拾われるまであの銀髪の少女とおどしていた少年以外で初めて本当の意味で『遊んだ』。

それ以外にもたくさん何かを教えられた。

記憶が7歳より前から飛んでいるのに何故か覚えている数少ない記憶の一つ。

「……………なんにもできなくなるじゃん、その言葉。」

「セン？」

いきなり神妙な顔で考え込む茜雫を篝が怪訝そうな顔で覗き込む。

「ああ、なんでもない。それと今回は何もない。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・その他は？」

茜雫はその問いをスルーする事にした。

あまりしゃべるとボロが出そうで怖い。

「まあ、少しだけ楽しみではある。」

そう言ってアリーナを見ながら観客席のフェンスに頬杖をつきながら微笑う。

篤は茜雫の子供の成長を眺めるような笑みの意味が分からなかった。

「うおおおおおおお？？」

一夏がこちらに注意を向けるため雄叫びを上げながらセシリアと鈴を締め上げるラウラの上から光輝く零落白夜の太刀を振り上げる。

「ふん。」

ラウラはそれを見てまるで壊れたオモチャを捨てるかの様に鈴を投げ捨て、セシリアを蹴り飛ばし、こちらを向き直る。

「このヤロオオオオオオオ。」

それを見た一夏は手加減なしに零落白夜を展開した雪片式型を縦に両断の勢いで振り下ろす。

ラウラはその単調な刃を受けずにバックステップで苦もなく躲す。

「シャルル？」

「分かってる？」

ラウラが飛び退いた隙にシャルロットが傷付いたセシリアと鈴を回収していく。

「別に………無様な姿をお見せしてしまいましたわね………」

「う………ぐっ？別に助けに来なくてもよかったのに………」

「全然大丈夫そうに見えないから。」

シャルロットは小脇に抱えた二人が強がっているのに少し呆れつつも安全地帯に運んでいく。

一夏は着地した瞬間屈めた身体をバネのように開放しながら瞬間加速。イグニッション・ブースト

加速の勢いそのまま斬りかかる。

ラウラは左右のマニピレーターレーザー手刀を展開して一夏の雪片式型を捌いていく。

ラウラの技量を相当なものと踏んでいるので燃費を考えて零落白夜は解いている。

一夏の連撃をラウラは手数で受け流し、なかなか決定打を与えることができないでいる。

このままでは面倒だと思ったラウラはワイヤーアンカーを全て射出。

一夏は慌てて離れ、地面を滑るように滑走していく。

横雑ぎに迫った一夏のワイヤーアンカーが一夏を掠めた。

「あのバカ。」

それを見た茜雫は小声で毒づく。

ラウラのシュヴァルツェア・レーゲンはスラスターが普通の機体よりも位置が若干低く、上下の稼働角度も若干低い。

おそらく地上を素早く水平移動するためだろう。

しかし、それでは少し空中戦にクセがでて扱いづらいのだが、技量の高いラウラは特に問題なく使っているが、地に足をつけての戦闘が多い。

おそらく地対地・空が基本の全距離対応型。

対して、一夏の白式は高い稼働範囲と大出力スラスターを使用したバリバリの空戦特化。

三次元の軽やかで力強い動きで相手を翻弄して初めてその真価が出てくる。

二次元の動きに強いシュヴァルツェア・レーゲンに地面に足をつけて戦闘するなど相性が悪い。

「それに少し危ういな。」

完全にセシリアと鈴を傷めつけたことに腹を立てている。

テンポが速い。

クールダウンしないとどこかで必ず何かが乱れ出す。

「……………優しすぎるんだよ。」

怒りは判断を鈍らせ、間違いに選択肢を絞りやすくする。

逆に怒りなどの感情が力になる事があるがそんな物が頻繁に役立つなど創作の世界だ。

選択肢の選択ミスは高度な戦いになるに連れて致命傷になつてくる。

高度な戦いは冷静に最短距離で目標を達成するルートを瞬時に探し出さなければならぬ。

あの単純なオセロでも達人は最初の数手で勝ちを決めることができるらしい。

まあ、オセロの達人なんてあんまり自慢出来ないが。

そんなことを考えていると一夏が勝負に出る。

ワイヤーアンカーを四基躲すと最大出力で瞬間加速。

すぐさまラウラは大口径レールカノンを放つ。

一夏は直感のみで身体を捻って躲す。

少しスラストを掠つたが特に気にすることはない。

整備の人は泣くかもしれないが……………

まさか躲されるとは思っていなかったラウラは一瞬反応が遅れ、展開された零落白夜の刃先が僅かに漆黒のなめらかな装甲を掠るよ

うに薙ぐ。

勢いに乗った一夏がもう一太刀いれようと刃を振るう。

ラウラが掌底をこちらに突き出すと、一夏の身体がまるで巨大な手で掴まれたかのように固定された。

「ふん………。感情的で直情的、絵に描いたような愚図だな。一太刀入れかけたぐらいで好機と見るなど馬鹿なのか？」

「な、なんだ？くそつ、身体がッ？」

引いても押してもうんともすんとも言わない。

万力で身体を固定されているみたいだ。

それでもなんとか零落白夜を届かせようとするが何も出来ない。

「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツエア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の一つでしかない。消えろ。」

肩の大口径レールカノンを一夏の心臓の真上に突きつける。

「一夏？離れてッ？」

シャルロットの声と共に複数の発砲音とともにラウラのエネルギーフィールドがチカチカと音速を超えて飛んでくる銃弾を防ぐ際眩しく一瞬発光する。

その隙に一夏は脱出に成功。



「チツ？雑魚が？」

ラウラは文字通りの弾雨を躲し、防ぎ、あるいはAICで無効化していく。

AICで止められた弾丸は空中で停止しているため、さながらあの映画のマトリックスのようだ。

「世代差というものを教えてやる。」

「くっ？」

実弾兵器しかないシャルロットのラファール・リヴァイブではカスタムチェインされているとはいえ実弾兵器を無効化していくAICの積みであるシュヴァルツェア・レーゲンとは相性は最悪と言ってもいいかもしれない。

ジリ貧になることは明白だ。

「お前の相手はこっちだろうが。」

「チツ？」

真横からの一夏の雪片式型をラウラはAICの展開が間に合わずレーザー手刀で受け流し、一気に距離を開ける。

「仲間がいないと勝てないのか。弱い事だ。」

「うるせえよ。」

ラウラがレーザー手刀を構え、一夏も雪片式型を右後ろに下段の構えをする。

「これで終わりにしてやろう。どうせあまりエネルギーも残ってしまい。」

「それはこっちのセリフだ。」

二人の呼吸が重なった瞬間、

弾かれた弾丸のように瞬間加速で一気にトップスピードで接近する。

少しでいい。

少しの間だけ零落白夜を展開できればいい。

絶対に当てる。

アイツは絶対に許さない。

一夏は無意識に残りのエネルギーを零落白夜に注ぎ込む。

主の命令に応えて雪片式型の刀身が機械的に開き、代わりに柄から零落白夜の刀身が現れる。

その密度は何時もとは比べ物にならない。

「うおおおおおおおおお？」

僅か一秒も掛からずに接敵。

一夏は全身全霊の力で必殺の刃を――――

振るえなかった。

それは向こうも同じだった。

邪魔者が出てきた。

ラウラも立ち止まり、一夏との間にある邪魔者を見ている。

二人の視線にあるのは一本の槍。

その刀身は鈍色に輝き、長く大きい。

俗に大身槍に分類される重量級の槍。

まさに斬りかかる寸前にコレが凄まじい速さと回転速度で割つてはいるかのように二人の間を分断した。

かなりの威力だった。

風切り音がしたと思ったら今度はこの大身槍が地面にめり込み、盛大な爆音のような物を響かせていた。

事実、刺さった地面の片側が大きく抉れ、飛んで来た反対方向に土砂が飛んで行っている。

まともに喰らえば万全の状態でもかなり危ない。

「……………誰がやったんだ？」

ラウラの声があまりの威力に驚きで少し震えていた。

シャルロットもいきなり飛んで来た大身槍にぽかんと口を開けて見ている。

この場で一夏だけが知っていた。

この槍の持ち主は――

「はい、やり過ぎお二人方。流石に今は見逃せない。」

パンパンと手を叩いて近づいて来たのは、全体的に黒く鋭角な流線形で細すぎるといってもいいくらい線が細いISを身に纏った茜雫だった。

「あれが茜雫のIS？」

「そつだよ。」

まだ惚けているシャルロットのつぶやきを茜雫は肯定する。

ラウラは特徴的でありながら全く他国と特徴の似通わない茜雲のエネミーに眉をひそめる。

「おい、何故邪魔をする。」

「いやあ、幼馴染の人殺しは見てられないしさあ。助けないと。」

「

地面に刺さった大身槍をズボツと抜き、ラウラの冷たい視線を涼しい顔で受け流す。

「今のは俺の負けって事かよ、セン。」

一夏が慥然とした表情で言う。

一夏には絶対に負けない自身があった。

それを否定された事実は少し受け難い。

「逆だ。」

「なに？」

これにはラウラも反応した。

逆ということはラウラが負けた、と言いたいのか。

「一夏お前なにやってんの？」

「……………え。」

冷やかな目で見られ、まさか自分が責められるとは思って  
なかった一夏はあまりの茜雫の威圧感に凄んでしまう。

「模擬戦はいい、敵討ちとか感情的な行動はまあ許せなくもな  
い。ただどお前の人殺しは見逃せない。お前の面倒を千冬さんに頼  
まれてるのに。」

「人．．．．殺し？」

あまりの事に一夏は熱がすっかり冷めて啞然となる。

「どういう事だ。そんな男に殺されるほど私は弱くないぞ。」

「お前は少し黙ってる。」

「なッ？」

ラウラが咎めるように茜雫に問い掛けるが茜雫はお前など知ら  
んとはかりに質問を切り捨てる。

「今なにしようした？」

「なにつて．．．．．」

「零落白夜を完全に開放しただろ。」

零落白夜の能力はありとあらゆるエネルギーを無効化していく。

シールドエネルギーを初め、光学兵器、さらには生命維持の命

網である絶対防御すら出力次第では簡単に切り裂く。

間違いなく零落白夜はISの兵器で最強だ。

これは搭乗者を一撃で殺せる。

「何かを守るためには力がいるし別に持つたらいけないなんて事もない。でも力を持つなら矜持を持て。それが人を殺せる道具を持つ人間が何かを守るための絶対条件だ。持てないなら力を捨て守られる側に立つとけ。『守るための力』も誤ればただの『暴力』だ。」

一夏は微かに自分が震えている事に気がついた。

別に茜雫が怒鳴っているわけでもない。

睨んでいるわけでもない。

その逆。

淡々とした抑揚のない声。

何も込められていない無感情の静かな冷気のようなものが一夏の身体を震わせた。

何よりも守るための力が暴力になっていた事がショックだった。

一夏が意気消沈したまま茜雫に謝る。

「その……悪かった。すまん。」

「う……………」

「どうかしたか？」

「ポテイシブな一夏が落ち込んで謝るのなんか見ててなんかキモイ。不気味だ。」

「キ、キモ……………って？酷すぎねえか？」

「ぜんぜん。」

引き気味に返してくる。

なんてやつだ。

人の純情を踏みにじりやがった。

なんか純情の使い方間違ってるような気がするが、謝って損した気分だ。

茜雫が初めてラウラの方を向く。

「あとお前もだ、ロー……………ラウラ・ボーデヴィツヒ。好い加減突っかかってくるのはやめろ。DMの一夏が変な性癖に走ったらどう責任を取るつもりだ？お前が一夏の欲求不満を解消してくれるのか？それは助かる。頼んだ。」

いきなり決定されて頼まれたラウラもどう反応したら良いのか困っている。



「走らねーよ？てかそんな性癖持ってないしドMじゃねえ？しかもお前、ラウラの名前また間違えそうになったたるう？」

一夏のツツコミ気質が茜雫の言葉に過敏に反応する。

芸人がコイツは。

「ゴチャゴチャうるさいな。人がカッコ良く決めたのに。」

「名前間違えた時点で失敗だし？しかも内容がカッコわりいよ？イジメか、オマエ？」

「熟知済みだ。」

いきなりの漫才にシャルロットやラウラですらぽかんと呆れている。

我に帰ったラウラは怒りを覚えながらどさくさに紛れて退散しようとする茜雫を呼び止める。

「ふざけているのか、貴様ら。」

「俺は常時真面目だし、さっきの話はマジだ。」

「違うツツ？」

「いいから話を折るな？このKYT？」

「え。日本のTV局だよね、それ？」

意外と知っていたシャルロットがツッコム。

「KYTだ。」  
シャルロットの野郎

「チ、チキン……野郎。」

チキンはCから始まるのだがKYもローマ字で表すので特に問題は無いはずだ。

一夏はなんか凹んだ。

「ってことで、じゃあな。」

そのまま片手をあげてそそくさに茜雫は立ち去ろうとする。

が、当然というべきか逃がすはずがない。

ガコン、という音と共に大口径レールカノンの接続部が回転し、背中を向けて立ち去る茜雫に銃口が向かれる。

「私の邪魔をするのなら、お前も消すぞ。」

「へえ。」

茜雫が短く興味なさげに言い、振り返った。

茜雫は言葉に出さなかった。

しかし、眼が言っている。

できるのかよ、オマエに。

嘲笑う茜雫の冷たい表情に恐怖を微かに覚えるがラウラはそれを睨み返す。

「まあ、そうだな。」

いきなり表情を元に戻した茜雫にラウラが拍子抜けしたが、

「ここで潰すのも一手か。」

「————ツ？」

茜雫はまるで買物でも決めるかのような口調でアンロック・ユニットの稼動盾を量子収納すると同時に大身槍を量子展開。

瞬間加速でラウラに一気に接敵する。

オーバー・ドライブ・ギア・アクセセル  
限界加速の方が速いがこの中途半端な距離でやればどちらも反応出来ずに衝突してミンチだ。

「愚直だな。あの男と同んなじだ。消し飛べ？」

「男の子だからな。褒め言葉として受け取るっ。」

短い返答と共にラウラが一直線に向かってくる茜雫に大口径レールカノンの砲塔を向ける。

確かに速いが動きは直線の上、こちらに向かってくる。

しかも、瞬間加速は途中で曲がる事が出来ない。

殺った。

ラウラはそう思った。

大口径レールカノンを撃つと悟った茜雫はエネミーを瞬間加速中に解除した。

瞬間加速での凄まじい速度で前に飛び出しながら重力により下に落下。

心臓を狙った大口径レールカノンの一人一人を殺すにはあまりに大きな砲弾は少しづつ落下している茜雫の顔面目掛けて瞬きよりも早く迫る。

が、それを茜雫は顔を左に傾けて避けた。

その際、砲弾の熱で数本髪の毛が焦げたが気になるレベルでも気にするレベルでもない。

【—————？】

ラウラ含むアリーナ全員が茜雫の常識の枠を飛び越えた奇行に驚く。

一歩どころか半歩間違えれば確実に死ぬ。

砲弾を避けた茜雫は瞬時にエネミーを再展開。

限界加速で観客席の人間でさえ消えたと錯覚するほどの圧倒的な加速と速度で視界の外に飛び去る。

「消えたッ？」

先ほどの予想外の奇行に動揺し、完全に茜雫の姿を見失ったらウラは辺りを目だけで見渡すが茜雫の姿が見当たらない。

その時、ラウラは自分が影になっている事に気づく。

「上かッ？」

「今は下だけだね。」

「……なッ？」

その上下運動のあまりの速さにラウラが驚愕。

茜雫は1mほど離れた位置で姿勢を低く、なにも持っていない状態で左握り拳を作り、正拳の姿勢をとっていた。

「いいのだッ？」

ラウラがワイヤーアンカーを全て茜雫に射出。

一直線に茜雫目掛けて矢のように疾駆。

が、それが届く事はなかった。

六基のワイヤーアンカーはどこからかクルクルと回転しながら落下して来たあの大身槍によって全て切断された。

「なにッ？」

「おゝ、すごいラッキーじゃん俺。どっかに行ったと思った槍がこんな所にあった。」

目を見開くラウラと对象的に茜雫は楽しげに言う。

何なんだこの男は？

ラウラが驚愕で無防備になっているときに茜雫は大身槍を地面から抜き取り、歩み寄ってくる。

はっと気がついたラウラは大身槍を片手で振り上げた茜雫が視界いっぱい映る。

「意外と早く終わったな。」

「……………」

ラウラがすぐさまAICを展開しようと右手を動かすが間に合わない事は一番良く理解できた。

負けるのか？自分が。

こんな男に。

茜雫が大身槍を振り下ろそうとしたその時、

甲高い金属音とともに茜雫の手から大身槍が飛んで行った。

「ほえ？」

「は？」

当事者の二人――特に茜雫が間抜けな声を上げた。

大身槍はカランカランという金属音と共に1mほど離れた場所に転がる。

取り合えず、

「え〜と、何したの？」

「わ、私ではない。」

「じゃあ誰が。」

茜雫が辺りを見渡す。

シャルロットーは同じく惚けたままで辺りを見渡しており、  
一夏ーは刀しかないしあんな芸当は無理だろう。

「やっぱりキミが？」

「違つと言っている。」

ではここで誰ができるというのだろうか。

その時、茜雫に通信が入る。

誰だと思いながら開いた瞬間、

せんち~~~~~? ?

爆音が頭を殴りつける。

「ツツツツツ?ぐおうううう……?」

「な、なんだ?どうした?」

いきなり頭を抑えて呻き出した茜雫にラウラがビクツと反応して驚きながら尋ねる。

どうやらラウラには通信がいつてないらしい。

まあ、通信の相手を考えれば当然かもしれないが、

「ぐぐぐつ、何でもない。通信が入っただけだから気にしないで。」

「そ、そうか。」

聞いちゃいけないと思ったラウラはあっさり引き下がる。



茜雫は通信に苦々しい声で応答。

「何ですか、このバカねえ……………沙月先生。てか、今の爆音、地声ですか？」

だとしたらスゲえ。

大会に出れば一番間違いなしだ。

賞金が出るならば、是非お掃除グッズを買ってもらい自分で掃除して頂きたい。

なんか不快な言葉が聞こえたような……………まあ、いつか。インカムのねマイクにね拡張機を使って話したんだよ？地声じゃないよ？

「落とせええええ？ボリュームを下げろ？耳がイカれる？って言うか、通信なんだから拡張機使うなああ？」

キーンと耳鳴りの凄まじい耳を抑えながら茜雫が我を忘れて通信越しに叫ぶ。

いきなりまた頭を抑えたと思ったら怒鳴り出す茜雫にラウラがまともやビクツと震えた。

「だ、誰と話しているんだお前は……………」

若干引いているラウラに少しショックを覚えるが今は耳の方が大事である。

ううう．．．．．通信で叫ぶなんて非常識だよ。  
せんちく。」

マイクに拡張機を使うアンタは非情だ。

しくしくという湊を無視する。

「てか、先生が俺に向けてるものなんです？」

観客席の一角に湊を発見。

椅子に深く腰掛け、細い鉄の二脚で支えて構えている物は、

「アレはラストイカ？」

ラウちく正解？

「ラウちく？」

ラウラも湊を確認したらしい。

湊は今、その細い身体には似合わない長くゴツイ銃を構えている。

普通のライフルよりも一回りデカイし長い。

「狙撃？」

そうだよ？

そこから撃ったのか？

しかもいきなり撃つたらしく、周りの生徒が驚きながらも耳の異常を訴えている。

可哀想に。

「何もそんなわざわざそこだけ遮断シールドを解除しなくてもピットから撃てばいんじゃないですか？」

本当はピットのような場所は狙撃手としてはタブーなのだが、IS学園で湊の命を狙う人間などいないので問題はないだろう。

ハッ？そうか？

バカだ、この人。

天然の中の天然だ。

キング・オブ・天然。

「てか、それって……………」

「お前のクローゼットの奥そこに隠してあった。」

「げっ、千冬さん。」

「教官？」

「織斑先生だ。馬鹿者ども。」

何時の間にかすぐ近くに千冬が。

右手一本で打鉄の刀を茜雫の頬に向けている。

「クローゼットって………なんで知ってるの？」

それはね、ふゆちうがー

「さっき湊がお前がエロ本でも隠してるんじゃないかと言って勝手に心配し出してお前が学校に行っている間に二人で搜索した。」

「何やってるんですか？あんたら？」

湊がボソッと ふゆちうもかなりせんちうの部屋の詳細見たが  
ってたじゃん とかなんとかぼやいていたが、気にしてもらえない。

俺のプライベートは？などという講義は当然のごとく無視される。

何でしょうかね、この理不尽。

「クローゼットの奥がなにやら嚴重にカモフラージュされながら改造されていると思ったらエロ本倉庫ではなく武器庫になっているとは………」

「………エロ本倉庫ってなに？と言うか、よく分かりましたね。あんなに頑張ってカモフラージュしたのに。」

「私を誰だと思っている。」

千冬は誇らしげに言ったが実際はクローゼット捜索中にハンガーから落としてしまった衣類に足を取られて武器庫開閉の隠し取っ手に触れただけの事だったがここは黙っておこう。

「てか、俺。そもそも自分で勝手に鍵を変えたからスペアキーなんてなかったはずですよな？」

ふっふっふ、まだまだ青いな。

「なにッ？あの特注の鍵をピッキングしたと言うのか？」

私のコバルトガバメントの前では全て無力なのだよ。せんちくよ。

「元から破壊したのか？犯罪だ？教師が弟の部屋の鍵を拳銃でぶっ壊すな？」

なんて人だ？

あの鍵はかなり高額だったというのに。

しかも、壊した理由が非情にくだらない。

愛する弟が心配だったんだよね。

「.....」

その愛する弟に向かって世界最強、対戦車ライフルの大口径特殊貫通弾ぶっ放す湊さんマジパネエッス。」

いやあ、そんなに寝めると照れちゃうな。

「寝めてねえよ。」

ハイパーセンサーで望遠すると頬を赤らめてラステイを構えている湊が見えた。

シユールだ。

「ともあれ、なんだあのクローゼットは。駐屯地の武器庫と言ってもおかしくないぞ。」

「なにを持ち込んだんだ………貴様は………」

ラウラが冷や汗気味にいう。

と言っか、この姉弟に引いている。

俺がまともなのに、と内心茜雫は涙を流す。

湊が今、手にしているラステイはすでに生産開始から50年以上経っている骨董品だ。

それでも未だ世界一の大威力でマイナーながら軍でも使われている、という噂を聞いたような気がする。

とにかく一般人が早々手に入れられる物ではない。

「まあまあ、それは置いといて。」

「逃げるな。」

チク

「痛い？刺さってる？ちょっと刺さってる？」

「本当になんなんだこいつは……………」

力を少し込めた刀は茜雫の頬に刃先が沈む。

痛みに逃げている今の茜雫と先ほどの戦闘中の茜雫を見比べてラウラは頭が困惑している。

「まあ、いいだろう。セシリアたち含むお前らは罰として作文用紙40枚に反省文を書け。」

「え、俺も？」

茜雫は自分は無実です、と言おうとしたが、

「お前も加わったのだから同罪だ。ちなみにお前は100枚だ。」

「何故ッ？」

自分だけ2・5倍なんて酷すぎる。

しかも、当事者のラウラは40枚なんておかしい。

10倍でもいいくらいだ。

「お前は『約束』を破ったからな。」

「約束って………ああ、アレですか。てか、まだ覚えてたんですね。」

「当たり前だ。100枚ちゃんと明日のSHRまでに書いておけよ。」

マジかよ。

茜雫はやっぱり仲介なんてはいるんじゃないかと後悔した。もう遅かった。

つうつと空を見上げた茜雫の眼から哀しみの結晶が流れ出た。

『な、なん……………で……  
……やねん』

あの遠い記憶の中の男が絶対に言わなそうだった唯一顔を真っ赤にして発した言葉が脳裏に蘇る。

おそらくあの冷氷鉄仮面男が生涯で一回のみのお笑いだろう。



なんて言っ  
てせがんだ  
のだから  
自分  
は。

昔の自分  
にと  
ても  
問  
い  
か  
け  
た  
い。

二十八話 乱闘（後書き）

一万字超えた・・・

何か言いたい事があったらなんでもどござ  
評価お待ちします

二十九話 誘策（前書き）

すみません

一週間ぶりです

しかし短いです

二十九話 誘策

夕焼けが鮮やかなオレンジ色に染まった空。

茜雫が一番好きな時間の空だ。

このままじっくりといつまでも見ていたい気持ちに駆られる。

今日の夜の原稿用紙の反省文地獄からちよつと現実逃避。

完全に巻き込まれてしまった。

茜雫はゆっくり沈んでいく夕焼けを目に焼きつけるのをいったん中断、再び視線を正常な方向へ向ける。

目の前に二つ並べられたベットには憎き元凶である三人のうち  
の二人――セシリア・オルコットと鳳鈴音が身体のうちこち  
に包帯を巻かれた状態でむすむすとした顔をしながら二人それぞれ  
何も無い違う方向に顔を向けている。

「別に助けてくれなくても良かったのに……………」

「あのまま続けていれば勝ってましたわ。」

助けてやったというのに感謝どころかこんな言葉が出てくるとは……………」

本日の苦勞を思うと涙が出てくる。

こんなのために反省文100枚なんて納得できるはずがない。

しかも、自分だけ元凶である三人の2、5倍の量などイジメだ。

自分が何をしたというのか……………とまでは言えなくもないが、納得できない物は納得できない。

なので、

「コーーフガッ?」「」

「せ、茜雫?」「」

ビシッ、スパンッ、という空気を震わす破裂音が突如ベットの  
上で枕に背中を預けるように座っていた二人の額からそこの学校  
よりも広めに作られ、設備がかなり整った保健室に木霊す。

ついでに普段なかなか聞く事のないであろうマヌケな声とシャルロットの驚きの声もしっかりと保健室全体に響いた。

「「????????」」

しばらくの間、何が自分に起こったのかと混乱しながら頭に受けた強烈な物理的ショックで頭をフラフラさせていた二人だが、

「あ、あにすんのよ？」

「ひ、ヒドイですわ？」

鈴は額に受けた物理的ショックで呂律が回らぬまま、セシリアはあまりの痛みに涙目で二人それぞれに両手を伸ばしていた茜雫に抗議する。

茜雫がやった事は中指を親指の先に引っかけ、負荷をかけた状態で目標に近づけ、一気に力を開放、その慣性エネルギーで目標にダメージを与えるとこの俗に言うデコピンだ。

しかし、たかがデコピンと侮るなかれ。

指の力と距離次第では肉体的、精神的にも大ダメージを与える事ができる。

実際に茜雫のデコピンは音からしてかなりの高威力。

絶対にやり慣れている。

一夏と箒はそう思った。

一夏はやられた事はないし、箒はまずない。

千冬にやったら殺られるからいつも迷惑を掛ける湊という案が残るがなんだかんだ言っただけにはかなり甘い茜雫はいつもチョップでの制裁が関の山。

では、他の誰かが犠牲者となっていたのだろうか。

一夏と篤は可哀想に、と抗議するセシリアと鈴を忘れて見知らぬ何処ぞの誰かを憐れんでいた。

「酷いだと……………」

茜雫がトーンを極限に落とした声でつぶやく。

幽鬼のような表情と合間つてとてつもなく怖い。

憤然と抗議していたセシリアと鈴もうツとたじろぐ。

「ただ仲介に入ったただけなのに俺はお前ら含むバカカスどもでせいで反省文100枚なんだぞ……………?当事者であり問題児でもあり元凶でもあるお前らの2.5倍ツ?一番やらかしたお前らが40枚ツ?ふざけるツ?しかも、あの後、また千冬さんに拳骨喰らって痛いしツ?たんこぶが裂傷して血が出たしツ?また包帯を頭に巻いているいろイタイしツ?ついでとか言っただけでグラブの後片付けやらされるしツ?包帯がトレードマークみたいになっちゃってるしツ?マミーマンか、俺はツ?保健室の先生には『あらまた来たの?意外とやんちゃなのね。』なんて完全に顔を覚えられて妙なやんちゃ坊主のイメージ植え付けてるしツ?また頭を洗うの苦労するしツ?……………あ、シャンプー買っておかないと……………。隠しクローゼット何故かバレるしツ?……………」

「そ、それは俺らは関係ない……………ぞ?」

「あ”あ”ッ?」

「すみませんでした。」

一夏の必死で勇気を振り絞った弁解も茜雫のヤクザも泣きながら裸足で逃げ出すような凶悪なギラついた眼力によって一蹴されてしまった。

前の実習みたいな茜雫に等も気後れしてしまっている。

ここで救世主が――

「せ、茜雫……………え、え〜と。あんまり騒いじやったら織斑先生が来ちゃうんじゃないかな?ね?」

「ハッ???」

シャルロットのあきらかに茜雫の一夏に対する反応を見て遠慮がちに忠告する。

一夏にはシャルロットが万物を救う金髪の天使に見える幻覚が見え、茜雫には千冬に身体を引き裂かれる豪鬼のビジョンが見えた。

こ  
ろ  
さ  
れ  
る



「……………うん。黙ります。」

トーンの低さは元に戻ったが、今度はテンションが大下落したため茜雫自身が倒産しそうだ。

箒は茜雫を見て面倒臭い、と結構ひどい事を思っていたりいなかったり。

「ま、まあ。お前ら二人の怪我也そんな対した事なくて安心し  
たぜ。」

一夏の気を取り直す言葉に当人たちは何故かムツとした表情になる。

「こんなの怪我したうちに入ら————いたたたッ？」

「そもそもこうやって横になっている事が無意味————  
?~~~~~?」

いきなり身体を強張らせたため傷に障り、二人は激痛に自身の  
身を痛みから守るよつに身を縮める。

こいつらバカなのか?、と一夏が呆れる。

「あんたに言われたかないわよッ?バカッ?」

「一夏さんこそ大馬鹿ですわッ?」

「うおッー？」

縮めていた身体を爆発させるかのように叫ぶ二人にすぐ近くに居た一夏がビクツと驚く。

「好きな人にかっこ悪いところ見られたから、恥ずかしいんだよ。」

「え？」

唐突に言われたため一夏はシャルロットの言葉を聞き逃してしまった。

茜雫に視線を向けると元に戻ったのか何やらこちらを見て、二ヤついている。

何を考えているのだろうか。

一夏はシャルロットに聞き返そうと口を開きかけるがそれを遮るように、

「なななに言ってるのか、全っ然っわかんないわね？　こここれだから欧州人って困るのよねっ？」

「べべっ、別にわたくしはっ？　そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ？」

そう言ってセシリアと鈴は先ほどシャルロットがお見舞い品として持って来た紅茶とウーロン茶を一气飲み。

「もうちょっと女の子らしい飲み方すればきつと誰かさんも振り向くんじゃないかなあ。」

「「ぶっ?」「」

茜雫のボソツとした言葉にセシリアと鈴の喉に流し込まれていた液体が肺からの空気に押されてペットボトルと口の間から噴き出す。

復活した茜雫はニヤニヤしながらその光景をしつかり心のシャッターをカシャカシャと切った。

しかも、ちゃっかりと自分は安全地帯に避難済み。

「うわあっ?」

「な、何をするっ?」

「汚いぞ?お前ら。」

避難どころか対処すらしたくなかったその他三人は数滴制服に掛かり、微かなシミを作ってしまった。

「ゴホツ．．．．．ゲホツ．．．．．ゲホツ．．．．．  
．．．ハアハア。何いきなり言い出すのよッ?アンタは。」

いち早く立ち直った鈴が若干距離を開けている茜雫に猛然と抗議する。



まるでマンモスの群れが歩いているかのような地響きが保健室に響き、振動によって戸棚のガラスや中の備品がカタカタと不安げな音を鳴らしている。

「なんだ、なんの音だ？地震か？」

一夏が室内を見渡したその時、

ドーン？という音と共に保健室の入り口のドアが文字通り吹き飛んだ。

それはもう、もの見事に吹き飛んだ。

外を見ようと近づこうとしていた茜雫が冷や汗垂らしてドアに歩を進める格好で固まっている。

少し歩くのが速ければ、または早ければセシリアたち共々ベットの上で寝ているだろう。

吹き飛んだドアは完全にひしゃげている。

凄まじい破壊力だ。

とっさに茜雫がバックステップで一夏たちの元に跳ぶ。

次の瞬間、茜雫がいた空間に大量の女子が埋め尽くされた。

危なかった……………

「織斑君？」

「デュノア君？」

「沙月君？」

「……はい？なんですか？」「」

鬼気迫る様子で詰め寄ってくる女子群もとい女子軍に三人は完全にビビってしまった。

ゾロゾロと……というか押し寄せるように保健室に入ってくる女子に三人はゾンビ映画の大傑作『バイオハザード』の民間人に群がるシーンが頭によぎる。

皆さんかなり綺麗な顔立ちをしているが、ここまでくるとかなり怖い。

「な、な、なんだなんだ？」

「ど、どうしたの、みんな……. . . . . ちよつと落ち着いて。」

「……. . . . . 喰われちゃうのかな。」

【これッ？】

「……ッッ！……. . . . . なにこれ」「」

ズビシッと叩きつけるように突き出されたのは一人一本の腕と

そこに握られている一枚の紙。

いきなり突き出された腕はまさにゾンビ映画のようで、突き出された紙は突如現れた白い壁のようでかなり怖い。

「なになに………」

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦を行うため、二人組みでの参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』……」

「そこまででいいからッ!！」

申請用紙を突き破るかの様に腕が何本も伸びてくる。

その光景は日本の障子を破って腕が何本も突き出す光景に似ている。

シャルロットどころか幕も若干怯えの空気を出していた。

「私と組もう、織斑君？」

「私と組んで、デュノア君？」

「お願いッ？沙月君？」

「ここまでお願いされるとこちらもなんだか悪いようで断りたくい。

二人組での参加というのはシャルロットにとってはかなり厄介な事だ。

シャルロットは周りから『シャルル』で認知されているので事情を知らない他人と組ませるのはマズイ。

一夏とシャルロットがどうしようかとパニックを起こしている  
と、

「ああ、悪いけど。一夏とシャルルはもうすでにペアを組んだ後は申請用紙を先生に提出するだけだから無理だよ。」

【えッ？】

茜雫のしれっとした言葉にこの場にいた全員が驚きの声を上げる。

「・・・・・・・・・・そうなの？」

一人の女子が代表して質問。

「・・・・・・・・・・え、ああ、そなんだよ。悪いなあ。」

違つと正直に言いそうになったのを押し込め、無理やり取り繕う。

いきなりで意味がわからなかったがここは茜雫の助太刀に感謝し、その策に乗るしかない。

実際、そちらの方が大助かりだし、シャルロットも先ほどまで



のパニックが若干収まって安心している。

女子たちははしばらく黙り込んでいたが、

「まあ、そういう事なら……………」

「他の女子に組まれるよりかはいいし……………」

「男同士っていうのも絵になるし……………」

あ、ゴホンゴホン。」

一部不純な者も混じっていたがみんな納得していた。

「という訳で解散？」

茜雫号令で女子群はまたゾロゾロと保健室から出て行く。

茜雫とシャルロットは茜雫に複数の感謝を込めた視線を送り、保健室に平和が訪れ……………」

【沙月君がいるじゃんツ？】

なかったー？

「チイイイツ??」

ビデオの巻き戻しのように戻ってきた女子群に茜雫が盛大に舌打ちをする。

「なんで戻ってくるの?このままハッピーエンドで終わろうよ

ッ？」

【私たちがハッピーになるのッ？】

「リーーツ？な、なんという自分勝手な要求……  
？女三人寄れば姦しいというが恐るべし？」

「ほう。では先ほどの私たちもそれに当てはまるのか……  
……？」

「滅相ありません。華やかな空気でしたよ、ほぐきちゃん。」

篝の氷の様な声に茜雫が背筋が寒くなる思いをしながら弁解する。

しかし、必死に謝る茜雫に魔の手が伸びてくる。

「さあ？これにサインを？サインを？」

「なにこの熱血で強引なセールスマンみたいなやり方？」

「ここにサインをするだけですよ。ね、簡単でしょ。さあ、サインを。」

「将来ご老人相手にでも悪徳商法するつもり？」

とても両者の承認が得られないであろう方法に茜雫も思わず突っ込んで行く。

「てか、俺も組む相手もう決めてるから無理？」

【……………へ？】

茜尋の言葉に「夏含む全員が驚く。

「誰かにもう誘われたの？」

先ほどとは別の女子が代表して質問してくる。

「いや、まだ。」

「じゃあ、——」

「誘われた……………というより俺から誘うほうが正しいかな。」

【ええええええええッ？】

これには先ほどよりもさらに大きな驚きが室内に木霊す。

「という訳で本当に解散。」

【そんなあ……………】

女子が口々に叫ぶが少しして諦めたのか全員がトボトボと保健室の入り口をくぐって行く。

「と、ところでセン。」

篝が少し躊躇いがちに呼びかける。

「ん？何かなほきちゃん。」

「だ、誰と組むのだ？お前は。」

微かに頬を染め、何か期待をしながら訊いてくる。

茜雫はそんな筈に頭に疑問符を浮かべるが、

「ん〜、秘密。お楽しみという事で。」

「なあ？」

秘密という事は筈ではない。

その事実が筈が打ちのめされる。

茜雫はさらに頭に疑問符を浮かべ、セシリアと鈴は筈に同情の眼を向けている。

「じゃあ、俺は用事があるから。」

「何しに行くんだよ？」

片手を振りながら保健室から退散しようとする茜雫を一夏が呼び止めると、

「え〜とねえ、『ナンパ』、という事で。」

そのまま去って行く。

意味がわからず室内の五人は固まっていたが、

「……ナンパ？」

ナンパー・ナンパとは、特に面識や交友関係のない異性（場合によっては同性）に対して、繁華街の路上や飲食店・居酒屋・デイスコ・クラブ・ゲームセンターなどで声をかけて、デートに誘う行為。「Wikipediaによると」

脱兎のごとく箒が茜雫を追って駆け出すが……

「……どつちに曲がった？」

保健室の入り口で躓いた。

夕焼けが沈みかけたIS学園のキレイに舗装され、緑も多い寮

への道のりを一人の銀髪の少女――ラウラ・ボーデヴィツヒが歩いている。

身長が低く、触れば折れそうなくらい細い身体をしているがその纏う威厳に満ちた空気はドイツ軍での呼び名『ドイツの冷氷』に相応しい。

改造された制服の格好もそうだが、その凍てついた眼光を見ただけで軍人とわかってしまうほどだ。

そんな小さな身体でありながら強者の部類に入るであろうラウラは今、顔にありありと不機嫌を表していた。

理由は三つ。

最初の一つは言わずとも織斑一夏の存在だ。

あの程度の軟弱な男があのも最強である『織斑千冬』の弟などと絶対に認めない。

これが無条件で『織斑千冬』に近し存在である織斑一夏への嫉妬だと分かっても止める事など出来ないしする気もない。

二つ目が織斑一夏とは別のあの男。

もう一人の男子ISS操縦者――沙月茜雫。

織斑一夏とは違い素性も経歴も不明。

ここの教師であり『織斑千冬』の親友である沙月湊の弟らしい

が素性経歴が不明な事からおそらく義弟だろう。

IS学園で起こった襲撃事件まで知られず、突如存在が確認。

しかも、使用している圧倒的な火力を無尽蔵に誇る専用機は何処のメーカーどころか何処の国なのかも特徴がどのISかも一致せず所属不明。

外界ではあのISはかのISの開発者であり大天才の『篠ノ之束』が造った専用機という噂が流れ出しており、結果、沙月茜雫、その専用機双方を世界が喉から手が出るほどの存在となっている。

噂とそれを裏付けるような圧倒的な戦闘力と沙月茜雫の何処の国にも所属していない事実。

各国は必死にうちの国に来てくれないかと勧誘するが相手にもされず、諜報員を日本に送り込んでも肝心の専用機を全く使用しないどころか直ぐに感づかれているらしい。

IS委員会も本人に出頭を求めるがいつも口先だけで追い返される始末。

あの飄々とした顔をしながらもあの時の眼。

絶対強者の眼だった。

思い出しただけでも微かに身震いする。

あれだけ惨敗したのは千冬がドイツ軍の教官をしていた頃の近接格闘の模擬戦以来だ。

連戦のせいだ、と言いつい訳はいくらでも出来る状況だったラウラだが万全の状態でも勝てたと断言出来ない。

奥底を読む事の出来ない不信感。

それにあの男．．．．．やはりあの時見た『あの男』に非常に酷似している。

しかし、それ以外に何故か微かに奇妙な近親間を感じか気がする。

その二つの感情が混ざって理解が出来ず、気持ちが悪い。

そして、最後に．．．．．

「おい？そろそろ出て来たらどうだ？」

ラウラは突如後ろを振り向いて叫ぶ。

その際に綺麗な輝く銀髪が扇状に広がり、と怒声により空気が震えた。

さつきから尾けられていた。

気がついたのは数分前。

きっかけは特にない、というより向こうから気配を出して来た。

始めてそれに気づき、存在を暴こうとした瞬間霞のように気配



が文字通り空気に紛れる。

軍人——しかも、ドイツ軍でISを数機保有する事実上ドイツ軍で最強である部隊の隊長であるラウラが探し出せないほどの玄人。

暗殺をさせればかなり厄介となるだろう。

先ほどから気配を出したと思ったたらまた消え、消えたと思ったら出てくる。

まるで幽霊と相手をしているかのような薄気味悪さを感じて不快感が湧き出てくる。

しかし、違和感も……………

（なんだ？迷っている感じがする……………）

最初気づいて以来気配を出した時にラウラがその方角を向くと慌てて気配を消す。

まるでいつイタズラを告白しようか迷っている悪ガキのようだ。

一応、人気のないところを選んだため、今度はすぐさま声を掛ける事に成功する。

「……………」

長い沈黙。

その沈黙に耐えかねたかのようにまた気配が空気に溶け込んだ。

しかし、ラウラは尾行者が居たであろう建物の角をジッと見つめ続ける。

やがて、降参とでも言うかのようにまた気配が現れ、ラウラが睨みつける建物の角――からではなく道を挟んだ反対の木の影から出てきた。

ラウラは自分が思い違いして居た事と、出て来た人物の両方に驚く。

「貴様は……………?」

その人物はツカツカとこちらに音もなく歩み寄る。

「――」

「……………え?」



二十九話 誘策（後書き）

何か言いたい事があつたら要望でもなんでもどうぞ

三十話 騷朝（前書き）

遅くなつたが短い  
すみません

茜雫は薄く暗い空間に浮かぶように立っていた。

足の裏が氷土のような冷たいコンクリートの地面を踏み締めている。

自分の前に一人の少女が立っている。

薄暗い微かな錆びれた蛍光灯の光しかないのにその少女はくつきりと切り取っているかのようにその存在が眼に映る。

目鼻立ちの整った秀麗な顔に色素の少ない銀に金を少し垂らしたような銀髪。

眼も透き通る水晶のような透明さを持つ銀眼。

可愛らしさと凛々しさが同居したような秀囲気を持っている。

見たことはある。

話したことがある。

触れ合ったことがある。

でも、誰なのかは覚えていない。

忘れてしまった。

なのに、懐かしさと愛おしさが胸の奥に今にも掠れて消えそう  
なぐらいおぼろげに感じる。

少女が何か口を動かしてこちらにしきりに話しかけてきた。

何も聴こえなかった。

何か話しているはずなのに、自分の耳から零れ落ちるかのよう  
に音が聴こえなかった。

耳を済ましてみても、やっぱり何も聴こえてこない。

キミは誰？

なんの捻りもない率直な質問。

何も返答はなかった。

代わりに少女は今にも泣きそうな顔になった。

キミはなんで俺のことを知っているのか？

今まで疑問だったことをぶつける。

少女は何も答えない。

泣きそうな表情はそのままだったが今度は微笑みを返してきた。

しかし、その姿は今にも崩れて消えてしまいそうなほど儚げだった。

なんでキミがココにいる？

少女がココにいない筈。

いや、この少女はもう存在しない存在の筈だ。



なぜなら――――

少女がまた、何か口を開きかけた。

その時、突如少女の背後で爆発が起こった。

目が眩むような閃光。

あまりの眩しさに茜雫は腕を顔の前に交差する様に掲げる。

ここで気づいたことがあった。

これは『あの時』の状況に非常に似通っていた。

衝撃が身体を通り過ぎる。

目はもう開けても大丈夫な筈だが、開けたくなかった。

自分が何時の間にか何かを抱きかかえていることを感覚で理解できた。

今、考えてしまっていることがある外れていることを願った。

もし、予想が正しければ、また、『見てしまっ』。

もう嫌だ。

見たくない。

それでも目を開けた。

状況を確認。

少女は確かに近くにいた。

自分の腕の中に少女がいる。

触れれば折れてしまいそうな華奢な身体。

ここで気づいた。

自分の腕を中心に身体が濡れている。

なんだこれは？

確認するまでもない。

少女の胸に何かの鉄片が突き刺さっている。

噛みしめるように見開いていた目から涙が滲み出た。

その涙をそっと拭うように少女の細い繊細な指が頬をなぞる。

少女が弱々しく優しく微笑む。

『—————』

小さく口が動いた。

聞き逃すまいと耳を済ます。

結局今回も何も聴こえなかった。

茜雫はハッと目が覚めた。

自分は身体を縮めるような体制で横になっている。

誰も使っていないベットと入り口へと続く玄関が見えた。

この横向きの光景は何度も見たことのある。

ここはどこだ？

ベッドの質感やアンティークの配置から一年生の寮部屋の自分の部屋だという事を理解した。

しかし、いつもの朝より暑い。

自分は寝ていたらしい。

少し安心するが身体が怠いし、寝汗でが酷い。

しかも、おかしい夢を見たせいで呼吸が荒く頭がボーッとする。

最悪な目覚めだ。

頭が上手く回らず、茜雫はいつもと違う既視感を覚えて、そのままの体制で虚ろな目で視線だけを下に向けた。

誰かがいる。

この部屋は茜雫一人しか使っていない筈。

手のひらを広げて、こちらの顔めがけて腕を伸ばしているところだった。

「ーーーーーッ？」

茜雫は何も考えずに上体を素早く起こし、自分の薄い夏用の布団を相手の顔に叩きつけるように被せた。

いきなりの行動に相手はなんの防御も出来ずにそのままの顔に布団を被った。

「—————は？」

まるで意味が理解出来ないような抜けた声が聞こえた。

不安定なベットの所で茜雫は左手でベットを掴んで身体を固定し、右手でバランスを取り、左足を軸にした回転を効かせた戦斧のような右脚の風を切るような蹴りを繰り返す。

目隠しをされ、なんとか布団を頭からどけた相手はいきなり開けた視界に映った唸るような蹴りをよけられる筈もなく腹にクリーンヒットした。

もしかしたら腹にいきなり生まれた衝撃と痛みどころかなにをされたかさえ理解出来なかったかもしれない。

「げえツ？」

ヒキガエルを思いつき踏んづけたような声と共に茜雫の右脚に確かな手応えが身体の真まで強く響いた。

蹴った感触からしておそらく体重は60数kg程度の成人に近い男。

身体全体が程よく軟弱ではない程度に鍛えられているため筋肉によって少し重い。

朝一番の渾身の蹴りは鳩尾の急所には当たらず、硬い腹筋のと

ころに当たってしまったようだが、それでも凄まじい勢いの蹴りに相手は1mほど吹っ飛んで盛大に尻餅と床で頭を打っていた。

「ぐはっ？」

茜雫はその結果を確認するよりも早くも不安定なベットの上の無理な体制からの蹴りによって崩れた体制を素早く立て直す。

相手が起き上がるよりも早く、馬乗りになるように飛びかかりつつ拡張領域パス・スロットに量子収納して置いたアメリカの警察などの法執行機関などが多く使用している17発装填可能なオートマチック銃1ー17グロツク17を左手に展開。

着地時に大の字に倒れた相手の右手を左足の踵で動かない程度に踏みつけつつ足先で、右足を屈める形で曲げてその右足の脛と床で相手の左腕の二の腕を挟むように着地。

これで相手は完全に起き上がれないまま両手を使えず、こちらは両手が使える状態となった。

相手の顔も確認せず、茜雫はグロツク17をその額に押し付けたままスライドを引く。

ジャコンという無機質な音と共に初弾を装填された。

「  
．．．．．ハア．．．．．ハア．．．．．  
．．．．．ハアハア。」

先ほど寝覚めが悪い状況で息を整えていなかったため呼吸が荒かった。

おかげで頭に酸素が上手く渡らず思考が浅い。

「せ、茜雫？」

また、声が聞こえた。

高い声だ。

今度は茜雫の右からした。

まだ他にもいたのか。

茜雫は片手でも操作できるブラジルのタウルス社製の銃身にあるベンチレーテッドリブと、反動を抑えるフルレンジスアンダーレグが特徴的な大口径リボルバー銃――タウルスレイジンを右手に量子展開。

茜雫は左手のグロック17を倒れた方の額に押し付けたまま右手のタウルスレイジンを横に立っている相手の声の位置から判断した額付近に銃口を向けつつ、親指でハンマーを持ち上げる。

このまま両手の銃の引き金を引けば銃を向けられた相手はどちらも顔をスイカを爆発させたかの様に破裂するだろう。

タウルスレイジンを向けられた相手が慌ててその銃を取り上げようと一歩踏み出した。

が、

「……………あ、ああ。」

眼を合わせた瞬間、相手が怯えて身を竦ませた。

その顔に驚きと恐怖を浮かべて動けなくなっていた。

初めて全体像を確認。

横に立っていたのは金髪をうなじ付近で結んでいる中性的な顔立ちの男子生徒の格好をしていた。

見覚えが有り過ぎる。

「……………ん？」

今度は首と視線を自分の真下に向ける。

黒髪黒目でアジア特有の黄色がかった肌色の肌をした若干ワイルドという文字が当てはまる日本人が額の銃を押し付けられた状態で寝っ転がっている。

「……………」

「……………何やってるの？一夏？」

「……………俺のセリフだ。何しやがる。」

蹴り飛ばして銃を向けた相手——織斑一夏は冷や汗を薄っすら額に浮かべながら呆れ口調でツッコム。

その目は先ほどの蹴りがよほど痛かったのか少し涙目だ。



状況を半分理解したところで首と視線をもう一度横に向ける。

そこには困惑した様子で立っているのはやっぱりシャルロット・デュノアだった。

「おはよう、シャルロット。」

「……………お、おはよう、茜雫。」

当然何がなんだかわからなくなってきたシャルロットはとりあえず挨拶を帰す。

銃を向けたままの状態での挨拶は第三者から見ればとてもシュールな光景だ。

「ここで」「さようなら」と言った方がしっくりくる。

もう一度顔を一夏の向け、

「一夏もおはよう。」

「額に銃を押し付けたままいう言葉じゃねえよ。早くどいてくれ。」

「うーん、挨拶ぐらいちゃんと返して欲しいなあ……………ま、言われてみればその通りだ。」

茜雫は一夏の真っ当過ぎる言い分に少し不満げに返しながらも身体をどかす。

「いててて、お前本気で蹴りやがったな。」

「本能って怖いよね。そして、とても便利だ。」

「人間の大事な反応を言い訳に利用すんな。」

さつきまでの空気と180度違う軽い漫才を自然とする二人にシャルロットは全くついていけない。

「何しに来たの？人の部屋に侵入して。二人して夜這い？」

暑いと思ったらどうやら窓を閉めっぱなしで逆にカーテンを開けっ放しにしていたらしい。

目覚めの朝日は寝覚めの悪い茜雫には吸血鬼に太陽を浴びせるのと同義の様なものでキツイ。

「ちげえよ？」

「あ、そうか。」

「分かったのか。」

茜雫の納得の早さに一夏はホツとした。

「もう朝だから朝這いか。」

「そっという意味じゃねえ？」

相変わらずだ。

やっぱりいつも道理の茜雫に一夏少し安心するがある意味安心できない。

「冗談だよ。ちょっと寝汗が酷いからシャワー浴びてくる。」

「そうした方がいいかもね。背中凄いよ。」

マジですか。

シャルロットの指摘に少しショックを覚える。

大問題。

汗びっしょりな姿など朝から女の子に見られたくはないものだ。

不衛生モードを解除するべくシャワーを浴びるため、早急に準備に取り掛かる。

茜雫は欠伸をしつつ寝癖のついた頭をガシガシ掻きながら着替えを取るべくクローゼットに向かう。

「そういえば、セン？」

「何？」

「なんかうなされてたけど大丈夫か？」

「……………ああ、大丈夫。所詮夢だから」

ら。」

そう、あれは夢。

たかだか頭が勝手に創り出して睡眠中暇つぶしに脳内で投影している妄想に過ぎない。

なんの問題でもない筈だ。

「本当か？」

「．．．．．珍しいね。一夏ならいつもならもっとあっさり引くのよ。」

「いや、なんて言うかお前——」

「一夏が言おうかどうか迷っているかの様に言いよどむ、」

「なんか怯えてたみたいだったからさ。」

「．．．．．」

ピタッと頭を掻きながらフラフラ歩いていた茜雫の動作が止まった。

まるで文字通り時間が停止してしまったかのようだ。

微かに目を見開いた状態で動かなくなっている。

「茜雫？」

シャルロットの気遣わし気な呼びかけにピクツと反応して動きだし、またフラフラ歩いてクローゼットのドアを開けた。

「……………少しおかしいな夢を見ただけさ。俺だって悪夢の一つや二つぐらいたまには見る事だってあるよ。」

衣類を取り出しながらこちらに顔を向けない茜雫に一夏は少し心の何処かで引っかかりを覚えるが、

「そっか。」

深く入り込む事が出来なかった。

あまり深く入り込むと何かのバランスが崩れるようで怖かった。

茜雫は着替えを取り出し終わるとシャワー室へと歩き出して行く。

ピタツとまた茜雫が歩みを止める。

「……………」

こちらをくるっと振り向く。

茜雫が至極真面目な顔つきで、

「覗かないでね。」

「えええ？」

「の、のぞかねえよ？」

シャルロットはまさか真面目な顔でそんな事言われるとは思わず、シャルロットの件で前料のある一夏は焦った。

「ふ~~~~ん。」

「な、何だよ。」

疑いのジト目を向けてくる茜雫の一夏とシャルロットがたじろぐ。

たつぷり3秒見つめ続けると、今度はニヤツとガキ大将のようなイタズラな笑みで、

「いゃん、一夏のえっちい。」

「」「ぶツ??」「」

聞き覚えのあるー！ー！少し違つが聞き覚えといい覚えの有る言葉に二人が揃って噴き出す。

「お、お前なんで……………」

「何ででしょう?？」

あきらかに狼狽する一夏と顔を林檎のように真っ赤にして言葉の出ないシャルロットに茜雫は柔らかく微笑む。

どちらかといえば女顔の茜雫がやるとその微笑みはとても魅力的でシャルロットをはじめ、同性の一夏も思わずドキッとしてしまった。

「だ〜いじょうぶ、大丈夫。心配するなつて。」

踵を返して言い放ったその言葉は、先ほどの一夏の質問の対してなのか一夏がシャルロットシャワーを計らずも覗いてしまった事なのか。

シャワー室へと歩き出して行く茜雫の表情が見えず、二人には判断が出来なかった。

茜雫はそんな二人を置いてシャワー室へと退散。

カチャッ、とドアを閉める。

「やれやれ。」

ガチャリ

茜雫は他者の侵入を拒むためにしっかりと鍵を閉めた。

あの夢はもう何度見ただろうか。

俺は . . . . .

あと何回彼女の死を見ればいい？



「——い、せん」

声が聞こえる。

「おい？セン？」

「うわっ？なに、一夏？」

「いや、だからセンは誰と組んだかって話って……」  
「……本当に大丈夫か？お前？」

どうやらボーツとしていたらしい。

「ああ、ごめんごめん。ほんと大丈夫だから気にしないで。で、俺が誰と組むかって？」

現在、シャワーを浴び終えた茜雫は一夏とシャルロットの三人で食堂で朝ごはんを食べている。

目の前の白米が輝かんばかりに湯気を立ち上らせて食欲をそそる。

シャルロットのこんがりとしたキツネ色に綺麗に焼かれたパンもとても美味しそうだったが、今は日本食が食べたい。

いつもならここに箸がいるのだがここ最近、朝稽古に力を入れているらしい。

学年別トーナメント戦に向けての鍛錬だろっからぜひとも当たって欲しくないものだ。

というか、最近なぜか幕の茜雫に対する態度が冷たい。

視線が痛い。

眼球に銃口が空いているのではないかとこの頃思う。

目から光線みたいな感じで弾丸如く鋭い針がズバババつと発射させている感じ。

痛いなんのつて精神的にかなり痛いしイタイ。

相談しようにも一夏など論外だしセシリア、鈴、シャルロットの女三人に訊いても「自分で考えれば」と同じく冷たいお言葉をいただいでしまった。

わからないから訊いているというのに何とも薄情なものだ。

仕方なく放置しているのだが、昨日はとうとうロケットランチャークラスになってしまった。

あのサイズの榴弾が頭に入る筈がないのだが、それぐらい視線がキツイ。

視線で死線を突破しそうだ。

ヤバイヤバイ。

朝からのあまりの精神的疲労で思考が一夏に退化してしまいうだ。

「ここで話を戻すが、

「うん、だって茜雫、僕たちにもまだ教えてないよね。」

「前に当日まで秘密って言ったじゃん。」

「当日だよ?」

「へ?いつ?」

「今日。」

「何の?」

「トーナメント戦の組み分け発表の事かな。」

「それなら学年別トーナメント戦の当日の筈だ。」

「学年別トーナメント。」

「へ〜〜〜。」

「茜雫は視線をそらして味噌汁をすすった。」

「今日も味噌のさじ加減が抜群で美味しい。」

「今度訊いてみようかな。」

「お前忘れてたのかよ……………」

「なるほど、昨日宿題の課題が少なくて、ヒヤッハー？イーヤ  
ハアー？グレイトオツ？、とか一夏が喜んでいたのはそのためか・  
・・・・」

「そんな奇声を上げた覚えはありませんッ？」

「一夏、なんか敬語になってるよ。」

ツッコミに集中しすぎて声の大きい一夏をシャルロットがなだめる。

茜雫が周りを確認するとちらほらとこちらに注目している方が数組。

恥ずかしいので自重する。

「まあ、とにかく組み分け見るまで秘密だ。驚くぞ、お前ら。」

「なんか心配。」

「僕も。」

「残念な奴らだ。」

「お前に言われたかねえ？」

茜雫は一夏のやかましいツッコミを適当に流してポリポリとつす黄色のタクアンを齧る。

漬け具合がヤバ過ぎる。

人間国宝だ。

さすが国際 . . . . . といつか日本が世界に押し付けられて国営しているIS学園。

雇っている方々がとても優秀だ。

周りを見渡しても細かいとこまで無駄な税金を使ってる。る。

その無駄な税金を賄っている他の男の諸君が見たら暴動が起きそう。

まあ、起きてても世界の自業自得だが。

何となく周りを見ると、女子がまだこちらを見ている。

『優勝』とか『付き合っ』とか聞こえてくるが、その興味は夏達の話に掻き消された。

「なんかさあ、クラス対抗戦を思い出さない？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・思い出したくない。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・よく考えたら俺も。」

「何があつたの？」

目の前の電子掲示板には多数の生徒が野次馬よろしく群がっていた。

しかし、なんか前より一段と騒がしい。

野次馬諸君も参加するからだろうか。

一ヶ月前のクラス対抗戦の時もこうやって野次馬に巻き込まれないように遠くから電子掲示板を見ていた。

あの時は、初戦で一夏が鈴と当たるは、変なのが乱入してくるは、茜雫は厄介ごとの処理を押し付けられるなどあまりいい思い出ではなかった。

一夏はもちろん茜雫も転入早々のイベントで見学してるだけで

楽チンと思っていたらの面倒ごとで、これからの行き先を示しているようで、いい感じがしなかった。

しかも、各国の面倒なお偉いさん方に『エネミー』と茜雫自身の存在がばれてもう踏んだり蹴ったりだ。

「……………そんなになるくらい何かが起きたの？」

二人してズ〜〜〜んとなったのでシャルロットも少しためらう。

「まあ、簡単に説明すると――――」

「うんうん。」

細かな説明は茜雫に任して一夏は目を凝らして自分の名前とシャルロットの名前を電子掲示板から探し出す。

「お、シャルル。みつけたぞ。」

「え、どこ？」

茜雫は説明を中断してシャルロットと共に電子掲示板に目を凝らすと、

「Aブロックの一番……………一番最初の試合だね。」

「相手は……………ラウラじゃないみたいだね。」

シャルロットの報告に一夏は少し残念な様子。

さつさとラウラと戦いたいようだ。

「てか、敵さんもご愁傷様。専用気持ちペアと当たっちゃうなんて。」

「まあ、そこは仕方なんじゃないかな。一夏？」

シャルロットが自分たちの分が見つかったというのに今だ電子掲示板に目を凝らしている一夏に気づく。

「んー。茜雫のがない。」

「え、マジで？やった〜。」

「ダメじゃないかな。でも、本当にないの？」

茜雫が出場したらいけないなどと通達がないため書かれていないとおかしい筈なのだが、なかなか見つからない。

「ふっ、神の御召しさ。」

「ずいぶんくだらないを叶えてくれたな、神様。別の事願った方がいいんじゃない？」

おそらく墮落の神様だろう。

天や善ではなくダメ人間へと誘うダメな神様。



どんなのだろう。

「あ、最後のブロックにあったよ。」

「チイイツ？使えねえ？神様？オーマイゴットじゃん。」

「舌打ちッ？」

何とも神様に罰当たりなやつだ。

せつかくサボれると思ったのだが期待していた分ショックでたまらない。

やっぱり神様なんて当てにはならないらしい。

「え〜と、ペアは……………え？」

「どうしたシャル……………おい。」

「なに？」

いつもの表情に戻った茜雫は一夏の咎める様な視線を受け流す。

「何だよこれ。」

「びっくりしたでしょ？」

「すくくな。」

一夏たちの存在に気づきはじめてた女子がまた一段と騒ぎ出す。

特に茜雫を見て何かショックを受けている様子の女子生徒が多数いる。

数少ない男子生徒が自分から誘ったのが『あの子』だからだろう。

三人の視線の先に有る電子掲示板には『沙月茜雫』という名前の隣——同じ枠のペアの空間には、

『ラウラ・ボーデビッツ』と提示されていた。

三十話 騒朝（後書き）

原作から大きくズレていきます

急ぎで投稿したので何かおかしい点があったらマジで教えてください

羞恥を晒したくないので……………

あと感想もよろしくお願いします

寂しいです

少し追加修正しました

三十一話 独逸(前書き)

なんかお気に入りが減っている……………？  
何か変なこと書いたっけ……………心配

あとがきにアンケートのお知らせがあるから最後まで読んで下さい

## 三十一話 独逸

IS学園の大型の電子掲示板の前には普段の数倍近い大きな人だかりができていた。

『ラウラ・ボーデビィット』

『沙月茜雫』

一夏達の目の前にある学年別トーナメント戦の組み分け票が書いてある電子掲示板には確かにそう掲示されていた。

もちろん、他の人の名前も同じ掲示板にたくさん書かれていたし、前記の該当者も参加するのだから普通ならどこもおかしい筈がない。

ただ一つ . . . . . というより、いくつか  
の問題の中で一番問題で有る事が . . . . .  
. . . . .

その二つの名前を表す文字の羅列は同じ枠の隣同士に仲良く並んでいることである。

この意味は . . . . .

IS学園でたった二人の男子生徒である沙月茜雫と組むのはラウラ・ボーデビッツヒということ

しかも、茜雫は大多数の女子誘われた際に、

『もう組む相手、決めているから』

そう言っつて茜雫は誘いを断っていた。

そう言われた女子生徒たちはてっきり幼馴染である篝と組むものだと勝手に納得していたのだが、最近の茜雫に対する態度が冷たい . . . . . というか普段からぶすつとした人付き合いの苦手そうな態度なのだがいつも増してひどかった。

篝が茜雫のことを好いているというのは周知の外だ。

あの『沙月茜雫』と組めたというのならもつと喜んでいる筈なのだが、茜雫への視線が少し冷ややかで剣道部での練習でも鬱憤を晴らさんが如く力を入れて稽古している。

主に先輩方が一年である筈の強さに立つ瀬がなくちよつと落ち込み気味だ。

筈が茜雫と学年別トーナメント戦のペアを組んでいないということは分かった。

では誰が組んだのか、と言われると該当者が一人も出てこない。

同室のニーナ・エニックスが皆に押されて筈に訊いても不機嫌全開の知らないで返されてしまった。

そんなこんなで茜雫のペアは誰かと騒いでいたのだがまさか茜雫自身が自ら誘ったのがあのラウラ・ボーデビッツヒだというのが皆をさらに騒がせるのに充分だった。

現在、転校早々様々な遺恨を残しまくっている件のラウラと組んだ茜雫は360度全方位から視線の嵐に見舞われている。

周りでヒソヒソ話されてかなり居心地が悪い。

「……………で。セン。」

「なにさ、その浮気を問い詰めるようなイタイ目は。てか、場所変えない？視線が身体中に刺さりまくってとても痒いのですが。」

「なんでラウラと組むことになってるんだよ。」

茜雫の訴状は一夏には取り扱われなかった。

一夏のくせに………？などと茜雫がかなり失礼なことを考えていると、

「組む相手がなくて抽選、ってわけじゃないよね、これ。周りにあれだけ誘われて突っぱねてたんだから。」

シャルロットまで加わってきた。

一夏のように問い詰めると言った感じは薄く不思議そうに訊いてくるがそれでも隠しきれしていない。

やはり、シャルロットもラウラのあの暴虐を見てあまりいい印象を抱いていないようだ。

まあ、あれを見せられて好いてくれ、という方が無理があるが。

「うん、俺から誘ったよ。銀髪のおの子。」

表情を全く崩さずいつも通りの茜雫に一夏は少しむっとくる。

「なんであんなのと組むんだよ。筈でよかったんじゃないのか

？」

「あんなのって………。」

一夏のもの言い方に茜雫は呆れてしまう。



一夏の性格ならラウラの横暴な行為が許せないのは分かるが……

「でも、どうやって誘ったの？ラウラって私は一人でいい、とか言っただけでも断りそうなのに。」

シャルロットに不思議そうに尋ねられて茜雫はこめかみをグリグリと揉みほぐす。

「うっっん。なんか、説明がめんどくさいなあ。なんて言おうか。」

「お前なあ。」

今度は一夏が茜雫に呆れてしまった。

ほどなくして茜雫がポンッと手を打つ。

茜雫は白く清潔な包帯を巻かれた頭に光る豆電球が浮かんでいるのを一夏とシャルロットは確かに見た。

「よし、めんどくさいから回想で説明しよう。」

「はい？」

「はい？始まり始まり。ほわん ほわん ほわん ほわん  
ほわん。」「

「必要？それ？」

「お前は……………」

ラウラは木に影から現れた黒髪の人物に驚きで目を見開く。

十数mの距離を歩いているのに僅かな時間で音もなく一気にラウラの目の前まで詰めた相手にビクツと身構える。

気がついたら目の前にいる、そう錯覚するほどの気配のさせない足運びだった。

「……………」

「俺と組んで。」

「……………え？」

意味のわからない言葉と共にいきなり視界が真っ白になった。

あまりのことにラウラは驚きと頭がついていけずに間拔けな声を出してしまう。

ハッと気づき、頬を赤く染める。

それを隠すために顔を傾け夕陽が顔に多く当たるようにすると、ラウラの白く人形のように整った肌が赤く映えた。

そして、その白い壁を睨みつける。

「・・・・・・・・・・・・・・・・なんだこれは？」

「文字の羅列。」

「バカにしているのか？」

そんなもの鼻がつきそうなほどの距離に突き出された文字通り目の前の紙を見れば分かる。

しかし、近すぎて何が書かれているのかまでは読み取れない。

自分が一步下がるのも馬鹿らしいためラウラは黒髪の人物……茜雫をさらに殺気を込めて睨みつける。

すると、茜雫はうつとしたバツ悪そうな顔になり、ラウラに突き出した一枚の紙を少し離す。

「睨むなら紙にしてくれないか？そんな眼力で睨まれたら顔に穴が空く。」

「睨まずに空けてやろうか？」

そう言っただけなら眉間の力を抜き、鈍く黒光りする小さなオトマチツク銃を茜雫の眼前に構える。

茜雫の顔に若干余裕がなくなるのがラウラに分かり、昼間の乱闘騒ぎでの茜雫と比べて見ると面白いことに無意識に気がつく。

「洒落にならない。本当に死んじゃう。」

「貴様は死ななそうだがな。」

「なにを根拠にそんな物騒なこと言ってるのかな．．．．．  
．．．．．？てか、顔に向けるのは目線だけで銃の照準<sup>サイト</sup>越しじゃなく  
くていいから。ああ、だからって紙越しに脇腹狙わないで．．．．．  
．．．．．。申請用紙一枚しかないんだから。」

あきらかにズレたことを言う茜雫にラウラの先ほどまでの警戒心はとうに失せていた。

その眼には昼間の冷たい感じは成りを潜めており、今は気の抜けたような眼をしている。

「申請用紙？」

「あれ？知らないのか？」

「何だそのドヤ顔は．．．．．。」

本当は茜雫自身もさつき知ったばかりなのだが、ここは黙って

おくとする。

また銃を突きつけられたらかなわない。

それを悟られる前に茜雫は申請用紙の表を自分に向け、

「今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、二人組みでの参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は……………」

「どうした？」

いきなり読むことをやめた茜雫にラウラが怪訝そうに尋ねる。

何か不都合なことでも書かれているのか……………と思ったが、

「いや、なんか全部読むのが面倒だからここまででいいやと思つて。」

「……………ずいぶんと次が気になるところでやめるんだな。しかも、見た目と違って中身はズボラなものだ。」

「俺の見た目でどんなイメージを抱いているのかとても気になるのですがなんか傷つく予感がするのでスルーしとく……………」

ラウラはここで見た目が男らしい覇気がないと言ったらどうなるかと好奇心に駆られたが、このままだと話が進まないなので自分の

奥底にとどめて置いた。

もし、ここでラウラがここで思ったことを口に出していたら茜雫は結構落ち込むところだった。

茜雫の先ほどの説明とその説明が書かれた申請用紙をこちらに寄越したということは……………

「貴様と私がペアを組め、という解釈でいいのか？」

「どっかの誰かさんと違って察しがいいと無駄な説明がなくていいね。まあ、簡単にいうとそうだね。というわけで俺と組んで、眼帯さん。」

聞き捨てならない言葉があつた気がした。

「眼帯さん……………?」

「名前覚えられないし。ドイツ語って発音がちょっと難しいよね。」

「日本語の発音が世界の中で単純なだけだろうが。」

ラウラも日本語を覚える際に他国と発音形式との違いにずいぶん戸惑ったものだった。

「……………まず訊くが。なぜ私と組む? 貴様のようなやつなら組む相手などよりどりみどりだろ?」

「一夏とシャルルは二人で組むからハブれた俺は一人なので。」

「そうか、断る。」

「ストレートに断られるとキツイものがあるな……」

全く気にした様子もない茜雫は表情を崩さない。

断られることぐらい想定済みだ。

「理由は？」

「私と組む理由がないからだ。」

「いや、やっぱりトーナメント戦やるなら優勝したいから。」

「意味がわからないな。」

茜雫の根拠のない理由にラウラは眉を顰める。

「男の子だから。」

「なら女の私には生涯解読不能な理由だな。」

ラウラはもう用はないとばかりに踵を返し、その威厳に満ちた靴音を周りに微かに響かせてそのまま立ち去ろうとする。

六歩進んだか進んでないかのところで、

「一夏と闘いたいんでしょ？」

そんな声が背後から聞こえた。

ラウラが振り向くと、表情こそさつきと変わらず飄々としていたが、その声には立ち止まらせるだけの何かがあった。

「何？」

ラウラも無意識に警戒し、声色が少し低くなった。

茜雫もそれに気がついたが動じるわけもなく、

「一夏と闘いたいんでしょ？」

さつきと同じ言葉をまた繰り返す。

「だからなんだというんだ？」

「俺が一夏と対戦することになったら俺は一夏を躊躇なく倒すよ。優勝したいから。そうなるとキミが一夏と公然と闘うことになるのはいつになることやら。」

「貴様と組めば織斑一夏と闘える確率が大きくなる、そう言いたいのか？」

「話が早くて助かるね。それにペアのいない人は抽選で組むらしいけど下手に他の人と組んで足を引っ張られて負け、なんて嫌で



しよ？俺は一夏と闘いたいわけじゃないからキミの邪魔をしない。別にキミに不都合はないでしょ。」

茜雫は薄ら笑いとも取れる表情で話しかける。

「それに一夏みたいな甘ちゃんになんか負けるの癪だし。」

「意外と言いようが酷いな。」

ラウラは別に他の人と組んでも足を引つ張られて負けることなどないと思い、断ろうとするが茜雫が一夏と当たった場合は確実に茜雫が勝つだろうと思いとどまり、

「……………いいだろう。貴様と組んでやろう。ただし、私の邪魔はするな。」

「りょーかい。あ、でも殺すのは無し。そんなことしたら千冬さんに俺も殺されるし、悲しむよ。あの人。一夏はたった一人の肉親だし。」

ラウラは脅すつもりでドスを効かせた声で言ったが、茜雫に笑って返されてしまった。

「……………無論だ。それと……………」

「なに？」

ラウラから話しかけられて茜雫は少し驚く。

「三つほど言いたいことがある。貴様は教官の何だ？沙月湊は

幼馴染だが貴様は沙月湊の義理の弟だろ？ずいぶんと教官を慕っているな。」

ラウラの問いに茜雫は目を微かに細めて微笑う。

「……………あの人たちは俺にとって命の恩人みたいなものだからね。」

ラウラはもう少し深く聞こうとするが自分にはそれほど茜雫の過去など関係ないと思い、次に移る。

「私の名前は眼帯でもキミでもない。ラウラ・ボーデビィッヒだ。いい加減覚える。」

「ラウラ・ボーデビィッヒ ラウラ・ボーデビィッヒね。はいはい。」

茜雫はその名前をねじり込むようにこめかみをグリグリと揉みほぐしながら繰り返し呟く。

「……………ラウちゅ。」

「……………ブツ？」

湊と同じ呼び方を試しにボソッと呟くと虚を疲れたラウラは噴き出した。

珍しい光景だと茜雫が感動していたが、ゴツと何かが眉間に突きつけられる。

「コロス。」

「はい？すみませんでした？ボーデビッツヒさんですよ？もう完璧に覚えましたから黒光りする硬い銃口で人の眉間をマッサージしながらその引き金に力込めるのやめてください？」

生憎不死身とかこの距離で軍人の放つ銃弾を避けるなどの便利スキルを持ち合わせていない茜雫はプライドなどドブに捨てて謝った。

「……………ふん。まあ、今はいいだろう。」

「今は？」

ではこれからどうなのか、などと訊けなかった茜雫は自分のお先がただでさえ夜道の街灯程度の明かりしかないというのにそんな数少ない灯りがさらに少なくなったのを確かに見た。

もう、何が起きてもおかしくはない。

「……………三つ目は？」

「貴様は何者だ？」

茜雫の表情が少し硬くなった。

まさかこんな質問がくるとは思わなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・どこにでもいる高校生。」

「嘘をつくな。普通の高校生が世界最大威力の対戦車ライフル銃を所持しているわけがない。」

わあ、何にも言えねえ。

茜雫はひとしきり頭を捻り、上手い言い訳を考えようとするが、

「うーん、そうだなあ。」

取り合えず世界を回っていた時の事を思い出す。

「『狗』、ってよく呼ばれたかな。」

「いぬ？つと言つと軍か？」

よく軍の犬、と言つがこいつもそうなのだろうか。

ラウラが訝しげに聞き返す。

「軍の犬ねえ。当たらずとも遠からずって感じだね。他に言えるとしたら・・・・・・・・・・・・・・・・」

開き直すことにする。

少し、これを言おうか迷つが言つて分かるかどうかはラウラ次

第だ。

「『世界一優秀な兵士の定義』に当てはまる存在かな。」

それを聞いてラウラは茜雫の言葉を鼻で嗤う。

「ハッ。それは流石に思いがりではないのか？貴様の能力が高いのは分かるが自信が過剰すぎるのは虚勢にしかならないぞ？」

嘲笑うラウラの冷たい御言葉に茜雫は苦笑いをする。

まあ、普通に考えてそう思うのも仕方がないのだが。

「ボーデビィツヒさんは知らなかったのかぁ。まあ、知っている方が凄いいけどね。」

「どういう事だ？」

「知らない方がいいよ。もう要件はないよね？」

首を捻る茜雫にラウラは不快そうに訊くが茜雫にはぐらかされる。

「……………ああ、以上だ。」

「ほわん ほわん ほわん ほわわ〜ん。はい。終了。」

「長ッ？回想長過ぎねッ？」

回想を終えた茜雫に一夏がツッコミを入れる。

回想でかなり何かを消費したと思う。

ちなみに先ほどの回想は最後の質問は省かれた状態で放映されている。

「落ち着いて落ち着いて。あんまり興奮すると血管が切れて倒れるよ。」

「ご老人かッ？俺はッ？」

「まあまあ、一夏。これで一夏もラウラと闘えるんだしいんじゃない？でも、闘うには全く反対に僕らいるんだし決勝戦じゃないと闘えないね。」

「おお、ほんとだ。」

涼しい顔で一夏ツツコミを流した茜雫はシャルロットの言葉に同意する。

「まさか茜雫がラウラと組むなんて予想外だったね。」

シャルロットが周りの奇異の視線に少し疲れたように言う。

「てか、お前はラウラ相手にも何やってんだよ……………」  
相手がラウラだから何されるか分かったもんじゃないぞ。」

「うわ、一夏にしては何という差別発言。」

「許せないものは許せねえよ。」

茜雫の物言いに一夏がムツとくる。

「ま、一夏だし仕方ないか。あれ？ほくきちゃん発見。」

愚直な一夏に諦めたように茜雫が嘆息すると人混みの向こうに

睨みつけるようにこちらを凝視している箒を見つけた。

「おい、ほきちゃ……………あれ？逃げた……………なぜ……………?」

茜雫が小さく手を振って呼び掛けると箒はぶいっと180度身体を傾けてスタスタとどこぞへ行ってしまった。

「何でかな……………?一夏。」

「俺にもわかんねえ……………。最近なんか不機嫌だな。」

某然とした問いかけに一夏不可思議現象を体験したかのように返し、

「女の子って難しい。」

「はあ……………。」

息の抜群の幼馴染コンビにシャルロットは大きいため息をついて箒に大いに同情した。

「……………ん?」

「どつたの?一夏。」

「アレが原因じゃないのか?」

一夏が電子掲示板のトーナメント表を指差す。



指した先は茜雫の名前が乗った最終ブロックの組み分け表。

そこには . . . . .

『ラウラ・ボーデビィッヒ』、『沙月茜雫』

VS

『篠ノ之箒』、『ニーナ・エニックス』

と書かれている。

「流石はほくきちゃん。敵と判断すれば幼馴染相手でも敵と分かった時点で既に敵対行動に移りますか。さっきのシカトはとても大ダメージだったよ。」

「茜雫つてズレてる。」

「 . . . . . ツ? な . . . . . ン . . . . .  
だと . . . . . ? 俺がズレてる . . . . . ? 一夏じゃ  
あるまいしそれはひどい、シャルルルさん。」

シャルロットのボソツとした咳きがよほどショックだったのか名前を間違え、項垂れている。

「俺じゃあるまいしってどういう事だよ?」

「シャルルルさんシャルルルさん。どう思いますか? 貴方から見て

「この頼珍漢は。」

「シャルル？」

「一夏が期待を込めてシャルロットを見つめるが、

「アウトかな。」

「マジでッ？」

「即答。」

「一夏も撃沈されてしまった。」

「あ~~~~？織斑君とデュノア君ペアとだ？そんな~~~~。」

「えっ？ウソッ？一回戦で、記念すべき最初の試合で専用機ペアと？ああ、これは負け決定かな。」

「だね。織斑君とデュノア君たちと闘えるのはなんか嬉しいけど勝ちたかったね……………」

そんな会話が耳に聞こえ、三人が隣を見ると、顔の知らない二人の女子生徒が落ち込んでおり、周りの女子生徒が慰めていた。

「どうやら専用機ペアとあつたかかわいそうな訓練機ペアの生徒はそこで落ち込んでいる二人のようだ。」

「俺らとあたるのはあの二人か……………」

「ちょっとかわいそうかもしれないけど、決勝にいかないとラウラたちと闘えなくなるから勝たして貰わないとね。 . . . . .  
. . . . .茜雫?」

何を思ったのか茜雫がその女子生徒二人に近づき、

「君たち一夏たちとあたるんだよね。」

「う、うん。そうだけど . . . . .」

「一夏ってリヴァイブ使われたら凄く弱いよ。」

にこやかに一夏の弱点を暴露。

「えっ?それって本当?」

「おい?お前何言ってる?」

一夏の慌てように女子生徒たちも確信を得たようですさらに先を促す。

茜雫の暴露は止まらない。

初戦の状況を予想すると肩がもう笑いで震えている。

「動きは直線で読み易いから適当にマシンガンばら撒いてれば簡単に当たるし、その隙についてアサルトライフル撃てば簡単に落ちるよ。」

「」「ええッ?やったー?」

「お前はもう黙ってくれッ？」

織斑一夏、親友の裏切りにより初戦で苦戦決定。

決勝まではまだまだ道のりは遠い………といっ  
り遠くなった。

三十一話 独逸（後書き）

ここで初アンケートを取ります？

内容は、

ラウラは一夏と茜雫のどちらにデレさせるか？ 　　です。

？ 原作通り織斑一夏でしょ？

？ いや、ここはオリキャラの沙月茜雫だ？

？ 発想の逆転でどっちにもフラグを建てない？

の三択です。

どっちにもフラグを建て、は作者の頭では無理なので許して

期限は9日の午後11時59分まで

あんまり票が集まらない時は作者のテストの戦友、六角コロコ

口鉛筆に決めてもらいますので、票を下さい

希望が通らなくてもこの小説を見捨てないでね。

アンケート以外にも何かを言いたいことがあつたらどうぞ？

三十二話 観客（前書き）

アンケートが思いのほか集まらなかったため、鉛筆を10回転がしました。

結果は ? 3回

? 5回

? 2回

となりました。

数少ない回答が全部?だったためちょっと安心)。 ; ;

## 三十二話 観客

「しかし、すごい状態だよね。」

茜雫と一緒に話していた一夏とシャルロットから視線をズラして備え付けられた無駄にデカイ壁掛けのモニターに視線を運ぶ。

そこには人、人、人。

とにかく人でモニター全てが埋まっている状況だ。

現在、一夏、シャルロット、茜雫の三人は第二アリーナの選手控え室で学年別トーナメント戦の一年部の第一試合の開始を待っていた。

そこに備え付けられたモニターには本来なら控え室を使用する

人間の前の試合をリアルタイムで映し出すようになっていたのだが、現在試合など始まってもないため観客席の様子が映し出されている。

淡々とカメラの向きが観客席を周回するだけの光景は何とも暇なのだが特にやる事もないため、三人は適当に時間を潰しながら流し見していた。

Aブロックの第一試合に出場する一夏とシャルロットは本来なら緊張してもいいはずなのだが、フランス代表候補生のシャルロットはともかく、なぜか一夏も今回は妙に肝が据わっていて特に落ち着きがないというわけじゃない。

一夏とシャルロットも茜雫に習って視線を人一文字で埋まった大型モニターに顔を向ける。

「確かにこりやすごいよな。」

一夏も茜雫の眩きに同感する。

一夏が何となく茜雫の顔を見て見ると茜雫の陶器のように整った顔が少し顰めている。

人混みが苦手な茜雫はそのごみごみとした状態に早くも肉体的にダウンしかけている。

もしかしたら大都會のど真ん中で茜雫と闘ったらマンツーマンでも勝てるかもしれない。

一夏がそんな状況を想像していると、



「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認、僕たち一年はまだそこまで深くは関わらないだろうけど、それでも上位入賞者は早速チエックが入るだろうね。」

「ふうん、ご苦労なことだ。」

「IS飛ばして一ヶ月半の一年の上位に何を期待する気なんだろうね。」

自分たちにも関わってくる事だというのに全く興味を見せない幼馴染コンビにシャルロットはクスクスと微笑う。

その仕草は可愛らしさがあり、そこらの人間がやるとおかしいのにシャルロットがやると全く嫌味のないところが凄い。

「一夏はラウラとの対戦だけが気になるみたいだね。」

「まあ、な。ラウラの事が一番だが、茜雫との対戦でもあるしな。」

「その対戦相手になる予定の茜雫は目の前で眠たげだけどね。」

一夏がシャルロットの指差した方を見ると、目が若干半開き状態の茜雫がぼーっと置物よろしく鎮座していた。

とてもこのトーナメント戦優勝を勝ち取るための難関の一人には見えない。

と、思ったらその目がぱちつと開かれ、黒曜石に金を一滴混ぜ

たよつな綺麗な眼が露わになる。

「別に寝てないさ。なんか暇だったからエネルギー効率を考え  
て半分寝てただけ。」

「結局寝てたのかよ……………てか、パソコンのスリープ  
モードみたいだな。」

寝てただけに……………ぶくく

我ながらなかなかうまい事をいう。

「「つまらない。」

「ぐっ……………?」

ザクっを入れられた感想という名の刃の二閃に一夏の心はスパ  
ッスパッと文字通り四散した。

この二人なかなかの辛口評論家であった。

シャルロットもなぜか他の方々と同じように一夏の考えが読め  
るようになったらしい。

おかげで、今のような心の内でのギャグも読まれてその度凹ま  
される。

最近お茶を欲しい時に出したりと、阿吽の呼吸になってきたの  
だが合いすぎると困る事もあるとは新発見だ。

というか、最近一夏のプライベートが危うし。

「今は省エネの時代だからね。あんま頑張りすぎても疲れてシンドイ。」

「あはは……………」

「……………お前なあ。」

茜雫のダメ人間発言にシャルロットは苦笑いを浮かべ、一夏はそんな親友に呆れてしまう。

まあ、やる時は絶対にやる奴なので問題はないのだが。

大型モニターに再び視線を向けた茜雫が顔を顰めてボソツと呟く。

「まるで人がゴミのようだ。」

「おい。」

茜雫の人としてどうかと思う問題発言に流石に一夏がツッコム。

茜雫は視線を一夏に向けずに、

「アリーナに入りすぎでしょ、これは。アイドルのコンサートじゃあるまいし。見た感じ不純物も混じってるね。」

「ふ、不純物……………?」

シャルロットが眉を左右僅かにバラバラの高さに上げて訊き返す。

「各国政府関係者、スカウト、研究所員、企業のお偉いさん、お偉いさんの身内も面白半分で混じってるな。おそらく一年目的で来た奴らも多いね。」

「何でだよ？」

一年は先ほどシャルロットの言った通り、興味やチェック程度ではないのか。

「俺らがいるじゃん。」

「あ、そうか。」

世界でもたった二人しかいないのだから、見にくる人も多いだろう。

「モルモットの観察感覚のお偉いさんの気がしれないよね。」

「茜栗ってこういう事結構はつきりと言うよね……………」

「まあ、今年は専用機持ちが六人もいるんだからそれも大きく占めているかもしれないかもね。」

「そついえば、今年は異常だね。」

現在専用気持ちは、三年に一人、二年に二人いる。

今年は現在一年だけで六人、三年の六倍、二年の三倍もいるのだ。

こんな豪華な面子早々揃う年はないだろう。

そんな他愛もない話題で話していると茜雫が立ち上がって入り口に歩を進める。

「ん？どうかしたか、茜雫？」

「試合まであと五分だからね。俺は観客席に戻っとくよ。」

「おう。そうか。シャルロット、俺たちもピットに行くか。」

「うん、そうだね。」

気がつけば時計の針もかなり進んでいる。

そろそろピットに向かわないと試合に間に合わない。

「一夏。一回戦で負けないでね。」

一夏とシャルロットが控え室の入り口を出たところで茜雫が外で待っていた。

「お前なあ。誰のせいで苦戦する事になったんだよ。」

「一夏が未熟だから。」

「はい、すみません……………」

反論のできない正論を言われて一夏も黙る。

後ろでシャルロットがクスクスと微笑っているのが分かった。

「ところで……………」

「どうした？セン？」

「観客席ってどっち行けばいいんだっけ……………」  
……………」

「……………あっちだ。」

一夏が観客席へと続く廊下を指す。

シャルロットはここ最近薄々思っていたのだが、

「茜栗って方向音痴？」

「違う？」

「何が違うんだ？」

「迷子になりやすいだけだ？」

「一緒じゃないのか？それ？」

一夏と別れた後、何とか無事(?)に茜雫は観客席へと真っ直ぐ行くことができた。

「流石俺。案内板をマスター出来た。」

「実はアホなのか？貴様。」

茜雫の隣で茜雫の今回のパートナーであるラウラが何言ってるだ？コイツみたいなのジト目で茜雫を横目で見ると。

ラウラと茜雫は茜雫が一夏とシャルロットと別れたあと偶然合流したのだが、ここまでの道のりでラウラは茜雫に呆れた。

茜雫が方向音痴だということがラウラにもバレてしまった。

合流地点からここまで二分で着くはずが、試合開始ギリギリに到着してしまった。

ラウラが案内すればいいのだが、茜雫が「いや、案内なんて要らない。」と頑固拒否。

ラウラも迷う仔犬のような茜雫が何となく面白くて観察(?)  
していた。

「アホじゃない。ちょっと散歩しただけさ。」

「二分の距離で案内板を生徒が使用する時点でアホだ。」

「鋭いナイフのような声色が的確に心臓に刺さって痛いね。言  
い返せない。――――お？始まったか。」

鈍くうるさいブザーとアナウンスと共に試合が開始される。

それらと共に観客席の熱気とテンションも上昇する。

ラウラはそれにウンザリしながら、フィールドに注目しだした  
茜雫を横目で見ながら、呟くように、

「――――楽しそうだな。」

「ん？嬉しいよ？俺がある程度鍛えた一夏がどこまで上を目指  
せるのか見て見たいしね。」

茜雫が自分の膝に肘を立て、頬杖をついて微笑んでいる。

まるで子離れする子供を見るような笑みだった。

「――――そういえば、あのイギリスの貴族かぶれも  
貴様が鍛えたのだったな。」

「貴族かぶれって――――ほんのちょっと苦手



分野の克服に手助けしただけだよ。」

「なぜそんなに他人を育てるような真似をする？織斑一夏はともかく篠ノ之箒や貴族かぶれを巻き込む必要などないだろ？」

「ん〜、まあ、ほ〜きちゃんは幼馴染だつて言うにもあるけどさ。強い人が多くてあんまり困ることなんてないでしょ？」

「どうせ他にも何か考えがあるのだろ？」

茜雫はうつと呻く。

千冬の教官時代の教え子とだけあつて雰囲気がどことなく似ているところもあるが、聡いところもなんか似ている。

なんだかリトル千冬と会話しているかのようだ。

「保険は多い方が良さ。」

「.....?」

ラウラにはその意味が分からなかったが、その疑問は一際大きく上がった歓声で掻き消された。

フィールドを見て見ると、試合が一気に動いたようだ。

「一夏は俺に何を魅せてくれるかな？」

「お〜い、セン？」

一夏とシャルロットは試合後、観客席へと移動し、茜雫と合流することにした。

現在、第二試合をしており、観客席の熱気は冷める様子はない。

一夏とシャルロットたちが使用したピット寄りの観客席へのゲートをくぐるとすぐさま茜雫を発見した。

なぜか茜雫の左頬が丸く赤くなって若干涙目だ。

叩かれた、というわけではなさそうだが白い肌に丸い円上の赤い痕は目立って気になる。

「一夏たちじゃん。一回戦突破おめでとう。でも、専用機持ちにしては時間がかかり過ぎじゃない？」

「うっせー。お前がラファール・リヴァイヴをあの二人に使えって言ったからじゃねえか。試合の後聞いたんだけどあの二人、普段は打鉄使ってるらしいぜ。」

「使い慣れてない機体相手なのに、苦戦するなんて織斑君の底

が知れちゃうね。」

「ぐっ？何も言い返せない？」

「まあまあ。勝てたんだから。」

まだ何か言い返そうとする一夏をシャルロットが取り成す。

一夏は一回戦突破して少しホッとしているようだが、シャルロットは特に変わった様子はない。

「ん？なんで、お前がいるんだよ？」

一夏が茜雫の隣に座っていたラウラの存在に一夏が気づく。

自然と一夏の口調も冷たくなった。

茜雫とシャルロットがこっそりため息を吐く。

一夏の敵意のこもった目をラウラは余裕な表情で見返す。

「私とコイツはパートナーだ。私がどこにいようと貴様には関係のない事だ。それに……」

「なんだよ？」

「おお、ボーデビッツヒさんが俺をパートナーと認めてくれた……」

茜雫はちよっと感動するが、

「それにコイツは貴様に偉そうなことを言ったが、貴様が試合をしていた時、途中から寝てたぞ。」

「なにッ？」

「ち、違う？寝てなどおらねえぜよ？」

「茜雫らしいね……………ていうか、それって方言？」

一夏はラウラに向けていた冷ややかな目を茜雫に向ける。

茜雫はうつとたじろぐ。

「い、いかん？一夏に気圧されてしまった。寝てなんかいないから。」

「ラウラ、寝てたのか？コイツ。」

「ああ、貴様らが優勢になった時にはもう寝ていた。」

「なんでこういう時は、普通に話すの？」

一夏は茜雫の頬がこけているのも涙目だったのも寝ていたためだということに気がつく。

「寝てなかったら何してたんだよ？」

「瞬きです。」

「.....」

あまりに苦しい言い訳だった。

「ただ目に瞼をかぶせてただけ、なが〜い瞬き。」

「無理があると思うよ、茜雫。」

シャルロットまでもが苦笑いしている。

「さ〜て、俺も第四試合だから訓練機の調整しておこうかな。」

「貴様は専用機持ちだろうが。」

「いやいや、流石に訓練機コンビに専用機コンビはキツイですよ。しかも、ボーデビッツヒさん、代表候補生って言っても殆ど国家代表って言ってもおかしくない立場だし。」

確かにラウラはドイツ軍で最もISを保有する部隊の隊長を務めている猛者だ。

国家代表って言っても過言ではない。

技術は一年では間違いなく最強だ。

「調整なんかしないでそのまま使っても大丈夫だろ？」

「俺はそのまま使うにはちょっと問題があるから設定を弄るの。」

「ふうん？ そうなのか。」

「俺は整備のところにいるからボーデビッツさんも試合が始まりかけたら迎えに来てね。」

「ああ、分かった。」

茜雫はひらひらと手を振って観客席から出て行く。

ラウラも一夏たちには用などないとばかりに見向き見せず無然とした表情でフィールドの方に視線を戻した。

同じように、フィールドの試合を見ていたシャルロットがそういえばっといった感じで、

「あれ？ 訓練機って個人的に設定を弄れたっけ？」

誰が使っても同じ性能を出すようにするため、そういうのは個人では弄れないようになってはいるはずだ。

「センの事だ。ハッキングでもするだろ。」

「……………一夏に当然の様に言わせる茜雫ってスゴイね。」

「さてと、なんか最近怖いほぐきちゃんとの闘いだ。ちょっとマジで設定をしておかないと苦戦するな。」

ラウラは一夏と闘うのだから負けるわけにはいかない。

ここで決着をつけておかないと後でめんどくさい。

決勝で一夏と闘うことになっているのだから、筈には勝たして貰うしかない。

「そういや、優勝したら『付き合う』っていつてたけど、まあ、ほぐきちゃんが優勝しなくても『付き合う』からべつに気にすることないかな？」

そんなことを思いながら、茜雫は歩き回り、ほどなく立ち止まる。

普段は使うことの少ない第二アリーナだったため、ここに来るまで少し迷ってしまったが、無事にたどり着いた。

進化と達成感という言葉が胸いっぱい広がる。

タッチパネル式の扉を開ける。

「まずは……………」

辺りを見渡す。

「整備室はいつ引越した？」

目には、機材が高く積み上がった謎の部屋が広がっていた。

今度は不安と自らへの失望感が胸が張り裂けんばかりに広がった。



三十二話 観客（後書き）

うーん、全然進まない。

すみません

今回は茜雫、ラウラ、コンビの学年別トーナメントの一回戦です

三十三話 一二二(前書き)

お気に入りか三桁突入？

ちよつと感激？

皆さんありがとうございます

イライライライライライライライライライライライライライライライライ  
イライライライライ

それが今、そのはち切れんばかりの見事なプロポーションをもつ豊富な肉体の上に、ピチピチでボディラインが丸わかりのスクール水着と言ってもおかしくはないISスーツを着ている篠ノ之箒の心境を最も表しているであろう言葉………というより、文字だった。

箒は今、第四試合の自分の出番を待つべく、アリーナの選手控え室にいた。

控え室では箒以外にもう一人いる人物が動く音しか発生していない状況だ。

ペラペラといった音が箒の鼓膜を定期的にくすぐる。

自分自身を抑えるかのように腕を組んでいるため、15歳……

..... もう少しで16歳にしてはともとても立派に育った胸部の双丘は組んだ腕で押しつぶされ、同世代の女子から見てもとってもエロス？みたいな状態になっていた。

ここが一般的なビーチだったなら、卑しい目をした男たちから声をかけられていそうなのだが、おそらく顔を見たらそのまま来た道に戻って行くだろう。

箒は現在、『彼奴に会ったらクロス.....?』  
みたいな、私今キレてますよオーラが全身から迸っていた。

まあ、普段の状態で声をかけたとしても木刀で両断、というのがオチだろうが。

絶賛キレ気味中の箒にルームメイトであり、今回の学年別トーナメントでのパートナーであるニーナ・エニックスは、どんな声をかけてあげれば良いのか分からずに気まずそうに.....  
.....してなど全くおらず、特に気にした様子もなく呑気にファッション雑誌を読んでいた。

「うーん。どうしよっかなあ〜。」

静かな控え室にニーナの迷ったような困ったような声がかすかに響く。

箒が何となくそちらを確認すると、ニーナは自分のストレートの背中の真ん中辺りまで長い艶やかな限りなく紺色に近い黒髪を一束、びよーんと引っ張って見つめていた。

時折、引っ張ったままチラチラとファッション雑誌と自分の髪

を視線が往復していた。

ニーナも箒が自分を見ていると気がついたようで、本物の金のように輝く眼と目が合う。

「どしたの？箒？」

IS学園の生徒は外国人が多く、ISの知識を身につけるために日本語を流用に話せるぐらいに身につけており、その殆どが手本のような型にはまった共通語を会得している。

しかし、ニーナは結構碎けた日本語で普通に話しかけてくる。

「いや、・・・・・・・・・・・・・・・・何をしておるのだ？」

「ん？・・・・・・・・・・・・・・・・ああ、髪の毛染めてみよっかなあ〜  
って思っで。箒はどう思っで？」

虚をつくように目が合ったことにより箒が多少言いもげる。

どうやらニーナはファッション雑誌のモデルと自分の髪の色を見比べていたようだ。

箒は腕組みを解き、顎に手を当てて少し悩む。

「ふむ、せっかく綺麗な黒髪なのに染めるのは勿体無いような  
気もするな。・・・・・・・・・・・・・・・・そういえばニーナは日  
本とアメリカのハーフだったな。」

褒められて純粹に嬉しかったのかニーナは子供のように無邪気

に笑う。

普段は綺麗が形容できるニーナだが、笑った表情は綺麗と可愛い  
が形容できるかもしれない。

「えへへ〜ありがと。うん、ハーフだよ。髪の毛はお父さんの  
日本の血が色濃く出たみたい。日本暮らしも長いしね。」

なるほど、だからあんなに砕けた日本語を普通に話せるのか。

顔立ちは色白の欧米人なのだが、髪の毛は黒となかなかお眼に  
かけられない組み合わせだった。

「う〜ん。金髪に染めて見るのもありかな？って思ってるんだ  
けど……………」

「確かにそれはニーナに似合うかもしれないな。」

金髪金眼の欧米人はたくさんいるし、ニーナが黒髪を金に染め  
たら少し顔立ちが変わったアメリカ人で十分通るだろう。

ニーナは腕を組み、（＾）のような顔で、

「緑も選択肢の一つかな。」

「緑ツ？」

意外と感性がぶつとつんでたりした。

「なんかこの前ね。見してもらったアニメで緑髪で金眼の美人

さんがいたから。」

「……あまり二次元を三次元に持つてくるとおかしくなると思うぞ?」

「あり?なんで?」

可愛らしく小首をかしげるニーナに箒が真剣に諭す。

「この前、テレビでコスプレしていたグループが明るい青髪や緑髪をしていたのだが、違和感が凄まじかった……」

「ああ……やっぱりやめとく……」

箒はルームメイトがぶっ飛んだ一線を超えることを思いとどまってくれたことにホッとす。

あまり人好きしない箒はあまり接し方を考えずに話せるこのルームメイトを気に入ってたりする。

その時、防音が整っているアリーナ全体に響くような歓声が聞こえた。

「お?試合が終わったかな?」

「の、ようだな。」

準備に入らなければならぬ箒はすくっと備え付けのベンチか

ら立ち上がる。

ニーナも箒に習って立ち上がり、

「よし、相手が沙月君だろうがボーデビッツヒさんだろうが絶対に『優勝』してやる？」

気合は充分のようだった。

『優勝』………普通に考えて誰でも取りたいと思うだろうと思うが、今回は女子にとって簡単には負けられない理由があった。

優勝した生徒は織斑一夏、または沙月茜雫と『付き合う』ことが出来る。

本当は箒と茜雫の約束がおかしな形で触れ回った事なのだが、優勝を本気で目指す女子群の前ではどうすることもできない。

ならば、優勝すれば良い、と茜雫と組もうとすれば、もう誰かと組む予定があると言っし、それが誰かと思えば、あのラウラだったりと箒のフラストレーションは溜まりっぱなしだ。



「箒？沙月君とボーデビッツさんに勝てる自信は？」

丸めたファッション雑誌をマイクのように持ってレポーターのようにインタビューしてくる。

「勝つのではない。」

「お？目指せ優勝？」

静かに否定する箒にニーナは金色の眼をキラキラと輝かせる。

眼を輝かせるニーナと対象的に箒はモニターに映る沙月茜雫の文字を人を殺せそうな眼で睨みつけ、

「目の前の敵<sup>茜雫</sup>を潰す……………？」

「……………おお、箒ちゃんスゴイです……………  
……………そして、顔がとても怖いです……………  
……………。」

箒はニーナのノリが何となく茜雫に似ていると思った。

「立ちはだかる敵<sup>茜雫</sup>は誰であろうと斬り捨てる？」

「おお？武士道だね？手裏剣シュパパツと投げて敵を討つ？」

「なんだその間違った侍は……………」

日本暮しが長いではなかったのか？

「ん？おい、何をしている？」

試合が始まるため、ISスーツに着替え、整備室に茜雫を呼びに行こうとしていたラウラは進んで百歩も進まないところで目標を早速発見する。

「あッ？ボーデビッツヒさん？良いところに来た？」

「どうした？」

何やら焦ったような茜雫にラウラは怪訝そうに尋ねる。

何か深刻な問題が発生したのだろうか。

「整備室ってどこ？」

ある意味深刻な問題だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・案内板はどうした？マスターしたの  
のだろ？」

「あんな板切れ役に立たない。と言うか、見つからん？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・諦める。」

早く来い。」

遠くで大きな歓声上がる。

どうやら試合が終わったようだ。

少し頭が痛そうに何も言う気が失せたラウラはさっさとピット  
に向かう事にした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・貴様は一体この一時間何をし  
ていたんだ。」

「道を聞こうと用務員のおじちゃん探してた。てか、企業のう  
ねうねした奴らがスゴイ邪魔だったんだけど。」

「うねうね・・・・・・・・・・・・・・・・？」

ちなみにラウラの脳内ではタコヤイカに似た気持ち悪い企業や  
国の重役が浮かび、茜雫の脳内ではやたら色っぽい動きで、企業や  
国がどうこう言って寄って来たナイスバディの若い女性が浮かんで  
いた。

「ここでラウラもどんな奴かは置いて、IS男子操縦者に各国から勧誘があるのは仕方が無い事だと思った。」

「うっ？」

「今度は何だ……………」

「い、いや、なんか謎の悪寒がして……………風邪かな」

「？」

「誰かが貴様を暗殺しようと思っているんじゃないのか？」

「そんなリアルな事言わないでよ……………」

「貴様にとって暗殺されるのは身近なのか……………」

「？」

ラウラがジト目で茜雫を睨む。

暗殺が身近な高校生など見たくも会いたくもない。

そんなやりとりをしているともうピットに着いてしまった。

タッチパネル式のドアを開けて少し薄暗いピットへと入って行く。

く。

茜雫の顔色は若干悪いのはピットの暗さが原因ではないのだから。

う。

なんだか反対側のピットから負のオーラが迸っているのが見え  
た気がする。

「棄権しても良い？」

「却下だ。」

「ですよ。ボーデビッツヒさんも不戦敗になるしね。」

茜雫の懇願もラウラの氷の一言で沈められる。

茜雫は肩を落として部屋の隅に移動し、制服を適当に脱いで行  
く。

ISスーツは制服の下にすでに着用済みだ。

すでに着替えていつでも準備OKのラウラは眼を閉じ、腕を組  
んで佇んでいる。

真っ白の肌と整った顔立ちのため、まるで芸術品が置いてある  
みたいで立っているだけで目の保養になる。

(普通に黙って立つとけばその無骨な眼帯を差し引いても可愛  
らしいお嬢さんで通るのにもつたいない……)

そんな事を思いながら茜雫は目に付いたところに畳んだ制服を  
適当に積んでおく。

べつに盗まれはしないだろう。

盗んでも仕方がないし。

普通の設定がなされているラファール・リヴァイヴをいそいそと装着、起動させ、いつでも発進OKの状態にする。

反対側のピットから進む負のオーラが試合開始時間に近づくに連れ、濃く、重くなつて行く。

こちらの気も重い。

「うん。腹を括るしかないのかな？」

「ん？………介錯が必要か？」

ラウラが顎に手を当てて少し思い出すように考えたあと、素でとんでもない事を言い出す。

「………ハラキリの間違いかな？切腹したらそれこそヤバイよね。」

「どちらにせよ、これから斬られるだろ？」

「わあ、否定できないのがすげえ怖い。」

容易にその光景が目には浮かぶ。

試合開始時間の一分前となり、ラウラも自らの漆黒のISS……シュヴァルツェア・レーゲンを展開する。

手間暇かけずに展開と解除が素早くできるのは専用機持ちの長

所と言ってもいい。

ラウラと茜雫はP I Cを展開。

途端に無重力空間に入ったかのようにかなりの重量を誇るI Sがまるで空気のように浮き上がる。

茜雫はP I Cを展開し、重力などもあらゆる身体への負荷が消える感覚がこれまで十数回I Sに乗ったが、いまだ慣れなかった。

例えるならジェットコースターで落ちる瞬間に感じる感覚だろうか。

ラウラと茜雫はP I Cを操作して滑るようにフィールドに進進。

足になんの力もいれていないのに前に進むのはおかしな感覚がする。

入り口をくぐった途端、一気に明るくなった開けた空間が視界いっぱいになり、うるさいほどの歓声が聞こえてきた。

その歓声にラウラが少し顔を顰めるがなんだか茜雫にも分かる気がした。

茜雫が前に出ている形でそれぞれ停止する。

対戦相手である筈と二ーナもすでにフィールドの中央部で待ち構えていた。

「第二世代機の打鉄とラファール・リヴァイヴか……………」

」。

ラウラが値踏みをするように箒とニーナを見定める。

箒は純日本製で防御を重く置いた近接格闘型の第二世代機、打鉄。

ニーナはフランス製で安定したカタログスペックと豊富な銃器による中距離型のラファール・リヴァイヴを使用していた。

遠近どちらもカバー出来るセオリーな組み合わせとも言えるが、セオリーなだけにかなり効果的な組み合わせでもある。

茜雫はそんな事気にしている余裕はない。

「ほくきちゃんのオーラがいつもに増してエッジが効いててマジ痛いんですけど……………」。

目の前の殺気と言つ名のナイフを受け流すので手がいつぱいだ。

身体中にザクザクと刺さって行く。

ニーナがこちらに笑顔で手を振ってくれるのがとても輝いて見える。

隣が真っ黒いオーラを発してるだけあって……………



その時、無情にも試合開始の鈍く重いサイレンのようなブザー音が鳴り響く。

と、同時に第と二ーナは後ろ向きにスラスターを噴かしてラウラと茜雫から距離を取る。

どうやら慎重に事を進めるらしい。

技術では一年最強と言ってもいいラウラがいるのだから慎重すぎるとは言えないだろう。

それに、ラウラのドイツ第三世代機であるシュヴァルツエア・レーゲンは茜雫の目から見てもヨーロッパの中で大きな完成度を誇っている。

「ふん、すぐに終わらせる。」

ラウラが意識を集中させ、高等加速方である瞬間加速イクニッション・ブーストを難なく発動させる。

スラスターからの膨大なエネルギーに押され、一瞬にしてラウラはトップスピードに乗る。

茜雫など一瞥もせずに通り過ぎようとしたその時、

「あ、ちょっとストップ。」

「……………」

突如ラウラの足に衝撃が走り、視界が凄まじいスピードで反転した。

ラウラは足のみにかがかった事により、地面に勢いよく頭から突っ込みそうなところを器用にPICを操作してそのまま空中で一回転させて体制を整える。

そして、元凶である人物を若干殺意を持って睨みつける。

「なんのつもりだ……………？沙月……………」

「…？」

「怖ッ？そんなに睨まないでよ……………。」  
顔が整ってるだけあって、凄みがある。

茜雫は肩を竦めて先ほどラウラの足を引つ掛けた足を引つ込める。

茜雫はラウラの冷徹な睨みをとらえどころのない笑顔で受け流す。

「これさ、俺に譲ってよ。」

「は？」

「俺さ、まだIS動かしたのまだ十数回だからさ。ちょっと実技特訓って事で。どうせ俺が負けてもボーデビッツヒさんが一人で勝てるでしょ？」

「……………まあ、別にいいだろう。」

ラウラはべつに自分が困る事でもないので了承する。

「さうと、頑張りますか。」

少し離れた位置にいる篝とニーナと向き直る。

ここで異変が、

「ずいぶんと悠長なものだな……………?」

「ちようち、舐めすぎじゃないのかな……………?」

「……………」

突きつけられる殺気のナイフの本数が増え、一人来れ気味の方が増えてしまった。

黒いオーラの密度が二倍……………いや、打ち消してくれる人が寝返った分そのさらに倍になっている。

「ボーデビッツヒさんヘルプ?」

「断る。」

「即答?」

周りは敵だらけになってしまった。

自業自得といえはそうなのかもしれないが、味方がいないのはなんとも辛いものだ。

茜雫はこの場にのほほんさん呼びたくなつた。

「斬る……………」

「優勝……………」

「……………」逃げます？」

生きとし生けるものの本能が命の危険の警鐘を打ち鳴らす。

太刀を振りかぶりながら真つ先に突進して来た箒をいなし、二ノナからのマシンガンシャワーから退避する。

二ノナの両手に握られたマシンガンのマズルフラッシュが記者会見のカメラフラッシュのように瞬き、排出される空薬莖がテンポ良く吐き出されていく。

軽い銃撃音はまるでロックを演奏しているかのようにドラムを叩いているようで、軽快でありながら激しさを持っている。

事実、茜雫の駆けつけた後にはいくつもの弾痕がボスツボスツといった音とともに地面を穿っていく。

「逃げるなあ？」

スイスイと器用に避けていく茜雫の隙を突くように箒が白刃を

煌めかせて斬りつけてくる。

斬鉄も可能な連撃を茜雫は身体をズラすようにして紙一重で躲していく。

「うわっ？掠った？危なッ？」

突進しながらの左右に素早く斬りつけた刃は茜雫の一瞬強くスラスターを噴かしてバックステップのような動きの対応できずに空を斬る。

その際、シールドバリアの範囲内に僅かに触れたのかチリツといった音とともにかすかに発光する。

茜雫が飛び去ると茜雫のいた空間にアサルトライフル特有の高連射、高威力の弾丸が突き抜ける。

「やっばこっちから抑えたほうがいいかな……………」  
「？」

茜雫は筭から距離を取りつつ、右手に構えたアサルトライフルをニーナに向けて引き金を引く。

しかし、ばら撒くように撃った弾丸は殆ど当たる事なく逸れる。

目標に当たる事なく逸れた弾丸は観客席や上空の遮断シールドに弾かれていく。

「どうした？全然当たってないぞ？」

「外野は茶々を入れないですよ………？中距離は苦手なんだって？」

ラウラの言い方にちょっとカチンときた茜雫は右手のアサルトライフルで箒を牽制しつつ、左手のサブマシンガンを一ーナに向けてフルオートでぶっ放す。

「ぐっ？いつっ………？」

今度は殆どの弾丸が攪乱するようにトップスピードで周りを飛び回っていたニーナに吸い込まれる様に着弾する。

体制が少し崩れ、掲げた物理シールドで視界が限られたニーナにグレネードランチャーをすかさず撃ち込む。

「うっ？」

爆音とともにニーナは大きく体制を崩し、一旦後退する。

「サブマシンガンはちゃんと当たるとはどう言う事だ………  
………？」

ラウラが左右の眉をバラバラの高さに上げて呆れる。

集弾率が高いアサルトライフルが当たらず、連射力は高いが制御の難しく集弾率の低いサブマシンガンは的確に当てるとは普通は逆だ。

「ちよくと『眼が悪い』んだよねえ、俺。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・視力悪いの？」

ニーナに不思議そうに尋ねられて、茜雫は返答に困ったように微笑う。

「そういう意味じゃないんだけどね・・・・・・・・・・」

「????？」

視力などISに備わっているハイパーセンサーで数倍に引き上げる事ができる。

茜雫はマグチェンジを素早く済ませてそのまま箒とニーナを引き剥がす。

パートナーと引き剥がされて苦手距離をカバーされない状況に箒は接近戦で一気に勝負を付けるべく突進。

近接格闘能力では茜雫のほうが箒と比べて圧倒的だが、ラファール・リヴァイヴと打鉄では打鉄に軍杯が上がる。

そう読んでの接近戦なのだが、接近してくる箒を見ても茜雫は近接ブレードを展開する様子はない。

右手にアサルトライフル、左手にサブマシンガンを構える事なく箒を待ち構えている。

「銃と刀、この距離ではこちらが有利だ？」

「銃が接近戦で対応できないなんて偏見だよ？ほくきちゃん。」

「わあ、篠ノ之さんとエニックスさん。あの沙月君を押してま  
すね。」

薄暗い管制室でコンソールの前に座っていた真耶は興奮したよ  
うな、弾んだ声で生徒の成長を喜ぶ。

今、管制室にはコンソールで仕事をしている真耶、モニターの  
前で腕を組みながら立っている千冬、椅子に座ってミルクと砂糖た  
っぷりのコーヒーを飲んでいる湊がいた。

「確かに即席コンビで経験の少ないほうちくとしては結構頑張  
ってるよね。」



優勝の景品が目的なのかな、とコーヒーを飲みながら湊は付け加えた。

「エニックスの動きが篠ノ之を生かしているな。」

「確かに初心者とは思えない動きですよな。」

千冬の感想に真耶が同意する。

「うん。多分ニッチは初心者じゃないと思うよ?」

「あれ?そんなんですか?」

「うん、なんとなく。」

言われてみれば、ニーナは他の生徒よりISの扱いが手馴れていたような気がする。

いつニーナがISを動かしていたのか思考を巡らせようとするが、

「……………そういえば、沙月君って調子が悪いんですか?沙月君ならもっと当てているような気がしますけど……………」

真耶の疑問に千冬が答える。

「あいつの得意な距離は遠近で中距離は苦手らしい。」

「なんか……………極端ですね。」

珍しい傾向だ。

もしかしたら茜雫はフリントングなのかもしれないと思った。

フリントングとは一般的には銃の反動を怖がって引き金を引いた瞬間に無意識に身体が萎縮して着弾がブレる身体の反射運動だ。

IS操縦者の場合は、一度実弾を撃ち慣れてしまうと反動を自動的に打ち消してしまうISと反動の殺し方の勝手が違うため普段と同じように身体に無駄な力が入ってしまい、着弾がブレる事を指す。

数回撃つただけでもなってしまう人がいるし、本人は自覚症状がないため治すには時間がかかる。

「あっ？篠ノ之さんが勝負に出たようです。」

モニターでは茜雫に突進を掛ける筈の姿が映し出された。

茜雫は銃身で箒の刀を簡単に受け流す。

そのまま距離を取るかと思われたが、逆に茜雫は殴り合えるぐらいの距離まで自ら詰めてきた。

さらに箒が太刀を縦に振りそれを茜雫が身体を入れ替えるようにして躲した瞬間、背中から鈍い衝撃が貫通する。

「なにッ………」

慌てて箒が振り向くと茜雫がこちらに背を向け、少し屈んだ状態で立っていた。

よく見ると、右脇下からサブマシンガンが突き出されており、その銃口からは硝煙が細く伸びている。

地面には大量の薬莖がばら撒かれており、どうやら背中越しに脇下からサブマシンガンをフルオートで発砲したらしい。

至近距離とだけあって、威力の心許無いサブマシンガンであってもかなりの衝撃だった。

「くッ？」

今度は横薙ぎに振るうが茜雫は身を低くして躲す。

ガンツ、という重い発砲音とともに今度は顎に衝撃が走る。

「がッ……………」

アッパーカットを食らったかのような衝撃に微かに目が眩む。

衝撃で少しのぞけた頭を素早く下にむけると、茜雫はアサル  
トライフルをトンファーのようにグリップを逆向きに持ち、小指を  
引き金に指をかけていた。

「箒ッ？」

体制を立て直し、遠距離での狙撃を試みようとしたが、箒と茜  
雫が身体を入れ替えたため中断したニーナが接近しながらアサル  
トライフルを牽制程度で乱射しながら箒の援護する。

「決めきれなかったか……………」

ここで箒を潰しておこう思っていたが、ダメージを余計にもら  
うのは避けたい。

茜雫はすぐさま飛び去り、上空に避難。

それをスペック上、同じスピードのニーナが追いかける。

茜雫はサブマシンガンマガジンを一回分をフルオートで撃ち尽  
くすとニーナに背を向けてさらにニーナと距離を開ける。

「に、逃げるの？」

「人聞きが悪いなあ。逃げてるんじゃないやなくて……. . . . .  
ええと、. . . . .これから撃つんだよ？」

「逃げてるだけじゃん？」

ニーナは背を向けて逃げ回る茜雫にアサルトライフルとサブマシンガンを次々とマグチェンジしながら撃ちまくる。

茜雫は文字通りの弾雨に上下左右に機体を操りながら避けて行くがただ進むだけのニーナに徐々に距離を詰められる。

「この距離なら？」

ニーナはサブマシンガンをグレネードランチャーに切り換える。

その切り替えにニーナが意識を集中させた瞬間を狙って茜雫はスラスターを操作する。

背部スラスターを下向きに一瞬強く噴かし、素早く上に向けてマムを絞る。

足先をピンと伸ばして足裏の補助スラスターを全開にスロットルを上げる。

茜雫の視界が一回転して景色がブレる。

すぐさま制動を掛けるとニーナが背中を向けて通り過ぎるとこ

るだった。

「へ？ウソツ？」

「ね？これから撃つでしょ？」

茜雫は両手に展開したスナイパーライフルをニーナの背部メインスラスタールに向けて引き金を引く。

この距離ならスコープを覗く必要もない。

大口径の銃口からは吐き出された銃弾はジャイロ回転をしながら吸い込まれるように背部メインスラスタールに着弾。

これだけでシールドバリアの薄かった背部メインスラスタールは動作不能となり、空を駆ける翼を藻掻れた。

茜雫がした事は一般的に言うと、最高速度からの急減速と宙返りだ。

宙返りして少し減速したため、少ししか速度差がないニーナが背をこちらに向けた状態でゆっくり遠ざかろうとするとところを撃つたわけだ。

戦闘機でいうとわざと失速させて後ろの敵を追い越させるオーバールンという技だ。

「まさか誘われてたなんてね……………?」

高速での移動手段を失ったニーナはPICで浮遊しながら一矢

報いるべくアサルトライフルを両手持ちで乱射。

突如、乱射を躲した茜雫がその場で一回転したかと思うと、二つの黒い物体が回転しながらこちらめがけて高速で飛んでくる。

反射的にシールドを掲げるとガンッ、という少し軽めの音がした。

「?????」

ニーナはてつきりグレネードでも投げてきたのかと思ったが爆発した様子はない。

かと言つて弾丸という速度ではなかった。

訝しげにシールドを退ける。

ソレはすぐ目の前で弾かれた状態であつた。

「マガジン………?」

ソレは少し曲線を描いた直方体のマガジンだった。

大きさからして先ほどスラスターを撃ち抜いたスナイパーライフルのマガジンだろうか。

意味がわからず思考が停止した瞬間、

ドンッ?、という重い空気を震わすような発砲音と共に目の前で浮かんでいたマガジンが爆発した。

「……………」

内部に溜め込まれていた大口径の弾丸がマガジンの外壁を引き裂きながら弾け飛ぶ。

弾き出された弾丸の殆どがこちらめがけて飛び散り、突貫力の高いスナイパーライフルだったため、ニーナのラファール・リヴァイヴのシールドエネルギーは80を切ってしまった。

「な、なにが……………」

惚けた表情で茜雫を見ると、スナイパーライフルのスコープを覗いて構えた状態で立っている。

よく見ると、構えたスナイパーライフルのマガジンが無くなっている。

「マガジンだけをぶん投げて、すでに装填済みだった一発で二つのマガジンを撃ち抜いて中の弾丸を暴発させたの……………」

「し」名答了。

茜雫はイタズラを褒められた子供のように微笑った。

「すっごい痛かったんだけど……………」

「まあ、一発の威力を要求されるライフル弾を至近距離で受けたからね。」



そう言って両手にグレネードランチャーを構える。

PICのみしか残っていないニーナのラファール・リヴァイヴでは避けられない。

物理シールドは先ほど爆発の衝撃で手放してしまった。

「ごめんね〜等。負けちゃった。」

「やれやれ。これで楽になった。」

茜雫にとって近距離しかなくリーチの短い刀一本の筈の打鉄より多種多様の銃器で遠距離で援護を行えるニーナのラファール・リヴァイヴの方が厄介な代物だった。

それに『眼の悪い』茜雫にとって中距離は避けたい。

「さ〜て、ほ〜きちゃんには悪いけど疲れたからさっさと終わらせるね。」

「……………私を舐めてもらっては困るな。」

箒は太刀を正眼に構えて茜雫を睨みつける。

「……………顔に穴が空きそう。」

茜雫も近接ブレードを展開する。

下段で後ろに引き、誘う構えを取る。

箒が突っ込む勢いを刃に載せて斬りかかる。

流れるような太刀捌きを茜雫は腕に大きな負担を感じながら受け流す。

県道全国優勝者の肩書きに恥ない太刀筋に茜雫は舌を巻く。

一夏とは散々打ち合い箒とはなかったが、一夏がポコポコにされるのも納得いく。

「ハアアアアアアアアアアアツ？」

気合を込めて箒が上段から一気に茜雫を両断せんと振り下ろす。

茜雫は叩き降ろされる太刀を近接ブレードを横に薙ぐ。

ガギンツ？という金属特有の衝撃音。

鏝迫り合いになるかと思われたが、箒は素早く身を引き、太刀

を顔のすぐ横に構え、切っ先を  
こちらに向けて打突の構えを取る。

「フツ？」

息を吐く音と共に眼も止まらぬ速さで鉄も貫く突きが弾丸のよ  
うに放たれる。

茜雫は近接ブレードを放り投げる。

「……………?」

茜雫は箒の神速の突きを通行止めするかのように右マニピレ  
ーターの掌底を突き出す。

「その程度で？」

箒の突きは突き出された右マニピレーターの掌底を何の抵抗  
もなく貫通。

茜雫はすかさず左マニピレーターの掌底突きを固定した打鉄  
の太刀の刃に叩き込む。

「なッ？」

バギンツ?という音と共に太刀が根元からへし折れる。

箒は某然とわずかに鏝から飛び出した折れた刃を見つめ、次に  
茜雫を見る。

茜雫はこちらに向けてグレネードランチャーを構えていた。

「俺の勝ち？」

ラウラ・ボーデビッツヒ、沙月茜雫ペアは一回戦突破を果たした。

「……………思ってたんだけど、エニックスさんって絶対初心者じゃないよね……………」

茜雫はラウラを連れ立って筈とニーナのところに来ていた。

いろいろ禍根を残しているラウラもいたが、筈は少し苦い顔をしただけで特に嫌がっていなかったし、ニーナは全く何も感じていない様子に少し茜雫はホッとする。

「ふっふっふ……………何を隠そう。実は私は代表

候補生候補だったんだよ……………」

茜雫は驚きよりもニーナの言動が湊に似ていると思った。

篤はその事実が多いに驚き、ラウラも片眉が意外そうに持ち上がる。

「だから、慣れていたのか……………、試験に落ちたのか？」

少し失礼かと篤は思ったが、ニーナは気にした様子はない。

「どうして落ちたかと言うとねえ……………」

なんだか無駄話が多くて長くなったが、要約すると、

沢山のライバルを退けて代表候補生の最終試験に好成績で望む事になったが、試験前夜にワクワクして眠れない。

朝起きたらあら不思議。

朝日かと思ったら朝ではなく夕日が沈んでいたらしい。

と、得意げに話し終えた代表候補生になれたかもしれないニー

ナ・エニックス。

「……………どう思います？ボーデビィッ  
ヒさん。」

「バカだな。」

「ヒドイッ？」

間髪入れない即答にニーナが傷つく。

「……………ほぐきちゃんはどう思います？このあほ  
娘。」

「救い様がないな。と言うか、どれだけ寝てただ、お前は。」

「あうう……………幕まで……………」

「？」

三人の辛辣な物言いにちよつと涙目になるニーナ。

意外と打たれ弱いのもしれない。

「まあ、こんなあほ娘は多分エニックスさんだから決勝ま  
での障害は特にないな。」

「沙月君、あほあほ言わないで……………グサつてく  
るから。」

「……………アホ。」

ちよつとイタズラ心が刺激されてしまった。

「沙月君の . . . . . 沙月君の . . . . . アホ~~~~~?」

あまり罵声を言い慣れていないのか何も思いつかなかつたらしい。

半泣きで走り去ってしまった。

罪悪感が溜まる。

「 . . . . . ぶじよ。」

箒に助けを求める。

「 . . . . . 知るかッ?」

ドスツと尻を蹴っ飛ばされてしまった。

そのまま歩いてどっかに行ってしまう。

「 . . . . . なんで怒ったのかな。」

「 . . . . . 」

ラウラも無言で立ち去っていく。

ゴミでも見るかのような冷たい目が忘れられなかった . . . . .

・  
・  
・

茜雫は女の子相手にはちょっと自重する事にした。

「冷たっ？」

顔を洗ったための水道水まで茜雫に牙を剥いた。



三十三話 一二(後書き)

題名が意味不明

何かないですかね？

感想待ってます

三十四話 独戦（前書き）

ちよつと題名を『独逸』と『独りでの戦い』と掛けてみました！  
ちなみに、携帯で自分の小説はどう表記されているのか気になって  
見てみたらシヨッケ！

半角での『！？』が全部ただの『・』になつてた……  
こういう機種によるおかしな点があつたら教えてください  
多用しているだけあって、マジで恥ずかしかった……

## 三十四話 独戦

何これ？修羅場？

現在目の前の光景に茜雫の頭にこんな文字が占める。

一夏とシャルロットペアは技術不足の一夏をシャルロットの好カバールもあり対戦相手を怒涛の勢いで下して行き決勝に駒を進めた。

ラウラ・茜雫ペアも茜雫一人が打鉄で二回戦の相手二人を圧勝。

ラファール・リヴァイヴと打鉄を試し終えた茜雫は三回戦以降はラウラも参戦した事もあり、茜雫は訓練機を使用したがる圧倒的な技量と実力で四回戦、準決勝の敵を粉碎していく。

因みに茜雫は二回戦のみ打鉄を使用して単機で戦ったのだが、なぜか打鉄の主兵装である近接ブレードを使用せずに勝手に持ち込んだラファール・リヴァイヴのアサルトライフルで勝利している。

この不思議な行動に客席では皆が首をひねることとなる。

決勝戦は一夏・シャルロットペアとラウラ・茜雫ペアがぶつかる事となった。

そして、現在。

決勝戦開始まであと一分を切った。

一夏は純白でシャープな装甲と大型の背部ウイングスラスターを背後に浮かび上がらせている白式。

シャルロットは頑丈さと機動性をバランスよく取り入れた装甲に鮮やかな果実のようなオレンジ色をしたラファール・リヴァイヴカスタムE.I.

ラウラは光沢のある黒の角張った堅実性のある装甲と肩の大口径レールカノンが特徴のシュヴァルツエア・レーゲン。

そして、茜雫は闇に溶け込む様な漆黒で少々細過ぎるといってもいい流線型で大型のアンロック・ユニットの稼動盾何ともアンバランスなエネミー。

それぞれの専用機を展開させてフィールド中央で対極にそれぞれP.I.Cで浮遊している。

待つ事以外特にやる事のない茜雫は周りをなんとなく見渡してみ。

酔っってしまうほど人で埋め尽くされている。

あまり人混みを嫌う茜雫は見ててごちゃごちゃした光景に少し

気分が悪くなる。

IS学園ではISを使用した場合こういう体調不良は直ぐに学園のコアネットワークを通じて職員に暴露してしまうのだが、『諸事情』によりIS稼働限界の存在する茜雫にとって邪魔でしか無いため、特に体調不良になりやすいエネミーには迷彩を掛けている。

こういう時に束からのISの知識と長年のシステムハッキングの技術は役に立つ。

ここで見たくも無いモノを発見。

一際高い位置に設けられている各国、各企業のお偉いさんのための貴賓席にいる重役の方々は、待ちに待った第二の男子IS操縦者であるずっと謎だった茜雫の専用機であるエネミーが姿を表した事により、注目が高まっていた。

どこの国家や企業にも当てはまらない防御など考えてない空戦特化の基本フレームにそれをぶち壊す鈍重頑丈なアンロック・ユニットの稼働盾、見た事もない異常な高火力。

全くデータにない機体がポンツと出てきた上にそれを操るのが秘匿されてきた二人目のIS操縦者なのだから国家国家としては予算を大きく削ってまで手に入れたい。

今頃各国の研究者たちは特異と呼べるエネミーの稼働データを少しでも記録しようとしているだろう。

茜雫はこのあとあるであろう国や企業の勧誘がめんどくさくて堪らない。

常人なら飛びつくようないるんな好条件を提示してくるが、帰属のないと思われるエネミーと茜雫のデータを取りたいという魂胆が見え見えで辟易する。

そんなくだらない事に自分を実験モルモットとして人生を削る価値もない。

いつそエネミーの最大火力を貴賓席にぶち込んでやろうかと本気で検討する。

そんな事すれば国家相手に戦争する事になるのだが、負ける気はしない。

例えISを投入されようが火力で押し負ける事などありえないし、エネミーのコンセプトである『単機による戦場の広域殲滅または要塞の単機制圧』に物を言わせて駐屯基地を片っ端から消して行けばISなど稼動時間の限界がきて、ただの鉄塊に変わるだろう。

そんな物騒な事を考えながら視線を元に戻す。

一夏とラウラが見つめあっている。

これだけ聞けば何とも甘美で愛し合っているみたいに聴こえるが、現実には茜雫の思い通りになっていない。

正確には睨み合っていた。

それはもう、バチツバチツと火花は空中で花を咲かしているのではないかと思ってしまうほど盛大に。

夜で電気をつけなかったら、さぞ綺麗な光となっていただろう。

現在反目しあっているこの二人はもうすでに戦いが始まっているのだろう。

一夏がラウラを鋭く睨みつけ、ラウラが愉悦と余裕のこもった眼差しでそれを正面から受け止めるのではなく叩き返す。

一夏を巡る修羅場でこんな状態ならひゃっほー？と喜ぶのだが、そうではないのが残念で仕方がない。

ラウラの一夏に向けている視線が冷たい視線ではなく熱い視線ならこちらにも『一夏ハーレム計画』に拍車をかけるといふのに。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ボーデビィツヒさん？」

「何だ・・・・・・・・・・・・・・・・？」

問いかけに対する返答まで氷のように冷たく真から凍えそうだ。

顔を向けずに目だけでこちらを見るのはとても迫力があつた。

自分より30cmちかい身長差があるというのに、身長以上の威圧感がある。

「何度も繰り返すけど、一夏を殺すのは無しだからね。ポコポコまではOKだけど。」

これがプライベートチャンネルによる会話ではなかったら、こ

ここで一夏が「ボコボコならいいのかよ!？」とツッコミを入れるに  
違いない。

「分かっている。何度も繰り返すな。」

茜雫の最後の確認にラウラは懽然としたようすで答える。

「いや、何か両者今から決闘しますよ、みたいな今から殺しあ  
います、みたいな空気を醸し出してたから . . . . .」

確かにしつこいかもしれないが一夏を殺されてしまったのはこち  
らが困る。

「織斑一夏を殺してしまったら教官が悲しまれる。」

「そりゃあ、残されたたった一人の肉親らしいしね . . . . .  
. . . . . てか、ボーデビッツヒさん、千冬さん大好きだね。」

千冬の単語にラウラの頬が僅かの緩むのが視覚補助を受けた茜  
雫の目に映った。

「ふん、教官が居られなかったら今の私は存在していない。」

「へえ。」

ラウラは口の端を僅かに吊り上げて微笑う。

千冬がドイツ軍で教官を務めた一ヶ月の間に何があったのか少  
し気になった。



「貴様は嫌いなのか？」

ラウラの問いに茜雫も微笑う。

「まさか。」

もし、自分があの人と出逢うことがなかったら、おそらく自分は『人』を知ることにはなかっただろう。

千冬や湊には感謝してもし切れない恩がある。

「俺も好きだよ。」

「……………ふん。」

何故かラウラは少し不満気なようすで前を向きなおった。

茜雫は頭に疑問符を浮かべるが大方自分の敬愛する人を自分以外にも同じようなのがいたからなんとなく不満なのだろう。

「あと五秒か……………」

茜雫の眩きと相手側が身構えるのは同時だった。

シャルロットは開始一分前の合図を確認すると、今回決勝で対決する相手側に目を移す。

右側には相変わらず一夏と睨み合っているラウラ。

左側には珍しくうんざりとした顔を露わにして観客席の一角を見つめている茜雫がラウラより一歩下がった状態でP I Cの浮力に より浮かんでいる。

茜雫の胸元の細いチェーンで繋がれたドックタグがキラキラと太陽の光に反射して光っている。

「一夏。」

「ん？どうした？シャルル？」

オープンチャンネルでの会話は職員を通じており、録音されているので、『男子生徒』としてシャルロットを呼ぶ。

シャルロットは念のために確認しておく。

「あんまり感情的にならないでね。」

「分かってるぞ。」

一夏は少し拗ねたように口を尖らせる。

シャルロットは思ったより冷静だった一夏に少し安心。

「それにしても、茜雲って学年別トーナメントで始めて専用機を使っんじゃない？」

シャルロットが茜雲の専用機を見たのは先日の乱闘事件での一件のみだ。

茜雲は授業の時でも訓練の時でもわざわざ訓練機を用意して使う。

「俺だっけ見たのは今回で三回目だからな。あいつ、あんまり機体データとか国や企業がどんなにデータを取らせてくれっついても秘密にしてるし、スキャンしても特に重要なデータがでないようにしてるらしい。」

一夏も国や企業のなんか偉そうな人たちが何度も茜雲に会いにくるのを見て少し同情する。

そういつて要件で呼び出されるたびに茜雫は苦虫を噛み潰したよう顔をしていた。

「僕の祖国のデュノア社でもいろいろ騒いでたけど、どこで造ったんだろっね。」

「俺にもわかんね。前に直接聞いても秘密っていうし、いろんな国のIS見てもどこの国とも似てねえし。」

因みにシャルロットは『シャルル』として接していた時に茜雫の謎に包まれた専用機のデータを取ってこいとも命令されていたのだが、その専用機自体が出てこないのでもうしようもないお手上げ状態だった。

まあ、今となってはそんなことどうでもいいのだが。

「でも、世界規模で騒ぐぐらいのオーバーテクノロジーな代物なら、ISが出てきたときみたいに強制的に処置が下るんじゃない？特にIS委員会とかデータ開示を求めそうだし。」

一夏が男子初でISを稼働できると分かった時に強制的にIS学園に入学させたのがIS委員会だ。

茜雫にも何かしら言っただけでこなかったのだろうか。

「IS委員会の役員が何度来ても舌先三寸で追い返してる。」

最近は視界にもいれたくないとか言っただけでそういう呼び出しを聞いた瞬間突っぱねている。

そのうち拘束されるんじゃないかと一夏は密かに心配している。

「……………茜雫ってビックリ箱みたいだね。何度でも驚かされる。しかも、やたらハイスペックだし。」

今世界の中心はISで回っている。

それを統制するIS委員会を敵に回すなどシャルロットには到底無理だ。

シャルロットは少し肩を落とした。

一夏がラウラと対戦するのだったら、おそらく茜雫はシャルロットに向かってくるだろう。

そうなった場合の対処法を少しでも立てておこうと思ったのだが、どうやら無策で臨むしかないらしい。

一夏の対ラウラ戦のことに気を取られて茜雫のことは失念してしまっていた。

ラウラたちの方は何かを話している。

茜雫は誰とも話さないラウラと普通に会話している。

「センたちは余裕そうだな。」

一夏もシャルロットの視線を追って茜雫たちが何やら話しているのを発見した。

その時、上空に何かが浮かび上がった。

一夏とシャルロットがそちらに目を移すとそれは開始まであと十秒を表す立体空中投影パネルだった。

「いくぞ！！シャルロット！！」

「うん、一夏！！」

試合五秒前。

「ああ、やりたくない。ていうか、めんどくさい。」

さらに熱の上がる観客席を見てもう帰りたい茜雲。

試合四秒前。

「うわ、なんか茜雫のやる気がどんどん落ち込んでるのがすく分かる。」

決勝戦の相手とは思えない茜雫に呆れるシャルロット。

試合三秒前。

「決勝までのお前が上げられるのか心配だったぞ？」

冷たい眼差しと冷笑で一夏を挑発するラウラ。

試合二秒前。

「それは済まなかったな。」

ラウラの冷たい挑発を悠然と流す一夏。

試合一秒前。

「さてと、一夏とシャルルを叩き潰しますか!!.....  
.....ボーデビッツヒさんが.....」

「ラウラ任せなの!?!」

最後に軽いコントをする茜雫とシャルロット。

試合開始!!

カウントが0を示した瞬間、けたたましいブザーが歓声の上がるアリーナ以上の音量で鳴り響く。

「叩き潰す!!!」

一夏とラウラの言葉が奇しくも重なった。

そして、行動も重なる。

お互いに瞬間加速を発動。  
イグニッション・ブースト

まるで、今まで抑さえつけていた物を解放させるように一気に加速。

爆発的な推進力を得た両者は、ほんの数瞬で彼我の距離を詰め、一夏は両手に握られた雪片式型を、ラウラは両肘からレーザー手刀を展開して相手に叩きつける。

突っ込んだ勢いを殺すかのように両者は罅迫り合いをするが、すぐさま飛び退き、また斬り合う。

一夏が名前通り雪のように白い雪片式型の白刃をラウラに上段から振り下ろす。

ラウラは右マニピュレーターに展開したレーザー手刀で捌くと、カウンターとして左マニピュレーターにも展開したレーザー手刀を横に薙ぐ。

取り回しが良く素早い動きで振るわれたレーザー手刀を身をかなり低くして躲す。



振り下ろした雪片式型の刃を上に戻しつつ、柄を逆手に握り、振り上げる。

カウンターをカウンターで返されたラウラは素早くスラストを噴かし、バックステップで躲す。

「なんだ、簡単に潰れてくれなくて良かったぞ？」

ラウラが薄く笑いながら一夏を挑発する。

「簡単に終わったらお前を潰せないからな。」

ラウラ相手にダメージを受けなかった一夏は自分の上達を実感して、余裕の表情でそれを返す。

「ふん。」

ラウラは一夏の余裕を鼻で笑い飛ばすと一気に距離を詰める。

両者はそれぞれの獲物を振るい、斬り結ぶ。

「なにやってるの？茜雫？」

「えっ？」

茜雫は開始の合図であるブザーがけたたましく鳴り響くのいうさそうにした後、シャルロットに背中を向けて酔っ払い運転のようにはぐらかすとP.I.Cの浮力に身を任せるようにフィールド外円部に移動していた。

「いや、そんな本気で不思議そうな顔されてもこっちが困るんだけど……………」

真面目に茜雫に展開したアサルトライフルを向けているシャルロットがバカみたいだ。

「この試合なにか分かってる？」

「学年別トーナメントの決勝戦。ついでに面倒……………  
いや、幸いなことにタッグマッチ。」

幸いなのは突っ立っててもパートナーが頑張ってくれば勝ち上がれるという事だろう。

素で即答されたシャルロットの方が反応に困った。

「分かってるならちゃんとやるよ……………」

「ちよつと疲れた……………」

「始まって十秒も経ってないのにこの発言!？」

本当に疲れた表情で隅に避難しながらの茜雫の軟弱発言にシャルロットは声を上げる。

確かに朝から試合尽くしだったかもしれないが、音を上げるほどではないはずだ。

特に茜雫は三試合目以降はラウラと共闘して茜雫自身は

隅に移動し終わると茜雫は空中投影ディスプレイを展開して何やら弄りだす。

「今度はなにをやってるの……………」

「機体の出力の設定。」

「今!？」

「まあ、この機体全然使わないし、この前クラス対抗戦で使った時は設定が狂ってたせいであるいろいろ大変だったし。」

クラス対抗戦の時は、誤ってエネルギー出力のリミッターが緩すぎた。

おかげで、あの過剰な高火力で面倒な人たちに目を付けられてその日から国やら企業の方々からしつこい勧誘活動を受けることになってしまった。

あれでも限界出力の1/2だったのだが……………

投影されたコンソールを叩きながら茜雫は頭を痛める。

「シャルルは一夏の援護に行つてやりなよ。どうせ一夏がすく不利なんだし。」

AICの装備されたシュヴァルツエア・レーゲンの前では近接武装しかない白式では手に余るはずだ。

特に一夏とラウラでは地力が違う。

今はラウラもAICを使っていないが、おそらくそのうち捕まるだろう。

なんなことを考えてたらシャルロットは一夏の援護に向かうべく、激戦を繰り広げている戦域へと駆けていった。

「物分かりが良くて助かるよ。」

コンソールを叩く茜雫の眩きはアリーナに大きく上がる歓声に掻き消された。

一夏の雪片式型とラウラのレーザー手刀がぶつかり合うたびに接触部分から細く線香花火のような火花がパチパチと華をさかしていた。

一夏はラウラに決定打を与えるべく、白式の最強の矛である零落白夜を展開しながらラウラと斬り結ぶ。

本当ならシュヴァルツエア・レーゲンのレーザー手刀程度の光学兵器など白式の零落白夜の前では棒切れ程度でしかないのだが、長期戦になることを考慮して出力は最大にまで絞ってある。

そのため、レーザー手刀で零落白夜の刃と打ち合っても少しの間だけなら斬り合うことができる。

その少しの間でラウラは自分に迫る零落白夜を弾き返す。

一夏は必死に攻めたてるが、手数ではラウラの方が自分よりも二倍の上に取り回しもあちらの方が効く。

どんなに激しく攻め立ててもあっさりと捌かれてしまう。

状況は拮抗しているが、ラウラも加減をしているし、零落白夜

によってジリジリと一夏のエネルギー残量も減っていく。

茜雫ならここで相手の隙をついた方法で打開するのだろう。

茜雫が接近戦で押し負けることなど想像できないが。

一夏には生憎茜雫のように高い近接格闘能力も銃器の特性を活かした戦法を取れるような頭もない。

なら、意外性で攻める。

一夏はラウラのレーザー手刀による突きを半身になって躲す。

躲した瞬間、補助スラスターのみを噴かしてバックステップしながら、ウィングスラスターのエネルギーを充電。

ラウラのレーザー手刀の射程から外れた瞬間に一気にエネルギーを放出。

クイックとも呼ぶことができる高機動で前進しながらその勢いでラウラに斬りかかる。

しかし、ラウラはまるで分かっていたのではないかと勘違いするほどの反応速度でシュヴァルツェア・レーゲンの掌底を突き出す。

一夏の身体はまず腕が固定され、次に胴、そして全身と、病原菌が身体を侵食するかのようになり、PICが身体をガツチリと固定する。

押しても引いても寸分も動かない。

試しにスラスタも噴かしてみるがビクともしなかった。

予想をしていたが、ちょっと期待をしていただけあってここまではビククリだ。

「今ので虚を突いたつもりか？ 分かりやすいな。スラスタ操作に集中している時がバレバレだ。」

「……………そりやどうも。以心伝心で何よりだ。」

「では、次に私が次にどうするかも分かるだろう。」

分かりたくもないが、分かる。

ちらっとハイパーセンサーで周囲を確認してニヤリと笑ってしまつのを慌てて抑える。

と同時にラウラのシュヴァルツェア・レーゲンの右肩の稼働部分回転。

ガコン、という音と共にリボルバーの回転音が耳に響き、白式のハイパーセンサーが敵ISの大口径レールカノンの安全装置解除、初段が装填された事を確認。

次にあるのは、

「敵ISからロックオンされました。……………警告！」

機械的な電子音とウィンドウが視界に映る。

エネルギーシールドや絶対防御で絶対に死なないと分かっても、こんな人一人を吹き飛ばすには大き過ぎる銃口を向けられれば怖い。

一夏高鳴る心臓を必死に抑さえつける。

大丈夫。

これは一人じゃない。

まさに撃たれる瞬間、

「させないよ!!」

頼れるパートナーの声が一夏の耳に入ると同時に、重い銃撃音がフィールドに鳴り響く。

一夏は直ぐ顔の隣に何かが凄まじいスピードで通り過ぎるのを頬に感じる風で理解する。

ラウラの目の前でエネルギーシールドで弾けた徹甲弾<sup>HE</sup>が爆発し、そんな物が数発自分の直ぐ顔の近くを通り過ぎたことに背筋が寒くなる。

衝撃で銃身をズラされたラウラの大口徑レールカノンも砲弾は一夏から逸れて空を貫く。

「チツ……………」



さらに畳み掛けられると予感したラウラはA I Cを切って急後退で間合いをとった。

解放された一夏がシャルロットを確認すると、シャルロットは61口径のアサルトカノンでラウラを狙い撃ちしよう構えていた。

「逃がさない!!」

シャルロットは二、三発撃つと銃身を前に構えて突撃体制を取る。

光の粒子が寄り集まり、一丁のアサルトライフルを造り出す。

事前呼び出し無しに一秒もかからず量子展開できるのがシャルロットが得意としている『高速切替』だ。

シャルロットの器用さと高い判断力によりできる技能なのだが、訓練時には一夏もボコボコにされた。

茜雫も展開が早いシャルロットの高速切替はそれの上をいく。

「あの男は何をやってるのだ………?」

シャルロットは茜雫と戦っているだろうと考えていたラウラは眉を寄せて茜雫の姿を探す。

茜雫がやられたということはないだろうがノータッチという事はないはずだ。

辺りを見渡したラウラはすぐさま発見。

茜雫は呑気に空中投影ディスプレイを見ながらコンソールを叩き、首をひねっていた。

「機体の調整だってさッ!！」

「.....」

「

シャルロットがアサルトライフルを撃ちながら親切に教え、ラウラは出る言葉もなかった。

「ある意味頼りないパートナーを持って同情するぜ!！」

ちよつとで遅れた一夏も雪片式型を振るいながら叫ぶ。

一夏はとにかくラウラに喰らい付く。

距離を潰さなければこちらは攻撃できない上に厄介な六基のワイヤーブレードがこちらに迫ってくる。

それに絡め取られてしまえば、大口径レールカノンの餌食だ。

しかし、一夏の接近により、誤射を恐れたシャルロットの援護の砲撃は薄くなる。

「.....そろそろ終わらせる。」

「.....ッ!！」

ラウラは突如、両腕のレーザー手刀を消す。

右掌底がこちらに突き出された瞬間、絶対零度の冷気に氷漬けにされたかのようにピシリと身体の自由が効かなくなる。

「消える。」

短い言葉とともに六基のワイヤーブレードが全て射出され、夏—の身体が切り刻まれる。

「ぐうツ………!!!」

身体に走る衝撃を歯を食い縛って耐える。

さらにラウラは捻じめるかのように回転をくわえて一夏を叩きつけた。

ラウラは追撃を加えようとするが、降り注ぐ銃弾の雨に追撃を中断。

後退して間合いを取る。

「一夏!!!大丈夫!?!」

「かなり痛えけど大丈夫だ。」

「よかった。次はあんまり突っ込みすぎないでね。」

「ぐツ!!!すまねえ。」

「夏は仕切り直しとばかりに立ち上がって雪片式型を構える。

「今度は見せてやるでしょうぜ、俺たちのコンビネーションを  
な。  
」

「わあ、なんか一年生とは思えない戦いになってきましたね。」

管制室でコンソールを操作していた真耶が驚嘆の声を上げる。

モニター上で繰り広げられている戦いは、素人同士のただの銃の撃ち合いと違い、動きが出来上がっている。

「二年生、三年生と言ってもいいぐらいの戦いぶりだ。」

「……………にしても、沙月君、戦闘に参加する  
気0ですね……………」

「まったく、あのバカは……………」

隣で立っている千冬も少し苦い顔をする。

貴賓席を映すモニターには茜雫を指差して苦々しい顔つきで何  
やら言い合っている各国の大臣たちがいる。

試合開始から茜雫は全く隅っこから動いていない。

「多分、一応専用機を展開しておくけどデータとか取られるの  
が嫌だからあんまり動きたくないんじゃないかな。前みたいに機体  
性能を公然と曝け出したら各国から煩いし。」

後ろに設けられた机のうえで湊が砂糖とミルクたっぷりのコー  
ヒーを熱そうにフーフーと息で冷ましながら飲んでいた。

たまに熱そうにカップをソーサーの上に置いて、少し経つとま  
たカップを手に取り、フーフーと息で冷ましながら飲んでいる。

なんでもないような口調だったが、そのトーンは若干嫌悪感が  
こもっている。

「不愉快そうだな。」

「だってあの頭でっかちのアホ面たち嫌いだし。」

千冬の問題に湊が口を尖らせて辛辣な言葉で返し、拗ねたよう

にコーヒーをズズズと飲む。

その際に一度に飲み過ぎて「熱ッ!!」と口を抑えて悶絶。

猫舌なのに、コーヒーはとても熱い物を好むと変わった趣向をしている。

湊も茜雫と同じようにやたら煩い高官などを極端に嫌う。

現に今も苦々しい顔つきで何やら言い合っている各国の大臣たちを薄く笑って見ている。

理由は沢山あるらしいが、一番は親友である束が造ったISを最初はバカにしたくせに後から横からいきなり口出しされたうえにそれを本来の目的を忘れて軍事利用。

さらにはコアの製作方法を唯一知っている束を保護という名の拘束をしようと追いかけて回している事だ。

まあ、そのせいで篠ノ之家は分裂してしまったのだから否定の仕様がなない。

「それにしても、今回のいきなりの形式変更は、やっぱり先月の事件のせいですか?」

「詳しく知らないが、おそらくそうだろう。」

「今年は第三世代型兵器のテストが多いからねえ。というか、今年が多過ぎてこっちも大変なんですけど.....  
ああ、これが終わったら書類どうしよう。」

「お前のは自業自得だ。あと好い加減にしろ、苦情が私にくるのだぞ。少しはこっちの身になれ。」

現在湊の仕事机は書類のスカイツリーが建設中。

下の書類を取り出すのも一苦労だ。

苦情はなぜ千冬にくるかというと、おそらく誰もが湊自身に言うよりも千冬に言ったほうが効果的だと誰もが思っているのだろう。いつまでも親離れできないような親友に千冬は頭を痛める。

「自衛目的、とはいえピッカピカの一年生にはまだ実践経験を積ませるのは早いと思うんだけどねえ。」

そういう湊がISを完璧に乗りこなしたのは14歳である。

それ以前に湊は中学一年生でクレー射撃や狙撃で世界大会で優勝しているぐらい銃器に精通している。

なんでも銃は自然現象や扱う人間の純粹な意思で真っ直ぐ飛んで行くのがいいらしい。

千冬にしてみれば銃は弾が切れれば何もできないし、自分の手で実感が難しいためあまり好ましい物ではないのだが。

モニターではラウラが一对二でありながら、互角以上に渡り合っラウラが映っていた。

今もシャルロットの正確な射撃を回避しながら一夏の攻撃を捌き切っている。

さらには反撃まで同時にしているのだから一年とは思えない技量だ。

「強いですねえ。ボーデビィツヒさん。」

「ふん。」

感嘆した様子の真耶に千冬は鼻を鳴らす。

「相変わらず、強さを攻撃力と同義だと思っているな。戦闘力のみが『強さ』ではない。」

少なくとも千冬と湊は本当の意味で『強い』人物を知っている。

と、同時にその人物は誰よりも『弱く』もある。

なのに誰もが頼ろうとせずに擦り切れた身体をさらには削って何かを成し遂げようとしている。

「あっ!!」

真耶の声が千冬の思考を寸断する。

「どつたの?まやち?」



「沙月君が動きました。」

## 三十四話 独戦（後書き）

皆さんに意見を求めます。

あんまり話数を重ねても読者数が増えないのはなぜでしょう？

題名を分かりやすくしろ、とか、あらずじ変えろ、とか、文脈がわかりづらい、などの修正点の指摘を募集しています。

なんかもっとたくさんの人に読んで貰えるアイデアがあったら是非ください。

三十五話 乱入（前書き）

遅くなりました

すみませんお許しを>（）・・・（）<

## 三十五話 乱入

「おお、なんか織斑君たちが優勢になってきてるね。」

アリーナ観客席で目の前の学年別トーナメント決勝戦を箒の隣の席で見ているニーナが興味ありげに戦況を見ている。

それに試合が始まってずっと黙って見ていた箒も同感する。

「一対二だからな。それに一夏のパートナーはシャルルだ。いくらラウラでもそうやすやすと勝ちにはいけないだろう。」

別に箒はラウラを庇っているわけではないのだが、シャルロットの実力を知っていた。

一夏の訓練の際に一回だけシャルロットと模擬戦をやったのだが、あっさり負けた。

性格や機体の相性が悪かったのもある。

箒はどちらかと言うと正攻法で攻め、シャルロットは多彩な武器を上手く織り交ぜ、使い分けた闘い方をする。

さらに箒の使う打鉄は近接ブレード一本で白式のような高機動戦などできない、対してラファール・リヴァイヴは主に遠中距離を得意としており機動性も確保されている。

打鉄は防御型のため、すぐに落とされるような事はなかったが、ISは初心者で箒と打鉄では代表候補生にもなれるほどの技量のシャルロットとラファール・リヴァイヴに勝てるはずもなかった。

と、思ったところで負けた理由が言い訳がましい事に少し自己嫌悪に陥る。

それを忘れるために箒は目の前の試合に意識を向けた。

「そっいや、織斑君たちばかり見てたけど……………」  
「……………沙月君、全然動かないね。」

ニーナがあらら、と言った感じの苦笑を浮かべてフィールドの隅に視線を向ける。

そこには、ポツンと茜雫がPICで漂っている。

茜雫は空中投影ディスプレイを見ながら、首を傾げたり、捻ったりしながらコンソールを叩いている。

篤もあまりのやる気のなさに苦い顔をする。

「試合開始早々からあそこで何やらやっているが、やる気があるのか、あいつは？」

「なんかどーでもいっばいね。てか、他の人も沙月君の存在、織斑君たちに気を取られて忘れてるっばいし。」

呆れる篤にニーナはしみじみと相槌をうつ。

他の観客も最初は茜雫のやる気のなさに何やら騒いでいたが、今では一夏たちに目がいつており、今は特に気にした人間はいなかった。

篤とニーナは茜雫の闘うところも見て見たかったのだが、今のところは無理そうだ。

その時、周りで一際大きな声上がる。

よそ見をしていた篤とニーナが慌ててフィールドの方を見ると、試合の戦況が動いていた。

「これで決めるっ!!」

一夏が自身の切り札である零落白夜を展開させる。

右手に握られた雪片式型の刀身が機械的に二つに割れ、代わりに光の刃が現れる。

ラウラは出力を上げられたそれを見て一瞬怯む様子を見せるが、すぐに余裕の笑みを取り戻す。

「触れば例外無くエネルギーを消し去ると聞いているが……  
……それなら当たらなければいいだけだ!!」

「さっきみたいにレーザー手刀じゃ受けらんねえぜ。」

一夏の忠告をラウラは鼻で嗤う。

「ならば、触れなければいい。」

そう言って、シユヴァルツエア・レーゲンの右掌底を突き出す。

AICによる見えない拘束の手を一夏は直感で急停止・転身・  
急加速で躲していく。

「ちよろちよると目障りな……!!」

思ま思ましそうにラウラは吐き捨てる。今度はワイヤーブレードを全て射出。

攻勢の密度が大きくなる。

「一夏！！前方二時の方向に突破！！その後回頭して一旦射程範囲から離れて！！」

「ああ、分かった！！」

上空から一夏への援護射撃をしつつラウラの攻撃の穴を見つけて指示を出していく。

シャルロットの的確な指示で一夏はラウラのワイヤーブレードの射程範囲外へと退避する。

「ちっ……………！！」

ラウラは自分から距離を詰める。

一夏も突進しながら迎え撃つように雪片式型を構える。

「無駄だ。貴様の攻撃は読んでいる。」

「普通に斬りかければな！！」

一夏は顔の隣に雪片式型を構えて切っ先をラウラに向けて、打突の構えをする。

ラウラにとって対処法は変わらないかも知れないが、線の斬撃より、点の打突の方が捉えにくいはず。



これならA I Cで腕を捕らえるのも難しいはずだ。

「無駄な事を!!！」

一夏の身体はA I Cによって簡単に捉えられてしまった。

空中で一夏の身体はガツチリと固定されてしまった。

「腕にこだわらなくても、お前の動きを止めれば……」

「……」

「……. . . . . ああ、何だ。忘れていいのか。それとも知らないのか？俺たちは……. . . . . 二人なんだぜ？」

「……. . . . . ツ!？」

ラウラは慌てて周囲に視線を巡らせるが、遅い。

ラウラがシャルロットを視認して時にはもうシャルロットは零距離とも呼んでもいい距離にいた。

シャルロットは素早く両手に展開したショットガンを高速二連射<sup>ツッ</sup>で撃ち込む。

一瞬の静寂の後、シュヴァルツェア・レーゲンの主武装である大口径レールカノンは予備弾薬に引火したのか、耳をつんざく轟音をたてながら爆散した。

「くっ……. . . . . !！」

自分のすぐ真横で起きた爆発にラウラが怯んだ。

ここで一夏のA I Cの見えない拘束が解かれた。

ラウラのA I Cには致命的………と云つより唯一の弱点がある。

A I Cは『停止させる対象物に意識を集中させなければ効果を維持できない』

よつて、一対一では反則的な効果のあるA I Cも多数に意識を取られる一対多の状況下では効果が薄いのだ。

「うおおおッ! !」

一旦離れた一夏がラウラに上段に雪片式型を構えて斬りかかる。

「バカが! !」

ラウラは素早く右手にレーザー手刀を展開させる。

左手は何もしていない事からおそらく左手のA I Cで拘束している隙に素早く右手のレーザー手刀で斬りかかるのだらう。

「やらせない! !」

「貴様は邪魔だ! !」

ラウラは一夏の援護射撃をしようとするシャルロットにワイヤーブレードを射出。

A I Cでの拘束を断念したのか、両手に展開したレーザー手刀で一夏に斬りかかりながらもシャルロットへのスピード、高精度の伴った攻撃をし続けるラウラの技量に舌を巻かざるを得ない。

一夏も自分にこのぐらいの技量があれば、と思ってしまう。

その時、シャルロットがワイヤーブレードを一基をスライドステップで躲したと思ったら、回り込むようにしかけてきた二基のワイヤーブレードの被弾を許してしまう。

その際に持っていたアサルトライフルを地面に落としてしまう。

「ああッ!!」

「次は貴様だ!! 墜ちろッ!!」

シャルロットの被弾に一夏の思考が囚われた一瞬の隙を突いて、ラウラのレーザー手刀が横薙ぎに振るわれた。

衝撃で一夏は土埃を上げながら地面を滑るように吹っ飛ばされる。

「ぐあっ……………!!」

一夏が体制を立て直そうとするが、それよりも早くラウラのレーザー手刀が振りかぶられる。

「私の勝ちだ!!」

高らかに勝利宣言をするラウラに、高速で接近する影があった。

「まだ終わりじゃないよ!!」

高速の影はシャルロットだった。

「この加速力……瞬間加速だ?!？」  
イグニッション・ブースト

事前のデータにはそんな情報なかったはず、とラウラが驚くが、パートナーである一夏も驚いた。

今まで、模擬戦でも一度も瞬間加速などやっていなかったはずだ。

シャルロットが二人の驚愕を汲み取ったかのような口を開いた。

「今初めて使ったからね、知っているはずないよ。」

「この戦いの中で覚えたのか……!？」

ラウラの驚きの声に一夏も同感する。

瞬間加速は高等加速法だ。

一朝一夕で覚えられる様な代物じゃない。

一夏は入学当初のセシリア戦に向けた千冬との地獄の特訓を思い出して、涙を飲んだ。

もはや、シャルロットの器用さは技能と呼ぶべきものだろう。

先ほど一夏はラウラにこのぐらいの技量があれば、と思ったが、今度はシャルロットにも同じような事を思ってしまった。

「だが、私の停止結界の前では……………!」

AICを起動させようと右掌底を突きだそうとしたラウラの動きが……………止まった。

突如、後ろからの衝撃にラウラの身体が前のめりになる。

「なにが……………?」

明らかかな銃撃の衝撃にラウラが周囲に視線を巡らせ、そして一夏の姿を発見した。

一夏はアサルトライフルを構えている。

ラウラがそれを忌ま忌ましいそつに、苦々しそつに見る。

「貴様……………近接ブレード一本だろうが……………  
……………それにそのアサルトライフルは……………  
!?!」

「そこで拾ったんだよ。」

一夏が拾ったのは先ほどシャルロットがラウラのワイヤーブレードの攻撃を受けた時に取り落としたラファール・リヴァイヴのアサルトライフルだ。

取り落とした際に、チラッとシャルロットがこちらに目配せを送ってきた。

この時に、シャルロットの意思を読む事ができた。

A I Cの致命的な弱点を突くためにシャルロットは攻撃を受けた際にわざと取り落としたのだ。

拡張領域パス・スロットのない一夏にアサルトライフルを渡す為に。

これが分かった時には、一夏はシャルロットにやはり頭が上がらないと思った。

頭の回転、それを即断する判断力、もしかしたら茜雫といいところ勝負なのかも知れない。

シャルロットと茜雫が闘った事はないが、闘ったらどうなるのだろう、と頭の隅で思う。

「これならA I Cも使えないだろ!!」

「う、のっ、・・・・・・・・・・死に損ないがあ!!」

冷静さを保ちつつ、ラウラが吠える。

振り返りざまにワイヤーブレードを全て一夏を囲むように射出。

避けられないと判断した一夏は一瞬凄むが、相棒の存在を思い出してニヤリと笑う。

「どこを見てるの?」

ラウラの耳にシャルロットの高めの声が聞こえた。

すぐ近くで。

「間合いに入れた!!」

「だからなんだ!! たかが第二世代の攻撃力でこのシュヴァルツェア・レーゲンを落とすなど . . . . .」

そこで気づく。

フランス製の傑作機と呼ばれた第二世代機 . . . . . ラフ  
アール・リヴァイヴには単純な破壊力なら最強と呼ばれる武装があ  
る事に。

ラウラの内心が驚愕に満ちるのが分かったのかシャルロットは  
勝利を確信する。

そして『アレ』を起動させるために意識を傾ける。

「この距離なら外さな . . . . .」

凄まじい爆音と網膜を焼き尽くす爆炎がシャルロットを飲み込  
む。

衝撃でラウラに突っ込む形だったシャルロットはラウラの脇に  
逸れるように通り過ぎる。

そして、地面を数m土埃を上げながら滑るとGを打ち消す為に回っていたPICで姿勢を立て直す。

【.....ッ!?】

アリーナ全体の人間が突然の事態に驚いた。

発砲時の音の大きさ。

そして、一部の.....特にIS関係の人間は気づいた。

エネルギー兵器特有の着弾時の発光。

あの爆発量、火薬兵器なら必ずあるはず爆煙の異常な少なさ。

アレは木炭やニトログリセリンなどの科学薬品などが燃焼した硝煙では無く、純粹に空気中のわずかなチリのみが燃えたことによる薄っすらとした爆煙。

かなりのエネルギー総量を誇る光学兵器による砲撃だ。

一夏、シャルロット、ラウラでエネルギー兵器の射撃武装を持っている人間はいない。

となると、

全員の視線が自然と最後の一人に向けられる。



「『どこを見てるの?』」

それは先ほどラウラに浴びせた言葉だった。

ひどく楽しいげな声が静まったアリーナに流れる。

「『……………ああ、何だ。忘れていたのか。それとも知らないのか?俺たちは……………二人なんだぜ?』」

そう一夏とシャルロットの声色を真似て言いながら、こちらにエネルギーライフルを向けているのは、今まで動こうとしなかった沙月茜雫だった。

その表情はいつものように口の端しを吊り上げてガキ大将のような余裕の笑みを浮かべていた。

茜雫は何の身を構えること無く、無防備なペースでラウラに近づいていく。

「やっと動いたのか、セン。」

「いやあ、なんか周りがうるさいなあ、て思って君たち眺めたらなんかすごくいい雰囲気だったし。」

「何だよ……………すごくいい雰囲気って。」

一夏が肩を落として脱力する。

そのいい雰囲気をぶち壊す天才が目の前にいた。

茜雫はラウラに近づいて状態を確認すると、ありやいやと言った感じで口を開く。

「うわあ、なんか油断しちゃったっばいね。と言うより、上手く弱点を突かれちゃったっばいね。誰かもう一人いればもっとマシだったかな？」

「……………その『もう一人』が貴様だろうが。」

ラウラは若干憤りを感じつつ、平然を装う。

「そう言われればそうだ。」

その怒りを敏感の感じ取っつていながら茜雫は微笑う。

「んじゃ、俺も参加しようかな。」

「「!？」」

茜雫の参戦布告に一夏はすぐさま身構える。

茜雫は自身の腕前は言うまでも無く、火力、近接格闘、機動力、において自分を上回っている。

しかも、茜雫は戦闘に参加していない為、残量エネルギーもかなり有り余っているはずだ。

「待て。」

「なに、ボーデビッツヒさん？」

「私はまだ負けてなどいないぞ？」

「知ってる。だから、俺がシャルロットを引き受けるから、ボーデビッツヒさんは一夏ってことで。」

「……………始めからそうしておけばよかったのではないのか？」

ラウラに半眼で睨まれて茜雫はうつと少し身体を縮める。

「ちょっと設定弄ってたから……………すみません。」

言い訳しようとしたが無言の圧力に耐えきれずに謝る。

「……………まあ、とりあえず行こうかな。」

さしてやる気の見えない宣告をして茜雫はシャルロットの元に駆けつけた。

「僕の相手は茜雫かな？」

「よろしく。」

少し挑発気味に言ったが笑って返されてしまった。

少しでも心の余裕を崩して置きたいのだが、この凶太い男には効きそうにない。

シャルロットは内心焦る。

正直言つて、打開策が見つからない。

茜雫のエネミーは見た目こそアンバランスだが性能はバランスが取れていた。

防御など全く考慮しない空戦特化の鋭角的で全体的に細いフレーム。

それに対して堅牢堅実な無骨で大型砲門を備えた大型の稼働盾。

素早く動き、避けきれなければ防ぎ、大火力を叩き込む。

第二、第三世代は基本的に素早く動いて防御はエネルギーバリアに任せて装甲を削る、と言った傾向があるが、あそこまで削った装甲はない。

設計者はなかなか大胆なことをする、とぼんやりと思った。

「調整は終わったの？」

「うん、ちょっと甘かったかなあ。」

「甘かった……………?」

「あ、こつちの話。」

茜雫としては上手い具合にリミッターを掛けられたと思ったのだが、先ほどのシャルロットへの攻撃から威力が高すぎたと少し反省。

感覚が鈍ってんのかなあ、と少しショックでもある。

「始めますか。」

「……………!!」

茜雫は両手のエネルギーライフルを構えてばら撒くように乱射。

光学兵器独特の小さな発砲音とともに、圧縮エネルギーの塊が濁流の様にシャルロットを含めた一帯に流れ込む。

耳をつんざく轟音とともに地面が抉れ、弾け、爆ぜ、土そのものを巻き上げる。

「……………やば。」

流石に冷や汗を流す。

会場……主に貴賓席にいるIS関係者は目の前の光景に空いた口が塞がらない。

先の無人機襲撃のときもだったが、あまりの火力、それを許すエネルギー供給量。

「やっぱ、もっとセーブすべきだったか……」

爆煙を裂くようにライトオレンジをした疾風が駆ける。

茜雫は振り下ろされた近接ブレードをエネルギーライフルで受け止める。

「おお、シャルル。生きててホツとしたよ。これ本当。」

「そりゃ生きてるよ。それにアレ、見た目こそ派手だけど、威力は思ったほどではなかったよ？まあ、それでも物理シールドが一枚完全にお釈迦になるほどだったけどね。」

「うーん、エネルギー圧縮率の設定が合わなかったのかなあ。バイパスも結構弄ちやったし……やっぱ、少しぐらい専門家の意見を訊くべきかな。」

シャルロットの言葉に思索するように茜雫がシャルロットの攻撃を捌きながら呟く。

「茜雫ってさあ。」

「ん？何だつて？」

「接近戦が得意なんだよね。」

いきなりの問いに茜雫も戸惑う。

「まあ、そうだけど。」

昔はあまり得意ではなかったが、『眼』のせいで得意にならざるを得なかった。

今となつては接近戦の特訓が懐かしい。

いや、思い出したくない。

「じゃあ、茜雫の専用機に装備されてるあの槍をなんで展開しないの……………」

「……………流石シャルル。人の核心をぐさつと決る。スナイパーに向いてるんじゃない？」

茜雫はちよつとはぐらかそうとする。

事実、茜雫はシャルロットが近接ブレードを展開しているというのに、茜雫は相変わらず一般的なアサルトライフルより一回り大きい取り回しの悪いエネルギーライフルでシャルロットの攻撃を流している。

展開する暇がないというわけではない。

展開する気がないのだ。

この学年別トーナメントの二回戦だって近接格闘型の打鉄を使ったのにも関わらずわざわざラファール・リヴァイヴの武装をインストールして使っていた。

相当近接武装を使わないことにこだわっているのだろう。

「手加減しているのかな……………」

シャルロットにしては静かな怒りが込められている。

代表候補生としてのプライドが怒ったのだろう。

普段怒らないだけあって、その怒気は鋭く痛い。

身体が慣れていないのかも知れない。

「手加減ってわけじゃないんだけど……………」

「じゃあ、なんで？」

「近付いて斬るのは『怖い』んだよね。」

シャルロットの追求に茜雫は困ったように笑う。

「流石に危なくなったら出すけどね、痛いの嫌だし。」

軟弱発言をする。



「じゃあ、無理にでも出させてあげる!!」

その言葉を皮切りに弾幕の密度が濃く、厚くなる。

「マズルフラッシュで目がチカチカするんですけど……」

茜雫はその熱烈過ぎる弾丸の嵐を稼働盾を前方に視界の邪魔にならないように配置して、防ぐ。

ガンカンガンツ、と小気味のいい金属音が音楽のように辺りに響く。

ライフル弾程度ではエネミーの稼働盾を突破するだけの火力に達していない。

ぶっちゃけ言ってラファール・リヴァイヴ相手なら全弾撃ち尽くしてもさして問題には成らないぐらいの耐久性を誇っている。

正直、シャルロットのラファール・リヴァイヴではエネミーには撃ち負ける。

と、茜雫が思った矢先にシャルロットが口を開く。

「弱点みつけ。」

「マジで……」

その言葉に皆が驚くが茜雫はそれほど驚いていない。

むしろ、「結構バレんの早かったなあ」などと焦った様子も見せずに呑気に構えている。

「じゃあ、さつさと終わらせよつかな。なんか暴露ちゃったし。」

また両手のエネルギーライフルを構えて引き金を引き絞る。

指先を引くだけの、たったそれだけの動作で暴力的なエネルギーの砲弾が銃口から放出された。

シャルロットはスライドするかのようにはスラスタで移動し、茜雫の射撃から簡単に逃れる。

茜雫が嫌な予想的中、と言った顔をする。

「そのライフルって、威力絶大だし精度のかなり高いけどさ・  
・・・・・すごく弾速が遅いよね、視認できるぐらいに。」

少し見ればすぐ気づくけどね、とシャルロットが付け足す。

確かにこのエネルギーライフルの弾速は数値で表すと約550 km前後。

数値だけ見れな速いと思うかも知れないが、戦闘機の速度と殆ど変わらないし、少し速度を上げられれば後ろから狙って撃つても追いつけないぐらい遅い。

しかも、光学兵器にはさほど慣性の法則は働かないから、エネミーの平均巡行速度である800kmの状態で前に向けて撃つとライフルそのものが爆発する。

ちなみに高機動パッケージを使用した一般的なISは音速を軽く超えるほどの速度を出せるから射線上に沿って逃げても絶対に追いつけないし、450kmほどの最高速度を出せるノーマルのISなら草野球のピッチャーのストレートが飛んでくる程度。

静止状態でもドッチボールほどの大きさの砲弾が戦闘機の数で突っ込むだけだから音速の弾丸を避けるより遥かに楽だ。

エネミーのエネルギーライフルを見た人間は大抵ど派手な威力ばかりに気を取られてそれに気が付かない。

「これで終わり……………だよね？」

「あともう一つ。」

「……………さいですか。」

今度は茜雫の周囲を回るようにシャルロットが速度強化にカスタムされたラファール・リヴァイヴのスラスタールを操作する。

それを追って茜雫もエネルギーライフルの銃口を腕を限界に後ろに回して向けるが追いつかない。

これは銃弾ではなく、照準……………と言っより身体の向きが追いついていないのだ。

それを見てシャルロットは成功とばかりに微笑う。

「茜雫の機体は………旋回能力が低いんだよね。」

シャルロットの言葉に茜雫はお手上げとばかりに顔をしかめる。

茜雫も最初無人機襲撃の際に使ってあちゃー、と思った。

一般的なISはPICと大きく稼働するスラスタを使って旋回するが、エネミーでは難しい。

なぜなら、殆どが固定式の稼働範囲の狭いスラスタばかりだから。

背中のメインスラスタとふくらはぎの補助スラスタは完全に固定で正直、扱い辛い。

旋回は殆どPICと腰の補助スラスタで賄っているが、腰の補助スラスタもそれほど稼働範囲が広いわけじゃない。

後から気づいて設計者の頭をぶん殴ってやりたいと思った。

まあ、そもそもこのエネミーは『IS戦を想定していない』のだから仕方が無いと言ったら仕方が無いのかも知れない。

オーブンチャンネル  
「全周波通信で人の機体の弱点を暴露するなんてシャルル君はなにか俺に恨みでもあるのかな………?」

「あるよ。」

「あるの!?!」

シャルロットの即答に若干ショックを感じつつ過去の行いを振り返る。

自己スキャンした結果は無実。

本気で考え込む茜雫を見て、

「……………嘘だからね。」

「……………まさかシャルルに弄ばれるとは……………俺の初めてが……………」

「それ、人聞きがすごく悪いんだけど!?!」

勘違いされそうなことをオープンチャンネルで言う茜雫に慌ててシャルロットが突っ込む。

「さ〜て、イタズラ好きな悪い子にはお仕置きしないとね。」

「イタズラ好きって茜雫にだけは言われたくないよ!?!?てか、茜雫のお仕置きってすごく怖いんだけど!?!」

ふっふっふ、と思わせぶりな謎の笑みを浮かべる茜雫にシャルロットが怯える。

含み笑いを浮かべる茜雫は高らかに、

「そんじゃ、残念ウサギの適当な思いつきで乗つけた兵器の紹介をしましょう!！」

「思いつきで!?!」

新しい兵器の登場にIS関係者は喜ぶが、シャルロットは思いつきで乗つけたと言う兵器がなんなのか気になって仕方が無い。

てか、残念ウサギって何!?!

「Let's go!!」

そのやたら発音の良い号令とともに両腰の補助スラスタースカート状に伸びている六つの機械的な突起が分離した。

「え.....?」

そして、ツーマンセルのさながら戦闘機の二機編隊のように六基三組の分離体が時間差で突撃してくる。

分離体はレーザーブレードを展開させて高速で三次元を飛び回る。

これは.....

「BT兵器!?!イギリス独自の技術じゃないの!?!」

「そうだよ。」

「なら当たり前のように使わないでよ!?!しかも六基も!?!」

シャルロットが悲痛と驚愕の表情で大声で叫ぶ。

驚いているのはシャルロットだけじゃない。

貴賓席のIS関係者……特にイギリスから来ていた人間は某然としている。

自分たちの技術力の結晶が誰かも知れない人間の思いつきで乗っけられたと言われては混乱もするだろう。

その後、我に帰り、近くのIS学園教員に「なぜ私たちの独自の技術が国籍不明気に使われている!」「まさか盗んだのか!？」と詰め寄るが教員が知っているはずがない。

教員だって右手で数えられる程度しか見たことないのだ。

中には教員でも見たことのない人間だっている。

一方、シャルロットはヒットアンドウェイの要領で高速で突っ込んでくるBTを避けるので精一杯だった。

しかも、遠距離ではレーザー射撃、突っ込む際にはレーザーブレードを煌めかせてあらゆる方位から攻撃をしかけているのだから手に負えない。

唯一の救いはツーマンセルなので必然的に三方向から来ると言うことだろうか。

それでも高速で動き回り全方位から攻撃するBTを捉えること

は出来なかった。

茜雫は動いてこなかった。

攻撃すらせずに、その場で停止している。

B T兵器は高い空間認識能力がいるため、セシリアもB T使用時にはその場で停止するのだが、茜雫の場合は空中投影ディスプレイをまた開いてコンソールを叩き、何やら弄っていた。

B Tは複数操る場合は並行処理能力がなければ成らないのだが、史上最高数の六基のB Tを操りながら片手まで他のことをするなど空いた口が塞がらない。

しかもこの場合、目的は空中投影ディスプレイを開いて設定を弄るのが目的で片手間なのはB T兵器の操作の方だろうか。

これにはまたもセシリア含むB T兵器の操作性の苦労を知っている関係者が目を見開いて驚愕。

しかし、二分ほどでそれは終わった。

B Tの供給エネルギーが尽きたのだ。

とついでに、茜雫も空中投影ディスプレイを消す。

シャルロットは一瞬、急に攻撃が止んで状況を掴めなかった。

が、茜雫がB Tを戻したと分かると即座に近接ブレードを展開して斬りかかる。



供給を終えたBTをまた射出されたら今度はもう防げない。

しかも、茜雫はBTの操作とその他の行動を同時進行出来る。

茜雫は背部メインスラスターを切つて足を軸にする様なバックロールで横薙ぎに振られた近接ブレードをあつさりと躲す。

「逃がさない!!」

シャルロットは速度0からの回避力の低い茜雫を追撃するためにスラスターを憤かす。

すると、茜雫は手に持っていたエネルギーライフルをシャルロット目掛けてぶん投げた。

まさかエネルギーライフルを投げられるとは思わなかったシャルロットは咄嗟にエネルギーライフルを両断するつもりで近接ブレードを振るつ。

が、エネルギーライフルは斬り裂かれる寸前で光の量子に変わり、霧散する。

シャルロットの振るつた近接ブレードは何もなくなった空を斬った。

「嘘ツ!?!まさか遠隔量子収納!?!」

クローズ・アウト・レンジ

基本的にイメージで行う量子展開や量子収納は手の届く範囲で行われる。

別に近くじゃないといけないと言っわけではないのだが、難易度が大きく変わる。

手に届く範囲なら手で掴むようなイメージがしやすいが、遠くになるほどイメージの過程が増えるため、思うように展開や収納が出来ないのだ。

遠くに銃器や近接ブレードを展開するメリットよりも、展開、収納に意識を集中させて隙を作るデメリットの方が遥かに多いため、やろうとする人間はあまりいない。

やったとしても手放してしまった銃器の回収に使うぐらいだ。

振り抜かれた近接ブレードの隙を突いて、茜雫は一瞬でシャルロットと距離を詰める。

シャルロットからして見れば視界を覆ったエネルギーライフルを切断しようと近接ブレードを振るったが、突如量子になって消えたと思ったら茜雫に入れ替わったようなものだ。

突然零距离にいる茜雫にシャルロットの思考が一瞬停止した隙に、茜雫はシャルロットに素早く両手に展開した短身銃の様なものを二連射で撃ち込む。

エネルギーの銃弾が弾け、シャルロットは身体を強引に捻って多少被弾しつつも、茜雫から距離を取る。

「……………今の遠隔量子展開、収納で相手の死角や隙を突いてたり、思考を誘導させて攻撃する戦法って沙月先生が得意の

戦法だよな。」

「流石はシャルル。よく知ってるね、ちょっとパクらせて貰ったんだけど難しいね、これ。」

茜雫は余裕の表情で微笑う。

世界屈指の観察眼と洞察力を持ち合わせている湊ならもっと高度な戦法を持ち合わせているだろう。

普段はアホでどうしようもないダメな部分が目立つ湊だが、こういうところは素直に凄いと思う。

なぜ天然でバカっぽいのか不思議で堪らない。

茜雫は通常のショットガンを取り回しが良くなるように銃身を切り詰めた短身銃……ソードオフショットガンをシャルロットに向けて引き金を引く。

散弾となったエネルギー弾をシャルロットが避けると、背後の地面がまるでアサルトライフルのフルオート射撃を受けたかのように穴が空く。

シャルロットは射撃戦に切り替えようと迷うが、茜雫が意地でも近接武装を展開しないのなら、接近戦の方が有利に働くと判断し、一気に彼我の距離を詰める。

茜雫はソードオフショットガンの銃身で受け流すとバックステップで距離を取る。

シャルロットは近接ブレードをショットガンに切り替えると近距離射撃。

散弾の銃撃を稼働盾で防ぐとシャルロットが近接ブレードで接近戦を挑んで来る。

離ればショットガンを、近づけば近接ブレードを、一定の距離と攻撃リズムを保ちながら攻撃防御の高いレベルの安定した構え。

この戦い方に茜雫は思案顔をする。

「『求めるほどに遠く、諦めるには近く、その青色に呼ばれた足は疲労を忘れ、緩やかな褐色の死へと進む。それはさながら砂漠ミラーシの逃げ水』……か。随分とエグい戦法だね。」

「茜雫はオアシス勝利に辿り着ける？」

シャルロットが挑発気味に微笑う。

茜雫も笑い返す。

「悪いね。俺の場合はオアシスは辿り着くまで待つんじゃないくて、……掘り当てるのさ。」

シャルロットはここで茜雫の右手にエネルギーライフルが握られていることに気づいた。

茜雫が瞬時に持ち替えたエネルギーライフルをシャルロットではなく地面に連射した。

吐き出されたエネルギーの奔流に、地面は爆ぜ、大量の土砂と土煙が両者の間に舞った。

「……………なッ!？」

シャルロットが慌てて砂ぼこりから脱出した。

茜雫はすでに砂漠の逃げ水の射程範囲外の上空にいた。

「今日の天気予報です!！」

茜雫は上から楽しげにそう言った。

「は?」

「今日の天気は『ミサイル』ですので傘を忘れないください。」

「

そう言つて、茜雫の周囲に六つの大型ミサイルポッドが現れる。

「何それ……………?」

シャルロットが指したのは茜雫のテンションでもミサイルポッドの有無でもない。

ミサイルポッドの穴だ。

数は一つにつきたったの一つ。

そして、かなりデカイ。

まるで人が入っっていそうな大きさだ。

そして、発射された。

徐々にスピードを上げてこちらに迫る……いや、位置関係からして落ちて来るミサイルは六つ。

「このぐらいすぐに撃ち落とせるよ？」

サブマシンガンを構える。

「へえ、それは頑張つてね。『傘』忘れるなって言ったからね？」

「??？」

シャルロットが引き金を引く瞬間。

ミサイルは弾けた。

正確には外壁がごっそりパージされた。

「へ……………」

シャルロットが間抜けな声を上げる。

それと同時に大型ミサイルから大量のマイクロミサイルが射出された。

一発の大型ミサイルにつき、二十五発。

六発で合計百五十発。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ええええええええ！？」

シャルロットが叫び声を上げると同時にシャルロットの周囲  
一帯にマイクロミサイルが文字通り雨のように降り注ぐ。

この時、確かに巨大なアリーナが揺れた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ここまでとは思わなかった茜雫はちよつと・・・・・・・・・・  
いや、すぐ後悔中。

とは言え、あのミサイルはもともと大量の通常兵器に対して座  
標照準でばら撒くように攻撃するのが目的のため、マイクロミサイ  
ル一発一発にさほど威力はない。

大型ミサイルの状態のまま当てたら凄いことになりそうだ  
が・・・・・・・・・・

爆発の煙が晴れるとそこにはさほど損傷のないシャルロットの  
姿があった。

「ご無事でしたか・・・・・・・・・・。嬉しいような、悲しいよ  
うな。」

「全然無事じゃないよ・・・・・・・・・・お陰で、予備の物理シ

ールドが二枚とも破壊されちゃったんだけど……」

「『傘』をさすのが間に合ったんだ。」

シャルロットの切り替えの早さに茜雫は唖る。

「もう、持ちネタが尽きちゃったんだけど……」

「.」

芸人ならここでアウトだ。

シャルロットはそれを聞いてホッとする。

「こっちは嬉しい限りだけどね!!」

瞬間加速で一瞬でトップスピードに乗り、茜雫に斬りかかる。

あっさりと砂漠の逃げ水の有効範囲内に入らせてしまった茜雫はとりあえず距離を詰める。

近距離なら負ける気などしない。

茜雫はショットガンの銃身で簡単に近接ブレードを受け流す。

「シャルロットにも一応、教えようかな。」

「へえ、何をかな?」

茜雫の上から目線に若干怒りを覚えつつも訊き返す。



茜雫は特に気にした様子もなく流す。

「銃の真価は遠距離の相手に攻撃出来ることじゃない、『限りなく零に近い予備動作から繰り出される音速を超える一点強襲』だよ。」

シャルロットが近接ブレードで茜雫の近接ブレードを受けた右手のショットガンを上から押さえつけ、切り返して攻撃しようとした瞬間、足に衝撃が走る。

「……………ッ!？」

抑えられたショットガンを特に照準を戻そうとせず、そのまま引き金を引いたのだ。

バランスを崩したシャルロットに茜雫は左手のショットガンの銃身を叩きつける。

シャルロットはなんとか近接ブレードを縦にして受けるが、茜雫は器用にガンマンのように用心鉄を指先に引っ掛けてくるりと回して照準。

胸付近に撃ち込む。

「……………グッ!？」

衝撃でむせ返り、それを必死に抑えつつクロス・グリッド・ターン三次元躍動旋回で茜雫の背後に回り込むが振り返らずに右脇と右肩越しに狙われた銃撃で散弾を半分ほど被弾し、追い返される。

「第と二ーナの時も思ったけど、『銃倒術』にも精通してるんだね。」

「セシリアにも言ったけど、遠くで当たらないなら近づいて当てるのは銃の基本だよ?」

全く余裕の態度を崩さない茜雫にシャルロットの仮にも代表候補生というプライドが火を付ける。

「人にご教授するのはいいけど、茜雫もしっかりと聞かなきゃ  
.....」

「何を?」

流石に茜雫も自分が戦闘に対して万能だなんて思っていない。

自分よりも遥かに強い人も上手く戦う人もたくさんいる。

茜雫がシャルロットの近距離射撃を稼働盾で防ぐ。

火花とともに、軽快な音が鼓膜をくすぐる。

茜雫が流れるような動きでショットガンをまたシャルロットに振り下ろすと、シャルロットは最後に残った予備ではなく本命の物理シールドで防ぐ。

「山田先生が言ってたよね、『そうやってると足元をすくわれますよ?』って.....ねッ!」

突如、シャルロットの物理シールドの表面が弾けた。

「はい？」

今度は茜雫が間抜けな声を上げた。

物理シールドの表面装甲が弾けた勢いでショットガンが跳ね上がり、茜雫は無防備な体制になる。

物理シールドから現したのは――

「シールド・ピアース  
盾殺し……………」

茜雫が介入する寸前に起動しようとした兵器。

杭打ち機とリボルバーを足したような外見のソレは、単純な破壊力ならトップクラスの威力を誇る。

「この距離なら……………!!！」

シャルロットが茜雫に拳で殴るように左手を突き出す。

茜雫はソードオフショットガンを量子収納すると、あるうことか逆に距離を詰め、杭の先端部分を右手のひらで握るように固定し、杭の半ばを左手でしっかりと握りしめて、身体を杭にガッチリと固定した。

何をしているのか理解出来ないシャルロットはそのままシールド・ピアースを起動させた。

爆発音とともに、大量の炸薬で加速された杭が弾かれる様に前

を突く。

しかし、杭と一体化した茜雫はなんのダメージを受けることなく、射出の勢いで一気に後方へ距離を取ることに成功する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・？？？」

何が起きたのか理解出来ないシャルロット。

そして、理解した瞬間に最後の切り札が無効化されたことに気がついた。

「そんな・・・・・・・・・・あの距離でシールド・ピアーズを避けるばかりか距離まで取るなんて・・・・・・・・・・」

驚きで某然とする。

しかし、困ったのは茜雫もだった。

「いや、今の一撃で両腕のパワーアシストが死にかかってんだけど・・・・・・・・・・」

茜雫は痺れた両手を見て苦笑する。

もともと耐久力を捨て、速度を上げたエネミーでは耐え切れる負荷ではない。

だから高火力を求める際には実弾よりも反動のずっと少ないエネルギー兵器が積まれている。

まあ、正確には逆で『エネルギー兵器を積まないと意味がない』から殆どがエネルギー兵器で空戦特化にすることができたのだが．．．

「うくん、あんまり『第一世代機の骨董品』を苛めないでくれないかな。」

【え．．．．．？】

茜雫のポツリと零した言葉に茜雫とシャルロットを観戦していた観客が固まる。

なんて今、言った．．．．．？

シャルロットが全員の気持ちを代弁するかのように口を開く。

「第一世代機．．．．．なの．．．．．それ？」

「あれ？言ってなかったっけ？この機体が設計されたのって8年半前だよ？まあ、後からBTとか武装面では適当に追加して、他はパーツの相性とか考えてパーツを組み合わせただけでベースはそのままだし。特に革新的な技術なんて詰まってないよ。勘違いしてるバカはなんか騒いでるみたいだけど．．．．．」

「う．．．．．そ．．．．．それ本当？」

「嘘突いても仕方が無いと思うんだけど．．．．．」

困ったように微笑う茜雫にシャルロットは納得いかないとはかりにさらに尋ねる。

が、観客の叫び声とともにシャルロットと茜雫の間に何か転がって来た。

「え．．．．．一夏！？ていうか、その傷！！」

転がって来たのはISが解除された一夏だった。

左腕を切ったのか抑えた右手から溢れるように血が流れる。

「随分と過激にやられたね、ボーデビッツヒさんのお尻でも触った？」

「触ってねえよ！？」

一夏が心外とばかりに吠える。

「それだけ叫べれば大丈夫か。で、どうしたの？」

「この状況でラウラの方を一度も確認しないお前らがスゲえよ。」

「ここで初めてシャルロットと茜雫が一夏が転がって来た方向を見る。」

そこには、

飲み込むように黒い、『ヴァルキリー戦乙女』がいた。

「あれが………ラウラなの………？な  
んで………？」

「わかんねえよ、俺だって。ラウラのエネルギーが尽きかけた  
と思ったらいきなり苦しみだして『ああなった』」

今まで黙って変わり果てたラウラを見ていた茜雫がポツリと、

「イメチエン？」

「「いや、おかしいから。」」

状況を忘れて二人がツツコム。

そして、『戦乙女』は身体と同じく黒く細い『あの刀』を構える。

その正眼に構えた完成された姿は、美しく、とある人物と酷似していた。

この場で三人の人間が追い求めるあの女性と  
.....



三十五話 乱入（後書き）

なんか……しつこかったですね。  
後悔中

三十六話 似者（前書き）

題名をちよくちよく変えてるKNCT。

全部イマイチなんですけど、誰か手が空いたらこのアンケートに答えてくれませんかねえ。

?もつと分かりやすく日本語に変える

?ここはなんかカツコいいから別の英語の題名にしよう

?stray dogに戻す

?今の題名のままにする

この四つでよろしくお願いします

## 三十六話 似者

どうしたものかな。

茜雫は部分解除した左手でがしがしと面倒くさそうに頭を掻いた。

頭を掻きながら顔を鬱向け、はあく、と溜め息もつく。

チラッと片目で状況を確認。

十数m先には、真っ黒い人型が一人。

なにも変わっていないことが分かるともう一度溜め息をついて面倒事が自分の元に舞い込んで来たことを確信した。

「で、何なのさ、アレ。」

「だからわかんねえって！！ラウラがいきなり苦しみだしてあんな風になっただんだよ！！」

一夏にしては興奮気味に茜雫に強い口調で言い返す。

まあいきなりだから分かるはずないか、とこれ以上の原因追求は諦める。

今はそんなことどうでも良くないが、思考の隅にでも追いやつて投げ捨てる。

取り敢えず、『ラウラ』だった』人物がいたであろう目を向ける。

そこには、闇に溶け込むような漆黒の騎士。

ここでは、手に握られているのはカタナなのでサムライと言った方が適切か。

少女と言える細いボディーラインを残し、全身が黒くで染まっている。

身体の各部には必要最低限の装甲がついており、頭部はフルフェイス型のハイパーセンサーが備わっていた。

右手に握られたカタナは緩やかな曲線美を描き、黒い刀身と合間って不思議な美しさを醸し出している。

「また見たことあると思ったら……………」

その黒いカタナを茜雫は数回だけ見たことがあった。

「『雪片』」

茜雫が確認するかのようにその黒く輝くカタナの名を口にする。

騒ぐ観客席をバックにくっきりと浮かび上がるシルエットのよ  
うな黒い騎士の面影ああの人にとても似ている。

茜雫は取り敢えず一夏に向き直り、

「一夏はとにかく白式を展開しなよ。突発的に解除はされただ  
ど、一応まだ展開ぐらいならできるでしょ？」

「……………ああ。」

生身のままじゃ危ないので茜雫が一夏に忠告すると、一夏は唸  
るように返事をして、白式を展開する。

本来純白の滑らかな装甲は現在では戦闘のために薄く汚れ、無  
数の細かな傷や大きく損傷しているところまである。

ラウラとの戦闘がそこまで激闘だったのかそれとも今の『ラウ  
ラ』と思われる『黒い人型』にやられてしまったのか。

一夏の方は見ていなかったため、それを判断することは出来な  
かったが、取り敢えず展開することはできたため、ひとまず安心す  
る。

しかし、一夏は視線を一度もこちらに寄越さず、前を見つめて  
いる。

いや、眼前の『敵』を仇のように睨みつけている。

茜雫は意外と血の気の多い幼馴染に溜め息をつく。

特に一夏は普段あまりこのようになることが少ない分、キレた時はなだめるのに労力を使う。

「一夏、落ちつ……………」

その言葉は、一夏に届くことはなかった。

聞こえたかもしれないが、今の一夏では耳を傾けることはなかっただろう。

一夏は茜雫が言い終わるのを待たずに、自身の唯一であり最大の武器である雪片式型を量子展開して瞬間加速。イグニッション・ブースト

背部ウィングスラスターから生み出された爆発的な推進エネルギーによって、一夏は車の重量にも相当するISを身につけていながら、一瞬でスピードを三桁まで叩きあげる。

「い、一夏!?!」

一夏の機体状況と突発的な行動からシャルロットが声を上げることがそれも今の一夏には届かなかった。

助けを求めるようにシャルロットが隣を見ると、歯止め役の茜雫はこめかみを指で揉んでいた。

その僅かな時間に黒い騎士へと白い矢が疾駆する。

「うおおおおおッ!」

獣の唸り声のような気迫とともに黒い騎士へと一瞬で肉薄する。

その勢いのまま右中段から左払い。

胴を本気で両断するつもりの手加減なしの一振り。

それは野球のフルスイングにも似た力任せの太刀筋。

黒い騎士も迎え撃つような右下段にカタナを構えた。

一夏の雪片式型が黒い騎士を捉えようとしたその時。

怒りに囚われた一夏の耳に、ヒュッ、と鋭く風を切り裂くような小さな風切り音がひどくよく聴き取れた。

しかし、その音が何なのか判断する前に、一夏の両手にまるで高圧電流を一瞬流し込んだかのように痺れた。

それと、同時か僅かに遅れたぐらいに、ガギーン！、と甲高い金属特有の激突音が鼓膜を激しく揺さぶる。

あまりの衝撃に左腕の傷口が少し裂け、激痛に顔を顰める。

一夏の力任せの雪片式型と黒い騎士から放たれた鋭く洗礼されたカタナは一瞬だけ拮抗したかのように思われた。

が、一夏の雪片式型が弾かれ、下から叩き上げられた雪片式型を大きく上段に振り上げた状態でバランスを大きく崩す。

一夏は不思議と焦らなかった。

(逆に、このまま振り下ろして叩き斬ってやる!!)

振り下ろす直前、一夏は気づいた。

今、黒い騎士はカタナを正眼に、上段に振り上げた状態で構えている。

この構えは.....!!

一夏は緊急後退とともに雪片式型を眼前で横に倒すように構える。

直後、凄まじい衝撃とともに目の前で自分の雪片式型と黒い騎士のカタナがぶつかり合って、接触面から盛大に火花の華を咲かせていた。

黒い騎士の上段からの必殺の一撃はかなり重く、鋭かった。

雪片式型で防いだにも関わらず、黒い騎士の豪剣は止まらなかった。

カタナがそのまま振り抜かれ、一夏の肩口を掠るように黒い刃が通り抜ける。

その際にエネルギーシールドが発生したため、白式のエネルギーは尽き、白式が強制解除される。

一夏は勢いで数回転がったあと、すぐさま体制を立て直す。



黒い騎士はようすを見ているのか追撃をしてこなかった。

一夏は少し冷やついた。

土で少し汚れた頬から嫌な汗が落ちた。

もし雪片式型で防いだ際に刃の速度が僅かに遅れなかったら、もし緊急後退が僅かに遅れていたらおそらく自分はどんなに幸運でも重傷でそこに転がっていただろう。

しかし、すぐさな冷めた感情が火山の噴火の如く燃え上がる。

あの姿、あのカタナ、あの剣技。

どれも見間違いじゃなかった。

アレはやっぱり――――！！

怒りが痛む身体を無理やり突き動かした。

「このヤロオツ！！」

痛む左腕の傷口を抑えていた自分の血に濡れた右拳を握り締め、果敢に黒い騎士へと駆け出す。

無意味、無謀な一夏に黒い騎士は静かにカタナを振り上げる。

対する一夏は振り上げられた刃が見えていないのか、構わず殴りかかった。

「一夏ー!!」

シャルロットの叫び声とほぼ同時に、黒い騎士のカタナが振り下ろされた。

まさに一夏が斬られる直前、一夏は脇腹に鈍い衝撃があったと脳を感じたと同時に真横の吹っ飛ばされる。

嫌な浮遊感のあと地面に叩きつけられた一夏は脇、腕、ついでに背中に走った激痛に顔を歪ませた。

「せ、茜雫!?!」

シャルロットの驚愕の音が聞こえ、一夏が顔を上げると、2mほど離れた位置にISを解除し、片脚を上げた状態で立っている茜雫がいた。

茜雫は半回転後ろ回し蹴りの勢いで一夏を蹴り飛ばしたあと、そのまま回転して半身を反らす形で黒い騎士の人を斬るには少々大き過ぎる刃を躲す。

振り下ろされた風で茜雫の髪がなびき、地面に刃が触れると土煙一つ、塵一つ上げずに地面に切れ込みが走る。

茜雫は左手に牽制として空いた拡張領域に量子収納して置いたブラジル製大口径リボルバー銃 - - - - - タウルスレイジンブルを素早く展開。

黒い騎士の眉間に照準。

引き金を引く。

しかし、その銃口から弾丸が吐き出されることはなかった。

最後まで引き金を引いたがハンマーが反応しない。

ヒュッ、風が吹いたかと思うと、銃口から銃身後部のハンマーにかけて一筋の亀裂が入り、真一文字に斬り飛ばされていた。

茜雫は雷針を叩くためのハンマーや真つ二つとなった回転式弾倉、装填されていた弾丸などの部品が緩やかに回転しながら宙に舞うのを見て少し泣きそうになった。

因みに大口径リボルバー銃 - - - - - タウルスレイジンブル。

値段は五桁を軽く飛び越え、日本一般サラリーマンの上位月収取得者に匹敵する程。

そんなにホイホイ買える品物ではない。

だが、今はそんなことにかまっている暇などない。

すでにただの鉄塊となったタリウスレイジンブルを黒い騎士に投げつける。

それを黒い騎士は無造作な動きで片手で払い、弾く。

それで充分。

時間は稼げた。

茜雫はエネミーを展開すると一夏を抱えて後ろへ一気に跳ぶ。

十数m離れると一夏を乱暴に落とす。

「があ!?!」

押し潰したカエルのような声とともに、一夏が硬い地面を転がる。

「ちょ、茜雫!?!怪我人に乱暴過ぎない!?!」

「シャルロット、前見て。」

黒い騎士がまたカタナを構えて腰を落としている。

「.....ッ!」

シャルロットが反射的にアサルトライフルを黒い騎士に向ける。

が、突如構えたアサルトライフルが一瞬で蜂の巣状に穴が開いたかと思うと銃身の半ばから爆散する。

手元で起きた閃光と破片に反射的に目を細める。

驚いて隣を見ると、茜雫がソードオフショットガンをシャルロットに向けていた。

「茜雫、何で!？」

「武器は持たない方がいい。」

いきなりの発砲に声を上げるシャルロットに茜雫はそう言っ  
て自身のソードオフショットガンを量子収納する。

「……………え?」

シャルロットが困惑の声を上げて黒い騎士を見ると、黒い騎士  
はまるで目標でも見失ったかのように動きを止めていた。

「取り敢えず敵対行動を取らなければアレの行動は鈍る……  
……………と思う。確証はないけどね。」

だが、現に武器を向けなければ黒い騎士は攻撃しなくなり、動  
きが鈍くなっているのは確かだ。

シャルロットは危険だと思いつつも、武器となる左腕の盾も兼  
ね備えた69口径のピルバンカー……………盾<sup>シ</sup>  
ルトピアース殺しを解除した。

黒い騎士の動くがさらに鈍り、今はまるで観察でもするかのよ  
うにこちらをジッと見ている。

ひとまずホツとするシャルロットの隣を何かが駆ける。

「はい、一夏。止まりましたよっね。」

「ぐえ!?!」

シャルロットの隣を黒い騎士に向かって生身で駆け出した一夏をシャルロットが認識する前に茜雫がリアットの要領で首をガシツと締めて抑える。

いつの間に自分の進路上に現れた茜雫に直前まで気づかなかつた一夏は避けることも出来ずに首に茜雫の左腕が食い込む。

あまりに見事に決まったため一夏の呼吸が止まる。

酸素を求めてバタバタと暴れるが、茜雫は暴れる一夏をさらに腕に力を込めて抑える。

「いいからいったんストップ、暴れるなつて。まずは状況の整理をするから。」

一夏の顔色が赤信号から青信号へ。

一夏の意識が、冥界へと続く三途の川の通行を許可されてしま  
う。

だんだんと一夏の動きが弱くなり、最後には脱力。

「あり？暴れ疲れた？」

「……………茜雫の腕の位置に問題があると  
思うよ。」

「え？……………あ、  
本当だ。」

キョトンとしている茜雫を見兼ねたシャルロットが原因解明の手助けをして上げる。

ここままではあの黒い騎士に斬り殺される前に茜雫に絞殺されてしまう。

指摘を受けた茜雫はここでやたらフィットした腕の締め具合の正体に初めて気づき、首の拘束を解く。

茜雫が地面に膝をついて咳き込む。

荒い息をつきながら酸素を身体に供給出来るようになった一夏の顔色が徐々に元の正常な色に戻る。

「……………がッ……………ゴホッ……………ゴホッゴホ……………ハアハア。」

「無事?」

「無事に見えたら眼科に行きやがれ……………!!」

茜雫は怒らせないように出来るだけ優しく尋ねる。

しれっと尋ねる殺人未遂者の優しさに一夏は憤然と顔を上げて言葉の拳でぶん殴る。

「一夏を止めるのに仕方がなかったって。」

「俺の生命活動を止めてどうする……………!!」

「……………」

あまりにご尤もな意見にさすがの茜雫も何も言えない。

というより、一夏の気迫が言わせてくれなかった。

「……………」まあ、いったんそれはドブにでも捨てといて。何で今日はそんなカツカしてるのさ。鳳さんじゃあるまいし。

「

殺されかけたのにドブに捨てて気にするなど言いたいのか、この男は……………!!!

因みに一方的に秘匿通信プライベートチャンネルを一夏に繋げて状況の説明を求めようとした鈴が偶然この会話だけを聞いてしまい、キレて通信を切ってしまったのは別の話。

「センだって気づいてんだろ……………!!!」

「まあ、ね。」

「何のこと……………?」

一人だけ会話に付いていけないシャルロットが頭に疑問符を浮かべる。

茜雫はそれに苦笑いで答える。

「何とかなあ、軍事面では執念深いというか、特質という



か、いろいろやってて凄いなと思うけどさあ。……  
まさか『千冬』さんに手を出すとはねえ。」

「……………?……………?」

なぜここで千冬が出てくるのか、とシャルロットがさらに混乱する。

「セン、『アレ』は何だ？」

「うーん、多分……………VTシステムじゃなかな。というか、VTシステムじゃないと説明が出来ない。」

「VTシステムって世界で開発が禁止されてるアレ？」

「何なんだ、ソレ？」

ヴァルキリー・トレース・システム

「Valkyrie Trace System。その名の通り、過去のモンド・グロツソ世界大会の戦闘方法をデータ化し、そのまま再現・実行するAIみたいなものかな。簡単にいうとカンニングだね。」

「一夏はなるほど、と怒りをいったん抑えて納得。」

相変わらず茜雫の説明は適切で分かりやすい。

「という事は、ソレが模様しているのは、千冬姉なんだな。」

「……………ッ!」

シャルロットはやっとで混乱した頭で状況を理解する。

世界大会で優勝し、引退してにもかかわらず、ブリュンヒルデの称号と言えは織斑千冬と言われる千冬となればかなりの強敵。

「俺も未完成のデータしか覗いたことしかないからあんまり知らないけど、発動のキーになるのは機体の損傷やエネルギーとかその時の状況。あとは……………」

「あとは？」

一夏とシャルロットの声が重なり、茜雫が少し思い出すように間を置く。

「勝利への欲っていうか『渴望』……………かな、多分。」

「……………」

「で、一夏はどうしたいの？」

茜雫が周りを見渡す。

「このままほっといても時期に教師がラウラを取り押さえに来てこの『事故』は収まるけど……………」

確かにこのまま無視していても敵対行動をしない限り、黒い騎士が過敏の反応することはない。

逃げることに専念すれば苦もなく逃げられるだろう。

しかし、一夏は頭を振る。<sup>かぶり</sup>

「あの剣技は千冬姉のものだ。俺はラウラをぶん殴る。千冬姉の真似なんかしてるのもそのシステムも全部気にいらねえ。何よりもそんなもん振り回されるラウラも気にいらねえ。一発ぶん殴る。」

ラウラが何でそんなに勝利に渴望しているのかなんて知らない。

ラウラがどれだけ千冬に憧れてるなんて把握していない。

だが、いや、だからこそラウラのことを許せない。

「じゃあ、俺にその役、バトンタッチしてよ。」

「……………何で？」

「怒っているのも一夏だけじゃないってことだよ。」

「……………全然怒っているように見えねえよ。」

「俺は狂言と演技がうまいからね。」

「今の発言は人としてどうかと思うけど……………」

茜雫の申し出に一夏はどうしようか迷う。

自分が片をつきたい。

だが、エネルギーのない自分が白式なしで何ができる？

おそらく斬られて死ぬだけだ。

千冬は自分が死んだらどう思うだろうか。

「俺が『信用』出来ない？」

茜雫の漆黒に金を一滴だけ垂らしたような不思議な色合いを持つ眼が一夏を射抜く。

その眼を見て一夏は即決。

「ああ、分かった。任せませ。」

自分の頼れる幼馴染だ。

一夏が絶対な『信頼』を寄せる茜雫に任せるのもいいかもしれない。

「よし、一夏のオーダーは『ラウラをぶん殴る』ね。……  
……シャルロットは？」

「え、僕？ 特にはないよ。あえていうなら怪我しないでねってことかな。もちろんラウラも含めてね。」

敵対しながらも相手の身を案じるところがシャルロットの優しいところだ。

「女の子に言われたら頑張らないわけにはいかないかなあ。」

「……………ちゃんとしてプライベートチャンネルで通信してるよね。」

まだ、女だと暴露たくないシャルロットは一応念を押す。

「もち……………え……………」

「あ……………そうか……………」

「うん、まあ……………全然OK!!」

「絶対に違うよね!?完全に全周波通信オープンチャンネルだよね!?!」

「それもこれも取り敢えずドブに捨てておいて……………」

「捨てないでよ!?!」

呆れる一夏を他所にコントのようなやり取りの後、茜雫はエネミーを展開する。

光の量子が幻想的に身体を包み、漆黒の装甲を創り出す。

最後には一夏たちに向き直り、

「シャルロット、こういう時はなんて言えばカッコいいかな?」

「ん〜、『ラウラを助けて来るぜ!』でいいんじゃないのかな。」

シャルロットは昔TVで見たヒーローが行く時に言っていたよ  
うなセリフを思い出す。

そして、隣をちらつと見て、前にも同じような意味の言葉を言  
われたことを思い出し顔が熱くなる。

それに茜雫が納得げに頷く。

「ふむ、………と言つことは一夏の目的とシャルロ  
ットの言葉を借りると………」

「『ラウラを助け出してラウラをポッコポコに殴って来るぜ！

』」  
「最悪だ………」

非道で悪質、矛盾まみれで無邪気な表情で邪気まみれなセリフ  
に残り二人は頭痛を覚える。

例えるならリンチされる一般人を助けた直後に金を巻き上げる  
チンピラだろうか。

完全に悪だ。

助けられた方は絶望のどん底に叩き落される。

背中を向けてPICの浮力で滑って行く茜雫を見て、ラウラの  
身を案じる一夏とシャルロットであった。

「わつと。」

茜雫は黒い騎士と相対した。

意識して一回、瞬き。

身体のスイッチがカチツと入る。

これでもう無駄な考えが吹き飛び、茜雫は精密機械のように仕  
事がこなせる。

別に理性を捨てるわけじゃない。

思考を整理するのが楽になる。

最短路が一瞬で弾き出される。

まずは黒い騎士を一通り見る。

千冬の面影がある、真っ黒い彫像のような造形。

「無駄が多い欠陥。」

茜雫が短く辛辣に感想を述べる。

元来VTシステムはOSと同じように、本人の動きに対してVシステムがサポートをするだけであって主導権は操縦者にある。

でなければストップをかけることが出来なくなり、作動させたらOFFスイッチがない状態に陥る。

ISが兵器としての意味合いが大きい現在、作動したら100%暴走するシステムなど粗悪、粗製、劣等以外何ものでもない。

それに希少過ぎるISのコアが壊れるリスクを負ってまで造形を似せるために外部装甲や内部機構を変形させるなどここまでくると、最早意味不明。

しかし、千冬の動きをトレースさせる、ということに関してはまあまあ達成出来ている。



流石に一夏の自暴自棄な特攻にわざわざ一閃二断の太刀を使う  
ことはないと思うが……………

だが、それだけだ。

「一夏には悪いけど、俺のやり方でやらせてもらう。」

それは瞬きよりかも早い一瞬の出来事。

先手必勝 / 電光石火 / 旋風迅雷

茜雫の行った一連の動きはまさにこの三つの四字熟語が当ては  
まった。

呼吸も間合いも考えすらない弾かれたような動き出し。

背部メインスラスタがチカッとカメラフラッシュでも焚いた  
かのように発光したと思ったら、ジェット炎のみを残して消え去っ  
ており。

オーバー・ギア・アクセルただへさえ加速と最大瞬間速度の異常に特化されたエネミーは  
限界突破加速によってカタログスペックをも超える超絶的圧倒的な  
スピード。

先ほどパイルバンカーを素手で無効化という無茶苦茶を犯した  
ために両マニピュレーターはパワーアシストが不具合を起こし、ほ

とんど腕の自重を支える程度しか機能していない。

それで今は充分。

鋼鉄の腕が動けば殴れる。

茜雫の眼に景色など見えなかった。

このあまりにも速度差のある機動に眼が追いつくはずがない。

己の直感と他者を遙かに凌ぐ経験と一瞬で叩き出す計算式。

これが茜雫の最大であり数少ない武器だ。

限界突破加速と同時に腕を突き出す。

日本古来の拳法独特の少ない予備動作での最短距離を真っ直ぐ貫き通す突き。

起きたソニックブームによって茜雫のいた位置から黒い騎士のいたところまで一直線に微かに地面が抉れ、粉塵が舞う。

流星にそのまま殴ればこちらも潰れる。

腕の突きと同時に逆噴射。

それでも止まらない。

矢の如く飛翔。

槍のように空気の壁を突き破りながら突き出された左拳が黒い騎士の胸部外部装甲に叩き込まれる。

黒い騎士は完全には反応出来ずに速度が0となった茜雫と対象的に凄まじいスピードで弾き飛ばされ、200mのフィールドを1/3ほどボールのようにバウンドしながら転がる。

茜雫はひとまず状況確認。

左マニピュレーター、完全に死んだ。

というより手が手首と一体化している。

スラスター、あまりに乱暴な高速加減速に少々コンディションイエロー気味。

茜雫本人、左肩が脱臼。

骨折ぐらいは覚悟していたが、幸運だった。

と言うか、意外と無事な自分の頑丈さがちょっと怖い。

ISを解除した。

自分の足で立つが問題ない、外れた左肩を強引にねじ込む。

激痛が走るが問題ないだろう。

一通り手をグーパーして問題なく動くことを確認。

立ち上がる黒い騎士と左拳を見比べて、

「千冬さん……………胸硬……………」

どこかで打撃音と悲鳴が聴こえた気がする。

うん、気がするだけ。

気にしたら負けだ。

茜雫は溜め息を吐き嫌な予感が当たったことを悟った。

おかしいと思った。

いくら世界の技術有数国とはいえVTシステムはかなり高度な代物。

開発研究が禁止されたのも各国のあまりの完成度の低さに、万が一他国で高性能なVTシステムが開発された際に対抗が出来なくなるという理由もある。

目の前の代物は及第点が与えられるほどだ。

ただ純粹にブリュンヒルデの動きをトレース出来る技術。

しかも自己判断できる思考回路も千冬と似通らせている。

だから、おかしい。

ドイツだけじゃ無理だ。

目立たず飛び抜けた技術力のある存在。

茜雫の頭に該当する存在が二件。

しかし、片方はこんな出来損ないを造るはずがない。

「やっぱ連中か……………いい加減ばれたかな……………」

これからの思うと頭が痛い。

取り敢えず目の前の問題を片付ける。

一夏の願いはもう叶えた。

今度は茜雫の番。

中にラウラを捕らえて離さない黒い騎士に歩みながらゆっくりと口を開く。

「ボーデビッツヒさんが何を考えてそんな物を積んでるのか知ることなんて出来ないし、おそらく知らずに積まれてたんだろう。お前が何を求めたのかも、なぜそれを求めるのかも他人で何も理解できていない俺がどうこう言うことなんて出来ないしそんなに偉くなんてない。俺だって千冬さんや姉さんを尊敬してるし、ああなりたいとずっと目指してきた。でも……」

中でラウラが聞いているか茜雫には判断が出来ることではなかったが、茜雫は止めなかった。

止まらなければならないのは茜雫ではない。

ちゃんと最後まで言わなければならない。

「俺は『センナ』だ。『織斑千冬』でも『沙月湊』でもない。そして、俺がパートナーに選んだのは、『ラウラ・ボーデビッツヒ』だ。」

近づけるけど、その人と同じ存在にはなれないし、ではない。

個の同調なんて出来るはずがない。

全員が違う歪なピース。

だから、だからこそ、それが噛み合う。

本当のラウラを覆い隠す歪んだ偶像。

「VTシステムソレを造り出したのは俺の『身内』だ。何を企んでるかは知らないが――――」

茜雫はライフル並みのサイズを誇る一つのリボルバー銃を展開した。

「『ラウラ・ボーデビッツ』を返して貰うぞ。」

三十六話 似者（後書き）

全然すすまねえし、すまねえ  
読者も見捨てないでください

感想と評価下さいお願い



三十七話 下剋(前書き)

名前をちよくちよく変えてすみません

反省します

千冬さん . . . . . 胸硬 . . . . . !

スピーカーから空気の振動の波が発せられる。

そんな声がシーンと静まった管制室に素晴らしいほど響き渡る。

そして、

「 . . . . . ぷつ。 . . . . .  
 . . . . . キャン!? 」

それはまるで口に溜まった空気が外に吹き出したような音だっ

た。

数瞬とおかずにズゴン、と空気を鈍く震わす鋭い殴打音がまた静まった管制室に響き渡る。

と、同時に鼓膜を鋭く震わす女性特有の甲高い仔犬を叩いたかのような悲痛な悲鳴がまた管制室に響き渡る。

湊は脳天に重く貫通した衝撃に椅子の上で頭を両手を優しく抑える。

危うく飲んでいたコーヒーというより砂糖ミルクたっぷりのカフェオレを零してしまうところだった。

椅子の上で体育座りをした状態で頭を抑えているためなんだか防災訓練で隠れ損なった小さな児童が取り敢えずいきなりの火災ベールにその場で身を縮めているかのようだ。

「ツ~~~~~~~~!!なにすんのさ、ふゆち〜!」

湊は自分の頭にげんこつを叩き下ろした親友に声を上げてプンスカと憤慨する。

正直子供が怒こっているようで迫力が全くない。

「.....いや、特に何も無いぞ。」

「今の間、なに!?ていうか、白々しく何言ってるの!?!」

しれっと言う千冬に普段ならどっちかと言うとボケてばかりの

湊が珍しく真つ当なツッコミを入れる。

「強いて言うならお前が笑うからだ。」

「強いて言わなくても理由なんてそれしかないよね!？」

流石の湊も身を乗り出して激高する。

しかし、千冬はそんなこと完全に無視して異常事態の起きているモニターに向き直った。

ぐぬぬ、と無視された湊は唸ったあと、いきなりふふん、と鼻で嗤う。

それに気がついた千冬がなんだ?、と怪訝そうに眉を寄せる。

「胸が小さいから僻んでるのかな?」

「ち、小さくはない……………」

珍しく千冬が怯む。

強く反論しようにも湊のこれでもかと突き出された胸部を見せつけられては自分の胸が大きいと言えない。

と言うものの、決して千冬が小さいと言うわけではない。

大き過ぎず小さ過ぎず、いわゆる美乳と言っちゃった。

つい、と千冬は視線を横に向ければその湊よりもデカイメロン

を栽培している小動物のようなヤツは素知らぬ顔でモニターに顔を固定している。

小動物なので本能で関わらない方がいいと感じているらしい。

モニターの光で真耶の顔の冷や汗が光るように照らされている。

この場にはいないもう一人の親友も巨峰を携えており、周りが大艦巨砲主義ばかりでなんだか劣等感覚えてしまうのは気のせいだろうか。

うん、そうだ。

周りが異常なだけで自分のは普通だ。

そう、自分に言い聞かせる。

その間にも湊は胸ポテンシャルをここぞとばかりに自慢する。

「ふゆちの胸が野球ボールなら私は . . . . .

」

「豆腐の柔らかさだろ？」

「うん、そうそう。とっても柔らか . . . . .  
って、そんなに柔らかくないから!?!自重で崩れちゃうから!?!」

湊のノリツッコミに千冬が逆転?する。

「ふ、ふぶん。私ならせんちゅが落ち込んでる時もこの胸で抱

きとめてあげられるもんね!！」

「なるほど、豆腐の角で頭を打って死ね、が実践出来るな。」

「全くだよね、あんな愚鈍で乙女心のおの文字もない男なんて私の胸で………ってそんなに硬くないから!？かと言って豆腐の柔らかさでもないから!？」

ダンダン、とテーブルを掌で叩きながら湊がガーッ、と怒りを表現する。

千冬はそれをうるさいとばかりに顔を背け、湊がテーブルを叩く度に、テーブルの上に乗っている甘いカフェオレがギリギリのラインを保って水面がゆらゆらと揺れている。

異常事態で生徒が危険だというのに、自分の後ろで漫才を繰り広げている千冬と湊に流石にみかねた真耶が止めにはいる。

「あの、良いんですか………?」

「何がだ?」「何がかな?」

「本気で言ってるんですか!？」

真耶が驚きで素っ頓狂な声を上げる。

本当にどうかしたのか?、と言ったよつすにまるで真耶の方がおかしいようだ。

心配ではないのだろうか?

「生徒たちが危ない状況にいるんですよ!!」

「先ほど教師陣にすぐさま事態の収集に当たらせたらから急がなくても終わるだろう。」

全く焦ったようすのない千冬と湊に真耶は何を言って良いのか分からなくなる。

この二人は大抵のことなら冷静沈着に自分で対処出来るかもしれないが、今、危険な状況に追い込まれているのは生徒であり、千冬と湊の肉親のはずだ。

一人であたふたしている真耶を尻目に千冬と湊は現在休戦中となったモニターを眺める。

「もし、織斑君たちに何かあったらどうするんですか？」

「大丈夫だろう。」「大丈夫、だいじょぶ。」

「な、何でそんなに自信満々なんですか。」

即答、断言された真耶がたじろぐ。

「沙月がいる。」「せんちゅがいるし。」

「確かに沙月君は他の生徒たちと違って、かなり戦闘センスがズバ抜けていますけど……」

言って失礼かも知れないが、あまり過度な期待はしない方がいい

いと思っっている。

どんなに強いといっても生徒なのだ。

イレギュラーへの対処に手馴れているはずがない。

「そんなに心配するな。沙月が自分で闘うと判断したんだ。アイツはそういう判断を違えることはないだろう。」

そこまで言い切られては真耶も何も言えなくなる。

「うわ、そう言えば、せんちのおっぱい発言で忘れてたけど、オールド・ギア・アクセル限界突破加速を接近戦で使ったね。しかも、あの距離で。」

「全く無茶をする。」

湊のほのぼのとした感じの呟きに千冬が同感する。

真耶がそつえば、と口を開く。

「限界突破加速って接近戦では危なくて使えないんですけどっけ？」

「ああ、そもそも限界突破加速の瞬間最高速度は人間の神経伝達速度を『超えている』。だから、あの距離で普通なら『限界突破加速をした』と脳が認識した時にはすでにもう接敵している。『見た』と認識するよりも速い機動など役にも立たない。」

ちなみ下手に素人が限界突破加速を使うと自身の脳の神経伝達速度を超えている速度に、自分の位置が分からなくなり、逆に



相手の方が先にこちらを見つけると言ったマヌケな状況になる可能性がある。

可能性なのは、限界突破加速を扱える人間が世界で今のところ三人しかいないからだ。

「……………でも、沙月君普通に使いましたよね。」

「それはせんちくの神経伝達速度が常人よりも速いから出来るんだよ。」

途端に言った本人と千冬が少し苦い顔をする。

真耶がどうかしたのかと口を開く前にモニターで茜雫の状態に苦い顔をする。

「もう、沙月君のエネルギーはポロポロでも戦える状況ではないですね。」

画面に映し出された茜雫の闇に溶けるような漆黒の装甲を持つエネルギーは先ほどの黒い騎士を殴った反動で痛々しい姿だ。

左マニピュレーターの手は完全に手首と一緒に潰れてしまっている。

スラスタの光はたまにポツポツと途切れ途切れに消えてしまい、不調を表している。

「ダメージレベルのB……………いや、装甲は左手

除いて無傷だけど内部機構がガタガタだからギリギリダメージレベルCってところかな。まだ、闘えないことは無い。」

「どちらにせよ、左利きの沙月にとってかなり闘いにくい。それに機体の武装が今の状況に取り回しが悪すぎる。遠距離でもスラストーが不調だから正直エネミーの攻撃オプシオンは潰えたな。」

たとえスラストー全快でも旋回能力の低いエネミーではすぐさま回り込まれて闘えない。

主兵装のエネルギーライフルはデカイし弾速が遅くてアレには簡単に避けられる。

稼動盾のエネルギーグレネードは接近戦では視界の邪魔で足を引っ張るので量子収納してるし、あのクラス對抗戦で無人機を紙のように叩き切った大身槍は片手で振り回せないことはないが、黒い騎士の『千冬の太刀筋』の前では剣速が遅すぎる。

ソードオフショットガンは取り回しはいいが片手でソードオフショットガンを振り回すよりも黒い騎士の雪片の方が速い。

件のBT兵器も積まれているが、茜雫はBTの扱いに関しては、正直に言うとセシリアより技量が若干低い。

茜雫は六基のBTをツーマンセルで編隊を組ませることで『三基』として扱っている。

しかも、機動は戦闘機と同じ旋回を織り交ぜた高速直進でのピットアンドウェイ。

方向と茜雫の癖さえ読めれば避けることは何とか出来る。

黒い騎士に一基ずつ叩き落されて全滅するのが目に見えている。

ふむ、とここで教師三人は気づく。

「なんか……………沙月君の機体って扱いづらいう上に打たれ弱いですね。」

真耶の呟きが残り二人の感想を代弁していた。

今まで追い込まれた状況に陥ることがなかったが、ここまでピキーな機体だったとは。

「ていうか、沙月君、自分から追い込まれましたよね。」

シャルロットの通信から先ほどの一夏たちの会話は聞くことができた。

約束のためとはいえ、自分から機体を無理に扱ってダメにしてしまっている。

普段の思慮深い茜雫からは考えられない行動の選択だ。

真耶の考えていることを正確に読み取った湊の少しいつもよりトーンが低めの声が聞こえる。

「……………せんちうがすっごく怒ってるからだよ。」

真耶がモニターから振り返ると、椅子の上で体育座りをしながら、冷めかけた甘ったるいカフェオレをちびちび飲みながら座っている湊が視界にはいる。

冷めているため猫舌の湊が一気に飲んでも大丈夫なはずなのにちびちび飲んでいる。

まるで表情を隠しているかのようだ。

注意深くみると、眉を寄せて視線をカップの中のカフェオレに視線を落としている。

と、いきなり真耶の視線に気がついたのか湊が真耶に視線を上げる。

急にこちらに目が向いたため、必然的に見つめ合う形となり、若干ふてくされの含まれたような目に睨まれてたじろぐ。

その視線を意識しないように、真耶はさっきの言葉を頭でもう一回意識する。

怒ってる？

あのセシリアや鈴、一夏をラウラに傷つけられても特に何もしなかった茜雫が？

今は湊も怒っているように見えるが………

「せんちくは今、ふゆちくの贗作を見てご機嫌斜めになちゃってるからね。多分、いっちくの約束のためだけじゃなくて自分の分

まで思いっきりやっちゃったんだね。機体のことなんかなにも考えずにするぐらい。」

真耶は千冬に目を向ける。

千冬は会話を見捨てるかの様にモニターに顔を固定している。

相変わらずふてくされたように、ぶつくさと湊が続ける。

「ずいぶん愛されますね、ふゆち。」

ぶー、とほおを膨らまして拗ねたようにズズツとカフェオレの最後の一口をいただく。

そして、ビシツと空のカップを千冬に突き出す。

注げ、ということだろう。

千冬は数秒そのカップと湊を見比べる。

湊は千冬に視線を向けずにモニターを見続けている。

千冬は、はあく、と溜め息を一度吐くと無言でカップを受け取り、コーヒーポッドへと向かった。

居心地の悪い真耶はさっきから何度往復してるか分からないモニターへ身体を向ける。

ここで自分の目を疑う。

「あの……」

「なんだ？」

二人同時に視線を寄越されて少し泣きそうになる。

「沙月君、IS解除しちゃってますけど……」

「あの状態じゃ逆に展開している方が危ない。」

「それは分かりますけど、沙月君が逃げる気配がありませんよ？」

「だって、せんちゅ逃げる気ないし。」

ISを解除して完全に無防備となっている茜雫は黒い騎士と向き合ったまま逃げる気配が全く見られない。

逆に何か銃をを右手に展開して歩み出した。

もちろん、黒い騎士に向かって。

「あ、危ないですよ！？てか、右手に握ってるのって対人用ですよね！？」

「ISの武器を生身で握れるわけがないだろ。」

そう言うあなたは人間の身の丈ある打鉄の近接ブレードを片手で振り回しましたけどね！！

と、内心ツツコム。

口には出さない。

何となく怖いから。

モニターでは茜雫と黒い騎士がすぐ近くまで近づいていた。

黒い騎士はISを装着しているため、生身の茜雫では大人と子供の身長差があった。

約3mほどの距離まで近づく。

静かだった両者が弾かれる弾丸のように動き出す。

一気に一步踏み出した黒い騎士が茜雫に黒く、鈍く輝く太刀の雪片を茜雫から見て右斜めに振り上げる。

それよりも僅かに速く茜雫が右手に握られた黒いリボルバー銃を構える。

そのリボルバー銃は真耶の目から見て異質だった。

何よりサイズだ。

銃身だけでも手の先から二の腕の付け根ほどまである。

回転式弾倉も握り拳みたいで、掌ほどの長さだ。

持ち手のグリップの大きさとあまりにも不釣り合い極まりない。

その巨銃の黒光りする銃口が今にも振り抜かれそうな黒い騎士の手先へと向けられる。

全長200mものフィールド全体の空気を震わせ、轟く爆発音。

拳銃のパンツ！ではなく、ドゴンツ！！が形容出来るような射撃音が外部スピーカーを通してインカム付きのヘッドホンをつけた真耶の鼓膜を激しく振動させた。

IS用の普通よりも大口径のサブマシンガンにも劣らない空気の振動。

銃口から1.5mはありそうな発射炎を突き破るようにして吐き出された弾丸は黒い騎士の右手首へと着弾。

ズガンツという着弾音とともに、数cmほど黒い騎士の両手が押し戻された。

一拍遅れて振るわれた刃は茜雫のバックステップに空を切り裂く。

この光景に真耶は驚愕する。

「ISのパワーアシストを押し戻した!？」



一瞬とはいえ、自動車でも軽々と移動させることの出来るISのパワーアシストを瞬間的に上回るなど見たことがない。

あんな凄まじい銃、真耶は見たことがなかった。

「パイプアー ツェリスカか……………よくまあ、あんなものを持ち出す。」

千冬の呆れた声が後ろから聞こえた。

どうやら湊にカフェオレを淹れ終わったらしい。

千冬の少し後ろで至極満足そうにふうふうと息を吹きかけながら少しずつ甘くミルクたつぷりのカフェオレを堪能している。

「な、何ですかそれ……………?」

どうやら千冬はあの銃を知っているらしい。

「私も国外でどこぞのバカが試しに撃つと言ったのについて行ったぐらいでしか見たことがないし、名前しか知らん。私も気になる、湊。」

千冬は銃の扱いなら今までで一番上手く博識な湊にモニターの茜雫の闘いを見ながら促す。

湊もテーブルの上のソーサーに少しガチャッと音を立ててコーヒークップを置き、ぶらぶらと手首を振って熱さを冷ます。

「ん?あれのこと?現時点で世界最高威力のリボルバー銃だよ。」

「……………あれがりボルバー銃何ですか？」

真耶が信じられないと言った様子だ。

「全長55cm・重量6kgのリボルバー銃で色物銃ばかり作ることでは知られているパイファームズが開発した、600NE弾もしくは458Win・Mag・弾を使用する大口径リボルバー銃。」

「え……………と、分かりません。」

600NE弾とか458Win・Mag・弾とか言われても全くピンとこない。

ただ、わかることは……………

「全長55cm・重量6kgって、拳銃って呼んで良いんですか、それ？」

長さは成人の腕ほど、重さはそこらの一般的なアサルトライフルの二倍近くある。

「どのカテゴリーに入れるか議論はあったばいね。だから、一般的には『ハンドキャノン』と言われている。しかも、付いた渾名が『像殺し』」

カテゴリーだけでもその凄さが伺える。

ライフル弾を何発も撃ち込まないと死なない像を一撃で殺すなど尋常じゃない。

「ちなみに600NE弾は15、24×74でボルトアクション式イギリス製対戦車ライフル………ボーイズ対戦車ライフルの55 Boys 弾13.9×99Bよりかも大きいよ。」

「……………そんなもの片手で撃って大丈夫なんですか？」

「いや。」

「ダメなんですか!？」

対物ライフルを片手で撃っているようなものだ。

しかも、威力のみを追求した色物銃。

撃つ人間なんか考えてなんかいない。

「……………沙月君、普通に片手で撃っているんですけど。」

モニターでは黒い騎士の手首や雪片の柄の部分撃って軌道をズラしたり、剣戟のタイミングを遅らせたりして躲し続ける茜雫が映し出されていた。

「反動の流し方が上手いね。反動を上半身に流して身体全体で一気に殺してる。」

「だが、そんな小手先が何度も続くわけがない。しかも、狙っているのは装甲の厚い部分ばかり。決定打を与えることでできていない。」

確かに先ほどから茜雫は斬撃を躲しているだけ。

あの威力なら見たところエネルギーバリアのない黒い騎士に決定打を与えることが出来るかもしれない。

なのに茜雫は雪片や手甲部分などの躲す以外なんの意味のない部分ばかり狙っている。

「それに、ISを装着しないともしもの時は……………」

真耶が心配そうに口に出す。

「ISを展開している方が逆に危ないよ。」

「え、何ですか、沙月先輩？」

「あのVTシステムは過去のふゆちくの動きをそのまま模範、修正して動いている。」

「……………危ないですよね、それ。」

真耶は湊が何を言いたいのかわからない。

「つまり、機械と何ら変わらない。機械の弱点はイレギュラー。」

「ここで湊が千冬に目配せ。

千冬が引き継ぐ。

「そして、私は『過去に一度もISで生身の人間と闘ったことがない。』恐らくあの贋作は今、生身のイレギュラーに戸惑っているはずだ。私も生身の人間に手間取るほど緩くはない。」

千冬の言葉に真耶が目を大きく見開く。

千冬は現在も戦闘中のモニターを睨みつけた。

「だが、何を狙っているんだ、あいつは。このままではギリ貧だぞ。」

千冬の苛立ち気な声が管制室に響く。

モニターの画面では茜雫に左腕に黒い騎士の雪片の刃が掠り、微かに血が滲み出していた。

「危なッ．．．．．！！！」

茜雫は真一文字に振るわれた雪片の黒光りする刃をギリギリのところ躲した。

しかし、ギリギリ過ぎて僅かに腕を掠るように刃が通り過ぎ、左腕から血が出た。

もし、ツエリスカでタイミングを遅らせ、殺人的な反動を利用してバックステップしなければ懐かしのVガンダムになっていただろう。

Vにはこういう使い方があるんだあ！！

分離 上半身と下半身が別々に攻撃 合体 健在

はい無理ですね。

というか、グロテスクな機能だ。

分離・合体機能などももちろん持ち合わせていないし、不死身じゃない。

もしできたら、IS関係の方よりも生物学者が苗葉を拘束しに来る。

なら躲し続けなければならない。

「痛つたいな……………」

身体中が痛む。

限界突破加速でのPICの慣性停止でも打ち消せないほどの急加速と殴った時の急減速。

殴った勢いで左腕は脱臼したのを無理やりねじ込んだし、右腕はツェリスを撃ったせいで悲鳴を上げている。

勝機がないわけではない。

黒い騎士のVTシステムはうっとおしいほど千冬の動きを模範している。

だから、欠陥なのだ。

今、黒い騎士の動きは僅かに鈍い。

が、勝機があるかどうかは目の前の黒い騎士次第。

恐らく女性最強の太刀筋と世界最強の兵器の二つの『最強』は伊達では無い。

少し気を抜いたら叩き斬られそうだ。

また、刃が迫る。

斜め上からに刃の鏝付近にツェリスカを撃ち込んで僅かに軌道をズラした。

屈んだ拍子に足がもつれそうになり、腕が棒のように動きが硬い。

転がるようにして黒い騎士から距離をとった。

正直、凄く怖い。

生き残る可能性よりも死ぬ可能性の方が高い。

しかも、あとツェリスカの600NE弾の弾薬はあと三発しか残ってないし、これがなくなったらもう避けることが出来ない。

我ながら後先考えずにやったものと自嘲する。

エネミーが健在ならまだ善戦出来たというのに。

跳ね起きてさらにバックステップ。

いったん体制を整える。



「おい、センー!!」

いきなり大声で呼ばれて茜雫はビクツと身体が強張った。

黒い騎士との距離に注意しつつ疲労の残る身体を後ろを振り向かせる。

「なに、一夏。現在お取り込み中なんだけど。」

「俺と代わってくれ。」

「一夏は闘えないでしょ……………」

一夏との会話の際に襲われないかと心配するが、黒い騎士がこちらに迫る様子は見られない。

設計者の欠陥万歳だ。

「シャルルのリヴァイヴのコア・バイパスで白式にエネルギーを移してもらった。完全の展開させるのは無理だけど、右腕部装甲と雪片式型だけなら展開出来る!!」

なるほど。

普通の人間ならそんな簡単にいかないだろうが、シャルロットの器用さなら出来たとしてもさほど驚くことじゃない。

それに、白式の武装なら腕部のみ刀一本とはいえ徒手空拳で闘っている茜雫よりもまだマシかもしれない。

だけど、

「やだ。」

「……………なッ!!」

これには一夏の隣でエネルギーを受け渡したことにより、リヴ  
アイヴが強制解除されていたシャルロットも目を見開く。

「なんでだよ、相手はISだぞ!! ISが今使えない状況のお  
前よりは鬨える!! それにその状態で勝てる可能性なんてないだろ  
!!」

一夏の正論が茜雫の頭に響く。

まさか一夏に正論を説かれる日がくるとは今日の自分はずいぶ  
んとち狂っているものだと思つ。

「確率なんて信じない主義だ。勝ち目が全くないならあっさり  
引くけど、有るなら掛ける。」

銃を片手で構える。

さっきまでとは違いかなり重く感じる。

「そんなこと言ってるけどお前、今までで何回買っても一度も  
宝くじ当たったことないだろ!!」

一夏の叫びに茜雫とシャルロットがガクツときた。

「あのねえ、大声で人の負の遺産を発掘しないでくれないかな  
! !」

茜雫も堪らず叫び返す。

あれはショックだった。

湊と一緒に何度も買ったというのに、300円が一回当たった  
だけ何も掠らない。

それ以来、茜雫も湊も宝くじを買うのをやめた。

お金が勿体無い。

「だから . . . . .」

「一夏言ったよね、俺をいつか超えるって。」

「それが何だよ . . . . .」

「それは俺も一緒。俺は千冬さんと本気で闘っていつか超えた  
い。」

そう、これはラウラを救うためでもあり、千冬の贖作に対し怒  
りをぶつけるためでもあり、チャレンジだ。

「まずは、『過去』の千冬さんから超える。だから、誰にも譲  
る気はない。」

これは前哨戦。

そして、挑戦状だ。

これが終わったら、次は『今』の千冬だ。

「……………はあ、分かった。お前に譲るから絶対に勝てよ。」

「当然。」

また黒い騎士と向き直った。

今度は茜雫が前に跳んだ。

賭けに出ることにした。

必要最低限、最大の速度で一気に迫る。

もちろん、こんな先手必勝でどうかなるわけがない。

速さだって目に追える程度だ。

黒い騎士が右脚を踏み出し雪片を左から真一文字に振るおつと下げる。

茜雫は振るわれる前に左手首をツェリス力で撃つ。

あと一発。

ズガン!!という音と共に、黒い騎士の加速する前の腕が数cmだけ押し戻された。

一拍遅れた斬撃。

足を限界まで開き、新体操選手のように身を低くして身の丈あ  
る太刀をやり過ごす。

さらに茜雫は左脚にツェリス力を叩き込む。

あまりの衝撃に黒い騎士が体制をグラツと崩す。

あと一発。

茜雫が最後の一発を黒い騎士の眉間に照準。

引き金を引く。

爆発音と腕に伝わる衝撃が発砲を実感させた。

放たれた15、24mmの巨弾がジャイロ回転をしながら吐き  
出され、変わらず眉間に着弾。

ビシツという音とともに、千冬の贗作の顔が大きく後ろに弾か  
れ、眉間に大きな傷が出来た。

茜雫は視界の隅で黒い騎士が雪片を構え直しているのを見た。

右斜め下から払うような一閃。

その殺人的な速度の雪片にツェリスカが真つ二つに斬り裂かれ、茜雫の手からどこか遠くに弾き飛ばされた。

- - - - - 来た！！

茜雫の賭けが成功した。

篠ノ之剣術の『一閃二断』

払いの太刀の次は - - - - - 本命！！

知っている太刀筋だから次に何が来るのか分かる。

黒い騎士が雪片を大きく振り上げた。

迫る人を殺すにはあまりに大き過ぎる漆黒の太刀。

茜雫は振り降ろされた雪片をワルツのステップのように右脚を軸に回転しながら避けた。

回転しながら両手を頭上に上げて量子が生成したのは一振りの刀。

飾りの無い無機質でありながら、美しいと感じられる。

茜雫は剣術を叩き込んだ一人の男の言葉を思い出す。

アイツのことはあまりまともな奴だと思ったことはないが、強

さだけは化け物だった。

そのいくつかの中で一番納得できた教え。

『相手に一撃を加えたいのなら』

右手で鞘をしっかりと掴み、左手で柄を握り締め鯉口を切った。

刃まで真っ黒く輝く刀身が姿を表す。

『ただ、一步を前に踏み出して』

左脚を前に押し出しし重心を低く、バランスを取る。

刀がさらに鞘を流れるように滑る。

そして、切っ先が鯉口で負荷を掛ける。

『一撃を振り下ろせ……!!』

「悪いな、一夏に勝つと『約束』したんだ。昔の千冬さんには、勝たせてもらう。それに、昔話には興味はない。」

上段からの振り下ろす居合い。

鯉口の負荷から一気に解放された刀が黒い軌跡を描きながら爆発的な速度で空を奔る。

黒い騎士が防御のため眼前に雪片を構えようとしたが間に合わず、先ほどからツェリスカの銃撃を撃ち込まれて破損していた手甲を喰い破り、斬り裂き、それでも漆黒の刀は止まらない。

そのまま大きく踏み出された脚とともに、懐に入った茜雫の漆黒の刀が破損した眉間にのめり込む。

硬く、腕が悲鳴を上げるが構わず力を込める。

そして、黒い騎士の表面をなぞるように縦に斬り裂いた。

斬り裂かれた表面がドロリと血のようにスライム状の何かに変化。

そこから、用無しとばかりにラウラが吐き出された。

茜雫は刀を投げ捨て、何とかキャッチ。

身体が死ぬほど痛いがそこは我慢。

軍人とは思えない華奢な身体を抱きかかえた拍子に綺麗な銀髪がサラリと流れ落ちた。

「あゝもう、どうすつか。それに、かなり軽いな。」

気絶していたラウラの顔を見て茜雫が呻く。



「俺の分も一発殴ろうと思ったのにこれじゃ殴れないじゃん。」

ラウラの寝顔は、あどけなくて、不安そうで、年相応の少女の  
よつな可愛らしい寝顔だった。

どつやら、断念しなければならぬらしい。

私は何を求めていたのだろう。

私は何を願ったのだろう。

私は - - - - -

「 . . . . . うっ . . . . . んう . . . . .  
 . . . . . 」

ラウラは目を覚ました。

暖かな感触が身体を包み、何やらアルコール成分の匂いがしたのがまず分かった。

次に理解したのは、真っ白い天井が視界に映っていることと、日が落ちかけていることから自分がかかなり寝ていたこと。

鼓膜を何か小さな音が刺激した。

紙の上をペンがサラサラと滑る音。

「あ、起きた？」

低いとも高いとも取れる妙に聴き心地の良い印象に残る声があるの左下から聞こえた。

誰だ - - - - - ?

寝起きの混乱した頭ではまともに思考出来ない。

「身体は起こさないほうが良いと思うよ?」

しかし、相手の顔をちゃんと確認するためにその言葉に構わず  
身体を起こす。

「……………がッ……………!?」

激痛。

盛大に顔を顰めた。

「ああもう、だから言ったのに。」

若干呆れたような声に少しムツとしながら声のした方を向いた。

「……………」

「え、何その沈黙。一夏みたいなイケメンの方が良かった?」

傷ついた口調で何とも思っていないような表情をしているのは、  
茜雫だった。

右腕を吊っていた。

「……………いや、状況が呑み込めなかったただけだ。  
ここは……………どこだ?」

「保健室。ちなみに、時間は午後六時二十三分四十二秒。ボー  
デビッツさんが眠り始めてちょうど三時間三十二分二十四秒。」

そこまで細かく聞く気がなかったラウラは、「そうか」「の一言で流した。」

そして、どこがちょうどだ、と一応内心ツッコム。

日はもう傾いて既に木影に隠れ出している。

綺麗な光景だと思った。

茜雫も目を細めて見ている。

「お前は何でここにいる……………」

「お見舞い。」

即答されたラウラが言葉に詰まった。

「私に何が起こった……………」

その言葉に茜雫は僅かに目を見開くと、

「ボーデビイツヒさんのシュワルツェア・レーゲンになぜかV Tシステムが秘密裏に積まれていた。多分すぐにもドイツ軍に強制捜査が入るんじゃない？」

内心、ざまあみろと思っている。

ドイツ軍にはいろいろ面倒を被られた。

ちなみに、真っ先にIS委員会にチクつたのは茜雫。

仕返した。

頭の中で大笑い、大爆笑。

ああ、愉快だ。

「私のせいか……………」

「え……………ん？なんて？」

「あの人の様になりたいと望んだからか……………」  
「……………」

ラウラが少し泣きそうな微笑を浮かべた。

茜雫も真面目モードに思考を切り替えた。

「まあ、そうだね。ボーデビッツさんがあの時そう願ったからこの騒動は起きた……………と言っても良いかもしれない。本当に悪いのは造って積んだ人だけど求めたのはボーデビッツヒさんだ。」

「……………意外と容赦しないのだな。」

「男の子は真っ直ぐだって言ったでしょ？」

「……………」

顔を鬱向けていたラウラが茜雫に目を合わせた。

ラウラには漆黒の瞳が、茜雫には紅と金のオッドアイが視界の中心付近に収まる。

「茜雫にとって『強さ』……とはなんだ？」

「さあ？」

「……少しは考えてくれ。」

少しげんなりしてラウラが半眼で睨む。

「そうだね、『強さ』の定義は世界にゴミのように転がっている。どれが正しいなんてないし、ぶっちゃけどれが正しいなんて絶対がない。軍事主義者は国の軍事力が『強さ』だし、逆に平和主義者は訴えかけることが『強さ』になる。学力、運動能力、知識力、暴力、どれも『強さ』だ。問題はそのゴミの中からどれを探し出すか。」

確かな理屈にラウラが押し黙る。

答えが出せなくてどうして良いかわからない。

「俺の求めた『強さ』は二つ。一つは『実現力』。何かをするだけの学力、運動能力、知識力、暴力まで全部貪欲に求めた。もう一つは……」

迷ったように言葉を区切った。

「なんだ……………」

「まあ、何というか……………」心持ち方』？っていうのかな？こっちは一夏が専門だから俺もよくわかんないな。」

茜雫も全く分からないと言った様子に少しだけ驚く。

「織斑一夏……………」

ラウラは織斑一夏に引っかかる。

あの弱い人間に分かることなどあるのだろうか？

「俺の中で一番その『強さ』を持っていて、理解に詳しいのが一夏だと思ってる。羨ましいね、勉強とか運動とかは努力である程度どうにかなるけど、そればかりは難しい。嫉妬しちゃうね。」

何やら含み笑いで本当に羨ましそうに言う。

「ボーデビッツヒさんが千冬さんになりたいと思うのは分かるけど、それは無理だ。ボーデビッツヒさんはボーデビッツヒさん以外にはなれない。個の限界だね。」

「……………」だが、私は教官が居られたからこそ、私が有る。あの人のようになりたかった。あの人になれないのならどうすればいい。」

ラウラが不安で押し潰れそうな弱々しい表情をする。

「ラウラ・ボーデビッツヒじゃダメなの？」

「え……………」

「え？、て言われても……………どうせ死ぬのなんて何十年も先の話だし、別に今そんな絶望しなくても良いじゃん。今からゆつくり『ラウラ・ボーデビッツヒ』を探して行けば良い。」

「探せるのか……………」

正直、自信がない。

「まあ、迷ったら道を聞けば？俺でも手助けはするよ？」

そう言つて微笑う茜雫にラウラは何だか安心感を覚えてホツとした。

「お前に道は聞かない。」

「え、何で？」

「お前はすぐに迷子になる。」

「ぐがあ……………!!」

痛いところを突かれて悶える茜雫に自然と笑えてきた。

「ところで、何を書いている？」

茜雫の手には黒い革製の手帳。



紙の着脱が可能で紙さえ代えれば何回でも使用できるよつなやつだ。

かなりボロボロで使い込んでいる。

「家計簿。」

意外な言葉に眉を顰めた。

「家計簿？」

「今月は出費が大きかったんだよ。」

今月というより今日だが。

今日の騒動で壊されたタウルスレイジングブル、パイファーツェリスカ。

ヤバイくらい高い。

主婦なら絶対に倒れる。

そうじゃなくても倒れる。

タウルスレイジングブル、買ったのが本場のアメリカや生産国のブラジルではなかったため、値段が70万オーバー！！

パイファーツェリスカ、生産国のオーストリアで買ったが、造る工程が全てハンドメイドなため、お値段なんと214万円！！！！

使用弾薬は両方とも自家製の改造強硬強壯弾が今回消費分で20万とちよつと！

合計300万を突き抜けた！！！！！！！！！！

一日でこの出費なのだから笑えない。

いや、笑うしかないのかもしれない。

あの作戦を実行するのに約十四秒の激しい葛藤があった。

長いようで意外と短い。

三年お世話になった愛銃たちとの別れである。

映画にしても良いぐらいの感動だ。

ちなみに、現在部品はちゃんと拾い集めて自室の机に転がっている。

名残惜しいのだ。

「そうか……………」

ラウラが意外そうな顔で頷いた。

「最近……………狗と言われて思ったのだが、お前-

und《正体不明の獵狗》か？」

「……………」

「ぐおう……………!!!いくつかの呼び名の中で一番嫌な呼び名だよ、それ……………!!!」

やはりな、とラウラは思った。

普通ではないと思ったが、まさか茜雫がそれだったとは。

「『素性不明の情報屋』がなぜこの学園に居るんだ?」

「訳ありです……………」

茜雫がはぐらかす。

いくら素性を洗っても全く分からず、ヨーロッパ・中東を中心とした犯罪の情報の大部分を握った年端もいかない少年。

ある情報が金さえ払えば、どんなテロリストの情報でも渡すし、組織でも潰す。

顔立ちは東洋系ともヨーロッパ系とも聞いたが実際見てみると、どっちとも取れる。

初めて噂を聞いた時には嘘だと思ったが本当に存在したとは……………

「別に良いでしょ?俺もボーデビッツヒさんも15歳のガキンチヨなんだし。」

「お前にとって私はどう見えるんだ……………?」

「15歳の可愛らしい少女。」

ラウラは自分の顔が火が出るように熱いのが分かった。

茜雫は席を立つ。

「んじゃ、俺は帰るね。ボーデビィツヒさんも今は寝た方が良  
いよ。」

「……………最後に一つ。」

背を向けた茜雫に声が掛かった。

「なに？」

茜雫を赤と金のオッドアイが射抜く。

だが、その眼光にいつものような力強さはなく、少し不安そう  
で弱々しい。

「お前はこの『眼』をどう思う……………？お前  
は何なのか知っているだろう？」

この眼とは金色の左目のことだろう。

この失敗の『境界の眼』はラウラにとって忌み嫌うものだ。

あまり人に見せたいものではない。

何でこんな質問したのか分からない。

でも、聞いて見たくなった。

別に变じじゃないよ。

おかしくはないよ。

これがラウラの予想。

妙に優しいこいつなら当たり障りのない言葉を使うはずだ。

しかし、返ってきた言葉は一言。

「わかんない。」

「は……………?」

的外れすぎて頭が混乱した。

他に何かをないのか、と思うのは当然だろう。

「まあ、そうだねえ。データの映像で見たことはあったんだけど、『綺麗な眼』だと思う。俺は好きだよ、その色。」

茜凜はそう言ってドアをくぐった。

一人保健室に残されらラウラは茜雫の真偽について何か考えようとしたがやめた。

ただ今は、胸に残る未知の心地の良さと微かな喜びを抱いて、それについて想いを張り巡らせながら眠りにつくことにした。

保健室を出た茜雫はある人物たちに気がつく。

「隠れて盗み聞きなんて趣味悪いですよ、姉さん？千冬さんま  
で。」

「だって、ラウち〜となんか良い雰囲気だったし……………」  
「……………」

どこか拗ねた様子の湊にわけが分からず溜め息を吐く。

「普通だったでしょうが……………」

「さあ、どうかな……………」

ますますわけが分からない。

「ずいぶんとラウラに構うのだな。」

千冬までもがどこか刺々しい。

何かしたのか、自分は？

「別に、ちょっと『似たもの同士』だったんで、近親感が湧いたんですよ。」

「……………」  
「……………」

「じゃあ、俺は疲れたんでもう寝ます。」

何のことか理解し、表情を硬くして言葉が出なくなった千冬と湊に背を向けて歩き出す。

目指すはベットだ。





三十七話 下剋（後書き）

やっとで二巻が終わりそうだ

なんか銃知識がウザいと思いますが、適当に流し読みしてください。  
ガンマニアに片足突っ込んでるんです。

感想を誰かください

反応が無さすぎて長い期間一人なんです

三十八話 露渉（前書き）

お久しぶりです。

今回もあまり進みません。

それでは、三十八話をどうぞ。

三十八話 露渉

ああクソ、暇だ……………

レオノヴィチ・バルバシヨフは上等とはとても言えないような安物との中間クラスのキャスター付きの椅子に深く座り直す。

背伸びをしながらだらしなく漏らした欠伸とギシツと年季の入った椅子が軋む音が静かな室内に響いた。

それを咎めるものなど今にはいない。

ここで口煩い上官に見つかりようなら弛んでいるとか言われて全員が意味もなくやさされるよころだが、今は自分だけ一足先に士官室で休憩に入っている。

ここぞとばかりに皆が常時警戒に手を抜いている。

しかし、暇過ぎる。

レオノヴィチが座っている椅子の目の前には、使用用途が一つ

しかないのにも関わらずレオノヴィチが一年ぐらいタダ働きしないと買えない高性能コンピュータとセットとなっている迷彩効果付きの長距離通信機器が壁と一体化した状態で鎮座している。

ここ……ロシア連邦軍ティクシ基地でレオノヴィチは通信士している。

ティクシはロシアでも最北側。

北極海にほど近い場所になぜ軍事基地などあるのか。

それはここで現在世界でパワーバランスとなっているISの開発軍事基地であるからだ。

そんな極秘基地であるため、周辺に娯楽施設など当然あるわけではないし、何よりここはロシアでも最北のためとにかく寒い。

しかも、最近は何が起きたために常時警戒体制が敷かれている。

ここで問題が。

レオノヴィチは通信士という役割、常に通信がはいるか気をつけなければならぬ。

何かを問題が起きたというのに、情報が遅ければそれだけ敵襲で遅れを取るからだ。

常に通信が入らないか気をつけ、その他の雑務をこなすというのは、なかなか心労が溜まる。

その日の書類仕事がなくなってしまうと地獄だ。

通信機の前にジツと座って居なければならぬ。

面白味も変化もない通信機との睨めっことは頭痛までもを感じてしまふ。

極秘基地ということもあつて外部通信が入ることなど一日に数回あれば良い方だ。

ここ数日は頻度が増えたが、逆に口煩い上官よりも偉い将校やなにやらよく分からないとにかく権力者との会話に精神的に疲れてしまふ。

だが、気を抜いているのが上官に見つかつて極寒の中での基地外周や食事抜きなど御免だ。

上官のいない今、気晴らしをしなければ。

他のものも同感らしく、皆がそれぞれ仕事に支障をきたさない程度に思い思いに過ごしている。

指組んで腕を伸すとパキパキと指の関節の小気味の良い音がなる。

まったく嫌な場所だよ、ここは。

娯楽施設がない、外にも出るのが億劫になる環境。

休憩だろうが、非番だろうがやることが限られる。

備え付けのデスクの上で頬杖をつく。

それにしても、あの口煩いクソ上官。

この基地の総司令官は今まで見てきた中で一番まともな上官の直属の部下だっというのになんであんなに分からず屋なのだろうか。

いつかあのちょび髭を干切って総司令のような立派な髭を生やせと言っただけ、というのが最近の密かな願望。

レオノヴィチは都市部に居る自分の恋人からメールが入っていないかと携帯端末をポケットを探る。

最近仕事が忙しすぎて逢えないが、毎日励ましのメールをくれる心の支えだ。

と、ここで ピー、と聞き慣れた電子音がレオノヴィチの耳に響いた。

嫌な予感を感じながら通信機を見れば案の定、受信を表す小さな豆粒のようなランプが赤く光っている。

レオノヴィチは赤いランプの小さな光を仇でもみるかのように小さく睨む。

「ああなんだよ、こんな時に……」

誰だよ、と舌打ちしながらポケットへと伸ばした右手を引っ込

めて、受信ボタンに伸ばす。

他の同僚も貴重な休憩時間の通信に同情の眼を向けてくる。

通信先を表すモニターにはロシア連邦国防総省の文字。

最悪だ。

溜め息を盛大に吐いた。

よりによって一番面倒なところからきやがった。

無駄に体面を考える連中だから怒らせないように細心の注意が必要だ。

マイク付きのヘッドホンを頭にかぶり直し、しっかりとかぶれたことを確認したあと、軽く深呼吸してから受信ボタンを押した。

「こちらテイクシ基地。こちらテイクシ基地、どーぞ。」

相手に不快感を与えないように苛立ちを抑えた声で相手を促す。

相手の機嫌を損ねでもしたら後々面倒だし、このまま通信士で一生を終えるなどまっぴらだ。

.....

しかし、レオノヴィチが返答を促したものの、一向に相手から応答がくる気配がない。

聞こえなかったのだろうか？

「こちらテイクシ基地。こちらテイクシ基地、応答をどうぞ。」

今度は少し大きめの声で相手に呼びかけた。

二度の同じ呼びかけに、仲間から興味視線を浴びた。

こんなつまらない場所では些細なことが暇つぶしの対象だ。

.....

返ってきたのは先ほどと同じ無言の返答。

なんだ？、と思い、耳を澄ませばなにやらタタタツ、と指先で何かを軽く硬い物質を叩く音が微かに聴こえた。

その音が鼓膜をテンポ良く揺らす。

まるで音楽のようだ。

レオノヴィチ自身も聞き慣れた音だ。

キーボードか？

しかし、なぜ通信しておきながら、呼びかけに反応せずにキーボードを操作している？

そんなことを思っていると、キーボードの音が止んでいるのに気がついた。



そちらはIS特務開発機関ティクシ基地か？

いきなりヘッドホンからそんな男の声が流れ出た。

低いとも高いとも取れる印象に残りやすい、聴き心地のいい声だった。

ネイティブなロシア語だ。

若い。

そうレオノヴィチは判断した。

今まで散々スピーカー越しの聞いてきたような虚勢に満ちた偉そうな声ではない。

「おい、そちらは？」

少し敬意の足りないかもしれないが、お互いの所属を名乗る、という通信のマナー破っているのだから構わないだろう。

しかし、若い男は構わず続けてくる。

そんなのどうでもいい。

レオノヴィチは眉をそれぞれバラバラの高さに上げた。

どうでもいい、だと……………？

これで分かった。

「貴様、国防総省の人間ではないな、誰だ……?」

こんな極秘基地に通信をしてくる国防総省の人間がこれほど若いはずがない。

室内に全員が静まってレオノヴィチと通信機を見つめていた。

レオノヴィチは相手との会話を皆に聞かせるように室内のスピーカーに繋げた。

ああ、そうだ。俺はロシア連邦国防総省の人間どころか、ロシア人でもない。

「なんだと……!」

ではなんで、ロシア連邦国防総省からこちらに通信している……!!

レオノヴィチの疑問を解消する前に、スピーカーから声がさらに流れた。

そちらのテイクシ基地、総司令であるセルゲイ・ヴォルコフスキー中佐を出せ。

若い男はレオノヴィチの疑惑の声を無視して一方的に要求。

有無も言わさぬような無理な要求に室内ではどよめきが奔る。

レオノヴィチはさらに警戒を強める。

「中佐をなぜ知っている……………」

ここは知る人の少ない極秘基地だ。

当然内部の情報規制もかなりのレベルだし、人事についても一部のものしか知らない。

そもそも基地の存在自体が伏せられている。

司令官が誰など所属も分からない人間が沿っているはずがない。

セルゲイ・ヴォルコフスキー中佐を出せ。

こちらの声などまるで関係ないと言いたげな一方通行の通信。

他の仲間もどうするか判断に迷っているようだ。

なんでこんな時にいないんだよ、あのクソ上官……………

……………!!

レオノヴィチはここには居ない役立たずの上官を内心で罵倒した。

なんだ、わざわざロシア語で話してやってるんだ。それとも母国語も分からないのか？なら、今、世界の共通語になりつつある日本語で話そうか？

バカにしたようにスピーカーから流れてきた若い男の声にレオ

ノヴィチはギリツと歯を一度噛み締め、握りこぶしを強く握る。

「おい、お前好い加減にしろ……………!!お前は誰で目的はなんだ……………!!あと数秒で答えないと……………」

通信を切るぞ。

レオノヴィチはそう言おうとした。

が、それよりも早く若い男が言葉を紡ぐ。

基地の対空防御ミサイルを基地施設に撃ち込むぞ。

【……………ッ!!!】

室内が驚愕と静寂に包まれた。

なんと言った……………この男は!!

しかし、すぐにそんなことは不可能と思い直し、通信相手の馬鹿な脅しを嘲笑う。

「ハッ、なにを言っている、お前は?そんなことができるわけ……………」

その時、どこか遠くでダウン!!、と轟音が響いたのが分かった。

【……………ッ!!!】

なにが起こった……!!?

中央のモニターに震度計が反応した事と基地から少し離れた山中に設置されたを示していた。

騒ぐ仲間とモニターを一瞥したあと、ハツとして思わず外したヘッドホンを慌ただしくかぶり直しながら怒鳴る。

「なにをしゃがった!!お前がやったのか!？」

レオノヴィチの怒鳴り声に室内の仲間もレオノヴィチと通信に視線を戻した。

そう怒鳴るな、煩い。ちょっとSAMが『暴発』して人気のない山に当たっただけだ。

「な………に………!!！」

まるで、いきなり雨が降った程度の言い方にレオノヴィチは言葉を失う。

「おいおい、………基地の防衛設備がこちらの信号をまったく受け付けねえぞ………」

少し離れたところで、防衛システムを確認した同僚が普段は血色のいい丸い顔を蒼白に色を変える。

防衛システムが乗っ取られた……!!?

もう一度言う、セルゲイ・ヴォルコフスキー中佐を出せ。

若い男の抑揚のない淡々とした声が木霊す。

言葉を呑むレオノヴィチのヘッドホンがスツと何者かに外された。

「私がセルゲイ・ヴォルコフスキーだ。」

「中佐!？」

頬に大きな切り傷の奔った威圧と威厳に満ちた顔に不快感を感じない整えられた顎鬚を生やし、引き締まった筋肉質の壮年の軍人――セルゲイ・ヴォルコフスキーは僅か数十秒でロシア連邦極秘軍事基地の防衛システムを乗っ取った相手に名乗り出す。

セルゲイの後ろには休憩を邪魔されて不機嫌を露わにしながらでっぷりとした肥満体を窮屈そうに制服で押し込んでいる口煩いクソ上官がいた。

レオノヴィチは慌てて通信機前の席から転げるように腰を退かすと、セルゲイは椅子に入れ替わるように深く腰掛ける。

セルゲイはマイクをを口元に寄せると余裕のある口調で話し出す。

「さて、私に何の用かな？私も名乗ったのだ、キミも名乗ってくれないか？」

名乗る必要はないですね。

セルゲイは突如若い男が自分に対して敬語で話し出した事に気がついた。

何かが引つかかる。

昔同じような感覚に陥った気がする。

「それは困ったな。では、何と呼べばいい？」

自己紹介ならとうの昔に済ませています。

「なに？」

『取引』をしませんか？

まさか - - - - -

セルゲイは胸に引つかかった違和感が氷解した。

自分でも少し弾んだと分かる声でマイクに向けて呼びかけた。

「キミ、もしかして『プリーズラク』くんかね？久しぶりだな、一年半ぶりかな？」

ちよつと待て。なんですか、それ？次会った時には普通に呼ぶと言いましたよね？ちなみに一年半ぶりではなく、一年四ヶ月十

二日ぶりです。

若い男がすかさずツツコム。

セルゲイは正確な日数に相変わらず変に細かな奴だ、と苦笑した。

いきなり基地のシステムハッキングを行った謎の人物と親しげに話すセルゲイに戸惑う部下たちにもう大丈夫だ、と言って通常業務に戻れせる。

部下たちもこの優秀な総司令官が言うのであれば問題ないだろうと、席を取られ所在なさげなレオノヴィチ以外は仕事場に就く。

「にしても、呼び出しが敵襲の警報とは相変わらずだな。もっとマシな現れ方が出来ないのか？」

前は、堂々と正門から入ってきたらしい。

なぜ、『らしい』なのかというと、誰も『プリーズラク』の基地内部への侵入に気づいた者がいなかったのだ。

その時も相当な騒ぎとなった。

慌てて駆けつけた兵士に銃を向けられたその時も『プリーズラク』は他人事のような眼で自分に向けられた銃を流し見し、「取引をしませんか？」と冷淡に平喘と言つてのけた。

比較的小規模でありながら、ISの最新技術の開発機関であるため防衛には大規模な軍事兵器や人員を回していた。



が、誰にも気づかれずにあっさり侵入。

ゆえに基地の人間からは『幻影』<sup>ブリーズバック</sup>と呼ばれていた。

普通に呼び出してもどうせ出さないと思ったんで、仕方ないですね。

当たり前だ。

素性も言わない不審者に早々司令官直々に話などさせない。

しかも、最近『面倒事』が起きたばかりで、基地が全体的にピリピリしている。

「しかし、防衛システムを乗っ取るのはいただけないな。今攻撃されたらどうする？ いや、よくここまで完全に乗っ取る事ができたな？」

問題はありません。レーダーが通常通りに何かを察知したら、施設防衛を優先させるようにしています。一時的に乗っ取っただけですよ。今、戻します。

ほんの数秒すると、防衛システムの主導権を奪い取る事に成功した、と得意気な表情をした情報班の若い青年の部下から報告が入った。

セルゲイはよくやった、とだけ徒労をねぎらい、苦笑した。

こちらが取り返したのではなく、彼方が手放したのだ。

それを伝えたら、この青年はどんな表情をするだろうか。

セルゲイはそんな事を思いながら再び、通信相手に意識を傾ける。

「通信先が国防総省となっているが、どうしてかね？」

取り敢えずまずは通信を入れてもらわないといけなかったですからな。最近そちらも警戒を強めているようですし、まずは日本政府のネットワークから国連へと繋いで、その後モスクワ、ティクシ基地に繋ぎました。頭でっかちの官僚の抱えてるコンピュータープログラマーはチョロいですね、穴だらけでしたよ。

「その優秀だと言われて雇われているプログラマーたちが聞いたら泣いてしまうな。しかし、それでは、処理速度が落ちるだろう？」

自前のコンピューターでも国連辺りまではアタック出来ますし、ティクシ基地まではIS委員会のコンピューターをハッキングして中継させました。問題0です。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

問題だらけだ。

明日からIS委員会は大変だろうに、とセルゲイは他人事にそう思った。

セルゲイは好い加減に本題に入ることにした。

「……………で、取引とは？」

「二週間前、そちらで襲撃がありましたね？」

「……………ッ！……………なぜ君が知っている？いや、君には愚問だったな。それがどうかしたのかね？」

「なんせ、彼はあの年齢で裏のネットワークの情報を握っているぐらいだ。」

我々の情報規制ぐらいガラス窓程度のものだろう。

俺も『襲撃があった』程度しか分かっていません。ロシアでは今、他の国とは一線違うISの開発をしています。襲撃者の詳細が欲しいです。」

「ふむ、しかしなぜ君がそんな情報を欲しがる？すでに過ぎたことだし、我々も完膚なきまでに叩き潰されてデータの一部を持ち去られた。」

「だからです。そんなことするのはかなり大きなバツクにいる奴でしょう。もしかしたら、俺が探している奴かもしれません。」

世界の軍事大国にケンカを売るような奴なんて限られている。

アメリカなどの世界の主要国はあり得ない。

下手をすれば世界から叩かれるし、最悪世界大戦に発展する。

「……………そうか、では君は我々に何を提供してくれる？」

これはビジネスだ。

こちらもトップシークレットを明かすのだから相応のものを頂かないと割りが合わない。

チャンスだと、セルゲイは思った。

『プリーズラク』は特定の情報なら正確であれば些細なものでもこちらに有益をもたらす。

今、世界が情報を欲しがっている機体がありますよね？

「ん？……………ああ、あの『二人目』が所有しているらしいな。私もまだ噂ばかりで目にして居ないんだ。」

データが取れば映像も見れるのだろうか、そのデータが取れなくて本国の人間も頭を悩ましているらしい。

そして、貴方は今、とある新型機の完成がエネルギーバイパスの整理が上手くいかなくて目前でストップしていますよね？

「その通りだ、私も頭が痛いよ。」

その時、セルゲイは通信相手が笑ったのがなんとなく分かった。

その機体データの一部を提供します。

「ふう〜。」

月ので始めた屋上で一人の青年が頭からマイク付きのヘッドホンを外して、軽く頭を振った。

漆黒の細く長い繊細な髪が左右に揺れて額を軽く叩く。

目の前に広げられたトランクケースのようなものには開いた下部には小さめの折りたたみ式のノートパソコンと周辺に巻き取り式のコードが、開いて蓋に当たる方には、直方体の機械が放熱用の排気口から熱風を噴き出していた。

それでも逃がし切れていない熱が直方体の機械の温度をジワジワと上げている。

黒髪の青年 - - - - - 沙月茜雫は目の前のハッキング専用特殊なパソコンとスペックを上げるための機材を一纏めにしたトランクケースを閉じた。

鍵を閉めるとカチツと無機質な音が人気のない屋上に響いた。

「結構、収穫があったかな。」

近くに置いてあったスポーツドリンクのペットボトルを一気に半分まで飲み干す。

屋上から夜景を見ながらもう一度ふうふう、と息を吐いた。

先ほど、ロシア基地を騒がせた張本人は疲れた疲れたと言ってパタパタと桜色の綺麗な扇子で扇いだ。

ちなみに、この明らかに高級品の扇子はある人物からの貰い物だ。

綺麗な扇子だったから、一つ欲しくなり、どこで売っているのかと聞いたら、あげる、とか言っただけだった。

非売品らしく、流石にこんな高いのは、と思ったが欲しい、と言っただけの本音なのでありがたく頂いた。

夏の近づく最近のお気に入りの一品であり、逸品である。

「複数の無人機、に正体不明な奇妙なIS、か……」

先ほど手に入れた情報の一部を反芻する。

襲撃者は恐らく国の軍属ではないテロリスト。

なぜテロリストがISを所有しているかという点、今現在国の国力となっている希少なISのコアが奪われても他国に悟られないようにするのが体面にこだわるお偉いさん方の出した答えだ。

他国でも4件ほど強奪事件が起きてる。

恐らく同一犯、と言うよりも同一の組織。

嚴重なISのコアを奪えるなんて相当な武力と素早く行動できる機動性を持っている組織だ。

心当たりがあり過ぎて頭が痛い。

ロシアは他国とは方向性の違うISを開発している。

それを連中に一部とはいえ奪われたのは茜雫自身にとっても痛手だ。

それをもとに何を創り出してくるのか想像が出来ない。

考え過ぎてヒートアップしそうな頭を扇子で扇いでクールダウンの手助けをして上げる。

「だーれだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

甘く聴き入ってしまいそうな声と柔かなものに眼を遮られた感触と共に茜雫の視界が突然真っ暗に。

夜なので、暗いのは当たり前前だのだが、網膜に一切の光が映し出されなくなる。

こんな目隠しする人間は限られている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・なにやってるんですか、更識楯無。

退けてください。」

「楯無って呼ぶようになったらね。」

「はいはい、どうか退けてください、楯無さん。」

「うーん、まあ、良いかな。」

少し不満気な声が聞こえて視界が確保。

後ろを振り向くと、口元に畳んだ扇子をあてながらにんまりと柔らかに微笑んだ学園最強の生徒会長・・・・・・・・更識楯無が外側に開放的にはねた水色の髪を夜風になびかせながら立っていた。



ただ立っているだけだと言うのに、それだけで絵となり、魅力的な姿だった。

「なんか、久しぶりですね。」

「それは君が避けているからじゃないかしら。」

楯無が若干拗ねたように頬を膨らめますのに、茜雫は軽く溜め息を吐く。

「あれだけの事をして置いてよく言えますね。」

あれだけの事、とはシャルロットが転校して来た日に起きた茜雫襲撃事件のことである。

嫌な思い出だ。

恐怖を刻みつけられた。

最近は何故か茜雫の部屋に突撃をかけて来ては、イタズラとお茶を飲んで茶菓子を食べ漁っている。

早めに就寝した時にはあるう事がふと目を覚ますと目の前に楯無の顔が茜雫の顔のすぐ目の前にあったため、驚きで危うく蹴り飛ばすところだった。

もちろん、濡れたタオルで顔面を叩いて叩き出したが . . . . .

それ以外にもちよくちよく予想外の事を平喘とやってくるために索敵逃亡を繰り返している。

「楯無さんが悪いでしょうが……………」

「へ？どこが？」

「……………まあ、いいや。もう諦めましたし。」

「

「うむ、そうするが良し！……………あ、ちゃんとあれ使ってくれてるんだ、お姉さんうれしいな。」

そう言っで左手に握られた桜色の扇子を指す。

そう、茜雫が先ほど使っていた扇子は元は楯無の所有物だった。

もう一つあったらしくその片方を茜雫が貰ったと言うわけだ。

「これで茜雫くんとペアルックね！！」

何やら一人で喜んでる楯無に何やってるんだ？、と言った視線を注ぐ。

「で、なんでこんなところにいるんです？てか、その格好。」

楯無はシャツに短パンといったラフな格好だった。

後ろから見れば、裸にシャツといったマニアが萌えそうな格好に見えなくもない。

「むらむらする？」

「全然。」

茜雫の即答に楯無はちえー、と可愛らしく唇を尖らす。

茜雫もそう言ったものの、スタイル抜群な魅力的な姿と言うのは認める。

「茜雫くん探知機が屋上を指したから来てみたの。」

「何それ、怖い。」

「そう言う茜雫くんはなにやってたの？こんなところだ。」

茜雫が言葉に詰まる。

「二カ国の政府と国連にハッキングをかけました、なんて言えない。」

「……………ロシアンクマさんとお話です。」

「……………」

楯無が本気で考え込む。

茜雫自身も少し無理があると思った。

「それって、ヴォルコフスキー中佐の事？」

あれ？

なんで今ので分かるの？

茜雫は頭に『？』『マークを浮かべた。

そんな茜雫に楯無は見惚れるような蠢惑の笑みを浮かべる。

「ふふふ、なんででしょうか？」

うっ！、と茜雫は唸る。

そう言われると気になる。

何かボ口を出したのか。

「まあ、答えてあげる。私の立場は……」

「ああ、ロシア代表でしたね。」

言葉を遮られた楯無はぶーぶー文句を言って来た。

「でもなんで俺がヴォルコフスキー中佐と話したと分かったんです？」

「だって、私の専用機って今改修してるんだけど、それを担当してるのがティクシ基地の開発班なのよね。」

そうだったのか、それは知らない事実だ。

「そういえば、茜雫くんって情報屋だったのね、しかも、ティクシ基地の防衛システムや国連、日本、ロシアのコンピューターを同時ハックしたって本当？」

「な、なんで知ってるんです……………?」

流石に情報の早さに茜雫が狼狽する。

楯無は良いもの見たとばかりにさらに微笑う。

「たった今さっき、ヴォルコフスキー中佐から聞いたのわよ？」

「ずいぶん口が軽いな、あのオッサン!？」

軍人のくせに外部に簡単に漏らしやがって。

まあ、ロシア代表の楯無だから、と言う事もあるのだろう。

「茜雫くんのおくれたデータのおかげで、私の機体も思ったより早く完成しそうよ。お礼を言うわ。」

茜雫が交換条件として提示したのは、エネミーの稼働データとエネルギー効率を突き詰めたエネルギーバイパスのデータだ。

十分世界が欲しいがるデータを他国に漏洩しない、という条件も付けて渡した。

襲撃者の情報も十分すぎるほど貰ったし、ヴォルコフスキー中

佐にも散々世話になった。

今は楯無にもエネミーの情報規制にずいぶん助けて貰っている。

茜雫はふと、ある事を思い出す。

この人なら絶対に詳しいはずだ。

「……………楯無さんに少しお願いが。」

「あら、何かしら?」

「今度、一緒にデートしませんか?」

「……………え?」

茜雫の言葉の意味を理解するために数秒かけてしっかりゆっくりと噛み砕く。

完全の理顔した楯無は熟れた林檎のように顔を真っ赤し、手から心の動揺を表すように扇子が滑り落ちた。

三十八話 露渉（後書き）

感想を受け付けています。

なんでも良いですので、どうかよろしく。



三十九話 次向（前書き）

遅くなりました

やっとで二巻の終わりです

ちょっと二一十の髪の色などを修正  
筈と被ったもので………

## 三十九話 次向

「おい、……………」

「お茶。」

「ちげえよ！」

「何をやっているのだ、お前らは……………」

「相変わらずだね、茜雫は……………」

スタスタとこちらに向かってくる一夏と箒、シャルロットに茜雫は、そつえば事件後全く会ってなかったなあ、とぼんやり思う。

茜雫を呼び止めようと手を上げながら近づいて来た一夏は、茜雫の某コマースシャルの掛け声と掛けられて高速ツッコミ。

箒はその様子を白い眼で見つめる。

シャルロットまで呆れている。

一夏の割と大き目だったツツコミに何かとこちらをちらほら見てくる女子一群の視線を華麗に回避しつつ、話を元に戻す。

「で、何の用？」

「センはもう、夕飯を食べたのか？」

「それなら……」

ぎゅるうう~~~~

「……らしいです。」

「ずいぶんと都合のいい腹なのだ……」

かなり大きい腹の虫が寮の食堂使用時間ギリギリ、普段よりも人の通行が多い廊下に響き渡る。

シャルロットは驚きで眼を見開いてしげしげと茜雫の腹部を見つめた。

あまりの大きさに何かと顔を向けてくる方々と呆れ口調の簞が  
ん見してくるシャルロットに、茜雫は気を取り直すべく咳払いを

一回。

茜雫の空腹の激しい自己主張に自分でも今のタイミングはスゲえ、とちよつと、ほんのちよつぴり感動する。

しかし、もう少し自重というものを知ってもらいたいものだ。

自分の腹に訴えかけても仕方がない。

「まあ、腹も減ってるようだし、食堂にいかねえか？そろそろ食堂の使用時間ギリギリだから、今のうちにいかねえと食い損ねるぞっ。」

「ん〜、そうしとく。さ〜て、今日のオススメはな〜にかな？」

空腹の身体は嬉々して食堂への道筋に足を向ける。

何故か食堂までは極度の方向音痴の茜雫でも迷わない。

帰省本能、と言つやつだろつか。

だとしたら、本当に『狗』みたいでちよつと嫌だ。

しかも、帰る場所が食堂。

かつこ悪ッ！

その時に早くしろと言わんばかりに、腹の自己主張が激しくなる。

よく考えれば、ラウラの暴走事件後、一旦自室で仮眠とつた後、なんとか片手でロシア基地までハッキング、ロシアのクマさんと情報交換をし、残念美人の人たらしにデートのお誘いをお願いしたため、夕飯を食べて居ないどころか、スポーツドリンク以外口していない。

そういえば、楯無にデートをしないかと誘ったのだが、顔を真っ赤にして何も言わずに走り去ってしまった。

「何でかなあ……………」

「ん？何か言ったか、セン？」

「いや、こちらの話。」

「????？」

うん、と少し唸る。

嫌われた、訳ではない。

あの後、茜雫の携帯端末に『OK』を表すメールが届いた。

何故かよほど慌てて打ったらしく、文面がメチャクチャで誤字脱字だらけだったが、一分程かけてなんとか解読に成功した。

なんとなくだが、楯無に嫌われたら結構深く傷つきそう。

以外とあの迷惑千万な人たらしを気に入っている、と思う。

まあいきなり異性に、デートしませんか？、なんて訊かれたら誰だつて困つてしまつか、と強引に自己完結。

わからない事にいつまでも考えていても仕方が無い。

こつと言つ時は思考の転換が大事だ。

たまにパツと答えが見つかる事だつてある。

適当に談笑しながら歩いていると、風呂道具を持ち、寮部屋へと向かつているニーナと出会った。

大浴場から帰つて来たはずなのに、何故か全体的に濡れていないニーナを茜雫が不思議がつっていると箒と一緒に夕飯を食べに行かないかと誘う。

同室の箒はまだニーナが夕飯を食べていない事を知っているらしい。

基本的に時計を見て生活しないらしいニーナは食堂の使用時間ギリギリだと知り、喜んで了承。

ダッシュで風呂道具を自室へと置くべく跳ぶようにかけていく。

あまりの速さに一迅の風が舞う。

やっぱり代表候補生に寝坊さえなければなれたかもしれないとだけあつて身体能力はハイポテンシャルだった。

足に合わせて、結ばれていない腰まで長い赤身がかった長髪が

身体のテンポに遅れて跳ねる。

一分と掛からずに帰って来たニーナを連れて再び食堂へと歩を進める。

その際にニーナが茜雫の包帯で吊られた右腕を感慨深そうに見つめてくる。

あまりにもジツと見てくるため、茜雫が居心地悪そうに尋ねる。

「な、なに、エニックスさん？」

「そろそろ名前、呼び捨てで呼んでくれても良いんじゃない？」

そういえば、楯無にも同じことを言われた。

女子はある一定の時期になると名前で呼ばせなくなるのだろうか、不思議なものだ。

「わかった、わかった。ニーナね。」

名前で呼ぶとニーナは満足そうに微笑う。

顔は欧米人そのものだが、眼は黒とハーフ特有のミスマッチがなんだか希少価値みたいだ。

「で、なに？」

「毎日頭を怪我する茜雫君でも怪我するんだなあ〜って思っ

」

「……人をも不死身かターミネーターかなにかと勘違いしてる？」

あれだけ殺人的な反動のファイアーツェリザカをぶつ放したんだから仕方が無い。

あれは大艦主砲主義のアメリカ人が数発撃っただけで、数日までもに字を書けなくなる程だ。

今だって包帯に包まれた茜雲の右手はたまに微かに痙攣している。

ふと、思い出すかの様に筭が口を開く。

「そういえば、セン。」

「何かな、ほくきちゃんよ。」

「あの刀は何なのだ？」

「『カタナ』、ですか？」

何のことだ？

「ラウラを助け出す際に最後に使ったあの刀だ。」

ああ、アレのことか。

「さあ？俺もアレはもらったものだから銘柄とか知らない。」



「……………そうか。破損していたとはいえISの外  
部装甲を切り裂く程の業物だったから気になったのだが、残念だ。」

一夏も気になっていたのか残念気だ。

流石は剣術を幼少期から習っている筈といったところか。

今時女の子が刀の銘柄なんて気にしないだろう。

「でも、刃まで真っ黒い刀なんて何でできてるんだ？」

一夏の疑問に茜雫も首を捻る。

アレはあるおっさんに貰ってから茜雫の愛刀だが、そんなことは考えたことがなかった。

斬れ味と耐久性は間違いなく全ての刀身の中で一級品。

耐久性と叩き切ることを想定された刃の分厚い青龍刀でも両断できる。

欠点と言えば、長刀で普通の刀よりも重いから慣性を流すようにして扱わないといけないのと、日本刀の特徴として太刀筋が僅かに狂うだけで斬れ味が二乗のグラフのように大きく変化することぐらいだろう。

五人で談笑しているとあっという間に食堂についた。

流石に時間ギリギリとだけあって、空いてる席はかなり多かつ

た。

茜雫は一目散に食券を買う。

日本食が残ってるのか心配だ。

適当に入り口に近い大きめの席を選んで五人揃って座る。

ちなみに、各自それぞれ、一夏は艶やかな切り身の眩しい刺身定食、箒は定番ながら需要の高い秋刀魚の塩焼き定食、シャルロットはそんなものまであるのかと疑いたくなるチーズフォンデュ、二ーナはさすがアメリカというようなやたら大きめに焼かれたハンバーグセット、茜雫は食堂のおばちゃんの今日の一押しである鯖の煮付け定食。

食堂のおばちゃんの一押しにハズレはない。

湊の超長距離狙撃に勝るとも劣らない精度だ。

素晴らしい。

戦場なら無双ができるレベルだ。

となんとなく、お玉で無双している食堂のおばちゃん軍団を夢想してみる。

やべえ、強すぎだ。

しゃもじを振るう度に、某 無双のOPように人が吹き飛ん

でいく。

そして、最後には食事を作らないという最強の兵糧攻め。

最強じゃん。

自分なら即降伏だ。

少し足早に食事を進めていると、

「そういえば、セン！今日は男子が大浴場を使えるらしいぞ！」

一夏が浮かれたように言ってくるのを見て、この温泉ジジイが！、と内心思ってしまう。

この温泉ジジイ、茜雫が湊と千冬に拾われて間もない頃小学二年生のクセに温泉に語り出したことがあった。

温泉にマグネシウムとかカルシウムとか言われても実感なんかわかねえよ。

俗世の知識が乏しかったあの時は、ちゃんと聞いてやったが、後からなんにも役に立たない知識だったと今でも覚えている。

まあ、女性である千冬のためにもそういう美容に効くとかの知識を蓄えていたのかもしれない。

と、ニーナが嫌なことを思い出した、といった表情をする。

そして、拗ねたように怒ったようにぶつくさと愚痴る。

「そうだよ！今日は急に男子が使うってなったから沢山の人が無駄足踏んだんだよ！しかも、トーナメント戦で疲れた今日に限って使えないし！」

今にも机をバンバンと叩きそうな勢いだ。

「だから、風呂にも入ったようすがないのに大浴場から帰って来てたんだね。てか、同室ならほくきちゃんも教えてあげれば良かったんじゃない？」

茜雫の指摘にニーナもそーだそーだ！、と便乗する。

篝はうつ、とたじろぐが、

「し、仕方ないであろう！お前がなにやら浮かれて「今日から私はハイポテンシャル！」とか叫んで出て行ったのであるう。」

「ニーナが悪いじゃないの？」

「あれ」……………、そうだけ……………  
「……………」

ニーナが恥ずかしそうにとぼける。

「ちよつと、本国から嬉しい通信があったただけだって！」

慌てたように弁解。

てか、今日から私はハイポテンシャル、ってなんだ？

さつき自室に洗面道具を置きに行った速さと関係あるのだろうか？

だとしたらスゲえ、是非その秘術を教わりたいものだ。

「まあ、大浴場が解禁されたのは喜ばしい事だし、後から行くかな。」

「ん？この後すぐじゃいけないのか？」

「ちよつと電話しないといけない相手がいるから。それに長引くかわかんないし。」

「ふうん、そうか。」

一夏の特に気にした様子のない返答に茜雫は内心ホツとする。

別に相手が誰なのか訊かれて困るような事はないのだが……

……

「どうしたのだ、セン？」

「いや、なんでもないよ、ほくきちちゃん。」

茜雫はとりあえず、食事を再開。

「あ。」

「今度はなんだ……………」

篝の反応に、そんなに邪険しなくても……………」とちよつと凹む。

「『付き合つ』って件だけと別にOKだよ。」

「……………」

篝、シャルロット、ニーナの反応が見事にユニゾンする。

予想外の反応に茜雫は困る。

「……………」  
「え？、はないでしょ。てか、ほぐきちゃんが付き合つて、  
って言ったんじゃない。」

「いや、しかしだな。その、なんと云うか、私は優勝できなかったぞ……………」

茜雫の心外そうなツツコミに篝が俯きがけになる。

そんな篝に茜雫は、はぁー、と溜め息を吐く。

それがなんなのだろうか？

「別に幼馴染なんだから気にしなくても良いのに……………」

「そ、そうか。ほ、本当に良いのだな．．．．．？本当に、  
本当なのだな！！」

机に乗り出してまで詰め寄ってくる筈に茜雫は気圧されて人形  
みたいにコクコクと頷く。

「え．．．．．マジで筈と付き合っの．．．  
．．．．．茜雫君？」

「え．．．．．なにそのほぐきちゃん俺が付き  
合っちゃいけないみたいな感じ．．．．．」

「そんな訳じゃないんだけどね．．．．．」

ニーナが不機嫌そうに視線を背ける。

なぜだ．．．．．

そう思い、茜雫も何気なくあたりを見渡すと、入り口に数組の  
女子グループの塊が。

「優勝が．．．．．交際のチャンスが．．．．．  
」

「．．．．．無効．．．．．  
」

「そんな．．．．．」

【……………うわあああ  
ああん！！！！】

ダダダダダダダツ、とさながらヌーの大移動みたいに入り口の女子が全て泣きながら走り去ってしまった。

え、なに？何かしましたか？

眼を合わせた瞬間走り去ってしまったため罪悪感が余計積る。

世の中わからない事ばかりだ。

「まあいや、で、どこに行く？」

「早速なの、茜雫君！？」

「積極的だね、茜雫って。」

なにやらニーナとシャルロットが微かに頬を赤らめて口々に言う。

「ど、どことは……………？」

「だから、買い物にどこに行く？」

「う、うむ。そうだな、それなら駅方面の繁華街に……………」



「お、それ良いねえ。」

「それに最近映画館がオープンしたらしいぞ。」

「あれ？映画にも行くの？」

「ん？映画は必須だろうが。」

「なるほど、最近では買い物は映画とセットなのか……………」

「なんか……………おかしくない、デュノア君？」

「なんか違和感が……………」

なんとも言えない感覚に捕らわれたニーナとシャルロットが首を傾げる。

二人の小声での会話を茜雫が耳敏く拾う。

「おかしいって、なにが？」

「茜雫君と箒は何をしに繁華街に行くの？」

「買い物。」

「ああ、そうだ……………ん？」

ここで箒もなんとも言えない違和感に捕らわれる。

「なんだ、センと篤が買い物に行くなら俺も誘ってくれば良いじゃないかよ、仲間はずれか？」

「いやいや、一夏には内緒の買い物だからほゞきちやんに俺が付き合っつて買い物に行くんだよ。」

「うわ、なんだよ、俺に内緒の買い物って……………」

「だから内緒だ……………どったの、ほゞきちちゃん？」

「つ、『付き合っつ』というのは……………『買い物に行く』、と言う事だったのか……………?」

「へ?違うの?」

某然と訊いてくる篤。

まるでこちらがおかしな事を言っているみたいではないか。

では、これが違うのなら『アレ』しか残らないではないか。

「え、もしかして……………」

「あああああ!! そうだ、買い物だ!! 買い物に決まっつてい  
るだろうが!! 内緒の買い物だから一夏はついて来るな!!」

「お、おう。」

いきなり顔を真っ赤にして大声をあげる箒に茜雫と一夏はビクッとなった。

なんだか情けないがそれぐらいの迫力だった。

「箒……………」

「不憫だね……………」

ニーナとシャルロットが同情の眼差しを向ける。

「……………ああ、うん。そうに決まっていたであろう。あの鈍感バカが自分から付き合うなどこんなオチに決まっていたはずだ……………迂闊に浮かれた私が馬鹿みたいだ……………ぐすん」

しょんぼりと肩を落とす箒の姿がいつもよりしぼんで見えた。

## ガラクタの山

その一言が最もこの奇妙な部屋の様子を表している。

床が僅かにしか覗かない程の散りばめられた機械の備品、なんのケーブルなのか分からないものが古代遺跡の樹海のように地を、空を這っている。

時折、なにやらリスに似た非生命体が金属の樹海を歩く。

ぼんやりと不規則に並べられたモニターの光がこの異質な空間の光源となっている。

そんな異質な空間の、多光色に包まれた世界に一人の人間。

異質な世界には異色な人間。

よく晴れ渡った青空色のスカートがふわつとなったエプロン付きワンピースと背中には大きなリボンとまるで絵本から抜き出たような格好をしている。

その真っ白のブラウスは豊満な胸部を窮屈そうに抑え付けており、張り裂けそうな白い布地の隙間からは大人の肌色ははみ出している。

あきらかにスポーツとは無縁といった格好なのに対してその肢体は均等にバランスが整っており、運動不足を感じさせない。

顔は笑顔が張り付いたように若干眼が吊り目がちなのに垂れて見える。

妹と顔だとは非常に似ているのだが、妹と比べて丸いイメージを感じさせる。

異色で世界中が探し回っている件の大天才であり大天災……  
――篠ノ之束は現在マイクロサイズのプラモデルを作っている。

奇天烈な恐竜の骨格のような堅牢そうな椅子に座りながら目の前の暇つぶしに集中している。

手に手袋のようにはめられたアームが束の僅かな指の動きを感じ取り、ナノ単位にマニピュレーターを軽快に動かして行く。

しかし、程なく終わってしまった。

完成してしまったのだ。

組み立てから始まり、塗装から磨きだし、スプレーによる表面保護まであらゆる作業が。

「あゝ、終わっちゃった。次はどうしようっかなあ。もうナノ単位プラモデルは飽きちゃったし、クーちゃんも今は居ないし。」

束はうんと立ち上がり、背伸びをする。

立ち上がった際に、床に置いてあった今ではなんなのかも分か

らない精密なコンピューター基盤がバキッと乾いた音を立てた。

木霊す山彦を聴きながら、そろそろ茜雫の淹れたココアが飲みたいなあとはやく。

別に束はココアが好きという訳ではない。

だが、茜雫の淹れたのは別格だ。

市販のココア粉で束を唸らせる。

ココア粉の量から温度、温められたミルクの量まで完璧にこなす。

時と場によって束の欲しい分配量を的確に淹れてくれる。

そういう自分の事を分かってくれているような感覚が新鮮で茜雫のことは気に入っている。

もしかしたらもっと新発見させてくれるかもしれない。

是非自分の隣に居て欲しいと願う数少ない人物だ。

） ～～～？

その時、懐かしのゴッドファーザーの曲が束の秘密ラボにBGMを醸し出す。

「ハッ！！これはまさか！トウツ！！！！」

束は素早く骨格のような椅子の肘置きの裏をなぞると、携帯端末が埋まっているガラクタの山の付近にルパンダイブ。

背後で恐竜の骨格のような堅牢な椅子のがバラバラと崩れ去り、一種のオブジェを創り出した。

モニターのみの薄暗い灯りがその迫力を感じさせる。

一方、束はやつと携帯端末を文字通り発掘。

急いで通話ボタンを押して耳に当てる。

「もすもす？終日？<sup>ひねもす</sup>」

即座にブチッと切られてしまった。

切れた。

二つの意味で。

しかし、束は別に慌てたりしない。

もう一度かかってくるのはわかっている。

束の予想通り数秒後にはまたゴッドファーザーの曲が流れる。

「はい、みんなのあいど……」

束。

「ふええん、挨拶ぐらいさせてよお！ちーちゃんの意地悪！」

黙れ、こっちは先月の騒動や今日の暴走事件で仕事が溜まりっぱなしだ。早急に用件を終わらせる。

因みに電話先の相手……千冬の隣では仕事書類のスカイツリーに湊が口をパクパクさせて機能停止状態に陥っている。

目尻からは涙が一筋。

千冬が仕事を溜めてしまう程なら湊の量はすごいと親友である東も分かっているので訊かない。

「はいはい。で、何かしらん？」

今回の件のVTシステムにお前は関わっているのか。

「VT……ああ、あの不細工な欠陥品のこと？篠ノ之束さんが創ると思うのかな？束さんは完璧にして十全。つまり、創るものも完璧にして十全じゃなければ意味がないよ？……ああ、あと二週間程前にあれの研究所はミサイルで灰になってるからね。もちろん、死傷者は0だから安心してね。赤子の手をひねるより簡単！」

……そうか。で、だ。

千冬の声色が僅かに低くなるのを束は気づく。

「今度は何かな？」



お前も『連中』と関わっているのか？

「心外だよーちーちゃん。私があんな根本的に欠陥事業に関わるはずないよお。」

ドイツにVTシステムを創れると思うか？

「全然、多分情報を提供されてけしかけられたんじゃないのかなあ？」

VTシステムが禁止された裏の理由は、IS操縦者の動きに合わせて自己修正して模範トリスさせる事があまりに高度過ぎて簡単に創れないからだ。

万が一他国が開発したら、太刀打ち出来なくなる。

そんな思惑が生まれ、自然にVTシステムが禁止された。

その暴走に陥るとはいえ完成系が渡されたら試さない手はない。

ドイツ軍上層部は『連中』に上手く踊らされたわけだ。

最後に一つ。お前は茜雫がやるうとしてる事、『連中』について何か分かっているか？

「それも全くわかんないなあ。せつくんのことはいつもの事だけど、アイツらのことは全く尻尾を出さないって感じだねえ。多分、親玉はとんでもないヤツかな？ちーちゃんも気をつけてねえ。」

あの篠ノ之束をそこまで言わせる組織。

どれだけのものなのだろうか。

.....!.....わかった、またな。

電話が切れる。

「やあ、久しぶりに声が聞けて束さんは嬉しかったねえ。ちーちゃんは相変わらず素敵ングだよ。夕日の向こうにはいかないでね。」

束は頷きながら、携帯端末を投げ捨てようとする。

~~~~~?

今度はダンスベイダーのテーマが流れ出る。

重々しく力強い行進曲のような曲調は皆が一度は聴いた事があるだろう。

この着メロは.....!!

「はい、もす.....」

お久しぶりです、束さん。

「ズー~~~~ん。せっくんまでひどい。」

???

電話先の相手……茜雫から困惑の沈黙が流れる。  
程なく問題ないだろう、と判断されたのが印象深い声が受信マ  
イクから流れる。

少し急いでのので、無駄話には付き合ってもらえません。

「ん、何があるのかな？東さん気になるな？」

一夏に早く来るようになって呼ばれてるんですよ。

「そっかそっか。いつくんは元気かな？」

変わらず、といった感じですね。昔と変わらない。

「うん、うん。東さん安心だぜ！で、なんのようなのかな？」

東は肩と耳で携帯端末を挟み、腕を組みながら頷く。

今回の件のことです。どうせそちらでも察知しているのでし  
ょ。

東は微かに微笑う。

東が微笑うと僅かに目尻が垂れる。

千冬と同じ質問をしてきた。

「うん、全部じゃなけどねえ。」

電話の通話口の向こうで茜雫が少し落胆するのが分かった。

「と、いうことは俺の欲しい『情報』は0ですか……………」

……………」

「うん!!」

……………」そんな嬉しそうに言わないでくださいよ。数少ないチャンスが舞い降りたのに飛んで行ったんですから。ま、別に束さんのせいでもないですから構いません……………」

「それだけなの!? 束さんかなしいなあ。」

茜雫は溜め息吐いて呆れた。

二十歳越えた大人が何言ってるんですか。それよりも部屋はまた散らかってないですよね?

「ばっちし前と一緒にだよ!!」

……………」その『前』、というのが俺が片付けた『前』、なのか片付け終わった76日『前』なのか非常に気になりますかね。

「それはねえ……………」

結構です。聞くのが怖いんで。では、くーちゃんとやらにも

よろしく伝えて置いてください。 . . . . .

「あっ!」

何ですか . . . . .?

「『あの子』の様子はどうか?」

『あの子』とは『エネミー』のことだ。

ええ、なかなか良調ですよ?

「『期限』どうなのかな?」

まだ、大丈夫ですかね。もう少しぐらい時間がかかりそうです。

「ちやあんとこっちで『対策』はしてあるからね。」

????? . . . . .何のことですか?

「ふふふ、内緒だよッ!」

はあ、そうですね。それじゃ、おやすみなさい。

「うんうん、またねえ!」

困惑の気配を残したまま茜雫からの通話が切れた。

また誰からかかからないかなあ、と携帯端末を持ったまま試

しに待ってみる。

神のイタズラかはたまたただの偶然か。

勢いよく束の手の中でバイブレーションしながらとある音楽が  
鳴り響く。

）　　）　　）　　？　　）　　）

ものすごい着信メロディー。

『極道の女たち』の劇中会話を含めた凄まじい着信メロディー  
だった。

おそらく世界に束一人だろう。

気になるのなら、自分でその会話を聞くのが一番だろう。

誰がかけてきたなんて出なくても分かっている。

頭のウサミミカチューシャもビンビン反応している。

「やあやあやあ！！久しぶりだねえ！！ずっとず～～～～～～  
くツと待ってたよ！！！」

束は新しくおもちゃを与えられた子供の様に弾んだ声で話しか  
ける。

愛する妹に呼びかける。

「尊ちゃん」

どうしてこうなった……………!?

一夏の頭をこの言葉と困惑が支配した。

一度深呼吸。

頭に酸素を送り込んで現在の状況を整理する。

風呂の使用許可が下りた。

シャルロットが一夏に使わせてくれるとのことでお言葉に甘えて先に使わせて貰うことに。

お風呂最高!..!

あ~~~~極楽 極楽 極楽浄土!

背後から足音が.....茜雫か?

なぜシャルロット?

以上の状態だ。

現在背中合わせで一緒に混浴している。

正直気まずい。

そりゃ男女が同じ風呂に入っているのだから嫌でも異性の存在を意識してしまう。

しかも、お互いに生まれたままの一糸纏わぬ姿。



視界に入っではないが、背中合わせの感触がお互いの存在を  
教えてくれる。

多温高湿なため、嫌な汗が顔から吹き出る。

「……………」

無言。

「い、一夏。話があるんだ。大事なことから聞いて欲しい。」

「お、おう！」

思わず返答に力が入る。

この状況で何だろうか？

ぴちゃん、と天井からの水滴が何処かに落ちて静かなBGMと  
なる。

落ち着かない。

「その、前に行ったことなんだけど……………」

「前……………ああ、学園に残るって話か？」

前にシャルロットが自分が『女』だと告白した際に、一夏がシ  
ャルロットに求めた疑問だ。

自分を捨てて国に帰るか、このままここに残るか。

「うん、それでね、ここにいようと思っ。」

「本当か!？」

思わず振り向きそうになるのを慌てて抑えた。

それはとてもとてもマズい。

ただえさえ『前科』があるというのに……………

やべえ、負の記憶が蘇る。

その時、

ぴちゃん

「きゃあ!」

「え……………ちよっ……………シャルロツ……………」  
「……………」

落ちてきた水滴に驚いたのかシャルロツが背中から近くにいた一夏に無意識に抱きつく。

その時、確かに存在した母性が背中に当たってしまい、心臓が緊張で跳ね上がった。上がった。

そして、起きてしまった。

ガラララララ

そんな音が大浴場に響いた。

窓の少ない大浴場なので、とても響いた。

これは……………!!

一夏とシャルロットがまさかと思い、そのままの体制で音源を  
向く。

そこには、

タオルを腰に巻いた茜雫が洗面具を持って立っていた。

「……………」

「……………」

嫌な沈黙。

長い長い時間が流れる。

あまりのことに思考停止に陥っていた茜雫が状況を理解できたらしく、みるみると顔を真っ赤にしだした。

おお、珍しい光景だ！、と一夏が感動していると、

茜雫はぺこりとお辞儀してそのまま引き戸を閉めて立ち去ってしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

目線だけでシャルロットと見合わせる。

そして、一斉に叫んだ。

「「あああああああああああああつあ！！！！！！！！！」」

「だから、しつこいなあ！誰にも言わないって！」

「それは当たり前だし、昨日のことは違うんだからな！！！」

次の日のSHR前。

一夏は茜雫のところに猛ダッシュして弁解中。

シャルロットは用事があるとのことで、行方不明だ。

昨日、大浴場混浴目撃事件後、急いで茜雫の部屋に弁解しに行ったのだが、居留守を食らってしまった。

朝も見かけなかったので、今弁解中である。

「好い加減しつこいぞ、一夏！俺は何も気にしないから思う存分やればいいじゃん！」

「だから、それがおかしいんだって！？てか、何を！？」

何度言っても分かってくれない。

誤解が完全に浸透している。

一夏と茜雫の言い合いにクラスのみんなが目を丸くして注目している。

「まあ、とにかく………で、SHR始まるからさつさと席につけて。千冬さんに殺されるぞ？仕事溜まりまくってヤバイ状況なのに。」

そう言われては一夏もしぶしぶ席に着く。

頭を割られるのはいただけない。

程なく、真耶がひどく疲れきった顔で教室のドアをくぐる。

何かあったのか、と茜雫は思ったが、おそらく昨日の事後処理が真耶にも多く回っているのだろうと一人納得。

すぎるように教卓に両手をつくくと、

「今日は、ですね………皆さんに転校生を紹介します。転校生と言うか、すでに紹介が済んでいると言いますか………」

ひどく歯切れが悪い。

本格的にどうかしたのだろうか？

そして、今分かっていることは、

「また、転校生をここに入れるなんて人事は誰が仕切ってるんだ？」

一学期にすでに三人。

これで四人目だ。

「そうだよねえ。でも、転校生つてきになるう。」

のほほんさんも同感のようだが、転校生の方が大事らしい。

しかし、このままでは一組がパンクする。

「じゃあ、入ってきてください。」

「失礼します。」

入ってきたのは丈の短いスカート履いた金髪の『女子』。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めて宜しくお願ひします。」

そう言つて礼儀正しくお辞儀したのはつい昨日まで『男の子』  
だったシャルロットだ。

「へえ、こう来たか。」

茜雫も眉を上げて驚く。

まさか秘密をバラしてしまうとは。

「デュノア君はデュノアさんでした。はあ〜」

真耶が大きく溜め息を吐いた。

大方、寮の部屋割りだろう。

女子が徐々に騒ぎ出す。

あとから来た千冬も状況を理解できたらしく頭が痛そうだ。

「デュノア君って………女？」

「だと思った！！美少年じゃなくて美少女だったわけね！！」

「織斑君って同室だから知らないわけ………」

「昨日って確か男子が大浴場使ってたよね！？」

「………まさか！？」「……」

「俺は昨日は自室のシャワー使ったから無関係です。」

ちゃんと説明をして逃げ道確保。

とぼつちりは御免だ。

「ああ！？セン、お前！！」

一夏がこちらに助けの視線を送るが茜雫は冷たく突き返す。



無理です。

「ああ、沙月、お前に手紙を預かっている。取りに来い。」

千冬が胸ポケットから一通の茶封筒を取り出す。

茜雫は入り口付近に立つ千冬に席を立って歩み寄る。

「???誰からですか?」

「知らん。」

「……………爆発しませんよね。」

「するか、馬鹿者。」

「何でそんなに普通に会話してるの!?!」

面倒なので一夏は無視。

一夏のすぐ前を通り過ぎる。

が、

「一夏あつ!?!?!」

爆発音とともに教室のドアが弾

け飛んだ。

「ひっ!!」

真耶が小さく悲鳴を上げる。

千冬は素早くその場からバックステップの要領で窓際まで退避。

踵が低いとはいえハイヒールでバックステップとは凄い。

茜雫は状況を忘れて内心拍手。

壊れたドアから現れたのは甲龍を展開した鈴だった。

聞きつけたのだろうか。

だとしたら、凄い地獄耳だ。

「死ねえツツツ!!」

そう叫んで、肩部の衝撃砲『龍砲』を一夏に向けてチャージ。

つて.....!!

「鳳さん、俺がいるから!? ストップ、ストップ!! ミンチになる!!」

射線.....もとい、一夏と鈴に挟まれた状態で立っていた茜雫を構わずに鈴が衝撃砲を撃とうとしている。

「セン、あの盾を出せ!！」

「そうか、分かった!!-- -- -- --あれ?」

意識を集中してもエネミーの稼動盾が出てこない。

あ、と思い、左手首に注目。

「.....ごめん、部屋にエネミー置いて来た。」

「おいしい!?何やってんだよ!?お前バカだろ、バカだろ!!--」

「しょうがないじゃん!!--」

因みに、現在エネミーの待期形態の古びた腕時計は自室の机の上でポツンと置かれていた。

その間にも龍砲のチャージが終了してしまった。

ああ、死んだかな。

茜雫はそう思い目を閉じる。

「フーーーーッ、フーーーーッ、フーーーーッ!!--!!!--」

いつまでたっても衝撃がこない。

目をゆっくり開ける。

毛を逆立てた猫のように怒り狂った鈴がいた。

そして、

「……………ボーデビィツヒさん？」

そこには、シュワルツェア・レーゲンを纏ったラウラが騎士よろしく立ちはだかっていた。

「滑り込んでお得意のAICで衝撃砲を打ち消したのかな？ずいぶんと速かったね。てか、直ったの？」

「コアが無事だったからな。予備だけで組み立てた。」

「それはそれはご苦労様。」

よく見ると、肩のレールカノンがない。

「何でそんなに落ち着いてるんだよ……………セン。」

「さあ？」

極限状態から解放されたからだろうか。

なんだかわけがわからなくなって普通に会話してしまっている。

ラウラがこちらに向き直った。

そして胸ぐらを掴まれる。



そういう問題か？

「……………それはどうも……………てか、性別的に俺が婿でボーデビッツヒさんが嫁だからね。」

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。」

「へえ、誰だその情報源は……………!!！」

ちよつと殺意がわく。

別にキスされたのが嫌だったわけではないが、間違った情報でこちらが問題を被るとは……………

クラスのみんなが固まっている。

あの、のほほんさんも笑顔が固まっていた。

氷土だ。

室内の空気が一変した。

後ろからドス黒い殺気を感じる。

冷や汗が出た。

「ほお、こちらが頭が痛いと言つのに朝からイチャイチャとはいいご身分だな、茜雲。」

「……………織斑先生。名前で呼んでま……………」

「黙れ、発言権はない。」

「横暴だ!？」

どこから取り出したのか、一振りの日本刀を右手に携えていた。

どこからだした……………

鈍く光る刀身が眩しい。

ぞくつと背筋が寒くなる。

背を向けている入り口から濃厚な殺気が。

千冬に気圧された茜雫とラウラがぱつと振り向く。

「へえ、何か凄いもの見ちゃった……………」

入り口には姉……………湊が静かにたっていた。

完全な無表情。

ただ静かにたっていた。

傍には気絶した鈴が。

なにが起きたのだろうか。





刀を携えていつでも斬り掛かれるように立っている。

「で、何だって……………?」

今度は氷った笑顔を浮かべてガチャンとコッキングターンボルトを引いて空薬莖の排出と次弾の装填を行う。

あきらかに普通よりも大きな空薬莖がガラランガラんと金属音をたてて床に転がった。

「……………よく立ったまま撃てましたね。」

基本的に地面に寝た状態で撃つのがセオリーだ。

でないと、後方に撃った本人が反動で吹き飛ばす。

ズガァン!!!とまた一発。

一迅の風。

暴力的な破壊音。

今度は窓際の壁が大きく食い破られた。

「で、何だって……………?」

ガチャンとまたコッキングして撃てる状態に。

「……………」

今度は茜雫も何も言えない

「……………ほうちう手伝って。」

「分かりました、湊さん。」

「即答しちゃうの!?!」

何と筈まで参戦。

席を立つ。

これまたどこから取り出したのか木刀を正眼で構える。

うわぁ、マジでヤバくなって来た。

「ニーナ、お前も手伝ってくれ。」

「別に良いけど、武器ないよ。」

「良いの!?!?てか、武器とか使うの前提!?!」

これはおかしい。

いくらIS学園でもここは日本だ。

「はい、どうぞ。」

そう言って湊が後ろに手を回して取り出し、投げ渡したのが、ドイツ大手銃器メーカーであるH&amp;K社の傑作銃G3の後

継銃であるドイツ軍正式アサルトライフルG36。

「だから、皆さんどっから取り出したの!?なんで持ってるの?」

「不審者対策だよ、せんちゅ。」

「不審者は間違いなくあんだだ!!」

世界最高の対戦車ライフルと新型アサルトライフルを装備した人間に痴漢もストーカーも強盗も寄り付かない。

茜雫がみたらまず通報する。

「今時護身道具ぐらい持ってないと。」

「なに、この日本で銃をスタンガン感覚で持ち歩く人!?そんなの襲ったら逆に殺されちゃう!?」

ジリジリと包囲網が狭まる。

入り口は超長距離狙撃から極短距離射撃の天才である湊。

窓は接近戦では抜くことは不可能な千冬。

後ろの出入り口はG36のコッキングレバーを引いて初弾を装填した遠距離のニーナと木刀を正眼で構える近距離の箒によるバランスの整った布陣。

なぜかセシリアまでスナイパーライフルを取り出して協力して

いる。

一夏をチラッと見て助けを求める。

返事は……………

「無理だ。スマン。」

チクシヨーーーーーッ!!

「ふん、私の嫁に手を出すな。」

「君が一番の原因なんですけどね!?!」

さらに包囲網が狭まる。

「クソう、これは一夏のポジションではなかったのか!?!」

「なんだよそれ!?!」

生憎ツツコム一夏かまっている余裕はない。

「こつなれば……………」

「はい、逃がさないよ。せんち」

「……………ツツッ!?!」

接近戦がないと決めつけていた湊の無拍子と縮地による接近。

凍るような笑顔を最後に次の瞬間ブラックアウトした。

後に語る。

アレはヤバイ。

三十九話 次向（後書き）

三巻からは原作から徐々に設定が脱線してオリジナル路線をぶっ放  
しますのでお楽しみに

どうか 感想ください

四十話 加速（前書き）

やっと更新出来ました

すみません

いよいよオリジナル成分が爆発してきます

## 四十話 加速

「……………んっ……………ふああ……………」

茜雫は瞼越しに眼を突き刺すように刺激する感覚に眩しい、と感じた。

寝たままの姿勢を動かさずに重たい瞼を薄っすらと重たげにこじ開ける。

ついでに、背を伸ばす仔犬のように欠伸を小さく漏らした。

狭く、薄暗い視界に映ったのは自室のベランダへとつながる窓。

さらに活動の鈍い筋肉を総結集して瞼を押し広げると、先ほどの薄暗さを吹き飛ばすほどの白が視界を覆う。

それが朝日だと寝起きの頭ぼんやりと判断すると、腕を朝日と挟むようにかざして徐々に目を馴れさせた。

「……………暑い……………」



朝最初の言葉であり感想は嫌悪感に満ちたばやき。

七月に突入した事もあって朝からすでに暑くなっている。

ロシア西部地方生まれの茜雫にとっては馴れる事のない暑さであり、とても苦手だ。

四季おりおりの日本や基本的に高温の中東で育ってきた茜雫だが、体質的に無理らしい。

いくら暑いのが苦手だからと言っても、気候に対する適応力は高いため、砂漠でもいかない限り、なにもしていないのに汗をかくことはない。

もともとそうだったが、ここ数年の『世界旅行』でさらに適応能力が高くなった。

寝汗をかくといえは、たまに何度も見てしまう『あの夢』、ぐらいだろうか。

自分でもなかなか便利な体質的にだと思っ。

いや、そう言う風に『決められている』のかもしれない、と少し自嘲気味に微笑う。

朝からネガティブだと一日テンションが持たない。

本格的に活動を始めるために胎児のように小さく縮めた身体を伸ばして身体を起こした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あ。」

片手で顔を覆って小さく声を漏らした。

よく考えれば、昨日の夜は窓もカーテンも開けっ放しで寝ていた。

そのため、朝の高度の低い朝日の直射日光が網戸越しに全開まで開かれたカーテンをゲートに室内まで刺し貫いている。

昨日の夜は寝たのが午前三時だったため相当辛いはずなのに暑さのせいで早く目が覚めてしまった。

疲れすぎてカーテンすら占める事を忘れてしまったようだ。

チラツと目だけを動かして自分の机の上を見る。

茜雫の机の上には今日の分の予習のノートと国語辞典が隅に追いやられて、セロハンテープと何やら紙の細切れとなった小さな紙片が散らばっていた。

「結局終わらなかったなあ・・・・・・・・・・」

はあく、と一回溜め息を吐いた。

その際に頬の湿布を貼った部分がズキズキと虫歯のように僅かに痛んだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・なんでかなあ・・・・・・・・・・」

「？」

これは二つの事に関してだ。

まず一つが、ラウラがいきなり『キス』した件。

さらに、謎の『嫁』宣言。

正直、なぜラウラが自分にキスなどしてきたのか全く理解が出来なかった。

外国のスキンシップにしては、少し大胆すぎる。

しかも、嫁。

わけわかんねえ。

と、まあ、ラウラは生まれが少々特殊だし、間違った知識をいろいろ植え付けられているらしいから大丈夫だろう、と自己完結。

気にするな、と感が告げている。

因みに、茜雫の人生目標リストにラウラの間違った知識矯正と間違った知識を吹き込んだ張本人をしばき倒す、という項目が追加されたのは誰も知らない余談である。

これはまだ微々たるものだ。

問題はそのあとだ。

なぜか湊をはじめし、千冬、箒、さらには二一ナまでもが茜雫に狂気の凶器を向けてきた。

特にあれだけ怒り狂った湊を見るのは久しぶりだ。

普段全く怒らないため、怒った時の対処法は親友である千冬、あの束すら知らない。

怒り狂ったわけではないが過去に一度だけ小学校に一夏と箒と通っていた時期に見たことがあった。

ああ、あとつい二ヶ月十二日前にも空港で千冬とセットでキレられた。

思い出すだけで身震い。

体感気温が二度ほど下がったような気がする。

とにかく、皆さんがあれだけお怒りになった理由が全く茜雫の脳内検索エンジンにヒットしない。

湊に気絶させられた後、全身打撲の状態で保健室に寝かされていた。

保険医に「あら、また来たの？ やんちゃんねえ」、と言われたのは記憶に新しい。

恥ずかしくてさっさと消し去りたい。

あれから四日経ったが、右頬や身体の節々が少し痛む。

湊や千冬になんで怒ったのか聞いて見れば、湊には「死ねばいいんじゃない？」と言われ（かなり心に刺さり、心が折れ、泣きそうになった）、千冬には無言で殴られた（部屋で身長を測ると、タンコブができていたのにも関わらず身長が同じだった）。

今は触らず神にたたりなし、を信条に『何もなかった』と言いついて聞かせて生き延びた。

「今は……六時半を少し過ぎたぐらいか……」

茜雫は時間を時計を見ずに確認。

茜雫は自分の体内時計の正確さに自信を持っている。

数日に一度だけ補正をかければ十分以内の誤差で正確に時間を当てる事ができる。

因みに、湊の体内時計は誤差が常に五秒以内、とかなり万能で部屋にも私物にも時計の類を身につけていない。

因みに、左手首には腕時計の代わりに昔茜雫が誕生日プレゼントとしてあげた、繊細で簡素な装飾の施された腕輪が付いている。

特に耐久性の高い、というわけではないのだが、流石に新品同然、というわけではないのだが今でも綺麗な状態で大事に扱われている。

あげた本人としては、初めて他人に贈ったプレゼントが大事に

扱われているというのは嬉しい限りだ。

あと、千冬の誕生日や茜雫が行方不明となる直前に箆に手渡した髪留めと髪紐も二人とも今でも使用している。

おお、なんか自分の周りには素晴らしい人ばかりだ。

ベットの上で下半身をまだシーツに潜らせたままの状態で感動しつつ、そろそろ本格的に起きるためにベットの愛しの温もりから名残惜しく脱出しようとした……

「……………ん……………」

ベットに手を突いた右手がシーツ越しに何かを掴む。

「……………?……………」

全く理解ができない。

そのまま一回深呼吸。

頭に酸素を供給して脳内エンジンに二トクを叩き込む。

まずは状況の確認だ。

朝起きた。

それは普通だ。

次に窓を見た。

窓が空いていた。

おかげで暑さと眩しさで目が覚めてしまった。

今度から気を付けねば。

そして、起きようと右手をベッドに付いたら何かをシーツ越しに掴んだ。

異常事態発生。

確実に茜雫の身体ではない。

自分を触った感覚はないし、感覚神経が狂ったならまだですが、茜雫の身体のすぐ隣に自分自身の身体があったら、  
．．．．．怖い。

色んな意味で異常事態だ。

少しゆっくり弱く握ってみる。

質感は柔らかく、薄めの布越しに暖かな体温を感じる。

よし、取り敢えず生き物だ。

実体がある、幽霊の類ではない。

となると、生物．．．．．なのか？

動物<sup>ベット</sup> . . . . . はない。

寮では飼うことなんてできないし、昨日の夜はちゃんと鍵まで掛けた。

そもそも、大き過ぎる。

ちょうど『人』ぐらいの大きさ。

落ち着いて見ると、線が細く丸いし、ちゃんと呼吸の証として息遣いと上下運動があった。

掴んでいる部分は細く、柔らかいが確かな筋肉も感じる。

腕 . . . . . だろうか。

「 . . . . . 」

だとしたら、楯無の可能性が高い。

あの天邪鬼には一度就寝中に水着でベットに忍び寄るといふ前科がある。

忍び込んだ楯無が寝た数分後にたまたま起きた茜凜によって叩き出されたが . . . . .

湊 . . . . . という可能性もあるが、長身の湊にしては小さい。



残る案は楯無のみ . . . . .

と、勝手に決めつけ何気なく隣の人と思われる膨らみから視線をあげる . . . . .

「 . . . . . え . . . . . ? 」

呆然、絶句と言えるか細い声を漏らした茜雫の視線の先には空のベット。

二人部屋なのでもう一つベットがあるのは当たり前と言えたり前なのだが、問題はそこではない。

四日前にシャルロットが転校生 . . . . . とい  
うより転向性<sup>てんこうせい</sup>としてIS学園に再度転入。

今まで一夏と同室だったが、それは『男子のシャルル』なので許されたことであつて、『女のシャルロット』には男女同室になるわけがなく、急遽部屋替え。

一夏は茜雫の部屋にとんぼ返りすることとなった。

さて、クエスチョン！

一夏と再度同室となりました。

朝起きると、自分のベットに人ほどの膨らみが . . . . .

?!?

隣を見ると、同室の男の子がベットにいません。

.....アツーーーーーッ!!  
!!--!

「うわぁッ!?!マジで!?!マジでなの、一夏!?!?!」

茜雫は近所迷惑も考えずにベットの膨らみから転げ落ちるよう  
にして離れる。

後から何かを言われるなど、頭にならないほどパニックに陥る。

いやダイヤダイヤダイヤダイヤダイヤダイヤだ!!--!!

いくらなんでもこれは無い。

前にこれに似たネタで一夏を弄った事があったが、本当にされ  
ると恐怖以外何者でもない。

叫び声とベットから転げ落ちた音に起きてしまったのかベットの謎の人物『Eさん』が身を起こし、覆いかぶさったシーツを退けようとしている。

「待て待て待って!!まだ希望を持ちたいから!!まだ心の準備ができていないから待って!!!」

茜雫の叫びも虚しく謎の人物『Iさん』はシーツをつつとおしそくに引き剥がした。

茜雫は最後の抵抗として目をつむり、両手で顔を覆って現実逃避の準備を万端に。

いつでもこい!、と虚勢を張って冷酷な現実との交戦準備を整える。

「何をやっている、我が嫁よ。」

「.....」  
「こっちの台詞だこのヤロお。」

先ほどの焦りもなくなり、逆に落ち着いて口を開く。

「何やってるの.....『ボーデビィット』さん。」

なぜベット.....というよりなぜこの部屋に居る??

そもそもどうやって入った?

ベットの上に当たり前のように身体を起こしている状態で座っているのは、件のラウラ・ボーデビッツ嬢。

しかし、当の本人は不機嫌そうな顔でこちらを軽く睨んでくる。

「名前で呼べと言ったはずだ、我が嫁。」

こいつもか。

最近多いな、名前で呼ばせる人間が……………

ぶつくさと文句を言ったラウラは茜雫の疑問を表情で汲み取ったのか、

「ああ、部屋にはちゃんとドアから入ったぞ。」

なぜか誇らしげ。

「……………ちゃんと鍵、閉めてたよね……………」

茜雫の質問に、ラウラは愚問だと言って、さらに誇らしげに微笑う。

非常に目の保養となる綺麗な微笑みだが……………  
……………まさか。

この常識のズレた娘さんの事だ。

いい事ではないことは確かだ。

「あの程度の鍵、『私とシユワルツェア・レーゲン』の前で有象無象の一つでしかない。」

「お前まで破壊したのか!？」

なんか前にも似た台詞を聞いたが、今度は茜雫に損害ものだ。

跳ね起きてドアにダツシュ。

壁に手を突いて走った勢いを殺した茜雫の眼前にはドア……  
……らしき残骸。

足先に何かを当たったと目線を足元に落とすとそこにはドアの取っ手が。

ドアのあった枠組みの淵には片方の蝶番が一つのネジでぶらぶらと辛うじてつながっている状態。

調べなくても分かる。

ご臨終だ。

ああ、この前湊に壊されたばかりだと言うのに……………

茜雫は急激な頭痛にこめかみをグリグリグリと揉みながらドアの残骸を踏みしめ、器物損害の張本人の元に戻る。

「お前は寝る時は丸くなって寝るのだな。まるで赤ん坊……………」

「……いや、異名からして仔犬のようで可愛かったぞ？」

「うるさい、仕方ないじゃん。」

寝出す時には普通に横になるのだが、朝起きるとなぜか胎児のように丸くなって寝ている。

自分でも不思議だ……

横になって身体を胎児のように丸める体制が人間の心が一番落ち着くらしい。

自分はなぜそんな体制に無意識になるのだろうか？

ずっと何かに怯えているのだろうか？

と、ここで気づく。

「……………ラウラ。」

「なんだ？」

そんな可愛らしく首を傾げられても困る。

小動物みたいだ。

「服は……………？」

肩に引っかけた状態で身体を辛うじて隠している薄いシーツの端から白雪のような細い足が太ももの半ばまで覗いている。

その足にはシュワルツェア・レーゲンの待期形態である黒と赤のレッグバンドが巻かれている。

ちよこつと左腰のくびれも覗いておるので、シーツが無くなればレッグバンドを除いて全裸だと言ったことが分かる。

「無い。」

さも、当然のように断言。

いや、真顔でおかしなと言われても非常に困るんですけど・

右手でこめかみを揉みながら左手で脱力しそうな頭を支える。

「じゃあ、どうやってここに……だあああ  
あ！ー！シーツ！シーツを下げないで上げてろ！！身体に巻きつける、  
見える！！！」

ほおを赤くして慌てふためる茜雫にラウラは可笑しなものでも見たとでも言っような顔をする。

「ふふふ、意外と初心なのだな？」

「そう言いつつも顔を赤らめている君に言われたくない。で、  
どうやって来た？まさか……」

「ああ、『この格好』で来た。」

．．．．．大丈夫なのか、こいつ。

茜雫が少し可哀想な目で見ているのに、ラウラは不満そうに上目で睨む。

正直、いつもの迫力はなく、むしろ可愛らしい。

さてと、

「．．．．．最初の根本的な質問に戻るが、．．．．．なぜここ．．．．．と言うよりもなぜ俺のベットで寝ている。しかも、全裸で．．．．．。さらに、同室で隣のベットで寝ているはずの一夏はどこに行った？」

「うむ、日本では昔から嫁とは床を一緒にするという風習があると聞いた。『そいね』というらしいな。」

げんなりして額を抑える茜雫と対象的に、ラウラは新しく得た知識を母親に教えて上げる子供のように得意げに話す。

頭痛え。

楯無がいたとしてもここまで頭痛は覚えない。

なんか面倒臭くなって来た。

「へえ、それはそれは知らなかったな．．．．．因みに新しく同室となったシャルロット・デュノア女史には何と云って来たのかな？」



「我が嫁と『同じベットで一晩寝てくる』から心配するな、とちゃんと伝えて来たぞ、褒める。」

褒める要素が見つかりません。

ご指定のファイルは沙月茜雫製脳内PCには無いようです。

茜雫は今日のスケジュールにシャルロットのところまで弁解する、という項目を捻り込んだ。

一向に褒めようとしないう茜雫にラウラはまたまた不満気なご様子だったが、そんなこと知るか、とばかりに構わず話を続ける。

大事な重要な話だ。

「で、なんで全裸……………なの？」

目を逸らしたいが、目を逸らそうとすると話題まで逸れそうなので、ラウラの目を見ることでなんとか凌ぐ。

「嫁と同じ布団ですることと言えば……………」

「はいストップ。もういい、これ以上はいろいろとやばい可能性が出てくるから次の質問。」

「む、お前から聞いてきただろうが……………」

「何もなかったよね……………?」

「私とした事が……………忍び込んで嫁と同じベッ

トに寝たのはいいが迂闊にも私まで寝てしまった……………  
「……………」

全然忍び込んでねえよ。

ドアが完全に破壊されてるから、強行突破だよ。

そして、変なところで抜けているラウラに心内で万歳三唱。

「一夏は……………」

「ん、ああ、あの男なら連れ出した。」

「つ、連れ出した……………?」

どうやってだよ……………

理解できないでいる茜雫にラウラは補足した。

「梱包しようとしたらいきなり暴れ出してな。嫁が目を覚まして  
しまうと思って、顎を打ち抜いて、首筋、鳩尾、ついでに股間を蹴  
り上げて気絶させた。『教官の部屋』の前に転がして置いたから大  
丈夫だ。」

テストで100点をとって自慢する娘のような人間凶器に聞いて  
いた茜雫は寒気がした。

全身の急所を殴られた後、金的を蹴り上げられる!?

男なら誰もが狂い死にってしまうアレをサッカーよろしく蹴っ

たのか、このお人形さんみたいな美少女は？

茜雫はその事実に関心を取られてとある重大な言葉を聞き逃していた。

「た、確かにゴールデンボールかもしれないけど、感心しないな。」

「なぜだ？アレなら男はみんな一撃らしいぞ？実際に一撃で静かになった。」

「俺も男だからね……………」

「安心しろ、嫁にはしない。」

金的免除を出されて茜雫は少し安心。

目の前の小さな小柄の無垢な少女は全ての男の天敵だった。

茜雫は一夏に本気で同情しながらクローゼットの戸を開け、中から一枚のシャツを取り出す。

「取り敢えずこれを着ておいて……………」

ラウラに投げ渡す。

ハンガーが重りとなったシャツはひらひらと袖をなびかせながら放物線を描く。

大きいと思うが、この際仕方が無い。

ラウラは投げ渡された真っ白いシャツをまじまじと見つめる。

「これは嫁のシャツか……………」

「そうだけど。」

「そうかそうか。」

「……………まあ、とにかく着てくれ……………  
それもつお前にあげるから。」

「うむ、ではそいねの初体験の記念品と言うわけだな。」

「違うから、あとそういう危ない発言は止そうね、お願いだから。姉さんとか厳格な千冬さんやほくきちゃんに聞かれると面倒だから。」

いそいそと茜雫のシャツを着るラウラに茜雫は背を向けて待つておく。

本当は下も渡した方が良いのだが、茜雫の下着を渡すわけにもいかないし、下着無しでスポンを履くのは女の子には抵抗があるだろう。

そろそろ着替え終わっただろうと思い、後ろを振り向く。

そこには、一部マニアの心をくすぐられるであろう全裸にだぶだぶのシャツ一枚のという居で立ちの銀髪の美少女がベットのうえでちよこんと座っている。

生憎茜雫はそういった趣向を持ち合わせていないが、やはりこの格好は見ている方が少し思う事がある。

「さてと……………」

茜雫は一夏のベットの枕を手に取り、握り具合を確かめる。

「何をしている……………ぶぶうっ！」

可笑しな声を出したラウラ顔面には枕がぼつと叩きつけられた。

茜雫が手に持った一夏の枕を投げたのだ。

茜雫の謎の行動に気を取られたラウラは至近距離とだけあって反応できずにクリティカルヒットした。

もちろん枕なので痛いはずはないが、衝撃はくる。

ラウラの頭は後ろにのぞけている。

「な、何をする、お前は！」

「お前が言うか、お前が！こっちは朝から心臓が跳ね上がる思いをしたんだ。これぐらい許される。」

「心臓が跳ね上がったなら良い目覚ましになっただろう。」

「強烈過ぎるよ……………」

褒めるとまた少し膨らみの足りない胸を突き出しながら、またズレた事を口走る残念娘。

まだ反省しないか、と今度は近づき、ベットに片膝をついて前屈みになりラウラの額に左手を近づけて指先に力を込める。

負荷をかけて一気に力を開放し、負荷によって常時では不可能な力を相手にぶつける技……『デコピン』。

訓練すれば爪が割れるという代償と引き換えに5mmの亚克力板を撃ち抜く事ができる。

やった事はないが………

まさに眠れるデコピンが解き放たれる瞬間、ラウラは茜雫の首を取って引きつけて、ベットに組み伏せる。

「な………ッ!？」

茜雫の視界で世界が反転した。

腕をまたに挟んで寝技でそのまま腕の関節を極める。

「お前は女の扱いが馴れていないようだな。」

「いたッ痛い!!腕が曲がっちゃいけない方向に曲がっちゃう!？」

このままではバキッと小枝の様に腕が逝っちゃいそいだ。

茜雫はこのままではマズイと反撃に出る。

痛む左腕に強引に力を込め、まるで振り子の運動を逆にしたかのような動きでラウラのを組み伏せ、その勢いを利用して起き上がりマウントポジションをとる。

「……………ッ!？」

その際に、先ほどまでラウラが着用?していたシーツが蹴り飛ばされ、ベットのスプリングがギシッと大きく鳴った。

茜雫が鍛えているからなのと、ラウラが女で小柄だったからできた技だ。

しかし、それでもかなり腕が痛い。

いまはちょうど組み伏せられたラウラの頭が入り口への短い通路に向いた状態だ。

「さてと、これで形成逆転だ。」

優越感に自分の勝利を確信した茜雫と对象的に、ラウラは悔しげ……………になる事はせずに頬をかすかに赤らめて、

「なるほど、お前は無理矢理するのが好きなのか……………」

「

「おい!?!その危ない発言やメロ!てか、違うから!?!」

「つまり、自然派か？」

「わけがわからん!？」

激しく動いたため、ラウラの着ているだぶだぶのシャツはめくられており、胸部とへその間の白い肌が見えている。

扇状に広がった長い銀髪と合間ってなんだか扇情的だ。

マウントポジションを取ってラウラの腹部辺りで馬乗りなっている茜雫が後ろを振り向いて視線を下に落とせばヤバい状態なのは必須だ。

このままどうやってここから退こうか考えていると、室内の気温が一気に下がったのがわかった。

「これは……………どういう状況だ？お前はどっ思っ  
？」

「いや、全然理解できないよ。」

冷たい冷たい絶対零度の冷え切ったよく響く声。

片方は女性だとわかるが普通の人より若干低い声。



もう片方は普段なら陽だまりのような声だが今は対極的に氷だまりの声だ。

茜雫の下にいるラウラも顔が若干青ざめている。

「う、これは……………」

茜雫は首を上げ、ラウラは意を決したように硬く目を閉じたあと、その逆さまのまま顔を上に上げる。

「……………」

「ああ、おはよう。」

「……………」

「……………」

「な、なんでここにいるんです、姉さん、千冬さん?」

「……………」

震える声で質問する茜雫を目のハイライトが完全に消失してしまった湊が冷たく叩き潰す。

代わりに千冬が口を開く。

「こちらと同じく声が普段の数十倍、冷たい。」

「どうした事なのか朝あんまりドアから騒がしい音が響くもの

だから目覚めるとなぜか普段の時刻になっても鳴らなかつた目覚まし時計に謎のレーザー痕が奔っていてな。乱暴なモーニングコールがなければ危うく寝坊してしまうところだった。」

「へえ、それはそれは……………」

「さらに湊とともにドアを開ければなぜか私の弟が簀巻きにされた状態でドアの目の前に転がされていたんだ。」

「……………世の中不思議な出来事もあるんですね、怪奇現象でしょうか？お祓い師を呼んだほうがいいと思いますよ。」

「ああ、全く不思議な出来事だ……………そう思わないか、ポーデビィツヒ？」

「は、はい！」

「そう、思わないか、ポーデビィツヒ？」

「お、思います、教官！」

「織斑先生だ、ポーデビィツヒ。」

「りよ、了解です！」

千冬の声や口調は淡々としていて恐怖だ。

ラウラですら萎縮している。

先ほどから湊が一切身じろぎしない。



「うわぁ、なんか身体中がいてえ……………!!」

一夏は自室へと続く廊下を歩きながら痛む身体の節々を優しく揉みながら歩いてきた。

昨夜……………正確には今日なのだが、何者かに襲撃を

受けて気絶させられてしまった。

茜雫の事が心配だが、痛くて走れない。

まあ、茜雫なら大丈夫だろう。

急所を複数箇所殴られてなんとか意識を保ったが、最後に身体に重い衝撃が奔ったと思ったところを最後に完全に気を失ってしまったらしい。

目覚めるとなぜか廊下。

しかも千冬の部屋の前。

簀巻きで口にガムテープを貼られていた。

なんとか足でドアを蹴って助けを呼ぶと中から千冬が怪訝そうな顔で湊が眠たそうな顔で出てきた。

二人ともほとんど言っても良いぐらい化粧をしないので普段と変わらない姿だった。

二人は一夏の状態を見ると、そのまま一夏を無視して茜雫と一夏の部屋のある方へ走り出してしまった。

虚しくも取り残された茜雫は朝の鍛錬に向かう筈に助けられて今に至る。

筈には茜雫に悪戯されたと適当に誤魔化した。

あまり大事にするのはマズイ。

冨も茜雫の悪戯と聞くとすぐに納得してしまった。

どんな風に認識されているんだ、あいつは？

途中で歩く向こうからシャツ一枚とラフラフの格好で歩くラウラを発見。

当初反目しあっていた二人だが今では茜雫の働きで氷解。

意外と接してみると、ラウラは少し常識はずれの女の子だと言う事が分かった。

流石に一夏も女子のラフラフな姿に見慣れ、慌てる事はないがシャツ一枚と言うのはどうかと思う。

しかし、声を掛けようとする、当の本人は固まった表情で通り過ぎてしまった。

完全に一夏が視界に入っていない。

何かあったのだろうか？

部屋の前に着いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・なんでドアが破壊されているんだ？」

恐る恐る淵だけのドアを潜る。

ドアの破片を靴で踏み砕きながら室内全体を見渡せる位置に立ち、

「セーンセーンセーンセーン？」

なんか前より酷い状態になってるぞ！モザイクが全身についてるし！？てか、血！！壁が真っ赤じゃねえか！？」

なんと安息の室内が『猟奇殺人 - - その時家政婦は見た！！ - -』的な現場が出来ていた。

真っ白いはずの壁には絵の具をぶちまけたかのような絵画が描かれている。

「と、とりあえず . . . . .」

一夏は頭を必死に冷静に働かして震える手を抑えながら携帯端末を取り出す。

「れ、霊柩車を呼ぼう。」

|      |        |       |
|------|--------|-------|
| 沙月茜雫 | 男      | 没年15歳 |
| 死亡理由 | スキンシップ |       |

二時間後、茜雫は教室で頭を抱えていた。

「どうかしたのぉ、せつちゅ。」

相変わらずローテンポで話しかけてくるのは我らの癒しキャラのほほんさんこと、布仏本音さん。

教室に差し込める日の光と鳥のさえずりがなんとも素晴らしい。

「いや、なんか大事なことを忘れてる気がするんだけど、ていうか、朝の記憶がない。」

「大事なことお．．．．．?」

のほほんさんが可愛らしく、コテッと首を傾げる。

ああ、淒く癒される。

そこらの愛玩動物の比じゃない。





しかし、驚くのも無理はない。

すでに四回の転校生．．．．．まあ、シャルロットを一回にすると茜雫を含めて三人も転校してきたのだ。

本格的に一組と他組との人数バランスが狂い始める。

「ずいぶん不満そうだな、沙月。」

「別に不満じゃないですけど、このままじゃパンクしますよ?」

「仕方が無い、今回の転校生は『事情持ち』だ。まあ、いい。

よし、転校生、入れ。」

「分かりました。」

廊下から静まった教室に響いたのは鈴のような綺麗な声だった。

「わああ．．．．．」

自然にどこからか声が漏れた。

それはクラス女子の総意の声。

入ってきたのは、当たり前ながら女子。

身長が女子にしては高く、千冬より少しだけ高いぐらい。

少し短めのスカートから覗く脚は女子なら羨ましがるほど細く筋肉で引き締まっているが、ゴツゴツした印象は受けない。

艶やかな黒く細い髪は歩くだけでなびいており、肩までの髪は髪質は綺麗なのに切り方が大雑把というか素人で、少々不揃いだっ  
た。

細めの秀麗な顔立ちでパツチリとした目は刃のように鋭く涼やかな目元。

可愛らしいなど全く捨てた綺麗や美しいといった言葉に特化されたような顔立ちだった。

「……………あ。」

茜雫の口から空気が漏れて声となった。

別に見惚れたわけではない。

見惚れるほど綺麗なのは認めるが今のは違う。

入ってきた美麗の転校生は薄い桜色の唇で言葉を紡いだ。

真っ直ぐ茜雫に藍色の瞳を向けた。

「今日からここに転校する、御笠みかさ直刀なおとです。どうぞよろしく。

そう、茜雫の『幼馴染』は自己紹介した。

四十話 加速（後書き）

うーんお気に入りが減ったり増えたり  
とても行き先が不安だ

てか、なんか人気でねえな、この小説  
なにかいけないのだろう

主人公か？設定か？まさかの作者か？

感想・要望・ご指摘待ってます

気軽に何でもどうぞ

四十一話 関係(前書き)

駄作です

ごめんなさいすみません

最近ヤバイです

## 四十一話 関係

私と『アイツ』が初めて邂逅を果たした場所は暗い暗い真つ暗な黒い世界だった。

真つ黒い虚空の夜空にぽっかりと黄色い穴が空いたかのように月が浮かんだ真夜中だった。

土の色に似た黄土色の安っぽいコンクリートで居住地を作っている現地人は、貧相で横暴な人間も多かったが、一応街としては成り立っている状況だ。

街の人々は一部の人間を除いて皆、明日の糧食を得るための労働に備えて寝静まった人など全くいない時間帯。

そんな裏路地と勘違いするような暗く狭い月明かりのみが唯一の光源の通りを二人の人間が歩いていた。

片方はかなり背が高く180後半ぐらいはある。

黒に混じるように生えた灰色の髪。

身体はそこらの荒っぽいゴロツキなど見ただけで、喧嘩を売るのをやめてしまうほど素人でも分かるほど見事に鍛え抜かれて、無駄な肉など一切ない。

手足は常人より太い筈なのだが、長身と長い手足のために細く見えるほど。

深い緋色のジャケットを着ているのは、まるで血を着ているように見える。

長めの無精髭を生やし、三つの刃物傷の奔る顔は野生の猛獣のような身体付きと合間って、近寄り難い雰囲気を出している。

年齢は分かりづらいが、髭のせいで40代ぐらいに見える。

それに対して、もう片方はひどく対象的な子供だった。

背はまだ低く、まだ10歳程だろうか。

漆黒の髪を背中の中程まで伸ばした小さな少女。

細い豊かな髪は男のあとをついて歩く小さな風だけで後ろになびく。

整った綺麗な顔立ちに華奢でか細い身体つきは繊細な雰囲気を醸し出している。



男と比べるとさらに際立つ。

親子・・・・・・・・・・ではないだろう。

顔立ちが全く違う。

男は少女の歩幅に合わせてゆっくり歩くが身長差から生まれた歩行速度と男のもとの歩行速度に少女は時折小走りになりながらついていく。

少女は男のあとをついて歩きながら何をしに行くのだろうかと考えていた。

前を歩く男の無精髭の生えた顔を見るが出てくる言葉は、（髭をそればいいのに）、とだけだった。

この前も難癖付けられて暴漢に襲われたというのにこんな何が起こるか分からない真夜中に呑気そうに煙草の煙を吹かしている

何を考えているのか分からないので出かける前に尋ねると、『面白いものを拾いにいく』という謎の返事が帰ってきた。

お前は来るなど言われたし、本当は眠たかったが、あんな防犯など考えていないようなスカスカの宿屋に一人取り残されるのは嫌だった。

ここは何が起こるか分からない。

言葉も通じないし、暴力など当たり前のようにある。

それに、もう『取り残される』のは耐えられなかった。

無理やりついて行く意思を示した少女に男は困ったように頭を掻いたが、特に何も言わなかった。

無言のOKだとこの十数ヶ月で分かっている。

なんとなくする事がなく、数えていた23回目の曲がり角を曲がった直後に一際大きな風がどこから飛んできたのか雑巾のような布切れとともに吹き付けた。

大きく吹いた風に少女はぶるつと身を縮ませ、風は少女の長い髪を攫っていった。

もつと着込んでくれば良かった………

少女は自分の迂闊さを少し呪った。

だいたいこの国は昼夜の気温差が激し過ぎる。

昼は乾いた茹であるような日差しがガンガンと降り注ぐくせに夜になると非情な寒さが風と共に吹く。

腕を抱いてできるだけ身体の熱が逃げるのを気休め程度に防ぐ。

そのとき、ぼふつと何か暖かいものが少女の顔ごと身体全体を覆う。

視界がいきなり完全な真っ暗になったのと、軽いパニックになったため危うく躓きそうになった。

立ち止まっていそいそと頭から被ったものを退かすと、真っ白いシャツ姿の男が煙を吐いて少女を見下ろしていた。

「寒いだろ、それでも着てる。」

男の深い響きのある声で言われたので、そろそろ我慢ができなかった少女は躊躇いなく袖に腕を通す。

が、少女には男のジャケットは大き過ぎて男の腰程までのジャケットは少女にとってはロングコートと言っても差し支えない程だった。

あと少し身長が低ければ引きずっていただろう。

腕も前腕部分で少女の細い腕が止まっており、全体的にもこもこした姿に男は吹き出しそうになった。

「出るときにちゃんと着込め、って言ったじゃねえか。お前、大丈夫、って言わなかったか？」

少女は男の呆れ、馬鹿にした口調の言葉にムツと顔を顰める。

宿屋を出るときは無風だった。

だから、これぐらいの着込みで大丈夫だと思ったがいきなり風が吹き付け出すとは思わなかった。

何か言おうとしたが、言う前に男がまた前を向いて歩き出した。

吹き付けた風に少女は緋色のジャケットの襟の隙間を埋めるようにだぶだぶの腕で握った。

男の陽だまりのような匂いがした。

少女はなぜかこの匂いが好きで安心感を覚える。

なぜこの男は自分を拾ったのだろうか？

何もかもを失って知らない僻地に取り残された少女の前にいきなりこの男が現れた。

今では何も知らないこの男が保護者同然だ。

「……………臭い。」

「なにっ!?!……………俺はそんな年齢じゃ……………ないぞ?」

「煙草臭いって意味。」

こんなやり取りも日常となっている。

本気でショックを受けたのか、少し自覚があったのか自分の腕をくくん掻いている。

この男、とにかく暇さえあれば煙草を吸うからいつも煙草臭い。

なのにヤニで歯が黄色くなっていないのだから、不思議だ。

それから、十五分程経っただろうか。

街を徘徊するかのよう<sup>に</sup>に所在無<sup>さ</sup>気に歩きまわって少女がそろそろ帰りたいと進言する事を本格的に検討し始めたその時、

空気が明らかに変わった。

正確には、匂い、それから皮膚がピリピリと痛いと感じるぐらい。

湧き出た嫌悪感。

特にあまりの匂いに少し吐き気がする。

「やっと見つけたか……………。」

バツと少女が男の顔を見ると、男は目を細めて目の前の暗がり  
をジッと見ていた。

月明かりすらない建物の影となった完全な黒い空間。

何があるのか？

少女も男に習って吸い込まれそうな程暗い陰を見た。

徐々になれるようにその造形が見えてきた。

暗い世界にあったのは五つのボールのような楕円状の物体と

五つの等身大の人形のようなもの。

足元でピチャツと音がして見てみれば、液体がこちらに徐々にその領域を拡げていた。

それが何か分かる。

死体だ。

全てが首を墮とされている。

死んでいるのは見なくても判断できる。

そんな時に少女に込み上げたのは嘔吐感ではなく一つの疑問だった。

何だ、『アレ』は？

男と少女が最初から見ていたものは転がっている無残で異状な死体ではなくその中心。

一つの小さな影が蹲っていた。

なにやらロープのようなフード付きの衣類を身に纏っている。

ふと、影がこちらに気がついたのか立ち上がって振り返る。

身長は少女よりかは少しだけ高いぐらい。

同じ年だろうか。

男がはあっと溜め息をついて口を開いた。

「やれやれ、やっと見つけたかと思えばこれか……  
まったく、『アイツ』にそっくりなものだな。まるで何もかもを  
否定しやがった眼をしゃがって……」

影が完全にこちらを振り返った。

ここで少女は気がつく。

紅。

まずその色がくつきりと分かった。

それ自体が光っているわけじゃ無いのにくつきりと浮かび上が  
り、目に映る。

少女はその幽玄的な紅を見て自分の心臓が高鳴るのを確かに感  
じた。

忘れる事の無い『仇』と似た紅。

アイツの左眼は『紅く』染まっていた。

月明かりに照らされた少女。

血と死体の暗闇に潜む少年。

それが私と『アイツ』の人生で記念すべき最初の邂逅。

確かにあの日、私の人生が急変していくのが自分で分かった。



その日、世界の中心と言えるようになったISを扱う人間の育成機関………IS学園、一年一組は騒がしかった。

騒がしいのはいつもの事だが、今日は一段と騒がしい。

なにせ、すでに騒がしいと一人の生徒が我らの鬼教師………  
……織斑先生の凶器の出席簿アタックを喰らったのにも関わらず、  
熱が冷めない。

なぜなら、ここ、一年一組にまたまた転校生が現れたのだ。

前回のサプライズ的な転校？の僅か四日後にまたもや転校生。

転校生の名前は御笠直刀。

同じ女子が感嘆するような美麗といえる綺麗な容姿。

千冬にも負けるとも劣らない同性が憧れを持ちそうなクールビ  
ューティーに注目が向かない筈がなかった。

茜雫は昼休みになった途端に女子に囲まれて転校生の関門とも  
言える質問攻めならぬ質問責めを受けている直刀を遠巻きに見てい  
た。

「なんか凄い女子が入ってきたなあ。てか、一組だけどんどん

人数が増えてるぞ。」

茜雫の前の席を拝借している一夏がしみじみと言う。

普通なら他人に席を勝手に座られると文句の一つとまでは言わなくとも、少し抵抗のあるかもしれないが流石はたった二人しかない男子IS操縦者であり、容姿にも恵まれている一夏には嫌な顔をせずに休み時間はいつも提供してもらっている。

因みにその席の女子は茜雫の席のすぐ前で毎日一夏に座ってもらって結構ラッキーと喜び、他の関係ない遠い席の女子の羨ましがられているのは茜雫も一夏も知る事の無い事である。

「しかも、すげえ人気者だし。まあ、転校生だからって事もあるかもしれないけど。」

「確かにね。」

群がるように集まってきた女子の大群に直刀は困ったように猛獣ぎこちない笑みを浮かべながら怒涛の質問を捌いていく。

千冬なら笑みなど全く浮かべずに切って捨てられるかもしれないが、千冬と同じクールビューティーが困ったような笑みを浮かべながらもこちらに反応をしてくれるのはなにかのツボが刺激されてしまつらしい。

女子のテンション別に意味でヒートアップしていく。

離れたところから転校生眺めてあれこれ言っている一夏に鈴が不機嫌そうな顔をする。

「なあにデレデレ見てんのよ、一夏。あんなのがあんたの好みなわけ？」

「別にそう言うわけじゃねえけど……」

「てか、鳳さん当たり前のように一夏にいるよね、二組だよね君。」

休み時間になるたびに、一夏目当てで来るが二組の人間との交友はいいのだろうか。

「なに？私がここにいちやいけないわけ？」

「そこまでは言わないけど、二組をほったらかしていいの？」

「別に大丈夫よ。」

後からグループとかそう言うので苦労するんじゃない、と思うが、比較的気性の穏便なIS学園女子生徒。

ドラマ見たいなドロドロとしたイジメとかはないから心配する事はないだろう。

茜雫が頼杖を突きながら転校生に視線を戻す。

「なんだ、お前もずいぶんとご執心だな、我が嫁よ。」

ラウラの嫁宣言はすでに皆に浸透しており、納得をしてはいないが今更突っ込む人間は一人除いていなかった。

「流石はラウラ。ほんの短いセリフにツッコミどころを四つも混ぜるとは……それを言うなら性別的に夫の間違いね。そもそも夫婦じゃないし、年齢的にもそれは不可能だからそれにご執心って意味で見てるわけじゃない。」

「では、どう意味なのだ、セン？」

「まず、なんでほくきちちゃんがキレ気味なのか訊きたいね。」

ラウラと同じく近くにいた筈が面白くなさそうに訊いてくる。

これには茜雫も少し反応に困る。

「なんて言うか……うん、同姓同名同姿の勘違いで終わって欲しいと思ったんだけど、そうはいかないよなあ……」

「どう意味ですの、茜雫さん？」

茜雫がブツブツと意味の分からない事を呟いている。

「まだ授業まで時間はあるな。」

「どうしたんだ、セン？」

と、時間を確認して独り言を言つと、茜雫がいきなり席を立ち上がる。

一夏が席を立った茜雫を見上げながら茜雫の時間を確認した意

図を探る。

授業まであと二十分近く余裕があった。

「ちよつと諸用。」

それだけ言つと、茜雫は歩き出した。

転校生に向かつて。

「ちよつと道を開けてくれない？」

「えっ、・・・・・・・・・・あ、いいよ。」

女子の壁の前に立った茜雫が願うと、転校生に集中していたため、茜雫の接近に気がつかなかった女子は少し驚きながらも、モーゼの如く道を開いていく。

つかつかと歩いて茜雫が転校生の前に立った。

転校生も茜雫に気がついてそちらを見る。

茜雫も張り合つかのように見返す。

どちらも眼を逸らさず一步も引かない睨み合い。

なぜかなんとも言えない緊張感が教室を支配する。

しかし、永くは続かなかった。

茜雫の動いた。

茜雫が左手で転校生……直刀の右手首を掴み取った。

「ちよつと来い。」

「え……ちよ……なに？」

「黙ってついて来い、重大な話だ。」

直刀はいきなりの事に眉を顰めるが特に抵抗する様子もない。

そのまま引きずるように連れ出して行った。

あとに残された重い沈黙。

【……………】

「な、なんだ！？教室の空気が！？」

先ほどのテンションと打って変わって女子が沈黙。

教室の空気が明らかに変化した事に敏感に感じ取った一夏が騒ぐが反応する人間はいなかった。

ここでいち早くハッと立ち直った筈が一夏の胸ぐらを掴み上げる。

「一夏!!誰なのだ、あの女は!!」

「ぐおおおおうおう……………」

「ちよ……………箒さん……………一夏  
さんの顔が……………」

その細腕にどんな力が隠されていたのか胸ぐらを掴み上げられ  
た一夏は強引に立たされて前後に大きく揺さぶられる。

呼吸困難を起こした一夏の顔色が赤から青に変化としたと同時  
に、三途の川への信号機も赤から青に切り替わった。

あまりの形相にセシリア躊躇いがちに止めに入るが箒が聞く余  
地がなかった。

「フツ、馬鹿だなお前は。」

「む、どつという意味なのだ、ラウラ?」

「こんな時はする事が決まっているだろうが。」

「する事……………」

「敵上視察だ。」

「と言う名のストーカーでしょうが……………」

「

鈴の呆れた口調に今度はラウラがムツとくる。

「人聞きが悪いな、尾行と言え。」

「やるうとする事は変ないわよ……………」

鈴は大きく溜息を吐いた。

初めて出会った頃はやたら一夏を目の敵にする凶悪女かと思っ  
て接して見れば常識外れの変なところでズレてる天然美少女だった。

「でも、なんか大事な話みたいだったけどそんな事していいの  
かな？」

シャルロットの正論に一夏はシャルロットは周囲の人間の中で  
やはり常識人だったと再認識。

しかし疑問が。

「大事な話って何だよ、シャルロット？」

「えっ！？ええと……………ほら、女の子を連れ出すっ  
て言ったらアレだよ……………」

「どれだよ……………」

急に顔を真っ赤にしてしどろもどろに小さな声で話すシャルロ  
ットになにが言いたいのか理解できない一夏がツツコム。

数秒後、俯いていたシャルロットが上目遣いでポツリと



「告白……とか？」

「……………」

「「なん……だと……………」？」

「「え……………」マジで……………」？」

盗み聞きしていた女子が驚愕で言葉を失い、箒とラウラが絶句、一夏とニーナが惚けたようにユニゾンした。

「……………」尾行決定「……………」

「尾行しちゃうの!？」

まさかのシャルロット除く全員が二人のあとをついて行く事に。

もう、シャルロットも止め方が分からなくなってきた。

「シャルロットは気にならないのか？」

「……………」

一夏の問いにシャルロットは頭の中で天秤をかける。

常識的な友人としてこのストーリーカーズを止めるべきか、友人として見届けるとカッコつけて好奇心に従ってストーリーカーズの一員となって犯罪行為に走るか。

そのとき、シャルロットの中で悪魔の囁きが聴こえた。

「告白だったら自分のときの『参考』にすればいいんじゃない？」

小さな囁きだったが、現在恋する乙女には絶大で真まで響き渡った。

「……………やる！」

ここに代表候補生四人とそれに匹敵するだけの身体能力と頭脳を兼ね備えた精鋭部隊七名がストーリーカーをするべく茜雫と直刀の進んだ道を辿り始めた。

「で、なんであれだけ歩いて屋上なのよ？」

「最初から向かっていたのは屋上なんだけど。」

「……………屋上に向かうのになんで一度階段降りたのよ？」

まだ、方向音痴なのかこいつは、と直刀は内心呆れてしまう。

直刀が茜雫に手を引かれてやってきたのは校舎の屋上だった。

日の光を受けた芝生がかすかに風になびいている。

七月に突入しかけている今は日が高い位置にあって暑い。

茜雫のテンションは最近下がりがりっぱなしだ。

吹き付ける風がなんともありがたい。

「そろそろ手を離して。」

「あ、悪いな。」

茜雫が直刀の手首を話すと、直刀はその手を名残惜しそうに見つめる。

「何やってんの？」

「……………手首が赤くなってるだけよ。強く握りすぎ。」

「しょうがないじゃん、少し急いでたんだから。」

「あなたのせいでしょうが……………」

茜雫がフェンスに背を預けて直刀と向き直る。

「まあ、なんと言つか、久しぶりだね。」

「三ヶ月ぶり?」

「ちょうど八十日だから二ヶ月と二十二日ぶりだから。」

「変に細かすぎなのよ、あんたは。いちいち数えたの?」

「『数えた』んじゃないくて、『憶えてた』んだよ。」

「……………なにか違いがあるの?」

「分からないなら自分で考えて。」

相変わらずのらりくらりと知りたい事を教えてくれずに面白そうに微笑む茜雫に直刀は小さく溜息を吐く。

溜息を吐く直刀に茜雫は眉をピクツと動かすが、思った事を出さずにとりあえず最初のあつて最初の疑問をぶつける。

「……………まず、何しに来たの?いきなり来るなんて訊いてないけど。そして、いつ来た?」

「あなたのその話し方、違和感があるからやめれば？来たのは昨夜の遅く。あと、ここに来ることは『手紙』に書いて送ったわよ？」

「煩いな、こっちの方が一夏たちに．．．．．つて、『手紙』．．．．．？．．．．．ああ、アレの事が。」

茜雫の反応に直刀は癪に障ったように険しく眉を眉間に寄せた。

「なに？まさか読んでないの？」

「読もうにも読めない状況だったんだよ。」

「．．．．．？」

因みにその『手紙』は現在机の上で重傷で横たわっている。

なぜかと言うと、数日前のラウラ嫁宣言の際に、千冬から受け取ったそれはラウラの『キス』でなぜか激怒された方々の余波をモロに受けた。

結果、か弱い手紙は切り裂かれるは銃痕が穿つはと酷い扱いに甚大な後遺症を被ってしまい、現在机の上でセロハンテープを使った大手術中であつた。

切り裂かれた分はまだいいが、銃撃を受けた部分は瞬間的な摩擦熱でこんがりと焼けてしまった部分もあるため、お手上げ状態だ。

「はあ．．．．．」

「溜め息を吐くな！」

聞き分けのない三歳時を見るような目で見てくる直刀に茜雫は心外だと怒る。

しかし、怒っても仕方がないし、質問する事はまだある上に時間も迫って来ているので次に進む。

「で、最初の質問だけど何しに来たの？」

飄々とした顔で質問してくる茜雫を直刀は軽く睨んだ。

「私があなたになんの用事があるのは決まってるでしょ？」

「はあ．．．．．またそれか．．．．．知らない。お前の親兄弟の事なんて俺が知っているはずないから。何かしたいのなら自分で調べて見れば？」

「あなたには『仇』と共通点がある。それに、それ以外情報もない。なら、あなたに迫るのが妥当じゃないかしら？」

迷惑な話に茜雫は掌を突き出して拒絶。

「妥当じゃない。知らない事まで教えろとか言われてもどうしようもないから．．．．．そんな事『冬峰のオツさん』にでも．．．．．って、待てよ．．．．．」

「なに？」

片手で額を抑えていた茜雫がハッと目を見開く。

「まさか冬峰のオツさんまで来てるのか？」

絶望したかのような、一つの小さな希望に縋り付くような目に直刀少し笑そうになるのを堪える。

茜雫はそんな事に気がつかずに祈りの視線を送り続ける。

「来てないわよ、なにか用事があるって言って私とニルだけをこっちに行かせたわ。」

「マジで！？よかったらオツさんがここに来るとかどんな地獄……って、ニル？あいつもこのIS学園に来てるのか？」

「今は私に充てがわれた部屋で時差ぼけのせいでぐっすり寝てるわよ。会ったら夜になる。」

「まあ、あいつにはちょっと辛いかな？お前はなぜかピンピンしてるけど……て言うか、まさかニルまで転入？」

なんか本当にやりそうだな。

入学届け持って茜雫の部屋に押しかけてくる銀髪少女が脳内に浮かぶ。

「年齢的に無理だし、そもそもあの子にISなんて向いてないわよ。」

「それはそうか。」

茜雫はなんか最近、いろいろな事が一度に起こるな、と信じた事はないが占い師にでも占ってもらおうか検討して見る。

数秒後、結果はNO。

やはり、当たろうが外れようがどうとも言える占いは当てにならない。

それに、他人の言葉で行動を決めらてるのはおもしろくない。

「それで、私がここに来た感想とかなんかある？」

「特にない。」

「……………即答ね。少しぐらいなんか言いなさい。」

不機嫌となった直刀にどうしようか迷う。

ここで、大事な事を忘れてたと思い出した。

「そういえば、髪……………切ったの？」

直刀が言いたいことに気がついたように前髪を掴んで持ち上げ、自分で確認している。

「髪?……………ああ、少し邪魔だったから……………  
……………冬峰さんが切るって言ったんだけどなんか怖いから自分で。」



「それは賢明な判断だ。あの人に切らせると最終的に坊主になるね。」

最後にあつたときは、背中の中ばまで届く長髪だった。

今では首辺りまでバツサリと切られている。

やはり、自分で切ったのか不揃いでボサボサしている。

とても綺麗な髪質をしているのに勿体無い。

あとで整えなければ。

唐突に茜雫と直刀が顔を見合わせ、申し合わせたかのように口を開く。

「で、気になってたんだけど。」

「同感だね、俺もどうしようか迷ってた。」

二人揃って屋上の入り口を向く。

「「そこで何をしている?」「」

途端に入り口付近が騒がしくなった。

茜雫はすかさず呼び止める。

「いまさら逃げても無駄だから、一夏、ほくきちゃん、オルコットさん、鳳さん、シャルロット、ラウラ、ニーナ。」

今度は潜むように静かになる。

が、観念したかのように七人がぞろぞろと入り口から出てくる。

「なんなの、この子達？」

人数の多さに呆れた直刀にラウラが睨みつける。

「む、我が嫁である茜雫に何のようだ、貴様？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・嫁？」

謎の単語に直刀も戸惑っている。

茜雫は誤解を広げる天然娘にすかさず口を挟む。

「はい、君はこれ以上話を捻じ曲げないでね、君が話すと話題がはるか斜め上空にぶっ飛んでいくから。」

「なに、私は・・・・・・・・・・」

「とりあえず、誰なのだ？その転校生と知り合いなのか？」

ラウラの間割って入った筈に茜雫は感謝する。

このままでは話が停滞するところだった。

「紹介するよ、っていうかもう知ってると思うけど、こちらには御笠直刀。知り合い・・・・・・・・・・というより・・・・・・・・・・」

『幼馴染』かな？」

「お、幼馴染だと・・・・・・・・・・・・・・・・」

「いつ知り合っただ、セン？」

「一夏たちのところを出て行って一年三ヶ月二十八日経った頃かな。それから、束さんに拉致られる二日前まで行動を一緒にしてた。」

「細かいな、おい・・・・・・・・・・・・・・・・」

正確すぎる日数に驚きが漏れ出す。

どういつ思考回路をしているのか疑問に思ってしまう。

「この男子って・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ああ、直刀も顔ぐらいテレビで見たでしょ？織斑一夏。と、俺と一夏の幼馴染の篠ノ之箒。で中国の代表候補生の鳳鈴音、イギリスの代表候補生のセシリア・オルコット、フランスの代表候補生のシャルロット・デュノア、ドイツの代表候補生のラウラ・ボーデイビツヒ、アメリカの代表候補生におバカなミスでなり損ねたニーナ・エニックス。」

「私の紹介だけ酷くない!？」

「酷くない。」

「代表候補生がこんなになって・・・・・・・・・・ずいぶん豪華

な面子ね。」

知り合いにこれほどいるのは珍しいだろう。

直刀が一夏を確認するように眺める。

「あなたが茜雫が言ってた織斑一夏。」

「そうだけど、センからなんて聞いてたんだ？」

「単純愚直で馬鹿な鈍感イノシシ野郎。」

「あ、言っちゃダメだった。」

「おい！？お前は国外でなんて俺のことを言っちゃがる！！」

騒ぐ一夏を無視して直刀が茜雫を向き直る。

「茜雫、放課後に……………」

「分かった分かってますから、そそっかしいなあ。」

「放課後に何をするつもりなのだ……………?」

「いや、なぜかキレないでよ、ほくきちちゃん。ちょっとした勝負だった。」

「勝負？茜雫さんとおちらの御笠さんですか？」

「直刀でいいわよ、クラスメイトだし。」

「へえ、強いのか？直刀って。」

「それは放課後までのお楽しみ。」

一夏は自分の目を本気で疑った。

いや、一夏だけではなく、周りで見ている全員が驚いているだろじゅ。

放課後になって茜雫と転校生である直刀が剣道部の道場を間借

りして真剣で斬り合った。

驚いているのは、真剣で斬り合ったことではない。

「なっ……………!?!?」

隣で箒も目の前の光景が理解できずに目を見開いて驚愕している。

「あゝやれやれ、あいかわらず強いね。」

「あなたは少し弱くなっただんじやない?」

「反論できないのが痛いな。」

直刀が微笑み、茜雫が苦笑した。

首筋に当てられた真つ黒い日本刀の刃。

当てているのは、美貌の転校生である御笠直刀。

当てられたのは一夏だけではなく、このば全員の中で同世代最強の位置に立っていた沙月茜雫。

茜雫に勝てるやつなんているのかと思うほど強い存在だった。

その茜雫が今、

俺の目の前で転校生に負けた。

## 四十一話 関係（後書き）

駄作でした

そういえばお気に入りが減ったり増えたり忙しい

これはヤバイか！？

感想とか要望とか質問をいつでも待ってます

気軽になんでもどうぞ



## 四十二話 才覚（前書き）

今週は忙しくてさらに更新が遅れそうです  
すみません

読者の皆さんのために頑張ります  
それではどうぞ

## 四十二話 才覚

晴天。

キラキラと輝く太陽にイライラ。

サンサンと嬉しくもない膨大な量の日光をプレゼントしてくるお天道様にぜひエネミーの最大火力をぶっ放して殺りたい。

元気にガキンチョがなんとかレンジャーが凄いだのなんだの言い合いながら走り回る放課後だと言うのに、IS学園では室内に引きこもってしまっている。

全部上から見下ろしているお天道様のせいなのだが、年を取るとわざわざ外に出ることをやめてしまおうらしい。

七月間近とは言えこの暑さでは本場の夏はどうなってしまうのだろうか。

「涼しいね。」

「ああ、全くだ。」

茜雫の呟きに一夏は大いに同意した。

いつもの御一行となりつつある一夏、篝、茜雫、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、ニーナ、今日はそれにプラス転校生である直刀の9人は剣道部の聖域である剣道場にいた。

流石は政治家どもが国民から搾り取った税金をふんだんに使った国際的なIS育成機関であるIS学園。

剣道場にまで冷房完備とは素晴らしい。

練習に勤しんでいる剣道部員も涼しげなようすでなかなか大変そうなメニューを熟していく。

IS学園はさまざまな競技で上位常連校なのも納得いく。

これほど素晴らしい環境で練習できるのなら、集中力も持続する。

外のうざったい熱気に顔を僅かに歪めていた皆さんも剣道場に

入った途端爽やかスマイルに変わった。

一夏はあまり表情の変化が乏しい直刀の顔をちらっと確認して見る。

あいかかわらず涼しい顔をしているが、多温高湿に辟易していたのか気持ち良さげに緩んでいる。

表情の変化が乏しい直刀の新しい表情を見ると、宝物を発見したかのような気分になる。

茜雫のようすはまるで天国にでもいるかのようだ。

「ああ、なんで剣道場はこんなに涼しい。」

「冷房機がついてるからでしょう？何言ってるの、あんた？」

爽やかな顔で独白する茜雫を鈴はバカじゃないの、こいつ？的な目で見える。

一夏にはなんか茜雫が言いたいことがわかってきた。

「じゃあ、なんで俺の部屋は冷房機が作動しない……………」

おかげで、部屋に戻りたくても暑すぎて帰れない。

「なに、あんた達の部屋、エアコン壊れてんの？こんなにクソ暑い時に。」

鈴が気の毒そうな目で一夏と茜雫を見てくる。

他の面々も似たような目で見てくる。

セシリアなんて口を両手で抑えている。

なんだか惨めな気分だ。

「・・・・・・・・・・なんで壊れてるんだっけ？」

「エアコンをバラしたお前が一番分かってるだろ・・・・・・・・・・」

「.

「え、エアコン分解バラしたの、茜雫・・・・・・・・・・?」

シャルロットが引きつった笑みを浮かべている。

「なんか、赤黒い液体が内部にこびりついてたんだよね・・・・・・・・

・・・・・・・・多分それが原因でショートしてた。」

「あ、赤黒い液体・・・・・・・・・・」

「固形化した血液に似てただけど、流石にあんなところに血がついているはずないし何だろ・・・・・・・・・・?一夏、なんか心当たりある?」

「い、いやないぞ！全然心当たりとかない!!」

「なぜそこまで全力否定?」

一夏は今朝の土曜サスペンス劇場並みの惨状を思い出し、ゾツとする。

今回は全身にモザイクが広がっていた。

完全にR - 18の光景だった。

うわ、なんか嫌な汗が出てきた。

そんな話題で剣道場の入り口で固まっていると剣道部の部長さんがとてとと小走りで走り寄ってきた。

なんだかくすつたい気分になる。

「沙月くん？よく来たね？何しに来たのかな？もしかして入りたいの？さあさあ、この紙にお名前とハンコをお？」

「ははは、それ部活の入部届けじゃないですか。部活とか面倒いのでパスで。」

部長さんになにこやかに勧誘された茜凜もにこやかな笑顔で拒否する。

邪気のない即答にのほほんさんに似た雰囲気のある部長さんもたじろいだ。

「てか、さっきメールで少し道場を間借りさせてもらって送りましたよね？」

「い、何時の間にか連絡先を交換したのだ、セン……………」

「……?」

低い声で睨みつけている篝の顔に影が刺さり、さらに迫力が出ている。

「その前になんでブチ切れ気味なの……?」  
「……ああ!? 答えるからそんな顔しないで、マジ怖い!! ええと……いつでしたっけ、部長さん?」

「そこ、私にふるの? たしかね? 一ヶ月と一週間ぐらい前かな?」

「そ、そんな前から……」

なぜか篝がうめいている。

ふと、左に視線をズラすとラウラも茜雫をジーと睨みつけている。

先ほどからどうしたのだろうか。

「はあ、あいかわらずね。」

なんだか直刀まで呆れて額を抑えている。

茜雫はそんな視線から逃げるように部長さんと話を進める。

「それで、間借りさせてもらうのはOKですか?」

「うん、ばっちりOKだよ? 沙月くん達の練習はね? 私たちに

もいい刺激のなるからね？是非って感じだよな？これで篠ノ之さんが毎日まじめに練習にきてくれたら私はハッピーなんだよ？」

「うぐう．．．．．！！！」

部長さんのボソツと混ぜられた言葉に篝が痛いところを突かれたと苦悶の表情を浮かべる。

申し訳なさそうな表情を見るからにして、幽霊部員なりに練習に参加しなければと、一応なにか思うところもあるのだろう。

仕方のないやつだと一夏は呆れた。

と言つても、最近はずよくちよく顔を見せているのだから、全くいかなかった当初よりかはましなのだろう。

「なにか得られるものがありますかね？一夏がポコポコにされる光景なんて。まあ、快感は得られますけど。」

「おい、テメエ！？サディストか、お前は！！てか、そんなモノのためにやってたのかお前！！」

愉しんでたのか、コイツー！！

激昂する一夏に茜凜は面白そうに笑う。

部長さんは苦笑い。

「ははは、俺のイニシャルは『SS』何だよ？」



「わけわかんねえよ！てか、なに、その基準？そんな事だったら、湊さんは『SM』だぜ？」

「そついえばそうだね……………」

茜雫が考え込むように顎に指を添える。

Sの湊も、Mの湊も全然想像出来ない。

というより想像したくない。

「ねえ、そろそろ始めない？」

業を煮やしたように眉を寄せながら直刀が言う。

茜雫が白々しく気がついたといった表情をする。

「おっと、一夏のアホな会話に付き合ってたらこんなに時間が

「ちげえだろ……………」

怒りに震える一夏を無視して茜雫は私物化しつつある壁に掛けられた長めの木刀を手取る。

因みに壁に掛けられたそのうちの一本は一夏は茜雫との訓練用に持ち込んだ私物である。

と、ある事に気がついた茜雫は重さと長さを確認するかのよう  
に軽く振りながら直刀に近づいた。

「あれ、なにそこにつっ立てんの、直刀？」

「あなたはなんで木刀を手に取るの？」

一夏は頭の隅で困惑する。

徒手格闘でやるのだろうか？

答えを求めるように視線を戻すと、茜雫も困惑していた。

「なんでつて．．．．．お前、手ぶらだからなにも持ってきてないでしょ？木刀借りるしかないし。」

「あら、得物武器ならあるわよ？」

ヒュツと風を斬る音がした。

一泊後、茜雫の木刀が半ばから切断され、ポロリと支える力のない先端が床目掛けて落ちる。

カランカランと木刀の先端が床に転がる音が虚しく静まった道場に響き渡る。

「はい？」

一夏の間抜けな声はその場の空気を物語った。

何かをしたらしい直刀を除いて全員何が起きたか理解ができていなかった。

しかし、茜雫だけは見えたようだ。

「いつそんなモノ用意した？」

「え？」

茜雫が軽く睨んでいる方を釣られて見ると、直刀の右手に何か黒い棒状のモノが握られていた。

あの時、記憶のないラウラを除いて全員が見た事があった。

直刀の右手に握られているには一振りの刀だった。

握り手が緋色の糸で巻かれ、複雑な模様の網目のような鏝。

そこから伸びる刀身は漆黒で長く、緩やかな曲線美を描いている。

茜雫がラウラ救出の際に、最後に使用した刀と同じモノだった。

「何時の間にか刀を……いや、なぜお前がセンと同じ刀を持っている！」

篝の咎めるような質問に直刀が口を開きかけるが茜雫が答える。

「ああ、これは俺と直刀が同じ人からもらったんだよ。で、どこから出した？さつき何も持ってなかったよね？」

「こうやって。」

そう言つと、直刀の右手に握られた漆黒の刀が光の量子となつて消えた。

「え、マジシャン？」

一夏は特に考えずに思った事をそのまま口に出した。

「バカなの、一夏。コイツがマジシャンなわけないじゃん。」

茜雫が蔑むような目で見てくる。

そんな目で見られるといろいろとキツイ。

「あんたつて専用機持ちなわけ？」

鈴が探るように直刀に質問する。

「ええ、持ってるわよ。因みに待期形態はコレ。」

そう言つて直刀はサイドの髪を複雑に結っている白いの紙紐を指す。

「なるほど、その刀は空いた拡張領域に置いて置いたのか・・・  
・・・慣れてないにしては速い展開だったね。」

茜雫が納得したように、感心したように頷く。

「それはあなたも同じでしょ？」

その言葉と同時に直刀の右腕が動いたのが分かった。

一夏の鼻先に一迅の風が吹き、茜雫の鼻先では一つの華が咲いた。

「お、お前……………危なかった……………!!」

「間に合ったからいいじゃない。」

茜雫の眼前で咲いた華は火花だった。

茜雫が顔のわずか数cmのところでなんとか自分の展開した直刀と同じ漆黒の刀で直刀の右手一本で振るった殺人的なスピードの刃を防いでいた。

一夏は背筋が寒くなり、身震いした。

と言う事は自分の鼻先で吹いた風は直刀の振るった刃だったのか。

危なかった……………!!

「全員離れて。」

茜雫の警告と共に再度茜雫目掛けて刀が横薙ぎに振るわれる。

茜雫は縦にした刀を接触した瞬間斜めにして軌道をズラし、さらに身を屈めて下に避ける。

流し切った瞬間後ろに引いた左脚をバネのように地面を蹴り、

そのまま前に出した右脚を軸に左回り蹴りを放つ。

直刀はほんの30cmほどの距離を瞬間移動と見間違えるような速さでバックステップする。

これを見た格闘戦を得意としないセシリア以外全員が驚く。

人だろつが機械だろうが、動く際にはトップスピードには加速する時間、止まる時には減速する時間を要する。

なのに、直刀の動きに全く加速と減速がなかった。

なんだ、あの動きは？

「なんな長刀を振り回すなんて無茶苦茶ね……………」

！

先ほどの一撃で鈴も危うく斬られるところだったらしい。

今は全員が道場の隅にっている。

先ほどまで練習していた剣道部員全員が成り行きを見守っている。

茜雫もバックステップして直刀とさらに距離を取る。

「周りにまだ人がいたって言うのに勝手に始めちゃダメだって。」

┌

「大丈夫、誰も怪我してないから。」

「うわあ、なにその問題発言。」

軽口を叩きながら道場の中心へと移動する。

その際にも二人とも相手から目を一切離さない。

あそこまで本気で相手に向き合う茜雫は珍しい。

直刀はそこまでの腕前なのだろうか？

本気で相手をしてもらえない一夏としては少し悔しい。

直刀が引いた右手を垂らすように構え、茜雫が引いた左手で垂らすように刀を構える。

まるで鏡写しのようなようだ。

お互い隙を探り合う。

「さてと、始めますか。」

唐突に先手必勝とばかりに茜雫が駆けた。

茜雫が近づいたというのに直刀は先ほどと変わらず床に切っ先を垂らした状態で構えていた。

残りの距離が1mのところ、で我に帰ったらかのよつに茜雫の接近にハッと気づき縦に振るわれた刃をなんとか逸らす。

刃の上で滑った刀身が綺麗な火花を散らす。

なんだ？

一夏は今の動きに違和感を覚える。

3mの距離をわずか三步で詰めたのは凄いが特に速すぎるといふスピードではなかった。

だというのに直刀は茜雫が1mの距離に近づくまで茜雫の接近に気がつかなかったように見える。

「ん？一夏、なんか今おかしくなかったか？」

どうやら筈も同じ違和感を感じたようだ。

なんとというか、直刀の動きが悪いとか反射神経が鈍いというわけでもない。

直前まで気がついていないように見える。

実際に一夏の目の前で茜雫が直刀の側面に回り込むが回り込むまで直刀はずっと前を見ていた。

回り込まれて初めて茜雫に回り込まれた事に気づき、直刀が超人的な反射で振るわれた刃を流していく。



この感覚、一夏が感じた事あった。

「直刀の不自然に反応が遅れている。おそらく、直刀に問題があるのではなく、茜雫自身が何かしているのだろっ。」

「『何か』ってなに、ラウラ？」

「わからん。」

ラウラの予測にシャルロットが尋ねるがラウラ自身まだ確証を得られないらしい。

ニーナもずっと頭を悩ましているが、三秒ほどで諦めていた。

頭を使うのは嫌いらしい。

代わりに穴が空くほどガン見している。

ある事に悩んでいた一夏は少し他の人に質問してみることにする。

とりあえず、隣にいる篤に試合に目を離さないまま声をかける。

「なあ、篤。」

「む、なんだ、一夏？」

「俺とセンが打ち込みする時にセンの初手が何か憶えてるか？」

「???.....真正面から接近して上段からのフ  
ェイント無しの振り下ろし、だろ?」

一夏の質問の意図が分からない筈は疑問を抱きつつ記憶を探る。

真正面から接近して上段からのフェイント無しの振り下ろし。

これは茜雫が一夏の打ち込みの際に一番最初にやることだ。

筈からして見ればいつも同じだというのに反応し切れてない一  
夏が不甲斐ない。

「周りのみんなからはどんな風に見える?」

「何言ってるの、一夏?茜雫が普通に走って近づいて斬りかか  
ってるだけよ。あんたはいつも反応し切れてないけどね。」

鈴が当たり前なことを言うなと慥然と付け加える。

鈴も筈と同じことを口頃思っていたようだ。

他の人も同じようだ。

しかし、相対していた一夏は違う。

「俺からは茜雫が消えて一瞬で目の前に現れたように見えた。」

「ど、どついついことなのだ、一夏!??」

「あんた、人間がああの距離で消えて見えたなんてあり得ないで

「しょー!!」

「幕と鈴がまるで猫が空を飛んだ話を聞いたかのような反応をする。」

「他の面々も信じていないようだ。」

「いや、本当に俺にはそう見えただって!」

「部長はどう見えましたか?一夏はこんなことを言ってますが。」

「なんだか頭がおかしいって言われているみたいで悲しくなってきました。」

「うーん?私にも織斑くんがただ反応に遅れているように見えただけど?」

「ぐがあ……………!!」

「純粹にこちらの考えを否定されると厳しいものがある。」

「結構傷ついた。」

「部長さんは続ける。」

「でも、織斑くんの言ってることは今の転校生さんにも当てはまるんじゃないかな?」

「あ、確かにそうかもしれませんわ。直刀さんも茜栗さんに気

がついてからの反応は凄まじいものですし。」

「うーん、じゃあ、茜雫君は十二をやったのかなあ？」

「ニーナ．．．．．なんかニューアンスが怪しいぞ。」

ジト目で簿がニーナを見て、今度は茜雫の動きに注意深く気を配るが何も分からない。

「これは専門家に聞くしかないね？ たっちゃんはどう思うかな？」

「え、私？」

薄い水色の髪が開放的に外に跳ねた女子が細く長い人差し指で自分の鼻を指す。

一夏の知らない人だったが、ネクタイの色からして、二年生だ。

なんか独特の雰囲気を持っている。

たっちゃんと呼ばれた上級生が頭を整理するために少し考えて持論を答える。

「多分、『相手の間合いを盗んでる』んじゃないかしら。」

「相手の間合いを盗む、ですか？」

そんなの聞いても分からない。

一夏の聞き返しの上級生が答える。

「日本の古武術の代表的な歩法って知ってるかしら？」

人間とは身体のリズムで生きている精密機械の時計のようなものだ。

自ら創り出したリズムが行動の基本となっている。

リズムが速ければせつかちだし、遅ければのんびりしていると考えればわかりやすいかもしれない。

「身体のリズムを意図的にズラすことで攻め手を崩す『打ち拍子』、逆にリズムを合わせて支配する『当て拍子』……」  
「ですよね。」

上級生の質問に筈が淀みなく答える。

おお、と一夏は内心歓声を上げる。

さすがは篠ノ之流古武術を習っている筈だ。

上級生は出来のいい生徒を褒める先生のようにま見惚れてしまう微笑みを浮かべた。

「うんうん正解正解。で、その最上段がリズムを感じることもなく、感じさせることなくリズムの空白を利用したのが『無拍子』。」

「ではセンもそれを使っているということですか？」

それは茜雫攻略を夢見ている一夏からして見れば知りたいたいことだ。

茜雫はたくさん宿題を出すか答えを出さない困った先生だ。

自分で気づけ、ということだろうがそんなのわからん。

「似ているけどちょっと違う。無拍子とは自分を無の状態にして相手個人の心の隙を突く技術だから、相対する相手によってそれは複雑に変化していく。」

それが無拍子が最上段に位置する所以だ。

「はあ．．．．．?」

「茜雫くんの場合は人間．．．．．いえ、生き物という存在に必ずある『構造的な隙』を的確に突いている。」

「『構造的な隙』．．．．．?」

頭より身体で刻み込んで覚えるタイプのニーナはこの手の話は苦手なようだ。

一夏も何を言いたいのかあまり理解出来ない。

「呼吸、思考、身体を動かす瞬間、逆に動きを止めた瞬間、人間は様々な行動をする際に必ず『切り替え』が存在する。何かを手取るという些細なことでも視認、対象との距離感を考えながら手を伸ばす、手の内に入れる、指を曲げて手を握るの過程を経ている。その『切り替えの隙』を茜雫くんは的確に突いているのよ。」

うわあ、なんか凄い話になってきた。

あ、ニーナの頭から煙が見える。

「それには並外れた集中力と観察眼が必要よ。日頃から考えて見ないと出来ない芸当よ。それに茜雫くんからは足音とか布擦りの音が全くしない。かなり凄い技術よ。」

できるようになればかなり役に立つと思うけど、と上級生は付け加える。

無音で動く、絶対に無理そうだ。

呼吸の音だって聞こえるし動けば布擦りの音が聞こえる。

どうやってたら無音になるのだろうか？

しかも、人間観察・・・・・・・・・・うわあ、センが超やってそうなことだ。

呆れると同時に、茜雫との才能の差をまざまざと見せつけられた気分になった。

やっぱり悔しい。

無意識に強く握った手の平に爪が深く食い込んだ。

結構良いところまで来たかも。

茜雫は直刀の間合いを盗みながら勝利を目指して快進爆走中。

なかなかの手応えにテンションもジャンキー並みにハイだ。

と言っても、これは所詮目眩ましに過ぎない。

もともと茜雫と直刀では相性が悪い。

茜雫と直刀はひどく対象的な存在だ。

鏡写しみたいに。

間違いなく直刀は天才だ。

少し教えればスポンジみたいに吸収する。

どっかの誰かさんみたいに。



正直、意外性で攻める茜雫にとってはハブとマングース並みの天敵。

教えてもらった剣技は一緒。

教えてもらった期間も一緒。

教えてもらった人物も一緒。

だというのに直刀ほど手こずる相手はそうそういない。

磨けば磨くだけ光るサファイアみたいな奴だ。

対する茜雫は同じものじゃないと磨くことが出来ないダイヤモンドだろうか。

いや、自分はそんな大層なものではない。

石ころで十分。

何度の転がされる根性で勝つ。

といつてもそろそろ何かしないと本格的にヤバい。

直刀はどっかのヘタレと違って頭が切れる。

今も直感のみの反撃で前髪が少し切れた。

今度はこちらの頭が文字通り斬れるところだった。

ジョークにもならん。

茜雫は腰を落とし右脚を軸に左脚を勢いよく蹴って直刀の横雑ぎの一撃に後ろ左回し蹴りを下から放つ。

横からの動きに弱い刀はそのまま上に弾かれるように軌道を強制修正され何も無い空間を絶つ。

茜雫はその回転を利用して右から両手で握った刀を野球選手のアップercutなど裸足で逃げ出す鋭さで下から縦に振るう。

直刀はまた短距離瞬間移動のような動きで30cmほど身体をズラして避ける。

なんだコイツは？

アーマード・コアのクイックブラスターでも身体につけているのだろうか？

是非とも欲しいな。

生憎茜雫にそんなチート武装なんてついてない。

ケツに一つだけ噴射機構がついているが、死んでもやりたくないし身体を浮かすなどしんのすけぐらいだ。

無理無理。

出来たとしてもやったら相手の嗅覚を奪えるが尊厳が失われる。

「普通今のカウンター避けることができますかね、人間に？」

「振るわれた日本刀の軌道を足で蹴り曲げることなんて人が普通にやることじゃないわよ？ タイミング間違えたら重傷。」

「ふむ、そろそろ一夏にも伝授しようと思ってたんだが・・・

「・・・」  
「・・・」  
「やめときなさい。泣くわよ、織斑一夏。」

直刀はとんでもないことをしようとしていた茜雫と一緒に長い時間を過ごしてきた『家族』として止めておく。

聞いていた一夏は背筋を寒くした。

教えられる方も堪ったもんじゃない。

また、『間合いを盗む』茜雫に直刀は臆せず接近してきた。

茜雫は眉をバラバラの高さに上げる。

なんでこいつは知っているんだ？

『間合いを盗む』の最大の長点は距離を悟られることなく一気に接近できることだ。

そこらのチンピラ程度なら後ろにも回り込める。

そして、最大の弱点は距離を詰められることだ。

距離を詰められれば、まず最大の長点が潰される。

さらに間合いが近ければ鼓動を読む前に攻撃されてしまう。

茜雫はもともと接近戦は概念にいれてなかったためにそれほど訓練を積んだことはなかった。

それに茜雫は『特殊な方法』で戦っている。

それ自体が接近戦にあまり向いていないのだ。

直刀ほどの凄腕の相手なら集中しなければ即負ける。

茜雫は打ち合いの隙を予測して中段の突きを放つ。

身体全体のバネを使った神速の突き。

剣道の師範が見たら即勧誘する鋭さ。

しかし、直刀は超人的なスピードで反応すると、また短距離瞬間移動のような動きでバックステップ。

茜雫は思わず舌打ちをする。

直刀が厄介なのは様々な要因があるが、大きく大雑把に分けて三つある。

最初に超人的な才能。

おそらく才能という点では千冬に匹敵する。

幕では絶対に敵わないレベルを誇っている。

二つ目がそれを活かす頭脳。

別に直刀はとても頭が良いわけではない。

国語以外は茜雫が教えていたし、レベル的には上の下辺り。

だが、直感が鋭い。

どうすれば良いのか感のみで即座に弾き出す。

この二つは本人の努力家という点と合間って凄まじいレベルだ。

直刀は学校に通っていなかったため、茜雫と冬峰のオッサンが教えていたが、意欲も凄まじかった。

なんでも吸収したがる。

最後に挙げられるのはその筋力だ。

直刀はモデルも泣いて逃げ出すほど無駄な肉がなく細い。

因みに、母性はなかなかのものを持っていると言っていると服の上からでも分かる。

千冬並みだ、と茜雫は予想している。

話を戻すが、細いが直刀の筋肉密度は特異体質だ。

腕相撲では男で決して貧弱ではなく筋肉質の茜雫とタイマンを張れる。

特に突筆しているのは脚力。

初速や瞬間最高速度ならウサイン・ボルトを超える。

いわゆる<sup>ゼロ</sup>0ー100ー0<sup>ゼロ</sup>というやつだ。

それを可能にする脚力があの短距離瞬間移動のような動きを可能にしている。

徐々に茜雫の敗色濃厚になってきた。

基本戦法の『間合いを盗む』は距離を取ろうにも直刀の尋常ではない脚力で潰されて出来ないし、得意の銃器は手元にはないのは刀が一本。

まるで一夏だな、と茜雫は苦笑する。

こんな状況でいつも戦っていたのか、アイツ。

『羨ましい』

茜雫の中にそんな感情が芽生えた。

現在不利な状況だが茜雫は楽しいと思った。

ギリギリの緊張感。

茜雫が本気の本気で戦える状況なんて早々ない。

何より、『同じ門下生』とも『親友』とも『幼馴染』とも茜雫にとって二番目の『家族』とも言える直刀と本気で打ち合うのはかなり楽しい、楽しすぎる。

本気でやってるのに何時の間にか微笑んでいる。

我ながらなかなかのバトルジャンキー戦闘狂だ。

相手の顔を見ると直刀も微笑んでいる。

表情の少ないと言うより大きな変化が少ない直刀が微笑うとかなり綺麗だ。

元がいいかもしれないが、希少価値というものもあるかもしれない。

これも本気での打ち合いでの楽しみの一つだ。

茜雫と直刀が次々と身体を入れ替え、刀を振るう度に火花が花火の様に一瞬の華を咲かせる。

舞のような二人の動きに剣道場の観客全員が見惚れている。

そこらのダンサーなどとは比ではない綺麗な舞だった。

直刀の斜め左から振るった刃を茜雫は受けるべく、軌道上にかざす。

が、刃が触れ合う瞬間に急停止。

「……………ッ!？」

直刀は急停止させた刃を返して槌子の原理でクルンと回転させて下から斬りかかる。

茜雫はわざと両手を刀から手離した。

今度は直刀が驚く番だった。

身軽となった茜雫は半身を反らして躲すと落下する刀を直刀目掛けて足の甲に載せるようにして脚で投げる。

回転しながら飛んでくる刀を直刀は驚きながらも刀を無造作に振るって左に弾く。

弾いた直刀は目を剥いた。

弾いた先に茜雫が待ち構えているのに気がついたからだ。

茜雫は直刀が弾く方向を予測。

得意の隠密でバレないように回り込んだのだ。

弾いた直後の直刀と難なくキャッチしてすでに構えた茜雫。



それでも直刀は凄まじい速度で反応し、対応。

二人が床を勢いよく蹴って最大に加速する。

風を置き去りにする速度で肉薄。

突進しながら相手に斬りかかった。

両者、相手の刀を流しながら斬ろうとしたが、どちらも相手の刀を流し切った。

お互いすれ違った瞬間脚を限界に踏ん張って急停止。

1 mの距離で背中合わせになった。

二人の巻き起こした風がお互いの髪を靡かせた。

茜雫は全神経を研ぎ澄ませる。

この勝負。

先に振り返ったほうが勝つ！

茜雫と直刀がそれぞれの右脚を軸に身体を急激に回転。

腰を捻って勢いをさらに付け、両手にしっかりと握られた刀を全身全霊で振り抜く。

刀一本、身体は一つ、己は一人。

お互い同じ条件だ。

負ける道理はない。

振り返った際に直刀と目が合った。

鋭い眼がさらに研がれている。

完全な本気モードだ。

剥き出しの闘争心に気持ちが高ぶる。

茜雫はほとんど何も考えずに刀を振るった。

茜雫はその時 . . . . .

一夏は目を疑った。

最後の背中合わせからの西部劇のガンマンのような真剣勝負。

振るった刃の起こした風が二人の髪を靡かせていた。

「なっ……………!?!」

隣で箒も目を見開いて驚愕している。

「あゝやれやれ、あいかわらず強いね。」

「あなたは少し弱くなっただんじやない?」

「反論できないのが痛いな。」

悔しそつに苦笑する茜雫に直刀が優しい微笑みを向ける。

茜雫の首筋には漆黒の刃が寸止めさせていた。

あと1mm動かせば茜雫の皮膚は裂けるだろう。

対する直刀の首筋には10cmほど離れた距離に同じ漆黒の刃が突きつけられていた。

引き分けにも見えるが、どちらかといえば茜雫の負けだろう。

一夏は夢でも見ている気分だ。

まさかあの茜雫が負けるとは。

茜雫がそのまま後ろに倒れて尻餅を突く。

「あゝ悔しいな。結構良い線までいったところ思ったんだけどね。」

茜雫は悔しそうだが、同時に嬉しそうな表情だ。

直刀もふうと息を吐いて微笑みながら刀を展開した黒光りする陶芸品のような綺麗な鞘に戻して量子収納する。

今度は直刀も嬉しそうに微笑む。

「また、私の勝ちね。」

それを聞いた全員がギョツとする。

「ちょ、ちょっと待て、『また』って……？」

まさか……

「ああ、『刀』での打ち合いではまだ一度も勝ったことない。」

【……………】

みんな最上位捕食者でも発見したような表情だ。

茜雫はなぜか嬉しそうに続ける。

「勝率的には、一番得意な『近接武装と銃を使った』なら俺が絶対に勝つ。二番目に得意な『銃のみの銃倒術』なら五分．．．．．  
．．．いや、勝敗は四割六割か。『徒手格闘』なら良くて辛勝、悪くて五分五分。『刀どろしの真剣勝負』なら今まで勝ったことない絶対に負ける。」

「マジか．．．．．?」

一夏は驚きを通り過ぎて戦慄を覚える。

まさかこんなやつがいたとは．．．．．

他のみんなも同じ感想の様だ。

幕も固まったまま動かない。

「久しぶりだったけど鈍ったんじゃない?」

「はあ、やっぱり鍛錬不足かなあ。」

「今度から私が相手してあげる。」

「うわあ、それなんかマジで怖い。」

親しそうに話す二人に幼馴染としてなんか負けた気がして悔しい。

第も今は悔しそうに二人を睨んでいる。

茜雫が自分の刀を量子収納しながら立ち上がる。

「よし、今度はIS戦だ。」

「……………私まだほとんど起動させたことないんだけど。」

「大丈夫、相手は一夏だから。」

「おい待てコラ、どう言う意味だ、それ。」

流石に失礼じゃないのか。

いくらなんでも素人には遅れなんか取らない。

「でも今からアリーナの申請してもダメなんじゃない？」

シャルロットの意見も最もだ。

ISの使用申請はとても多い。

と、同時にアリーナの使用申請もかなりの数だ。

今から空いているだろうか？

茜雫は不敵に微笑う。

「このクソ暑い炎天下、わざわざ外に出たがる人間なんていな

い。遮断シールドのせいで風通しが壊滅的なアリーナは凄いで？」

「なんで嬉しそうなんだよ、お前。てか、そんなところに行くのかよ。」

「どうせ部屋に戻っても地獄だ。同じ暑い時間ならなら有効活用だ。」

なるほど、確かに部屋に戻っても死んでしまっし、男子は早々他の女子の部屋にいけない。

千冬に見つかったらヤバい。

「と、の前に俺はトイレ。」

出入り口目掛けて茜雫が駆けていく。

「トイレまで迷わないか、セン。」

「恥ずかしいこと大声で言わないでよ、ほぐきちゃん!？」

周りからは失笑が。

茜雫のイメージが面白い方向に傾いた瞬間だった。

待つ間特にやる事のない一夏は何気なく直刀に話しかける。

転校生と親交を深めるのもいいだろう。

「そういえば、直刀ってなんで茜雫と刀の振り方が似てたんだ

「？」

「同じ人から習ったからよ。と言っても茜雫は他の誰かからすでに少し習ってたみたいけど。」

千冬の事だろう。

しかし、茜雫が直刀と同じ人から剣を習ってたとは。

兄弟弟子と言っやつだろうか。

「なんて言うか、お前ら二人、なんか凄いよな。」

「凄い？」

直刀の表情がきよとんとした表情に変化した。

「なんて言うか、才能ってやつを見せつけられた感じだった。」

大きな差は感じたが絶対にいつか越える。

茜雫は一夏の目標だ。

直刀は未だ困惑が混ざったような表情をした。

なんだろうか？

「私に才能とかそんなのがあるかは自分で分からない。今まで世界でいろんな人を見てきたけど……」



次の瞬間、今度は一夏は耳を疑う。

一夏の中で一つの法則が覆された。

一夏だけではない大多数の中での『才覚のあるものは何をやっても凄い』という絶対性を揺るがす一言だった。

直刀がポツリと、とんでもない事を言う。

「私は茜アイツほど才能に恵まれなかった『何も出来ない』奴は  
いない、と思う。」

## 四十二話 才覚（後書き）

だ、だれか．．．．．感想を下さい。

ついでに評価ボタンもポチッと

作者の励みになります。

読者の皆さんのために頑張ります

楯無の学年が三年生になってましたので修正  
申し訳ないです

## 四十三話 準備（前書き）

二文字の題名を貫き通してきたけど、内容が分かりにくそうですね  
．．．．．

そろそろ普通な感じに変えてみようかな？  
区切りがいい時に。

## 四十三話 準備

晴天。

キラキラと輝く太陽にイライラ。

サンサンと嬉しくもない膨大な量の日光をプレゼントしてくるお天道様にぜひエネミーの最大火力をぶっ放して殺りたい。

元気にガキンチョがなんとかレンジャーが凄いだのなんだの言い合いながら走り回る放課後だと言うのに、IS学園では室内に引きこもってしまっている。

全部上から見下ろしているお天道様のせいなのだが、年を取るとわざわざ外に出ることをやめてしまおうらしい。

七月間近とは言えこの暑さでは本場の夏はどうなってしまうのだろうか。

「熱いね。」

「ああ、全くだ。」

茜雫の呟きに一夏は大いに同意した。

いつもの御一行となりつつある一夏、篝、茜雫、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、ニーナ、今日はそれにプラス転校生である直刀の9人は現在第二アリーナの東側のピットに來ている。

流石は政治家どもが国民から搾り取った税金をふんだんに使った国際的なIS育成機関であるIS学園。

アリーナの廊下まで冷房が効いているとは素晴らしい。

烈火地獄の外と比べて中はまさに天国<sup>ヘヴン</sup>だ。

自動ドアが開いた瞬間、サーと聖なる冷風が吹き付けていた。  
が、それは廊下まで事だった。

ピットへと続くタッチパネル式のドアを開いた瞬間、ボワアツと熱風が吹き付けた。

茜雫は地獄の竈を開けてしまったような顔をしている。

あまりの温度差に1m下がったぐらいだ。

「な、なんでこんなに熱いのよ……」

たじろぐ鈴の頬につうーっと汗が一筋流れ落ちた。

まるでドライヤーを常に顔面に吹き付けたような熱風だ。

「これは空調設備について一から設計したほうがイイかもね……」

ものの数分でニーナの額にも汗が玉を作る。

ニーナは顔が汗まみれになる前に取り出したピンクに染められ高そうな華の刺繍をされたハンカチを取り出して汗を拭く。

なぜこんなに暑いかというと、それはISが深く関係してくる。

宇宙に人類が進出する為に造られたインフィニット・ストラトス……通称ISはあまりに常識から異脱した性能から兵器として転用された。

そして、現在は表向きは一つの競技として落ち着いているが、国力の結晶が銃器をぶっ放しているのだから茜雫にとっては国家間戦争しているのとなんら変わらないように見える。

IS学園のアリーナはそんな一個旅団に匹敵する高機動型兵器が飛び回りながら戦車をも数発、もしくは一発で撃ち抜くような殺人兵器をバカスカ撃つものだから周りに被害が及ばないように特別強固な造りとなっている。

何気ないフィールドの壁も分厚い戦艦・空母用の多目的装甲が使用されているし、ピットの床だって同じものが使われて対艦ミサイルの砲撃にも耐えゆる構造だ。

うっかり流れ弾が生徒や政府の要人にでも当たったら設立した日本政府が国々から糾弾されてしまう。

政治家はそこら辺の損得勘定は素早い。

金の掛け具合は半端ではない。

今度は上。

そこも装甲板で覆えばいいのでは？と思うがそう簡単にいけば建築家はこの世から除け者にされる。

そんな分厚い鉄の塊を天井にまで付けるのはいろいろ大変だし何よりコストパフォーマンスも半端ではない。

そこは、ISのエネルギーバリアを転用した強固な遮断シールドで覆う事により、充分な防御力も確立出来た上に透明度が高いため青空もしっかりと見え、ライトのわざわざ光の当たり具合を考え、照明を付ける必要もなく自然の光をそのまま使う事が出来た。

エコで防御力もある。

一見完璧だ。

しかし、このまま一石二鳥というわけでもなかった。

IS学園のアリーナにある遮断シールドは燃費と防御力に定評があるだけの全くもっての旧型。

初代ガンダム並の初期型。

ガンダム戦記ならばアムロ、行っきまゝす！の時代だ。

本来、エネルギーバリアとは壁のように物理的に弾く、わけではない。

磁石の同極を近づけたように反発しているだけだ。

つまり、その反発力を壁状に押し固める事で、銃弾を受け止めて弾き返したりなど対象物を反発して防御力として機能する。

何も通さないように反発すること。

それが初期型の第一目標。

とにかく見境なしに、だ。

その初期型がアリーナに設置されている。

風通し最悪の球体でアリーナを覆う事となっている。



熱までは遮断してくれないので、日差しが熱い日は焼かれた鉄板の状態になるのだ。

『暑い』ではなく『熱い』のだ。

ピットはISがフィールドに出るためのゲートも兼ねているが、扉は常時オープンだ。

もちろん、開閉はちゃんとできるように防護壁もちゃんと備わっているがそう簡単に馬鹿デカイ扉を使用する度に開けたり閉めたりする事はない。

手間も時間も労力も無駄だ。

ピット内部にも空調設備が付いているが、ほとんど外と？がつているピット内部に冷房を入れるなど、これも無駄というものだ。

結果、ピット内部は締め切られたフィールドの熱が籠った状態となつて灼熱地獄となっている。

直射日光を受けた熱が甲板を伝ってくるのだからもう手に負えない。

当然その余波は生徒に降りかかる。

ここにも一人、我慢のできなくなった人間がいた。

「ああもう、一夏！とりあえずここから脱出！いつまでもこんなクソ暑いところにいたら溶ける！」

「と、言いつつも汗一つかいていないけどな、お前。」

茹った暑さに我慢出来なくなったのか茜雫は鬱陶し気に頭を掻きながら足早に冷房の効いている廊下へと避難する。

他の面々も同じく耐え難かったのか茜雫の後を迷わずついていく。

一夏もちろんその一人だ。

廊下に移動した途端、爽やかな涼しい風が汗ばんだ頬を気持ちよく撫でる。

茜雫は一応持ってきて置いたタオルを水道水で濡らして絞り、水気をとってから首にかける。

これだけでもかなり涼しくなる。

壁に寄りかかって、今度はおでこに濡れタオルを置く。

「とりあえず、一夏と直刀はそれぞれ更衣室に行って着替えてきて。どっちも調整とかしなきゃならないと思うから直刀はこのピット、一夏は反対側で整備して三十分後に模擬戦開始。それでいい？」

茜雫の提案にシャルロットがストップをかけた。

「三十分後ってまだISに不慣れな直刀じゃまだ時間をかけたほうがいいんじゃない？直刀もまだそんなに長い時間起動させた事

ないんでしょう？」

そういえばそうだ、と一夏は思う。

確かに直刀自身あまり起動させたことがないと言っていた。

模擬戦をするとか言っていたが、大丈夫なのだろうか。

「直刀のIS稼働時間ってどの位なんだ？」

一夏の率直な質問に直刀は少し計算するように考えて呟くように、

「一時間とちよっと……かな？」

「一時間!？」

それじゃ全然模擬戦をするにはハンデが大きすぎるにはないだろうか。

茜雫は特に驚くこともなく、

「ファーストシフト第一移行は終わった？」

「終わってる。」

「なら別にいつか。」

と、あっさりと進める。

直刀も特に何も言わないためこれで決定のようだ。

一夏は一応確認として訊いておく。

ISはそんな簡単に扱い切るものなどではない。

「いいのか？ ハンデがデカイと思うぜ。」

ISはほとんど感覚的に操縦するため、稼働時間が長ければ長いほどスムーズに動かす事ができる、というのが一般的な見解だ。

実際に最初はぎこちなかった一夏の白式の機動もコツを掴んだここ最近では軽快な動きを見せてくれる。

一夏の心配を茜雫は笑って叩き返す。

「ははは、一夏にはこのぐらいがちょうどいいって。」

「どういう意味だ、おい！」

稼働時間わずか一時間の初心者に負けると言いたいのかこいつは。

流石に失礼だ。

若干ショックを受けた一夏は憤慨してみせるが茜雫はあっさりとスルー。

濡れたタオルを額に当てながら身体を男子に割り当てられた更衣室とは逆の方向に向ける。

「まあ、そう怒るなって。とりあえず、着替えに行こう。」

一夏はまだ何か言ってやりたかったが、茜雫がそのまま廊下を歩き出したため黙ってついていく。

「セン。」

が、一応警告しておく。

「なに、一夏?」

「更衣室はお前から反対のドアからのほうから行ったほうが第一アリーナに近いぜ?」

「.....」

「.....相変わらずね、あなた。」

「違う!ちょっと助走をつけていただけだ!」

「見苦しいぞ、セン.....」

直刀はよく街中迷子になっていた茜雫を探しにいった昔の事というより数ヶ月前まで日常茶飯事だった事を思いだし、筈はあんまりな後付けの苦しい理由に半眼で呆れる。

一夏も同感だ。

ていうか、助走ってあんまりだろ.....

「畜生オオオオオ!!」

みんなの視線が耐えきれなくなったのか茜雫が叫びながら凄まじいスピードで走り去った。

ドアへと続く逆方向へ……………

最近、茜雫が壊れていく。

特に初めて逢った8年前とは想像がつかない。

「それじゃ、俺はセンを捜しておくからフィールドの集合時間は一時間後に変更な。まだ四時半だから大丈夫だろ。」

「冷静ですね、一夏さん……………」

何事もなかったかのように話を進める一夏にセシリアがボソツと言つが、一夏としてみれば慣れたものだ。

これぐらいでどうこう言っていたら、あの沙月姉弟の面倒などとても見切れるものではない。

……………  
「……………」

走り出そうとしていた一夏は直刀が複雑な表情で茜雫の走り去っていった方向を見つめているのに気がついた。

一夏は早急に茜雫を追いかけなければ遭難するな、と深刻な問

題を抱えつつちょっと気になって直刀に訊いてみる。

直刀は少し悔しいが一夏よりも長い時間を茜雫と過ごしたようだし、一夏の知らない茜雫も知っているようだ。

「なあ、直刀。」

「なに？」

「お前と過ごしていた時のセンってどんな感じだった？」

質問して一夏は少し後悔。

なぜこんな質問をするのだろう、と一夏は自問した。

これではまるで無二の親友である茜雫の事をなにか疑っているみたいではないか。

質問された直刀は一夏から視線を外し、茜雫の去っていったほうを見つめるとポツリと、

「優しい嘘ばっかついて、独りで迷って転んで傷ついて後悔ばかりしている奴だった。」

一夏は心の何処かでやっぱり後悔した。

「一夏、遅い。」

「いや、遅いってお前が行方不明になってから二十分しか経ってないぞ。」

「俺はその二十分前から待ってたけどね。」

「着替えてないからな、お前。」

あれから一夏が携帯端末で連絡をとったところ、どうやら茜雫は反対側のピットの入り口にいたらしい。

茜雫が自分はこので待っておくとの事だったので、時間変更を伝えた一夏はダッシュで一人更衣室に走り、すぐさま着替えて来たのだが、放浪癖のあるご親友様は開口一番になかなか辛辣な事を言ってくる。



しかし、気になる事が、

「どうやってここまで来たんだ、セン？迷わなかったのか？」

一夏の素朴な質問に茜雫はビキッとこめかみに青筋を浮かべる。

一夏は一瞬たじろぐ。

あまり怒る事のない茜雫だけあって対処法が分からない。

茜雫は流れるような動作で一夏の背後を取ると右腕を掴み、肩、肘、手首を同時に一瞬で極める。

一夏は全く反応できなかった。

茜雫の声に僅かな怒気が含まれる。

「走って一直線のところにある反対側のピットまで流石に迷うはずがないでしょ？お前はどこまで俺を馬鹿にしているんだ？」

「わかった！わかった！だから早く解け！腕がイカれる！！」

一夏が腕全体に奔った鈍い痛みにも身を振りながら叫ぶと茜雫はあっさりと腕を離れた。

一夏は痛む自分の腕を摩りながら茜雫から一歩離れ尋ねる。

「いてて、てかお前、二十分もこんな所でつつ立ってたのか？」

「いや、知り合いと出会ったからちょっと立ち話。」

「怖えよ！ちょっとって何！？ちょっとってとこだけ少し笑顔だったぞ、お前！！」

何気ない僅かな声のトーンの違いを敏感に察知した一夏は声を上げるが茜雫は応えず含み笑いをするばかりだ。

その含み笑いがさらに一夏を不安にさせる。

茜雫は含み笑いをしたままピットへと繋がる自動ドアのタッチパネルを操作した。

ゴオウ、という音とともにドアが開く。

ドアを開けたと同時に気温が下がった影響か僅かに涼しくなった風が茜雫の長めの漆黒の髪を吹き付けて掻き上げる。

ドアをくぐりながら茜雫はこちらに視線を寄越しながら今度は口の端を釣り上げて楽しそうに微笑った。

「さて、時間までまだ四十分近くある。作戦会議だ。あの『天才』を叩きのめすよ、一夏。」

茜雫の口から『天才』の文字を聞くと、対して脅威のない存在に聞こえるのに、直刀が剣道場で言ったあの言葉が一夏の頭の中を何度も山彦のように繰り返された。

《私はアイツほど才能に恵まれなかった『何も出来ない』奴は  
いない、と思う。》

男子組 . . . . . というより男子コンビが少し暑さの和ら  
いだピットの片隅に設けられた机で作戦会議をしている頃、正反対  
側のピットでは . . . . .

「うわ、直刀、凄くスタイルがイイんだね。羨ましい . . . . .  
」

黒いシンプルなISスーツに身を包んだ直刀の全体像を遠目に  
眺めながら二ーナ顎に手をあて、むむむ、と唸る。

スクール水着に近い身体にフィットするISスーツは否応なし

にも装着者のボディーラインを醸し出している。

かなりほっそりとしているというのに、胸部には程よい形の豊かな母性がISスーツを無理やり押し上げている。

とてもだが、あの長刀を振り回して男子である茜雫と互角以上に打ち合っていた同年代の女子の身体つきには見えない。

もつとガツチリしていると予想していたというのに、これほど誰もが羨むスタイルだったとは……………

ニーナは最近ダイエットしなくては、と意識し始めた自身の身体に悲観しながら、目の前のナイス美人さんを見つめる。

対する本人は、

「そう?」

一言かよ、畜生。

うっかりそう漏らしそうになるのを必死に堪えた。

あまりにあっさり返されすぎて襲いかかりそうだ。

特にダイエットなどに気を使ってない篤、鈴、ラウラの三人とセシリア、シャルロット、ニーナの三人とは直刀の体型を見た反応に確かな差があった。

セシリアはいつもの腰に手を当てるポーズをしながらも、しきりにお腹周りを確認するように僅かに揉んだりしている。

どうやら最近は何も心配らしい。

しかし、直刀に関して気になるのはここだけではない。

「うーん、なんでこんな綺麗な黒髪なのにぼつさばさというか、乱雑適当に切られてるのかなあ？」

「髪？」

よく見るために二ーナが近づくと直刀は髪を髪紐で結っていない左側の髪を一束掬うように掴んで撫でる。

それを見て鈴も会った時から思っていた事を口に出す。

「なんていうか素人が特に気にせず切ったって感じよね？あんな、美容室とか行ってないわけ？」

鈴の質問に直刀は首の力を抜くようにコクリと頷く。

「……………行ってない、面倒くさいし。」

「め、面倒くさい……………？なんか、あんたって私服もそんなに持ってなさそうね。」

鈴が気になって試しに訊いてみると、直刀は即答。

「特に必要とか思わないからあまり持ってない。」

直刀の自分の容姿に関する無頓着さに鈴も言葉が出ない。

しかし、これにはシャルロットも声を上げる。

「ダメだよ！直刀は女の子なんだからもつと気を使わなきゃ！顔つきも綺麗だし、スタイルもいいし、髪だって細くて艶やかだからちゃんとしないと！！」

シャルロットが喰いかかるように訴えかけると、直刀は深く考え込むように俯く。

そして、

「……………別に気にしてないからいい。」

【……………】

同じく特に何も気にしていないラウラを除いた全員が沈黙。

シャルロットはまるで魚雷の集中攻撃を受けたかのように撃沈された。

なんで無頓着な人に限ってこんななんだろうか？

泣きたくなる。

直刀は無言の一同に少し戸惑う。

「……………残り三十分ぐらいしか残ってないから少し設定について誰かレクチャーしてくれない？」

「……………あ、うん、いいよ。」

世話焼き体質のシャルロットが抜け出た魂を死神に回収されるまえに自らに叩き込んで快く承諾する。

「じゃあ、まずは直刀の専用機を展開してくれる？」

「うん、わかった。」

直刀は自身の専用機の待期形態である右サイドを結っている髪紐に手を添え、目を伏せて意識を集中させる。

「『月輝夜』」

髪紐が僅かに光り、反応すると直刀がキラキラと幻想的な光の量子に包まれる。

量子がしばし、所属なさげに周囲を漂うとやがて形を創り出した。

「うん、茜雫のISも細いと思ったけど、これもずいぶん細いよね。ていうか、どこ製かな？あんまり見た事のないフレームだけど。」

ISを展開した直刀にシャルロットは感想を述べた。

全体的に藍色に近い黒を基本に所々白のラインが奔っている。

全体像が他のISよりも茜雫のエネミーほどではないが細く装甲は流線型。

シャープなラインで白式に似通った印象を与える。

背部に浮かんでいる非固定兵装アンロック・ユニットの翼を模したかのようなブースターも細かい造りで繊細さを感じられた。

「おお、なんか綺麗だねえ。」

ニーナが感嘆の声を上げる。

「そういえば……………訊いていませんでしたけど、専用機持ちという事は直刀さんは日本の代表候補生です?」

「代表候補生……………?違うけど。」

「え……………ではその専用機はどうやって……………」

直刀の返答にセシリアは戸惑う。

基本的に専用機持ちとはただえさえ少ないISの個人所有を認められている国家の代表的な存在だ。

逆に言えば国家の代表以外でISの個人所有なだあり得ない。

ではどこでそのISを手に入れたのだろうか。



疑問を抱く一同に直刀はとてもシンプルに答えた。

「貰った。」

「……貰った!?」「」「」「」

先述の通りISなどそんな希少な物をほいほい貰えるモノではない。

シャルロットが驚きで声を震わせながら尋ねる。

「だ、誰から?」

「ええ……と……」

直刀は量子収納した右手で頬をぽりぽりと掻きながら視線を外して口籠る。

ひどく答えに迷っている様子だ。

何かに葛藤している。

その反応が筈たちの疑問をより深い所に叩き込む。

一分程思い悩んだ様子の直刀は言い難そうに口を開く。

「ウサ耳つけた不思議の国のアリスみたいな格好をしたよくわからない人……?」

「……は?」

?????」「」「」

こちらも全然意味がわかりません。

全員の意見が一致する。

「急に空から降ってきたかと思ったら、意味わからないことい  
いながら投げ渡されてそのままどっかに消えた。最後まで会話が成  
り立たなかった。」「」

直刀自身自分の答えがあっているのかわからないようです。

しかし、

「.....」  
「.....」

誰のことなのかよく理解できた筈だけは話題が振られないよ  
うに顔を引き攣らせながら視線を泳がせる。

心当たりがあり過ぎる。

あの人か.....

筈は穴があつたら入りたい気分になった。

相変わらずあの格好で歩き回っているのか.....

妹としては恥ずかしい。

「なに、あんたそんな怪しい人と知り合いなわけ？」

「全く見覚えのない人だったし、もし会ったら絶対に忘れられないと思う。」

「誰なんだ．．．．．その怪しい奴は．．．．．」

私の姉なんだ、ラウラ。

絶対に言えない。

言ったら何かが壊れる。

篝は直感的に悟らなくともそう思った。

「ま、まあ、その話はもういいからちょっとエネルギー調整について教えてくれない？授業でも聞いたけどあんまりそこら辺よくわからないし。」

なんとも言えない空気になってしまったため、直刀は話題を元に戻す。

「ああ、うんそうだね。時間もそんなにないし。」

我に帰ったかのようにシャルロットが頷いて進み寄る。

「まずはシステムコンソールを開いて見て。」

「わかった。」

直刀が機体のシステム管理画面を空中投影ディスプレイを開く。

シャルロットも空中投影ディスプレイを覗き込んでコンソールを操作。

取り合えず機体の簡易データを開く。

本当は詳細なデータを開いたほうがいいのだが流石に他人に自分の専用機の詳細なデータをいきなり見るのは失礼だろうという配慮からだ。

開いてみると簡単なスペックデータが出てくる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・瞬間スピードと基本的なトルクが凄いな。高出力多角稼働ブースターを最大限に使用することを前提にした二次元高機動戦特化の近接格闘型・・・・・・・・・・か。」

「なんか・・・・・・・・・・一夏の白式と茜雫のエネルギーを足して二で割った感じね。見た目もそれっぽいし。」

鈴がシャルロットの呟きに感想を漏らす。

「ていうことは、一夏の白式と同じように一撃必殺一撃離脱でも狙って設計されてんの？」

普通の近接格闘型はスピードと防御力をバランスよくするのが一般的だ。

スピードが足りなければ近づくこともままならないし、スピー

ド重視して装甲を削れば近づくまえに墮とされるからだ。

白式の場合は、装甲を少し削り、そこに高出力ブースターを無理矢理ぶち込んだようなとんでも設計だから、零落白夜と並んでなかなかエネルギーの大食らいとなっている。

完全に一撃必殺一撃離脱を前提とした短期決戦型だ。

ここでシャルロットは自分でもコンソールを叩きながら機体データを次々と吟味していく直刀にオーダーを訊いておく。

「直刀はどんな風に機体を仕上げたいの？」

「できるだけ速く、間合いを完全に支配できるぐらい。エネルギーが足りないならシールドから削ってもいい。」

直刀の間髪入れずに即答。

どうやらすでに構想は出来上がっていたようだ。

「え……………?」

シャルロットのコンソールに走らせていた指が止まる。

直刀もそれに気づき、指を止めて空中投影ディスプレイに走らせていた目をシャルロットに向け、首を傾げるように訊く。

「駄目……………かな？」

「駄目って言うより……………ええと、ただええええ装甲

を削ってるからこれ以上は……………」

今現在でもかなり偏った仕様となっているというのに、シールドエネルギーをこれ以上は削ると本格的に危なくなってくる。

「その分速くなるならそれでもいい、できる？」

梶子でも動かなそうな直刀にうくん、とシャルロットはそれでも渋るがやがて頷く。

「わかった、やってみるよ。」

「ありがとう。」

直刀は例を言っただけ微笑む。

直刀は綺麗な笑顔だなぁと羨ましいと思いつつながらコンソールを操作してエネルギー分配率を設定していく。

十数分後、作業が終了。

シャルロットはふうう、と息を吐いた。

詳しくは詳細なデータを見ないとわからないが、見たこともない複雑な造りだったのか思ったよりか手間取ってしまった。

直刀のオーダーに応えようと頑張った機体の設定を改めて見てみる。

「うわぁ……………なんか凄いピーキーな機体に仕上が

った……………」

本来なら設定に合わないエネルギーをブースターに割り振ると出力不足や過度な負担などで機体バランスを崩してしまっただが、このブースターはかなりの高性能でどんなエネルギー分配率でも問題なく作動するようになっていた。

かなり高度な技術力で造られていることがわかる。

さて、直刀の月輝夜がどんな機体に仕上がったというと、

「機動性……………特に旋回力と瞬間的な加速力はおそらくどのISも追い抜けない、あの茜雫のエネミーですら加速力では超えるかもしれん。マシントルクも鈴の甲龍よりも上かもしれないな。が……………」

機体スペックを読み上げるラウラが言葉を一度切った。

「防御力……………エネルギーバリアに関しては、紙……………  
……………とまではいかないが、鉄板レベルだな。」

「それは……………ヤバいんじゃない……………」  
……………」

ニーナが呆れ半分、心配半分で言う。

「どのぐらいなら耐えられるのだ？」

篝が一応尋ねておく。

それにシャルロットが答える。

「セシリアのブルーティアーズの主兵装であるスターライトmkⅠⅠⅠだったら多分六、七発直撃で墮ちるかも……………  
・ラウラのレールカノンだったら二発が限度かな……………  
……………」

シャルロットはなんか凄いのができちゃったと苦笑い。

ラウラは兵器としては欠陥機か色物として扱われるな、と軍事的に見解し、ニーナは自分が乗ったら目を回しそうと直刀を心配。

「うん、これでいい。」

しかし、実際に使用する御本人はご満悦のようだ。

まるで女優のような優美な笑みを浮かべる。

幕としてはこんなジャジャ馬扱いきれるのだろうか、と思わざる得ない。

が、茜雫との打ち込みで直刀の実力を知っているためなんとも言えない。

「そう言えば、大事なことを忘れていましたけど……………  
……………そもそも武器は何ですか?」

「あ、忘れてた。」

何という事だ。



戦闘での要とも言える武器を考えずに設定をしていたのか．．．

直刀はこれでいいと言ったが、武器次第でいろいろ微調整や必要なら大幅な変更をしなければならない。

シャルロットは肝心な武器のことを思い出し、兵装の一覧を開く。

そこでフリーズした。

何なのだろう．．．．．これは．．．．．

まさか、他にもこんな素敵仕様な機体があったなんて．．．．．

シャルロットの脳裏に苦勞する一人の少年の顔が浮かぶ。

「．．．．．」

「どうかしたのか、シャルロット？」

「．．．．．直刀は．．．．．知ってた？」

「コレの事。」

直刀は固まった状態で尋ねてくるシャルロットが見ている空中投影ディスプレイを怪訝そうに覗き込む。

そして思い出したように、ああ、と頷く。

「私にはピッタリと思ったけど？」

そう言つて、不敵そうに面白そうに口の端を持ち上げて微笑う。

何となく、茜雫と似た笑い方だ。

その時、後ろのドアがプシュウという空気音とともに開かれ、  
一人の女性が入ってきた。

その女性は七人を一度見渡すと、最後に直刀の姿を認めてパア  
アと顔を輝かせた。

「イイこと教えてあげよっか？」

四十三話 準備（後書き）

一週間も遅れたくせに内容が薄い、進みが遅い  
最近読者離れに凹んでいます

#### 四十四話 打ち砕かれた男子（前書き）

なんか友人に「二文字の題名ってわかりにくくね？」と言われたので今週中にすべて編集します。  
一応ご報告でした。

## 四十四話 打ち砕かれた男子

相変わらず憎たらしいほど熱いプレゼントをサンサンと送り届けてくれるお天道様があと少しで沈んでくれようという時間帯。

茜雫はまだ熱の残るピットの中で立っていた。

これから面白いものが始まる。

顔のニヤけが止まらない。

そう思うと暑さなど忘れてしまいそうだ。

実際に太陽も傾き始めているため少しずつだが過ごしやすいくらい温へと近づいている。

ピットの入口でベストな温度を肌で感じながら反対側の対戦相手のピットを一瞥すると、茜雫はくるんと半回転、振り返る。

そして今回の主役の一人に向かって楽しげに呼びかけた。

「一夏あゝ、準備OK？」

「おう、いつでもいいぜ。」

声をかけられた主役の一人……織斑一夏はなかなか頼もしい返事を返してくれた。

一夏が直刀たちに伝えたらしい時間変更が正しければそろそろ時間のはずだ。

茜雫はマイペースな足取りで歩き出し、勝手に部屋の隅に備え付けられたコンソールを操作してリニアカタパルトの準備を始める。

たかだか平日の模擬戦だというのに、わざわざリニアカタパルトを使って本格的にやるのはただの気分だ。

勝手に使うが別に怒られはしないだろう。

茜雫はさらにディスプレイ下部にある小さな投影口から赤いレーザーで机に描かれた投影型電子キーを叩きながらモニターの情報を操作。

茜雫は現在主流である、持ち運びが便利で片付けがしやすく場所を取らない投影型電子キーよりも今は廃れてしまったアナログキーボードの方がやっぱりしっくりくる、と頭の片隅で思う。

人間、実際に掴めないものほど心配になってくるものだ。

特にパソコンの個人情報や機密情報など神経質なほどセキュリティ

ティを掛ける時代だ。

デジタルは便利だが本当に大事な情報などは紙に書き記した方が確実に安全だったりする。

保管はされているのが目で見えるし、削除はシュレッダーでバラバラにするか燃やせばいい。

意外なところでアナログとはデジタルなんかよりも便利だったとする。

そんなどうでもいい事を考えていた数秒でモニターが切り替わった。

映されたのは現在使用中のアーリーナの観客席。

たった三色の色で何がされているのかはつきりと分かる。

モニターの中では全席満員とまでは流石に言わないが、それでもかなりの人数の生徒が友人と話したり、携帯端末を弄ったり、本を読んだりと思いいいに待っている。

季節外れの転校生が沙月茜雫となにやら親密な仲である、そしてその転校生が茜雫を文字通り真剣勝負で負かしたという噂は瞬間に広まった。

と同時に、今度は転校生が織斑一夏とISでの模擬戦を開始する、という話題が瞬く間に広まった。

こんなに暑くては外にも迂闊に出られない。

しかし、特にやることなどない。

なのに時間がある。

そんな暇を持て余したお嬢様方がこの模擬戦に食いつかないはずがない。

多少暑くとも貴重とも言える専用機での模擬戦を見逃がす手はない。

というわけで現在観客席には大会でも開催されるのかと勘違いしてしまうほどの人数が集まっている。

「これはとても『都合のいい』ことである。」

「……………そろそろ時間だな。おゝい、セン。いつでもいいぞ。」

「りょくかい、了解。」

名前の通り純白の装甲の白式を展開した一夏がりニアカタパルトの射出部分に立った。

リニアレールの上に付いている射出用の小さな台のような部分に足裏を固定する。

これをレールガンのようにローレンツ力の力で前進させ、機体を撃ち出すのだ。



時間まで一分を切ったため茜雫は射出準備を終わらせカウントダウンに入る。

「Ready?」

「いいぜ!」

「それじゃ、5 . . . . . 4 . . . . .  
- . . . -」

直後、一夏の世界が加速した。

「え . . . . . うおっ!?!」

茜雫は0まで数えず一夏を射出。

一夏は膝を屈伸させることができずに直立不動、どちらかというと後ろに倒れ気味に勢いよくリニアカタパルトから吐き出された。

今度は一夏の白式の足裏を固定していた台が急停止したため、一夏は転がるように空中へ叩き出される。

一夏はかなりの速度で回転しながらも何とかPICとウィングスラスターを使用して回転を何とか止める。

観客席からは間抜けな登場に笑いが広がった。

一夏は右腕部マニピュレーターを量子収納して生身の手で異常を訴える頭を軽く叩く。

「うつぷ．．．．．目が回った．．．．．  
．おい、いきなりなにしゃがる!!」

頭の中がシェイクされた気分だ。

そんな事態に陥れた張本人に向かって憤慨するが笑って返される。

「そんなに怒るなって。血管が切れるよ?」

「俺はジジイか!? ていうか、白式の足首がイカれたらどうする。」

「それは土下座するさ。」

「え．．．．．本当か?」

茜雫が自分に土下座。

うわあ、すげー光景だ。

イメージが壊れるからあんまり見たくないがやっぱり見てしたい気がする。

「一夏が倉持技研にね。」

「俺がかよ!? なんかこんな落ちがあると薄々思ってたけどやっぱり外道だな、お前!!」

「まあまあ。」

たった四文字で流しやがった……………

まあ、これでこそ茜雫なのかもしてない。

疲れる……………

その時、茜雫が含み笑いをしながら、

「そのうち役に立つ事だから。」

意味深なことを。

「????……………わけわかんねえ。」

何を言っているのか……………

無様な大車輪入場のどこが？

まさか……………

一夏は白式を身に纏った状態で自分の両腕で胸を抱く形で身体を震わせる。

「俺にそのうち身体を張ったお笑いでもさせるつもりなのか……………っ!?!?」

「????……………それこそ何のこと?」

怪訝そうな表情をする茜雫はマイク付きのヘッドホン式送受信

機を頭に装着するとコンソールから離れ、ピットの甲板部分に立つ。

「まあ、一夏。慎重に行つてね。」

「どうしたんだよ？」

茜雫にしてはかなり弱気な発言だ。

茜雫が様子見をすることなどあまり見たことがない。

「一応日本人だけど、どこの国家にも属していない直刀の専用機に関しては完全なワンオフ機体。情報が0の状態だ。しかも正直、直刀は才能、才覚という点では化け物クラス。まあ、リトルブリュンヒルデと闘うと思つとけばいいかな。」

「マジで!?!」

ブリュンヒルデ . . . . . 第一回 I S 世界大会で圧倒的な戦闘力総合優勝を果たした一夏の実姉であり I S 学園の教師である織斑千冬の二つ名である。

第二回目ではとある事件が起こつてしまい、千冬は決勝で不戦敗となり優勝は他の国家代表の手に渡つたが、それでも千冬は皆に敬意を表してブリュンヒルデと呼ばれ続けている。

茜雫にそんな事まで言わせる言わせる直刀とはどれほどの人物なのか . . . . .

茜雫に真剣勝負で打ち勝つたという時点で凄まじいが I S 戦は全くの初心者とはいえなめてかかると痛い目を見そうだ。

「お、出てきたみたい。」

茜雫はマイク越しにこちらを向いて空中に浮いている一夏に呼びかける。

「ん、来たのか。」

一夏も反対側のピットを目を凝らして見ている茜雫を見習って振り返る。

こちらに飛翔する影が見えた。

「待たせた？」

藍色に近い黒の装甲に身を固めた直刀が一夏の尋ねる。

初心者だというのにPICを使用して綺麗にこちらに向かってきた。

「いいや、それほど待ってないぜ。」

「そう、良かった。」

一夏が見る限り直刀に緊張の様子はない。

普通いきなり無重力状態に適応するなど難しい……. . . . .  
というよりも違和感が出るものだが、一体直刀はどういう神経をしているのだろうか。

一夏が初めてISを装着していた時には満足に動かすことすらであったといたというのに。

茜雫が言っていたことがなんとなく分かってきた。

一夏はまずは模擬戦を開始するまでに直刀の専用機を凝視した。

まずは敵の情報分析から。

前に茜雫が教えてくれた戦闘における注意事項だ。

ふむ、と一夏が一人でに頷く。

線が細く、茜雫のエネミーほどではないがかなり珍しい機体だ。

おそらく形状からして空戦特化型。

ということは、中距離タイプ………というの  
が一般的なISに多いが、直刀の近接格闘能力を考えると自分の白  
式と同じように高機動を屈指して一気に勝負を決めてくるのか……

いやいや、と結論を出しかけた一夏は思い留まる。

直刀の遠距離戦の力は未知数だ。

決めつけるには早すぎる。

それに一夏の白式はただえさえエネルギーをたくさん喰らう。

固定観念で無駄にエネルギーを消費するのは避けたい。

茜雫の言う通り身長にいくのが最善策。

一夏が策を練っていると、茜雫が全周波<sup>オープンチャンネル</sup>通常回線で直刀に呼びかける。

直刀。

「なに？」

俺は一夏を全力でサポートするからね。

一夏は頼もしい茜雫の言葉に感銘とともに何とも言えない違和

感を感じた。

なんか嫌な予感がする……………

直刀はそのまま答える。

「いいわよ。」

その時、一夏は見た。

もしかしたら一夏しか分からなかったかもしてない。

直刀の返答を聞いた茜雫がニヤリと口の端を持ち上げて笑うところを。

まるでイタズラにとんでもない畏を張った悪ガキのような笑い方だった。

直刀は右腕部マニピュレーターを握ったり開いたりしながら反応の具合を確かめていたため気がつかなかったようだ。

茜雫はガキ大将のような笑みを浮かべたまま空に浮かんでいる直刀を軽く見上げながら言う。

いくらお前でもそう簡単に墮とせないからね。舐めてかかなよ。

「それはこっちのセリフ。初心者だからって甘く見ない事ね。」

「忠告ですよ。」



「どういたしまして。」

茜雫の挑発めいた軽口を直刀は冷静に微笑って返す。

闘うのは一夏だというのにすでに二人の間では静かな闘いが勃発しているようだ。

一夏は何だか置いていかれたというより蚊帳の外に置かれた気分だ。

「一夏、あの有頂天の天才をポッコボコにイジメまくって押し倒してしまえ！」

「いや、犯罪だからな、後半部分。というか、そんなことする前に輪切りにされそうなんですけど………。なんか直刀さん超ヤル気になっちゃってるし………。」

まさかの戦闘で熱くなっちゃうタイプか？

だとしたらヤバい気がする。

そういえば茜雫と闘ってる時も楽しそうな表情だった気がする。

というか、直刀にはISの稼働時間が長いという点でしか勝っていない気がするのでポッコボコにするというオーダーは情けないかもしれないが少々難易度が高い気がする。

一夏には自分が直刀に圧勝するビジョンが未だ浮かばない。

茜雫は静かに宣言した。

「それじゃ、模擬戦START。」

一夏はスラスタを後ろ向きに吹かしていったん距離をとった。

直刀の機体が遠距離もこなせるのなら、射撃武器で攻撃してくるはずだ。

しかし、直刀は何もアクションを起こさず、その場で滞空したままだ。

そして、その場で右手を広げ、静かにその薄い桜色の口を開く。

「『零毀』」

どこからともなく現れた量子がくるくと螺旋を描きながら集約し、現れたのは一振りの長刀。

鍔がなく長さを無視すればドスのように見える。

波紋が牙のように鋭く浮きだっており美しさと荒々しさを持ち合わせていた。

なんとなく直刀にお似合いな武器だと一夏はぼんやりと思う。

展開した零毀を構えることなく直刀は腕をだらんと下げて待っている。

誘っているのだろうか？

しかし、まさかと思うが……………

「近接ブレード一本なのか……………?」

「まさか白式と打鉄以外にも漢気溢れる素敵な機体があったとは……………」

どうやら茜雫も一夏と同じ感想のようだ。

茜雫は向こう側のピットに通信を繋いでみる。

もしもし、誰がいる？

……………なに、茜雫？

女性特有の高い音程の声がスピーカー越しに聞こえてくる。

声から判断してシャルロットか。

なに？あの素敵な仕様の機体。

あゝ、茜雫もそう思う？

逆に思わずにいられない。

もしモニタリングできればシャルロットは苦笑しているだろう。

あんな装甲の薄そうな機体がブレードOnly？

茜雫のエネミーは直刀の専用機よりも装甲は薄いがそれでも巨  
大な非固定兵装アシロック・ユニットの稼働楯を装備している。

どんな機体なのかは詳しく知らないが、あんなもの太平洋戦争  
末期に調子に乗った軍人が採用した零戦特攻機に近い代物だ。

うーん、一夏の機体といいとこ勝負ができるんじゃないかな  
？

あゝ、確かに。

シャルロットの言うことに茜雫は他人事のように同感。

高機動近接格闘型同士の対戦。

勝敗は単純な技量で決まるだろう。

近接格闘のみでの勝負とは一夏にとって誤算だろうが嬉しいの  
か嬉しくないのか微妙なところだ。

茜雫はシャルロットとの会話を中断して一夏に視線を向ける。

「一夏、相手もブレード一本ぽいから特に考えずに闘えそう。」

「……………となる俺はセンを負かした奴とほぼ同じ条件で闘うのか……………」

スピーカー越しでも一夏の嬉しいような悲しいような複雑な心境が伝わってくる。

現在、生身での一夏と茜雫の対人格闘戦績は48勝0敗。

どちらが圧勝しているかは言わなくともわかるだろう。

と言っても、最初こそ一分足らずであっさり負けていた一夏も最近ではそれが平均三分に延長されてきている。

たったの二分？

と思うかもしないが、一夏のもっとも茜雫にとってもここ一週間ほどで一気にそれが伸びたのだから鍛錬の効果は満足……………とまではいかないが上々だと思っている。

茜雫は地声、マイク両方で一夏に叫ぶ。

「とりあえず当たって砕ける、一夏！！お前まで負けたら男子の居場所がなくなるぞ！！」

「おう！！」

茜雫の言葉に後押しされた一夏はスラスターを全開に吹かす。

スラスターから生み出されたジェット炎が1メートル近い重量のある

ISを莫大な推進力を持って前に押し出す。

「うおおおおおおお！！！」

一夏がフェイント無しの上段からの斬り下ろしを仕掛ける。

直刀はその場であっさり上からの斬撃を受け流すと、流した勢いでそのまま一回転。

カウンターの横薙ぎの一撃を振りかぶる。

一夏はあえて接近。

太刀と長刀ならリーチは長刀の方にあるが、極接近戦では長刀よりも短く取り回しのよい太刀である雪片式型に軍杯が上がる。

一夏は雪片の鏝近くの刀身で叩きつけるように直刀の零毀を真正面から力で弾き返す。

細い機体の割に想像を遥かに超えるマシントルクに逆にこちらが押し返されそうになる。

一夏はお返しとばかりに雪片式型を振るうが圧倒的な加速力に一瞬で間合いを外されてしまい空振りしてしまう。

軽く舌打ちをし、雪片式型を確認する。

本当は日本刀同士で力任せに打ち合いなどすれば致命的な刃こぼれか、最悪刀身そのものが折れてしまいが流石はISの主力兵装としての雪片式型。

傷一つついていない。

それは向こうも同じでよほど頑丈のようだ。

しかし、困った。

操縦者である直刀を写し取ったかのようなあの爆発的な加速力。

至近距離で見ると本当に消えたかのようにだ。

刀は間合いの取り方で勝敗が決する。

あれだけ速いと間合いが取りづらい。

こうなればまだ始まって一分もたっていないが……………

……………

「一夏、PLANFに移行。」

「え！なにそのPLANFって!?!」

いきなりの指令に一夏は慌てる。

聞いたことねえ。

「ああもう、俺が一夏に教えたアレだよ！アレ！！PLAN  
Final Weapon《最終兵器》！！」

「知らねえよ！！そんな作戦初めて聞いたぞ!?!……………」

・・・てか、俺もそれをやろう思ったけどできるか、アレ？」

一夏の軟弱発言を茜雫は叩き潰す。

「ゴチャゴチャ言わずに黙ってやる！それともこのまま殺られる？模擬戦前に白式に叩き込んだ稼働データ元に白式の駆動システムに照らし合わせてそれを参考に実行！！直刀の反射速度を考えて相手の思考の裏を取って！！お高い天才様の出鼻を叩き潰せ！！」

「わ、わかった！！」

茜雫の次々に出される指示に一夏は必死に頭を整理して茜雫のエネミーからインストールした稼働データを呼び出して白式の駆動システムとリンクさせる。

正直、目視決定とはいえ直刀と戦闘しながらデータを呼び出すのは骨のいれる作業だ。

データを見ている隙に切られてしまいそうだ。

しかし、完全によけられないわけではない。

二次元で生きている人間が三次元に適応するには時間がかかる。

いくら天才の直刀でも例外ではない。

茜雫はISの機動にまだ慣れない直刀に一夏は上下の動きを中心に揺さぶりをかけて追撃を交わしていく。

突如、一夏が直刀に真正面から向き直った。



そのまま瞬間加速。イグニッション・ブースト

しかし、タイミングがめちゃくちゃな上に驚異的な動体視力を持つ直刀にとっては特に慌てることではない。

危うげなく急停止して凄まじい勢いで突っ込んでくる一夏を待ち構える。

一夏がまた大振りな一撃を振り下ろしにかかる。

直刀はそのまま最小限の距離をスラスターで生身でのように移動しても良かったが、慣れないISだったためあえて受け止めてカウンターを狙う。

50mほどの距離をほんの一秒ほどで縮めた一夏が振り下ろした。

加速された雪片式型と待ち構える直刀の零毀。

零毀の中腹辺りに雪片式型の切っ先に比較的に近い部分が当たった瞬間。

一夏が直刀の視界から消えた。

「……………ッ!？」

ここで初めて直刀の顔に狼狽の色がでる。

そして、気が付いた。

ハイパーセンサーが、一夏が斜め上後方で零落白夜を展開した雪片式型を振りかぶっていることを。

「……………ッ!!」

それでも何も考えずに反射的に反応した直刀は零毀を楯にするが零落白夜の光る刃先が月輝夜のシールドバリアの効果範囲内を僅かに抉った。

ただえさえ少ないシールドエネルギーが微々たる被害だが削られる。

これを見た茜雫は満足そうに笑う。

「よしよし、上出来上出来。まさかぶつつけ本番で成功なんて俺の予想の相変わらず斜め前方にぶっ飛んでくれるよまったく。」

そのとき、茜雫のヘッドホン式送受信機に通信が入る。

「やっほ、茜雫くん。」

「ニーナ？何の用？」

通信してきたのはニーナだった。

ということは皆、あちら側のピットで応援しているのだろうか。

いや、用っていうか確認なんだけど、アレって『タイン・ワル近距離躍  
動旋回』？」

なんと・・・・・・・・・・一発で見抜かれるとは・・・・・・・・

意外とニーナは見ていたところが鋭かったりする。

「よくわかったね。」

そりゃあIS操縦者にとって織斑先生は憧れの的だもん。何  
度も織斑先生の公式動画見て勉強したもん。

「ニーナが勉強・・・・・・・・・・?」

その反応はひどいんじゃないかなあ？

少なくとも茜雫が見る限りニーナは千冬のISの座学講義と湊  
の数学の授業以外寝まくっている。

そう言えば生物学の先生がいつも寝ているニーナにそんなにつ  
まらない授業なのかとこっそり落ち込んでいたのをみたことがある。

話を戻すが、近距離躍動旋回はブリュンヒルデである千冬の得  
意技でもある。

と言っても、千冬自身にとっては技とも言わないただの機動と  
見ているが、やられる側にとってはとんでもない話だ。

タイン・ワルツ・ブーレスト  
近距離躍動旋回とは相手と武器などの一部分を接触させ、そこ

を起点に特殊な回転加えた瞬間加速をすることによって一瞬で相手からの視界から消え、背後を取る技だ。

武器などの接触を行えば嫌でも意識が一瞬そちらに向く。

その隙を付くのがこの技だ。

「ただし――――自己と相手との位置情報の把握、突っ込んだ勢いからの減速の調整、スラスタの角度や出力、PICの高度な操縦技術、回転速度、接触部分や位置、急激回転中の自己把握能力……その他諸々を完璧に熟さなければ絶対に成功できない技……一夏には毎度驚かれる。びっくり箱みたいなやつだ。……羨ましい。」

茜雫の最後の独白は空気に溶けるように掻き消された。

「おうえええ、気持ち悪い……PICをほとんど姿勢制御に持っていくから身体に悪いぞ、コレ……」

．．．．．よく成功したな．．．．．  
ていうか、あれだけ上手く決まったのに結局有効打、与えられな  
ったし．．．．．」

一夏はダメージを与えたというのにゲンナリした。

これは深刻な問題だ。

作戦名のようにアレは「Final Weapon」《最終兵器》  
だったというのに、反応されてしまった。

てか、どんな反射神経しているんだ？

無理だろう普通。

一夏が直刀を見るとこちらをキツと睨んでいた。

まさか怒った．．．．．？

顔立ちが凜としていて目元が鋭いから千冬と似た迫力がある。

正直気圧された。

直刀が静かに口を開く。

「なるほど．．．．．茜雫が入れ込むだけあるわね．．．．．  
」

当たり前でしょ？俺とは違うもん。

「確かにあなたとは正反対ね、彼。」

だから舐めてかかるなって言ったでしょ？天才くん。

茜雫の物言いに直刀がピクリと眉を動かす。

「いいわ、私もいいモノ見せてあげる……………」

「え……………」

何と言いましたか、この人？

直刀が意識を集中させるように目を伏せて零毀の刀身に指を這わせる。

と、濃い紺色の刀身を持つ零毀の白刃が侵食されるように刃まで深い紺色に染まった。

な、何ですと!？

茜雫からも驚きの声上がる。

一夏はよく見えたなセン、と他人事のように現実逃避。

「いくわよ。」

直刀の静かな宣言と共に月輝夜が一瞬で加速。

呆気を取られていた一夏は反応できずに接近を許してしまい、雪片式型で迫る零毀を受け止めた。

「……………ツツ!!!」

完全に受け止めた一夏が驚愕で目を見開く。

奇妙な音とともに、一瞬火花が散ったかと思うと、雪片式型の純白の刃に零毀の紺色に染まった刃が侵食するように斬り込まれた。

茜雫が慌てて指示を飛ばす。

一夏!!!すぐに鏢迫り合いを中断して離れて!!!

「言われなくとも!!!」

一夏が急激にバックステップ。

急後退した一夏を直刀は追わなかった。

一夏は助かったと雪片式型の刃を確認。

刃こぼれしたように刃が欠けてしまっている。

あれだけ力任せに打ち合った時には無傷だったというのに……

あの音に火花……………高周波ブレードか……………!!!

「高周波ブレードって漫画なんかに出てくるアレか!?!」

苦虫を噛み潰したように呻く茜雫に一夏が反応する。

高周波ブレード………刀身そのものを高周波装置で高速振動させることによって生み出された摩擦で物体を切り裂く物だ。

だが、実際には簡単に行くものではない。

この武装には大きく致命的な問題が三つある。

一つ目に摩耗だ。

高周波ブレードは高速振動させ物体を簡単に切り裂く。

しかし、これでは刃先の摩耗が数倍も早く進んでしまい、薄く研がれた刃は簡単に潰れてすぐに使い物にならなくなる。

斬れなければただの振動する折れやすい棍棒だ。

次に耐久性だ。

高周波ブレードでの使用結果は二つ。

斬れるか、刀剣として使い物にならなくなるか、だ。

もし対象物が斬れなかった場合、斬れていない状態でも高速振動するため、刃こぼれの被害が甚大になる。

下手すれば刃こぼれに刀剣よりも硬い物体が食い込んだ状態で高速振動するため、最悪刀身そのものが簡単に折れる。



折れてしまえばもう使い物にもならない。

最後の問題点は装置そのものだ。

高周波装置で刀身を高速振動させるため当然小型でなければならぬ。

それも柄、もしくは腕に装着できるサイズだ。

しかし、何があっても振動し続ける高周波装置は常に装置そのものに負荷が常にかかった状態。

そんなものが外部からの瞬間的な衝撃に耐えるのは無理があるし、接続部分にも負荷がかかり、根元からポロリと脱毛よろしく抜け落ちる可能性だってある。

茜雫から言わせれば実績があるうが信頼性のない高周波ブレードは漫画やアニメでホイホイ登場しても無理のある欠陥品だ。

しかも、削り取ったということはチェーンブレード……  
……一夏、迂闊に受けたらヤバい！！それは刃にエネルギーを高速で往復させることでチェーンソーみたく鉄でも削る……  
……！！

「高周波ブレードにチェーンブレードって完全にチートだよ、それ！？何でも斬り裂きますなんてシャレにならねえよ！！」

次々と振り抜かれる死神の鎌を一夏は直感でなんとか躲す。

その際、刃先が背部ウイングスラスターの先っぽを掠るが何の抵抗もなく斬り裂かれ、それを見た一夏は背筋を寒くする。

一方、茜雫は一人ブツブツ呟いている。

刃をチェーンブレードにすることで高周波ブレードの摩耗と耐久性を緩和してるのか………とんでもない技術力………開発者が不明………造ったのは束さんか………そうか………また、とんでもないものを与えてくれる………!!」

こんなもの造れるのは世界が広しと言えども篠ノ之束ぐらいだろう。

今は打開策が先だと茜雫は一夏にマイクで叫ぶ。

一夏、零落白夜!!

「零落白夜!?!」

一夏は流石に渋る。

零落白夜は一撃必殺だが燃費が悪い。

エネルギーを少しでも無駄にしたいくない今の状況では難しいことだ。

その刀は刀身にエネルギーを流すことで耐久性を底上げし、チェーンブレードを兼ねている。エネルギー関連をすべて打ち消す

零落白夜が弱点！！

「な、なるほど．．．．．わかった！！」

一夏は即座に相棒に意識を傾ける。

白式はすぐさま雪片式型にエネルギーをすべて打ち消す零落白夜を展開した。

威力は間違いなく全IS中トップクラス。

茜雫のエネルギーの最大火力でも押し切れるかと聞かれれば零落白夜が勝つだろう。

零落白夜を展開した一夏を見て、直刀の顔に苦渋が浮かぶ。

茜雫の予想通りこれは嫌らしい。

「よしっ、このまま一気に流れを持っていく！！」

勢いづいた一夏が零落白夜を展開していったん距離を開けようとする直刀を追いかけ回すが直刀のあり得ない瞬間的な加速力に振り回されなかなか近づけない。

一夏は残量エネルギーを確認して焦り出す。

高速での追いかけてっこが数分続いただろうか。

と、ここで直刀の動きが止まった。

慣れないISでの操縦のせいか前髪には汗が玉をつくっている。

一夏も激しく動き過ぎて汗をかいた。

しかし、チャンスだ。

一夏は隙だらけに直刀に零落白夜を振りかぶる。

「俺の勝ちだあ！！」

その時、俯いていた直刀の口元が笑っているのが見えた。

茜雫に似たその笑いに何かあると思った一夏は急停止しようとしたが、間に合うはずがなかった。

直刀の姿が消える。

「なにッ！？」

一夏は自分が殴られたような衝撃と共に大きくエネルギーが削られたことがわかった。

振り向くと30mほど後方の空中に直刀が。

これは……………？

一夏の疑問を茜雫が説明。

オ……………  
オールド・ギア・アクセル  
限界突破加速……………？

「なに!？」

あの瞬間加速の発展版でするにも運営にも高難易度の超高速機動をいきなりやったのか!？

一夏は驚きで声が出ない。

ISの乗って二時間も経っていないのに目の前の少女はいきなりやりやがった。

しかも、成功。

ちなみに一夏は今まで試したが一回も成功していない。

茜雫が肩をプルプリ震わしたかと思うと、力の限り右前方の観客席に向かって叫ぶ。

ま．．．．．まさか．．．．．

直刀に限界突破加速を教えたのは姉さんかッ!？

一夏もハイパーセンサーでデンジャラス教師．．．．．沙月湊先生を発見。

万円の笑顔で手を振ってるし．．．．．

向かい合った直刀が優しく微笑む。

ああ、負けたな．．．．．

情けないが思うしかないない。

とんでもないのが転校してきたものだ……………

一夏は他人事のように目の前の美麗の剣士を見て思った。

「セン、すまん。」

「なんにも言ったらダメだよ、一夏。まさか姉さんまでグルだったなんて……………」

皆と合流して負けまくった情けない男子二名は立つ瀬が無くなる。

現在はアリーナを周回するようにある廊下だ。

「なっさけないわねえ、あんた達。」

「くぐはあ!?!?」

鈴の手痛い言葉が突き刺さる。

きつと鈴も闘えば同じ結果になるとは言わない。

いったらなにされるやら。

他の面々も気の毒そうに見てくる。

「俺を見ないでくれ……………」

一夏の眩きに気の毒オーラが濃くなる。

結構凹む。

と、その時、ぞくりと背筋が。

「沙月、話があるのだが？」

そんな冷たい声が聞こえる。

振り返らなくとも分かる。

ギギギ、と茜雫が壊れた人形のように振り返る。

「ち、ちふ……………じゃなかった、織斑先生……………」

何ですか？」

「いやなに、あんまり観客が白熱していたからな。教師のくせにノリノリだったバカを捕まえて肉体言語で聞き出せば、なにやら今日勝手に行われた本格的な模擬戦で『賭け事』があつたらしくてな……………」

「へえ……………それはいけないことですねえ。」

千冬はまるで今日の天気を話すような口調だ。

茜雫は怯え口調で相槌を打つ。

拳動不審だ。

しかし、賭け試合とは初耳だ、と一夏は思った。

というか肉体言語で吐かせたバカとは明らかに湊のことだ。

「でだ、なにかお前は知らないか？」

「ははは、知ってるはずないじゃないですか？」

「そうか、知らない……か……」

ゆっくりとした口調の千冬が逆に不安を煽る。

千冬は思案するよつに顎を撫でる。

「では、バカと人垂らしからお前の名前が出てきたのはなぜだ

」？

「おい！？お前が主犯だったのか！？」

一夏は茜雫に掴みかかる。

ガクガク揺さぶられる茜雫は返答に困っているようだ。



この野郎、親友使ってなんてことしやがる . . . . . !

「くそ、姉さんは当てにしていけないとして楯無さんめ . . . . .

「. . . . .」

「なるほど、試しに出してみたがあいつも共犯か . . . . .

「. . . . .」

「嵌められた!？」

茜雫は素つ頓狂に驚愕。

一夏は我が実姉のしたたかさに内心拍手。

教師が生徒を嵌めるとは . . . . .

「さて、私に部屋でゆっくりとお話をしようか。安心しろ、残りのバカもすぐに引きずってきてやる。」

「全然安心できません!？」

黙れとばかりに凄まじい拳骨を食らった茜雫は千冬にそのままどこかへと引きづられて消えて行った。

一夏は絶対捕食者を見てしまったといった顔をして目を見開く直刀が忘れられなかった。

「あゝこれは堪えた。マジでキツかった。」

茜雫は肩をグリグリ回しながら揉み解く。

ゴキゴキ音がなつて自分で怖い。

あのあとありがたーいお説教を三人仲良く正座で受けた茜雫はすでに疲労困憊だ。

早く夕飯を食べねば倒れる。

「賭け事などやるからだ、馬鹿者が。」

隣を歩く筈が呆れ顔で言う。

「全くだ。人の断りもねえし。」

一夏も続く。

茜雫はそつだなあ、と呟いて、

「一応一夏に期待して一万円札かけたんだけどなあ。勝てば何

と24倍！凄くね？」

「たくさんも人間が直刀に賭けた中、お前が一万円札も俺にかけてくれたことに俺は喜ぶべきか……………」

何だか複雑な心境になる一夏。

「今度はもっとバレないようにするしかないか……………」

「

「あれだけこつてり絞られて反省なしかよ……………」  
前は。」

「ほら、二ノ達も食堂で今食べ始めたと連絡があつたから急ぐぞ。」

幕にさせされ一夏と茜雫は小走りに。

一分ほどで食堂に。

と、入口をくぐった時に大人数座れるテーブルにいつものメンバーを発見。

とりあえず食券を買おうと歩き出すと、直刀の隣に座っていた影がこちらに勢いよく駆け出してくる。

「ん？」

空腹で思考が低下していた茜雫は反応に遅れた。

次の瞬間、

「げふつう……………!!」

茜雫が吹き飛んだ。

「え？」

「な、なに？」

一夏はあまりの事態に思考が追いつかない。

が、箒は別の事に目を見開く。

なぜなら……………

突っ込まれた勢いで後ろ向きに倒れ込んだ茜雫の胸に目を輝かせた中学生ほどの金髪の少女が絶対に離さないとばかりに思いつきり抱きついていた。

「……………どういうことだ……………?」

箒の眩きがこの光景を目撃した女子生徒達によって虚しく掻き消された。



#### 四十四話 打ち砕かれた男子（後書き）

なんだか今回、直刀無双になってしまった。

キーワードをオリキャラ最強に変えた方がイイですかね？

皆さんに聞きますが、

「こんなキャラが、あのキャラっぽい人が出たら面白いんじゃない？」  
と思う人がいたら一応意見とかください。

今なら間に合います。

よく吟味したのち採用不採用を決めたいと思います。

オリキャラならその人の解説を乗っけていただくと嬉しいです。

その他要望感想もどんどんください

この小説共々よろしく。

四十五話 不思議な少女(前書き)

最近進みが遅いためアンケートをとります

?内容を薄めて急ぎ足で進める

?現状維持

よろしく願います。

期限は11月24日までです。

## 四十五話 不思議な少女

何なのだ……………？

目の前で茜雫を押し倒し、倒れ込んだ茜雫の胸に抱きつく少女に対し、篝の頭の中でそんな言葉が渦巻く。

この『何』には二つの意味がある。

とりあえず、

この少女は誰……………？

見たところ中学生ほど。

茜雫と一緒に倒れこんでいるため細かな身長はわからないが、茜雫との身長差から見て140cm後半。

涼しげな水色のワンピースの背中に流れる長いストレートの輝く金髪。



仮にも高等教育機関であるIS学園の生徒では絶対ない。

そして、顔立ちや金髪からして日本人ではない。

少なくとも篤はこんな少女見たことがなかった。

次に……………

「なぜセンに抱きついている……………!？」

「うわっ、篤!? 握り拳をぶるぶるいわせてどうした!？」

今の篤に一夏程度の声など聞こえなかった。

最近いろいろあってただえさえ影が薄くなってきたのでは? と心配だというのに……………!!

目の前でいきなり想い人に抱きつくなどこんな羨まし……………  
・ ……じゃなく許せないことだ。

髪と同じ色の金色の瞳をキラキラと輝かせて茜雫に思いつきり抱きついている。

恋する乙女には衝撃の光景だった。

殺意が湧くほどに……………

噴火する火山ごとき膨れ上がる殺気を敏感にキャッチした一夏

はあまりの事態に後ろに数歩たじろぎ、謎の金髪少女は筈の存在に今気がついたように、

( ( ; 。 ) )

といった表情でビククリする。

と、ここで張本人？が、仰いでいた天井からいきなり激突して自分の胸からお腹をやりわりと締め上げる柔らかい物体の正体を確認するべく顔をそちらに向けた。

そして、その自分を締め上げる正体である少女の存在を確認するとキョトンとした顔で、

「あれ、ニル……………?」

途端に呼ばれた金髪の少女……………ニルは顔に見るからに喜びに満ちた表情を浮かべる。

まるで迷子になったペットにまた出会えたというような顔だ。

「お、なんか久しぶり。ていうか、とりあえずどこうか。」

茜雫がなだめるように少女にいうとハッと気がついたように少女がいそいそと後ずさるようにして茜雫の上体から身体を退ける。

茜雫は久しぶりに会えた妹分に微笑みながら、ちゃんと存在を確認する。

「なんか見ないうちにどこが変わったような気がする。」

茜雫の言葉にさらに少女が嬉しそうに顔を輝かせるが、さすが

は茜雫。

笑顔で、

「太った？」

途端に少女が白雪のような真っ白に肌をボツと真っ赤にする。

と、風が顔を真っ赤にする少女の髪を靡かせたかと思うと、

「ふっ！あつ！？」

奇怪な叫び声と共に茜雫の顔面に何かかめり込み、茜雫の後頭部は再度硬い床へとバツクリターンする。

一夏はいつのまに茜雫の傍らに直刀が立っていることに気がつく。

「女の子にいう台詞じゃない。それにニルは今ちょうど成長期だからあなたが最後に会った時から5cmは伸びてる。そろそろ好い加減にしないと削ぐわよ？」

「何を！？」

直刀の危ない発言に一夏が戦慄する。

というか、茜雫は大丈夫なのだろうか？

直刀が茜雫を殴った愛用の刀。

いくら鞘に納まっているとはいえあれで殴られればかなりの大打撃だと思われるが……………

直刀はスラツと音もなく漆黒の刀を抜き去ると茜雫に突きつけた。

「聞いてる？」

「その前に鼻はどこ……………」

茜雫はそれどころではないのかギャグ漫画のように\*のように凹んだ顔に床に落ちたメガネを探すような仕草で手を当てている。

どんな顔の構造をしているんだ……………とぼんやりと一夏は思う。

が、クールビューティーのはずの直刀が凍てつく眼差しで刀を握る右手に力を込めるのを見てギョツとした一夏は慌てて直刀を止めておいた。

何をされるかは知らないが『削ぐ』ではなく『殺ぐ』のなりそう。

とまあ、茜雫の言った暴言というか自殺発言は確かにヤバイよな、と頭の秤が直刀に一気に傾く。

とりあえずあれがなかったら殴られる事はなかったからだ。

一夏に諫められて、それでも刀を納めなかった直刀だが、その刀をもつ右腕の袖口を少女がギュツと握る。

懇願するように見つめる少女を見て、一泊後、直刀は一度仕方が無いと溜め息を吐くと刀を量子収納した。

いきなりキラキラとした光の量子に変わった刀を見て少女は驚いたように、綺麗そくに量子の光が消えるのを見つめていた。

なんだか何との言えない独特の雰囲気を持つこのニルと呼ばれた少女。

一体茜雫とはどんな関係なのだろう、と完全に蚊帳の外と置かれた篤は激情がやっこのことで冷めて思った。

茜雫が直刀にぶちのめされて少しはスッキリしたのかもしてないなど結構Sな思考に至っていると篤は自分で気がつかない。

ゆっくりと労わるように自分で起き、ようやく鼻を引っ張り出した茜雫はポツンと一言。

「周りの視線が痛いから早く席に着かない？」

お前のせいだ。

一夏と篤は声に出さずとも見事にシンクロした。

さすがは幼馴染。

なのに目の前の青年にはなぜか伝わらない……………

.....

あれから一夏、篝、茜雫は食券を買って料理を受け取ると、やたらと長いと思っただら分裂可能と意外とハイテクだった長椅子を詰めてもらい、端に座っていた少女の隣に茜雫、一夏、篝の順に座らせてもらう。

流石にキツイかと思われたが意外とすんなり入った。

嬉々して料理を見つめる茜雫にスナイパーがその心を撃ち抜く。

「で、誰なんだ、その子は.....?」

今日の食堂の一押しの日本食、初茄子のお浸し定食に最初の一口の箸を伸ばしている茜雫にそれを遮るようにラウラの質問が釘を刺す。

茜雫の隣に座っている一夏の目の前で茜雫のお盆ヒシヨシに載っている涼しげな茄子のお浸しが黒いウサギに拉致られる幻覚が確かに映った。

「……………」

「どうした？」

「いえ、なんでも……………強いて言うならその質問に下  
スが効いてるのは何故でしょう？と素朴な疑問を投げかけます……………  
……………」

すっかりちゃっかりお得意の慣性停止結界A I Cでお箸を嚴重ロツク  
されてしまった茜雫は押したり引いたりしながら茜雫は下手に物を  
いう。

最悪今度は大口径レールカノンでせつかくの夕食がおじゃんに  
なる未来オチだけは防がなくては……………、とでも考え  
ているのだろう。

賢明で懸命な判断だ。

ラウラは骨付きのままの豚スネ肉を表面はカリッと、中はジュー  
シーに焼き上げたドイツ料理の一品……………シュヴァイネハ  
クセをナイフで次々と解体しながら眉間にシワを寄せる。

何となく茜雫の未来を暗示しているように見えた。

「私の目の前で嫁が素知らぬ女に抱きつかれたのだ。なんにも思  
わないはずがなかるう。」

ラウラの言葉に直刀含む数人の眉がピクツと反応した。

気温が1、2度下がった気がする。

ハンバーグセットを食べていた少女が敏感に察知し、わけがわからず辺りを見渡す。

一夏の目の前で茜雫はそんな方々に気がつかず、思い切って捻ってみようと頭も捻って実行していた。

あ、箸が折れた……………

からんからんと軽快な音と共に折れた箸がお盆の上を踊る。

ラウラの追求を躲して料理を食べるという選択肢を失った茜雫は……………

と、脳内で泣いていそうだが、このままでは身が危ないと判断したのか、手元に残った半分の箸を静かに置く。

「直刀、さっきまでずっとみんな一緒にいたんだから紹介ぐらい済ませておけば良かったのに。」

「一応、あなたが来るのを待ってたのよ。」

「待つ理由がわかんない……………とまあ、いいや。紹介する、この子の名前はニル。年は……………13?。」

「14よ。好い加減にしなさい。」

「あゝそういえば、もう四月過ぎてたね。」

茜雫の隣で紹介された謎の金髪少女……………ニルははずかしそうにぺこりと頭を下げた。



だが、まだ分からないことが……

一夏がその疑問を口に出す前に割り込むように箒が詰問する。

「で、どういう関係なのだ……?」

「どういう関係……関係……  
……なんだろうね。」

なぜか頭を悩ませるように返答に困っている茜雫は直刀に首を傾ける。

「私に振らないで、あなたのことでしょうが。」

「冷たくあしらわれた……まあ、率直に言えば『妹』?」

「い、妹だと!?!」

衝撃的な言葉に箒とラウラがガタンと音を立てて立ち上がる。

「あれ、なんかまずかった……?一夏。」

「俺に振られてもわかんねえよ。」

何でさつきからコイツは人に意見を求める。

振られても答えられねえよ。

(センの妹か……………)

なんか苦勞しそうだな、一夏は少し失礼なことを思った。

しかし、

(この子、なんでさっきからなにも喋らないんだ?)

茜雫と再会(詳しく知らないが状況から見てもさうだと判断)してからなにも話していない。

とても嬉しそうに喜んでいるのだが、ずっと一言も喋ろうとしない。

極度の恥ずかしがり屋なのだろうか?、と一夏は適当に結論づける。

が、セシリアも同じことに気がついたらしい。

「先ほどからニルさんが一言も話しません気分が優れないのかしら?」

「あゝ。」

「先に言っておくべきだったかな。」

茜雫と直刀の反応に皆が頭の上にクエスチョンマークを浮かべる。

何をだるうか?

茜雫が言葉を選ぶように、

「ん〜何というか、ニルは啞者なんだよね。」

「啞者？」

一夏には聞き慣れない言葉だったが、篤はわかったようだ。

「言葉を話せないのか？」

篤の言葉に茜雫は頷いて補足する。

「普通、啞者と言ったら失語症とか聴覚障害で言葉を話せない人を指すけど、ニルの場合声帯の方になんか問題があるっぽい。専門家だからよくは知らないけど。」

どう反応していいかわからない一夏は一応適当に相槌を打っておく。

こういう話題はどこまで踏み込んでいいのかわからないため、距離感が大切だ。

しかし、茜雫の隣にいるニルはそんなハンディキャップを感じさせなかった。

もし自分が言葉が話せなかったらどんな状態なのだろう、とぼんやりと思う。

少なくとも現在とは未来が変わっている。

そう思うと少し怖い。

茜雫が少しぬるくなったお茶を啜りながらさらに付け足すように口を開いた。

「と、いつてもそれを補うだけのものがあるけどね。」

「どういう事？」

シャルロットが白身魚のムニエルをフォークで崩しながら意味深な茜雫の言葉に首を傾げる。

茜雫は隣で口周りをソースで少し汚しながらハンバーグを食べているニルにお絞りを渡しながら声をかける。

「ニル、アレやって見て。」

「アレ？」

一夏には何をさしているのかわからなかったが、ニルは渡されたお絞りで口元を拭きながら数泊考えるように停止したあと、意味がわかったようにその細い首でこくと頷く。

この少女を見ていると小動物を連想させられる。

茜雫はお茶をテーブルに置き、背もたれに背を深く預ける。

と、ニルが茜雫を跨ぐように一夏に右手を差し出す。

触れれば折れそうなくらい白くて繊細な細い手だった。

「?????」

いきなりだったため一夏は反応できずにその華奢な手を見つめる。

茜雫が助言するように、

「一夏、手を出して。」

「手？右手でいいのか？」

「ああ。」

言われた一夏は困惑するようにおずおずと手を差し出す。

ニルが一夏の目を確認するようにじっと見つめる。

一夏はなんだか恥ずかしくなって目を逸らす。

半ば差し出したところで手を取るようにニルから差し出した右手を掴まれた。

一夏は年下とはいえ、それほど年の離れていない少女にいきなり手を握られ、思わずドキッとする。

途端に周りの視線がビシッと痛くなる。

一応名譽として言うが、ロリではありません。

その時、一夏に何か電流のようなものが流れた。

.....あなたが織斑一夏？.....

「.....え？.....え、なに？」

幻聴？

なんですか今のは？

未知の感覚に一夏の頭が混乱。

他の面々には何も感じらてなかったのか一夏の謎の反応に訝しげな視線を送る。

代表として鈴が、

「一夏、アンタどうしたのよ？」

「え、.....いや、声が.....」

「声え？」

「お、さすがは女たらしの一夏くん。才能あるね。」

「誰が女たらし.....才能？」

引つ掛かりを覚える一夏が訊き返す。

茜雫はお茶に口を付け、ぬるま湯に近づいてきたお茶に閉口したがそのまま一気に飲み干して説明。

「うーん、なんていうか超能力？」

「超能力!？」

いきなりぶつ飛んだ単語に一夏は声を上げる。

ニーナだけはいいなあ、とボヤいていた。

茜雫は今はちよつと言い過ぎか、と考えるように頭をひねると、

「まあ、一種の精神干渉テレパシーだと思えばいいかな。詳しいことはよく知らない。」

「それで、『才能』とはどういう意味なのだ？」

茜雫はハンバーグセットを食べ終えたニルのフォークを拝借してやつとのことと料理にありつくが、味噌汁は冷めてしまっていた。

まことに残念。

「より鮮明に相手と更新できるかどうか、相性みたいなものだね。基本的に根が単純な奴が一発で上手くいく。」

「へえ、そうなの……って誰が単純だ!!」

流れて頷いてしまったが、失礼なやつだ。

茜雫は茄子のお浸しにフォークを音もなく突き刺し、

「冗談。俺が今まで見てきた経験則だと単純な体質だね。」

「では、センや直刀はどうだったのだ？」

箒が秋刀魚の塩焼きをつつきながら気になって尋ねる。

それは訊いてみたい。

「俺は………うん、アレはヤバイ。初めて体験したときは死ぬかと思った。」

「な………一体何が？」

無性に気になるが逆に訊いてはいけない気がして流しておくことにする。

「では、直刀はどうだったのだ？」

「私は………普通かな？」

直刀が副菜のほうれん草のお浸しを食べながら言う。

その後、一斉調査、ということでもみんな試して見ることとなった。



結果、一番優秀？だったのがニーナでぼんやりとしか聞こえてこなかったビリを争ったのがラウラとセシリアだった。

（やっぱり普通の女の子にしか見えないよなあ。）

と、話せないのにも関わらず皆と笑っている微笑ましい光景を見ながらそう思った。

人の賑わう空港。

国際的な国となっている日本の空港とだけあって多種多様な人が往来している。

若い新婚夫婦もいれば子供連れ、ビジネスマン、観光客、様々な人間が様々な目的を持って硬い床の上を目眩がするほどの人の数が行き交っている。

その国際線の雑踏のなかを縫うように歩く一人の青年がいた。

背が高く、170後半はあるだろう。

年は10代後半。

薄っすらと赤みがかった長めの金髪。

少し痩せ気味な身体に涼しげなサマースーツのようなノーネクタイを完璧に着こなしている。

綺麗に着こなし過ぎて少々神経質そうに見える。

他の空港利用客は重たげなキャリーバッグを引きずっているのにも関わらず、その青年は手荷物どころか全くの手ぶらだった。

パスポートさえ持っているか怪しい状況だ。

紺色の汚れシワ一つないズボンのポケットに手を突っ込みながら同じテンポで歩を進める。

真っ黒い近代的なデザインのサングラスで目元を隠している青年は近づき難い雰囲気を出していた。

そんな異質な雰囲気醸し出している青年に周りは全く気がついていないように通り過ぎて行く。

青年は受付で適当に手続きをすると、小腹が空いたのでお土産店を物色。

しかし、お土産品に手頃に食べられるものなど置いてあるはずもなく特に何もせず出て行く。

「おっ。」

と、今度は小さな売店で物色していると興味深いものを発見。

手にしたのは棒状のビスケットにチョコレートコーティングした『ポッキー』。

青年は懐の内ポケットから一枚の写真を取り出す。

写っている人物が食べているものと同じものだった。

別に食べようと思わなかったが、その人物が食べていたので興味湧いた。

それを一箱購入。

売店のご老人が愛想笑いではない笑いを青年に向けたのを見て青年は少し戸惑った。

こついったことの経験は少ないからいきなりだと面を食らってしまう。

食べてみると意外と美味しかった。

それに手軽に食べられるところもいい。

青年はポツキーを一袋平らげて、二袋目を開けながら空港のロビーの自動ドアをくぐり抜けた。

見上げれば真っ暗な空だ。

周りの乱雑な光のせいで星空ではない。

青年はもう一度懐の内ポケットから一枚の写真を取り出す。

写っているのは一人の同世代の青年。

漆黒の髪に憂いげで金を一滴垂らしたような不思議な色合いをした瞳をしていた。

青年はこの写真をこっそり情報端末の画像フォルダに隠し持っていた少女に嘆息する。

ここにその少女がくる前に使っていた二人の共用パソコンに一枚だけ奥底に残っていた。

それもロック付きで。

「まったく、エレナは……. . . . .ちゃんと報告しないとダメじゃないか……. . . . .」

しかし、その少女にはこの青年に組織の職員の目を盗んでこっそり隠し持つだけの惚れ込む理由があるから仕方がないのかもしれない

ない。

ギリイと奥歯を噛み締めた。

青年は写真を弄ぶように角でくるくる回す。

そして、楽しそうに嗤う。

「さて、キミはこれからどうするのかな？」

かつての同志の名を呟く。

挑戦するようだ。

「センナ」



四十五話 不思議な少女（後書き）

お気に入りが一気に減った。

．．．．．何故でしょう？

わざわざ消すほどそんなにつまらない？

最近こいつの先行きが不安です

四十六話 不審者発見（前書き）

遅くなつたくせに短い。

すみません。

ちなみにアンケート結果は現状維持で行きたいと思ひます。



## 四十六話 不審者発見

「あつついわねえ……………」

ムンムンとしたIS学園一年寮の廊下を一人の少女が歩く。

本人の気性を表すような躍動感のあるツインテールも今は本人のテンションを表すように少し垂れてみえる。

腕をだらんと垂らしながらだらだらと歩く様はB級映画のゾンビのようだ。

ゾンビならぬツインテールの少女……………鳳鈴音はとある人物を目指して暑いカーペットの廊下を行進中。

IS学園の一年寮。

通路の両側に部屋を配置しているため、通気性が悪く熱が籠る。

しかも、現在空調設備が使用不可能状態。

いや、空調設備どころか電気機器が麻痺してしまっている。

なぜかというところ、昨夜から様々なところで謎のハッカーによる電化製品破壊事件が起きているからだ。

狙われたのは街の統括システム。

そこでは街の水道、電気、ガスを主に様々な情報などを管理している。

そんな重要なところが狙われたのだから大問題だ。

破壊され方は様々。

いきなり許容範囲を超える電気量が街に流され電化製品が軽度のショート状態。

システムに凶悪なウイルスがネズミ方式のように一気に増殖してコンピュータそのものがパンク。

コンピュータ制御の機材が謎の暴走の末、自壊。

被害場所はランダムだが、何故か何を破壊するのははっきり区分されている。

公共……特に街の信号などの交通機関が酷い状態で、街では警察官が総出で交通整備に当たっている。

逆に病院や一般家庭にはそういったことが起きていないのが唯一の救いというべきか。

病院の電子機器が停止すれば中の患者、特に重病の患者には致命的な被害が出ていたの必須だ。

現在、政府の情報プログラム班が総力をあげて犯人の足取りを追っているが、期待できそうにない。

ハッカーの放った凶悪なウイルスは散々暴れまくった後、満足したかのように勝手に自滅したし、そのハッカー自身もかなりの腕だった。

そもそも国際的なIS学園のある街の統括システムの強固なセキュリティロックを誰にも気づかれることなくウイルスを放つことのできる犯人が足取りを残すなど初步的なミスをしているはずがなかった。

それに日本はコンピュータの置いて世界的な代表国家だが、そういうったサイバーテロの防衛能力は他の国と比べて低めだ。

今朝のニュースで『自分の才能に驕った愉快犯の可能性がある』  
『日本に対するテロリストの犯行だ』などのありきたりなコメントをする胡散臭いコメンテーターを見た時は「……………もつともらしい事を言ってるのね。」程度の自分に関係のないという認識で頬杖を突きながらトーストをかじっていたが、今は違う。

「ふざけんじゃないわよ……………おかげでどこ行ってもあつついじゃないの……………!?!?!」

イラつきを愚痴で発散できるわけもなく募るばかり。

まさか自分にここまで被害が及ぶとは……………

鈴は関係のないと思いきやととても自分に関係していたが  
どうすることもできないと嘆く。

汗が一筋、額から眉間に垂れたのを普段はあまり持ち歩かない  
がこの状況を予期して持つてきて置いたハンカチで乱暴にゴシゴシ  
拭う。

汗がなんとも鬱陶しい。

肩口が開いた通気性の抜群の改造制服のおかげで背中などに汗  
は何とかかかいていないがそれでもキツイ。

これから異性と会う予定の思春期で年頃の少女には一大問題で  
ある。

「もし私の目の前に犯人が現れたらブン殴ってやる……………」  
……………」

と、かなり可能性の低い事を考えながら足早の進み出す。

歩行速度を上げたのは、早くしないと汗まみれの自分を気にな  
る異性に見せたくないからである。

IS学園の設置地形が臨海部ともあり頬を撫でる風は湿ってお  
り、発汗の役に立ちそうにない。

苛立ちを歩くことに集中することで競歩並みのスピードで歩いたかいて目的地である寮部屋の一室に最初のダラけたスピードと合わせても1/3の時間でついた。

目の前の表札には『織斑一夏』『沙月茜雫』。

いきなりノックして入ることなどしない。

『策』を練らねば。

さて、ここからどうしようか。

鈴は犯人を追い詰めた刑事のように顎に手を当てて考える。

一人の想い人を訪ねるのにわざわざ訪ねた理由を考えなければならぬのが素直になれない『ツンデレ』の哀しい性だろう。

そもそも何故こんなところに鈴がいるかというと、今日は学生が楽しい楽しいひと時を満喫する休日。

そして、来週には一年生の一大イベントである『臨海学校』が計画されている。

臨海学校とは本来外部においてISの詳しい扱いを覚えるために校外特別実習期間なのだが、生徒にとっては一足早い修学旅行のようなものだ。

そこで、買い物に誘おうと思うのだがなかなかいい理由付けが思いつかない。

(ここはどう誘うべきかしら．．．．．たまたま  
買い物に行く人がいなかったから誘う．．．．．なんか友達の  
いない寂しい奴だとか思われそうで嫌ね．．．．．  
．．．．．ここは素直にあんたと買い物に行きたい．．．．．  
は、恥ずかしくてそんなこと言えない！．．．．．  
ううん、どうすれば．．．．．)

そんなことをプッシュと頭から知恵熱を出しながら悶々と考  
えていると．．．．．『沙月茜雫』

「あ。」

間抜けな声上がる。

そして、頭の中で警鐘が絶叫。

(こいつの目の前で一夏を誘うと絶対面倒なことになりそうね  
．．．．．)

そんなことを思う。

おそらくと言うより絶対、茜雫は鳳鈴音が織斑一夏を好いてい  
ることを知っている。

その上でいろいろ愉しんでいるからだ。

さらにはあのイタズラ大好きな沙月湊の(義理なので本当の姉  
弟ではないが)弟だ。

何をしでかすか想像しられない。

不安要素が爆発。

「……………」

初っ端から行き詰まってしまった。

本格的にどうしようか。

「あら？鈴さんこんなところでどうしたのかしら？」

唐突に背後からそんな気品の溢れる高い音程の声が聞こえてきた。

鈴が後ろをげんなりと振り向く。

「……………セシリア。」

「ひ、人を嫌そうに見るのはやめてくださる……………」

「…？」

「こんなくそ暑いんだから許しなさいよ。」

上品な佇まいを見て、自分の正反対のセシリアに溜め息をつく。

はいはい、今日もとてもとても美しいお嬢様っぷりですね。

鈴はうへらうと力なく笑った。

チラツと自分と正反対の胸部を見る。

ヨーロッパ人としてはやや小さいらしいが鈴からすれば、「どこが?」という具合だ。

こん畜生。

羨ましいな、おい。

是非トレードしてくれませんかねえ?

暑さという半田ごてのせいで思考回路がおかしな方に改修されてしまっている。

ヤバイヤバイ、と頭をブンブン振るとダブル馬の尻尾が上下左右と軽快に振られていく。

「で、あんたはこんなところで何やってんのよ?」

先ほど自分にされた質問をセシリアに叩き返す。

セシリアは特に気分を害した様子もなく正直に答える。

「私は一夏さんに用事が。」

「用事?」

「ええ、そうですね。」

と、言っやドアをノックする。



鈴が先ほどの行為するのにかなり思い悩んだというのに・・・

「こういう積極性のない自分が恨めしい。」

セシリアがノックすると、中から「鍵が開いてるからどうぞ」とと生気のない声が微かに聞こえた。

やっぱりいたか、と鈴は先ほどの予想がハズレていなかったと同時にあいつも相当この暑さに参ってるのね、と少し同情する。

「では失礼しますわ。」

鈴の考えていることなどお構いなしの室内に入り込んでいくセシリアを鈴は出遅れてなるもんかと自分も一緒に入室。

おそらくセシリアも一夏を買い物に誘おうとしているはず。

ならばこの勝負（？）、西部劇のガンマンの真剣勝負如き早撃ち並みの速度で先に誘わなければ。

出遅れないように鈴はセシリアの隣に素早く並んで玄関から生活空間へと繋がる短い廊下を進む。

トイレと浴室のドアを通り過ぎ、部屋全体が見渡せる位置に立って気づく。

「あれ、一夏は？」

肝心の一夏がない。

セシリアも確認するように辺りを一通り見渡すが部屋の持ち主である茜雫がベットに仰向けでだら〜んと日向ごっこする猫のように転がっている。

と、位置的に茜雫のと思われる机の傍に誰かがいた。

一夏の代わりにいたのが、

「って、なんで直刀がここにいるのよ。」

「いたら悪い？それにニルもいる。」

直刀が机から離れるように一歩下がると椅子に座っているニルが見えた。

鈴とセシリアの位置からは直刀が邪魔になって最初ニルがいたことに気がつかなかった。

机の上にはノート、ニルの細い砂糖菓子のような白い右手には白い機能美溢れたシャープペンシルが握られている。

ペン先に力が加わると芯が自動的に回転、書くたびにくるくる持ち替えなくても良く、持ち手に負担がかからないように改善され、長時間使用しても疲れない上に筆圧によって自動的に減った分だけ芯を出してくれる最新のタイプだ。

お値段は結構する。

何かの勉強でもしているのだろうか？

と言うより、そもそも学校に通っているのか疑問に思う。

鈴の疑問を汲み取るようにだらしなくベットに転がった茜雫が桜色の高級そつな扇子でゆらりゆらりと揺れるように扇ぎながら答える。

「日本語の読み書きの勉強中。これが出来なきゃ生活に不便だからね。」

「ふうん、なるほどね。で、あんたは手伝わないわけ？」

「さっきまでは二人で教えてたけど俺は今から諸用なので活力を充電中。ちなみに携帯端末のバッテリーも充電中。」

日本語……特に漢字の書かれたノートとにらめっこしているニルの隣脇にスタイリッシュなデザインをした黒に限りなく近い真紅の携帯端末が充電用コードに繋がれていた。

鈴は茜雫の言った『諸用』とはなんなのか気になったが、特に自分が入り込む話題ではないと判断して本題に話を戻す。

「一夏は？用があるんだけど。」

「二人揃って？」

鈴の質問に茜雫が起き上がりながら首を傾げる。

パタパタと扇子を扇ぐと風で前髪が僅かに浮く。

「そこではったり会っただけだけど、おそらく目的は一緒ね。」

鈴は苦々しく答える。

セシリアも同じような顔だ。

しかし、茜雫の放った答えが二人の表情を破壊する。

「一夏ならさつき出かけたよ。」

「え……………どこへ……………?」「」

「駅近くの繁華街に臨海学校の買い物だつてさ。」

凍りつく二人に茜雫はさらに爆弾を投げ込む。

「シャルロットと一緒に『デート』。」

「……………!!!!!!」

核爆弾を投下された二人は爆散。

投下したB・29は「あ、そろそろかな。」とかなんとかぼやくと手早く身支度を済ませ、さっさと出て行ってしまった。

直刀はニルも書き取りが終わるまでの時間つぶしとして茜雫の数冊しか入っていない本棚から抜き取った文庫本を二人を無視して読み、ニルは石像と化した鈴とセシリアを不思議そうに眺めていた。

数分後、校門から女らしさを殴り捨てたような形相で、凄まじいスピードで駆けていく鬼の姿が目撃された。

その時、校門でIS学園の中を伺うように立っていたワンピース姿で金に程近い銀髪の高校生ほどの少女はのちに語る。

「ツインテールの子、………後ろからパンツ丸見えでしたよ?」

と………

だあくめんどくせえ〜

休日の繁華街を一人の若い男がだらだらとした足取りで歩く。

ファッション雑誌からそのまま抜き出したようなオリジナリテイのチャラチャラした格好。

見るからに軽薄そうな今風の若者だ。

若い男は今、バイト先へと通勤中。

だらだらふらふらと歩いていると、途中老婆と盛大にぶつかった。

老婆は勢いでそのまま尻餅をつくように倒れた。

若い男は老婆を一睨みすると、老婆は怯えたように謝ると悪い足腰に鞭を打つように足早に去っていく。

近くで数人の学生がこちらを見ていたが、若い男が邪険な視線を振りまくと蜘蛛の子を散らすように去っていく。

つまらない益のないことで自分が怪我をってしまったてはそんな

と言つものだ。

他人のことは無干渉。

それが今の風潮。

若い男は今、イラついていた。

まずは今の世界。

安っぽい長時間労働のバイトのためにわざわざ電車の距離を移動しなければならぬ。

それは現在の女尊男卑の世界のせいで割りのいいバイトはすべて女が取っており、男は残った不人気の余り物ばかりだ。

たかだか女がISとか何とかを乗れるというだけで偉そうなのが気に入らない。

次に今の現状。

何やらどこぞのバカのせいで交通機関が全面的に死んでいる。

公共のバス、電車はアウト。

道路は車で溢れかえっており、排気熱のせいでこの殺人的な暑さに拍車をかけている。

歩道にも沢山の人間で暑苦しい上に安全上の理由から自転車は禁止。

お陰で電車を使う距離を歩く羽目に。

交通整備の警官の笛の音が耳に障る。

夏休みの遊び金を蓄えるためのバイトは来週で終わるがシステム関係が一からショートしているため、復旧開始は明日になるそうだ。

少なくとも2、3日は今の状況が続くということだ。

何もかもが上手くいかない。

若い男は好い加減思うように進めない人混みにうんざりしてきて路地裏に進路を変える。

路地裏はジメツとしており汚かったが、人通りが少なく日陰でひんやりとしていた。

「あゝなんかいいバイトはねえかなあゝ、一気に稼げそうないバイト。」

「ふうん、じゃあくれてやるうか、いい仕事。」

「……………ッ!」

ギョツとして後ろを振り向くとそこには 少し痩せ気味な身体に涼しげなサマースーツのようなノーネクタイを完璧に着こなしている青年が立っていた。



見た目は高校生ほど。

若い男は後ろにたじろぎながら上ずった震える声押し殺しながら尋ねる。

「な、なんだよ……………」

若い男は自分より年下と思われる青年に警戒心を露わにする。

静かで人通りの少ない路地裏を歩いていたというのに全く気がつかなかった。

(なんだコイツ……………!)

なんだか言い表せない雰囲気を感じられる。

まるで暗闇で幽鬼的な鬼火を見ている気分だ。

サングラスをしており表情が読めないのがさらに薄気味悪い。

と、ここでさっきの言葉が頭によぎる。

「……………いや、まて、今いい仕事くれるって言ったか？」

あんな割りに合わない重労働なんて御免だ。

これで一気の稼げるのならあんなバイトなど辞めてやる。

それを聞くとサングラスの青年は熱で裂けたチーズのように口の端を持ち上げて嗤う。

「ああ、とても楽な仕事だ。」

若い男はその唾いに背筋が凍りつくような悪寒を感じた。

とある男女を付け回す二人組が。

「ねえ、アレ．．．．．手え繋いでない？」

「繋いでますわね、確かに、しっかりと。」

怪しい不審者発見。

ここに正義感が溢れるどころかほこはじ進んでいる聖人がいたならば間違いない110番をプッシュしてこう告げるだろう。

通路の中心に設けられた観察植物の葉を掻き分けるようにして覗き（本人たちにとっては尾行）をしている不審者二人組恋するこ女．．．

……鈴とセシリアは目の前の光景にそれぞれ確認とる。

二人の視線の先には一夏とシャルロットがいる。

問題はそこではない（本当は大問題なのだが）、二人の手である。

しっかりとそれぞれを握り合っていた。

恋人繋ぎではないが他から見れば、充分恋人に見える。

手を繋いだ時にシャルロットから手を差し出したため、おそらく一夏は『人混みではぐれないように』程度の考えなのが一夏の鈍感さに嬉しくもあり哀しいところで複雑な気分になるものだ。

「よしっ、殺そう。」

いきなり物騒なことを言い出す不審者に通行人の一人が携帯端末取り出して通報するべきかしないべきか迷っている。

そんな周りの状況に気がつかない不審者二人組にとある人物がその存在に気がつく。

「む、……………鈴とセシリアではないか。」

「……………え、ラウラさん!？」

「ちょ、セシリア、声がデカいわよ!！」

「そう言うお前もな。」

しまった口を手で抑えるセシリアと一夏達に気づかれていないか慌てて確認する鈴のすぐ近くに立っていたのは輝く銀髪を靡かせたラウラだった。

「……………あんたはここで何やってんのよ？」

一夏達を確認した鈴は気づかれていないことにホッと息を吐くと身を隠すように身体をかがめているラウラに少し警戒する。

出会いが最悪だっただけあって未だ抵抗があるのは仕方がないのかもしれない。

ラウラは警戒する鈴とセシリアを気にした様子もなく見せつけるように右手を突き出す。

「これだ。」

「これ……………?」

「ビデオカメラ……………ですわよね?」

突き出されたラウラの手には掌サイズのコンパクトでメタリックな輝きをもつ深緑色の電子機器が収められていた。

小柄のラウラの手に収まるほどの大きさだが多機能、高画質、望遠、長時間バッテリー搭載で特に強化プラスチックを使用することによって耐久性がその他電子機器より群を抜いているビデオカメラだ。

二年前に発売されたが高すぎる性能から余りの値段と無駄だと感じるぐらいの性能により少数生産後、生産中止となった不遇の高性能カメラだ。

その稀少さからネットオークションで売れば年収に匹敵する値段となると言われる。

ラウラの手に行っているカメラはボタンこそ使用によって多少摩耗しているが新品のような輝きを持っていた。

なぜラウラがこんな色物カメラを持っているのだろうか？

こんなもの物好きしか買わないしラウラがそんな部類に入るとは思えなかった。

「で、これが何なのよ……………?」

「なんだ分からないのか？」

「とりあえずそのドヤ顔やめなさい。」

ラウラは100点満点を自慢する子供のように言う。

「我が嫁から『一夏とシャルロットのデートを尾行して写してきてくれ』と頼まれてな、どうせ暇だったから受けたのだ。」

「ああ……………なるほどね……………」

分かるか!?!、と激しくツッコミたくなったがなんかラウラを

見ているとツツコムのも野暮だと思えてくるのはなぜだろう。

「というか、茜雲さんに・・・・・・・・すっぴん毒されてしまいましたわね。」

セシリアも悟り切ったような表情をする。

最初は『非道で高飛車な人形』という認識から『残念で天然な美少女』という認識に変わりつつある。

妙に常識がないのだ。

一夏とシャルロットが移動したため、三人は人混みに紛れるように隠れながら移動する。

一夏とシャルロットの後姿を人混みを縫うように撮影しながらラウラが尋ねる。

「お前らは何をしている?」

「何をつて・・・・・・・・」

「ええつと、そのですね・・・・・・・・」

この質問に二人は口籠る。

何となく言い辛い。

「というか、特に追いかける以外特に目的はないし、先ほどの『一夏の抹殺』を本当に実行するわけにはいかない。」

鈴は重要議題を決める議員のようじに、

「こゝこのまま尾行して様子を見るのよ……………」

「まずは敵情視察ですわ……………」

「では、私も交ざるとしよう。」

結局目的は尾行と言う形で決まり、ここに不審者三トリオが結成された。

さらに一人加わったことにより一層周りの痛々しい目が増えたことには気がつかない。





## 四十六話 不審者発見（後書き）

作者、現在定期テスト期間真っ盛り。  
成績が意外とヤバイので当分更新は無理そうです。  
ごめんなさい。

PS

友人に紹介してもらったのですがYouTubeで『ドラえもんエターナル』という動画が面白かったですよ？

四十七話 拾い物（前書き）

遅くなつてすみませんでした。

テストがやばくてやばくて執筆どころではなくて……………

……………

## 四十七話 拾い物

「ねえ、お母さん。あれ、なあに？」

「しっ、見ちゃいけません！」

とあるモノをその小さな指で指差す幼い子供を母親が叱るように引つ張っていく。

一般的な漫画やアニメのお約束のギャグシーンの周囲で行われるやり取り。

そんなリアルではなんとも非日常的な光景が生まれた休日の駅周辺の繁華街。

七月直前とは言え季節的にはすでに夏となっているこの日。

街全体にも及ぶサイバーテロによって公共の交通機関や信号機の停止によりアリの行列のように渋滞する車の排気熱や汗水垂らしで交通整備に勤しむ警察官の大声やそれを掻き消す笛の音。

照り付ける太陽のサンサンとしたサマープレゼントを嫌々頂戴しさらに拍車をかけていた。

ヒートアイランド現象が確実に起こっているでだろうアスファルトの路面上ではすでに陽炎がゆらりゆらりと幽霊のように揺らめいていた。

こんな暑い日だということになかなかの賑わいを見せる繁華街の一角で奇妙な空間ができていた。

混んでいるとも空いているとも言えない中間あたりの人混みでそこだけぽっかりと人間がいない場所があった。

たしかに休日とはいえこの暑さのせいででいている人数が普段より少ないのだが、そこだけぽっかりと無人の空間が出来上がっているのがわかる。

いや、これは少々誤りだ。

異質な不審者三人を除いて無人の空間が出来上がっていた。

その無人の空間 . . . . . 繁華街の街路樹にはトーテムポールが。

道行く人が皆、足早に通り過ぎていく。

「ふっ、どうやら私、視力が落ちたみたいね。幻覚が見えるわ  
.....」

「あそこで初々しく手を繋いでいるのはどこのどなたかしら  
.....?」

「織斑一夏に決まっているだろうが。」

「ええ、そうよね.....やっぱり見間違いで幻覚で  
もなんでもないわよね.....!!!!!!」

ふっふつと怒りのボルテージを急上昇させた鈴たち三人が頭  
みを隠れている喫茶店の看板から突き出し、トータルポールを作り  
出していた。

鈴のボルテージ上昇と共に木製のおしゃれな看板がミシッと  
大きく歪み亀裂が走り、喫茶店の店長がヒイツ！と経済状況と  
その細腕から生まれた握力に悲鳴を上げる。

ただでさえ、突如不審者三人が現れ、よりによって店の入り口

を占拠して不審なドス黒いオーラを放つトーテムポールとなつてい  
るせいで店の客が全員明らかに逃げるように退店した上にさっきか  
ら全く客が入つてこない状況。

休日でこんな暑い日なので、休憩所として喫茶店を利用する客  
を狙っていた店長にとってはそちらにも悲鳴を上げたいところだっ  
た。

しかし、あんな「近づいたらクロス」的なオーラを滲み出して  
いる不審者三人に消えてくれなんて見るからに気の弱い店長が言え  
るはずもなく、店の入り口を避けるようにして往来する人々を涙な  
がら見つめ、予想される被害額を算出するしかなかったのだった。

そんな店長を尻目に自分たちが迷惑がられていることも避けら  
れていることにも気がつかない不審者三人は十数m先にいる傍目か  
ら見て恋人に見える男女をターゲットロックしていた。

トーテムポール中段のポジションの鈴が悔しげに、

「くっ、まさかシャルロットが一番の敵だったとはね . . . . .  
. . . . .人畜無害の顔に騙されたわね . . . . .!」

「それにしても、一夏さんは女性と手まで繋いでいるというの  
に全然意識していませんわね . . . . . 何と言いますか .  
. . . . .シャルロットさんがとても可哀想に思えますわ .  
. . . . .」

セシリアが十数m前方に何やら落ち着かない様子のシャルロッ  
トへと同情の視線を向ける。

おそらくシャルロットは心臓が跳ね上がりそうなイベントだと言うのに、対する一夏は特に変わった様子もなくまるで日常茶飯事をしているような素知らぬ顔をしているのだから救われぬ。

トーテムポール上段のセシリアの言葉に鈴も、ああ、と複雑な顔をする。

「……………それが嬉しい誤算であるけど、ハードルの高さを実感する元凶よね……………」

先ほどと打って変わってその表情に影がさす。

自分の時もそうなのだろうか……………

だとしたら頭が痛い。

あの男は何をやったら意識してくれるのだろうか。

抱きつく？キス？

最終的にはこちらから押し倒さない限り無理なのか？

いつぞ告白？

ここまで考えて鈴は顔を真っ赤にして自分の考えを蹴り飛ばす。

それができたら苦労しない。

それに押し倒すなんて……………

鈴が織斑一夏という鈍感の壁に頭を抱える。

「織斑一夏なのだから仕方がないだろう。」

悟り切った賢者のようなトーテムポール下段のラウラに鈴は、  
あんたも似たような状態でしょうが、と内心ツツコム。

ここで、ふと疑問が……………

鈴は思案げに眉を寄せる。

「そういえば……………当の茜霽ってなにしてるのよ？」

ラウラに高性能ビデオカメラ……………HSC…?型を渡した茜霽自身は何をしているのだろうか。

ラウラは一旦ビデオ撮影を止めながら物陰に引っ込む。

鈴とセシリアもトーテムポールを解いた。

ラウラは顎に手を当て、

「嫁なら何やら用事があるらしいのだが……………」

「その用事が何なのか訊いてんのよ。」

「知らん。」



「知らんって……あなた、あいつに利用されてるだけじゃないの……?」

流石に言い過ぎかもしれないが何を考えているのか分からない茜雫を考えるとそんなことも思ってしまう。

鈴の言葉にラウラはムツと不機嫌な面持ちで言い返す。

「そんなわけないだろう。私と嫁との間には……」

……

「あゝはいはい、何だか長くなりそうだからそこまでいいわよ。」

「なっ、お前……!」

掌をひらひらと振って話を強制終了させる鈴にラウラはムキになって喰いかかるとする。

しかし、鈴は何だか面倒臭いので取り合わない。

一人会話に参加せず、探偵のように腕を組み、顎に手を添えて思案していたセシリアが、

「もしかして、……どなたか女性と逢引き……という可能性もありますわね……!」

「……ッ!」

!……!」

セシリアの推論に残りの二人……特にラウラには雷に打たれたような衝撃が走った。

「い、いやそんなはず……. . . . .しかし……. . . . .  
. . . . .いやでも……. . . . .え……. . . . .  
. . . . .そんな……. . . . .  
. . . . .」

極寒に放り込まれたようにわなわなと震えだし、糸がきれたようにだらんと腕の力が抜けた途端、HSC-?型をぽろつと取り落とす。

危ういところで何とか持ち直すが、目の焦点が合っていない。

目を見開き、魂の抜けた人形のようになっている。

原因(?)のセシリアが壊れものを扱うように慎重に尋ねる。

「だ、大丈夫ですの……. . . . .ラウラさん?」

セシリアの言葉にまったく聞こえないかのように、メトロノームのように左右に揺れてフリーズしていたラウラがハッと我に返った。

「ふ、ふん!我が嫁に限って他所の女に現を抜かすような事があるわけなからう!」

「めちやくちや動揺してたじゃないの、あんた……. . . . .  
. . . . .」

その自身はどこから来るんだ、と鈴とセシリアが呆れる。

腕を組んで虚勢を張っていたラウラがはたと気づく。

その高いとは言い難い身長を懸命に伸ばして辺りを見渡し出した。

そんなラウラを二人は訝しげに見つめ、

「何やってんのよ、ラウラ。」

「どこに行った……………」

「何が？」

「織斑一夏だ。」

あ……………  
「……………」

そう言われて鈴とセシリアが間抜けな声を上げてラウラの習って辺りを見渡す。

が、想い人（一人にとっては追尾目標）とシャルロットの姿がどこにもいない。

まあ、あれだけ目を離していたら見失うのも当たり前なのかもしれない。

しかし、三人にとっては死活問題。

鈴とセシリアにとってはシャルロットに出し抜かれないように機を見て乱入するつもりだったし、ラウラはこれに失敗したら茜雲を失望させるかもしてないと慌て出す。

先ほどの会話の後なので尚更だ。

「ど、どうすんのよ、ちゃんと見ときなさいよ、セシリア!？」

「わたくしのせいですの!そういう鈴さんが無駄な会話をラウラさんに振るから……」

「何ですって!!」

「喧嘩している暇はないぞ!」

取り敢えず、三人は一夏とシャルロットが進んだと思われる方向へと人の波をぬうように急ぎ足で進んでいく。

数分後、

「み、見失った……」

「完敗ですわ……」

「わ、私はどうすれば……………」

結局、完全に見失ってしまった三人はズーンと落ち込んでいた。特にラウラの落ち込みようが酷い。

本気で茜雫に見捨てられるとか思っているのだろう、と鈴は勝手に予想。

鈴からしてみればあいつがいちいちそんな失敗でどうこう言うような性格には見えない。

おそらく、落ち込んだラウラがそのままカメラを返しても礼を言っただけだろう。

にしても……………」

「今からどうするか考えませんと……………」

「諦めて黙って帰る……………」

「何を言う、諦めたらそこで試合終了だぞ。」

「そう言うの疎そうなあんたがよく知ってたわね……………」  
「……………」

大方、茜雫から勧められたのだろう。

そういえば、茜雫の姉、沙月湊の自室は漫画倉庫と勘違いする

ほどいろいろなジャンルが揃っている。

無論、青少年少女が見てもよろしい健全なもののみ。

主にアクション系が多いらしい。

日本人が中学生でエアライフル競技を極めるくらいなのだから趣向がそっちに向いているのだろう。

そんな会話をしていても何をするのか結局見つからず取り敢えず適当に歩き回ることに。

ばったりと発見することも可能性として棄て切れないからだ。

しかし、そんな願いが叶うはずもなく、数分歩いても何も変わらないという事実を知らしめられるだけだった。

「むう、どこに行っただ。」

「見つかりませんわね。」

「.....」

この暑さと人混み、さらに目標が発見できないという事実が重なり三人の気力体力共に大きく削がれて行った。

あまりの脱力ぶりにすぐ近くを通り過ぎる通行人が思わず注目するが三人はまったく気がつかなかった。

うだった鈴の虚ろな目が人混みの隙間に休憩用のベンチの端を捉える。

「あゝもう、あつつい！一旦休憩するわよ！」

「り、鈴さん!？」

鈴はベンチ目掛けて川の流れのような人混みを掻き分けるように横断。

慌ててセシリアが追いかけて、ラウラもそれについて行く。

するすると素早くラウラが進むのに対し、セシリアは人にぶつかったり、止まったりと少しおぼつかない。

一方、やっとのことでベンチの近くに辿り着いた鈴は疲れたく、とばかりにろくにベンチを確認せずにベンチに勢いよく倒れるように座る。

が、

むぎぬ 「ぶぎぬぞ。」

「わひゃあああああ!?!?!？」

突然お尻に感じた何か柔らかい暖かい物を押しつぶす感触に鈴は自分でも面白い叫び声を上げて思いっきり跳ね上がる。

しかも、「ぶぎや。」

たしかにそんな声が聞こえた。

猫でもいたのか!?

それとも犬!?

どちらにせよ、いくら体重の軽い鈴とはいえ人一人の全体重を犬猫が耐えられるはずがない。

まさか、殺した?

だとしたら、とんでもないことだ。

鈴は少し泣きそうになった。

鈴は特に気にするものではありませんようにと心の中で願いながら、慌ててベンチを確認するべく振り返って見下ろした。

そして、フリーズ。

「鈴さん!どうかしましたの!?!」

「面白い声が聞こえたぞ?」

遅れてセシリアとラウラが駆け寄ってきた。



二人がまず見たにはベンチを見て固まった鈴。

「ん？どうかしたのか？」

「あ、ラウラ。いや、なんていうか……………ど  
うしよう……………」

「どうしよう？」

ラウラに声をかけると鈴は困ったような表情をしていた。

どうしよう、という鈴の視線につられてセシリアとラウラがそ  
の視線を追うと、視線の先にはベンチ。

そのベンチの上には、

一人の少女が倒れていた。

「鈴、お前……………殺したのか……………？」

「鈴さん……………」

何だかとても失礼な二人。

勝手に殺人罪を適用され、犯人確定となった鈴が肩を怒らせて  
声を上げる。

「違うわよ！ていうか、この子死んでないし！セシリア！人を

批判した目で見るな!!」

「処分は手伝わんぞ、共犯になる。」

「だから違つつうの!!確かにあたしが押しつぶしたかもしれないけど違つ!!」

ムキになって怒鳴る鈴に周りの視線が集まり、ラウラは冗談をここまでにしておくとベンチを向き直る。

むう、と唸り、

「寝てる……のか？」

「なんか………顔色が悪くありません？」

セシリアが心配そうにベンチで横になっている少女の顔を覗き込む。

肩より少し長めの金色の髪を一滴垂らしたような輝きを持つ色素の薄い銀髪が顔にかかっておりよくは見えないが顔色が少し悪い。

「まさか、日射病とかないでしょうねえ。」

この状況から考えてそれが一番高い可能性だろう。

鈴は周りを見渡す。

数えるのが億劫になるほどの人の波。

この中で一人ぐらいこの少女を気にかける人間がいても良さそうなのだが、そんなことにいちいち嘆いていても仕方が無い。

このままではなんかいろいろと危なそうだ。

鈴は少女に近寄ると優しく揺さぶって声をかける。

「ちょっと、あんた、どうしたのよ？」

もし相手が病人だったら少し乱暴かもしれないが、規則正しい寝息からして特に酷くはなさそうだ。

セシリアはもっと安静にした方がと言っていたが、

「……………うう……………」

少女が呻き声を上げた。

「目を覚ましたようだな。」

「あんた、どうかしたの？」

鈴は引き続き声をかける。

少女の唇が微かに動く。

「……………なか……………す……………た……………」

「

「は？何て言ったのよ？」

少女はおもむろに涙を流すと、

「お腹……………空いたです。」

「……………」  
「……………」  
「……………」

何だそりゃ。

鈴は厄介ごとを拾ってしまったかもしれないと頭を抱えた。

「いやあ〜、すごくすごく助かりました。すみません、助けて貰った上に奢っていただいて。」

鈴たち三人の目の前で少し大きめにサンドイッチを口にほうばる少女がいた。

あれから鈴たち三人は近くにあった喫茶店にこの少女を連れ込むとお腹が減っているということで、サンドイッチを頼んだ。

ついでに、早めの昼食を取ろうと自分たちも何か頼むことに。

そして現在に至る。

結構なボリュームのあるサンドイッチを半分ほど食べ、グラスの水を飲んでいる少女に鈴が尋ねる。

「で、なんであんなところに倒れてたのよ。女尊男卑の世の中とはいえ危ないわよ?」

「ええ、すみません。少し用事があって最近ここに来たんですけど何か電車とかバスとか止まっちゃってるし、手持ちのお金落としちゃて。」

少女は申し訳なさそうに苦笑いを浮かべながらお手拭きで口の周りについたサンドイッチの食べカスを拭う。

鈴の音みたいな声をするな、と思いながら鈴は少女の不幸っぷりに同情する。

最近来たのなら地理にも詳しくないはずだ。

しかも、お金まで落とされたのなら最悪だ。

散々歩き回ったに違いない。

飲んでいたコーヒートをソーサーを戻したラウラが少女を観察するように眺めながら、

「ふう〜ん、ドジなものだな。」

「ぐっ、昔からよく言われます。」

そう言っって少女は少し傷ついたように、昔を思い出すように視線を泳がせる。

「……………そういえば、あんたの名前なに？」

何だか哀しそうな表情をする少女に気分の転換を兼ねて鈴が尋ねる。

と、少女はぱつと表情を戻し、胸に手を当て、

「あ、私『エレナ・ラムシュタイナー』って言います。」

エレナに自己紹介された三人はそれぞれ自己紹介を返す。

と、エレナが鈴をジッと見て、

「……………校門でパン

ツ丸見えだった人……………」

「え……………なんか言った？」

エレナがボソツと言ったため、聞き取れず、鈴が訊き返すとエレナは顔の前で手をぶんぶんと振ってなんでもないと全力否定。

「????？」

あまりの強い否定に追求を諦める鈴の視線を逃れるように、エレナは顔を背ける。

会話が止まってしまったのでセシリアは話題を絞り出す。

「エレナさんはなぜこの街にいらっしやいますの？見たところ外国の方ですけど。」

目の前のエレナは明らかに日本人ではない。

この日本にいるのなら何かしら理由があるはずだ。

エレナは数秒考えると、

「ええと、一応私、ロシア人？です。」

「……………なぜ疑問系？」

「なんかあんまりそのところはつきりしなくて、ロシアでも隅の方の田舎で生まれたんです。」

「それで、どのような用事で日本に。」

「……………ええと、仕事です。」

「働いてらっしゃるの?」

「え、あんたいくつよ?」

鈴、セシリア、ラウラは驚く。

「私、今年で18です。」

「………………………………………」

下から物を言うからもっと年齢が下かと思った。

三人が改めれ目の前の少女を見る。

身長はセシリアと同じほど。

顔は可愛いとも綺麗とも言うそうな不思議な顔立ちをしている。

肩より少し長めの金色の髪を一滴垂らしたような輝きを持つ色

素の薄い銀髪を肩口まで伸ばしている。

眼は水晶のように澄んだ輝きのある銀眼。

繊細な印象を受けるが眼には強い光があった。



何となく見つめていたくなる魅力があった。

薄手のワンピースが少女の可憐さをよく引き出しており、よく似あっている。

こうして見直してみると自分たちとは違う落ち着いた雰囲気がある。

年上と納得できるほど。

と、三人はここで妙な既視感を覚える。

誰かと似たような感覚だ。

つい、と三人の目が胸元に行く。

そこには薄手のワンピースを強引に隆起させる双丘が。

三人はハイパーセンサーでこっそり精密スキャン。

結果はセシリアより少し大きいぐらいと判明。

セシリアは少し落ち込み、鈴とラウラは盛大に舌打ち。

エレナが困惑した顔をするので八つ当たりはいらないと自粛。

何でもないと安心させる。

しかし、悔しい。

見つめられて恥ずかしくなったのか顔を赤らめて話題をズラす。

「そ、そういえば皆さんIS学園の生徒なんですよ？中国、イギリス、ドイツではやっぱりIS関連が盛んなんですか？」

「まあ、今世界の中心はISだから……ら……. . . . .  
って何で中国、イギリス、ドイツ限定なのよ？」

名前やIS学園に通っていると伝えたが出身国は言っていないかったはずだ。

聞き返されたエレナはああ、と頷いて答える。

「鳳さんとボーデビッツヒさんは名前の特徴ですね。中国、ドイツと結構限定されていますから。とても分かりやすいです。」

「セシリアはどうなんだ？少なくともアメリカが最も近い雰囲気を持っていると思うが？」

エレナはクスリと微笑って答える。

嫌味のない綺麗な笑みだった。

「確かに見分け辛いですけど、話し方ですね。イギリス人はヨーロッパでも珍しいあまり口や顎を動かさない『凍結話法』を使いますからね。アメリカ人だったら逆に口全体を使った話し方になりますから。」

三人は驚く。

まさかこんな方法で分かってしまうとは . . . . .

ここで先ほどの既視感が分かった。

この感じ。

何となく茜雫と似たような感覚だ。

「あと手帳です。」

「手帳 . . . . . ですか?」

「さつき何か日程を書き込んでいましたけど、イギリス人は日、年の順で書きます。アメリカならこれも逆ですね。」

「 . . . . .」

「 . . . . .」

何の言えない。

何だか完敗された気分だ。

エレナは紅茶を一口飲むと、

「皆さんは今日は何の用事で?」

途端に鈴とセシリアは慌てる。

まさか、「想い人を尾行してました」なんて言えない。

どうしようかと、何か良い言い逃れはないかと思っていると、

「尾行をしていたのだ。」

「び……………尾行……………ですか？」

「……………」

無い胸を張っているラウラに鈴とセシリアは沈黙。

エレナがわけがわからないと困惑。

そりゃそうだ。

いきなりそんな非日常的な行動をしていると言われても理解でき  
るはずがない。

「ええと……………実は探偵さん？」

なかなかこの娘も非凡な発想を口にする。

「なんで尾行を……………?」

「うむ、我が『嫁』に頼まれたのだ。」

「嫁……………ですか……………?」

「そうだ。」

自信満々に言い切るラウラにエレナは必死に頭を働かして最善の意味を解読しようとしているが、無理だろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・失礼ですけど・・・・・・・・・・・・・・・・女性・・・・・・・・・・・・・・・・ですよね？あ、偏見とかはないですよ、一応確認です。」

「見ての通り女だ。」

断言されて納得しかけているエレナに鈴が助け舟を出す。

「ちなみに、ラウラと会話する時には『嫁』を『夫』に変換した方がいいわよ。」

「え・・・・・・・・・・ああ、そういうことですか。」

エレナはホツとした様子だったが、

「ん？・・・・・・・・・・もしかして結婚してるいるんですか！？」

当然そちらにも気がつく。

鈴はラウラの非常識は面倒臭いなあと思った。

いろんな誤解を招く。

「いいや、私はまだ結婚していないぞ。」

「……………ああ、そうですね。ボー  
デビッツさんについて何となく理解できました。」

「……………それは何よりですわ。」

「む、何の話だ？」

おそらくエレナの中ではラウラは日本語に関してまだ勉強中、  
と完結されたのだろう。

もしくは思い違いが激しいと。

「でも、『夫』って誰をです？」

「ん？ああ、『沙月茜雫』のことだ。」

鈴はエレナの二杯目の紅茶が注がれたティーカップを持つ指が  
ピクリと反応するのが分かった。

何かあったのだろうか？

エレナは数瞬、表情を消して迷うように、

「……………沙月茜雫ってどんな人なんです  
か？」

そう、尋ねてきた。

「気になりますの？」

「まあ、ほら、織斑一夏と違って沙月茜雫についてはネットとかでも何にも分からないんですよ。」

エレナは微笑みながらいうがどこかきこちなかった。

鈴はそれが気になったが、真面目に質問に答える。

「どんなつて……どうだろ。」

「え、何ですかその微妙な反応。」

「私にも一概にお答えできませんわね……あえていうなら、分からない、ですかしら。」

「それ……答えになっていませんよね……  
……というか、印象聞いて分からないって影が薄いのですか？」

「そうじゃないんだけど……自分のことを全然明かさないので？一夏や箒でも詳しいこと知ってるのかわかないし。なんか問題が起きても結局自分で勝手に解決するし。」

「……」

話を聞いたエレナは何か深く考えていた。

まるで選択を迷っているようだった。

おもむろに、エレナは自称『夫』のラウラに向き直る。

そして少しの間、言おうか言わないか迷ったあと思い切ったように、

「……………ボーデビィ

ッピさんって沙月茜雫と付き合っているんですか？」

「ふふふ、私と茜雫とには……………」

「付き合っていないわよ。」

「え、本当ですか!」

「待て、鈴!何を言う、ていうか何で嬉しそうな反応をする、お前は!」

「結婚していないのは確かですわね。」

「なに……………ふん、一夏にまともにアプローチにできない奴らが大口を叩く。だから、見失うのだ。まるで未来を暗示しているようだな。」

「ラウラ、何ですって!」

「いくらラウラさんでも言い過ぎですわ!」

「み、皆さん落ち着いて……………」

大声で喧しく騒ぐ三人に喫茶店の店員が眉を寄せ、エレナがそれを見てどうにか止めようとあたふたする。



「ここで、エレナがあ、と声を漏らす。

「さつき織斑一夏を見ましたよ？」

「「「え？」「」」

三人が一斉に争いを辞める。

そして、食いかかる。

「どこで見ましたの!？」

「言いなさい!！」

肩をガクガクと激しく揺さぶられてエレナは食べたサンドイッチを吐きそうになる。

やっとのことでラウラに止められた時には吐く寸前だった。

尊厳を失いかけたエレナは息絶え絶えで答えた。

どうやら、偶然すれ違った際にこの近くのデパートに行くと予定を話していたのを偶然聞いたらしい。

「はい、これ代金!!残りはあげるから!!」

そう言って野口を三人をテーブルに叩きつけると風のように去って行った。

一人取り残されたエレナは、

「あ、全額払っても余る。 . . . . . パフエ  
頼もつかな。」

意外としたたかなエレナだった。

## 四十七話 拾い物（後書き）

全然進まないすみません

これからは今まで通りの更新スピードに戻るので見捨てないでください  
.....;

感想よろしくお願いします

何でも構いません

四十八話

Who's you?

(前書き)

遅れて申し訳ない

そして評価するなり感想をくれるなり何か反応を下さい。

ただ投稿しているだけで何と言うか.....

どうしよう……………。

IS学園の学生寮と学園外へと続く道に隣接する建物の影で一人の少女が悶々と頭を悩ませていた。

その少女の内向的な性格を表すかのように髪が内側に跳ねている。

そのインドア系の少女が屋外の、バカみたいな暑さの元凶であるお天道様の下で頭を抱える。

迷い過ぎて知恵熱が頭から出てしまいそう。

このあり得ない暑さも合間ってあまり運動が得意ではない少女は少し眩暈を覚え、頭が少しぼんやりする。

遠くでは早くも蝉が鳴き、暑さと共に近年の異常気象という言葉  
葉を思い知らせる。

しかし、少女は気にしない、気にならない。

そんな事よりも目の前のことが気になってしょうがない。

視線を落としたり上げたり、物陰から出たり引つ込んだりと繰  
り替えしていた。

たまに少女を見かけた他の女子生徒がそんなところで何をやっ  
ているのかと怪訝な視線を向けるがその少女は気がつかない。

なぜ少女がこのような怪しい行動をしているかというと、物陰  
に隠れた少女の十数m先にいる一人の少女が原因と言えるだろう。

その外向的な性格を表すかのように髪が外に跳ねている少女。

自分と正反対で完璧で憧れであって、絶対に超えられないと  
痛感させられる大きな壁。

自分が知っている限り絶対的な存在。

そんな人物が.....

い.....(なんだろう.....そわそわしてて落ち着きがな  
い.....)

見かけたのは偶然だった。

その人物を敬遠している少女にとって寮のエントランスから外を歩く姿を見た瞬間、無意識に影に隠れた。

が、少しだけその姿を見たとき、何だか行動に落ち着きがないのに気がついた。

何となく気になって、忍足で近寄ってしまった。

普段の彼女からは想像出来ない不安定な姿からだ。

少し尾行して気がつく。

明らかに何かに動揺した感じだ。

まったくの素人でストーキングスキルなど持っていない自分の接近に気が付く素振りがない。

物陰から顔を半分だけ突き出して、睨むように目を細めて対象をよく観察する。

額から微量の汗が玉を結び、流れて目に滲みる。

浮っっている。

そう物陰から覗く少女には見えた。

さつきから何かと前髪を弄ったり全体を整えたりと忙しい。

しかも、服装こそ制服だが普段あまり使わない……シンブルだが意外と手の込んだおしゃれなシヨルダーバッグを肩に下げている。

気になる……………。

あまりそう言った着飾る物を身に付けない『あの人』がおめかし……………。

何が起きた……………!?

そんな自分に選択できる選択肢として上げられるのが、

自身に芽生えた探究心に従って尾行

『あの人』のことなんて関係ないと諦める

の二択。

「どうしよう……………」

隠れているコンクリートの建物を掴む手が汗ばむ。

つうつと、汗が一筋頬を伝う。

と、悩む彼女の目の先で対象というべき少女が微笑んでいるのが分かった。

それはニヤけに近かった。



普段完璧な彼女が見せない、注ぎすぎた杯から水が少量零れた  
ような、そんなデレツとした無防備な表情。

少女が隠れていた物陰から前へ自分の足を踏み出した。

ストーカーへの一步を……………

#####

駅周辺で最も大きく賑わっているデパートでは休日ともあって  
見ていて飽きるほどのたくさんの人間でこった返していた。

国民の休日では日頃の仕事を忘れるのは皆の特権である。

とまあ、それでは社会が回らないので例外というのも存在する  
が、この三人にとっては皆の特権が適用されている。



本人のサボり癖と好きなものにしか向かない集中力と相乗反応を起こして仕事が千冬に回ってくるのだ。

もし、湊が『本気』で仕事に取り掛かれれば3、4日で半年の仕事が片付くというのに……………

東とは違った『天才』が成せることだ。

「だから、お礼に缶コーヒーを二つ奢ったじゃん。それで許してよ。ね。」

「……………明らかに本来私の仕事量の1.4倍は働いたと言うのに240円分の働きしかないとは、目頭が熱くなるな。」

千冬は頭痛を感じてこめかみを指先でぐりぐりと揉みほぐす。

隣でこんなに頑張ってるのに私たちの給料もつと増やして欲しいよねえ、などとどっかの誰かに文句言っている親友に対して千冬は内心、お前の場合は減らした方がいいな、とツツコンでおく。

言葉には出さない。

何故なら、隣のバカは理解できないから。

さて、なぜこの忙しい時には教師三人がデパートに来ているかと……

「んあぁ、思ったんだけど……………臨海学校のために水着なんて買わなくてよくない？面倒臭いし。」

何を言っているんだ、この人は！

と、女性らしからぬ発言に真耶がいざという時に頼りになって尊敬できるダメ先輩を叱る。

「ダメですよ、沙月先輩！夏ですよ！？海ですよ！？泳ぐんですよ！？女性ならちゃんと水着を買わなきゃ！沙月先輩は変なところで無頓着過ぎるんです！化粧ぐらいちゃんとして下さい！」

「ええ、だって化粧とかなんか面倒だし迂闊に汗とかかけないし、顔とか洗いたい時に洗えないし、デメリットばかりじゃん。それに私、特に化粧する必要性あんま感じないし。」

「うわ、世界の女性を敵に回す発言をさらっと出してます・・・」

本当に面倒臭いという湊の態度と問題発言に真耶はたじろぐと共に否定できないという事実には羨ましく思う。

「どうやったたらあんな美しさをノーメイクで出せるんだチクシヨウ。」

真耶は最後の希望とばかりに、

「お、織斑先輩はメイクしてますよね？」

「薄化粧ぐらいなら私だってやるさ。」

この言葉に真耶は救いの光を浴びたような表情をする。

「ほら、女性なら化粧をするべきですよ、沙月先輩。」

勝ち誇ったような真耶に湊は目をスツと細めて、

「へえ、女性の化粧って1分程度でおわるんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

「そんな時間をかけるようなものではないだろう。 適当におかしくない程度にやれば良い。」

女性の敵二人に挟まれて真耶は大きく肩を落とした。

湊は興味を失ったとばかりにまた、辺りを見渡す。

そこには三桁は種類があるであろう多種多様の色とりどりの水着が所狭しと並べられていた。

何となく目がチカチカする光景だ。

「まやちくはどんな水着を買うの？」

「そうですね、去年の水着が少し窮屈だったんで、またサイズを変えないと・・・・・・・・・・」

（ まだデカくなってるのか、コレ・・・・・・・・・・？）

何を買おうかぶつぶつ呟いている真耶を二人は半眼で見下ろす。

今着ている私服に無理やり抑え込まれている果実を見ながら、

(何故だ・・・・・・・・何故私の周りにはこんなデカいのばっかなんだ・・・・・・・・私の前世は巨乳をイジメていたのか?)

と、美乳サイズのとある女性は自分の周辺を思い浮かべて本来十分なサイズである自分の乳が貧乳に見えてしまうのを悲観し、

(水でもかければいいの・・・・・・・・?それとも肥料?糖分?巨乳の神にでも祈ってればいいの・・・・・・・・)

と2、3年前に成長のとまったバストサイズ91のとある女性はさらなる高みを目指すべく観察して考察を巡らせていた。

でも、年取ったら面白いことになりそう、と思った。

と、ふいと湊が視線をデカい乳から上げ、何気なく視線を巡らせると何かに引っかかった。

直感ともいえる違和感。

自分でもまだ何で目が留まったのかわからない。

?、とその周辺をよく観察。

何かがあるはず。

こういつた直感では外れたことがない。

そして発見。

ツンツン、と近くにいた千冬の肩を突つく。

「な、なんだ？」

いきなり肩を突かれてくすぐったかったのか千冬がビクツとして湊に向き直る。

湊は千冬に顔を向かずに黙って指を指す。

「あれ。」

「あれってなんだ？」

湊が指を指している先になるのは、カーテンの閉められた使用中の更衣室。

正確にはその足元。

「・・・・・・・・・・・・・・・・靴が二つ。」

「ん、本当だな。」

確かに更衣室の足元には靴が二つ並んでいたが、別に騒ぐほどのことではあるまい。

それに中に入っているのは赤の他人。

変に口出しなどするべきではない。

そう決め込んで無視しようとする千冬に湊がポツンと、

「あの靴・・・・・・・・・・・・・・・・『いつち』のじゃない

？」

「なに！？・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・確かにあれは私がいっぴりに買い与えた物だ。」

さつきまでどうでもいいといった態度だった千冬が反応する。

そりゃあ、女性の水着が所狭しと並んでいるところの更衣室、

これだけなら一夏がレディース物の水着を着用する趣味がある  
という些細な事実・・・・・・・・・・いや、それでも千冬にとっ  
ては大惨事だが・・・・・・・・・・が分かるだけだが、問題は『も  
う一つ』靴がある事だ。

一見男物に見えるがよく見ると女物の靴。

果たして中では何が起きているのか・・・・・・・・・・

隣で湊がおもちゃを見つけた五歳児のように騒ぐ。

「わぁお！どうするどうします、ふゆちゅ！女の子泣かせの双  
壁の一角に花が咲いていますよっ！四・七八分咲きだよ！」

「とても微妙な咲き方ですね。微妙すぎて誰もお花見に来ませ



んよ？五分にすらなっていないませんし。」

「.....」

はしゃぐ長身の湊を小柄の真耶が落ち着かせるといふなんと  
アンバランスな光景が。

しかし、とうの千冬は無言。

と思ったらおもむろに歩き出した。

更衣室へと。

そして、更衣者とを隔てる一枚の薄布を掴むと一気に剥がすよ  
うにひん剥いた。

目をスツと細め、

「何をしている？お前ら。」

いきなり開け放たれたカーテンにギョツとした顔でなんだなん  
だとこちらを見る水着姿のシャルロットと

千冬の実弟である織斑一夏がそのいた。

「うわぁ、超強引。もし別人だったらとんでもないことになり  
そう。」

しばらくお待ちください。

「ダメですよ、教育的にも常識にも未成年の男女が同じ更衣室に入るなんて。」

「……… . . . . . すいません。」

千冬の絶対零度の視線の下、お日様のような真耶のやんわりとした説教というより注意を受け、二人が頭を下げ謝る。

湊が「おーっと、シャルロット選手、強引に更衣室で生着替えを見てライバルに大きく差をつけました！」などと野球中継の実況口調でつぶやいていた。

一夏はあえて触れないで置くが、ちゃんと後ろを向いていました、と頭の中で誰かに弁解しておく。

隣をみるとシャルロットが顔を真っ赤にしていた。

何となくすいません。

一夏はこの気まずい空気を変えるべく先生方に尋ねる。

「ところで、先生方は何をしにここに？もしかして見回りとか？」

だとしたらかなり大変そうだ。

しかし、これは一夏の思い違い。

「私たちは水着を買いに来たんですよ。あ、いまは職務中ではないですから、無理に先生つて呼ばなくてもいいですよ。」

と、言われても一夏は何と呼んでいいのか困ってしまうわけだ。

湊と真耶はカジュアルな私服に身を包んでいるが千冬の至ってはいつもと変わらずビシッとサマースーツを着こなして休日の格好には見えないのである。

『千冬姉』と呼んだら最近喰らってはいないが久々にありがたーい出席簿アタックを喰らいそうでなんだか怖い。

とまあ、呼び方など後回しにして、

「セシリア、鈴。そろそろ出て来たらどうだ？」

ここから物陰となっている衣装棚の陰でビクツとした気配が伝わってくる。

なかなか出てこなかったが、皆の視線が集中すると諦めたようにいそいそとセシリアと鈴が出て来た。

「なにやってんだ？お前ら。」

「うっさいわね！女には男に知られたくない買い物があんのよ  
」！

「ところで、いつから気づいてらしたの？」

吠える鈴を適当にあしらいながら一夏はバツ悪そうなセシリアの質問に答える。

「つい数分前。」

「そうですね．．．．．やはりラウラさんが抜けた穴は大きかったですのね。」

「ラウラもいたのか？」

一夏が辺りを見渡すが銀髪眼帯のドイツ少女は見当たらない。

ようやく収まったらしい鈴が一夏の無意味な行動を辞めさせるように、

「ラウラならさっき気がついたらいなうなってたわよ。何か買いたい物でも見つかったのかしら。」

一夏が「ふーん、そうなのか」と相槌を打ち、そう言えば自分も水着を選ばなきゃなあ、と気がつく。

その時、ずっと黙っていた千冬が辺り一帯に聞こえるように、

「おい、茜雫。お前もいるのだろう？さっさと出て来い。」

「ああ、やっぱりふゆちもそう思った？」

【えっ！？】

千冬の行動と湊の反応に皆が驚き、キョロキョロと辺りを見渡すが茜雫らしき姿も出てくる気配も見られない。

千冬の勘違いか？

と、結論づけようとした時、

「あゝ、何でバレちゃうかなあ。」

とても残念そうな声が聞こえた。

全員がつられてそちらに注目した。

声と共に女性の水着売り場と申し訳程度に隔つこの方にある男性の水着売り場の境界線辺りで水着を見ていた男が振り返る。

「何でバレました？」

低く野太い声の外国人のような風貌をした無骨な男はそう尋ねた。

「どちら様？」

山田真耶は全員の意味を汲み取ったとてもシンプルな疑問系で尋ねた。

四十八話

Who's you?

(後書き)

何だか原作のISが絶版の危機っぽい

この小説もどうするか考えなくては……………

感想よろしくお願いします。

四十九話 三流芸人への道（前書き）

全然進まねえ！

すいません！

買い物編は次回まで！



四十九話 三流芸人への道

「何でバレました？」

低く野太い声の外国人のような風貌をした無骨な男はそう尋ねた。

「どちら様？」

山田真耶は全員の意思を汲み取ったとてもシンプルな疑問系で尋ねた。

おそらく真耶は素でこの男に尋ねている。

こてつと首を軽く傾げる真耶は何かの小動物見たいだった。

一夏は男に視線を戻す。

見たところ若い外国人……………つぼくみえなくともない……………ような気がする……………。

そんな微妙な背格好の男だ。

肌はヨーロッパ人のように白く繊細なクセに髪は複雑に編み込まれたドレッドヘアを後ろで束ね、口髭、サングラスとワイルドでちぐはぐだった。

しかし、一夏はファッションに詳しいわけではないがエクストリーム系と思われる服装はかなりセンスを感じられる。

何と書かれているのかは読めないが英語の殴り書きされた焰のような真紅のT・シャツは、染物を思わせる藍色の、薄手の涼しげなパーカーによく映えており、ゆったりとしたジーンズが全体を調和していた。

その容姿と合間って街中でスケートボードでも乗りこなしているような雰囲気を出している。

日本人でも着こなしのセンス次第ではどうとでも変わる。

それがこの男が日本人なのかそれとも違うのか迷わせる要因だ。

しかし……………

(とりあえず、誰なんだ……………この人……………  
?)

初めて見る。

少なくとも一夏の脳内データベースで検索エンジンにかけても目の前の男は知らなかった。

そもそも外国人の知り合いなんてIS学園にしかないし、IS学園の外国人はみんな女だ。

結論、

私はこんな男、知りません。

何となくしらを切っているみたいだ。

となると……………

1、2秒で結論を出して考えるのを辞めてしまった一夏は他の面々の顔を伺って見ることにする。

他の誰かの知り合いだろうと思ったからだ。

真耶、

完全に停止状態。

必死に男を洗い出そうとして脳内検索エンジンが故障してしまっ  
たらしい。

壊れたテレビを叩くようにおばあちゃん式故障電子機器再生法  
を千冬の出席簿アタックでやらなければ修理は無理かもしれない。

ご愁傷様でした。

鈴、

既に我知らんと見てすらいない。

斜め30度上方の窓の外を遠い目で見ている。

論外だ、せめて見てあげよう。

大変失礼である。

セシリア、

男をちゃんと見て思い出そうとしている様子だ。

ガサツな鈴とは違うなあ、と思ったら、「あの髪の毛……  
……どうやってたらあんな風になりますの……  
……?」  
などとぶつぶつ呟いて視線を男の頭にロックオンしている。

イギリスのご令嬢は複雑怪奇に編み込まれたドレッドヘアが気になるらしい。

男が逃げても狙撃手らしくロックオンし続けそうで頭しか見られていない男が不憫だ。

本気で誰も気づいてくれない現状に男が気まずそう。

そろそろ何かしないと可哀想に思えてくる。

シャルロット、

「ひ、人違いなのかなあ」と男を心配して言っていると思ったら後ろに回したその手には携帯端末。

画面をチラツと見るとそこには『110番』。

砂糖菓子のように繊細な指は武力装備した人間を呼びつける通話ボタンをプッシュ寸前。

その行動力に俺は心配です。

既に男に不審者のレッテルを片足半分踏み込ませている。

突き飛ばすまで10秒切った。

沙月湊、

眼力に物理的力が作用したら穴が空くほどジーーーーーッとガン見。

今や絶滅危惧種となっている柄の悪い不良と目があっても相手が逆に逃げ出だろつ。

一瞬も目を離さないもんだから男はたじたじ。

いくらなんでもそこまで見られたら居心地が悪いだろつ。

一番先に興味をなくすと思っていた湊が真面目に思い出そうとしているので一夏は少し驚く。

そして、織斑千冬、

さすが、眼光が違う。

戦乙女の鋭い視線で男を撃ち抜いている。

弟の直感からして、男の評価が『ただの人違い』から『ナンパしに来た難破男』に変わってしまったている。

男は登場から三十秒で早くも絶体絶命のピンチ。

このままでは沈められる。

結局、どうやら本当に誰も知らなそうだ。

男の人違いと決まったところで一夏は男を見直す。

と、男はロトシックスでも外した夢見るサラリーマンのように悲壮に肩を落とす。

「ここまで来てマジで誰も分かりませんか？泣きますよ？」

獣のような風貌で敬語で話されると違和感がヤバイ。

ついでに、千冬もヤバイ。

サマースーツのポケットに右手を手を突っ込んでいる。

その小さなポケットから何を取り出す気だ!?

しかし、男に泣かれたら困る。

目の前の男をあやすなど誰に任せてもシユールな光景だ。

そして、そう言われても困ってしまう。

本当に誰だか分からない。

そして、またまたヤバイ。

シャルロットの指が携帯端末の通話ボタンを今にも押しそうだ。

どんだけ危機意識が凄いんだ?

戦時下並みのレベルである。

一夏たちの反応を見ていた男は大袈裟に大きく溜め息を吐き、  
嘆息。

辟易したように、

「『名前』呼ばれて出てきたんですから普通に考えて一人しか  
いないでしょうが……………」

【えっ?】

未だ男をガン見している湊を除く全員が同じ反応をした。

『ある一つの可能性』に千冬さえも目を見開いている。

まさか、

「俺ですよ。」

まさか……………

「オレオレ詐欺？」

「鳳さん、せめて目エ合わせてボケろよッ！ていうかさっきから興味なさすぎっ!？」

男……………沙月茜雫と思われる外国人風体っほいの不審者（断定気味）は悲惨そうに腕を広げて叫ぶ。

茜雫がツッコミにまわる貴重な光景であった。

ここで爪の伸び具合を見ていた鈴が初見以来初めて茜雫を見て胡散臭そうに、

「……………あんだ、本当に茜雫なの？証拠を見でなさいよ。」



最もらしいことを言う。

確かに信じられない。

鈴の疑ってますといった態度に茜雫は、はぁ、と息を吐き、

「他人だったら知らないはずの事とか？ほんとにいいの？」

「？……早くしなさいよ。」

なぜか念を押す茜雫を鈴が急かす。

すると、男はニヤツとあのガキ大将のような笑みを浮かべ、

「鳳鈴音はIS学園に転校する際に軍部高官を拳で黙られて強引に手続きさせたとか？」

「マジで!？」

「な、何であんたが知ってるのよ!？」

他人どころかこの場で本人しか知らないことをカミングアウトした茜雫に鈴は当然の如く嘸みつく。

そりゃそうだ。

何でそんなこと知ってるんだよ？

一夏の疑問をよそに茜雫は歌うように独白。

「しかも、転校の理由は愛しのお……………」

「あああああああーあーああッッッッ！わかった  
！信じる！あんたは沙月茜雫よッ！」

よくわかんないがとんでもないことを暴露しかけたらしい茜雫  
を鈴は絶叫して最終防衛した。

あまりの音量に周りの一般客がギョッとしてこっちを向く。

一夏たちまで変人扱いだ。

店員の目が痛い。

あなたは沙月茜雫です宣告を出された茜雫は「やっと信じたか」  
と嘆息していたが、一夏は未だ信じ難い。

少なくとも皆の知る茜雫は髭など生やしていないし、髪は長め  
だったがドレッドヘアを後ろで束ねられるほど長くはないはずだ。

そもそも、

「一応、センってことは理解できたけどさ……………」  
……………なにやってんだ？変装？」

「……………変装ってレベルじゃないよね、コレ。  
声、違うし。」

「そもそも、顔の骨格とかが違いますわ。」

一夏の率直な感想にシャルロットやセシリアも追隨する。

後ろでフリーズの解けた真耶は「私の生徒が整形!？」などと悶えている。

指摘された茜雫は納得したようにポンと手を打つ。

「おお、そうかそのままだった。」

そう言つと、首の後ろに手を回し、探るようにゴソゴソと動かす。

何やっているんだ?、と見てみるとスルスルつとチョーカーでも外すかのように首の皮が削げた。

「うわぁッ!」

結構グロテスクな光景に一夏はヒヤッと背筋が凍るが白に近い肌色で極薄のソレの下から出てきたのが同じ色の皮膚とわかってホッとする。

茜雫は首からとつたビロ〜ンとしたソレを突き出す。

「……………何だコレ……………」

裏返してよく見ると、大きく遅しく突き出された喉仏と思われた場所に小さな機械がベルトとセットでついており、ソレを覆うようにぶよぶよした皮膚状のもので覆われていた。

「微弱な電流とベルトの締め具合で調整する変音装置。」

声が元に戻った茜雫は低いとも高いとも取れるような不思議な響きのある声でソレを説明する。

一夏はソレをしげしげ見つめる。

まさかとは思うが自作だろうか？

一夏が質問する前にジーっとソレを見ていたセシリアが顔を上げ、

「では、顔の方は？」

「ああ、コレもいっしょ。」

そう言ってマスクでも取るように耳の下辺りからべりっと今度は分厚めのぶよぶよしたソレを取り外す。

離れてみると顎を取り外しているようでちょっと怖い。

そして今度は漫画みたいに美容パックのようなものを顔から剥がした。

顔に皮を削ぎとるようでこれには本気でビビった。

目や口、鼻の部分に穴の空いたべろくんとしたマスクを指に引っ掛けながら

「代用生体とかで使われるシリコン。凄くね？」

「ルパンか、お前は。」

千冬が真つ当なツツコミをいれる。

茜雫は嬉しそうに顎に手を当て、

「それ程の出来だったのなら、目指すかな。」

「辞めとけ。」

リアル犯罪者宣言をする親友を一夏は引き留めておく。

しかし、本当に分からないほどの出来だったのは本当だ。

千冬でさえもきていていなかった。

誰も気づいてくれなかった残念な結果に不満そう茜雫は唯一反応に薄い湊の方を向く。

「姉さんは分かりましたよね？」

「うん、ちょくっとそうじゃないかな、ぐらいは思ってたよ。」

マジかよ。

一夏はあの変装を完璧ではないにしろ見破っていた湊に驚愕する。

義理とはいえ流石は姉弟という事か。

鈴が疲れたように口を開く。

「それで、なんであんたは変装までしてこんなところにいんのよ？」

一夏ははぐらかすと思ったが茜雫は意外と簡単に口を開いた。

スポーツテイナシヨルダーバッグから古臭いカメラを取り出し、

「ん？一夏とシャルロットの初々しい姿を激写。」

「何やってんだテメエ!？」

「別にただ買い物してただけだろ!」と一夏が言うがセシリアと鈴に真っ白いイタイ目で見られた。

何故？

シャルロットは何やら顔を真っ赤にして口をパクパクさせている。

シャルロットもお怒りのようだ、と一夏は結論づける。

一夏を弄ってハイテンションな茜雫は調子に乗って数枚の写真  
を「じゃん!」と取り出し、

「一夏とシャルロットが同じ更衣室に入る瞬間。」

「盗撮じゃねえか!？」

「スクープと言え。」

「パパラッチかお前は！」

「お父さんを返してっ！」

「それは『パパラ致』だ！」

三流ショートコントをしたところで茜雫は得意げな顔でとっておきとばかりに懐から一枚の写真。

写っているのは、『千冬が更衣室のカーテンを強引にオープンさせた瞬間』だった。

更衣室の中にいる一夏とシャルロットまでバッチリ写っている。

「題して『発覚！衝撃の三角関係！』。」

確かに配役を変えれば浮気現場を発見した本妻という図に見えなくもないが……………

即座に動いた一夏と千冬が茜雫の両脇を抱える。

「……………ちよつと来い。『ohanasii』がある。」

「えっ、ちよつ……………千冬さん、吊り目が普段の二割増しで超怖いんですけど！てか、一夏も何やってん

の!？」

「.....」  
「.....」

「ヘルプミ〜!」と弱々しい抵抗をしながら問答無用引き摺られて行く。

周りもその声に振り向くが直ぐに前を向いて歩き出す。

巡回中の警備員にさえ見捨てられた茜雫はとても哀れに見えた。

「頑張つてね〜」とハンカチを振る湊に見送られながら、茜雫は私刑執行人に物陰へと引き摺られて見えなくなった。

しばらくお待ちください.....  
.....

「さて、これで全部か。」

そう確認するゆづに口に出しながら、千冬はデパートの休憩所



に設けられたゴミ箱へ最後のフルカラーの紙切れ以下の『切れカス』を放り込む。

蝶つがいのようにカパカパとした開閉式の扉が開いた瞬間、さらに多くの紙クズが目映った。

それがなんなのか言うまでもない。

さてと、と千冬は一息つき、床に転がった『ゴミ』を見る。

「今日学んだことは何だ？」

大小のたんこぶをミッキーマウスのようにくつつけている茜雫が答える。

「戦果は見せびらかさない方がいいですね。これからは慎ましくパパラッチします。」

「ちっ がっ うだろ!!」

言葉を区切りながら千冬はハイヒールに体重を掛けながら捻る。

「イタイ！ハイヒールが肩に食い込む！！穴が空く！！てか、あんたはたんこぶを突つつくな！！疼くから！」

茜雫は肩に感じる異常な激痛に身を悶えさせながら、「つつん」とか言ってたんこぶを指で突つく湊に叫ぶ。

ひとしきり弄ばれた後やっとの事で解放された茜雫は肩で息を吐く。

そして、

「疲れた。」

「誰のせいだよ。」

不自然なミッキーマウスに一夏は即座にツッコム。

千冬と湊は茜雫が起き上がると見るや特に問題ないと判断してさっさと水着を買いに行ってしまった。

セシリアたちは何時の間にかに真耶が何処かに連れて行ってしまったし結果としてその場に残っているのは一夏と茜雫、数人の一般客となった。

一夏にツッコミを入れられた茜雫はいきなり思案するように顎に手を当て俯き出す。

一夏は首を傾げて尋ねる。

「何考え事してんだ。」

「いや、何かさ。いつも俺って一夏にツッコミ入れられてるよね。」

「そうだな。」

お前がボケたことを口走るからだ。

茜雫が指を鳴らして閃く。

頭の豆電球が眩しい。

「これじゃデフォルト化しちゃうからさ。たまには一夏がボケて俺がツッコミを入れたい。」

「その発想に早速俺はツッコミたい。」

「Yes, We Can!」

「オバマか、お前は。」

早くも崩れ去った。

しかし、茜雫は諦める様子がない。

一夏は仕方なくネタを考える。

.....

そういえば.....アレがあった。

「.....じゃあ、始めるぞ。取って置き秘蔵っ子を話してやるよ。」

「よっしや来い!」

あまりのテンションに茜雫が崩れ始める。

一夏はもう気にせず話し始めた。

「

俺が数年前に実際に体験したんだけどな。

あれは日付の変わった時間帯の雨の降る日のことだったんだ  
けどよ。」

俺が暗い夜道を……………

「なんでやねんッ!」

ズビシッ!!

「ゴハッ!?!」

いきなりわけもわからず溜めまくった渾身のツッコミで胸を叩  
かれた一夏は肺の中の空気を盛大に吐き出し、むせる。

「ゴッ……………ゴホッゲホゴホ……………」

…な、何しやがる!?!」

ようやく正常に呼吸できるようになった一夏が茜雫に喰いかか  
る。

対する茜雫は平然と、

「だって数年前の一夏が雨の降る深夜過ぎにそんな場所歩いてるはずないじゃん。絶対に千冬さんが許すはずないし。」

確かにそうだが、そうかもしれないが………！！

！！

「ボケるための例え話だ………！！」

「ああ、そうかそうか。それじゃもう一回。リベンジ・リベンジ・リベンジ。」

「………何回やらせるつもりだよ………」

「………まあいいや、行くぞ?」

「よし来い!受けて立つ!」

茜雫がバネを溜めるように腕を曲げて一夏の顔をガン見する。

「………」

俺が数年前に実際に体験したんだけどな。」

「うん。」

ワクワク。

「………あれは日付の変わった時間帯の雨の降ることだったんだけどよ。」

「うん。」

ワクワク ウズウズ。

「……………俺が暗い夜道を歩いてた  
んだけどな。」

「うん。」

ワクワク ウズウズ ムズムズ。

「……………こう、違和感が  
あつてふと手を……………」

「うん。」

ワクワク ウズウズ ムズムズ ウズウズムズムズウズウズムズムズ……………

「そんな表情した奴にボケれるかア……………ッ  
！」

「!?!」

餌付け待ちわびる仔犬のような茜雫に一夏は耐えきれなくなつて叫んだ。

「うわっ、何さ一夏。そんな大声上げて。周りの迷惑考えた方がいいよ。迷惑行為防止条例とかなんとか面倒くさいのがあるんだ

し。」

確かに周りの一般客がみんなこっちを見ている。

迷惑かけてどうもすみません。

「しよーがねえだろツ！あんな顔されてネタがシヨボいとか言われたら立ち直れねえよ！」

ただでさえ最近ギャグを言つと白い目で見れてるのに！

でも、あのギャグの何がいけなかつたんだろっ……………

茜雫は仕方ないなあとも言いたげな溜め息を吐く。

なんか無性にドヤ顔がイラついた。

「それじゃ、一夏がスピーディにボケればいんだよ。シヨートコント並みの速さで。」

「ここで諦めるって選択肢はないんだな。」

往生際の悪い自称ツツコミ役にお願いを込めて言ってみるが無視された。

しかし、言われて見ればそうかもしていれない。

確かに一夏のボケは前置きが長過ぎる気がする。

一夏は万年ポケ男の年季の差を痛感させられた。

今度はスピーディにポケよう。

目指せタカトシレベル！

「よし、行くぞ！」

「来い！」

「センって女装が似合いそうだよ……」

「ゴオルウアアツツツ！」

「ごはアツツツツ！？」

普段の茜雫が出すとは思えない気合の声と共に放たれた馬上槍のよつな一撃の会心の回し蹴りが一夏の胸に突き刺さった。



ズゴシャツツツ！という人体から発せられるとは思えないようなとんでもない激音と共に一夏の身体が大きく吹き飛ぶ。

蹴られたまま砲弾のように吹き飛んだ一夏は休憩所の背もたれ付きのベンチに叩きつけられ、すぐ近くに座っていたご老体の御婦人が「ヒイツ！？」と小さく悲鳴を上げた。

軽く痙攣しながら一夏は瞠目する。

危なかったーーーーー！！

ギャグコマじゃなかったら絶対に間違いなくいろんな要素で死んでたーーーーーッ！

生死の一線を彷徨った。

一夏は名も知らぬ神に感謝。

しかし、一夏の神を掻き消すように悪魔が召喚される。

「よう。無事だな？無事だよな。まだOKだよな。」

まだヤル気満々。

ついでに殺る気満々。

一夏は涙目で叫ぶ。

「俺はボケる度に死にけるのか！？」

「今のはボケたんじゃなくて怒らせたんだ。」

「……………すみません。」

「ご尤もでした。」

相変わらず茜雫は自分の容姿にコンプレックスを抱いているらしい。

別に茜雫は俗に言う『男の娘』……………ではない。

誰が見ても男と判断できるが、一見すると華奢な背格好からちやんと女装すれば千冬と似た恰好良い女性の雰囲気を出す。

女に見えなくもない、そんな容姿だ。

昔、それが嫌だったのか湊と一緒に見ていた映画のハードボイルドな俳優、「アーノルド・シュワルツェネッガー」を真似て髪を刈り上げようとしたことがあった。

その時は湊と一緒にいた千冬、束が全力で阻止したが、コンプレックスを刺激すると意外なことに湊や千冬にも怒る。

昔から触れないでそこは言わないのが暗黙の了解だったのだが、不覚にも失念していた。

おかげでマジ全身が痛い。

「何をやっている?」

と、茜雫の背後から声が掛かる。

聞き覚えのある鋭い声だ。

大方見当を付けて見るとやはりというか千冬が立っていた。

茜雫が千冬の質問に答える。

「一夏に社会科の授業を。」

「どんな？」

「世界の真理についてです。」

「?????」

千冬がわけがわからないと首を傾げた。

そりゃそうだ。

と言うか、茜雫にとっては自分の容姿云々の話は世界の真理に匹敵するというのが？

「まあいい、お前ら、少し来い。」

「はあ。」

「ああ、いいけど……………」

一夏は茜雫と顔を見合わせる。

茜雫はさあ、と手を広げて肩を竦めた。

「で、お前たちはどっちの水着がいいと思う？」

と、いきなり千冬に突き出されたのは二つの水着だった。

後ろで湊もスタンバイしているからおそらく湊も選んでもらおうという魂胆だろう。

一夏と茜雫はとりあえず千冬の水着を選ぶべく突き出された二つを見る。

片方はスポーティでありながらメッシュ状にクロスした部分がセクシーな黒水着。

もう片方は一切の無駄を省かれた機能性重視の白い水着。

どちらも露出度のそれなり高いビキニだ。

一夏は迷う。

どちらが千冬に似合うと言われれば間違いなく黒水着と断言する。

が、黒水着の方だったら変な奴らがナンパする可能性がある。

姉鼻屑ではないが千冬はかなり美人だ。

.....絶対にナンパされる。

「白。」

「じゃあ、俺は黒い方で。」

じゃあって何だじゃあって。

どうでも良さげな茜雫の返答に一夏が内心文句を言っが、

「どおせ一夏も黒って思ってたんでしょ？」

「いや、だから俺は白いほう.....」

看破された一夏が狼狽えながらも引き下がるが、

「黒の方が。」

「一夏が千冬さんや俺を出し抜こうなんて早過ぎ。」

「……………む。」

そう言われると悔しい気分になる。

一夏が何か言い返そうとした時、

「じゃあ次は私の選んでよ。」

楽しそうに湊が二着の水着を差し出した。

一夏と茜雫は、

「………………………………………」

微妙な顔をする。

その反応に湊は不満そうに頬をぶくーつと膨らませ、

「うわー、ふゆちーはちゃんと選んであげたのに私には選んでくれないんだあ。」

「いや、あのですね湊さん……………」

「何ですか、この組み合わせ。」

湊が差し出したのは、

安全性抜群のワンピースタイプの水着と危険性抜群のマイクロビキニだった。

ギャップがヤバイ。

なんだこの布地の差は？

「なんで人生初の女性の水着を選んであげる選択肢がこんなハードな内容なんですか。」

「いやあ、今までふゆち〜やたばち〜に水着選んでもらってたからわかんないんだよ。」

えへへ、と頭をかく湊に一夏と茜雫は頭を抱える。

女性としての視点から見ると異質なのかもしれない。

茜雫にまでこんな反応をさせる湊はやはり強者だった。

「もうハンカチでよくな？」

「よくなえッ！」

茜雫のぶつちやけた発言に一夏は自分のことではないのに全力で否定しておく。

「じゃあ、そっちの白で。」

と、茜雫は指で千冬の持っているもう片方をさした。

「ええ〜、なにその第三の選択肢。」

「これが一番無難でしょうが。」

渾身の一品を掘り起こした気分だった湊はどちらも選んでもらえなかったことにぶうぐ、とさらに不満げにしながら自分にあったサイズを取りにいった。

何だかんだ言っているが、実際にそのシンプルなデザイン白水着は湊に似合いそうで湊も茜雫の選択に間違いはないだろうと素直だった。

二人の水着が決まったところで会計を済ませる。

一息つくための休憩所で、

「御二人は彼氏とか作らないんですか？」

「そっぴや浮いた話とか聞かないよな。」

東は例外として学生の頃より千冬と湊の身持ちに硬さは凄かった。

何人の男が玉砕したか。

湊曰く「すでに大事な人がいる」とのこと。

千冬と湊は二人の心配を鼻で笑った。

「お前らに心配される必要はない。」

「そーそ、まずはせんちくたちの自立が先。」



「……………俺はもう自立出来るんですけどね。」

茜雫は苦笑いで答えた。

「そついつお前らはどうなんだ？」

「そこで俺らですか……………」

「何だ、私たちには聞いて置いて自分は答えないのか？」

「うわ、意地悪な聞き方。」

「で、どうなんだ？」

一夏と茜雫は困ったように苦笑いする。

何故か湊が食い入るように見てくる。

答えづらいし何より……………

「今、将来の結婚相手決めなくてもねえ。」

「確かに……………」

まだ15歳なのだ。

今決めなくともそのうち決める時が来るだろう。

多分……………。

未婚はなんかヤダな。

「古臭い考えだな、老けるぞ。」

「老けませんよ！ジジくさいのは一夏だけで充分です。」

「誰がジジくさいだ！」

「お前だ！」

「即断言！？」

このままでは会話が泥沼になりそうなので千冬は遮るように口を開く。

「そういえば……………茜雫はラウラとキスをしていたな？」

「何故そこで出しますか……………忘れかけてたのに……………」

「何だ、嫌だったのか？」

「いえ、本望です。」

「……………」

茜雫の即答に千冬と湊が何故か押し黙る。

というか、湊の目が怖い。

光ってる。

「え、キスするなら可愛いこの方が思い出になるでしょう?」

「お前、今忘れようとしていたと言ったじゃないか。」

「秀囲気つてもんがあるでしょう。いきなりわけわからずキスされるなんて。」

「まあ、確かにな」

「夏も同調しておく。」

「ん?」

「夏は辺りを見渡す。」

「どつたの、一夏?」

「いや、なんか慌てて誰か隠れたような……………」

「誰が?」

「わかんねえ。」

「見間違いか?」

偶然他人が何かあってかけ出した、と言うこともあり得るだろう。

茜雫もあまり気にすることではないと判断したのか追求や確認をすることはなかった。

と、何処かで携帯ほどの音量の電子音が鳴った。

どこだ、と反射的に辺りを見渡す。

「おっと、俺だ。」

茜雫はポケットから深い真紅の携帯端末を取り出して音を切った。

「電話じゃないのか？出た方がいいぞ？」

千冬の質問に茜雫はかぶりを振った。

ベンチに置いておいたショルダーバッグの肩にかけると去り際に、

「女の子と『デート』です。」

そのまま去って行った。



迷走したからだ。

四十九話 三流芸人への道（後書き）

誰か．．．．．何でもいいから感想を．．．．．  
欲を言つと評価と作者へご指摘を．．．．．  
頼みます＞（、．．．．．（＜

五十話 先輩と女帝とストーカー対策（前書き）

明けましておめでとございます。

リアルが忙しく遅れてほんとうすみませんでした。  
やっついで買い物編が終わります。

今年もこの小説と作者をよろしく願います。



## 五十話 先輩と女帝とストーカー対策

「あっちいな、クソツたれ……………」

強い日差しから逃げるように路地裏に立っている男がイラただし気にぼやいた。

その言葉とは逆に黒いスーツを纏っており、見ている方が熱い。

しかし、その目には、見ているものを凍らせるような冷薄な陰りがある。

男のすぐ近くには数人の若い男とそれをまとめ役と思われる三十代後半の男がいた。

タバコを吸う男はスーツの上から見るとかなり痩せ型に見えるが、タバコを摘まむ指や手は異常に筋肉で太く硬い。

スーツの男が視線を通わせる度に取りまとめの男はしきりにハンカチで汗を拭い、部下の若い男たちが恐ろし気に身体をビクつか

せていた。

スーツの男はそんな連中に辟易しながら知らせを待つ。

吸って短くなったタバコをポイツと投げ捨て、踏み潰し、小さな灯を厚い革靴の靴底を捻って消した。

次のタバコを取り出すためによれよれの胸ポケットを探る。

が、胸ポケットから出てきたのはくしゃくしゃになった比較的新しい箱だった。

どうやらもう切らしてしまったらしい。

イライラしている時はつい吸い過ぎてしまう。

盛大に舌打ちして、代わりとばかりに一口サイズのチョコレートを取り出して頬張る。

イライラしている時はタバコ程ではないが甘いものが良い。

無いよりマシだ。

横目で両側に迫った壁のせいで狭くなった視界からは街路樹が見える。

その街路樹を埋め尽くすように人の往来が盛んで男は嫌そうに顔を歪めた。

あの中に手榴弾でも投げ込んでやったらどんなに気分がイイだ

ろうか。

確実に5 m範囲内の10人は一瞬で死ぬ。

10 m離れば死にはしないがかなりの重傷を負ってじっくり死ぬ。

応急処置で何とかなるだろうが、一般人の応急処置ならさらにゆっくり死ぬだろう。

どんな叫び声が聞こえるのか聞いてきたいものだ。

早くしないと本当に実行してしまいそうだ。

うずうずする手を何とか抑える。

田舎ならともかくこんな都会で大量殺人は目立って後から面倒臭いことになってしまう。

これから仕事の男にとってそれはマズい。

そんな物騒な事を考えていると、深い帽子をかぶった二十代と思われるヨーロッパ系の男がこちらに駆け寄って来た。

取りまとめの男の部下である最後の一人がやっとの事で帰ってきたらしい。

さつさと外の熱気から逃げ出したいスーツ姿の男は仕事の話をするべく、目立たない地味な格好をした取りまとめの男を視線で促す。

人気のない路地裏に引っ込んでいるのも『仕事の話』をするためだ。

促された男は部下と数回のやり取りを終えると青い顔で何かを呟いた。

「ああ？聞こえねえよ？」あのガキ』はどこに居んのかって聞いてんだよ。」

スーツの男が乱暴な口調で睨みを効かせるとさらに青い顔で、消え入りそうな声で口に出す。

「み、見失いました……………」

「見失ったって、お前……………オイオイオイ、どオーすんだよ、それでも情報屋かテメエはよオ。」

「も、申し訳ございません……………！  
」

まるで今にも肉食獣に食べられそうな草食動物のように怯えている情報屋の男たちにスーツの男は右手で額を抑え、苛立ちながら頭をかく。

困った困った、とスーツの男は頭をかきながら今の状況を整理する。

なかなか『穴倉』から顔を出さない『ターゲット』がやっとのことで顔を出したと聞いてこのクソ暑い中わざわざ出勤してやった。

なのに来てみれば見失った、と……………。

ついでにタバコまで切れて繋ぎのチョコレートはあと二個しかない。

さつさとこんな蒸し暑い外での仕事なんか終わらせて帰りたいって言うのに肝心の『ターゲット』が見つからないとは……………。

となると、このゴミのような人混みを漁って探し出すと？

ふざけんな……………。

頭の中で最近購入したウイスキーが逃げていく。

ああ、なんかムカついてきた……………。

ついでに交通整備の笛の音が頭の中をかき回しているようですらにムカつく。

何かしていないと死にそうなので世間話のようにウザったい元凶の根源を尋ねる。

「……………なんで信号……………おかげで  
出歩いてる人間多過ぎんだろ……………？この中わざわざ探すのか？」

「詳しくは分かりませんが……………何やらサイバ

ーテロが起きているようですて……………」

「サイバーテロだあ？」

汚らしい脂汗をしきりにハンカチで拭いている情報屋に男が珍しいことに驚きと『仕事』と被ったことに不満を積もらせる。

確かに珍しいことだ。

サイバーテロ……………しかも、警察などの末端のコンピュータをチクチク攻撃するハッキングではなく、街全部、しかもこれだけ発展している先進的な街全部を狂わすなどかなりの規模だ。

国相手にケンカを売っているとしか思えない。

しかし、ホテルの電気が止まっていなかった事を考えるとおそらく公共の交通を麻痺させているだけのようだ。

それだけの腕しかなかったのか。

もしくは、モラルがあり過ぎるのか。

眩暈がする。

だが、携帯端末などにジャミングがかかっており通話が完全にアウトなところを見るとかなりの腕だろう。

少なくともセキュリティ部門の連中は悲鳴をあげているだろう。

「確か……………コイツも情報屋だったけな……………」

男が内ポケットから摘まみ出した『ターゲット』の写真を手の中で弄ぶ。

写真の中にはアラブ系の人混みの中をぬうように歩く一人の青年が写っていた。

ヨーロッパ系かアジア系か判断し難い不思議な顔立ちだ。

身体全体を包むような薄いローブを羽織っており、そこから覗かせる顔は何も感情を感じられない。

顔が小綺麗過ぎて『裏』の住人には見えねえな、と思った。

ひ弱の見えるが世界を渡り歩いて尚且つ生きているのだからそれなりの実力者なのだろう。

指で摘まみながら尋ねる。

「はい、そうです。」

恐縮そうに『ターゲット』と同じ情報屋は答える。

ふうん、と男が情報屋と写真の『ターゲット』を交互に見比べる。

そして、感慨深そうに、

「ぜんっぜん似てねえ……………」

「はい？」

情報屋が男の眩きの意味が分からなかったらしく疑問の声を漏らす。

写真の『ターゲット』一匹狼。

目の前のこいつらは多人数。

青年は小綺麗な顔つき。

対してこちらは、あんまりよろしい顔ではない。

アジア人にとって西洋人は皆顔立ちが良いように見えることが多いが、西洋人でもブサイクと思える人間はいるらしい。

現に目の前にいる。

それにしても、年端もいかないこんなガキにいいようにやられているこいつらが情けない。

本当にプロなのか、こいつら？

あまりの情けなさに同情すら寄せられない。

「ていうか、いつそこいつが住んでいるところに突撃しちまえばいいじゃねえのか？」



そっちの方がずいぶんと楽になる。

強襲してしまえば場所が場所なのでこちらが有利だ。

かなり無理のある強引な方法を本当に実行して暴れそうな男に情報屋の男は慌て出す。

「それはマズイです．．．．．！あそこは何かと面倒な場所ですし、情報の機密性も高い。それに下手に時間をかけて『アレ』まで出てくればいくら貴方でも．．．．．」

情報屋はなんとか引き止めようと懇願する。

男はその懇願が効いたわけではないが、確かに分が悪いとあっさりと諦める。

それができればこんな苦勞はしていない。

しかし、状況が好転せず悪化の一途とは頭痛の種だ。

「まったく、ずいぶんと住みにくい世の中になっちまったもんだなあおい。お前らも、せつかく俺も『ターゲット』も顔出してチャンスだったのに無駄にしてくれちゃって．．．．．  
．．．．．しっかし、サイバーテロか．．．．．  
．．．．．こりゃ厄介だな。」

通信機能が使えないとなると『ターゲット』の搜索は口頭伝達しかなくなる。

手間が倍どころじゃない。

GPSもお釈迦になっているとお互いの位置情報が分からなくなる。

正直言つて索敵能力は完全に失われたと言つてもいいだろう。

余計にイライラします。

いかん、このままではイライラが爆発して暴れ出しそうだ。

何かないかと、チラッと周りの連中を見回す。

情報屋とその部下たちは視線が合うたびに猛獣にあつたかのような表情をする。

まるでライオンに睨まれているウサギのようだ。

と、ここで気がつく。

こいつらもう、いらねえじゃん……………

男の表情が狂気に歪み、溜まりに溜まったフラストレーションを発散すべく、動き出した。

#####

やっぱり様子がおかしい。

本人の気性を表すように内向的に髪が内側に緩く跳ねたI  
S学園の制服姿の少女……更識簪は落ち着きなく物  
陰に立っていた。

物陰で何をやっているのか？

覗きです。

ストーカーです。

しかし、本人は自覚なしです。

簪を道ゆく人々は怪しげな視線を送るが当の本人は気にしない。

少し離れたところで「ねえ、お母さん、また似たような人が  
いるよお？」「しっ、見ちゃいけません！」と言う親子のやり取り

があつても今の簪は気がつかない。

じい〜と物陰から覗く。

そんな更識簪の視線の先には実の姉である更識楯無がいた。

自分が一生をかけても追いつくことなどあり得るはずのない絶  
対的な存在が。

そう考えるだけで目を逸らしたくなる。

だが、今現在、その絶対的存在が崩れかけている。

普段、絶対に想像できないようなぐらいあたふたしている。

あの完全無欠の姉が不安げになっている。

簪にとって一大事だ。

そもそも、不完全な自分の尾行にあの完全の姉が気が付かなか  
った時点でおかしい。

.....

まさかと思うが.....男か？

それが簪が辿り着いた可能性だ。

考える時間は尾行をしながらいくらでもあった。

考えついた可能性で一番信じられず、一番高い可能性。

あの姉が男性とデートなど信じられない、とちよつと失礼な事を思う。

しかし、と簪は相変わらず挙動不審な姉を見ながら思う。

相手は誰だ？

と、当然な疑問も浮かぶ。

姉が男性と接する機会などがあつたのだろうか？

まさか、『裏』の世界の人間だろうか？

簪は更識だが、『楯無』ではない。

『裏』社会と接点がゼロというわけではないが、限りなくゼロにちかい。

これは楯無の手回しもあるのだが、簪の知らない事実である。

『裏』以外の他の男性がいるだろうか？

.....居た。

いや、まさか、.....でもあの天真爛漫というか、破天荒というか、人畜無害というか、型破りな姉ならあり得そ

う。

..... 確かめて見せる！

簪は妙な使命感に突き動かされて実の姉を陰から覗く。

「.....何やってんの、あんた？」

「っ！..！」

いきなり背後から声をかけられてビクッとする。

恐る恐る振り返り、

「あ。」

と、声を洩らす。

「楯無さんの知り合い？」

振り返った簪の目の前に立っていた自分よりかなり身長の高い人物は人付き合いの苦手な簪でも知っている有名人だった。

#####

本人の気性を表すように開放的に髪が外側に緩く跳ねたISS学園生徒会長……更識楯無は落ち着きなく立っていた。

前髪を右に流したり、左に流したり、一度ぐちゃぐちゃに掻き回してもう一度、一から整えたり。

立っている直ぐ近くにあるデパートのショーウィンドウに映る自分の全体像を見て服装……まあ、普通のISS学園の制服なのであまり整えるところなどないのだが、変にシワになってないか見回して見たり。

辺りをキョロキョロして見回したりと忙しない様子だ。

実際に楯無の頭の中はさほど余裕のない状況だった。

（わわわっ、どうしよう。あともう少して約束の時間になっちゃう！私は何て言うて会えば良いのかしら！……  
・大丈夫、私は更識楯無よ。このぐらいで焦ってしまったては……  
……いや、でもやっぱり何をすれば!?)

いきなりわなわな悶えたり、急に落ち着き出したと思ったらまたわなわなし出したりと忙しい楯無。

そんなころころと面白いようにテンションの変わる楯無を遠巻

きに見ている仲良さげな老夫婦が「見ていて面白い子だねえ」「と微笑ましそうに見ていることに楯無は気づかない。

気がつく余裕がない。

今の様子を普段の楯無を知る人物が見れば驚くだろう。

何故楯無がこんな様子になっているかと言うと、

『デート』の待ち合わせだからだ。

もちろん相手は男である。

生憎、楯無には百合系の性癖は持ち合わせていない。

ISの特性上、IS学園は実質女子校となっている。

世界を代表する一癖も二癖もあるお嬢様校を束ねる生徒会長をしている彼女だが、男性との免疫は皆無・・・・・・・・とまでは流石にいかないが、かなり少ない。

しかし、そんなIS学園は今年は違う。

史上初、男子が入学してきた。

そして、今回楯無が『デート』待ち合わせしているのは二人いるうちの一人である。



実際、かなり緊張している。

対人格闘から銃器の扱い、暗殺術まで会得している楯無だが、どう男性と接していいのか全く分からなかった。

まともに接する機会などなかったし持とうとも思わなかったからだ。

そんな時にIS学園理事長を通して間接的だったが、いきなり依頼があった。

『更識楯無』の力で情報の規制をして欲しい、と。

最初は二つの意味でビックリした。

まずいきなり『更識』にコンタクトをとったことに驚いた。

そして、その人物が自分とさほど変わらぬ年の男子だったからだ。

『御家柄』危ない方々は何人も見てきたが、『裏』の人間で同年代は初めてだった。

だから、彼に興味を持った。

日本の『裏』を支配する『更識』の情報網を駆使しても、全く引っかからない謎に満ちた彼に。

自分と同じく『裏』の世界を生きる彼に。



が、一時間後にはOKのメールを送っている自分がいた。

その一分後にめちゃくちゃな文法のメールを送ったことに気づいて恥ずかしさに悶える自分がいた。

ちなみにメルアドは湊経由で入手した。

楯無が『更識楯無』であつてもまだ10代乙女だ。

異性との『デート』にテンパっている。

いきなりレベルが高すぎる。

意味もなくその場をぐるぐる回って油を挿していない機械のよ  
うにギチギチいう頭を回す。

しかし、いままで色恋沙汰に頭を回したことがなかったため、  
何も答えが………そもそも自分が何をこんなに慌てふ  
ためいているのか分からない。

ここではたと気づく。

(あれ!?! 辺りを気にせずあたふたしている私っておかしい人  
間かしら!?!?)

結構、重要な事実気づいてしまった楯無だった。

10代の乙女にとっては恥かしいことだ。

と、ここで背後から、

「ああ、ここに居ましたか、楯無さん。ずいぶんと早かったですね。」

聞き覚えのある、待っていた声が聞こえてきた。

捜したような言い方なのは、動き回っていた楯無が気がつかないうちに待ち合わせの時計台から逸れていたのが今の楯無が理解できるはずがない。

楯無の心拍数が跳ね上がる。

(ふわぁ！も、もう来た！)

ビクツとして時計を確認すると、約束に時間より15分も早い。

どうしようどうしようと考えたが、とりあえず返事をせねばと思ひ、振り向き、

「……………」

固まる。

沙月茜雫の背後によく見知った顔があるような気が。

眉間に眉を寄せ、目を細めて良く見る。

.....

今日、『デート』の相手をしてくれるはずの茜雲に手を引かれて一緒に歩いてくるのは、

「.....簪.....ちゃん？」

妹だった。

#####

(.....) (.....)

簪は気が気でなかった。

バレた。

見つかった時は誰だと思ったら、そこに居たのはIS学園で立った二人の男子の一人である沙月茜雫だった。

覗きに関して適当に何か言っただけで誤魔化そうと思ったのだが、相手が悪かった。

姉の待ち合わせの相手は茜雫だった。

何とかこの場をどうにか切り抜けようと言いつつ何を考えたがパニックに陥った頭でそんな都合よく考えつくはずもなくそのまま手握られて連れられてしまった。

手を握られて顔から火の出る気分になったが、姉を見た瞬間今度は心臓が凍るような感覚に陥った。

計らずも姉の逢瀬の邪魔をしてしまった。

現に楯無は簪の方を眉を寄せて訝し気に見ている。

簪は今すぐ逃げ出したい気分になった。

そんな簪の事に気がつかない茜雫は楯無に声をかけた。

「……………ずいぶん早かったですね。もしかして、待たせちゃいました？」

茜雫の問いかけに楯無は混乱しつつも両手を振って答えた。

「ああうん、待ってないわよ待ってない……………」  
「……………それで、え……………と……………どう  
言うこと?」

楯無が茜雫に尋ねる。

楯無の視線に射すくめられた簪は嫌な汗が出てきた。

やっぱり関わるんじゃないかった……………

目線で何のことか分かった茜雫は、

「楯無さんの様子を伺ってたんで楯無さんの知り合いかなあつて思ってたんですけど?」

「知り合い……………ではないわね。」

楯無の返答に茜雫はヤバいといった表情をした。

「あれ……………まさか素知らぬ赤の他人を連れてきちゃいました……………?」

「あ、そういうことじゃなくて、私の妹よ。」

「妹……………?」

茜雫は何とも微妙な顔をする。

その反応に楯無は不満げに聞き返す。

「簪ちゃんが私の妹で悪かったかしら？」

「いえ、なんというか………。楯無さんの妹しにしては、いぶんと常識人な顔をしてるなあって。」

「うわ、茜雫くんがおねえさんに向かって酷いことを言うっ！」

「おネエさんねえ。」

「何かイントネーションに引っかかるなあ？」

笑顔で楯無がコテツと首を傾げた。

茜雫は笑顔を維持。

話題と首の向きを90度捻じ曲げる。

「ふうん、妹さんかあ。」

「ふぶん、私の自慢の妹よ。」

蚊帳の外に置かれた気分だった簪はえ………？、と意表を突かれた表情をした。

今、何て言った？

茜雫は手を差し出しながら自己紹介をする。

「簪さんか。まあ、よろしく。俺の名前は………」



「……………知ってる。沙月茜雫でしょ。」

簪は握手に心えずに素っ気なく返事をして、失礼だった、と少し後悔する。

しかし、茜雫は「あらら、知ってたか。」と、特に気にした様子もなく行き場の失った右手を引っ込めた。

相手が気にしていなかったので、簪は少しほっとした。

簪の反応に楯無は苦笑いする。

「……………」

話題が詰まってしまい気まずい雰囲気流れる。

……………

楯無が必死に何を話そうか話題を探しているが、うまく頭がまわってくれない。

茜雫は斜め30度上前方に視線を固定させてフリーズして思考を放棄している。

意外と土壇場で役に立たない。

仕方なく簪がおずおずと二人に尋ねる。

「二人って……付き合ってるの?」

「ふうお!?!」

「いや。」

ずいぶんと対照的な反応に簪はどう反応しようか迷ってしまっ

どっちがどっちなど言うまでもない。

楯無の反応に茜寧は「?」を頭に浮かべる。

何となく二人の関係を、ああ、と納得。

「じゃ、じゃあこれから何をする予定だったの?」

「ん?」『デート』。

「……デートの意味を簡

節にまとめて答えなさい。」

「なぜ問題口調? ……まあいいや、女

の子と『遊びに行く事』でしょ?」

「あ、当たらずとも遠からず……。」

「

「あじ?」

茜雫は自信満々に答えたにも関わらず、不正解だと言われた子供のように首を傾げた。

対して更識姉妹は悟り切った表情をした。

ちなみに楯無には諦めも混じっている。

「ええ……………と、とりあえず移動しましょうか？」

茜雫が絞り出すように提案する。

「ふう……………そうね。行きましょうか。」

茜雫は楯無の最初の溜め息の理由を訊きたかったが、あえてスルーする事にした。

「こう言うことは墓穴を掘ってしまうものだ。

緊急回避。

一方、簪はそそくさに立ち去ろうとした。

もう手遅れかもしないがこれ以上姉の邪魔をするわけにはいかない。

それにこの姉は自分には眩し過ぎる……………。

そう思い、立ち去ろうと歩き、踵を返した瞬間。

手を掴まれた。

簪がびっくりして振り返り、またびっくりした。

手を掴んでるのは楯無だった。

簪の手をしっかりと握る楯無はにっこり笑って言う。

「簪ちゃんも一緒に行きましょ？」

十数分後

「じゃじゃん…」

なぜか胸を張って見せびらかすように更識姉妹が茜雲に案内されたのは、

「ゲーセン．．．．．？」

「ゲーセンです。」

結局流されるように連れて来られた簪が戸惑いがちに尋ねると、  
やっぱり案内人は胸を張って答える。

これには楯無も少しげんなりした。

「うわぁ、女の子とのデートにゲーセンってどうかと思っけど  
？」

「あれ、もしかして嫌いですか？ゲーセン。」

「いえ、大好きよ。」

「え？お姉ちゃんってゲーム好きなの？」

簪には楯無がゲーセンでアーケードゲームをしている情景が何  
かイメージできない。

簪の反応に楯無は心外とばかりに頬を膨らませる。

「私だつてゲームぐらいするわよぉ？だつて、更識の勉強つて  
つまらないし。」

簪はさらに驚いた。

自分が決めつけていた姉の偶像がこの数時間で音を立てて崩れ  
て行く。

楯無と簪を引き連れるように自動ドアをくぐった茜雫が相槌を打つ。

「ああ、なんかいろいろ面倒臭そうですね。」

「……………え？茜雫って知ってるの？」

『何を』とはあえて聞かない。

ちなみに、簪はもう茜雫に名前で勝手に呼ばれているのでこちらも最初から名前で呼ぶこととした。

茜雫も意味を察して答える。

「うん、知ってるよ。」

「もしかして……………沙月先生の家って……………  
……………」

簪の推測に茜雫はかぶりを振った。

「いいや、俺限定。」

「もっと説明がつかない気が……………」

う。簪はさらに困惑するが茜雫は無言でこの話題を打ち切ってしまう。

会話もままならないほどのゲーセン特有の騒がしい雑音に茜雫

は不快げに眉を寄せる。

どうやらゲーセンは好きだが、騒がしいのは苦手らしい。

と、ここで茜雫が一つの筐体に飛びつく。

「これやりましょう！」

画面にはデカデカと『鉄拳』と書かれ、背後には極悪人みたいな面構えにやはり極悪人みたいなボイスをしたやたら筋肉マツチヨなオツさんが腕を組んで立っていた。

簪は凶暴かつ暑苦しいオツさんたちの闘いに眉をひそめるが、

「いいわ、受けて立つわよ！」

ババンと腕を組んだ楯無が挑戦を受けてしまう。

簪がおずおずと、

「お、お姉ちゃん本当にやるの？」

と、控えめに楯無が粗暴なゲームをする事に暗に引き止めようとするが楯無の燃え上がった闘志は華麗に消し去る。

やる気満々である。

そう簡単には鎮火出来そうにない。

「お、この俺に対戦ですか？」

「あら、ずいぶんと自信がお有りのようね。」

「ふっ、ここ二ヶ月、世紀末帝王DANと毎週修行していた俺は強いですよ?」

「……………誰?」

五反田食堂の弾くんです。

もちろん楯無と簪が知る由もない。

茜雫は楯無をあからさまに挑発。

「箱入りのお嬢様に倒せますか?」

「ふふふ、やたら遠吠えするワンちゃんに負けるわけないじゃない。」

楯無も挑発を綺麗に流して牽制する。

「……………ほっ……………」

二人は全く同じタイミングで早撃ちガンマン如くポケットに手を突っ込み。

「……………上等……………」

銀色に輝く貨幣を取り出す。



「・・・・・・・・・・叩き潰す!」

コインの投入された小さなチャリンというコングと共に闘いが始まった。

凄い・・・・・・・・・・。

十数分後、いきなり勃発した電子世界でのタイマンの殴り合いはかなり高度な闘いへとヒートアップしていた。

「え・・・・・・・・・・なにあの二人。」

「うわ・・・・・・・・・・ボタン押す指が全然わかんねえ!？」

「やべえ、プロかよ・・・・・・・・・・。」

こんな感じで、周りではギャラリィが騒いでいた。

すでに携帯ゲームに移植されてしまった格闘ゲームなど、  
の昔に廃れてしまっている。

ゲーセンに来るのは直感的なガンアクションやカードを使った  
ジャンケン式のロールプレイングゲーム、恋人や友達と一緒に撮る  
プリクラ、クレーンゲーム目当てが多い。

今時、格闘ゲームに目を向けるのはかなりマニアックな年層ぐ  
らいだ。

が、今だけは違う。

二つを向かい合わせにしたような筐体を囲むように多くの人が  
野次馬をなっていた。

凄い……………。

簪はもう一度心の中で呟いた。

画面の中では格闘家が凄まじい闘いを展開していた。

牽制のような小技で隙を作り大技を当て、相手の技を読んでは  
カウンターを打ち返す。

ギャラリ―に一際大きなどよめきがはしった。

どうやらかなり難易度の高いコンボを連発しているらしい。

その凄まじさは画面外でも表れている。

楯無と茜雫の操作はひどく対照的だった。

楯無はその繊細な指でリズミカルに、流れるようにボタンとレバーを操作して行く。

対する茜雫はまるでキーボードでも叩くように機械的に、正確無比に操っている。

対照的だが、画面では互角と言つてのいいほどの闘いが繰り広げられている。

かなりレベルが高い。

「ちいつ、IS学園のお嬢様のくせに、絶対こういうところ入り浸ってますよね!? 何でこんなに手慣れてんですかっ!」

「くっ、今まで無敗だった私をここまで苦戦させるなんて……」

凄まじい速度でボタンとレバーを操作しながらも舌戦を繰り広げる二人。

しかし、確かに楯無がこんなに手慣れているとは思わなかった。

相当やりこんでいる。

簪が二人を見比べていると、何か違和感を感じた。

何だろうと思って何度か見比べて気づいた。

楯無は目が巡るしく動いているのに対し、茜雫は違った。

完全に一点で停止している。

まるで全体を満遍なく捉えているようだ。

あんなんでよくゲームが出来るものだ。

簪が自分でもイマイチ理解できない感嘆を漏らしていると15  
回目の勝敗が決した。

気になる勝敗は!?

簪から見て右の筐体に座っている茜雫が高らかにガッツポーズ  
をした。

「よっしゃあ!3連勝!これで9勝目!」

「そ、そんな……………あ、あり得ないわ、動き  
が……………完全に読まれた……………  
……………」

なんだか楯無は打ち沈んでしまった。

相当このゲームに自信を持っていたらしい。

もう簪の頭の中の楯無の面影がどこにもない。

ガクーンとしていた楯無が簪の方を向き、

「あ、簪ちゃんもやる？」

「え．．．．．私は．．．．．あんまりそういうの得意じゃないし．．．．．」

楯無の突然の提案に簪は断ろうとする。

そもそも得意不得意以前に、やったことが一度もなかった。

もともと簪は友達が多いくはなくゲーセンに遊びに行く事などなかったし、簪自身があんまりゲームには興味なかった。

できるわけがない。

が、それでも楯無は妹を誘った。

「大丈夫大丈夫。操作は簡単だし、きっと面白いわよ？」

「え．．．．．でも．．．．．」

簪はやっぱり私なんかにはできるわけがない迷ったが、

「．．．．．うん。やってみる。」

気がついた時には実の姉から向けられた無垢な笑顔に誘われる形です承してしまっていた。

さらに十数分後。

飲み物とソフトクリームを両手に持った簪がいた。

ちなみに今現在の場所はゲーセンにほど近いところの街路樹に設けられた休憩用のベンチである。

近代都市らしく環境を考えられているのか植樹された木が木陰を作り出し、涼しい。

その休憩用のベンチに左手に緑茶、右手に抹茶アイスとマッチしているのかミスマッチなのかよく分からない組み合わせの簪が涼しげに腰をおろしていた。

同じベンチの端っこには、まるで場所を明け渡すように小さく、肩を寄せて、明日のジョーのラストシーン如く真っ白に燃え尽きた茜雫と楯無がいた。

二人は、

「あ、あり得ない……………なぜあのタイミング、あの速度でコンボが……………？なぜ、なんで、どうして……………？」

「そんな……………まさか……………私の簪ちゃんがあんな……………パーフェクトだなんて……………私はどうすれば……………」

そんなことをうわ言のようにブツブツ俯きながらつぶやいていた。

簪が土俵に上がってそりゃあもう、凄まじかった。

この一言に限る。

ポッコボコのベッコベコに凹ませて千切っては投げられ、立ち向かつては殴り返された。

最初、楯無がまさかのパーフェクトで惨敗。

それを見た茜雫が余裕顔で挑んだが、善戦虚しくあっさり敗北。

茜雫の顔色がみるみる変化して行くのがとても印象的だった。

その後いく度もなくチャレンジしたのだが戦車に特攻する歩兵隊のように蹴散らされた。

もうギャラリーはここまでくると無言。

茜雫と楯無は『プロ』と表されたが、簪の場合、最後には『將軍』『大佐』『絶対捕食者』『女帝』などのありがたーい勲章を頂いていた。

最初に入れた100円硬貨で簪は21回分プレーした。

簪が今両手に持っているのは、敗者から『女帝』への貢ぎ物である。

かなり自信持ちだった二人は現在思わぬ逸材にプライドをズタボロにされ、自信消失中。

一方、簪はかなり満足気だ。

あの姉にこれだけ圧勝したのは生まれて初めてだった。

茜雫が貢いだソフトクリームを食べ終わった頃に茜雫が力なく切り出す。

「ま、まさか簪さんがあんな実力者だったとわね……………」

……………」

「そ、そうね……………全然知らなかったわ……………」

……………」

「いやあ、あんだだけ強いんだったらかなりやり込んでたんじゃないの？やっぱ二ヶ月の修行じゃ勝てないかなあ？」



茜雫が最後の希望を込めて言う。

しかし、非情にも簪は楯無が貢いだ緑茶を飲みながら、希望の言葉を爆破処理した。

「ううん。初めてやった……………意外と簡単だったね。」

「……………パフェでも食べますか？」

「……………クレープがいい。ぶどう味。」

「……………了解です。」

満足そうに微笑み、楽しそうな簪を見て楯無は姉として嬉しくなったが、

「楯無さん……………ニヤけてないで楯無さんも一緒に払うの手伝ってください。ただでさえこちら辺の屋台は高いのにおわぬチャレンジ料金で現在の手持ちがかなり少ないんですから。」

「わ、分かったわ。」

楯無もかなり財布の中身が心もとない状態となっていた。

子供のようにムキになり過ぎたらしい。

反省せねば。

しかし、久し振りというか年単位で簪と一緒に遊んだことがなかったため嬉しすぎてはしゃぎ過ぎた。

『デート』の認識に関してはいろいろと不満だったが妹と遊ぶきっかけを作ってくれたことには感謝しなくてはならない。

三人でクレープ屋台を探しながら楯無はお礼をどう言おうか考えていると、

「!?!」

楯無がさり気なく、しかし突然辺りを探るように見渡す。

「どうしたの、お姉ちゃん？」

姉ただならぬ様子を敏感に察知した簪が心配そうに尋ねる。

「いや、なんかちょっとね……………」

楯無は適当にはぐらかすとまた歩き出す。

(……………誰かに尾行らてる?)

首筋に感じるチリツとした感覚。

間違いない。

楯無が確信すると、茜雫が小声で、

「楯無さんも気づきました?」

「茜隼くんはいつから気がついてた?」

「ゲーセンに入る少し前です。もしかしたら勘違いかなと思っ  
て逃げ込んだんですけど見事に不審者決定ですね。」

楯無は少し片眉を上げて驚く。

それは、『裏』の『更識楯無』である自分が気がつく前に気づ  
いていたことと、わざと若者の多いゲーセンを逃げ込み場所を選ん  
だことだった。

「運がよければそのまま撒こうと思ったんですけど見事バラバ  
ラだったんで、そのまま遊んじゃいました。」

「ああ、なるほど。」

「え……………何の話?」

いまいち話についていけない簪が戸惑いがちに尋ねる。

楯無は教えようか迷ったが、いざという時に困るので、教える  
ことにした。

「私たち、尾行されてるのよ。」

「……………後ろにいるあの人?」

楯無の計らいがあつたとはいえ簪のある程度は『裏』の技術を身につけている。

あくまで護身程度だが、そんな簪でも簡単には分かるぐらい怪しい男が一人いた。

大学生ぐらいで、ファッション雑誌からそのまま抜き出したような派手な今風の男。

あまり簪の好むタイプの人間ではないので嫌悪感が募った。

「と、もう一人いるわね。」

「もう一人……いるの？」

簪が必死にバレないように探るが見つからない。

「もう一人はかなり腕がたつ。本職……ではないにしろちよつとヤバイかなあ。明らかに素人さんの動きじゃない。障害物や通行人を上手く使ってるし、人の多い出入り口の一つしかないゲーセンには絶対に入って来なかった。」

ちなみにもう一人のド素人はしっかりゲーセンの中まで入ってきた。

茜雫たちが目立たなければ見失っていただろう。

「茜雫くん、心当たりは？」

「そついう楯無さんは？」

「私は『更識』の人間だから多少は思いつくけど、『更識楯無』にケンカを売る人間なんてそう居ないわよ？消されるし。……………」  
……………で、茜凜くんは？」

サラッと怖い事をいう楯無。

茜凜は軽く唸りながら空を見上げる。

「わかんないですねえ。」

「そう……………」

「心当たりが多すぎて。」

「「そつち!?!」「」

思わず更識姉妹は声を上げる。

簪は沙月茜凜についてさらにわからなくなる。

「簪さん。」

「……………なに?」

「クレープは今度でいい?」

「うん。」

簪は迷うことなく即答した。

今はそれどころではないとよくわかっている。

茜雫はありがと、と例を言うとポケットをあさり始める。

「何か考えがあるの、茜雫くん？」

「とりあえず二手に別れましょう。」

楯無は茜雫の提案に眉を顰めた。

相手の情報がわからない以上個別行動は危険すぎる。

尾行していることからある程度はあちらはこっちの情報を持っているはずだ。

「二手に別れて俺か楯無さん、どっちのお客さんか割りましょう。どっちも片方に行ったのなら余った片方が奇襲。相手も二手に別れたのならド素人をさっさと片付けてもう片方の加勢って事で。」

なるほど、確かにそれなら実践的だ。

仮に専門家の方を引いてしまっても時間稼ぎをすればいいだけの事だ。

倒す必要はない。

いくら簪を守りながらもそれぐらいなら可能だ。

「このまま逃げるって選択肢は無いの？」

簪が不安げに提案する。

「このまま最後までストーカーされるのもあんまり良策ではないし、専門家がいる以上下手に警察は頼れない。もし相手がこちらを襲うチャンスを伺っているのなら、あちらの好条件が揃う前に仕掛けた方がいい。」

「……………でも」

「大丈夫。」

それでも不安げな簪の手を楯無が優しく握る。

「簪ちゃんはお姉ちゃんが守るから。」

「……………うん。」

簪は楯無から伝わってきた強い意思に繋がった手を握り返して応えた。

#####

「ああもうチクシヨ！どこ行きやがった！？」

一人の男が街路樹から外れた路地裏を曲がりながら毒づいた。

ファッション雑誌からそのまま抜き取ったようないかにも軽薄  
そうな格好をしている。

男が狭い視界しか確保できない路地裏を一つも見落とさないよ  
うに見渡すが見つからない。

焦りが男をさらに焦らせる。

そもそも、

(なんだ、あんのムカつくガキィ!!！)



男が心の中で叫ぶ。

とある怪しげな男から写真に写っている人物を尾行してくれと頼まれた。

怪しさに断ろうとしたが、報酬が報酬だったため喜んで飛びついた。

だいたいの場所を教えられ、暑さとうるささにウンザリしながらその場に行くと、意外と簡単に見つかった………のだが、

（女二人を侍らかせやがって！！）

なんとターゲットの男は公然と二股をかけていた。

しかも、顔つきを見た限り姉妹。

さらには、妹はほどほどだったが姉と思われる方はかなりスタイルのいい抜群の美人。

尾行してて何度殺気が湧いたことが。

あと少し理性が小さかったらプツンいていたかもしれない。

しかし、ヤバイ状況だ。

ターゲットの青年がああ姉妹から別れたと思ったら見失ってしまった。

依頼人の報告まであと少ししか時間がないというのにここまで来て依頼失敗などまっぴらだ。

ターゲットの消えた路地裏を探しまくっているが見つかる気配がない。

「チクシヨウ、ついてねえ。」

「ああ、まっただ。」

「!?!?」

いきなり自分の背後から聞こえた涼やかな声にビククリして男が振り向こうとした瞬間、両足のふくらはぎにはしまった激痛と共に世界が反転した。

バック転でもするような中途半端な回転。

奇妙な浮遊感に食べたものを吐きそうになった。

まともな受け身を取れるはずもなく男は膝小僧から着地した。

「がああああああッ!?!?」

膝にはしまった死にたくなるほどの痛みに男は僅かに冷たい地面

に突っ伏しながら唯一動かせる上半身で悶える。

とてもだが立てそうにない。

襲撃者は仰向けになろうとした男の脇腹を蹴り飛ばして強引にうつ伏せに。

本格的に汚物を吐きそうになった男の背中に右腕の肩関節を極めながら回した腕を背中ごと曲げた膝で踏んづけて固定。

激痛の中で男は自分のこめかみに何か硬く冷たいものを押し付けられたのがわかった。

「やれやれ、素人だとは思っていたが、ここまでバカとは。」

相変わらず余裕に満ちた声が後ろ越しに聞こえてきた。

男は状況から判断して尾行がバレたのだと悟った。

それでも男は白を切る。

「お、おいテメエ！？いきなり何しやがる！！何考えて……」

「お前に発言権は無い。」

冷酷な声と共に、こめかみに押し付けられていた冷たい物がゴリッとさらに強く押し付けられた。

男はそこで初めて押し付けられている物がサプレッサーの装着



痛みによる身体の熱が一気に冷めたのにも関わらず、全身から汗が止まることなく噴き出す。

襲撃者がまた躊躇なくまた銃口を男のこめかみに押し付ける。

押し付けられた男は頭が真っ白になった。

「悪いが時間が無いんで楽しいおしゃべりをするつもりは無い。とっとと話して貰えると有難いが？」

コンコンコンと頬骨の上辺りを銃口で叩きながら今にも思考がブラックアウトしそうな男の意識を叩き起こす。

今まさに生殺与奪権を完全に奪われている。

メトロノームのようにコンコンコンと鳴り続ける音が男にはタイムリミットのカウントダウンに聴こえた。

襲撃者が悠長に口を開く。

「何で俺を尾行けてた？見たところ明らかに素人だし、大方そこらの報酬に目の眩んだチンピラだろう。誰から依頼された？」

男は震える唇を何とか動かし、文字を紡いで懇願した。

「た、頼む。．．．．．た、た、助けてくれ．．．．．  
．．．俺にもよくわかんねえんだ．．．．．。」

男はこの極限状況でもこの場さえ切り抜ければ報酬を貰えると欲に目が眩んでいた。

襲撃者は呆れたように溜め息を吐くと、

「指でも飛ばすか。」

「……………ッ!!」

若い男は物騒なことを聞き、ギョツとする。

もう外聞も報酬もすべて捨てる。

命を捨てるわけにはいかない。

「わ、分かった！知ってることは全部言う！だから痛いのはやめてくれ！俺はマジで頼まれただけだ！」

「……………誰に？」

「い、いや……………それはわかんねえ……………」

襲撃者が引き金にかけた指に力を込めるのを視界の端で捉え、

男は慌てて付け加える。

「本当だ！本当に詳しい事はわかんねえんだって！！」

「……………どんな男だった？」

「ええと……………たぶん、あんたと同んなじくらいの年だったと思う……………金髪でなんか薄気味悪い奴で……………サングラスをかけてよくわかんねえけど日本人じゃねえ。」

男は何とか助かるために普段回さない頭を必死に振り絞って記憶を辿る。

「同年代で金髪の男ねえ……………」

襲撃者は静かにそれを聞いていたが銃口はしつかりと男のこめかみにロックされていた。

「な、なあ……………知ってる事はこれで全部だ。だから……………」

「話せ……………とは言ったが、話せば五体満足で解放する……………なんて言った覚えはないぞ？」

「なっ！？」

絶望に呑まれた男に襲撃者は付け加える。

「まあ、もう一つこちらの質問に答えられたのなら、な……………」

「.....」

「こ、答える！何でも答えるッ！」

男は今度は報酬ではなく最後のチャンスに飛びついた。

襲撃者は少し考える素ぶりを見せるとおもむろに深紅の携帯端末をズボンのポケットから取り出し、男の顔の前に翳す。

意味がわからず男がおずおずと画面を覗き込むとそこには地図が映し出されていた。

真ん中には赤いピンが刺さっている。

襲撃者が告げる。

「ここに行くのはどうすればいい？」

「はい？」

襲撃者.....沙月茜雫、楯無に発信機を持たせたのはいが、なぜか己のGPSが働かず、迷子中。



#####

同時刻。

楯無と簪は人混みから外れた路地裏を歩いていた。

出来るだけ入り組んでいるが、直進路で長く、人通りが少ない道を選んで歩く。

一般人を巻き込むのは避けたいし、目撃されて警察を呼ばれるのはこちらにもいろいろと厄介と言つのもあるが、

「お姉ちゃん……大丈夫？」

「……………大丈夫……………かな？」

携帯端末の画面を鏡代わりに後ろをさり気なく確認しながら歯切れが悪く答える。

口では大丈夫と笑って答えたが少し余裕がなかった。

(よりによって厄介な方が来たわね……………!)

顔にこそ出さないが内心毒づいた。

携帯端末の暗い画面には40mほど後方にスーツ姿の男が歩いていた。

出来れば撒けたら良かったのだがそう簡単にいく相手ではないらしい。

楯無は頭の中で対策を考える。

出来ることはこのまま放置する。

もしくはこちらから仕掛ける。

出来る選択肢はこの二つだが、出来れば後者を取りたくはない。

相手の情報も少ない上に、楯無一人ならともかく今は簪もいる。

簪を守りながら相手取るのは難しい。

相手がプロだったのなら尚更だ。

しかし、このまま泳がすは不味い。

と、ここで気づく。

「あれ？」

楯無が振り向き、つられて簪も振り向く。

何時の間にか追跡者の姿がなかった。

思考しながら歩いたのが仇となった。

相手がどう動いたのかいつ動いたのかわからなかった。

誰もいなくなった静かな路地裏を見ながら簪がポツリと、

「・・・・・・・・・・・・・・・・まさか、諦めた・・・・・・・・・・？」

「だと、良かったんだがなア？」

「ッッッ!?!」

すぐ間近で聞こえた冷たい低い声に二人がギョツとして振り替える。

そこにはさっきまで後ろに居たはずの男が立ちふさがるように立って居た。

回り込まれた――――!?!?

楯無は相手の実力の高さに嫌な汗を流す。

ヤバイ、ヤバイやばい……………!!

どんどん状況が悪くなっていく。

追跡者は余裕そうに肩を回しながら、

「いやあ、マジで困った困った。あのガキ殺すための材料に利用しようと思っただらこつちの仕掛けにくい嫌な道ばつか通りやがってエ。大変だったんだぜエ、隙伺って屋根たどって前に回るの?」

耳によく残る妙な訛りのあるイントネーションだった。

「あんだあ、そこらの一般人じゃなさそうだな?」

「だったら何かしら?」

楯無が背に簪を守りながら男を警戒する。

男は自然体のまま悠長に語り出す。

「そんな警戒すんなあ、褒めてんだぜエ？ホントはあのガキと別れて少ししたら仕掛けよおと思ってたのにこんなに時間がかかった。それに……」

男が両手を広げ、鉤爪のように掌を握ると腰を落とし、

「同じ殺すんだったら、愉しめた方がいい。」

「簪ちゃん下がって!!」

楯無が突き飛ばすように簪を自分から遠ざけると構える。

ほんの一瞬で10mの距離が一気に縮まる。

速い……!!

男が勢いに乗ったハイキックを繰り出す。

ハイキックは当たればかなりダメージを与えられるが、派手で

大きな動きのため熟練者同士なら決まり辛い技だ。

しかし、追跡者の戦斧のようなハイキックは唸りを上げ、かなり速い。

上段から叩きつけるような蹴りを楯無は横にステップして躲す。躲した瞬間に追跡者の膝、肘に掌底打。

ついでとばかりに胸に肘打ちを打ち込んだが、効果が薄く、逆に打ち込んだが肘が痛んだ。

かなり細身に見えるが着痩せしているらしく思った以上に筋肉質だ。

砂ではなく砂鉄入りで鉄のプレートで補強されたサンドバックを殴ったような感じだ。

状況が悪化する。

楯無はかなり上級の武芸を駆使できるがそれを行うのが女性の身体だ。

やはり男ほどの強度は無いし、相手が本当のプロとなれば尚更だ。

蹴りを躲された追跡者は楯無の反撃を物ともせずさらに距離を詰めた。

間合い取り方や戦闘技術ではなく、単純な力が物を言う極近距

離戦。

ほんの数手で劣勢に立たされた楯無はそれでも諦めずに距離を取るために腕でガードを作りながらバックステップ。

追跡者はピッタリと距離を保って、楯無のガードの右腕を鉤爪のような右手で掴んだ。

「いつ!？」

万力に締め付けられたようにがちりと掴まれた右腕にはしる鈍い激痛に楯無が顔を歪める。

「お姉ちゃん!」

簪が悲痛そうに叫ぶ。

右手でしっかりと固定した追跡者は余裕そうにまた自然体に戻り、寧猛に笑う。

「おっと、交渉材料に使うんだから殺さないようにしないといけないんだった。いけねえいけねえ、うっかりしてたぜ。危うく最初の一撃で殺しちゃうとこだった、が………意外と女なのにはやるなあ。」

楯無は自分より30cm近く背の高い追跡者を気丈に睨みつける。

それを見た追跡者は面白そうに、

「へえ、ずいぶんとこの状況で強情な目をしてるもんだ。こころで助けてくださいお願いしまーす、とでも懇願すれば紳士的な扱いしてやっても良いんだぜ？」

しかし、楯無の目に諦めはなかった。

「関係ないわね……………」

「あア？」

「今この場で、降参しようが、哀願しようが、許しを乞おうが……………」

楯無はそれだけで人を殺せそうな目で下から睨んでやる。

「貴方が私の大事な妹に手を出そうとしている事に変わりしない。」

宣言のよつに

告げる。

「その事実があれば引く理由なんてどこにも無いわ」



追跡者の顔が狂喜に歪んだ。

「おうおう、なんと美しい兄弟愛………こじじゃ姉妹愛か。まあいい、とにかく泣けるねえ。」

追跡者が左手を持ち上げた。

「なら、華々しく散ってもらおうかッ!」

簪は願った。

助けてください、と。

「お姉ちゃんッ!」

簪の叫びと同時に楯無の首をねじ切ろうと追跡者の左手が動く。

しかし、悲劇は起こらなかった。

何かに気づいた追跡者が楯無の腕を離して弾かれるようにその場から飛び退いた。

息切れした声が少し離れたところから聞こえた。

「うわ、あぶねえ。感動的に間に合ったよ。ギリギリセーフ．．．．．ですよねえ？」

前半は自分に、後半は楯無たちへと向けられた言葉だった。

そこには沙月茜雫が左手に拳銃．．．．．グロック17を構えて立っていた。

向けている相手はもちろん追跡者の男。

青痣の出来た右腕を抑えながら楯無が満足そうに笑う。

「女の子の約束に遅れた代償は大きいわよ？」

「ええ、ちょっと立て込んで．．．．．今度御二人に何か奢りますよ。」

「やった。今度とっても高いパフェの店、紹介してあげるね！」

「．．．．．」

茜雫はそれは勘弁して欲しいな、と思ったが、遅刻は遅刻なので何も言えない。

「簪さんも無事？」

「．．．．．うん、お姉ちゃんのおかげで。」

青痣で腫れた楯無の右腕を悲痛そうに見る。

そして、額に汗を浮かばせ、息の切れている茜雫を見る。

どうやら相当急いで来たらしい。

簪は茜雫の来た安心感でなぜ茜雫が銃を携帯しているのか、という疑問が抹消されてしまった。

ちなみに余談だが、茜雫の額に浮かばせた汗。

走ったからではない。

冷や汗である。

素人のバカを尋問して、ものの見事に迷子になって間に合わなかったらどうしようという状況だったのだ。

今だってその事実がバレないかヒヤヒヤしている。

このままでは遅れた茜雫の立場とお財布事情が悪くなる一途だ。

散々放つたらかしにされた追跡者が和やかな会話に辟易するよ  
うに、

「オイオイオイ、．．．．．なんかそこらの男が殺しにかかりそうな羨ましいシチュエーションを楽しんでいるところスイマセンが、本題に入ってもいいかあ？」

「何が羨ましいシチュエーションだ、バカが。二人は先輩と同

級生だ、どアホ。そもそも凄まじい鈍感のキングがすぐ近くにいて俺の分は残ってねえよ、狂人。」

「テメエ・・・・・・・・・・・・・・・・！」

出会って1分もたたずに罵倒しまくる茜雫に追跡者は静かに怒りを燃やす。

楯無と簪は茜雫の口調の崩れに驚いた。

「そっちは何の理由で来たのか知らないけど、俺はあんたのラブコールを受ける気はない。キモいし面倒臭いし、さっさと帰れば？『ヒヨコ拳法』の使い手さん。」

楯無と簪には『ヒヨコ拳法』とは何のことか分からなかったが、追跡者の怒りが迸っているのが分かった。

「上等だガキイイイ！！！」

両手を広げ、掌で鉤爪を作り、腰を落として弾丸のように駆ける。

茜雫は即座に反応してサプレッサーの装着されたグローブ17をダブルタップで撃つ。

バスンバスンと重い音が響き渡る。

サプレッサーとは減音装置であって、消音装置ではない。

映画やドラマで誇張されているが実際にサプレッサーを装着した

拳銃は一部の専用銃を除いて電話のベルほどの音になる。

それでもちゃんと効果は望め、対象物を破壊するには充分だ。  
人など紙に等しい。

しかし、追跡者は恐ろしく低い体制をとっていた為、二発の弾丸は外れた。

間合いを一気に削った追跡者はグロック17を掴み上げる。

「ッ!!!」

茜雫は驚いた。

銃の発射反動に耐えゆる特殊強化プラスチックのフレームが握り潰されたからだ。

凄まじい握力。

掴まれたら一巻の終わりだ。

茜雫の喉を掴み取ろうと追跡者が手を伸ばした。

が、茜雫は掌底打で軌道をズラし、難を逃れる。

すかさず追跡者が追撃の回し蹴りを放つ。

骨をも砕く一撃が茜雫の左横腹を捉えた。

「があっ！」

しかし、声を上げたのは蹴った本人だった。

茜雫の右手には何時の間にかに刃渡り8cmほどの異形のナイフが握られていた。

刀身が細く、握り手の柄には指サックのような穴が空いていた。

茜雫はそれを突き立てるように防御したのだ。

足を軽く抑えながら追跡者が低く唸る。

「カランビット・・・・・・・・・・そんなもんまで隠し持ってやがったか・・・・・・・・・・」

「あんたみたいな変態さんは沢山いるからな。準備くらいするな。」

茜雫はカランビットを手品のように何も握られていなかった左手からもだし、突き出すように構える。

「今から十秒くれてやる。それまでに姿を消さなかったら最終兵器を出す。」

「最終兵器だとお？」

「質問に答える気はない。123456789.....」

「早いつー!?!?」「」

思わず楯無と簪が声を上げる。

「10」

「.....」

追跡者も呆気を取られているうちにカウントダウンが終わってしまっただ。

茜雫はわざとらしく、悲しそうにいう。

「そうか、これを使わないといけないか.....」

ズリッと追跡者が何が起きても対応出来るように腰を落とす。

一方、茜雫はおもむろに携帯端末を取り出すと四回プッシュ。

「あ、もしもし。警察ですか？女子高生襲ってる不審者が居るんですけど来て下さい。」

「通報すんのかよ!?!」

苦々しい追跡者に茜雫は高笑い。

「ふははは、ほらほらどうする？カップヌードルも出来ないうちに警察が来ちゃうぞ？逃げないと面倒臭いことになっちゃうけどそれでもいいのか？悔しげに睨んでないでさっさと選べよ、ハツはっはっは！」

「テメエ．．．このクソガキ．．．!!」

「あ、悪魔．．．!!」

「もしかして、DS．．．!!？」

何故か更識姉妹にまでドン引きされた。

ちよつと茜雫はショックを受ける。

このままでは更識姉妹の茜雫の対するイメージが崩れ去りそうなので自粛。

茜雫は女王様のような高笑いモードから通常にテンションを戻した。

「．．．．．まあ、あんたも警察が来るまでに俺ら全員を片付けるのは無理だろう。俺は逃げる選択をオススメするが？」

確かに足を負傷した状態では分が悪い。

追跡者は憎々し気に、



「ちっ。次は殺す。」

そう吐き捨てる、足を負傷しているなど嘘のようなスピードで走り去った。

茜雫は手を振ってそれを見送ると楯無と簪の方を向く。

「大丈夫．．．．．ではないっぽいですね．．．．．」

茜雫は青痣で腫れたと思われる右腕を抑えている楯無を見て咳く。

「これぐらい．．．．．」

「はいはい、大丈夫な訳ないから腕を出して下さい。簡単な処置をするんで。」

そう言つと茜雫は腰のベルトにくっついてある小さな長方形の箱のようなものから真空パックと包帯を取り出す。

袖を捲つた楯無の腫れ上がった右腕に真空パックから取り出した湿布を腕に沿つように縦に貼る。

横に伸ばして貼ると圧迫されて治りが遅くなるからだ。

茜雫は一回分の包帯を伸ばして、圧迫しないように優しく巻いて取れないように縛る。

これで応急処置終了。

楯無は綺麗に巻かれた包帯を見てしみじみと、

「……………手際が良いのね。」

「俺の周りは今も昔も怪我をする人間が多いですからね。そりゃあ上手くもなりますよ。」

「へえ。」

楯無と簪は感心したように頷く。

茜雫は手早く後片付けをすると、

「日も沈みかけてますし、帰りますか。」

「……………え、と。呼んだ警察の人はいいの?」

「大丈夫、問題なし。」

「なんで?」

首を傾げる簪に茜雫は言った。

「だって、電話したの時報だし。」

#####

「ねえ、お姉ちゃん。」

「なあに、簪ちゃん。」

夕陽に歩むように帰路につく途中、ずっと黙っていた簪が口を開く。

茜雫は自然を装って歩くスピードを落とした。

簪は心の中で礼をいう。

簪は小さく呟くように、

「ごめんなさい。」

楯無は何が？、とは訊かなかった。

簪が何について謝ろうとしているのか何となく察したからだ。

楯無はふふん、と鼻先で小さく笑うと、

「だ〜いじょうぶよ。貴方がどう思っていようが更識簪は私の

自慢の妹なんだから。」

そんな姉に簪は、自分もこのくらい強い人になりたい、と思っ  
た。

「お姉ちゃん。」

「今度はなあに？」

簪は綺麗な夕暮れを見上げながら恥ずかしそうに、

「ありがとう。」

楯無は少しビククリした表情になったが少し照れ臭そうに、

「どういたしましてっ！」

帰りましょ、簪ちゃん。」

「……………うんっ。」

そんな姉妹の様子を茜雫は少し離れた後ろから微笑ましく見つ  
める。

楯無は楽しそうに提案した。





## 五十話 先輩と女帝とストーカー対策（後書き）

さて、どうだったでしょうか？

楯無は作者が個人的に好きなキャラなんですけど、更識姉妹の口調がイマイチ掴めない作者です。

何か質問や感想、御指摘のある方は気軽にどうぞよろしくお願います。

あと少して総合評価が500行きそうなので作者最近ウキウキしています。

今年も頑張るのでこの小説と作者よろしくお願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6696u/>

---

I S -Vicious Dog-

2012年1月3日01時52分発行